仙台市文化財調査報告書第140集

南小泉遺跡

第16～18次発掘調査報告書

1990年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第140集

南小泉遺跡

第16～18次発掘調査報告書

１９９０年3月

仙台市教育委員会

第16次ＳＩ01出土の炭化材

第16次ＳＫ12鉄滓・土器の出土状況

第16次ＳＤ01出土土師質土器皿

第16次調査区出土中国磁器

第17次調査区出土陶器

第17次調査区出土中国磁器

序　　文

仙台市若林区にある南小泉遺跡は、昭和初めの霞ノ目飛行場の拡張工事に際して、一般にその存在が知られるようになりました。この遺跡は、弥生・古墳時代の集落遺跡として周知されておりましたが、昭和56年度の都市計画街路（宮城野萩通り）の建設に先立つ調査以降、平安時代の集落跡や中世・近世の遺構が発見されるようになってまいりました。このように、今日に至るまで人々の居住地として、南小泉地区は重要な位置を占めております。近年まで田畠が広がる田園地帯を形成しておりましたが、市街化が急速に進み、現在ではほとんどその面影はありません。今回報告する三ケ所の調査地点も、畑地から宅地へと変貌しようとしております。

本遺跡の調査は第18次を数えるまでになりましたが、今回特に注目される発見は第16次調査では、古墳時代の鉄器製作に関連するとみられる鉄滓の出土、大規模な中世城館の存在、第17次調査では、古墳時代の古鏡の出土、中世の屋敷跡、第18次調査では古墳時代や平安時代の良好な遺物の出土などであります。これらの発見は、地域の歴史を解明する貴重な資料となることでしょう。その意味でこの報告書が、学術研究のみならず学校教育・社会教育の場で活用されれば幸いです。

最後に、調査や報告書の作成に御協力いただきました地元の方々、関係諸機関に深く感謝申し上げます。今後とも、文化財への御理解・御協力をお願いしまして序といたします。

平成2年3月

仙台市教育委員会

教育長　藤井　黎

例　　言

1．本書は、昭和63年度南小泉遺跡内の宅地造成に伴う、第16次～第18次発掘調査報告書である。すでに公表された現地説明会資料等に優先するものである。

2．報告書作成のための遺物整理は、文化財課佐藤洋が担当し、課員太田昭夫・平間亮輔・中富洋が協力した。本書の執筆・編集は佐藤洋が行った。

3．自然科学的の分析については、鉄滓分析を大澤正己氏(新日本製鉄株式会社)、樹種同定をパリノ・サーベイ株式会社にお願いした。

4．本書の作成に際し、下記の方々に御指導・御協力を賜った（順不同・敬称略)。

穴沢義功・大場拓俊・蟹沢聰史・酒井清治・藤沢敦・井上喜久男・大橋康二・鈴木功・仲野泰裕・樽崎彰一・橋本久和・藤沢良祐・藤沼邦彦・堀内明博・村上伸之・百瀬正恒・吉岡康暢・亀井明徳・山本信夫・大場拓俊・本沢慎輔・八重樫忠郎・伊野近富・森島康雄

5．今回の調査記録・出土遺物は、仙台市教育委員会で一括保管している。

凡　　例

1．本書に掲載した地形図は、国土地理院発行の１：2.5万「仙台東南部」である。

2．本書中の土色については「新版標準土色帳（小山・竹原：1973)」に基づいた。

3．本書の報文や図面に示した方位は、真北を基準とした。なお、磁北は真北に対して西偏7°20'である。

4．土層の水糸レベルは海抜高を示す。

5．グリッドの名称は、そのグリッドの南西交点を通るライン名を組合せて使用した。

6．遺物実測図中、中心線が一点鎖線のものは、転開し図上復元したものである。

7．出土遺物のうち、土師器に黒色処理が認められるものは網点で実測図に部位を示した。また、器表面に赤彩のある土師器や胎土まで赤色を呈する土師器についても網点で表示した。

8．遺物実測図中に、主に時間的制約から中心線に沿って帯状に調整痕を示したものがある。

9．遺構名は遺構略記号を使用し、遺構の種類毎に報文に示した（検出順)。

10．遺構図は紙数の都合上、遺構毎に独立した図版を組んでないものがある。

11．遺物観察表用の凡例は91ページ参照。

本　文　目　次

第１章　遺跡概要……1
　１．位置と環境……1
　２．調査の方法と要項……3
第２章　調査の成果……6
　第１節　第16次調査……6
　　１．調査に至る経緯……6
　　２．調査の経過……6
　　３．基本層位……6
　　４．検出遺構と出土遺物……8
　　(1)古墳時代……8
　　(2)中世・近世……36
　　(3)その他の遺物……73
　第２節　第17次調査……92
　　１．調査に至る経緯……92
　　２．調査の経過……92
　　３．基本層位……92
　　４．検出遺構と出土遺物……95
　　(1)古墳時代……95
　　(2)中世・近世……123
　　(3)その他の遺物……157
　第３節　第18次調査……169
　　１．調査に至る経緯……169
　　２．調査の経過……169
　　３．基本層位……169
　　４．検出遺構と出土遺物……172
　　(1)古墳時代……172
　　(2)奈良・平安時代……195
　　(3)中世・近世……207
　　(4)その他の遺構と遺物……219
第３章　分析と考察……229

第１節　古墳時代 ……229
１．土師器の分類 ……229
２．須恵器 ……232
３．各器種の消長と土器組成 ……232
４．編年との対応 ……238
５．遺構の時期 ……239
６．注目される遺構・遺物 ……239
第２節　中世・近世 ……243
１．中世遺物 ……243
(1)土師質土器 ……243
(2)中世陶磁器 ……249
２．近世遺物 ……255
３．第16～18次調査出土瓦 ……261
４．中世・近世の遺構について ……263
引用・参考文献 ……273
第４章　自然科学的分析 ……275
第１節　南小泉遺跡炭化材同定報告 ……275
第２節　南小泉遺跡祭祀土坑出土鉄滓学的調査 ……280
第５章　まとめ ……290
写真図版 ……293

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡……2
第２図　南小泉遺跡次数別調査区位置図…5
第３図　調査地点地形図……7
第４図　基本層位……7
第５図　遺構配置図……9
第６図　ＳＩ01平面図・断面図……11
第７図　ＳＩ01カマド平面・断面図……12
第８図　ＳＩ01出土遺物……13
第９図　ＳＩ02平面・断面図……14
第10図　ＳＩ02出土遺物……15
第11図　ＳＩ05平面・断面図……16
第12図　ＳＩ05出土遺物(1)……17
第13図　ＳＩ05出土遺物(2)……18
第14図　ＳＩ05出土遺物(3)……19
第15図　ＳＩ06平面・断面図……20
第16図　ＳＩ06出土遺物……21
第17図　ＳＩ07・10平面・断面図……22
第18図　ＳＩ07・10炭化材・焼土出土状況…23
第19図　ＳＩ07・10出土遺物……24
第20図　ＳＩ８、ＳＫ06・11平面断面図…25
第21図　ＳＩ08出土遺物(1)……26
第22図　ＳＩ08出土遺物(2)……27
第23図　ＳＩ09平面図……28
第24図　ＳＩ11出土遺物……29
第25図　ＳＫ03・14平面・断面図……29
第26図　ＳＫ03・06・11出土遺物……30
第27図　ＳＫ07・09平面・断面図……31
第28図　ＳＫ12平面・断面図……31
第29図　ＳＫ12出土遺物(1)……32
第30図　ＳＫ12出土遺物(2)……33
第31図　ＳＫ12出土遺物(3)……34
第32図　ＳＤ04・05平面・断面図……35
第33図　ＳＡ01・02平面図……37
第34図　ＳＢ01・ＳＸ02平面・断面図……38
第35図　ＳＢ01・ＳＸ02出土遺物……39
第36図　ＳＢ02・03・04平面・断面図……41
第37図　Ⅵ区建物跡平面・断面図……42
第38図　ＳＫ02平面・断面図……43
第39図　ＳＫ05・08平面図……44
第40図　Ⅷ区平面・断面図……45
第41図　ＳＫ05・07・08・10出土遺物……47
第42図　配石遺構……48
第43図　ＳＤ01（Ⅱ区）平面・断面図……49
第44図　ＳＤ01（Ⅴ区）近世面……50
第45図　ＳＤ01（Ⅴ区）平面・断面図……51
第46図　ＳＤ01橋脚跡平面・断面図……52
第47図　ＳＤ01出土遺物(1)……53
第48図　ＳＤ01出土遺物(2)……54
第49図　ＳＤ01出土遺物(3)……55
第50図　ＳＤ01出土遺物(4)……56
第51図　ＳＤ01出土遺物(5)……57
第52図　ＳＤ01出土遺物(6)……58
第53図　ＳＤ01出土遺物(7)……59
第54図　ＳＤ01出土遺物(8)……60
第55図　ＳＤ02・03・06・09平面・断面図……61
第56図　ＳＤ02出土遺物……62
第57図　Ⅵ区・ＳＤ07・13平面断面図……65
第58図　ＳＤ08・11・12・15平面・断面図……67
第59図　ＳＤ05・11～13・15出土遺物……69
第60図　Ⅱ区土墨出土遺物……71

第61図　その他の出土遺物(1)……74
第62図　その他の出土遺物(2)……75
第63図　その他の出土遺物(3)……76
第64図　その他の出土遺物(4)……77
第65図　その他の出土遺物(5)……78
第66図　その他の出土遺物(6)……78
第67図　遺構配置図……93
第68図　基本層位……95
第69図　ＳＩ01・02平面図……96
第70図　ＳＩ03・07・09平面・断面図……97
第71図　ＳＩ01出土遺物……99
第72図　ＳＩ02出土遺物……99
第73図　ＳＩ03・07・15・16平面・断面図 …100
第74図　ＳＩ03出土遺物(1) ……101
第75図　ＳＩ03出土遺物(2) ……102
第76図　ＳＩ04平面・断面図 ……103
第77図　ＳＩ04出土遺物 ……104
第78図　ＳＩ05・06平面・断面図 ……104
第79図　ＳＩ05出土遺物 ……105
第80図　ＳＩ06出土遺物 ……106
第81図　ＳＩ07出土遺物 ……107
第82図　ＳＩ09平面・断面図 ……107
第83図　ＳＩ09出土遺物 ……108
第84図　ＳＩ10・17平面・断面図 ……108
第85図　ＳＩ10出土遺物 ……109
第86図　ＳＩ11平面・断面図 ……110
第87図　ＳＩ11出土遺物 ……111
第88図　ＳＩ12平面図 ……112
第89図　ＳＩ12出土遺物(1) ……113
第90図　ＳＩ12出土遺物(2) ……114
第91図　ＳＩ12出土遺物(3) ……115
第92図　ＳＩ14出土遺物 ……115
第93図　ＳＩ16出土遺物 ……116
第94図　ＳＩ17出土遺物 ……116
第95図　ＳＩ18平面・断面図 ……117
第96図　ＳＩ18出土遺物 ……117
第97図　ＳＫ15～20、26～28平面・断面図 …118
第98図　ＳＤ09・10平面図・断面図 ……120
第99図　ＳＤ09出土遺物 ……121
第100図　ＳＤ10出土遺物……122
第101図　ＳＤ12平面・断面図……123
第102図　ＳＤ12、ＳＫ26出土遺物……124
第103図　ＳＡ01平面・断面図……124
第104図　ＳＢ01・07平面・断面図……125
第105図　ＳＢ02・06平面・断面図……126
第106図　ＳＢ03・04・05平面・断面図…127
第107図　ＳＢ08～12平面・断面図……128
第108図　トレンチ平面・断面図……129
第109図　ＳＥ01平面・断面図……132
第110図　ＳＥ01出土遺物……133
第111図　ＳＫ01・13・14平面・断面図…134
第112図　ＳＫ03平面・断面図……135
第113図　ＳＫ06～08、21～23平面断面図 …136
第114図　ＳＫ10・11平面・断面図……137
第115図　ＳＫ01・03・10・11・15出土遺物…139
第116図　ＳＫ13・21・23出土遺物……140
第117図　ＳＤ01（Ⅱ区）平面・断面図…141
第118図　ＳＤ01（Ⅳ区）平面・断面図…142
第119図　ＳＤ01（Ⅴ区）平面・断面図…143
第120図　ＳＤ01出土遺物(1)……145
第121図　ＳＤ01出土遺物(2)……146
第122図　ＳＤ02平面・断面図……147
第123図　ＳＤ01出土遺物(3)……149
第124図　ＳＤ02出土遺物(1)……150

第125図　ＳＤ02出土遺物(2)……151
第126図　ＳＤ02出土遺物(3)……152
第127図　ＳＤ04平面・断面図……154
第128図　ＳＤ04出土遺物……155
第129図　ＳＤ02・16遺構外出土遺物……157
第130図　その他の出土遺物……158
第131図　基本層位（Ｉ区）……170
第132図　基本層位（II区）……171
第133図　遺構配置図……173
第134図　ＳＩ01平面・断面図(1)……175
第135図　ＳＩ01平面・断面図(2)……176
第136図　カマド付近平面・断面図……177
第137図　ＳＩ01出土遺物(1)……178
第138図　ＳＩ01出土遺物(2)……179
第139図　ＳＩ01出土遺物(3)……180
第140図　ＳＩ02平面・断面図……181
第141図　ＳＩ02出土遺物……181
第142図　ＳＩ03平面・断面図……182
第143図　ＳＩ05平面・断面図……182
第144図　ＳＩ05出土遺物……183
第145図　ＳＫ03～13平面・断面図……184
第146図　ＳＫ03・10出土遺物……185
第147図　ＳＤ03平面・断面図……186
第148図　ＳＤ04平面・断面図……187
第149図　ＳＤ05平面・断面図……188
第150図　ＳＤ03～05・20出土遺物……189
第151図　ＳＤ20・24平面・断面図……190
第152図　畝状遺構平面・断面図……191
第153図　ＳＸ01・02・03平面・断面図…192
第154図　ＳＸ02出土遺物(1)……193
第155図　ＳＸ02出土遺物(2)……194
第156図　ＳＸ02出土遺物(3)……195
第157図　ＳＩ04平面・断面図(1)……197
第158図　ＳＩ04平面・断面図(2)……198
第159図　ＳＩ04平面・断面図(3)……199
第160図　ＳＩ04出土遺物(1)……200
第161図　ＳＩ04出土遺物(2)……201
第162図　ＳＤ07・08・09平面・断面図…203
第163図　ＳＤ08出土遺物……205
第164図　１号・２号畝状遺構（II区）
平面・断面図……206
第165図　１号・２号畝状遺構（II区）
平面・断面図……207
第166図　５号・６号畝状遺構（Ｉ区）
平面・断面図……208
第167図　ＳＤ16出土遺物……209
第168図　トレンチ平面・断面図……210
第169図　ＳＤ25・畝状遺構（Ｉ区）
出土遺物……211
第170図　ＳＡ01平面・断面図……211
第171図　ＳＢ01平面・断面図……212
第172図　ＳＢ02平面・断面図……213
第173図　ＳＢ03平面・断面図……213
第174図　ＳＢ04平面・断面図……214
第175図　ＳＢ05平面・断面図……214
第176図　ＳＢ06平面・断面図……215
第177図　SD01・02・10・11平面断面図……216
第178図　ＳＤ01・02出土遺物……217
第179図　ＳＤ12・13平面・断面図……217
第180図　ＳＤ10・13平面・断面図……217
第181図　ＳＤ12・14平面・断面図……218
第182図　土坑平面・断面図……220
第183図　その他の出土遺物（遺構外）…222
第184図　深掘トレンチ土器出土状況……223

第185図　その他の出土遺物（弥生）……223
第186図　各次時代別遺構配置図(1)……241
第187図　各次時代別遺構配置図(2)……242
第188図　土師質土器埦・皿類変遷試案…251
第189図　中世・近世遺構変遷図(第16次)……269
第190図　中世・近世遺構変遷図(第16次)……270
第191図　中世・近世遺構変遷図(第17次)……271
第192図　中世・近世遺構変遷図(第18次)……272

表　目　次

表１　第16次出土遺物観察表(1)……79
表２　第16次出土遺物観察表(2)……80
表３　第16次出土遺物観察表(3)……81
表４　第16次出土遺物観察表(4)……82
表５　第16次出土遺物観察表(5)……83
表６　第16次出土遺物観察表(6)……84
表７　第16次出土遺物観察表(7)……85
表８　第16次出土遺物観察表(8)……86
表９　第16次出土遺物観察表(9)……87
表10　第16次出土遺物観察表(10)……88
表11　第16次出土遺物観察表(11)……89
表12　第16次出土遺物観察表(12)……90
表13　第17次出土遺物観察表(1)…… 159
表14　第17次出土遺物観察表(2)…… 160
表15　第17次出土遺物観察表(3)…… 161
表16　第17次出土遺物観察表(4)…… 162
表17　第17次出土遺物観察表(5)…… 163
表18　第17次出土遺物観察表(6)…… 164
表19　第17次出土遺物観察表(7)…… 165
表20　第17次出土遺物観察表(8)…… 166
表21　第17次出土遺物観察表(9)…… 167
表22　第17次出土遺物観察表(10)…… 168
表23　第18次出土遺物観察表(1)…… 224
表24　第18次出土遺物観察表(2) ……225
表25　第18次出土遺物観察表(3) ……226
表26　第18次出土遺物観察表(4) ……227
表27　第16～18次主要遺構器種組成表(1) ……233
表28　第16～18次主要遺構器種組成表(2) ……234
表29　段階別器種組成表と消長 ……237
表30　段階別主要遺構一覧……237
表31　遺構別土師質土器器種組成表 ……247
表32　遺構別土師質土器器種組成表 ……248
表33　土師質土器皿類の推定消長 ……250
表34　産地別出土破片数とその比率 ……256
表35　産地別出土破片数とその比率 ……262
表36　産地別出土破片数とその比率 ……262
表37　時期別遺構の変遷 ……268

表１　南小泉遺跡出土炭化材の樹種 ……277
表２　南小泉遺跡出土炭化材の住居址別の樹種構成 ……278
Table1　供試材の履歴と調査項目 ……280
Table2　仙台市周辺出土鉄滓の化学組成 ……283
Table3　高速定性分析 ……285
Table4　古墳時代前・中期の鉱石系鍛錬鍛冶滓出土例 ……287

写　真　図　版

写真１　南小泉遺跡空中写真……293
写真２　第16次調査遺跡全景・検出遺構…294
写真３　第16次調査検出遺構……295
写真４　第16次調査検出遺構……296
写真５　第16次調査検出遺構……297
写真６　第16次調査検出遺構……298
写真７　第16次調査出土遺物……299
写真８　第16次調査出土遺物……300
写真９　第16次調査出土遺物……301
写真10　第16次調査出土遺物……302
写真11　第16次調査出土遺物……303
写真12　第16次調査出土遺物……304
写真13　第16次調査出土遺物……305
写真14　第16次調査出土遺物……306
写真15　第16次調査出土遺物……307
写真16　第16次調査出土遺物……308
写真17　第16次調査出土遺物……309
写真18　第17次調査検出遺構……310
写真19　第17次調査検出遺構……311
写真20　第17次調査検出遺構……312
写真21　第17次調査検出遺構……313
写真22　第17次調査検出遺構……314
写真23　第17次調査検出遺構……315
写真24　第17次調査検出遺構……316
写真25　第17次調査出土遺物……317
写真26　第17次調査出土遺物……318
写真27　第17次調査出土遺物……319
写真28　第17次調査出土遺物……320
写真29　第17次調査出土遺物……321
写真30　第17次調査出土遺物……322
写真31　第17次調査出土遺物……323
写真32　第17次調査出土遺物……324
写真33　第17次調査出土遺物……325
写真34　第18次調査検出遺構（Ⅰ区）…326
写真35　第18次調査検出遺構（Ⅰ区）…327
写真36　第18次調査検出遺構（Ⅰ区）…328
写真37　第18次調査検出遺構（Ⅰ・Ⅱ区）…329
写真38　第18次調査検出遺構（Ⅱ区）…330
写真39　第18次調査検出遺構（Ⅱ区）…331
写真40　第18次調査検出遺構（Ⅱ区）…332
写真41　第18次調査検出遺構（Ⅱ区）・
　　出土遺物……333
写真42　第18次調査出土遺物……334
写真43　第18次調査出土遺物……335
写真44　第18次調査出土遺物……336

写真１　炭化材同定……337
写真２　炭化材同定……338
Photo1　南小泉遺跡出土椀形鍛冶滓
　　（５Ｃ中頃）の顕微鏡組織……339
Photo2　南小泉遺跡出土鉄滓（MSB-11）
　　の特性Ｘ線像……340

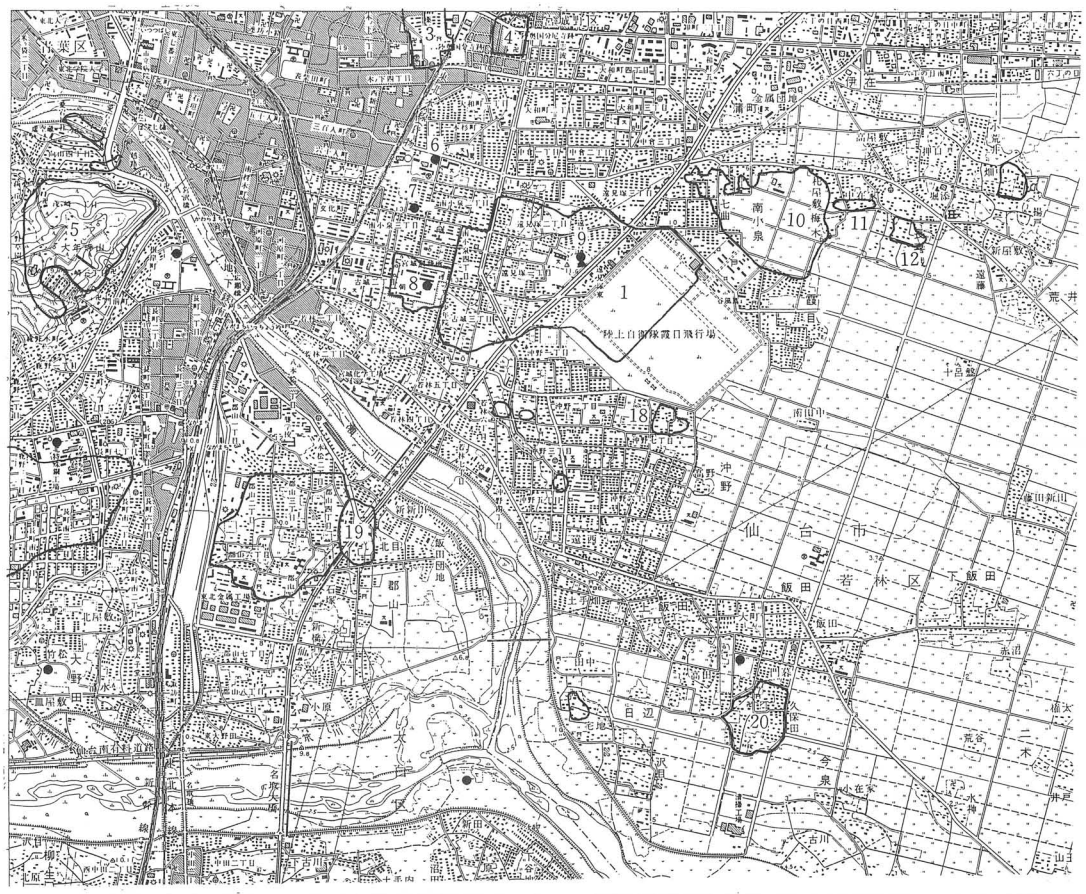
第１章　遺跡概要

１．位置と環境

南小泉遺跡はJR仙台駅の南東約3.5kmに位置し、仙台市若林区南小泉・遠見塚・古城・霞目地内に属し、東西約1.5km、南東約1.2kmの範囲が指定を受けている。将来は、さらに西側へ拡大されるものと予想される。仙台市東部には沖積平野が広がり、「宮城野海岸平野」と呼ばれている注。遺跡はこの平野奥部の自然堤防上に立置している。標高は20m未満であるが、本遺跡ではおよそ7～11m代である。遺跡の西方には台地（段丘）と低地の地形境界がみられ、この境界は「長町－利府線」と呼ばれる断層で、その主断層は沖積層下に伏在しているといわれている（1986：北村･他)。平野はこのラインの東側に展開する。また、第四紀の地質層序は荒浜層・霞ノ目層・福田町層・岩切層となっており注、本遺跡は平野最奥部の最上位を占める霞ノ目層にのっている。この層は氾濫原の堆積物で、礫混り粗粒砂層・ローム層から成っていると言われ、遺跡のいわゆる「地山層」である。

本遺跡は弥生・古墳時代の遺跡として著名であり、その存在は戦前より知られていた。昭和14・15年の霞ノ目飛行場の拡張工事の際に多くの遺構・遺物が発見され研究者の注目される遺跡となった（1941：伊東信雄)。この時が、県内初の竪穴住居跡の発見であったという。また、伊藤信雄氏によれば、工事以前に松本源吉氏によって注意されていたという。注意されるようになったのはおそらく､南小泉地内では昭和11年頃より畑地の天地返しが行われるようになったと言われ、これ以後のことと予想される。仙台市教育委員会による昭和53年度範囲確認調査によって、遺跡の範囲がほぼ確定し、飛行場の西側にも拡大されることが明らかになった。以後、継続的に調査が行われるようになり、弥生時代の包含層、古墳時代中期～後期・奈良～平安時代、中世・近世の遺構群が発見・調査されるようになり、現在に至っている。

さて、本遺跡の所在する広瀬川左岸には数多くの遺跡が存在する。時代別に概観すると、旧石器時代の遺跡はないが、続く縄文時代には今泉遺跡から後期前葉の土器が出土している。また、本遺跡でも今回報告する第17次調査地点で、中期末～後期初頭の土器が発見された。弥生時代には今泉・藤田新田・中在家南の各遺跡が知られ、特に中在家南遺跡では、この時代の墓壙や多数の木製品が発見され、注目されている。古墳時代には、本遺跡を除くと集落跡はほとんど知られていない。僅かに砂押Ｉ遺跡・今泉遺跡などに可能性がある。中在家南遺跡では、前時代に引続きこの時代の木製品も多数出土している。弥生～古墳時代に木製農工具が盛んに製作・使用されていたことを知ることができる。左岸には幾つかの古墳が知られているが、このうち、最古・最大のものは、本遺跡内にある遠見塚古墳である。二段築成で主軸約110mの規模をもち、２基の粘土槨が確認されている。しかし、この古墳の製作集団（集落）は判明し



No	遺跡名	立地	時期	No	遺跡名	立地	時期
1	**南小泉遺跡**	沖積地	縄文～近世	11	中在家南遺跡	沖積地	弥生・古墳・平安～近世
2	国分鞭館跡	丘陵	平安末？	12	長喜城跡	沖積地	中世
3	陸奥国分寺跡	沖積地	奈良・平安・近世	13	荒井館跡	沖積地	中世
4	陸奥国分尼寺跡	沖積地	奈良・平安・中世	14	藤田新田遺跡	沖積地	弥生・古墳
5	茂ケ崎城跡	丘陵	南北朝～室町	15	砂押Ⅰ遺跡	沖積地	古墳～平安
6	法領塚古墳	沖積地	古墳（後期）（円墳）	16	砂押Ⅱ遺跡	沖積地	古墳～平安
7	猫塚古墳	沖積地	古墳（円墳）	17	神棚遺跡	沖積地	弥生～平安
8	若林城跡	沖積地	古墳・中世・近世（円墳）	18	沖野城跡	沖積地	中世
9	遠見塚古墳	沖積地	古墳（前方後円墳）	19	北目城跡	沖積地	中世・近世
10	仙台東郊条里跡	沖積地	奈良・平安	20	今泉遺跡	沖積地	縄文～近世

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡（国土地理院発行１：25000「仙台南東部」）

ていない。また、本遺跡の西側には猫塚・若林城跡内・法領塚の各古墳が知られ、若林城跡内のものは埴輪を伴なう円墳で、5世紀後半頃と考えられている。法領塚古墳は後期に属する横穴式石室をもつ円墳で、7世紀初頭前後と考えられている。窯業関係では、本遺跡の北方約4.5kmに大蓮寺窯跡（須恵器窯）、西方約5kmには金山窯（須恵器窯）・富沢窯（埴輪窯）があり、5世紀代の所産である。また、今回報告する16次調査において5世紀代の鉄滓が出土しており、鉄器生産が行われていたことを知ることができる。

奈良時代には、本遺跡の北方に陸奥国分寺・同尼寺が建立される。だが、周辺には集落跡確認されておらず、本遺跡でも僅かに住居跡1軒と土坑が検出されているにすぎない。

平安時代には、本遺跡内にほぼ9世紀代を中心とする集落が出現する。周辺には、砂押Ⅰ・Ⅱ遺跡、神柵遺跡、中在家遺跡など奈良～平安時代と見られている遺跡が散在するが、詳細は不明である。また、本遺跡の東側には奈良～平安時代の条里跡があり、その一部は東郊条理として登録されている。

中世は現状では12世紀以後と理解しているが、平安時代末期の例は今泉遺跡と今回報告する17次調査地点に限られる。鎌倉時代以後は遺跡数が増加する。本遺跡で遺構の増加に呼応するように、今泉遺跡、沖野城、長喜城、荒井館、若林城など沖積地の城館、段丘上の国分鞭館、丘陵上の茂ケ崎城が点在する。また、陸奥国分尼寺跡では中世陶器が発見されている。

近世の開幕は、県北の岩出山城に伊達政宗が入った天正19年が目安となり、その後、広瀬川右岸の北目城にも一時陣所を置いた時であろう。また、その確立は、仙台城造営を開始した慶長5年以後である。陸奥国分寺跡には、中世以後薬師堂が建てられていたが、慶長10～12年に藩主伊達政宗によって復興され、多くの寺領か寄進されている。復興後の薬師堂は、国の重要文化財に指定されている。政宗晩年の寛永4年には、国分氏の居城と言われた城跡を若林城として改築し、その周辺には小規模な城下町が形成された。南小泉遺跡の西半部では、17世紀前半の遺構群が発見されるようになり、城下町と重複していると考えられる。城下町は、若林城が撤去（寛永16年）される以前の寛永14・15年頃には廃止されたとみられている。

2．調査の方法と要項

第16～18次調査は、宅地開発に関わるもので、現状は第16・18次は荒地、17次は畑地となっていた。調査は道路予定地部分を主に対象としたが、開発予定地全域に5mメッシュを組み、南北にアルファベット東西に数字を付し、グリッドの南西ポイントを基準（グリッド名）とした。また、各次の調査とも便宜的に大区画名を使用した。調査では、第16次調査時の道路追加変更、梅雨期間の長期化、第16・17次の予想以上の遺構の検出等で、調査期間の延期を余儀された。以下に調査要項を示す。

〔調査要項〕

遺　跡　名：南小泉遺跡（C－102）

所　在　地：第16次調査　仙台市遠見塚一丁目18外　　（若林区）

：第17次調査　　〃　遠見塚一丁目253－1外　（　〃　）

：第18次調査　　〃　遠見塚一丁目237－4外　（　〃　）

調 査 主 体：仙台市教育委員会

調 査 担 当：仙台市教育委員会文化財調査係

担 当 職 員：佐藤　洋・工藤信一郎・長島栄一

調 査 期 間：第16次調査　昭和63年4月13日～8月26日

：第17次調査　昭和63年7月14日～12月1日

：第18次調査　昭和63年10月18日～平成元年1月10日

整 理 期 間：平成元年1月17日～平成2年3月31日

調査対象面積：第16次調査　約7,017 m²　　調査面積：第16次調査　約835 m²

：第17次調査　約3,741 m²　　：第17次調査　約867 m²

：第18次調査　約3,910 m²　　：第18次調査　約1,116 m²

調査参加者　（第16～18次）　五十音順

芦野徳松・芦野ヒデ子・安斉直子・岩間キノエ（第16次）・大槻明美・小野辰夫・小畑勝子・柿沼幸子（第16次）・勝又洋（第18次）・金山幾代・兼子ミヨ子・菅野正道・斉藤紀子・笹川光夫・佐藤愛子・佐藤久栄・佐藤均（第18次）・佐藤浩道（第18次）・佐藤よし子・庄子信哉（第18次）・鈴木正道（第18次）・田中さと子・田中スエ・鳥畑きみえ・針生ゑなよ・深瀬嶺子・峯岸安好（第17・18次）・森ミヨノ・山浦文彦（第18次）・山田太（第18次）・吉田アキヨ（第17・18次）・渡辺久幸（第18次）・渡辺みつゑ・渡辺陽子（第16次）　　第16次・24名、第17次・23名、第18次・31名

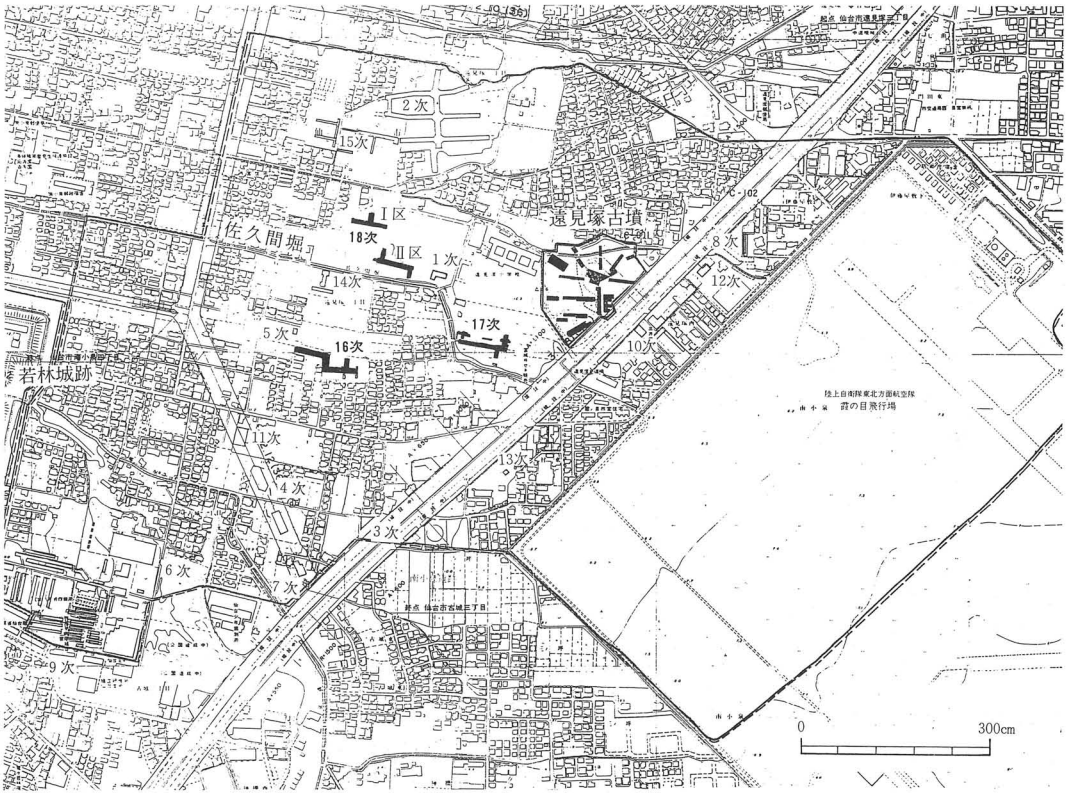
整理参加者　（第16～18次）　五十音順

相沢義徳・大槻明美・大山のり子・小佐野章子・柿沼幸子・金山幾代・菅野正道・栗原皎子・斉藤彰裕・佐藤三枝子・佐藤久栄・庄子錦一郎・菅井民子・菅谷裕子・曽根ちか子・高橋栄一・玉田喜代・外川みつ子・芳賀節子・原田由美子・深瀬嶺子・福士修司・増田瑞枝・森みほ子・谷津和広・吉田りつ子・米倉節子・渡辺好恵　（28名）

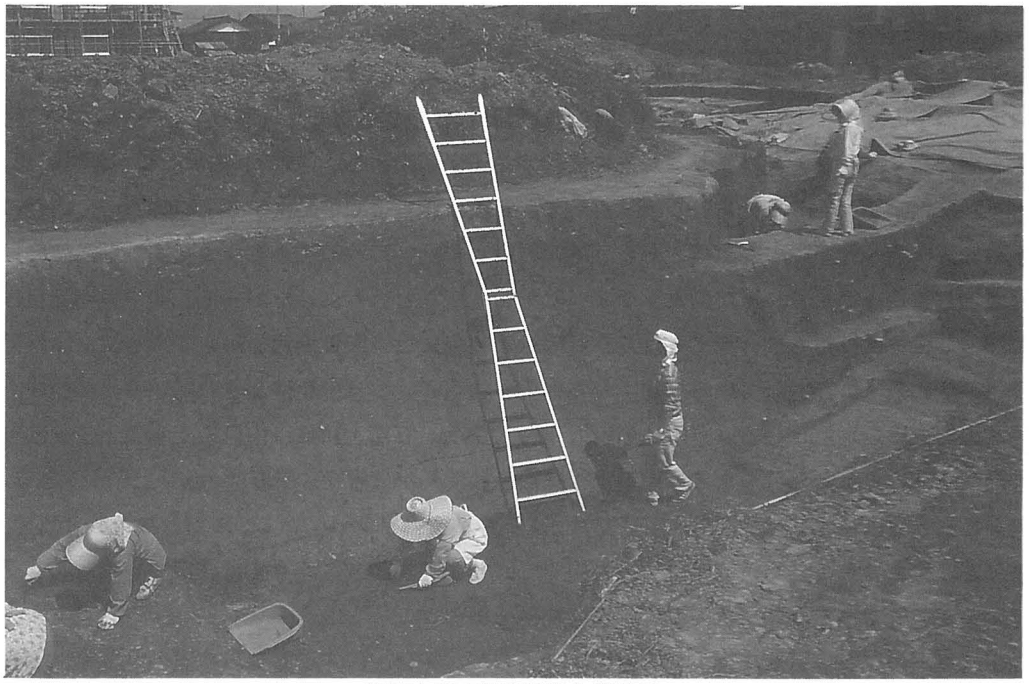
調査協力　第16次調査：仙台土地開発株式会社

第17次調査：菅原輝男・株式会社丸正吉田店

第18次調査：株式会社大東・仙台土地開発株式会社・協進開発株式会社



第２図　南小泉遺跡次数別調査区位置図



第16次調査外堀精査作業風景

第2章　調査の成果

第1節　第16次調査

1．調査に至る経緯

南小泉遺跡内の宅地開発予定地について、昭和62年11月頃より仙台土地開発株式会社と事前協議を行い、その後、昭和62年12月14日付で発掘届が提出された。計画では盛土工法となっており、調査は道路部分を対象とし、必要に応じて拡張することとした。昭和63年に入り設計変更の申し入れがあり、同年3月23日に受理した。調査は、昭和63年4月より約3ケ月間の予定で開始した。

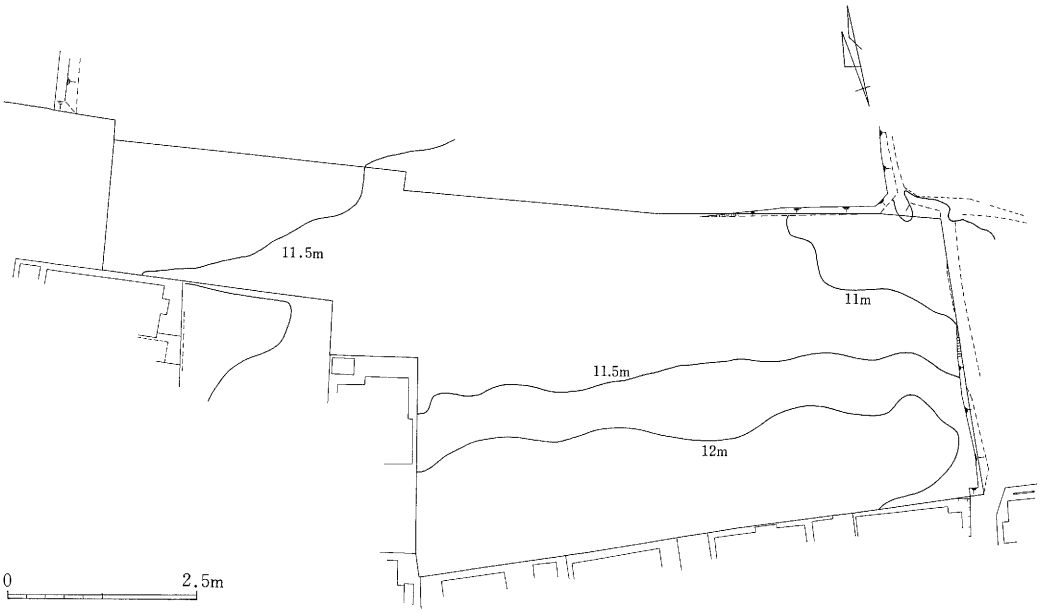
2．調査の経過

調査は、まず道路予定地部分の表土をバックホーで除去し、以後人力による調査を行った。しかし、設計変更に伴なう道路予定面積の増加や例年にない梅雨の長雨、そして、調査前には予想できなかった、大規模な中世城館の存在などで、調査期間の延期を余儀なくされた。城館の外掘は幅約15m、 深さ2m前後と大規模なもので、その南側では土塁の一部が残存していた。一方では、戦前から行われていた畑地の天地返しが著しく、その中には多量の遺物が混在していた。特に、東側の土塁が想定される地区で際立っていた。さらに下層の調査では、古墳時代の住居跡や工房跡あるいは祭祀関連とみられる遺物群などが検出された。調査に約5ケ月を要したが、多大な成果を上げることができた。なお、調査終了後の工事に際し、数条の溝跡を確認した。

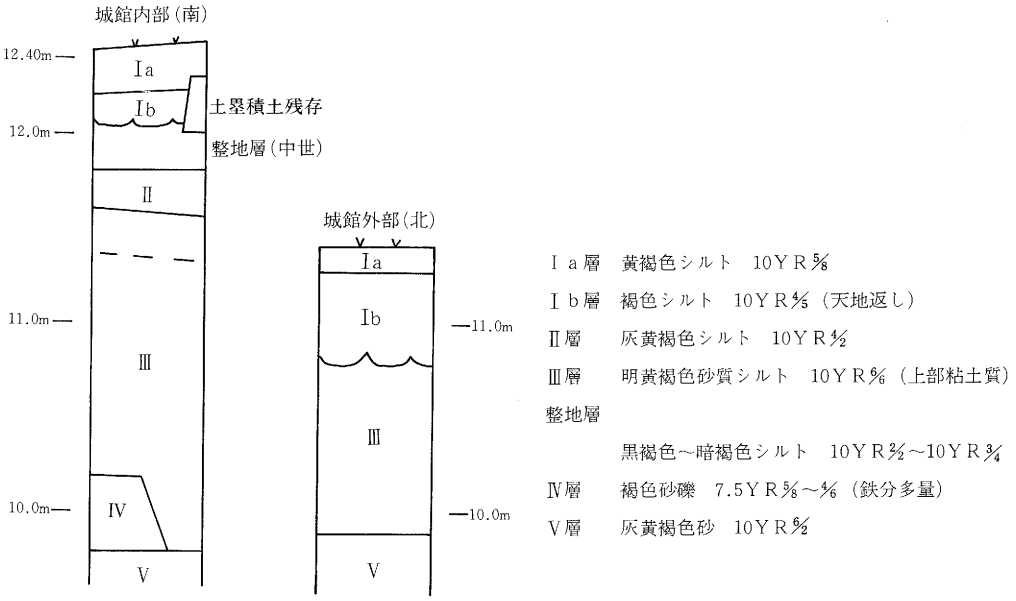
3．基本層位

基本層位は5層に大別される(第4図)。Ⅰ層は耕作土であるが、3層に細分される。Ⅰａ層は最近のものだが、Ⅰｂ層は昭和10年代より行われた天地返しにより形成されたものである。Ⅰｂ層を掘り込んだ撹乱坑より、電柱に使用する碍子が出土し、「1947」銘が記載されていた。Ⅰｃ層は堀跡（SD01）部分にみられる土層で、多量の礫や遺物が出土する。遺物の中で最新のものは、明治～大正頃の陶磁器である。地元の古老の話では、戦後まもない頃まで堀跡部分は凹地として残っており、水が溜まりやすい状況であったという。したがって、礫や遺物は耕作に伴って投棄されたものと考えられる。Ⅱ層は暗褐色に近い灰黄褐色シルトであるが、土塁部分の下部に限って存在している。層中から弥生～古墳時代の遺物が検出されている。城館成立以前の旧表土と理解される。層厚は20cm前後である。Ⅱ層上には、中世の土塁積土や整地層の堆積が認められる部分もある。Ⅲ層は明黄褐色砂質シルト層で、層厚は1.5～1.8mである。無遺物層となる。撹乱を受けない部分では、上部が粘土質となっている。Ⅳ層は褐色砂礫層で、鉄分を多量に含んでいる。層厚は、最大約40cmである。調査区北半では確認できない。Ⅴ層は灰黄褐色砂である。層厚は不明で、無遺物層である。

Ⅲ層以下が、霞ノ目層に相当するものと考えられ、特に、Ⅳ・Ⅴ層は氾濫原の堆積物と思わ



第３図　調査地点地形図



第４図　基 本 層 位

れる。

4．検出遺構と出土遺物

(1) 古墳時代（第5図）

古墳時代に属する遺構は、住居跡10軒・土坑跡7基・溝跡1条を検出した。なお、SI04は精査開始後住居跡ではなく、土坑跡（SK12）であることが判明したため欠番とした。また、VI区北部で調査終了間際のだめ押しで、住居跡の床面・土器の一部を検出したが、精査は断念した（SI11）。SD14も後にSI09の壁溝と判明したことにより、欠番とした。

住居跡（SI）

SI01（第6～8図）

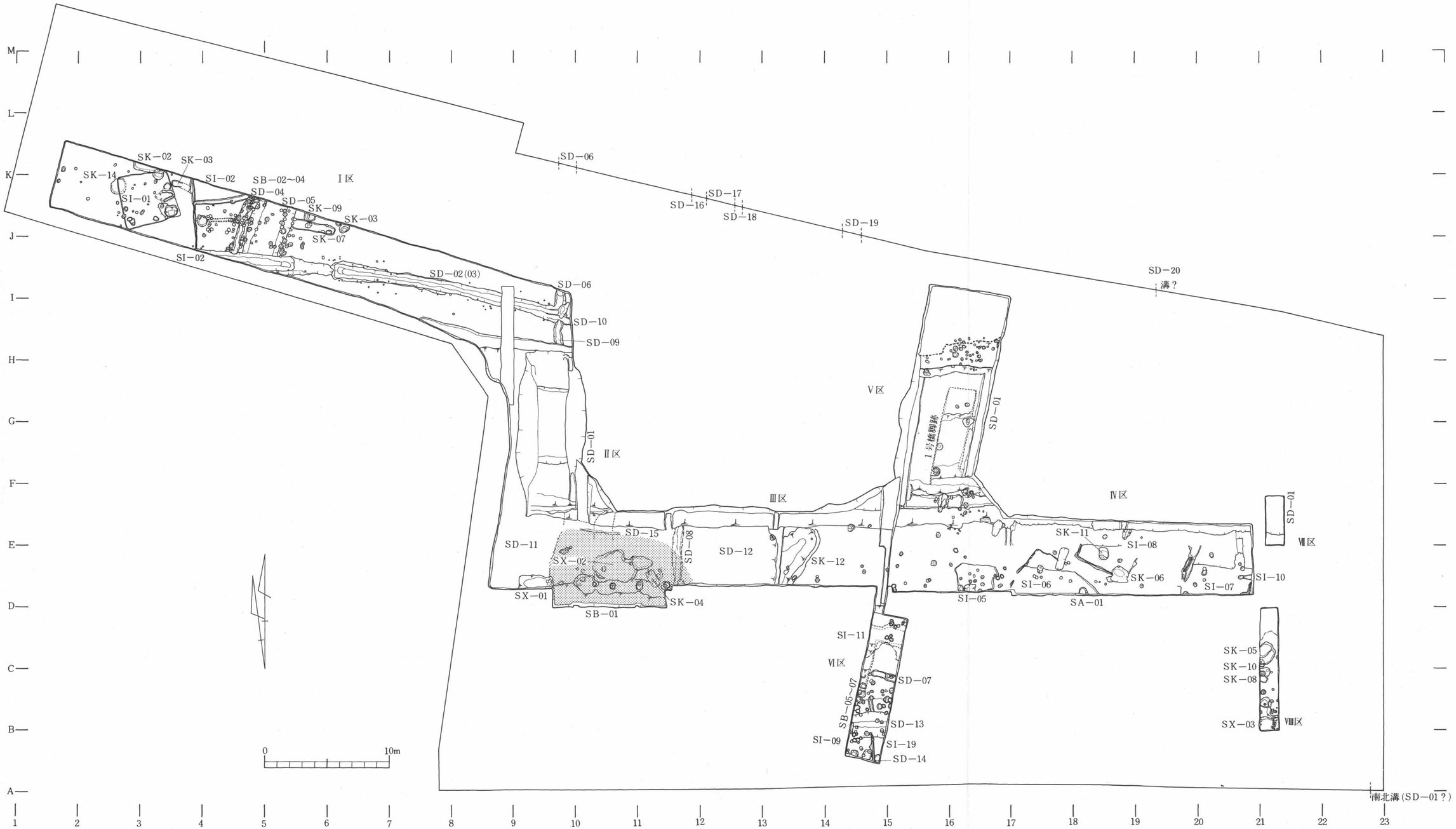
西端部J－3区に位置し、SK02に切られ、SK14を切る。規模は4.4×3.76 mで、不整の正方形プランである。壁高は4～9 cmで、床面は平坦である。この住居跡は火災により消失したもので、炭化材・焼土が残存していた。材はその配置から梁・桁材相当のものと垂木材が検出された。梁・桁材の周囲には炭化材片混りの焼土が分布し、材の上部にはIII層起源とみられる黄褐色粘土質シルトの簿層が認められた。炭化材11点について樹種同定を依頼している。

カマドは東壁中央に位置し、残存状況は上部を天地返しによって削平され不良である。煙道は確認できなかった。カマド燃焼部より小型壺が出土しており、支脚として転用されたものであろうか。ピットは7個検出されたが、このうちP_1～P_4が柱穴である。深さはP_1 56 cm、P_2 39 cm、P_3 44 cm、P_4 39 cmである。また、土坑3基が検出され、いずれも東壁側に位置する。1号・2号が貯蔵穴と考えられ、深さはそれぞれ45 cm・22 cmである。3号はカマド脇に付随するもので、深さ5 cmである。内部には消失以前に堆積した炭層がみられる。1号土坑の西側には灰白色シルトの分布が認められた（周堤帯）。壁際の壁溝は検出されなかった。北西部の床面上には、二ケ所赤色顔料の分布が確認できた。

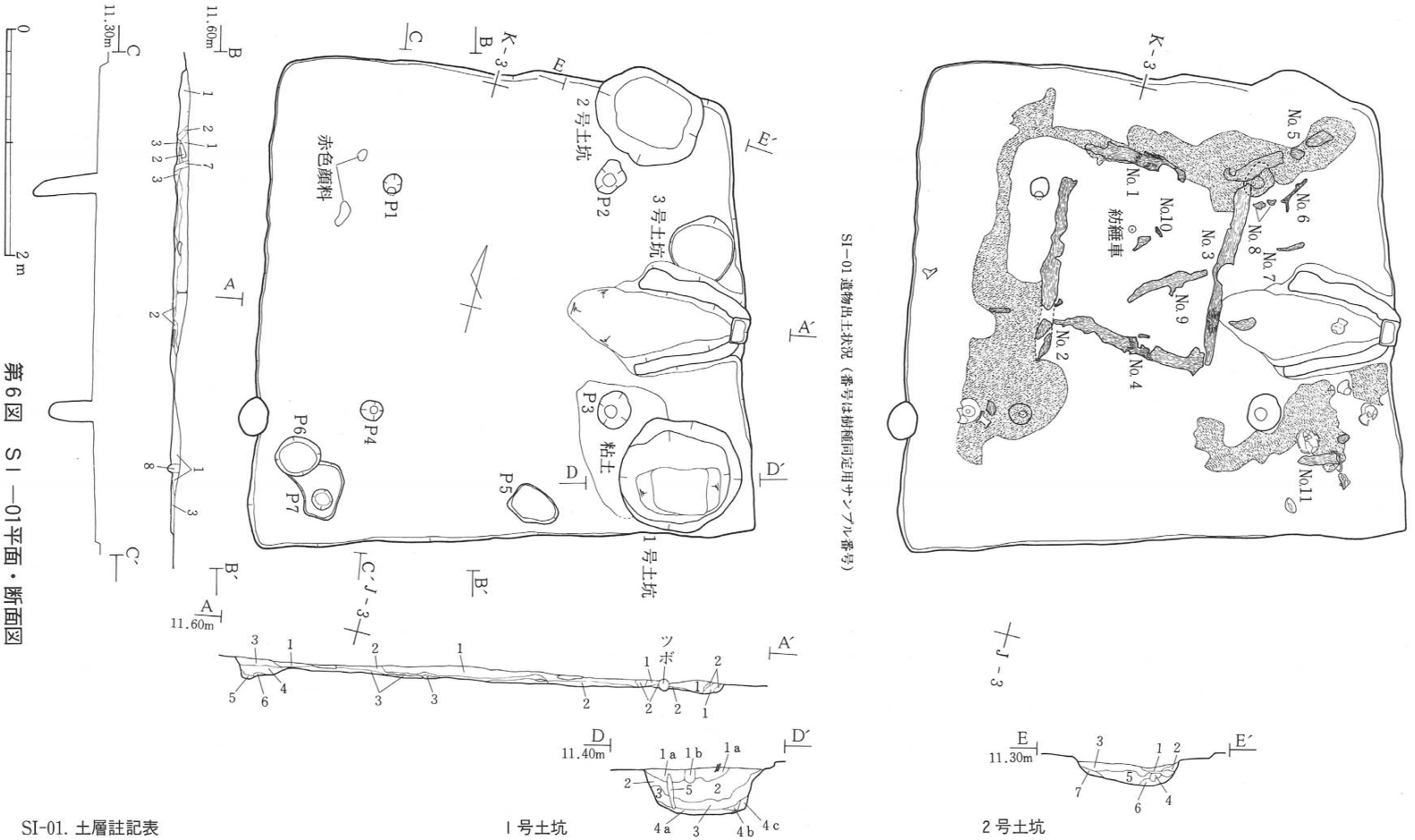
出土遺物には、土師器坏・高坏・小型壺・壺、石製模造品（円板・剣形各1点）、石製紡錘車が出土している。甕は出土していない。坏では内面黒色処理をしたもの、高坏では開脚タイプで低脚のもの、壺では沈線による山形文を描くものがあり、極めて特徴的である。これらの遺物は火災よる消失を下限とする一括性の高い遺物と考えられる。他に、種子・琥珀？出土。

SI02（第9・10図）

I区西部（I－4・5区付近）に位置し、SI03を切り、SD02・04・05に切られる。規模は不明であるが、北辺4.4 m以上、西辺3.7 m以上である。壁高は上部が天地返しを受けており、4～5 cm程である。カマドは確認できず、西壁寄りに深さ4～5 cmの浅い土坑が検出され、焼土が堆積していた。この土坑は炉跡とみられる。その周辺には炭化物の分布が認められた。北側には貯蔵穴が検出され、深さ13 cmを測る。内部からは土師器片・石製模造品が出土してい



第5図　遺構配置図　網点は土塁残存部



第6図　SI−01平面・断面図

SI-01. 土層註記表

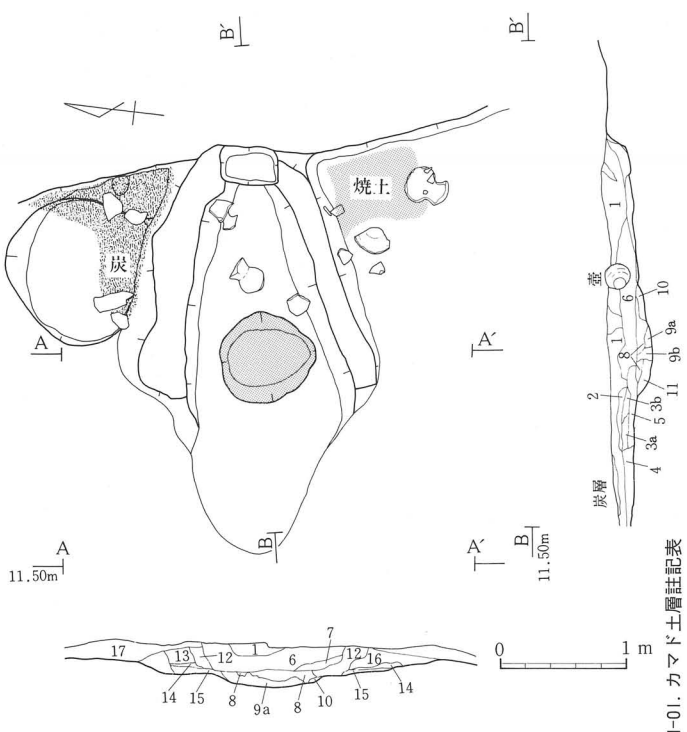
1	10YR7/8	黄橙色シルト	炭化物粒子普遍的に混入
2	10YR5/1	褐灰色シルト	黄橙色土、炭化物粒子混入
3	10YR7/6	明黄褐色土	
4	10YR7/6	にぶい黄橙色シルト	明黄褐色土ブロック
5	10YR5/4	にぶい黄褐色シルト	
6	10YR7/6	明黄褐色シルト	
7	10YR7/4	にぶい黄色シルト	炭化物粒子混入
8	10YR7/6	明黄褐色土シルト	

1号土坑

1a	10YR7/4	にぶい黄橙色シルト	炭化物粒子微量
1b	10YR5/4	にぶい黄褐色シルト	炭化物粒子微量
2	10YR6/4	にぶい黄橙色シルト	炭化物粒子
3	10YR7/8	黄橙色粘土質シルト	炭化物粒子微量
4a	10YR3/4	暗褐色シルト	炭化物粒子微量
4b	10YR7/3	にぶい黄橙色砂質シルト	
4c	10YR7/8	黄橙色砂質シルト	
5	10YR6/6	明黄褐色シルト	

2号土坑

1	7.5Y3/3	暗褐色シルト	焼土粒、焦土多量
2	10YR5/6	黄褐色シルト	やや砂質
3	10YR4/4	褐色シルト	炭化物微量
4	10YR4/6	褐色シルト	焼土、焦土少量
5	10YR5/4	にぶい黄褐色シルト	赤色顔料微量
6	10YR5/6	黄褐色シルト	
7	10YR4/6	褐色シルト	



第7図　SI —01カマド平面・断面図

SI-01. カマド土層註記表

層位	土色・土性	備考
1	2.5Y7/6　明黄褐色砂質シルト	炭化物粒子を普遍的に含む
2	10YR5/4　にぶい黄褐色砂質シルト	炭化物及び焼土を普遍的に含む
3a	10YR8/6　黄橙色砂質シルト	炭化物粒子混入
3b	10YR6/4　にぶい黄橙色砂質シルト	焼土、炭化物まじる
4	10YR5/2　灰黄褐色砂質シルト	炭化物を普遍的に含む
5	10YR3/1　黒褐色シルト	炭化物、明黄褐色土斑状に入る
6	2.5Y5/3　黄褐色シルト	炭化物、灰、焼土が多量
8	2.5Y6/8　焼土層	炭化物混入
9a	5YR4/3　にぶい赤褐色シルト	炭化物、焼土混入、焦土層
9b	5YR4/3　にぶい赤褐色シルト	焼土粒混入、炭化物
10	2.5Y7/4　浅黄色シルト	炭化物、焼土粒子
11	5YR6/6　橙色シルト	炭化物粒子混入
12	5YR2/4　極暗赤褐色シルト	炭化物粒子、焼土ブロック
13	2.5Y7/4　浅黄色シルト	炭化物粒子、焼土粒子微量
14	10YR3/2　黒褐色シルト	炭化物多量
15	2.5Y7/4　浅黄色シルト	炭化物粒子微量
16	2.5Y8/4　淡黄色シルト	炭化物粒子微量
17	2.5Y6/3　にぶい黄色シルト	炭化物粒子微量

る。ピットは10個検出されたが、柱穴と確定できるものはなく、後述するSI03との帰属の不明なものもある。壁溝は2辺で確認され、全周するものと予想される。

出土遺物には、土師器坏・高坏・甕・甑（大型）、石製模造品（円板・剣形・臼玉）がある。また、炉跡内・貯蔵穴より骨片が少量出土している。甕（破片）・模造品は、いずれも貯蔵穴より出土している。

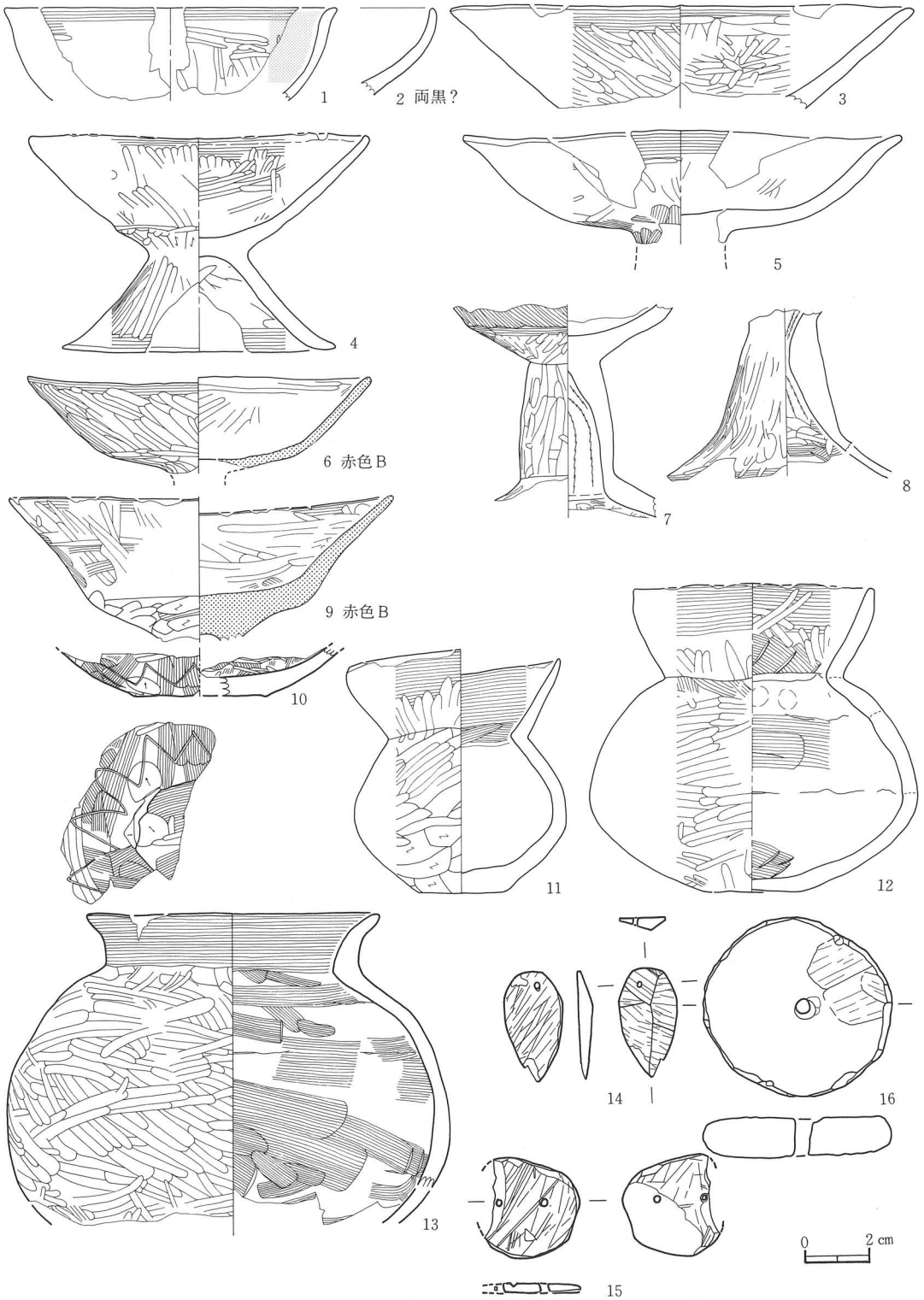
SI03（第9図）

Ⅰ区西部（J－4区）に位置し、SI02、 SD04・05に切られる。SK13との重複関係は不明である。規模は不明であるが、南辺4.3m以上、西辺3.5m以上を測る。カマド・炉は確認できない。壁溝は西壁・南壁で確認され、おそらく全周するであろう。なお、南壁溝はSI02の床下で検出された。壁溝中央で数個のピットが検出された。柱穴は不明である。

出土遺物は、床面直上で少量の土師器片があるが、時期決定できるものはない。

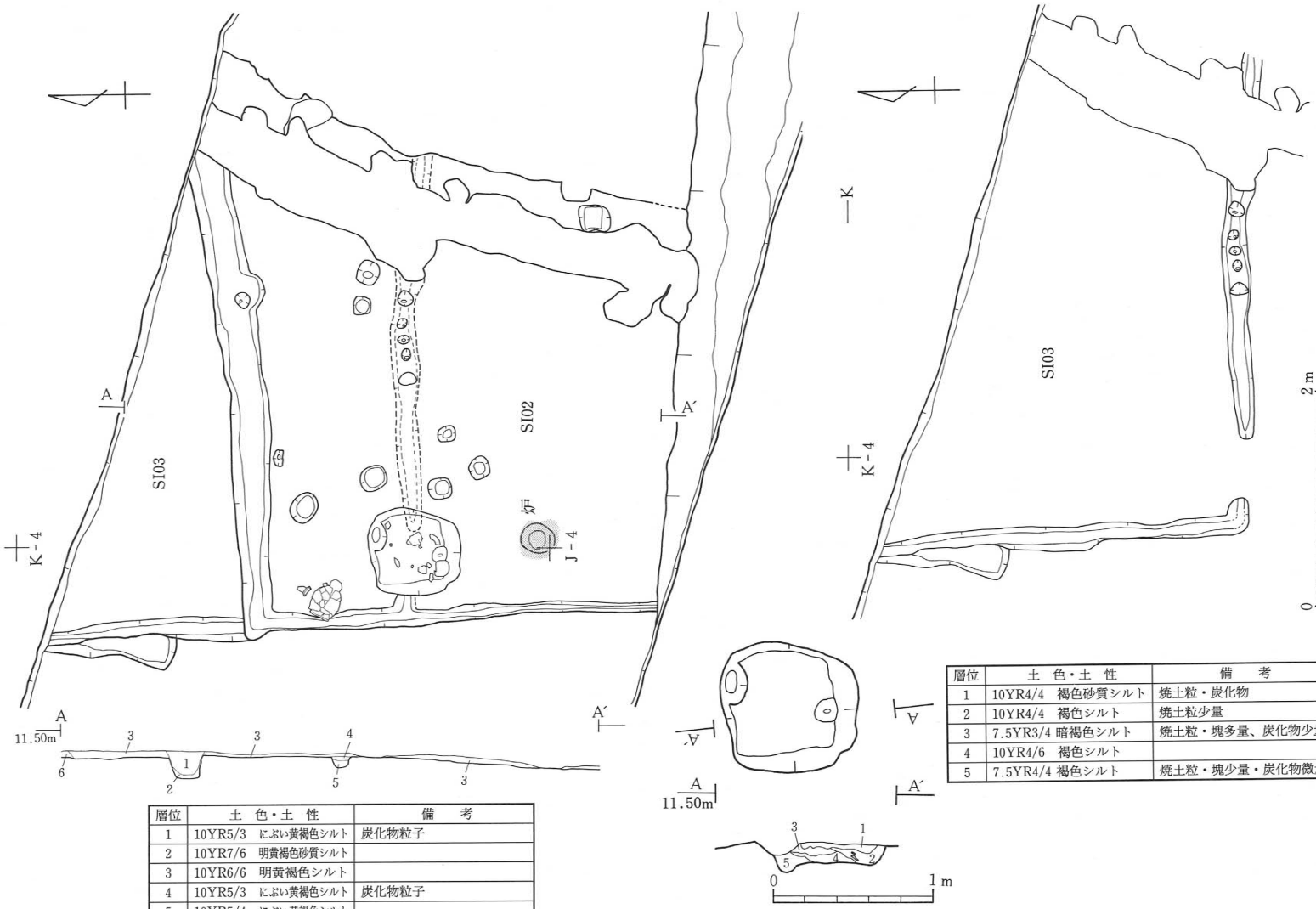
SI05（第11～14図）

Ⅳ区西部（D－16区）に位置し、中世の柱穴と重複する。北部は、天地返しにより削平されている。規模は不明確であるが、約3.3m×2.6mと推定される。形状は長方形で、東壁が張り出している。壁高は最大15cmを測る。カマドや炉は確認できない。ピットは3個検出したが、



第8図　ＳＩ－01出土遺物

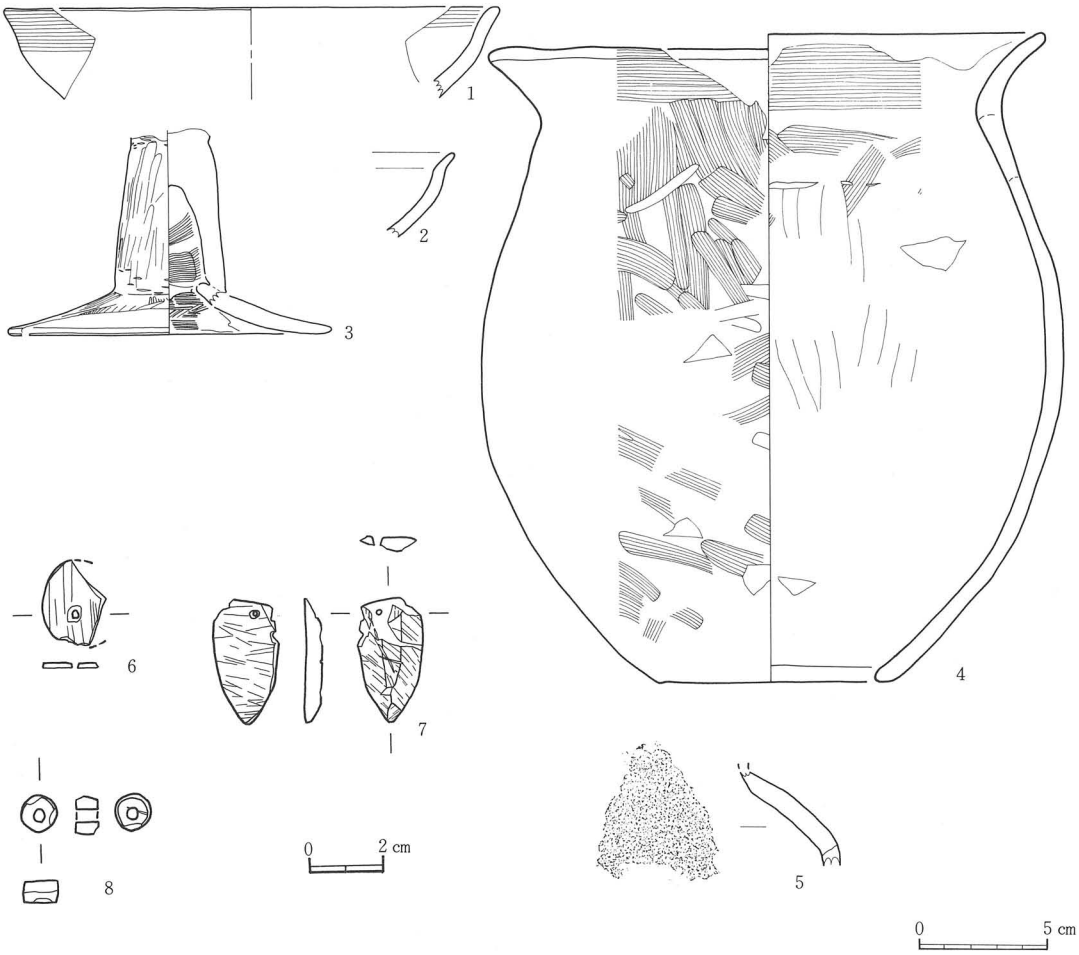
14～16：½



層位	土　色・土　性	備　　考
1	10YR5/3　にぶい黄褐色シルト	炭化物粒子
2	10YR7/6　明黄褐色砂質シルト	
3	10YR6/6　明黄褐色シルト	
4	10YR5/3　にぶい黄褐色シルト	炭化物粒子
5	10YR5/4　にぶい黄褐色シルト	
6	10YR7/6　明黄褐色シルト	

層位	土　色・土　性	備　　考
1	10YR4/4　褐色砂質シルト	焼土粒・炭化物
2	10YR4/4　褐色シルト	焼土粒少量
3	7.5YR3/4 暗褐色シルト	焼土粒・塊多量、炭化物少量
4	10YR4/6　褐色シルト	
5	7.5YR4/4 褐色シルト	焼土粒・塊少量・炭化物微量

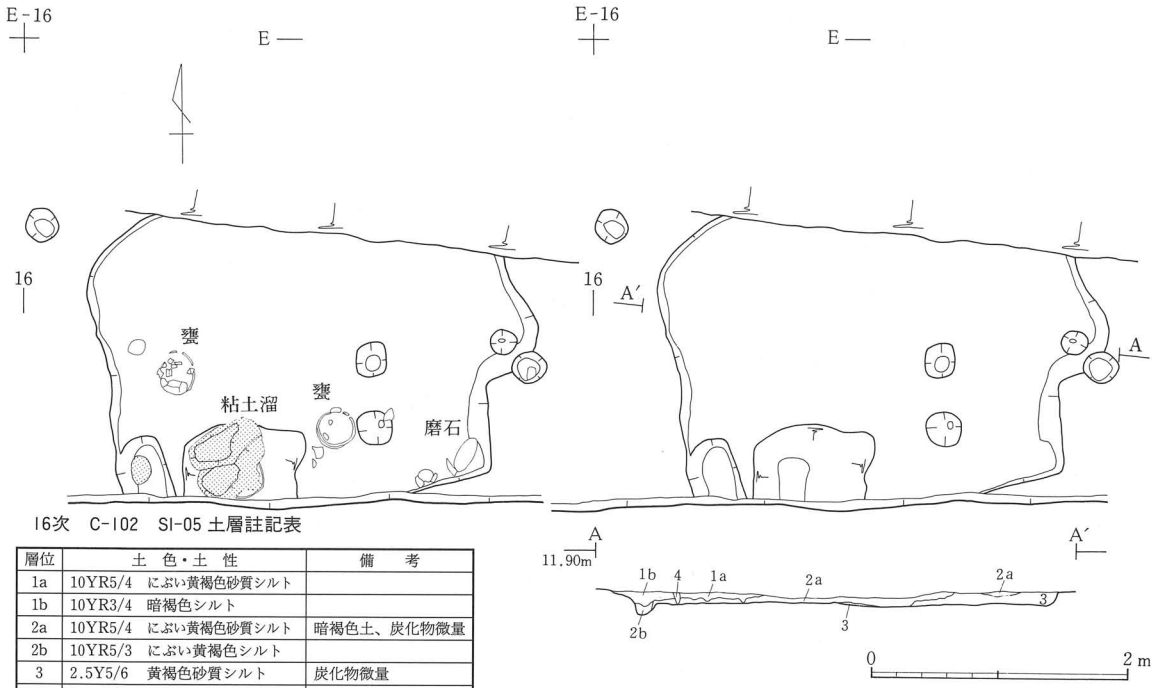
第9図　SI—02・03、平面・断面図



第10図　ＳＩ―02出土遺物　6～8：½

柱穴かどうか不明である。なお、P_3より坏の完形品が出土している。南西コーナーに２基の土坑を検出した。いずれも内部に粘土が堆積しており、特に、１号土坑では溢れ出る程の状況を呈し、粘土中に須恵器甕の下半部が出土している。おそらく、粘土の受皿や捏ね鉢に転用されたものであろう。壁溝はなく、東側の床面の一部に貼床が認められた。この遺構は、通常の住居跡ではなく、竪穴遺構であり工房や作業場の性格が考えられる。

出土遺物には、土師器坏・甕、須恵器甕、据え置きの磨石（擦痕あり）がある。高坏は出土していない。遺物は南半部に偏在し、特に粘土（第１土坑）の周辺より多く出土している。また、出土した粘土について、陶芸家大場拓俊氏に焼成実験していただいた。その結果、「粘土中に粒径の比較的揃った砂粒を含み、その混入量は約10％で意図的に混入したとみられる。腰のある弾力性の強い特性をもち、単身でも土器製作が可能である」との指摘をいただいた。従っ



16次　C-102　SI-05 土層註記表

層位	土　色・土　性	備　　考
1a	10YR5/4　にぶい黄褐色砂質シルト	
1b	10YR3/4　暗褐色シルト	
2a	10YR5/4　にぶい黄褐色砂質シルト	暗褐色土、炭化物微量
2b	10YR5/3　にぶい黄褐色シルト	
3	2.5Y5/6　黄褐色砂質シルト	炭化物微量
4	10YR4/4　褐色砂質シルト	

第11図　ＳＩ ―05平面・断面図（網点は粘土）

て、この粘土は土器製作用に貯蔵されていた可能性が強い。同様の粘土は、後述する SK06 でも出土している。遺物の接合関係では、甕（第 12 図 6）が SK12 のものと接合した。

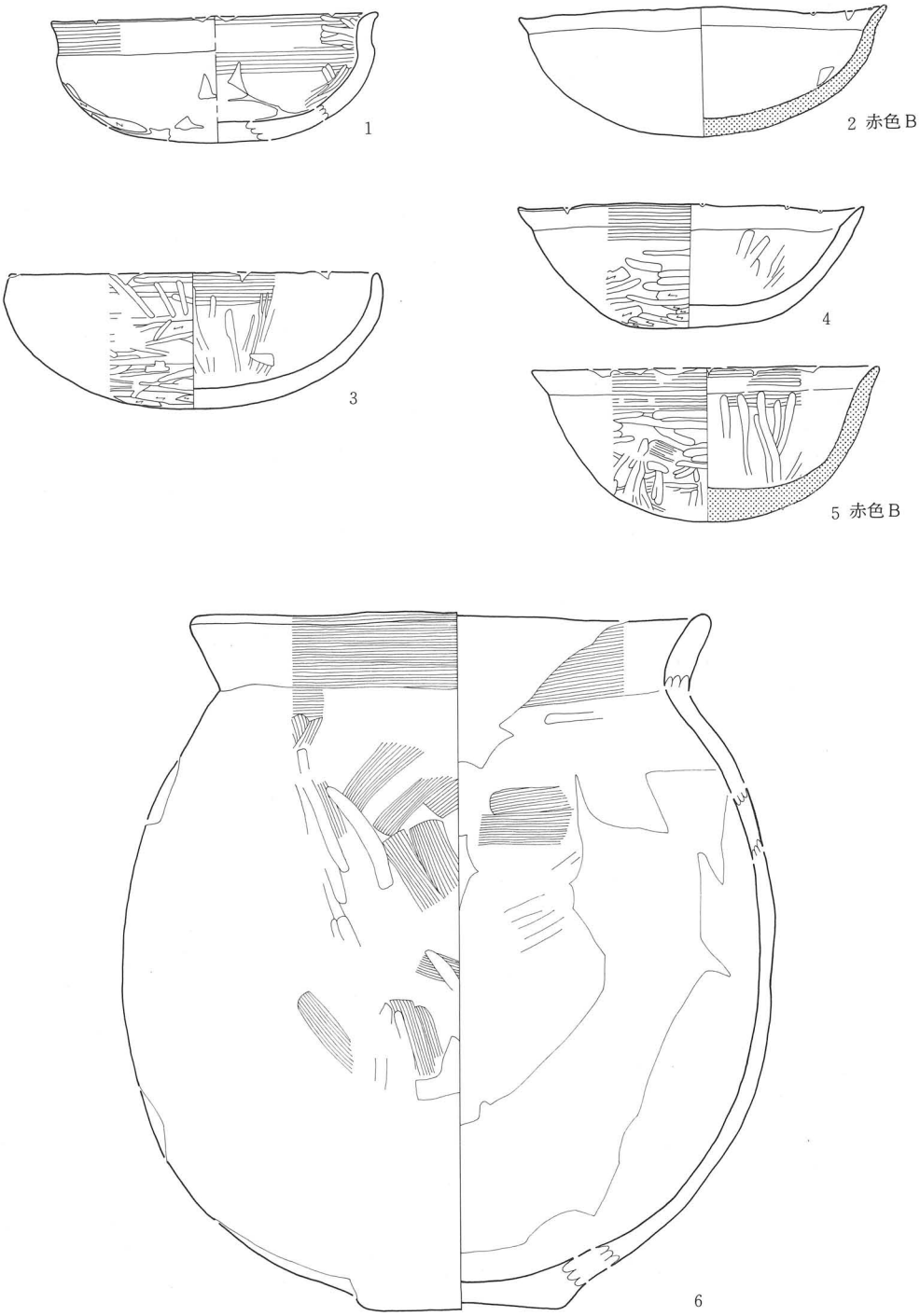
SI06（第 15・16 図）

Ⅳ区中央部（D－17 区）に位置し、中世の柱穴と重複する。北部は、天地返しや電柱坑で撹乱を受けている。しかし、床面は失われたものの、コーナー付近のプランは確認できた。規模は不明だが、北壁 6.2 m 以上、西壁 4.2 m 以上を測る。第 16 次調査で最も規模の大きいものである。壁高は、保存の良い部分で 27 cm を測る。カマドや炉は確認できない。北部で柱穴 1 個が検出され、深さ 51 cm を測る。北東コーナー付近で、貯蔵穴北半部を検出した。深さは 69 cm である。西壁で壁溝を検出した。

出土遺物には、土師器坏・高坏・複合口縁壺・甕、須恵器壺・甕、石製模造品（3 点）、刀子（2 点）、フレーク、軽石がある。西壁寄りの床面と貯蔵穴の炭層から比較的多く出土している。須恵器は、埋土上部より甕 2 点、同下部より壺 1 点が出土し、いずれも破片である。

SI07（第 17～19 図）

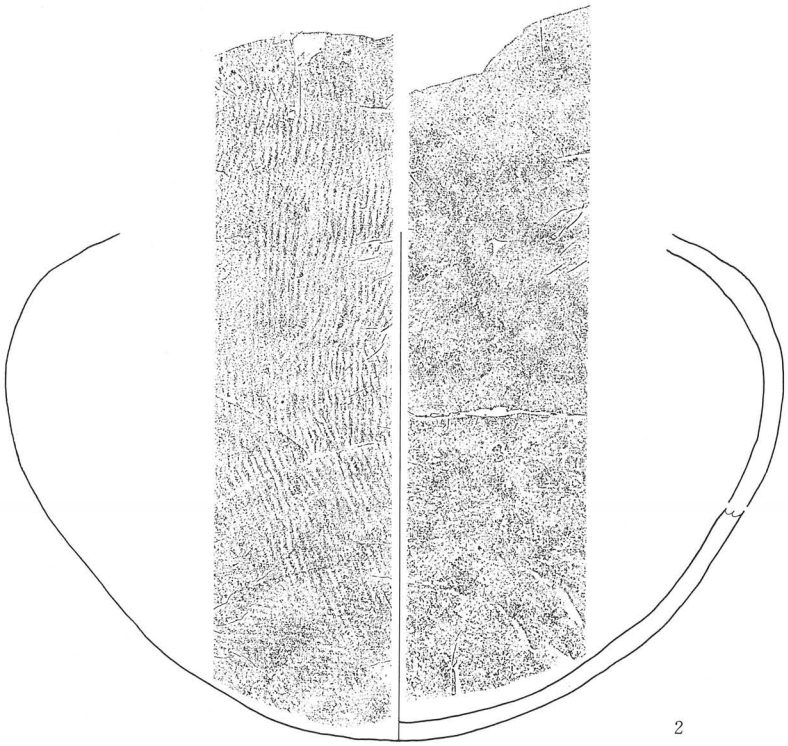
Ⅳ区東端部（D－20 区）に位置し、大部分を天地返しによって撹乱を受け、北部で著しい。SI10 と重複するが、この部分にも天地返しが上部に及んでおり、不明確である。おそらく、SI10 が新しいものと考えられる。また、中世の柱穴とも重複する。この住居跡は、炭化材や焼土が



第12図　ＳＩ―05出土遺物（１）

0　10cm

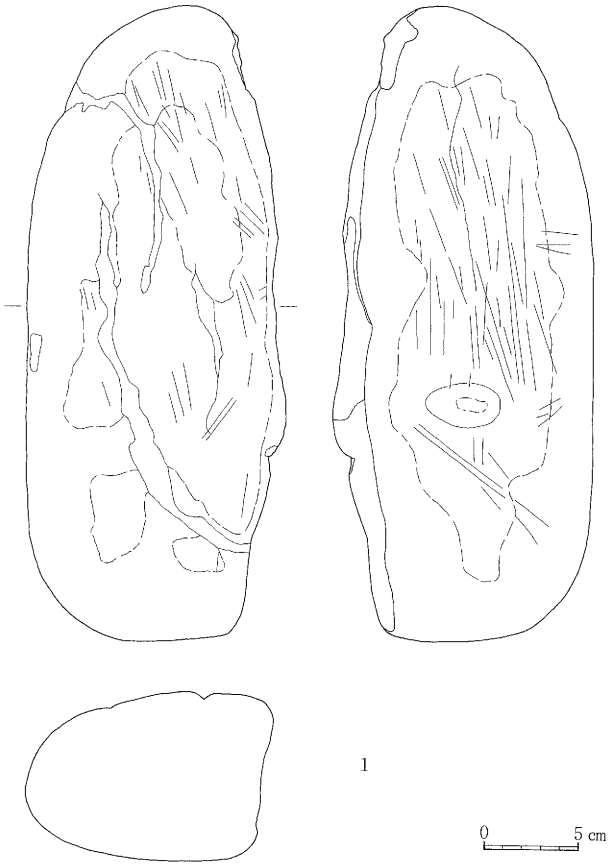
1



2

0　　10cm

第13図　ＳＩ－05出土遺物（２）



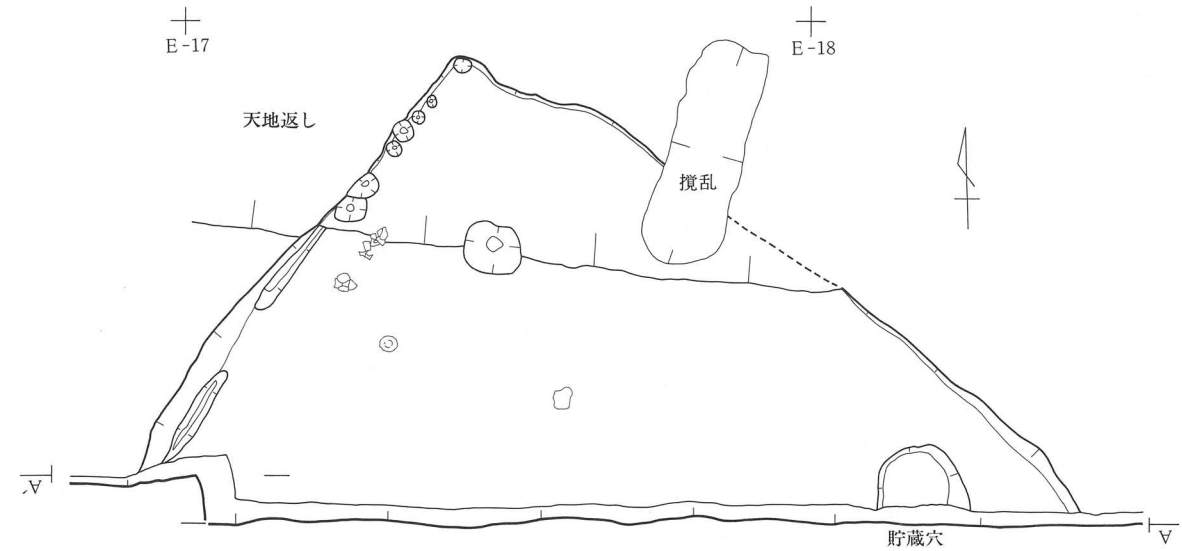
第14図　ＳＩ―05出土遺物（３）

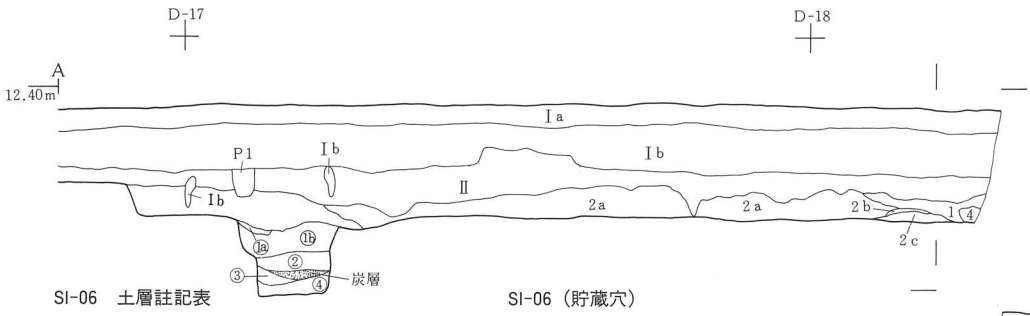
検出されたことから焼失住居であることがわかる。炭化材２点を樹種同定分析している。規模は不明だが、東西約 5.6 m と推定できるし、西辺は 4.2 m 以上とみられる。形状は方形と考えられる。壁高は、保存の良い部分で約 25 cm を測る。西壁寄りで、P_1と P_3の中間に炉跡を検出した。ピットは４個検出したが、P_1～P_3が柱穴である。深さは、P_1 32 cm・P_2 41 cm・P_3 51 cm を測る。壁溝は東壁と西壁で検出したが、西壁側は２条認められ、内側の壁溝に焼土の流入が確認できた。内側の壁溝が新しい。また、北西コーナー付近に土坑が検出された（深さ 22 cm）が、重複関係は明らかではない。土坑が住居跡より古いものと思われる。床面は傾斜しており、南北で最大 20 cm の比高差がある。この住居跡は改築されたか、さらに古い住居跡が存在していたものと考えられる。

出土遺物には、土師器坏・壺・甕があり、赤彩のある高坏片も出土している。このうち、第 19 図１は、外側の古い壁溝内から出土した坏である。

SI08（第 20～22 図）

Ⅳ区中央部（D－18 区）に位置し、SD01、 SK06・11 に切られる。また、北半部は天地返し

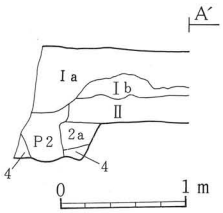




SI-06　土層註記表

層位	土　色・土　性		備　　考	層位	土　色・土　性		備　　考
1	10YR5/6	黄褐色砂質シルト	黄橙色土を斑状に混入	⑪a	10YR7/8	黄橙色砂質シルト	
2a	10YR5/4	にぶい黄褐色砂質シルト		⑪b	10YR6/6	明黄褐色砂質シルト	灰白色土が斑状・炭化物粒子微量
2b	10YR5/6	黄褐色砂質シルト	炭化物粒子多量	②	10YR3/1	黒褐色砂質シルト	明黄褐色土・焼土粒が斑状に混入
3	10YR5/4	にぶい黄褐色粘質シルト	明黄褐色土が斑状・軽石混入	③	10YR6/8	明黄褐色砂	
4	10YR5/8	黄褐色シルト	にぶい黄橙色土が斑状に混入	④	2.5Y7/3	浅黄色砂	
P2	10YR5/2	灰黄褐色シルト	明黄褐色土を斑状に混入中世	P1	10YR4/1	褐灰色粘土質シルト	明黄褐色土が混入

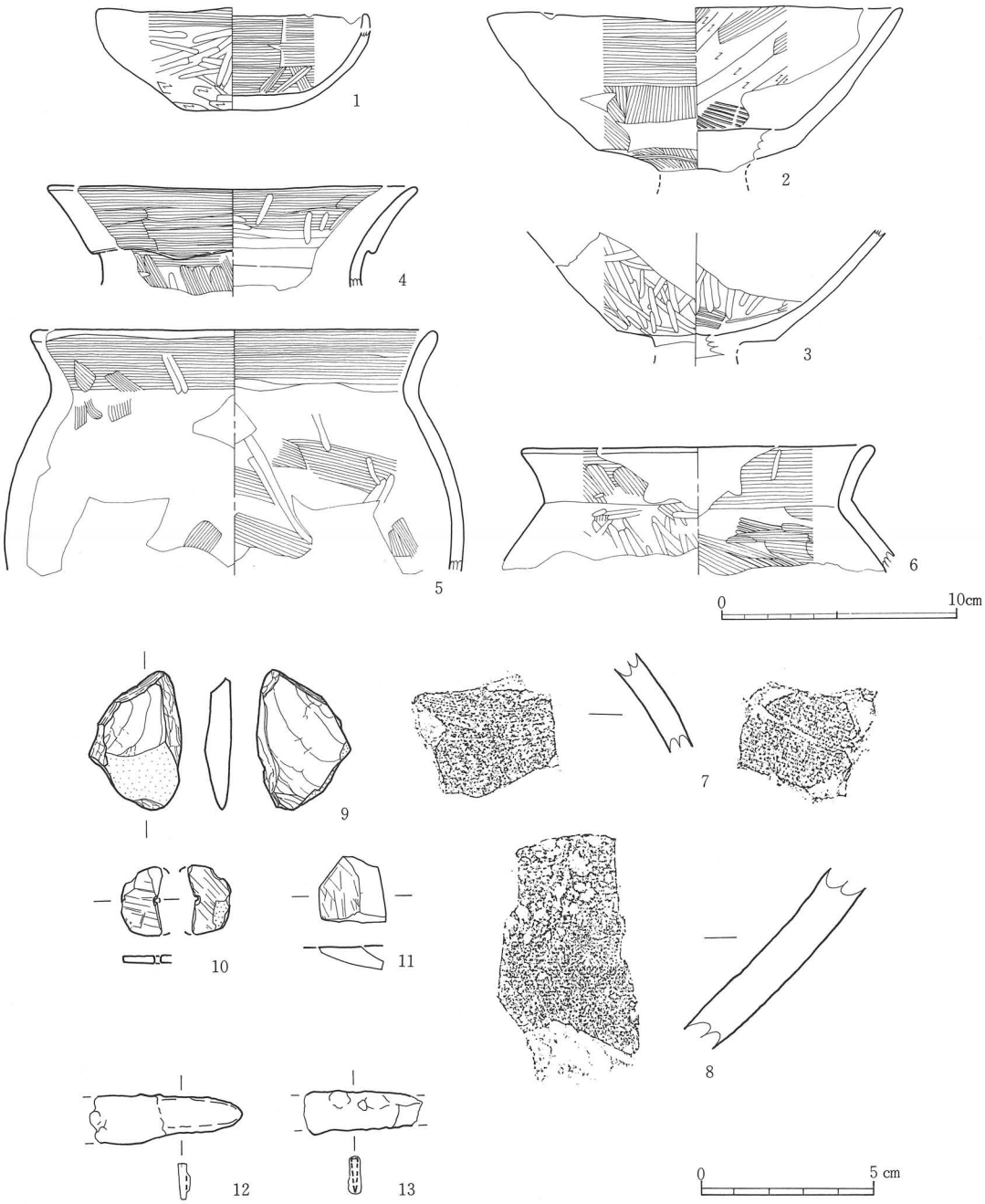
SI-06（貯蔵穴）



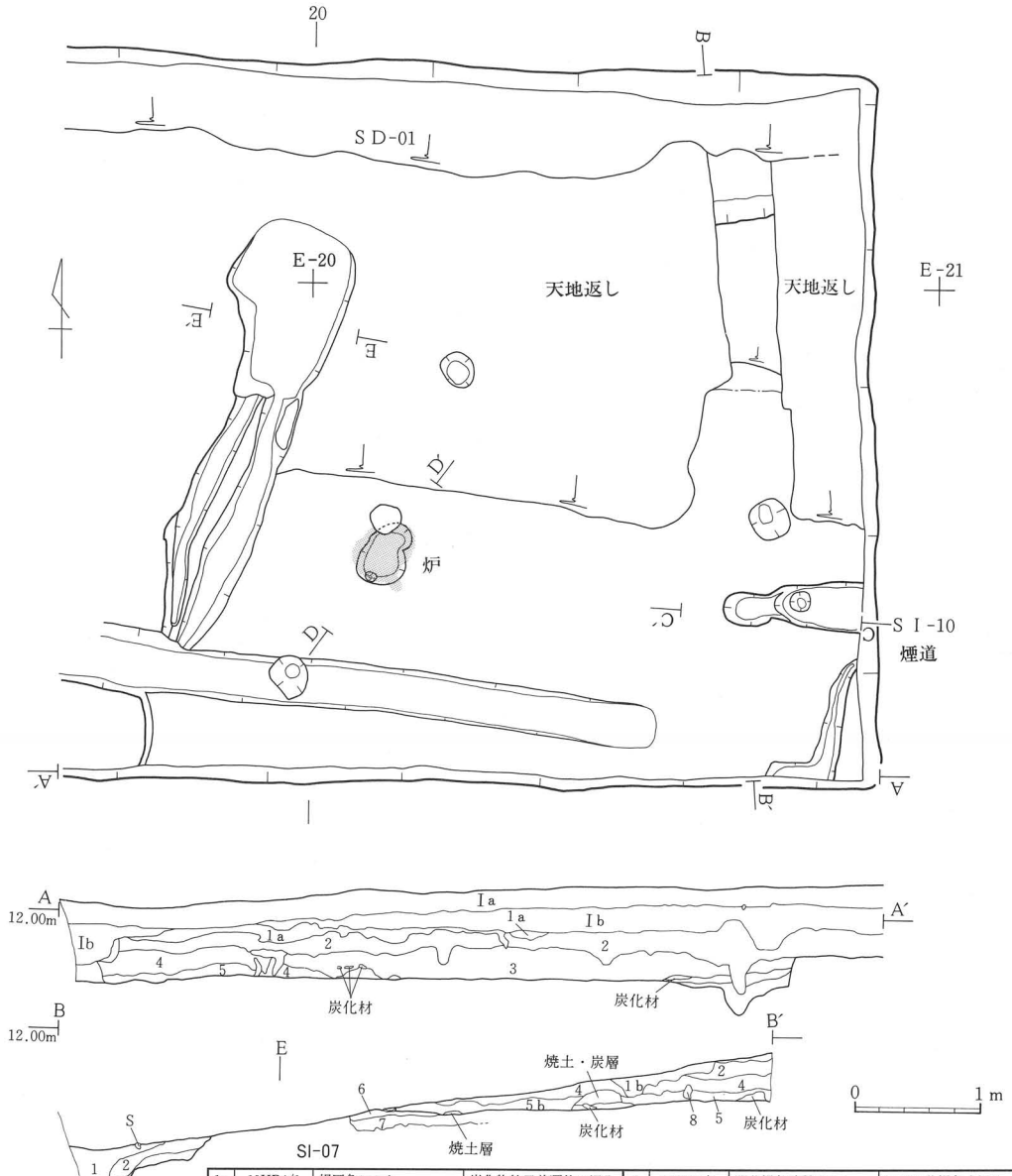
第15図　ＳＩ―06平面・断面図

により床面を失っている。規模は南壁約 4.45 m、 東壁 4 m 以上を測る。炉は北壁寄りで検出した。形状は不整楕円形を呈し、深さ約 14 cm を測る。北端部は削平されている。壁高は、最大約 21 cm を測る。柱穴ははっきりしないが、南東部のピットが柱穴と考えられる。ただ、深さ 12 cm と浅い。壁溝は、南壁と西壁で検出された。貯蔵穴の有無は不明である。

出土遺物には、土師器坏・甕、須恵器瑳・甕、敲石（擦痕もみられる）、敲打痕と磨面をもつ石器、石製模造品（15 点）、炭化米がある。他に弥生土器片・フレークが出土している。土師器甕の破片で、SK11 と接合するものがある。床面出土の坏（第21図２）も、 SI06 の１層出土破片と接合している。このことは、本住居跡より SI06 が古いことを示唆するものであろう。石製



第16図　ＳＩ－06出土遺物



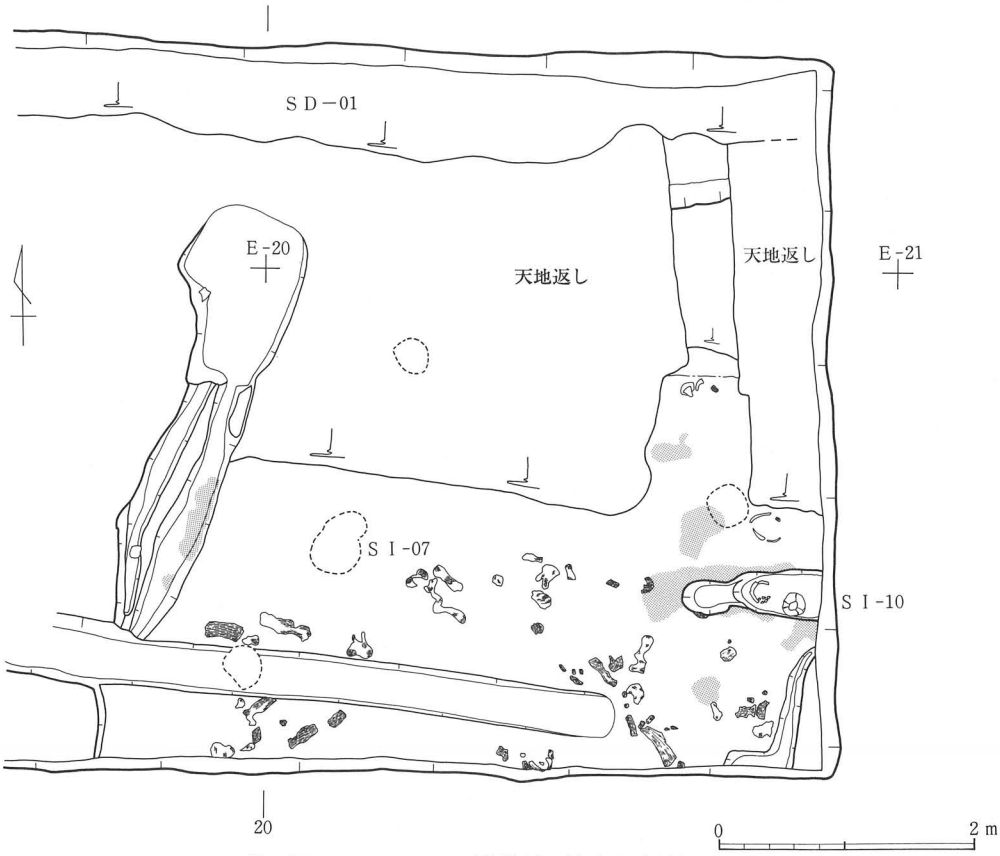
1a	10YR4/1	褐灰色シルト	炭化物粒子普遍的に混入	7	10YR6/6	明黄褐色砂質シルト	にぶい黄褐色土混入
1b	10YR4/2	灰黄褐色シルト		8	10YR6/8	明黄褐色	
2	7.5YR4/4	褐色シルト	炭化物粒子混入				
4	7.5YR4/3	褐色砂質シルト	炭化物粒子普遍的に混入				
5a	10YR3/4	暗褐色砂質シルト	炭化物粒子普遍的に混入				
5b	7.5YR3/4	暗褐色砂質シルト	炭化物、焼土斑状に混入				
6	10YR5/4	にぶい黄褐色砂質シルト	炭化物粒子混入				

SP-01

1	10YR4/4	褐色粘土質シルト	
2	10YR4/3	にぶい黄褐色粘土質シルト	
3	10YR6/8	明黄褐色砂質シルト	にぶい黄褐色部分的に混入

1	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色シルト	炭化物・焼土粒子、明黄褐色土混入	1		焼土		1	2.5Y4/4	オリーブ褐色シルト	炭化物・焼土粒子
2	10YR7/6	明黄褐色砂質シルト	焼土粒子混入	2a	5YR4/6	赤褐色砂	焼土多量、炭化物粒子混入	2	10YR5/8	黄褐色砂質シルト	炭化物粒子微量
3	5YR3/3	暗赤褐色シルト	炭化物粒子、焼土多量	2b	5YR4/4	にぶい赤褐色砂	焼土・炭化物粒子混入	3	10YR5/4	にぶい黄褐色砂質シルト	
4	10YR6/8	明黄褐色砂質シルト	炭化物・焼土粒子多量	3	10YR7/4	にぶい黄橙色砂	焼土・炭化物粒子混入	4	2.5Y6/8	明黄褐色砂質シルト	

第17図　SI 07・10平面・断面図



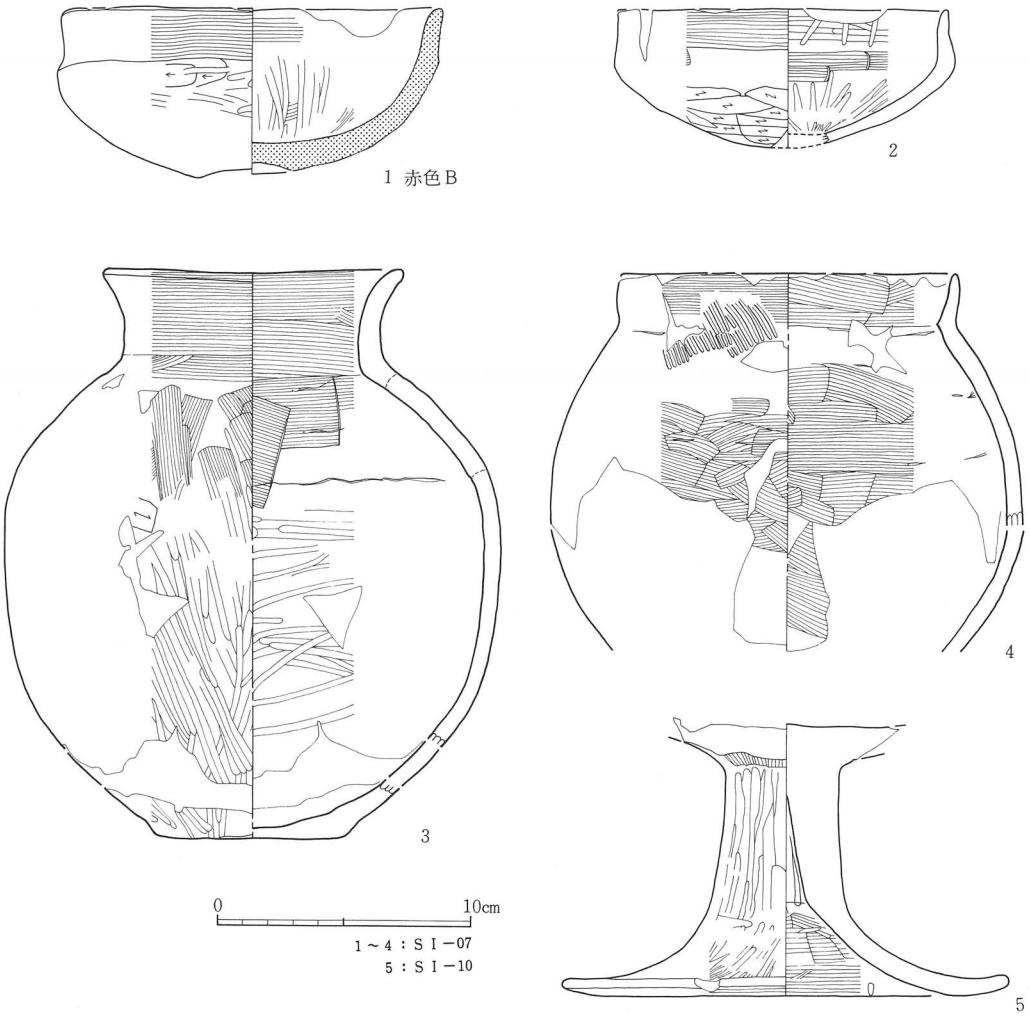
第18図　SI －07・10炭化材・焼土出土状況（網点は焼土）

模造品は完成品の剣形が埋土中出土であるが、他はすべて床面出土である。この床面出土品をみると、荒割段階のもの・側辺部に加工を加えるもの・さらに側辺部に加工を加えて整形段階に入ったもの（未成品）・製作途中で生じたフレーク・チップにおよそ分類できる。研磨段階のものはない。だが、石製模造品製作用と考えられる礫石器２点のうち、１点に磨面をもつものがあり、研磨工程がなされたことは確実であろう。住居内で模造品を製作したことは明らかであるが、出土量から考えて専業工房と理解するのは難しい。須恵器はいずれも埋土中のもので、瑕は TK208～23 頃とみられる。

SI09（第 23 図）

VI区南部（A・B－14 区）に位置し、SD13・16・柱穴など中世遺構群に切られる。また、中世の時期に、床面付近まで削平を受けている。従って、床面及び東壁壁溝の一部を検出するに留った。規模は不明だが、東壁 4.9 m 以上を測る。形状は方形を呈するものであろう。床面上で、ピット（深さ 5 cm）と土坑（深さ 13.5 cm）を検出した。カマド・炉は確認できない。

出土遺物は僅かで、高坏脚部片などである。



第19図　SI 07・10出土遺物

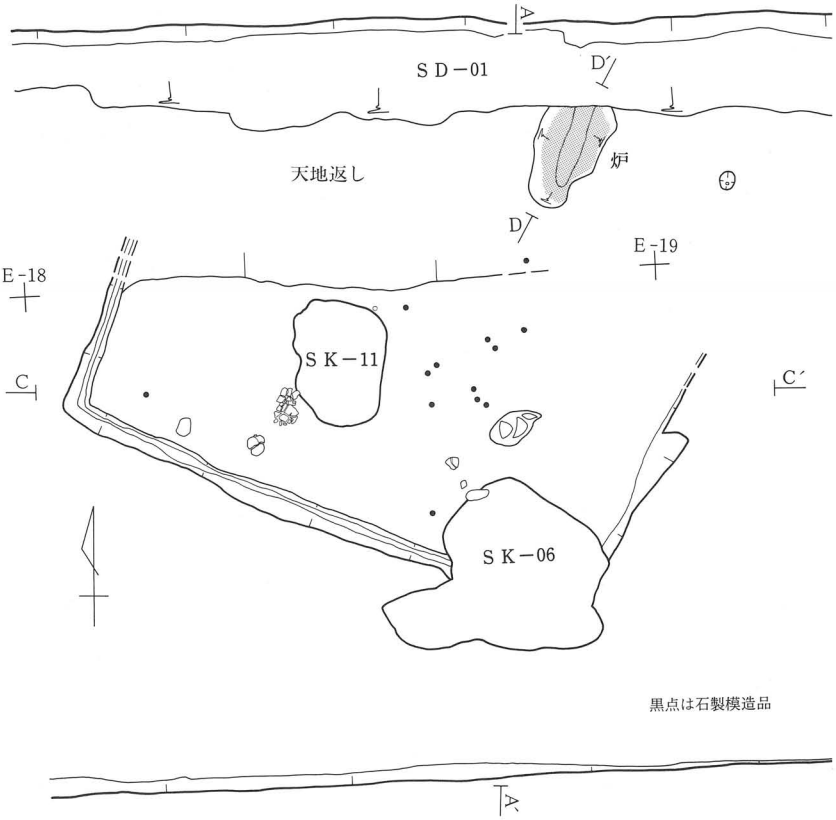
SI10（第17～19図）

Ⅳ区東端部（D－20区）に位置し、上部に撹乱を受け明確ではないが、SI07を切っているようだ。煙道部のみの検出で、主体は調査外（D－21区）にある。煙道部は、長さ1.1m・幅0.41mを測る。底面に段差があり、低い部分で高坏脚部が出土した（第19図5）。おそらく、支脚に転用されたものであろう。

出土遺物には、前述の高坏のほかに、埋土出土の甕（口縁部）がある。

SI11（第57・24図）

Ⅵ区北部（C－14・15区）に位置する。Ⅵ区の西壁に入れたサブトレンチで、住居の存在を確認したが、精査は行っていない。床面の一部と土師器や炭化材が検出された。



SI-08 土層註記表

層位	土色・土性	備考
1	10YR6/4 にぶい黄橙色砂質シルト	
2	10YR5/4 にぶい黄褐色砂質シルト	
3	10YR6/8 明黄褐色砂	
4	10YR5/6 黄褐色粘質シルト	SK-06
5	10YR6/3 にぶい黄橙色粘質シルト	SK-06
6	10YR6/4 にぶい黄橙色シルト	
7	10YR4/4 褐色シルト	
8	褐色シルト	

SD-01 土層註記表

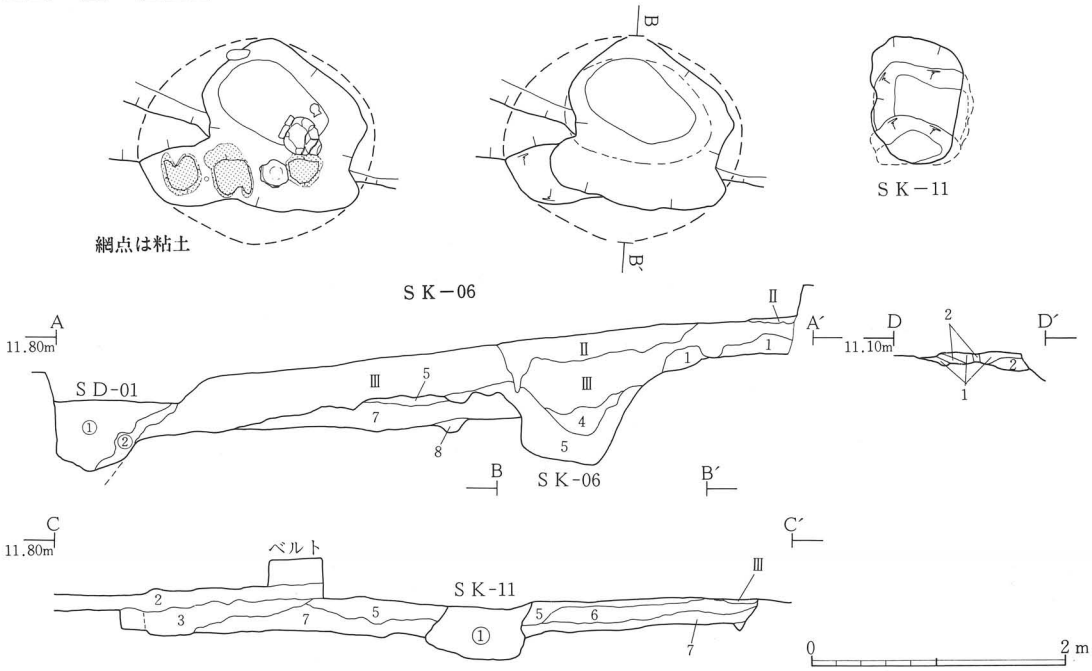
層位	土色・土性	備考
①	10YR3/4 暗褐色シルト	
②	10YR6/6 明黄褐色砂質シルト	

SK-11 土層註記表

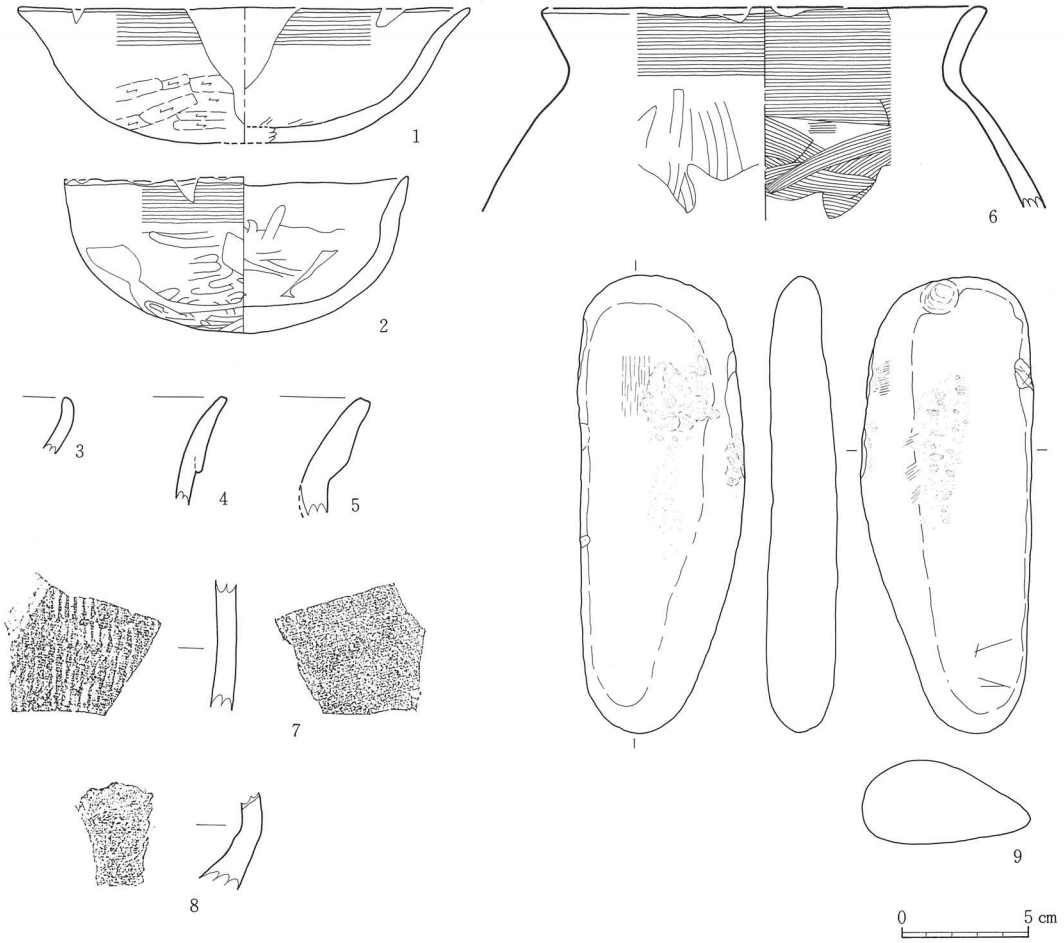
①	10YR6/4 にぶい黄橙色シルト	

SI-08 炉

1		焼土層
2	10YR7/3 にぶい黄橙色砂	焼土混入



第20図　SI－08、SK－06・11平面・断面図



第21図　ＳＩ―08出土遺物（１）

出土遺物には、土師器高坏・複合口縁壺・壺？がある。高坏は３点出土したが、床面出土は１点であり、外面が赤彩された脚部片である。複合口縁壺は、口縁部に凸帯を貼付する形態のものである。

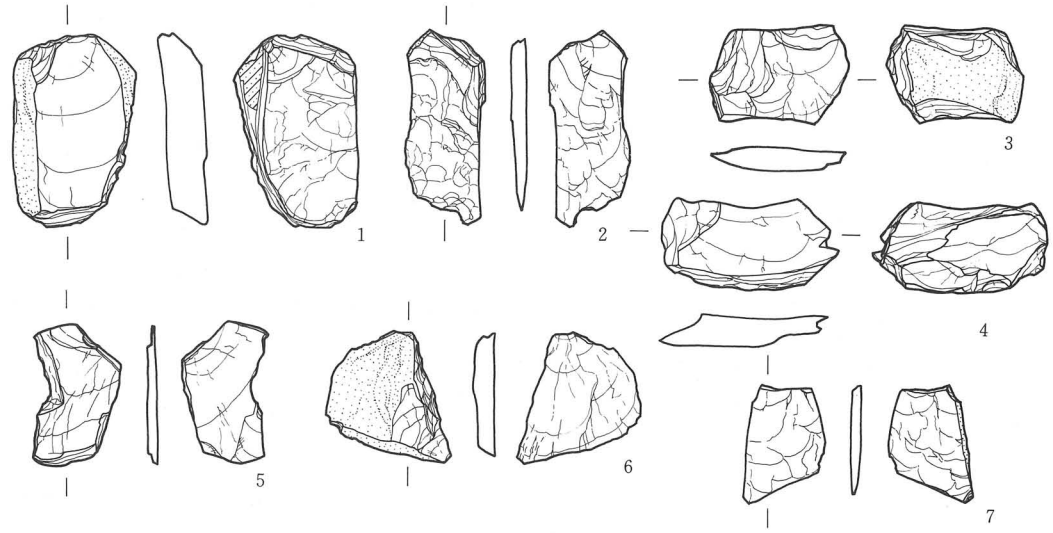
土坑跡（SK）

土坑跡は５基検出したが、この他に古墳時代の可能性のあるもの２基を含めて報告する。

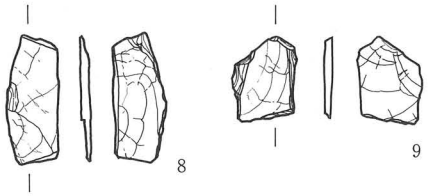
SK03（第25・26図）

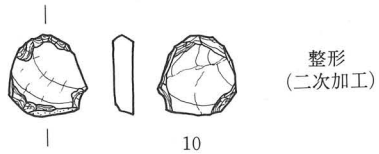
Ｉ区中央部(J－６区)に位置し、他の遺構との重複はない。不整楕円形を呈し、深さ約78 cmを測る。埋土中より甑（完形品）・高坏が出土している。また、西側に接して、浅いピット（深さ約13 cm）が検出され、内部に粘土の貯蔵が認められた。

SK06（第20・26図）



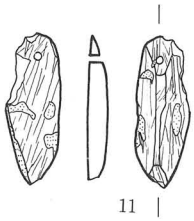
荒割・形割（側片部加工）



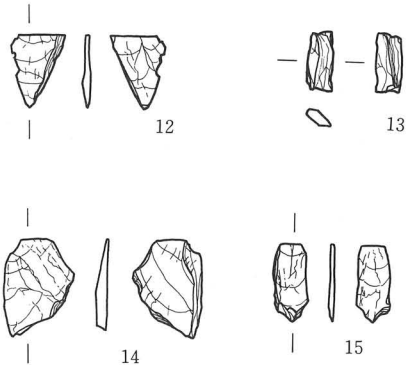


整形
（二次加工）

（研磨）

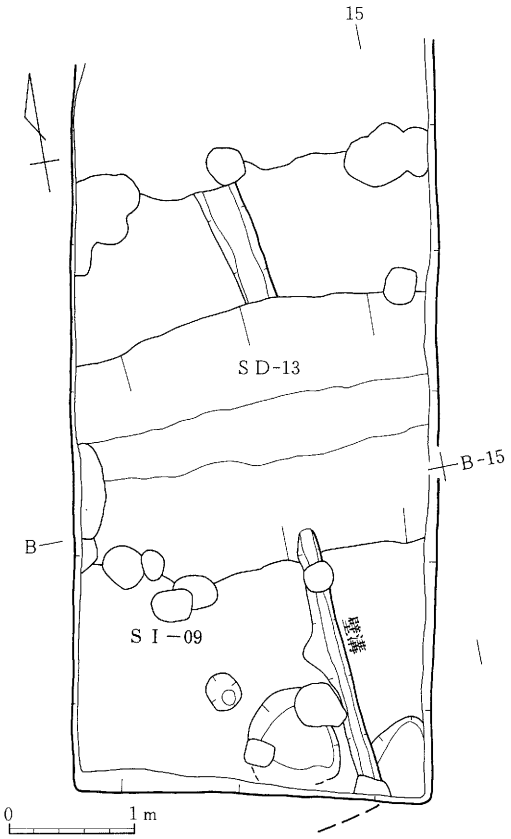


完成品



剥片・チップ

第22図　ＳＩ―08出土遺物（２）



第23図　ＳＩ—09平面図

Ⅳ区東部（D－18 区）に位置し、SI08 を切る。上部には天地返しにより削平を受けている。規模は、東西 1.82 m・南北 1.4 m・深さ 0.97 m を測るが、本来はもう少し大型であったと考えられる。形状は不整楕円形で、南壁はテラス状の軽い段をもつ。この段の部分に大きな粘土ブロックが 3 ケ所検出され、その周囲にも小ブロックが認められた。

出土遺物には、土師器璺・甕、須恵器器台・甕、石製模造品（円板未成品？ 1 点）、弥生土器 3 点がある。粘土脇で甕（底部付近）、粘土直上で器台片が出土した。ほぼ完形である土師器甕・璺は埋土 1 層に半ば埋まるような出土状況で、上半には基本層Ⅲ層起源とみられる黄褐色シルト層が堆積している（再堆積か）。なお、2 つの土器内より少量の炭化米が出土した。

SK07（第 27 図）

Ｉ区中央部（J－ 6 区）に位置し、SD05 と重複関係にあるが、新旧不明である。上部は天地返しにより削平され、保存状況は良くない。規模は、東西 3.5 m 以上・幅 0.8 m・深さ 0.12 m を測り、長方形を呈する。底部はほぼ平坦であり、ピットが 3 個検出された。中央のピットは約 31 cm と深く、他は深さ 5～7 cm である。SD02 と関連する可能性があるかもしれない。

出土遺物には、土師器坏片 1 点とフレーク（黒曜石） 1 点がある。

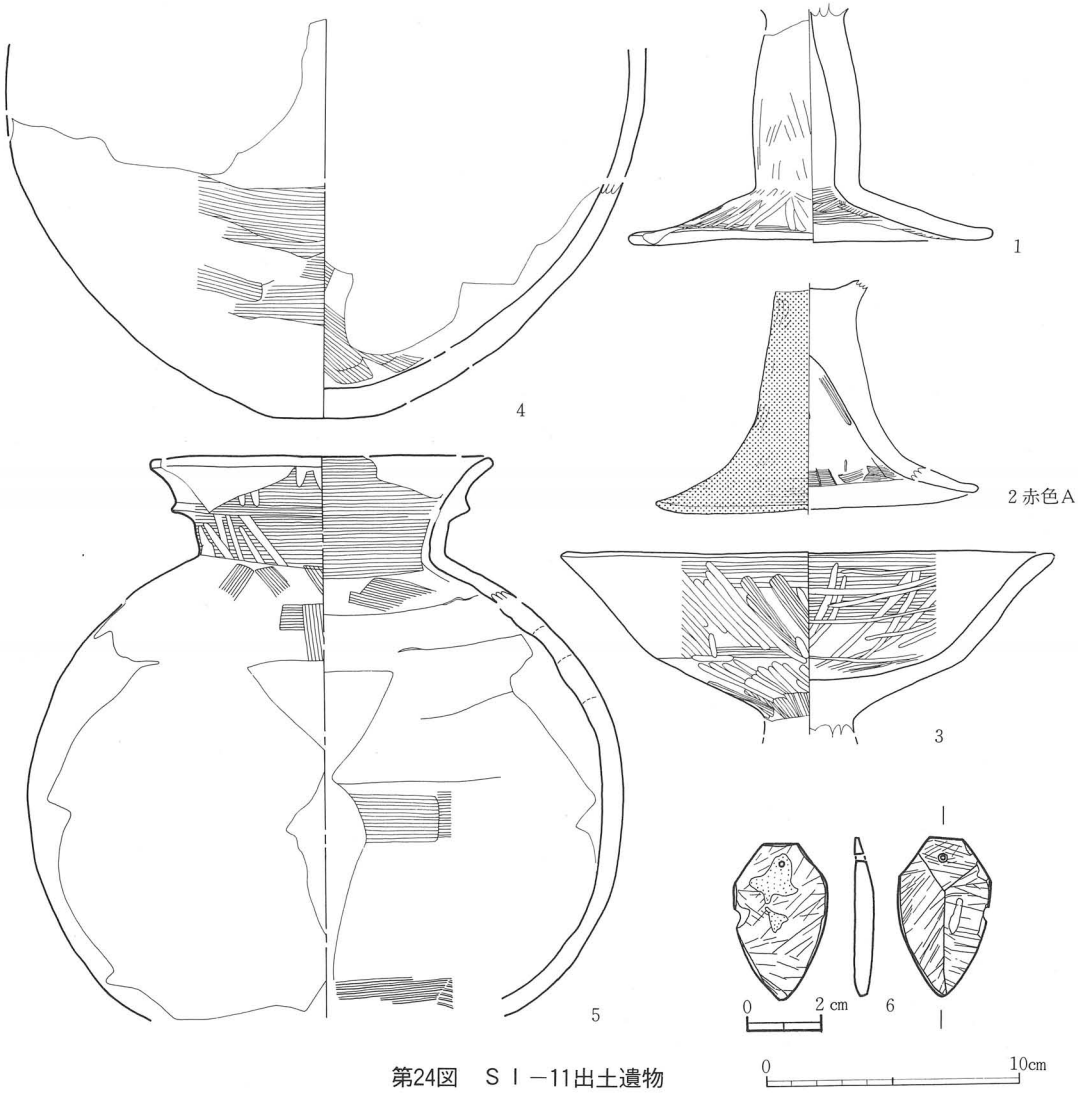
SK09（第 27 図）

Ｉ区中央部（J－ 5 区）に位置し、他の遺構との重複はない。しかし、この土坑自体が二つの土坑が重複したものであることが判明した。西側を a、 東側を b として区別した。規模は 2 基合わせたもので、東西 89 cm、 南北 57 cm 以上である。深さは、a が約 32 cm、 b が約 22 cm である。

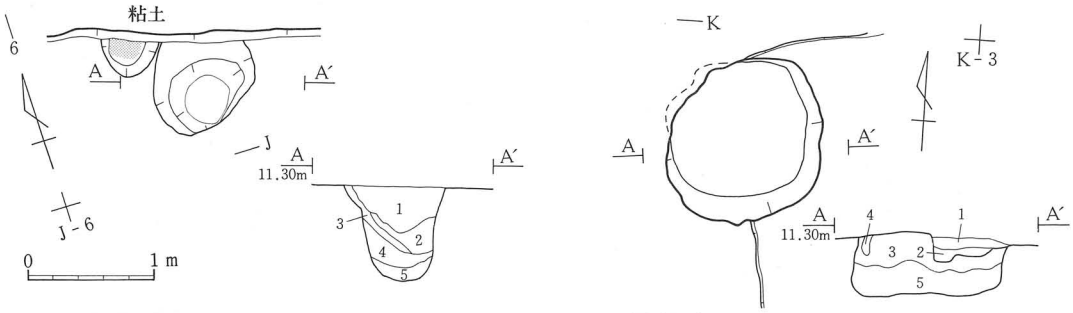
出土遺物はないが、埋土の特徴が SK03 などと類似することから、古墳時代のものと理解しておきたい。

SK11（第20・26図）

Ⅳ区東部（D－18 区）に位置し、SI08 を切る。規模は南北約 1 m、 東西 0.8 m、 深さ約 0.35



第24図　ＳＩ－11出土遺物



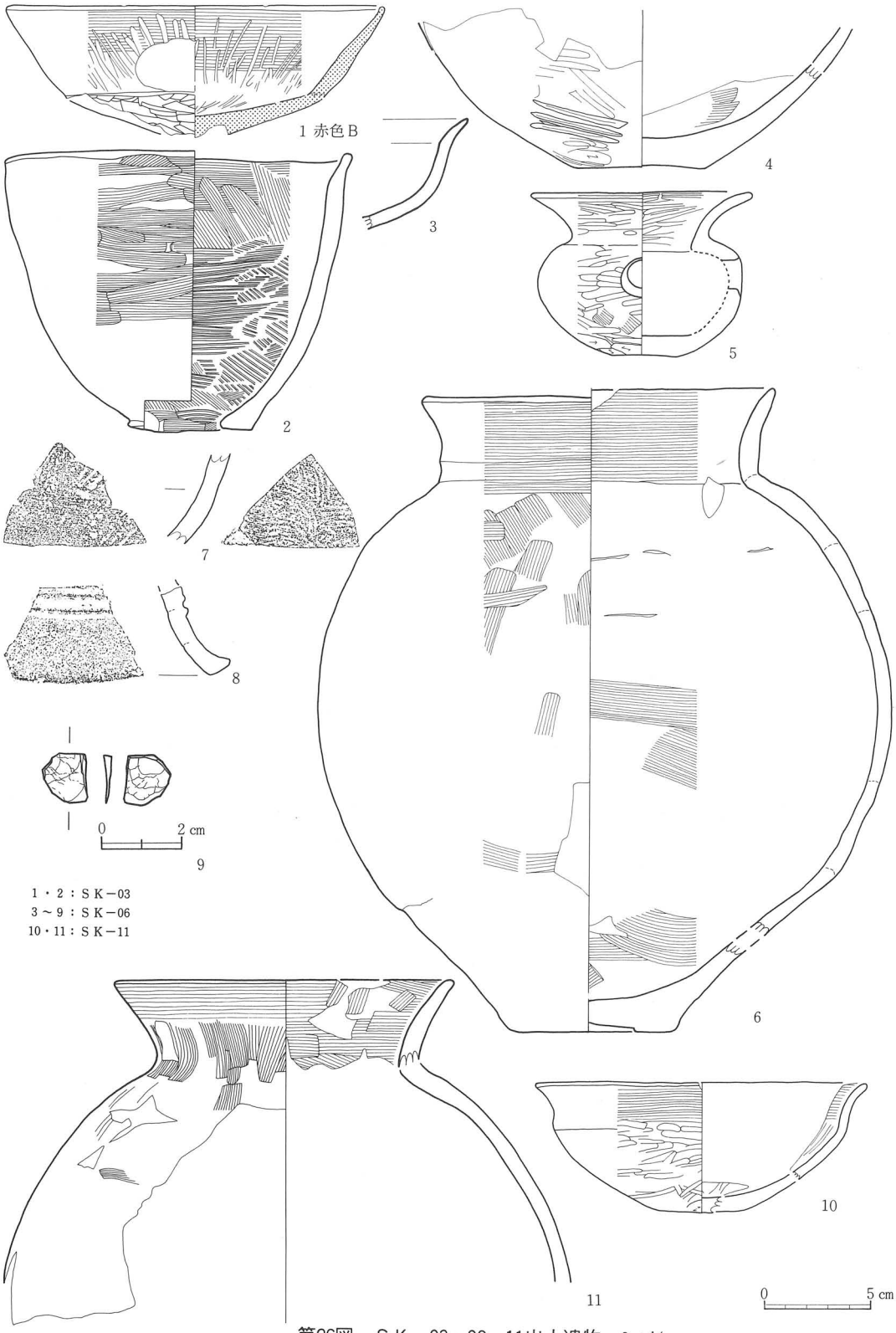
SK-03 土層註記表

層位	土色・土性		備考
1	10YR5/8	黄褐色粘土質シルト	炭化物粒子を普遍的に含有
2	10YR5/4	にぶい黄褐色シルト	炭化物粒子を普遍的に含有
3	10YR6/4	にぶい黄橙色シルト	炭化物粒子を普遍的に含有
4	10YR6/6	明黄褐色砂質シルト	
5	10YR6/2	灰黄褐色粘土質シルト	

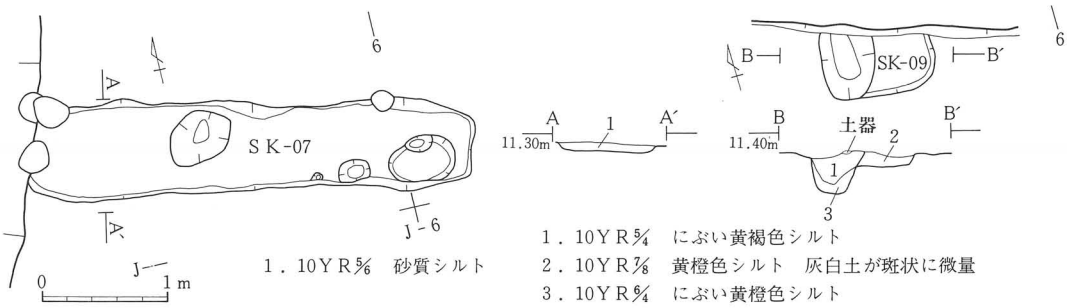
SK-14 土層註記表

層位	土色・土性		備考
1	2.5YR7/4	浅黄色シルト	SI-01
2	2.5YR7/3	浅黄色シルト	炭化物粒子混入　SI-01
3	2.5YR7/6	明黄褐色シルト	炭化物粒子混入　SK-14
4	10YR6/4	にぶい黄橙色シルト	炭化物粒子混入　SK-14
5	10YR7/6	明黄褐色シルト	炭化物粒子混入　SK-14

第25図　ＳＫ－03・14平面・断面図



第26図　SK−03・06・11出土遺物　9：½



第27図　ＳＫ－07・09平面・断面図

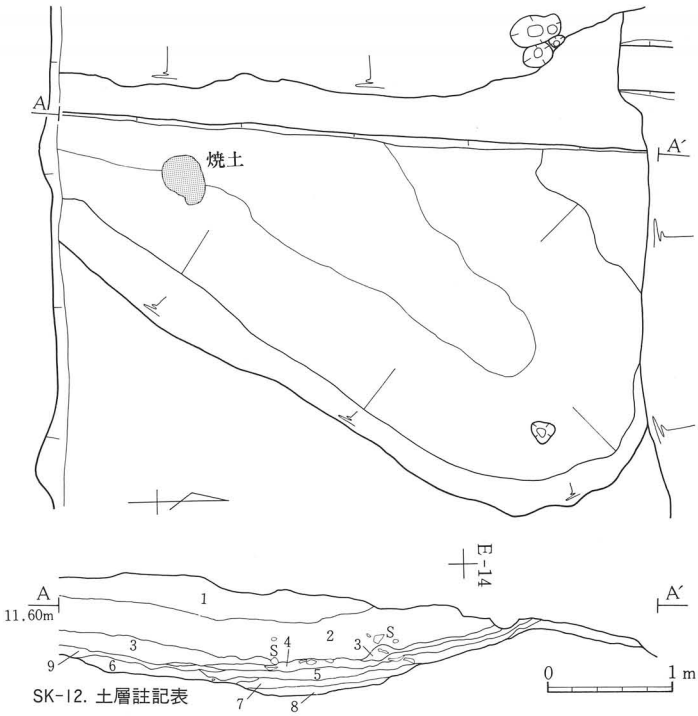
m を測る。形状は不整楕円形を呈し、底面は階段状に南側に下がる。南壁は一部オーバーハングしている。

出土遺物には土師器坏・甕がある。いずれも底面出土である。

SK12（第 28～31 図）

Ⅲ区中央部（D・E－13 区）に位置し、SD01・SD12 に切られる。上部は天地返しにより削平されている。本遺構は溝跡の可能性も残るが、土坑跡と理解しておきたい。規模は長軸で 5.3 m 以上、短軸で 2.7 m 以上、深さ 0.79 m を測る。埋土 1 層は、SD12 掘削時の排土の可能性もある。遺物は多量に出土したが、北部の 2 ～ 5 層に集中する。

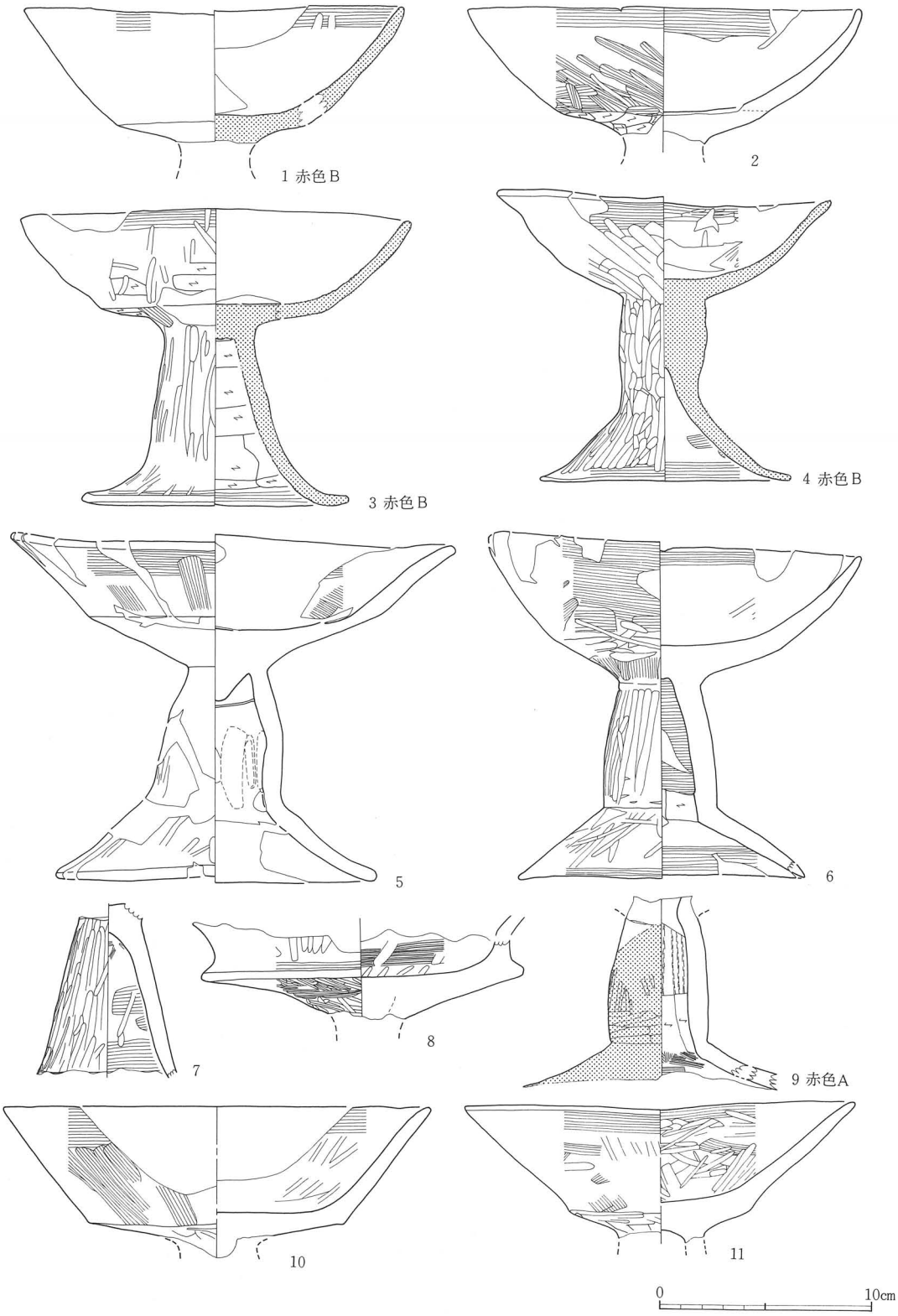
出土遺物には、土師器坏・高坏・小型壺・壺・複合口縁壺・甕・甑、須恵器甕（体部破片 4 点）、石製模造品（円板 2 点・剣形 1 点・原石？ 2 点）、有孔砥石（小型）1 点、黒色軽石（多孔質）3 点、骨片・粘土ブロック・鉄滓 2 点がある。また、弥生土器 9 点、剝片 4 点（黒曜石 2 点）が出土している。破片集計を行っていないが、土師器坏・高坏・



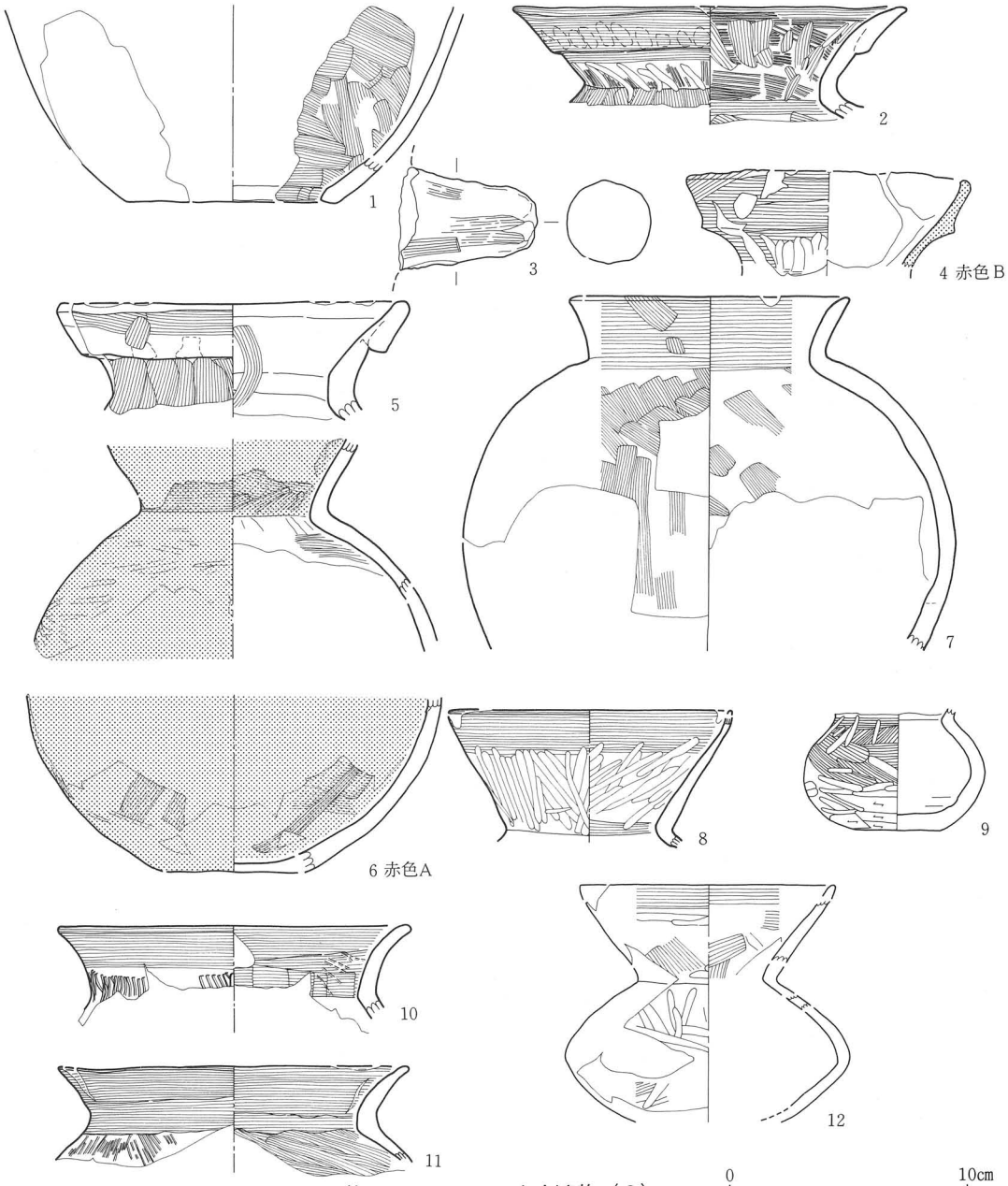
SK-12. 土層註記表

層位	土　色・土　性		備　考
1	10YR4/4	褐色砂質シルト	炭化物
2	10YR3/4	暗褐色シルト	炭化物多量
3	10YR4/3	にぶい黄褐色砂質シルト	
4	10YR2/2	黒褐色炭	骨片・焼土少量
5	10YR4/4	褐色シルト	炭少量
6	10YR2/3	黒褐色シルト	焼土・炭多量
7	10YR5/4	にぶい黄褐色粘土質シルト	炭化物少量
8	10YR4/4	褐色砂質シルト	炭化物微量
9	10YR4/4	褐色シルト	炭化物微量

第28図　ＳＫ－12平面・断面図

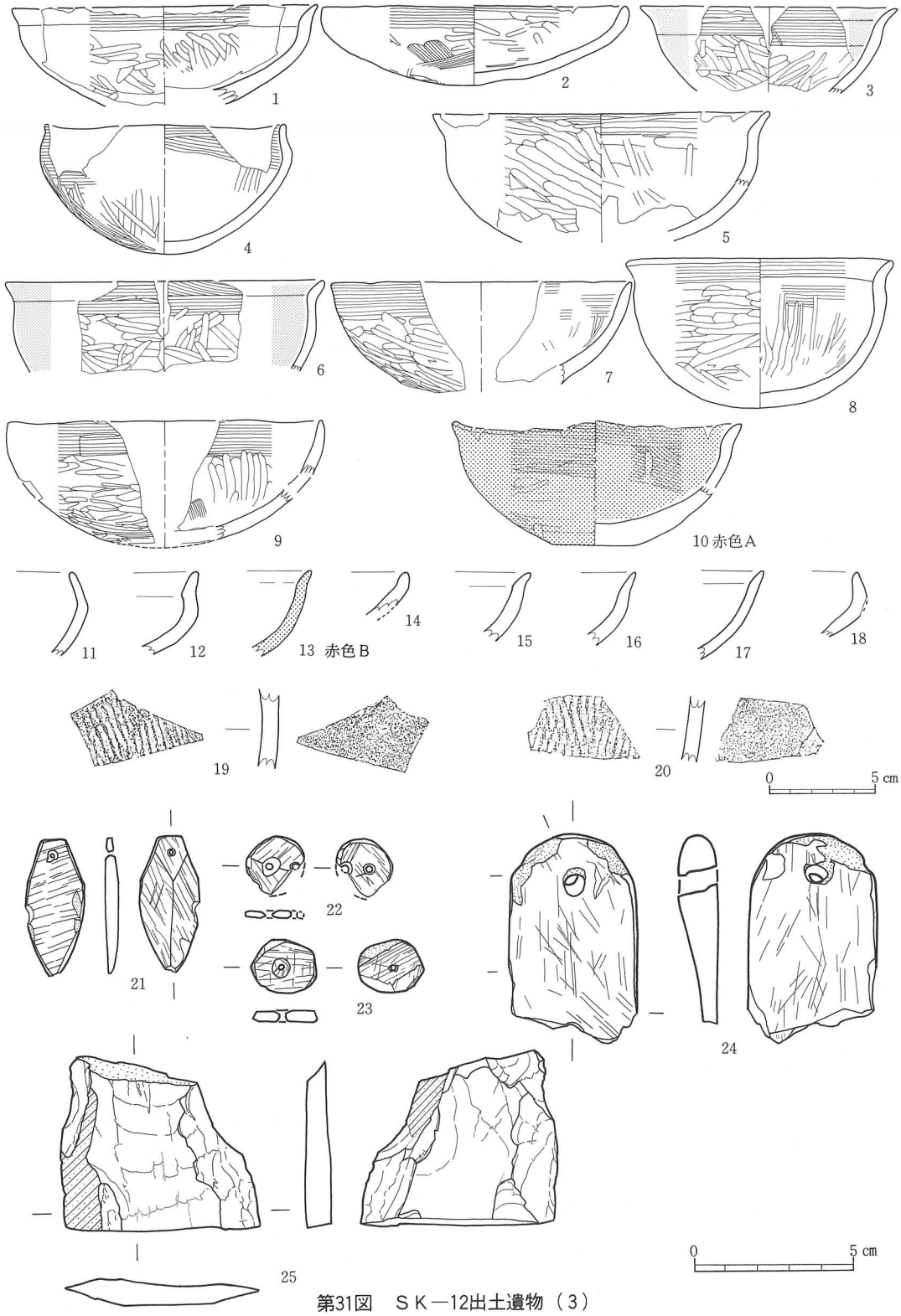


第29図　ＳＫ－12出土遺物（１）



第30図　ＳＫ―12出土遺物（２）

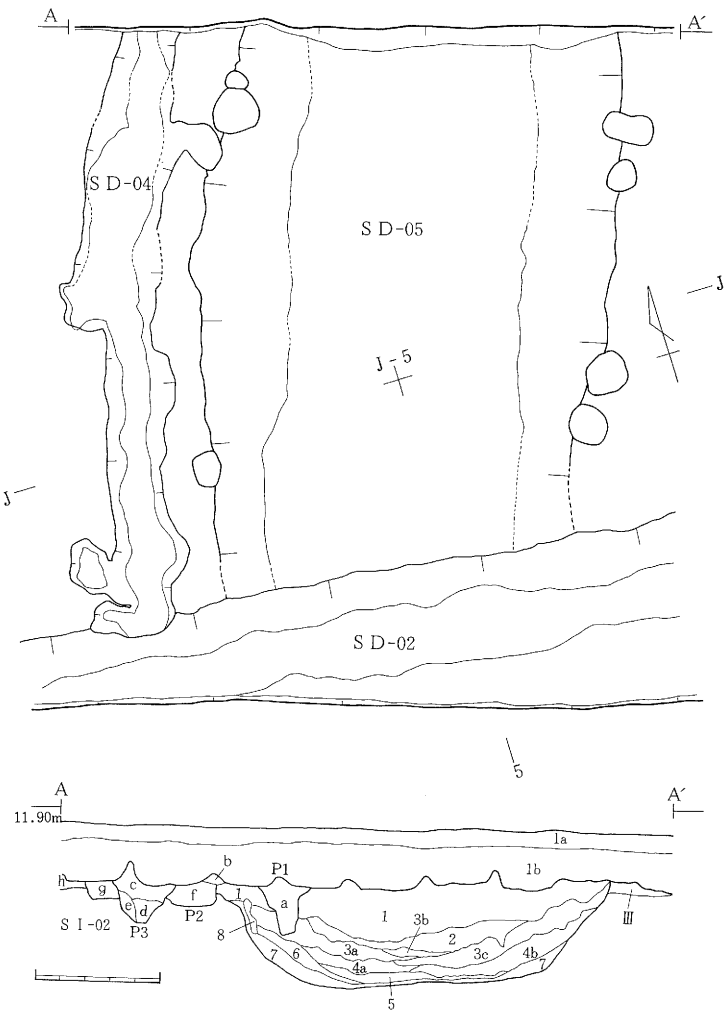
小型壺が圧倒的に多く、甕は少なく、甑は僅か２片である。坏・高坏・壺は外面を赤彩するものや高坏などで器表に限らず、胎土も赤色～橙色を呈するものが目立つ。坏には両面黒色処理をしたと思われるもの２点、高坏の脚部片には、坏部内底面が残存し黒色を呈しているもの(第29図７)がある。また、第29図９は高坏の坏部が接合面で剝離しているものだが、この先端には被熱の痕跡が認められる。融解した鉄の付着は認められないことから、羽口に転用されたも



第31図　ＳＫ－12出土遺物（３）

のかは不明である。最も注目したい遺物は、２層から出土した鉄滓である。この鉄滓は鍛冶滓と思われ、遺跡内で鉄器製作が行われていたことを物語るものであろう。すぐ北側の第14次調査地点でも、溝跡(SD07)より１点鍛冶滓と思われるものが出土している。出土土器は、２層＋４層、４層＋５層で接合関係が認められる。３層では土器出土量が少なく、他の層との接合関係は認められない。いずれにしろ、短期間のうちに廃棄され遺物群と考えられる。

これらの遺物は、出土土器の器種の偏在性や赤彩・黒色処理の土器、そして本遺跡で初めて確認した把手付甑の存在（第30図３）などから、祭祀行為が付近で行われSK12に廃棄されたものと考えられる。祭祀行為が、鉄器製作に関連するものか、どのような性格の工人集団が存在したかは今後の課題である。この点、把手付甑の評価がポイントになるかもしれない。



P3 土層註記表

層位	土色・土性	備考
c	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト	明黄褐色粒子混入
d	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト	明黄褐色土斑状
e	10YR6/8 明黄褐色シルト	灰黄褐色混入

SI-02 土層註記表

層位	土色・土性	備考
g	10YR5/6 黄褐色シルト	炭化物粒子混入
h	10YR6/6 明黄褐色シルト	

SD-05 土層註記表

層位	土色・土性	備考
1	10YR5/6 黄褐色シルト	
2	10YR6/8 明黄褐色シルト	
3a	10YR4/2 灰黄褐色シルト	にぶい黄橙色混入
3b	10YR6/4 にぶい黄橙色シルト	赤褐色粒子、浅黄橙色土混入
3c	10YR7/3 にぶい黄橙色シルト	赤褐色粒子、浅黄橙色土普遍的混入
4a	10YR7/2 にぶい黄橙色粘土質シルト	赤褐色粒子多量、グライ
4b	10YR5/4 にぶい黄橙色シルト	褐灰色土・赤褐色粒子多量
5	10YR8/3 浅黄橙色粘土質シルト	赤褐色粒子多量、下層に酸化鉄微量
6	7.5YR3/2 黒褐色粘土質シルト	
7	10YR6/6 明黄褐色シルト	
8	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト	明褐色粒子微量
a	10YR5/3 にぶい黄褐色シルト	明褐色粒子微量　P1
b	10YR5/4 にぶい黄褐色シルト	褐色粒子混入
f	10YR5/4 にぶい黄褐色シルト	明黄褐色土混入　P2

第32図　ＳＤ―04・05平面・断面図

SK14（第25図）

Ⅰ区西部（J－2区）に位置し、SI01に切られる。規模は東西1.2m、南北1.23m、深さ0.51mを測る。出土遺物は、土師器細片が数点ある。

溝跡（SD）

溝跡は1条検出した。遺跡内では過去の調査において、古墳時代の溝跡は2地点（第11次・第14次）で検出されている。

SD05（第32図）

Ⅰ区中央部（J－6区付近）に位置し、SD02・SB02～04に切られる。また、上部は天地返しにより削平されている。規模は、幅2.8～3.25m、深さ0.74mを測り、長さ約4m程を確認した。断面形は鍋底状を呈する。

出土遺物には、土師器・須恵器甕片6点・石製模造品（円板未成品？2点）・弥生土器片4点がある。土師器には、坏・高坏・甕などがあり中期のものが多いようであるが、いずれも細片で時期決定資料とみてよいかは疑問が残る。また、この溝跡は、第14次調査のSD07と同一のものである可能性が強い。

(2) 中世・近世

中世・近世に属する遺構は、柵跡2条・掘立柱建物跡4棟・土坑跡4基・溝（堀）14条・配石遺構1基・橋脚跡1基・土塁跡1条・通路跡1条・性格不明遺構2基がある。また、建物跡の一部の可能性のあるもの4棟分がある。なお、精査後遺構ではないと判断したものがある。SK01・SK04・SX01と登録したものは、現代の電柱やゴミ穴と判断されたため欠番とする。

柱穴列跡（SA）

SA01（第33図）

Ⅳ区（D－16～19区）に位置し、SI05・06を切る。上部は天地返しによる撹乱を受けている。規模は、全長13.8m（約45.5尺）を図り、5間分（柱穴6個）を検出した。柱穴は20～30cmで、深さは6～37cmである。本来の深さは、いずれも40cm以上あったものと予想される。柱間寸法は、8.7～9.4尺である。柱穴列は、さらに角度を変えて東あるいは南へ続く可能性がある。

出土遺物はないが、周辺の他の柱穴がⅡ層上面より検出されるものがある点、あるいは土師質土器皿が出土する柱穴がある点から、中世の遺構と考えられる。また、この位置には後述するごとく土塁が存在していたと考えられることから、土塁構築以前とみられる。方向はN－84°－Wである。この柱穴列は、区画・防御を目的とした柵跡と考えられる。

SA02（第33図）

Ⅲ・Ⅳ区（D－13～15区）に位置し、SK12を切り、SD12に切られると判断される。上部は

天地返しにより撹乱を受けている。規模は、全長11.7 m以上を測り、4間分（柱穴4個）を検出した。方向はN－90°－Eである。柱穴は、P_1が約40 cmと大きく、他は20 cm前後である。深さは13～40 cmであるが、本来はいずれも40 cm前後とみられる。P_3とP_4の間にも柱穴が存在したものと思われる。この柱穴列は、さらに西へ続く可能性があり、SA01と対になる柵跡であろう。出土遺物はない。

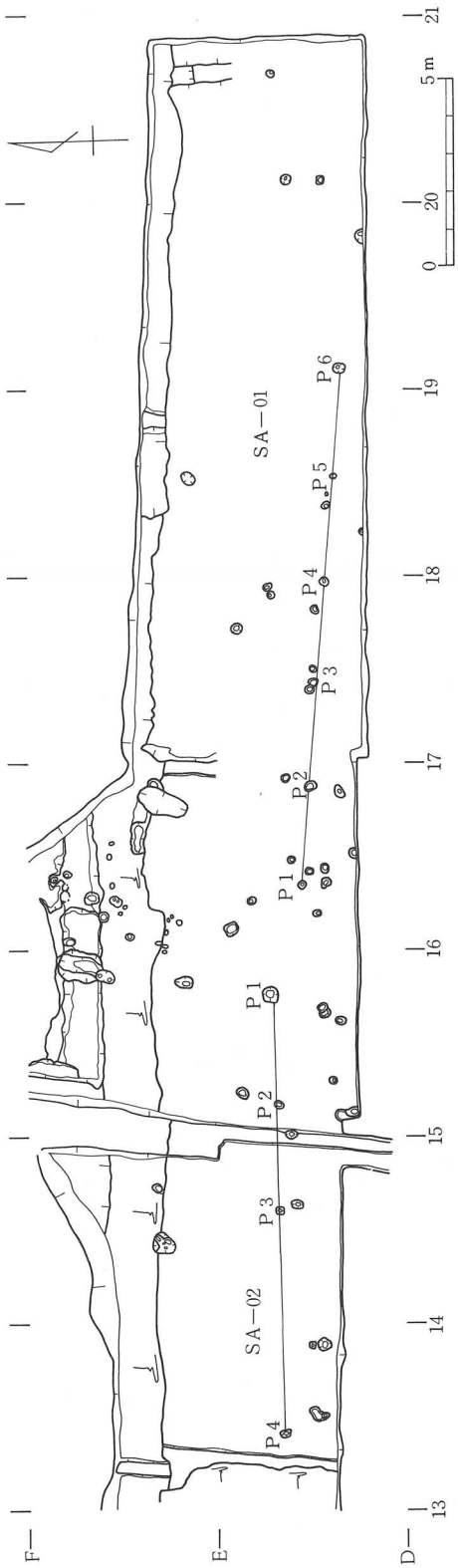
掘立柱建物跡（SB）

建物跡は4棟検出したが、他にⅥ・Ⅷ区で建物跡になる可能性のあるものがあり、これについても報告する。また、SX02とSB01は一体のものと考えられることから、SX02もここで扱う。

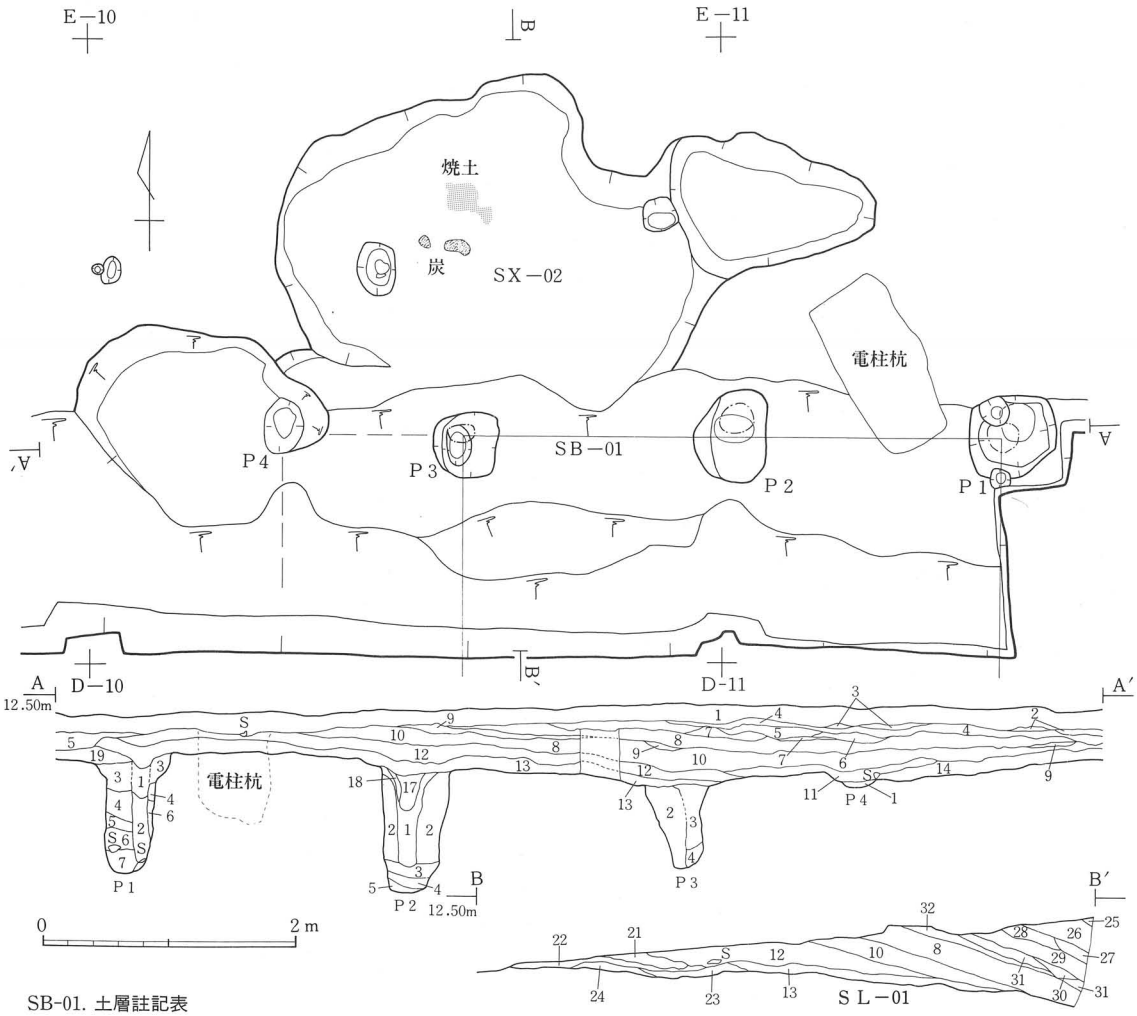
SB01・SX02（第34・35図）

Ⅱ区南部（D－10・11区）に位置し、SD12・15を埋め立てた後に構築されている。また、SB01・SX02上に土塁積土が堆積している。建物規模は不明だが、北辺部2間分（柱穴3個）を検出した。北柱列の方向は、N－89°－Wである。柱間寸法は、2.12 m（約7尺）＋2.18 m（7.2尺）を測る。P_1～P_3は、他の柱穴群に比べ掘り方が大きく、柱痕跡が確認できる。深さは、P_1が93 cm、P_2が102 cm、P_3が66 cmと極めて深い。なお、P_4としたものが浅い柱穴（深さ18 cm）とみてよければ、西側に土間庇のような簡便な施設が付属していた可能性もあろう。柱穴の特徴やSD01・11のコーナー部に位置する点などを考慮すれば、矢倉跡が想定できよう。

出土遺物には、土師質土器皿・板状鉄製品2点がある。土師質土器は小皿の破片が多く、総



第33図　ＳＡ－01・02平面図



SB-01. 土層註記表

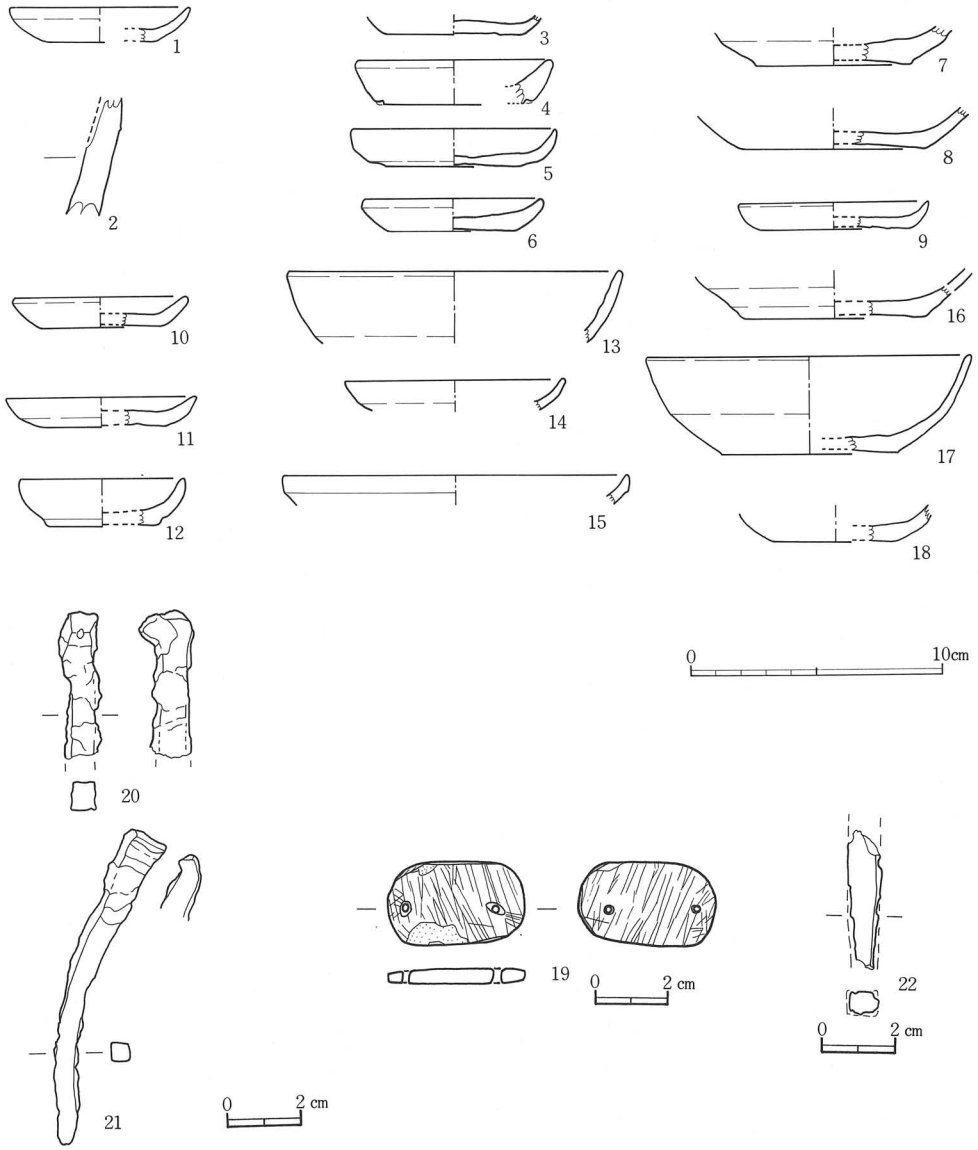
層位	土色・土性	備考
1	10YR6/3　にぶい黄橙色砂質シルト	表土
2	10YR7/8　黄橙色砂質シルト	小礫多数天地返し
3	10YR6/1　褐灰色砂質シルト	酸化鉄粒子混入グライ
4	10YR5/1　褐灰色	酸化鉄粒子グライ
5	10YR6/6　明黄褐色砂質シルト	炭化物粒子
6	10YR6/1　褐灰色	酸化鉄粒子、下部に酸化鉄層グライ
7	10YR5/2　灰黄褐色	グライ
8	10YR5/8　黄褐色砂質シルト	炭化物多量
9	10YR4/1　褐灰色砂質シルト	グライ
10	10YR6/8　明黄褐色砂質シルト	炭化米多量、炭化物
11	10YR6/4　にぶい黄橙色砂質シルト	
12	10YR6/6　明黄褐色砂質シルト	炭化米少量
13	10YR5/4　にぶい黄褐色砂質シルト	炭化物粒子
14	10YR3/3　暗褐色	地山土混入
19	10YR5/1　褐灰色砂質シルト	炭化物普遍的に混入
P1		
1	10YR4/1　褐灰色砂質シルト	明黄褐色土、炭化物、砂
2	10YR4/1　褐灰色砂質シルト	炭化物微量
3	10YR6/6　明黄褐色砂質シルト	
4	10YR5/1　褐灰色砂質シルト	炭化物微量
5	10YR6/6　明黄褐色砂質シルト	
6	10YR5/1　褐灰色砂質シルト	
7	10YR5/4　黄褐色砂質シルト	砂礫混入
P2		
1	10YR5/4　にぶい黄褐色砂	
2	10YR7/6　明黄褐色砂	砂礫含有
3	10YR6/8　明黄褐色砂	砂礫含有

層位	土色・土性	備考
4	10YR5/4　にぶい黄褐砂質シルト	
5	10YR6/4　にぶい黄橙色砂	小砂礫含有
P3		
2	10YR5/6　黄褐色砂質シルト	小礫含有
3	10YR6/6　明黄褐色砂質シルト	
4	10YR5/4　にぶい黄褐色砂質シルト	砂ブロック
P4		
1	10YR5/4　にぶい黄褐色砂質シルト	炭化物

SL-01 土層註記表

8	10YR5/8　黄褐色砂質シルト	炭化米多量、炭化物
10	10YR6/8　明黄褐色砂質シルト	炭化米多量、炭化物粒子
12	10YR6/6　明黄褐色砂質シルト	炭化米少量、小礫
13	10YR5/4　にぶい黄褐色砂質シルト	炭化物粒子
21	10YR7/8　黄橙色砂質シルト	赤褐色土粒子
22	10YR5/2　灰黄褐色砂質シルト	炭化物粒子、にぶい黄橙色土ブロック
23	10YR5/1　褐灰色砂質シルト	炭化物
24	10YR6/4　にぶい黄橙色砂質シルト	炭化物粒子
25	10YR4/4　褐色シルト	褐色土ブロック、小礫、炭化物
26	10YR6/4　褐色砂	小礫多量、黒褐色土ブロック少量
27	10YR5/6　黄褐色砂	小礫黒褐色土ブロック少量
28	10YR5/8　黄褐色砂	礫
29	砂礫層	礫
30	10YR5/6　黄褐色砂	礫
31	10YR5/8　黄褐色粘土質シルト	
32	10YR3/3　暗褐色シルト	炭化物少量

第34図　ＳＢ−01、ＳＸ−02平面・断面図



第35図　SB—01、SX—02出土遺物

数30点で、P_1・P_2に多い。P_3出土のもので実測できたものがある。

SX02はSB01の北西部の同一面で検出したもので、SB01と一体のものと判断される。この遺構は、中央の不整竪穴部と東側及び西側の土坑部とから成り立っている。竪穴部の規模は、東西約3.5m、南北2.7m以上、深さ10cmで、底面はほぼ平坦である。底面中央部北寄りには焼土の堆積が認められ、その南側には炭化物の集中がみられる。これは、恒常的な炉ではなく、一時的な焚き火跡と考えられる。また、底面には2個のピットが検出され、いずれも浅い。

P_5は6 cm、 P_6は13 cmの深さである。西側土坑部規模は、東西1.6 m×南北1.1 m、 深さ12 cmである。底面は平坦である。東側土坑部規模は、東西2 m×南北1.56 m、 深さ21 cmを測る。南側はSB01同様、土塁構築の際その内側（南側）に掘られた溝？によって切られている。なお、埋土は断面図の13・22～24層が該当する。

出土遺物は、竪穴部で渥美（壺？）1点、瓦質土器？1点、土師質土器片261点、釘4点、金具片2点、他に須恵器・石製模造品などがある。東側土坑部では、土師質土器片22点出土。西側土坑部では、在地陶器片1点、土師質土器片10点、釘1点が出土している。実測可能となった比較的大型の破片は、いずれも竪穴部出土の資料である。また、竪穴部及び東側土坑部出土のものに1点ずつ油煙の付着したものがみられ、燈明皿に使用されたことがわかる。土師質土器など多くの遺物はいずれも底面直上付近である。

SB02（第36・55図）

Ⅰ区中央（J－5ポイント付近）に位置し、SI02・03、 SD05を切る。上部は、天地返しにより削平される。桁行3間（北辺総長4.3 m）、梁行1間（東辺総長1.9 m）の東西棟建物跡である。方向は南辺桁行でN－90°－Eである。柱穴は約30 cm前後、深さ20～30 cmのものが多い。SD05と重複する柱穴は深い傾向がみられる。

出土遺物は、古墳時代の土師器細片が少数あるが、時期決定資料ではない。建物方向が真北に直交し、SD02の方向ともほぼ一致することから、SD02と関連する建物跡と考えられる。

SB03（第36・55図）

Ⅰ区中央（J－5ポイント付近）に位置し、SI02・03、 SD04・05を切る。上部は天地返しにより削平される。桁行2間（北辺総長4.48 m）、梁行2間（東辺総長2.91 m）の東西棟建物跡である。方向は南辺桁行でN－88°－Eである。柱穴は20 cm前後のものが多く、深さ20～30 cm代のものが多い。SD04・05と重複する柱穴は、深くなる傾向がある。なお、南辺側の柱穴は変則的に3間となり、中央の間隔が広い。

出土遺物は、古墳時代の土師器細片が少数あるが、時期決定資料ではない。この建物跡もSB02と同様の理由から、SD02と関連するものと考えられる。

SB04（第36・55図）

Ⅰ区中央（J－5ポイント付近）に位置し、SI02・03、 SD04・05、 SK07、 SB02を切る。上部は、天地返しにより削平されている。身舎は桁行2間以上（東辺総長3.6 m以上）、梁行1間（南辺総長3.31 m）の南北棟建物跡である。西辺側には南北2間以上の庇（あるいは縁）が取り付く。身舎との間隔は99 cmである。方向は、東辺桁行でN－19°－Eである。柱穴は20～30 cmのものが多く、深さは20 cm前後である。

出土遺物は、弥生土器・古墳時代の土器の破片が少量あるが、時期決定資料ではない。この

建物跡の方向は、遺跡内の現在の道路方向とほぼ一致し、この道路は江戸初期の若林城下町に起源があると予想されている。これまでの調査で検出された江戸初期の建物跡とも、方向が一致している。さらに、SB02を切る点を考慮すれば、江戸初期の建物跡と想定されよう。

SB05（第37図）

VI区（A・B－14区）に位置する。柱穴4個（3間）で、およそ7尺＋8尺＋7尺で建物跡の一部を構成する可能性がある。土師質土器片が出土している。

SB06（第37図）

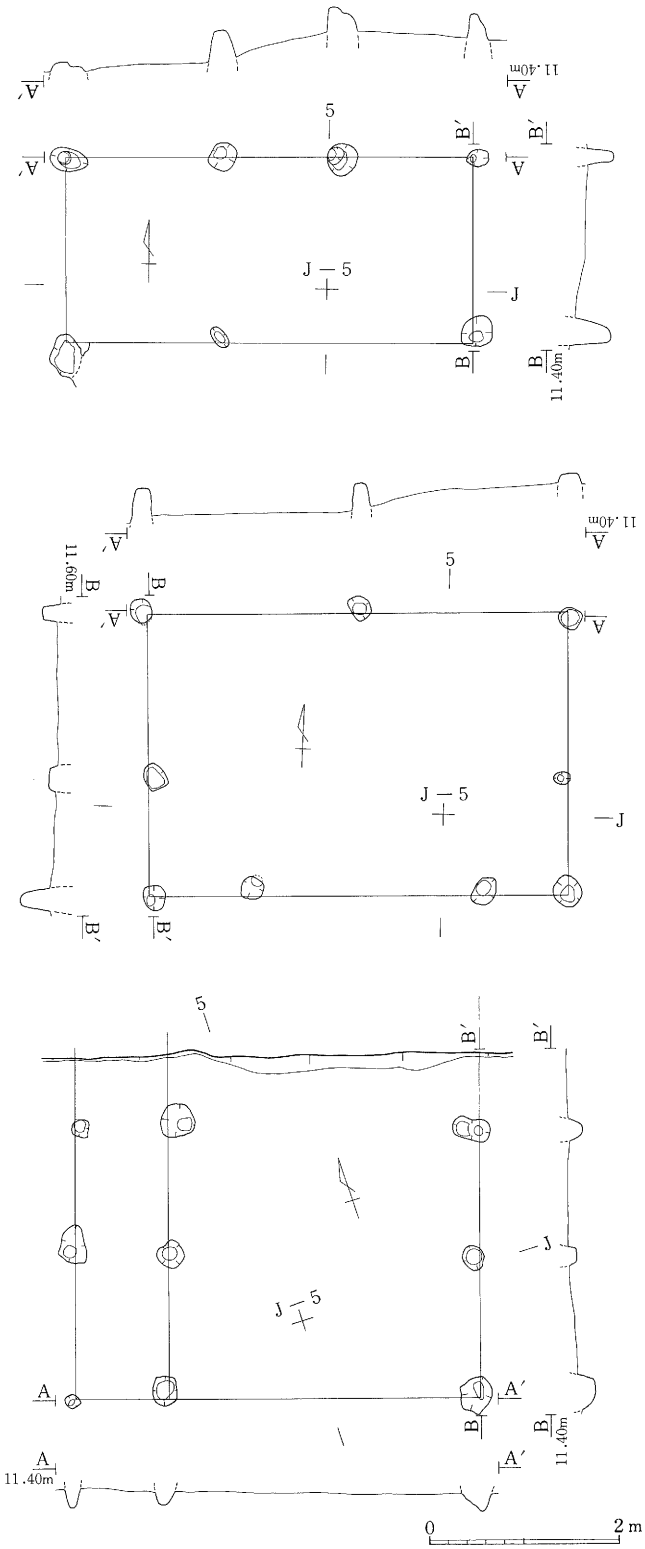
VI区（A・B－14区）に位置する。柱穴4個（西辺2間以上・北辺1間以上）で、建物跡の一部を構成する可能性がある。柱間寸法は6～8.5尺である。土師質土器が出土している。

SB07（第37図）

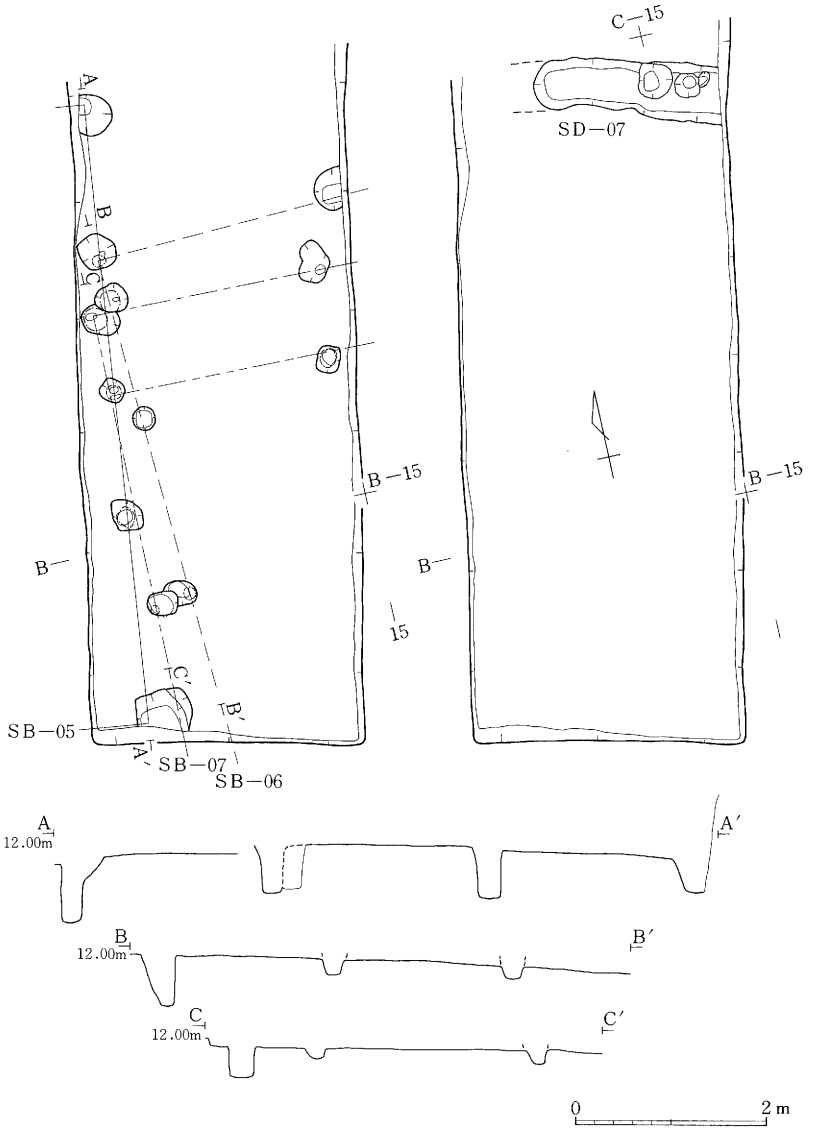
VI区（A・B－14区）に位置する。柱穴5個を検出した。身舎部分は西辺・北辺とも1間以上で、北辺には庇（あるいは縁）が付くと考えられる。柱間寸法は約8尺、身舎と庇（縁）の間隔は約3尺である。土師質土器片が出土している。

SB08（第39図）

VIII区（B－21区）に位置する。



第36図　ＳＢ—02・03・04平面・断面図



第37図　Ⅵ建物跡平面・断面図

柱間寸法が約8尺の建物跡になる可能性がある。

SB05～08は建物跡と考えてよければ、いずれも層位・出土遺物から中世の時期と考えられる。

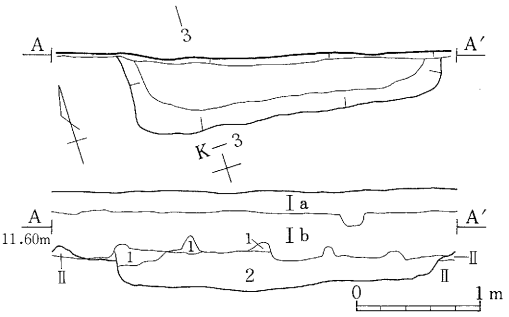
土坑跡（SK）

土坑跡は6基検出されている。

SK02（第38図）

Ⅰ区西部（K－2・3区）に位置し、SI01を切る。上部は天地返しにより削平されている。規

模は東西約 2.55 m、 南北 0.6 m 以上、深さ 40 cm である。埋土は人為的に埋められたものとみられる。出土遺物は、在地産中世陶器(甕？)1 点、土師質土器片 2 点があり、他にフレーク 1 点がある。陶器は、SK08 出土のものと接合した。土師質土器は小皿片で、外底は糸切り、板状圧痕、内底には指ナデがみられる。



SK-02 土層註記表

層位	土　色・土　性	備　考
1	10YR4/1　褐灰色砂質粘土	にぶい黄橙色土が斑状・炭化物粒子混入
2	10YR7/4　にぶい黄橙色砂質粘土	褐灰色土が斑状に入る

第38図　ＳＫ−02平面・断面図

SK05（第 39〜41 図）

Ⅷ区北部(C−21 区)に位置し、SK15 を切る。上部は、一部天地返しにより撹乱を受けている。規模は 1.6 m 以上×1.44 m で、深さは北側約 17 cm、 南側約 7 cm である。この土坑跡は、若干位置をずらして掘り直しているものと考えられ、 2 時期に分かれる。埋土は人為的に堆積したものとみられ、炭化物が多量に含まれ、黄橙色シルトブロック・礫・焼土も多い。ゴミ穴として掘られたものであろう。

出土遺物には、在地産陶器甕片 6 点・土師質土器皿片 3 点・不定形硯（あるいは未成品？）1 点・釘 2 点があり、他に須恵器甕片 1 点・石製模造品（円板） 1 点がある。陶器甕は白石窯とみられるもの 1 点、他は遺跡周辺のものと推定される。土師質土器では、不明瞭ながら板状圧痕・内底指ナデ調整をするものが 1 点含まれる。

SK08（第 39・40 図・第 41 図 8）

Ⅷ区中央（B−21 区）に位置し、SK10 を切る。規模は東西約 70 cm、 南北 55 cm、 深さ約 22 cm である。断面形は鍋底状で、埋土は単層で多量の小礫と少量の焼土粒が含まれている。おそらく、人為的に埋められたものと思われる。出土遺物は、在地産陶器甕片 2 点・須恵器器台片 1 点がある。陶器片のうち 1 点は、SK02 出土のものと接合した。これらの陶器片は、遺跡周辺に生産地のある製品と推定される。この土坑跡は楚石の据え穴かどうか不明である。

SK16（第39図）

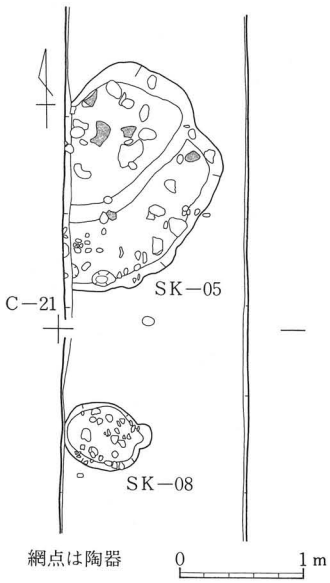
Ⅷ区南部（B−21 区）に位置する。SX03 との重複関係は明らかではなく、むしろ同時期の可能性がある。形状は不整形で、規模は東西 73 cm 以上、南北 85 cm、 深さ約 7 cm である。底面中央には柱穴がある。北辺には炭化物の集中が認められる。この土坑は、柱穴の掘り方とみてよいかは明らかでない。出土遺物はない。

SK10（第39・41図）

Ⅷ区中央（B−21 区）に位置し、SK05・08 に切られ、SK15 を切る。また、SB08 と重複するが、層位的所見では建物跡より新しい。形状は、東西方向に長軸をもつ略長方形のプランに

なるものと考えられる。規模は東西 77 cm 以上、南北 82 cm、深さ 48 cm である。埋土 2 ・ 4 層では、多量の炭化物・木炭がみられた。東壁には柱穴跡がみられる。

出土遺物は、在地産陶器片 4 点・土師質土器皿片 4 点、他に須恵器甕片 1 点がある。陶器 4 点のうち 2 点は白石窯のものと考えられ、他の 2 点は遺跡周辺のものとみられる。土師質土器皿は、板状圧痕や内底の指ナデの確認できない薄手のものである。



第39図　ＳＫ－05・08平面図

SK15（第40図）

Ⅷ区中央（C－21 区）に位置し、SK05～10・P_5に切られる。全体の規模・形状は不明であるが、東西 36 cm 以上、南北 60 cm、 深さ約 7 cm を測る。柱穴の掘り方の可能性もあるが、明確ではない。出土遺物はない。

集石遺構（第40図・第42図）

Ⅷ区南端（B－21 区）に位置する。 3 層上部で検出した。南北約 1.8 m に渡って帯状に分布する。北部では散漫となるが、幅は 50～60 cm となろう。石は大半が円礫である。

遺物は礫直上や周辺より出土している。古瀬戸灰釉盤？ 1 点（図 1）、常滑壺？ 1 点（図 2）、在地産陶器甕片 2 点（図 3 ・ 4 ）が出土している。灰釉盤とみられるものは口縁部破片で、15 世紀かそれ以前と考えられる。 3 層は、Ⅵ区の 3 層と同一の層とみられる。また、Ⅷ区セクション図にみられる版築状の堆積層（ 4 ～ 7 層）は、この集石遺構部分には認められない。

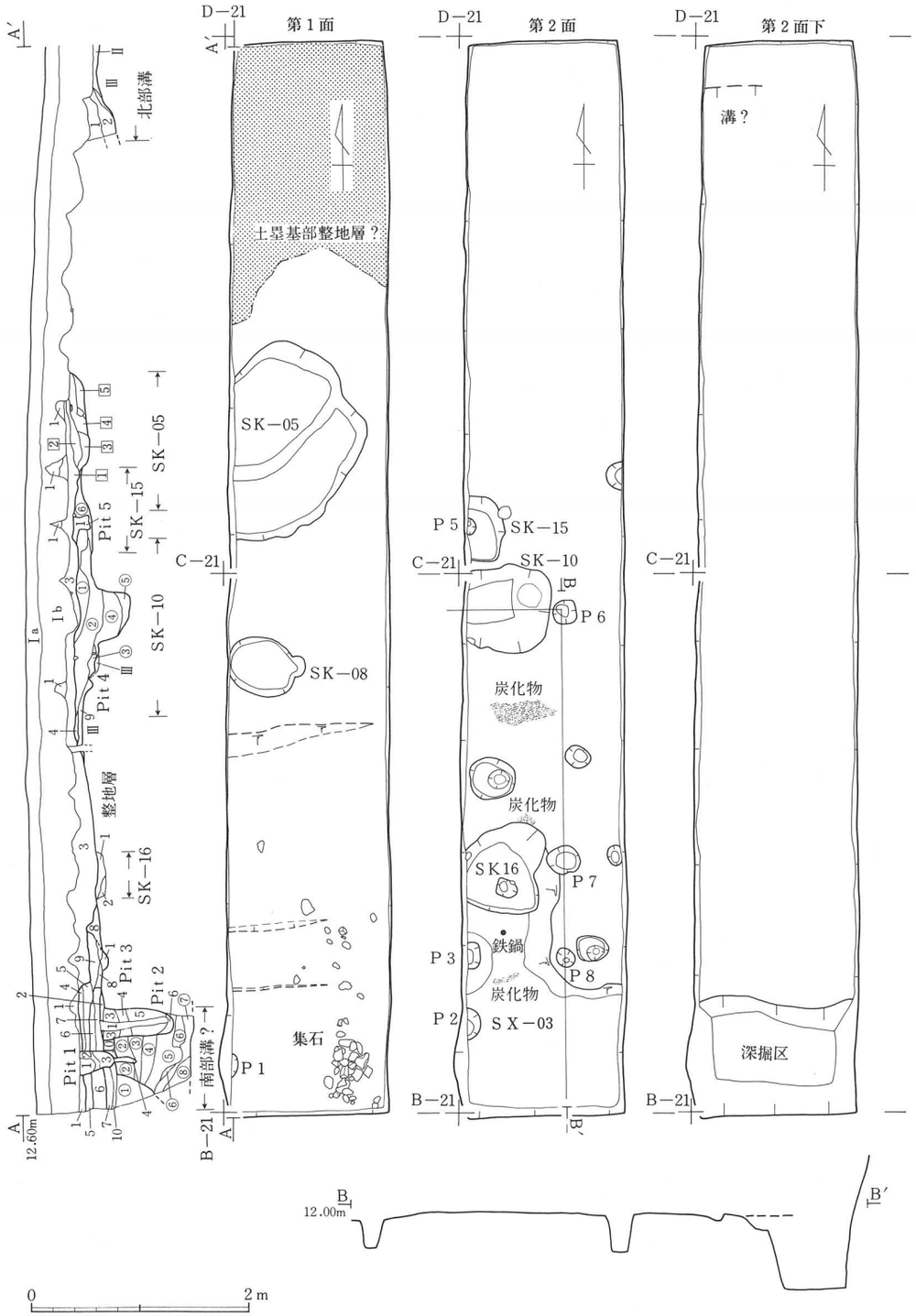
溝跡（SD）

溝跡は 14 条検出されている。このうち、SD01 は堀跡とみてよい。また、調査終了後の工事立ち合い時に発見した溝跡 5 条（ 2 条は調査区内検出の延長部分）についても、ここで述べる。したがって、検出した溝跡は、合計 17 条になる。

SD01（第 43～54 図）

SD01 は調査対象区を東西に貫く溝跡だが、その規模や特徴から堀跡と考えてよい。精査はⅡ区とⅤ区で行った。また、Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅶ区などでもプランの一部を検出している。ここでは、Ⅱ・Ⅴ区の特徴について述べる。なお、精査の結果、SD01 は中世に開削され、江戸期に再び掘削・使用されていることが明らかで、大別 2 時期の変遷が判明している。

（Ⅱ区）上部は天地返しに削平されるが、確認面からの規模は上幅約 15.6 m、 下幅約 6.1 m、深さは北壁側約 1.7 m・南壁側約 2.5 m である。江戸期は 8 層上面が底面と考えられ、下幅約 9.4 m、深さは北壁側約 0.9 m、南壁側 1.8 m である。また、中世期には断面形状と 8 層以下の



第40図　Ⅷ SK—05・06・10平面・断面図

Ⅷ西壁セクション土層註記表

層位	土色・土性		備考
1	10YR6/4	にぶい黄橙色シルト	明黄褐色土、褐灰色土が斑状に混入（近世？）
2	2.5Y4/3	オリーブ褐色シルト	炭化物混入（近世？）
3	10YR7/6	明黄褐色シルト	炭化物、にぶい黄褐色土混入（以下中世）
4	10YR6/6	明黄褐色シルト	にぶい黄褐色土混入　整地層
5	10YR4/2	灰黄褐色シルト	炭化物粒、黄褐色粒混入　〃
6	10YR4/3	にぶい黄褐色シルト	明黄褐色が斑状に混入　〃
7	10YR4/3	にぶい黄褐色シルト	炭化物粒、明黄褐色土が混入　〃
8	10YR6/4	にぶい黄橙色シルト	炭化物が混入　〃
9	10YR6/6	明黄褐色シルト	黄褐色土が混入（ピット４）
10	10YR5/3	にぶい黄褐色シルト	炭化物、明黄褐色土、赤褐色土が混入　整地層

Pit1

1	10YR5/6	黄褐色シルト	
2	10YR6/8	明黄褐色シルト	
3	10YR5/6	黄褐色シルト	浅黄橙色土混入
4	10YR6/4	にぶい黄橙色シルト	

Pit2

1	10YR3/2	黒褐色シルト	炭化物粒が混入
2	10YR5/3	にぶい黄褐色シルト	炭化物粒、明黄褐色土、赤褐色土が混入
3	10YR4/3	にぶい黄褐色シルト	炭化物粒、明黄褐色粒混入
4	10YR5/4	にぶい黄褐色シルト	
5	10YR5/3	にぶい黄褐色シルト	炭化物粒混入
6	10YR4/4	褐色シルト	

Pit3

1	2.5Y4/2	暗灰黄色シルト	炭化物粒、明黄褐色粒混入

Pit4

1	10YR6/4	にぶい黄橙色シルト	炭化物粒混入

Pit5

1		明黄褐色シルト	炭化物、黄褐色土が混入

SK-05

1	10YR7/6	明黄褐色シルト	炭化物、にぶい黄褐色土混入
2	10YR6/6	明黄褐色シルト	炭化物混入
3	10YR5/4	にぶい黄褐色シルト	炭化物多量、浅黄橙色が斑状に混入
4	10YR6/4	にぶい黄橙色シルト	炭化物混入
5	10YR6/8	明黄褐色シルト	

SK-08

1	10YR5/3	にぶい黄褐色粘土質シルト	礫・炭化物多量、焼土粒少量含む

SK-10

①	10YR6/6	明黄褐色シルト	炭化物粒を混入
②	10YR5/4	にぶい黄褐色シルト	浅黄橙色土が斑状に混入
③	10YR6/4	にぶい黄橙色シルト	炭化物が混入
④	10YR5/2	灰黄褐色シルト	炭化物多量、浅黄橙色土が混入
⑤	10YR4/2	灰黄褐色シルト	浅黄橙色

SK-15

⑥	10YR6/6	明黄褐色シルト	炭化物粒を混入

SK-16

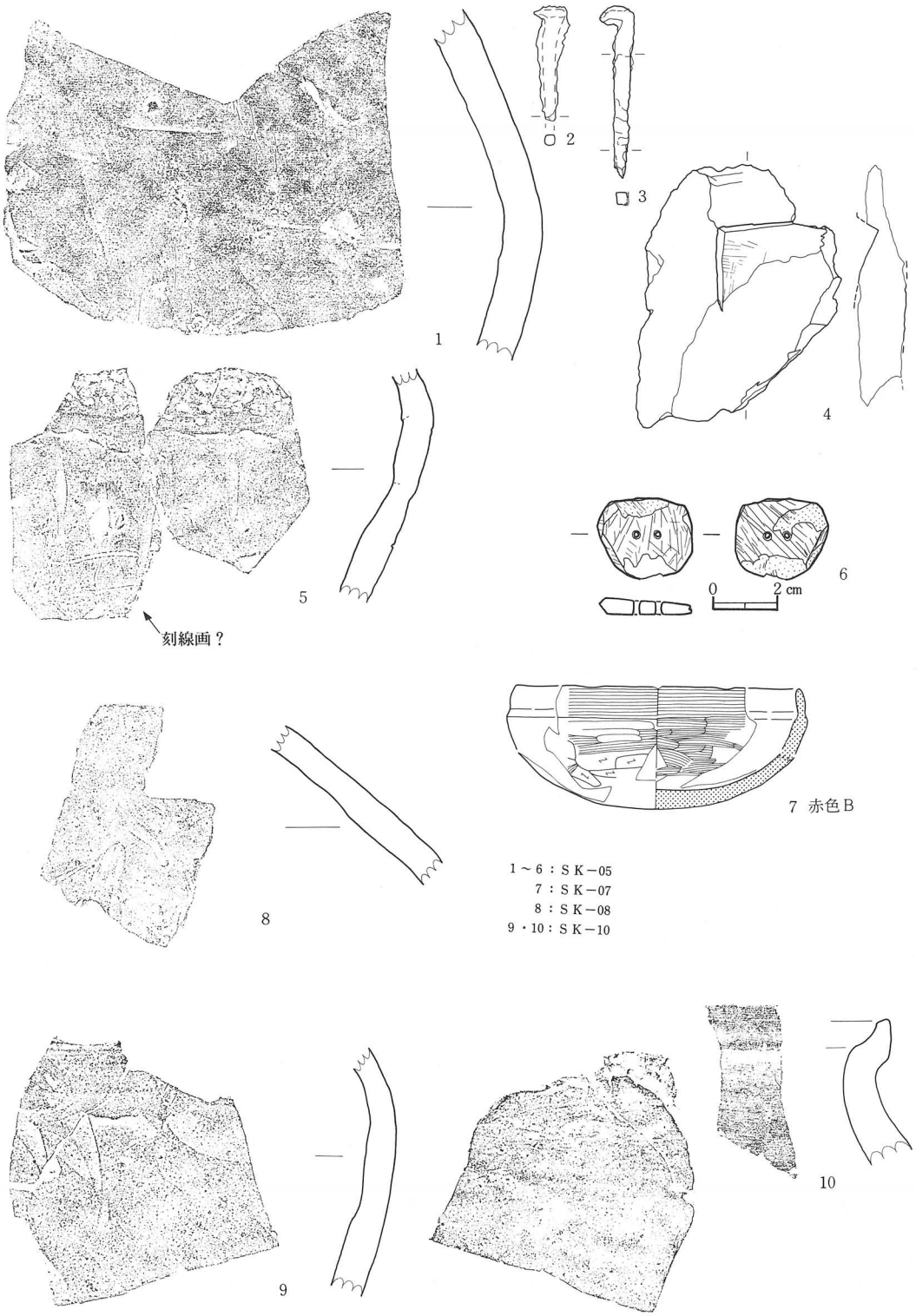
1	10YR5/4	にぶい黄褐色シルト	炭化物、浅黄橙色土が斑状に混入
2	10YR6/4	にぶい黄橙色シルト	

南部溝？

①	10YR5/3	にぶい黄褐色シルト	炭化物混入　土坑 or 溝？
②	10YR5/4	にぶい黄褐色シルト	炭化物混入　溝？
③	2.5Y4/3	オリーブ褐色シルト	〃
④	2.5Y4/2	暗灰黄褐色シルト	〃
⑤	10YR5/8	黄褐色シルト	〃
⑥	2.5Y5/3	黄褐色シルト	明黄褐色が斑状に混入　〃
⑦	10YR5/2	灰黄褐色シルト	〃
⑧	2.5Y4/6	オリーブ褐色シルト	〃

北部溝？

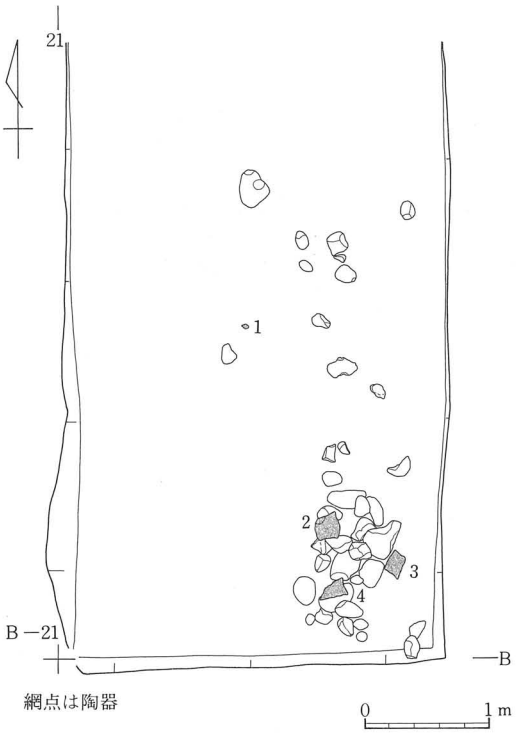
1	7.5YR5/6	明褐色シルト	土墨基部の整地層か
2	10YR4/1	褐灰色シルト	炭化物粒が混入



第41図　SK－05、07、08、10出土遺物　6：½

堆積層の対応から２～３回の改修が行われ、下幅がその都度拡張されている。ところで、近世の底面上には、堅い鉄分集積層（７層）がみられる。

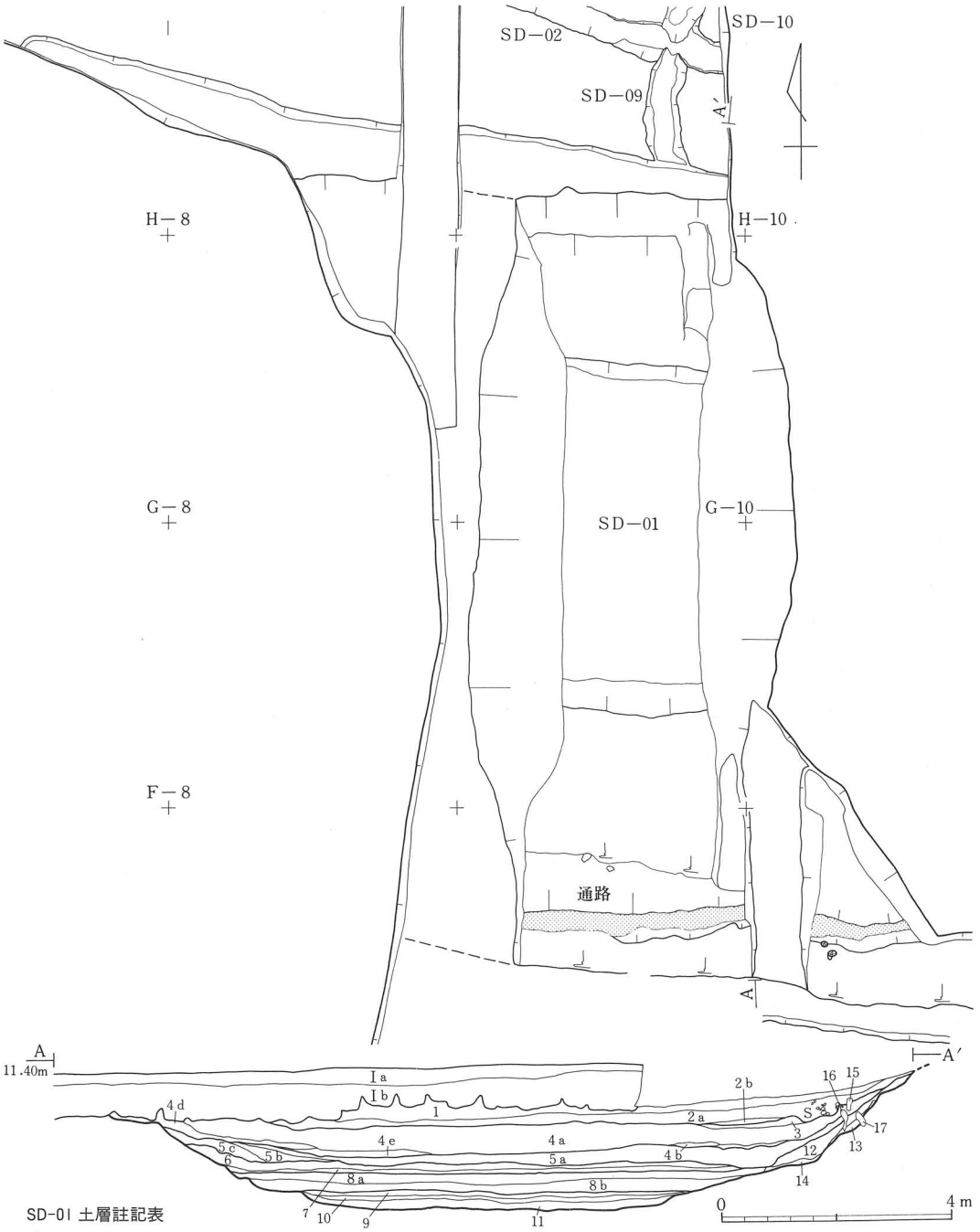
出土遺物は、まず近世の堆積層である１～７層から、大堀相馬（碗・皿）、瀬戸・美濃（灰釉皿・志野菊皿・笠原鉢・飴釉火入・鉄釉擂鉢）、唐津系｛青緑釉皿・灰釉系壷？（内面あて具痕）｝、産地不明陶器｛擂鉢（福島市岸窯類似）｝、肥前磁器（染付皿・小坏、白磁瓶？）、瀬戸磁器？（染付碗）、中世陶器（渥美・常滑・在地）、中国（青磁碗・染付碗）、土師質土器皿、近世燻瓦、産地不明磁器（摺絵皿・人形？）、角釘、銅製金具、古銭（寛永通宝・開元通宝）が出土し、他に古墳～平安の須恵器（坏・瓶・壺・器台・甕）、石製模造品（円板・剣形・原石？）、弥生土器、石器（スクレイパー）などが出土している。１層では、大堀相馬、産地不明の摺絵皿・ガラス小瓶などが出土し、幕末～明治頃が下限とみられる。一方、６層では、志野菊皿・唐津系壺？・産地不明擂鉢など16世紀末～17世紀前葉に限定できる遺物が出土している。なお、７層では出土遺物がない。中世の堆積層である８層以下では、常滑（甕・鉢）、在地（白石窯片口鉢）、中国磁器（龍泉窯系蓮弁文碗・染付四方襷文碗）、土師質土器皿、古銭（永楽通宝・洪武通宝）が出土し、他に須恵器・弥生土器・スクレイパーが出土している。このうち、８層で中国染付磁器・古銭が、底面で常滑甕片が出土した。中世の層出土の陶磁器は、およそ14～16世紀後半頃を主体とするもの考えられる。



第42図　集 石 遺 構

（Ⅴ区）上部はⅡ区同様天地返しによる削平を受けるが、確認面での規模は上幅約14.3 m、下幅約6.4 m、深さは北壁側約2.2 m、南壁側2.8 mである。なお、北壁側では一部緩斜面で張り出す部分があり、多数のピットを検出した。張り出し部で、上幅約15.6 mを測る。江戸期は６b層上面が底面と考えられ、上幅約14.2 m、下幅約8.7 m、深さは北壁側1.42 m、南壁側1.98 mである。南壁側には壁に平行して、幅約１mの溝状の落ち込みが検出された。この遺構はⅡ区で認められないことから、SD12・15と関連する溝跡と思われる。

出土遺物は、南壁側で多く出土する傾向が指摘できる。近世の堆積層である１～６a層では、

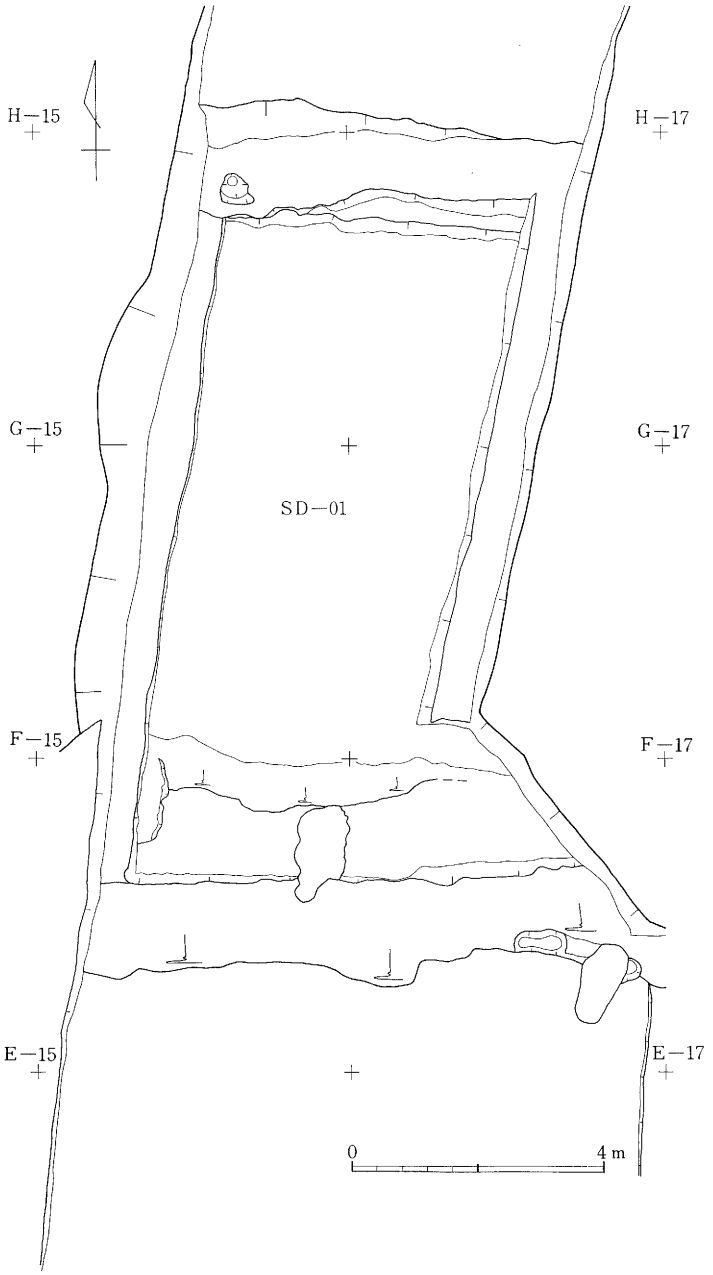


SD-01 土層註記表

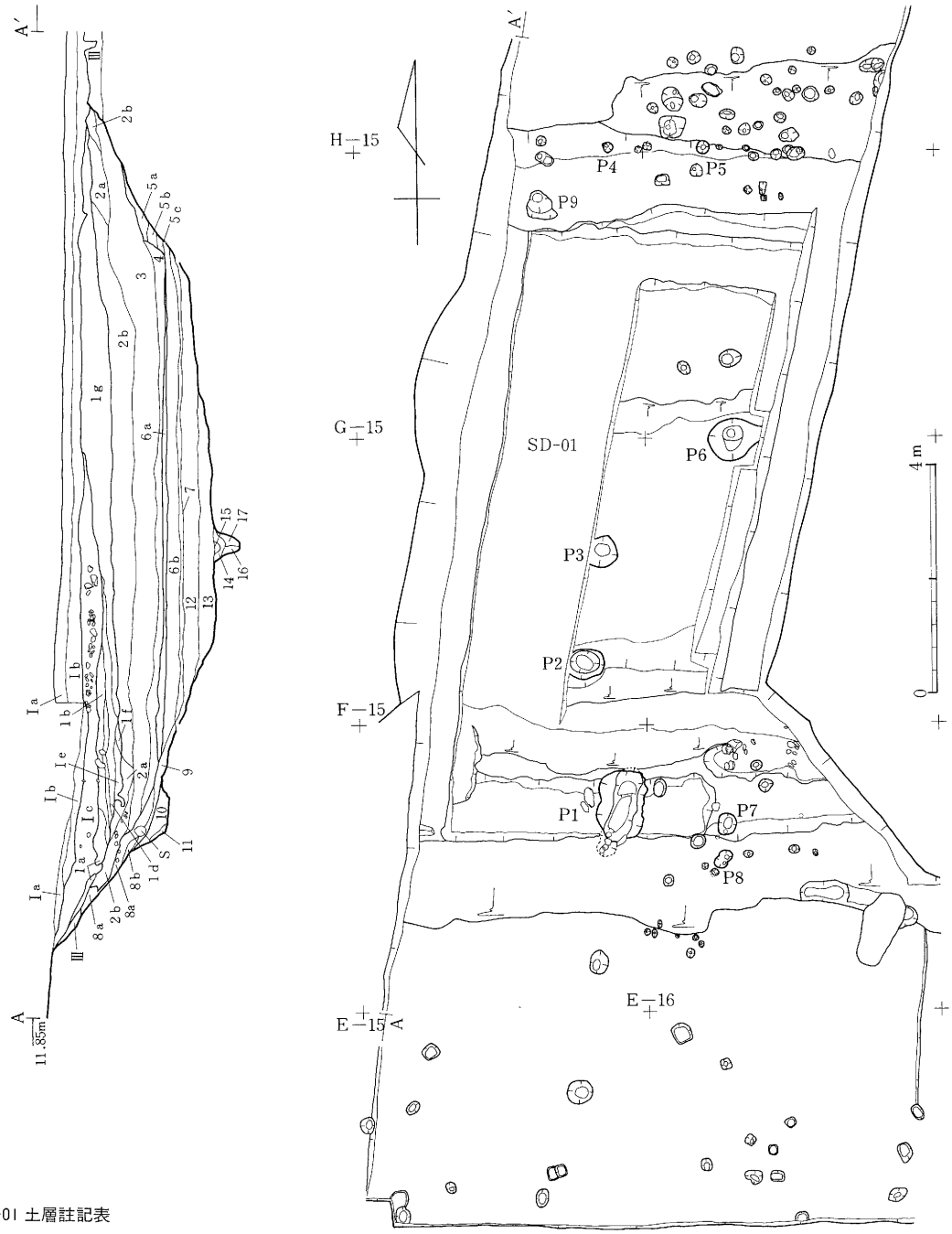
層位	土色・土性		備考	層位	土色・土性		備考
1	7.5Y4/3	褐色シルト		7	5YR5/8	明赤褐色	酸化鉄層
2a	10YR5/6	黄褐色シルト	炭化物粒子微量	8a	2.5Y6/1	黄灰色粘土質シルト	赤褐色土粒子多量、酸化鉄層からグライ漸移
2b	10YR5/6	黄褐色シルト	褐灰色土・グライ斑状	8b	2.5Y5/1	黄灰色粘土質シルト	赤褐色土粒子普遍的に混入
3	7.5Y4/4	褐色シルト		9	2.5Y6/2	灰黄色粘土質シルト	赤褐色土粒子多量
4a	10YR4/6	褐色シルト	炭化物粒子微量	10	5YR4/6	赤褐色	酸化鉄層
4b	10YR4/3	にぶい黄褐色シルト	黒褐色土斑状	11	10YR6/1	褐灰色粘土質シルト	赤褐色土粒子多量、酸化鉄層からグライ漸移
4c	10YR5/1	褐灰色シルト	褐色土混入	12	10YR6/1	褐灰色砂質シルト	赤褐色土粒子普遍的に混入
4d	10YR4/4	褐色シルト	明黄褐色土ブロック	13	5YR4/6	赤褐色砂質シルト	灰白色酸化鉄混入
4e	10YR4/4	褐色シルト	炭化物粒子微量	14	7.5Y8/1	灰白色砂質粘土	赤褐色粒子
5a	10YR4/4	褐色シルト	炭化物粒子多量	15	7.5Y4/4	褐色シルト	ポソポソ
5b	10YR5/3	にぶい黄褐色シルト	明黄褐色土ブロック	16	10GY6/1	緑灰色砂質粘土	酸化鉄、グライ
5c	10YR5/4	にぶい黄褐色シルト		17	10YR5/4	にぶい黄褐色砂	
6	10YR5/8	黄褐色シルト					

第43図　ＳＤ−01（Ⅱ区）平面・断面図

瀬戸・美濃（鉄釉鉢・擂鉢・黄瀬戸釉皿）、唐津系（灰釉碗・青緑釉皿・刷毛文鉢・長石釉鉢）、産地不明陶器、肥前（染付碗・皿・瓶、色絵皿）、大堀相馬（碗）、堤（器種不明）、瓦質火鉢、瓦、中世陶器（古瀬戸・常滑・渥美・在地）、中国（青磁・白磁）が出土し、他に古墳～平安の須恵器（坏・甕・壺）・土師器、土師質土器皿、羽口片、鉄滓、煙管、刀子？　角釘、砥石、礎石？、馬歯などが出土している。近世陶磁器では17～18世紀代の製品が比較的多く、幕末頃のものは少ない。一方、6b～13層が中世の堆積層であるが、古瀬戸（灰釉盤・壺）、常滑（甕・壺？）、在地（白石窯の甕・片口鉢・小形壺、産地不明の甕）、中国（青磁碗・盤、青白磁瓶蓋）、鉄滓、角釘が出土し、他には古墳～平安の須恵器・土師器、瓦などが出土している。出土陶磁器のうち古瀬戸の盤（第47図20・21）は15世紀前半である。常滑については体部破片で年代が不明である。中国の青磁碗・盤は13～14世紀前半に納まるが、堀底出土の碗は玉縁口縁で内面に陽刻の花文がみられ、14世紀後半～15世紀前半に納まるものであろう（第49図11）。青白磁蓋（梅瓶か）は13世紀のものである。一方、南壁際の8a層では土師質土器皿が重って出土している（第51図24～30、第52図1～4）。搬入に際して落下したものか、一



第44図　SD－01（Ⅴ区）平面図（近世面）



SD-01 土層註記表

層位	土色・土性		備考
1a	10YR5/4	にぶい黄褐色砂質シルト	
1b	10YR5/3	にぶい黄褐色砂質シルト	炭化物粒子
1c	10YR4/3	にぶい黄褐色砂質シルト	炭化物を普遍的に混入
1d	10YR5/3	にぶい黄褐色砂質シルト	
1e	10YR5/4	にぶい黄褐色	
1f	10YR4/3	にぶい黄褐色	
1g	10YR6/8	明黄褐色シルト	小礫を普遍的に混入
2a	10YR5/4	にぶい黄褐色砂質シルト	
2b	10YR5/6	黄褐色砂質シルト	
3	10YR6/4	にぶい黄橙色砂質シルト	
4	10YR4/3	にぶい黄褐色シルト	
5a	10YR4/4	褐色シルト	
5b	7.5YR5/8	明褐色	
5c	10YR4/4	褐色シルト	
6a	2.5YR4/6	赤褐色シルト	
6b	10YR4/1	褐灰色	酸化鉄、グライ
7	10YR6/1	褐灰色	グライ

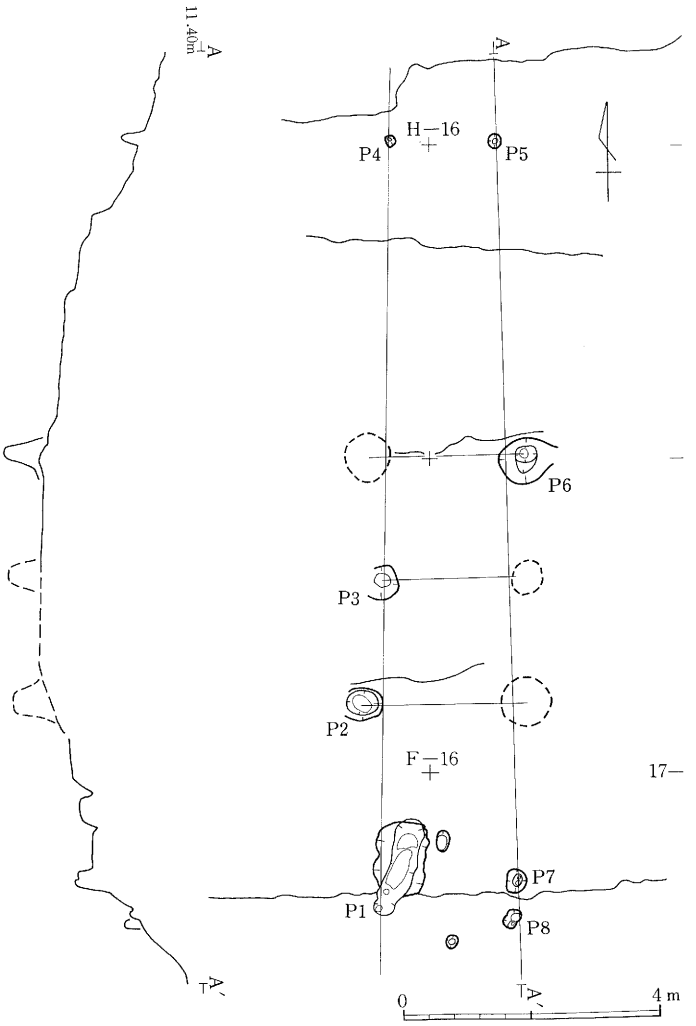
層位	土色・土性		備考
8a	10YR4/5	褐色シルト	かわらけ多数
8b	10YR6/2	灰黄褐色砂質シルト	
9	10YR4/5	褐色シルト	灰黄褐色土、褐灰色土ブロック
10	10YR6/1	褐灰色砂質シルト	赤褐色土、礫混入、グライ
11	10YR4/2	灰黄褐色砂質シルト	
12	10YR6/1	褐灰色砂質シルト	酸化鉄粒子多量、グライ
13	10YR5/1	褐灰色砂質シルト	暗赤褐色土、礫多量
14	10YR4/2	灰黄褐色砂質シルト	褐灰色土混入
15	10YR6/4	にぶい黄橙色砂	明褐色土混入
16	10YR6/2	灰黄褐色砂	にぶい黄橙色土混入
17	10YR4/2	灰黄褐色砂	

第45図　ＳＤ−01（Ⅴ区）平面・断面図

括性の高い土器である。前述したSX02出土の皿と特徴が一致している。又、8a～11層は堀跡最下層（13層）より、堆積順序が古いのではないかとみられる。

次に、SD01に付設された通路跡・橋脚跡について述べる。

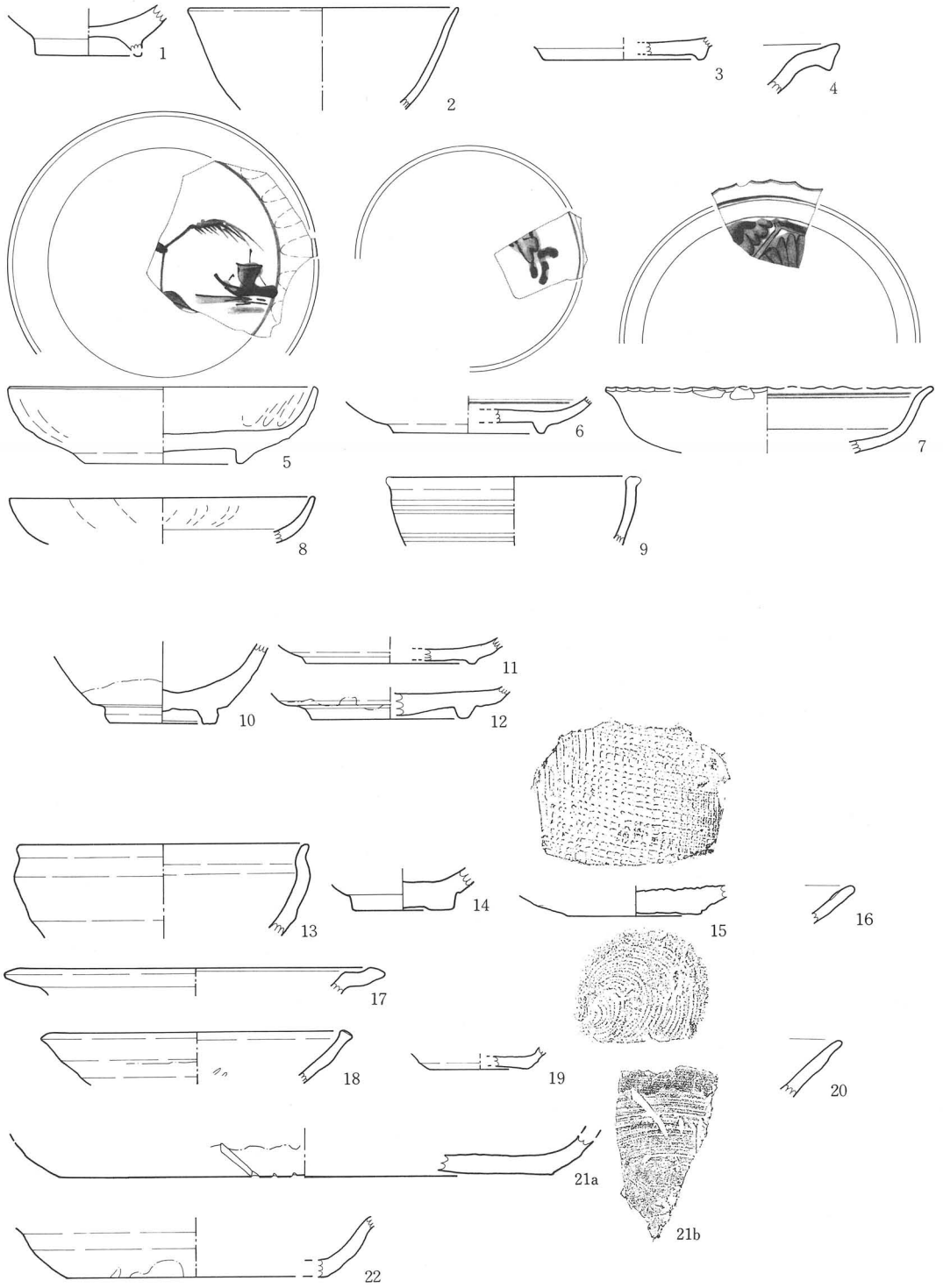
通路跡（第43図）II・III区（E－9・10区）のSD01の南壁に位置し、東側へ下がる通路跡である。規模は、全長6.8mを測るがさらに東西に伸びる。通路幅は15～79cmである。この通路は、伴出遺物がなく時期が明確ではないが、SD11・15より新しいことから、中世でも新しい時期かあるいは江戸時代に下るものであろう。



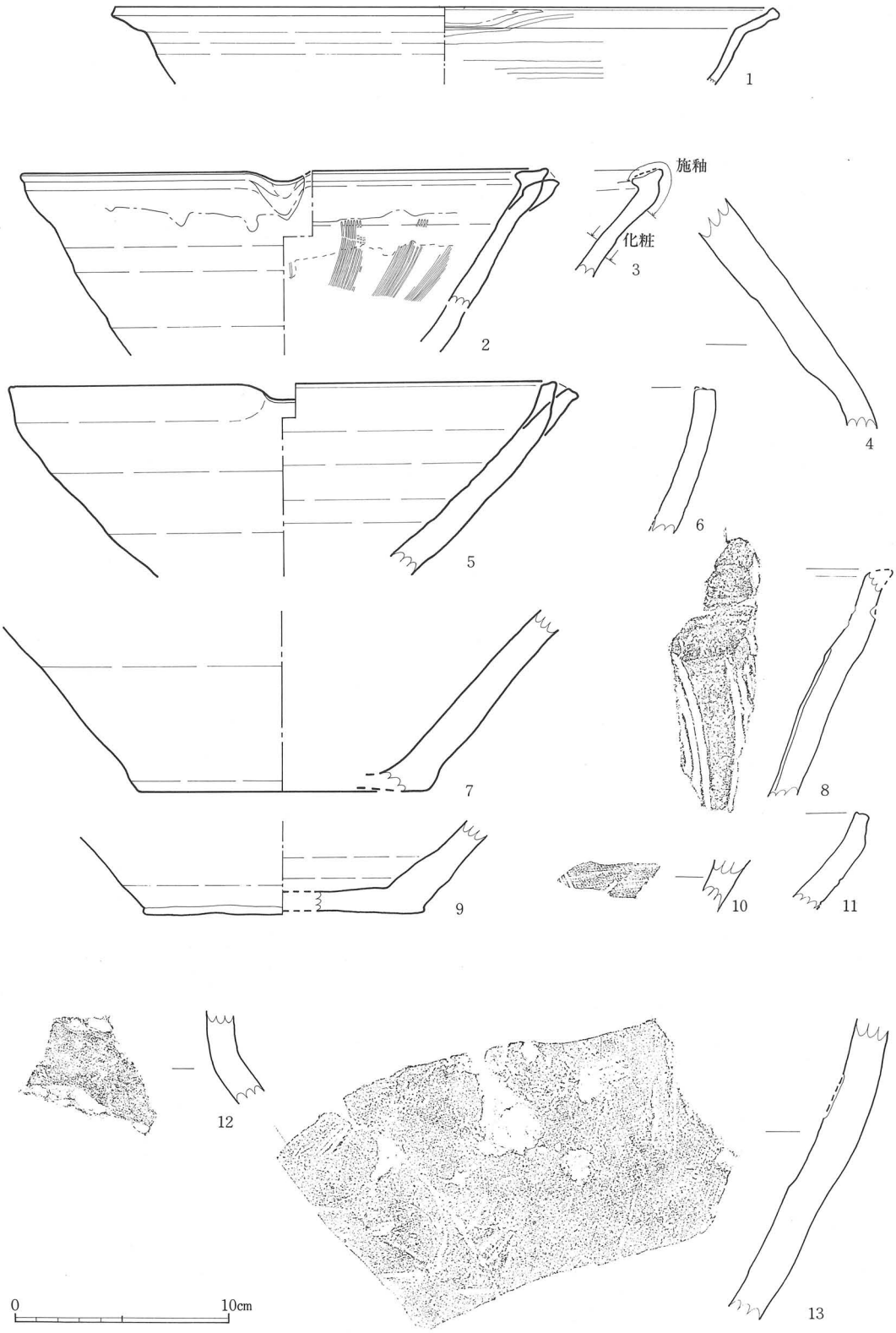
第46図　ＳＤ－01橋脚跡平面・断面図

橋脚跡（第46図）V区（16ライン付近）に位置し、堀底や壁面で検出したが、南壁の2基は8a層上面で検出した。このことは、前述した13層より8a～11層が古いことを示している。

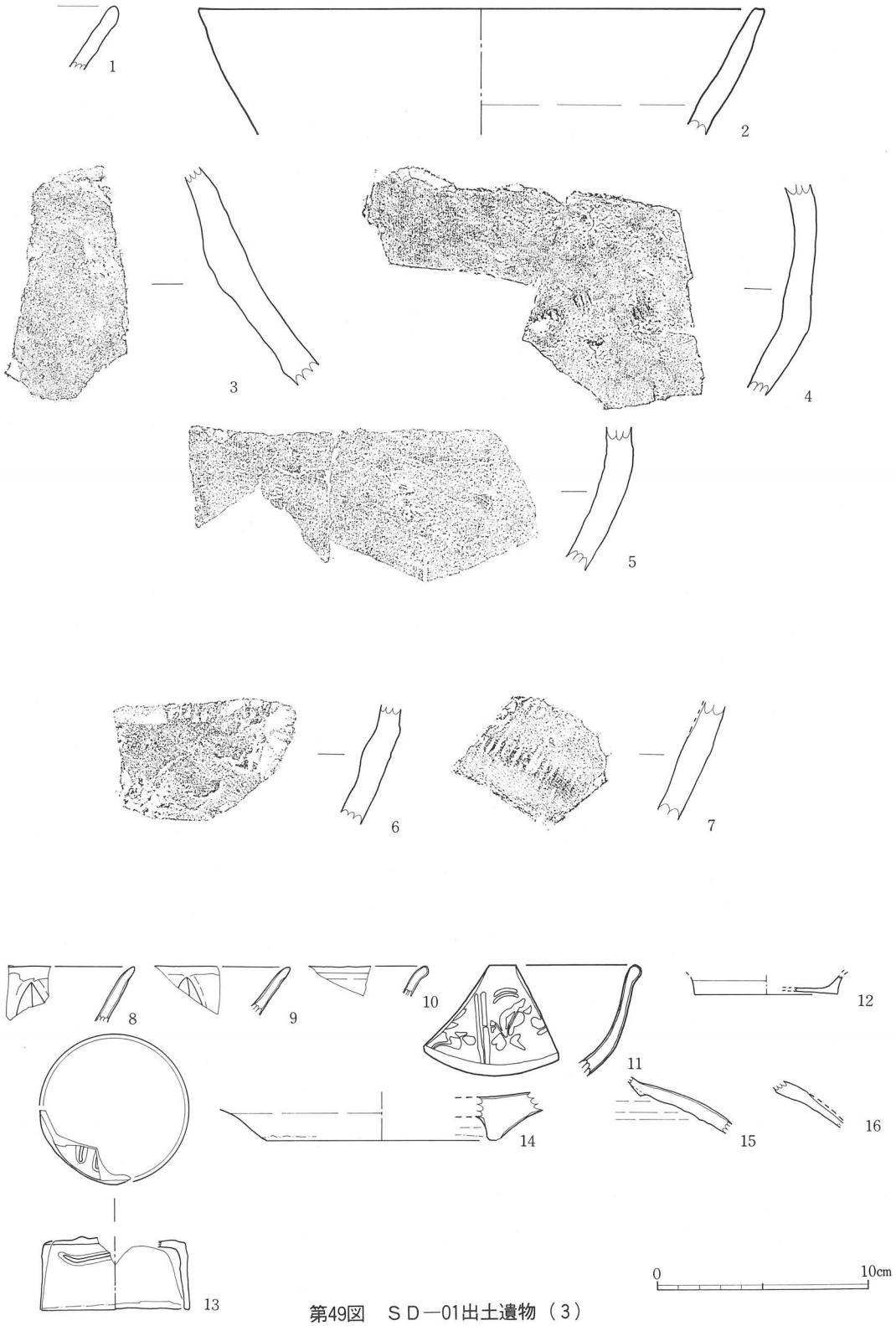
さて、橋脚柱穴跡は7基確認できたが、本来は10基で構成されていたと推定される。すなわち、1×4間の配置となり、特に堀跡最深部に1×2間を配し、北側1間分は約5mと間隔が広い。検出した橋脚跡の規模は、P_1 80×162cm・深さ73cm（古）・70.5cm（新）、P_2 52×60cm以上・深さ68cm、P_3 53×42cm以上・深さ43cm、P_4 16×18cm・深さ23cm、P_5 21×23cm・深さ37cm、P_6 73×86cm以上・深さ72cm、P_7 31×37cm・深さ55cmを測る。橋脚長は西辺と東辺で一定しないが、約12mを測り、幅も一定せず約2m前後となる。ただし、橋跡全長は堀幅にほぼ等しくなると考えられ、約15m前後と予想される。また、P_1では柱穴が



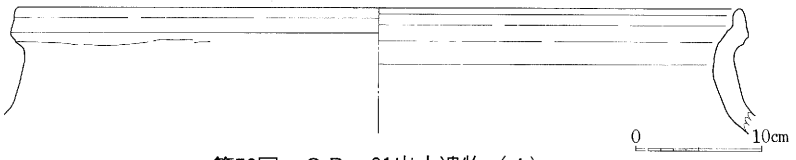
第47図　ＳＤ―01出土遺物（１）



第48図　ＳＤ―01出土遺物（２）



第49図　ＳＤ－01出土遺物（３）



第50図　ＳＤ－01出土遺物（４）

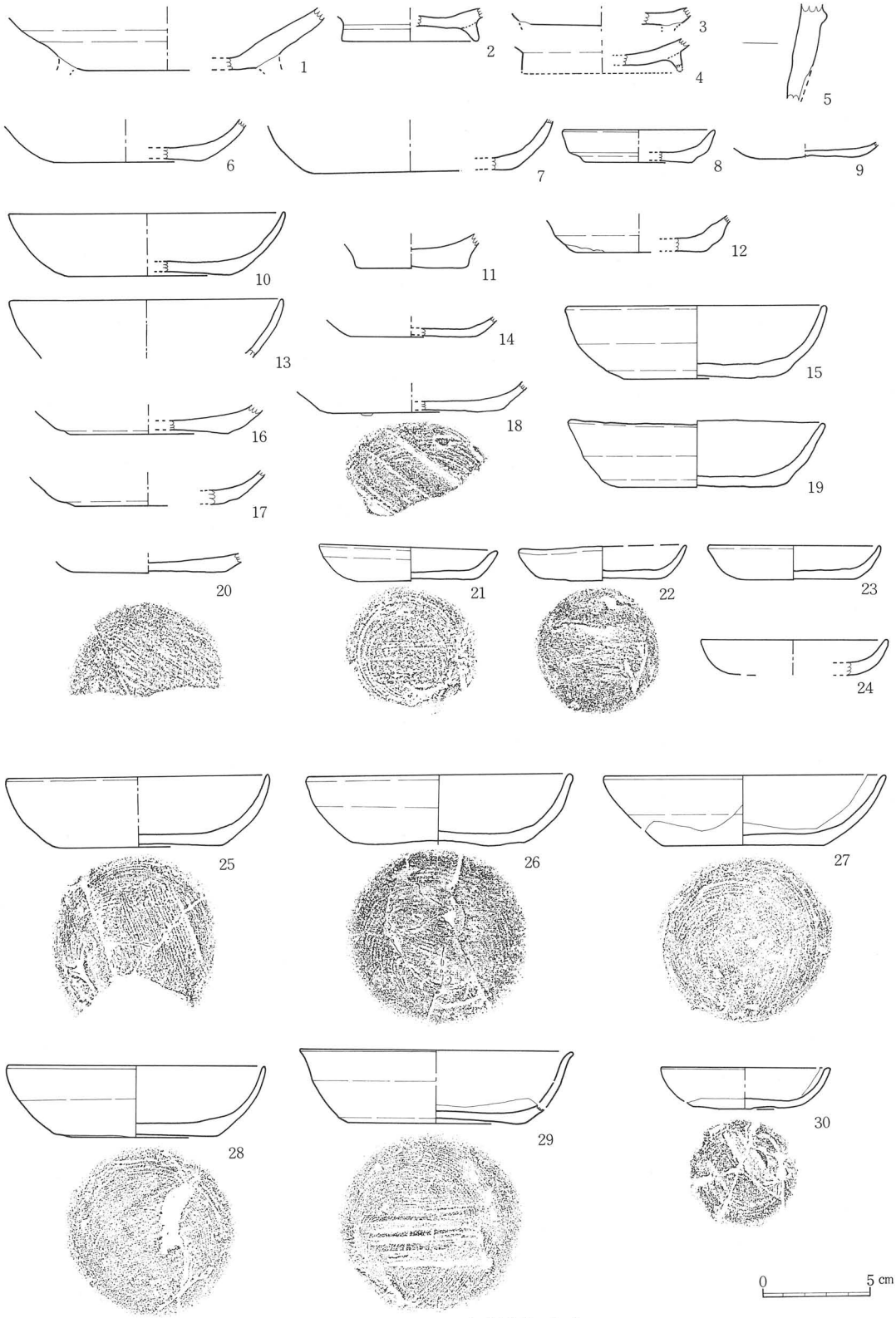
２基検出され(南側が古い)、柱の据え変えが行われたものと考えられる。さらに、北壁側西端の P_8 は深さ 63 cm を測る柱穴だが、このよう柱穴の存在から、他にも堀跡に付設された施設が存在する可能性があるかもしれない。出土遺物は、土師器片・須恵器片・角釘が少量出土したにすぎず、直接橋脚跡の年代を示すものはない。ただ、堀底面や 13 層出土遺物のうち、最新のものが 14 世紀後半～15 世紀前半である点から、橋脚跡の付設時期は 15 世紀前半かそれ以前になろう。上限時期は、8 a 層出土遺物が参考になるだろう。

なお、SD01 は調査終了後の工事に際して、E－22 区東寄りの地点で南側へ方向を変えることが確認できた。ここから、SD01（北辺堀）の長さは少なくとも約76m 以上の規模であることが判明した。また、方向は真北に対して、ほぼ直交する。

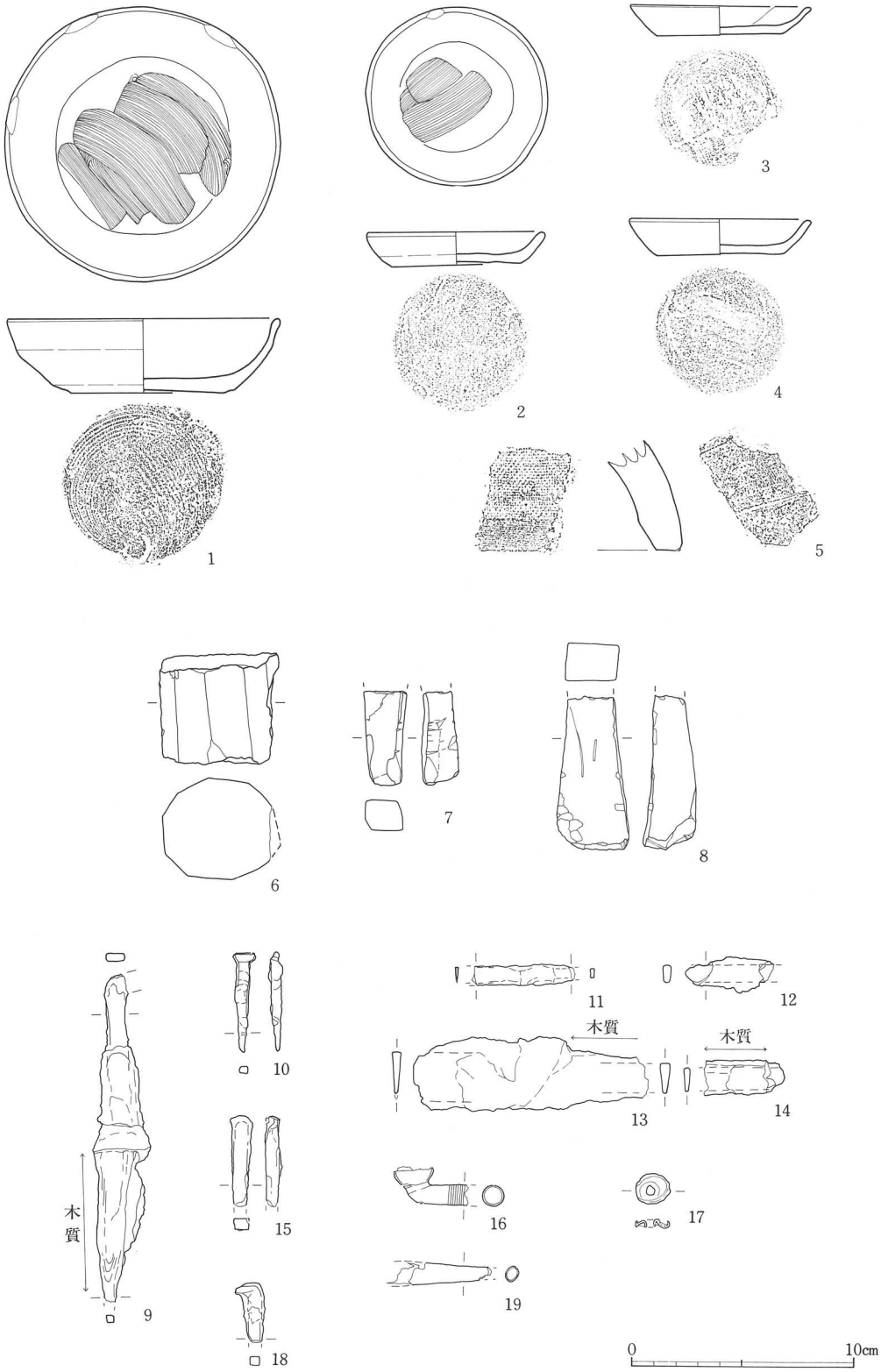
SD02（第 55 図）

Ⅰ・Ⅱ区（I－３区～H－９区）に位置し、SI02・SD05 を切る。また、後述する SD06・09・10 は、この溝と一連のものである。SD09 は SD01 に切られることから、SD02 も SD01 より古い。溝跡上部は約 30 cm 前後、天地返しにより削平されている。なお、調査時に I－６・７区で重複が認められたことから、古い溝を SD03 としたが、精査後 SD02 のプランを大きく逸脱することはなく、重複する部分も一部であることから、溝の改修などが行われた結果と判断し、SD03 は独立して扱っていない。溝跡の規模は、検出長約 30.5 m・深さ 0.6～0.7 m、 幅は約 1 m 前後であるが、I－６区や I－５区西部では約 1.5 m を測る。また、I－５区内では長さ約 3.2 m に渡って浅い部分が認められ、通常の溝跡の特徴と異なる事から、屋敷の入口と想定できると考えられる。溝幅は 0.8～1.2 m、 深さ 17 cm であるが、上部が削平されていることから、本来はもう少し規模も増すであろう。ところで、溝跡はさらに西方へ伸びる訳であるが、昭和 62 年に本調査区の西側隣接地で行われた調査（埋文研：1988）で検出された SD ３（真北基準で N－５°－E）は、SD02（N－81°－W）と規模等が類似し、方向がほぼ直交し、一連の溝跡ではないかと想定される。この想定が正しいとすれば、SD02 は全長約 55 m（半町）規模で「コ」字形又は、方形の区画溝となろう。さらに、北東側に位置する第５次調査地点(仙台市教育委員会：1982）で検出された１号溝跡は、前述の SD ３と一連の溝跡である可能性が考えられる。

SD02 は断面は「U」字形で埋土は自然堆積を示し、壁面・底面には薄い鉄分の集積層が認められる。



第51図　ＳＤ―01出土遺物（５）



第52図　ＳＤ－01出土遺物（６）

第53図　ＳＤ－01出土遺物（７）

出土遺物は、在地産（白石窯？）鉢１点、中国青磁盤１点、金属製器（金輪）１点、土師質土器皿18点があり、他に、須恵器（７点）・弥生土器（10点）・石製模造品（２点）・剝片（８点）瓦１点が出土している。なお、埋土上部では木炭片が目立った。このうち、土師質土器皿は器厚の厚いものが多く、底部切り離しが静止系切りの可能性のあるもの（第56図１）や底部を厚く平高台状に切り離したもの（第56図３・４）がある。

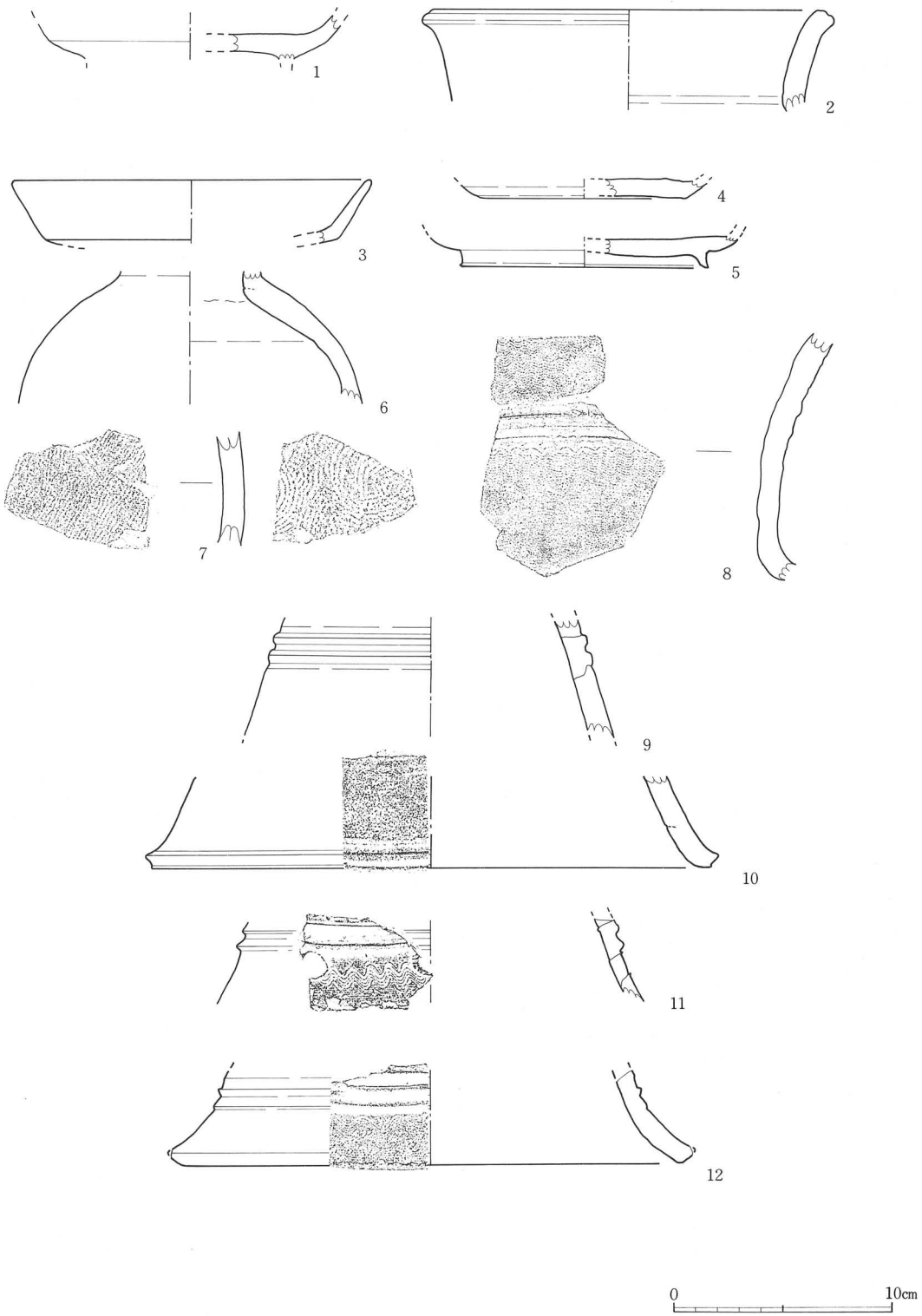
SD04（第32図）

Ｉ区（I・J－４区）に位置し、SI02・03を切り、SB02～04に切られる。SD02とは重複関係が不明であり、同時期か古い溝と考えられる。規模は長さ4.9ｍ・幅0.3～0.5ｍ・深さ0.2ｍ前後である。断面は鍋底状を呈し、埋土は自然堆積を示す。方向は弧状を呈すが、およそＮ－18°－Ｅを示し、前述のSD05とほぼ平行している。

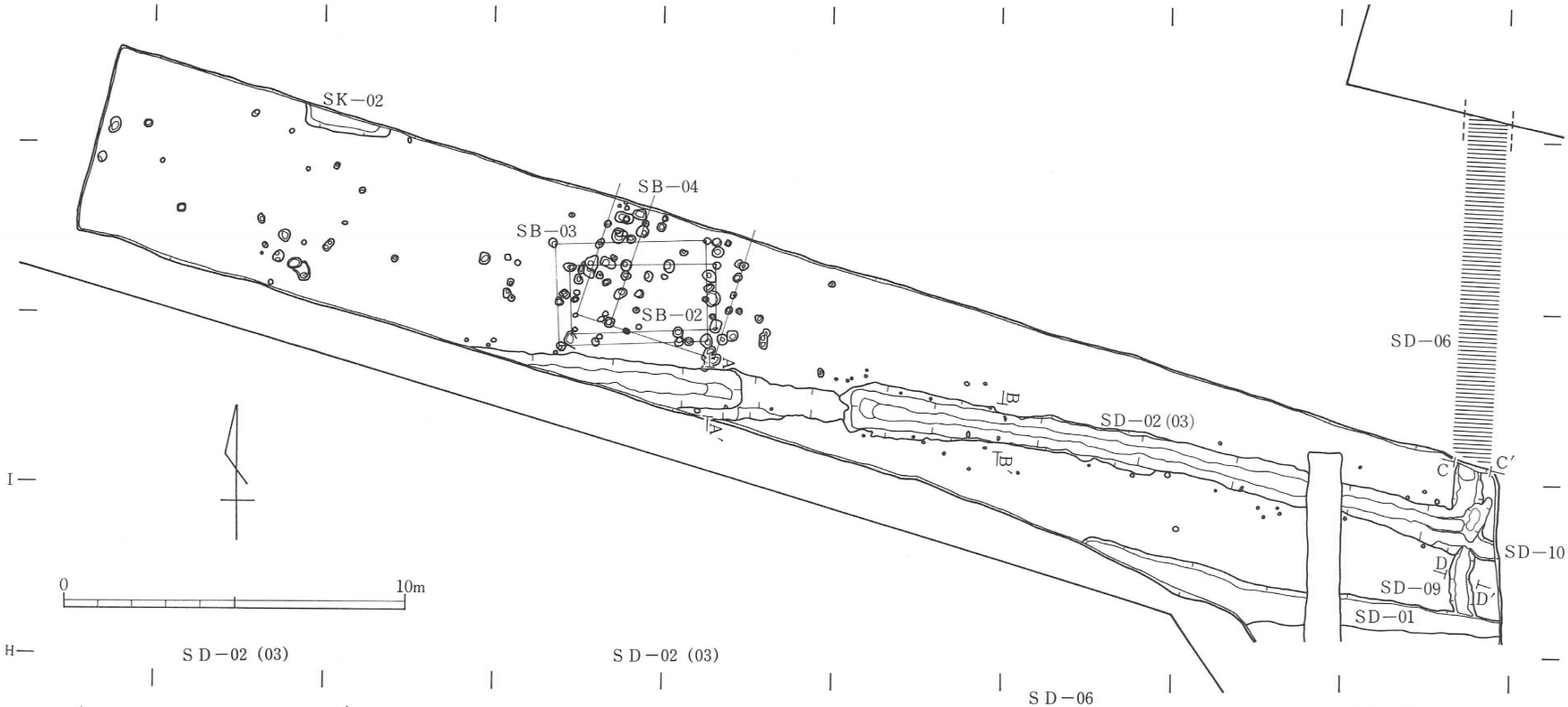
出土遺物は、土師器・弥生土器の破片少量とチップ１点が出土したが、時期決定資料にはならないと思われる。

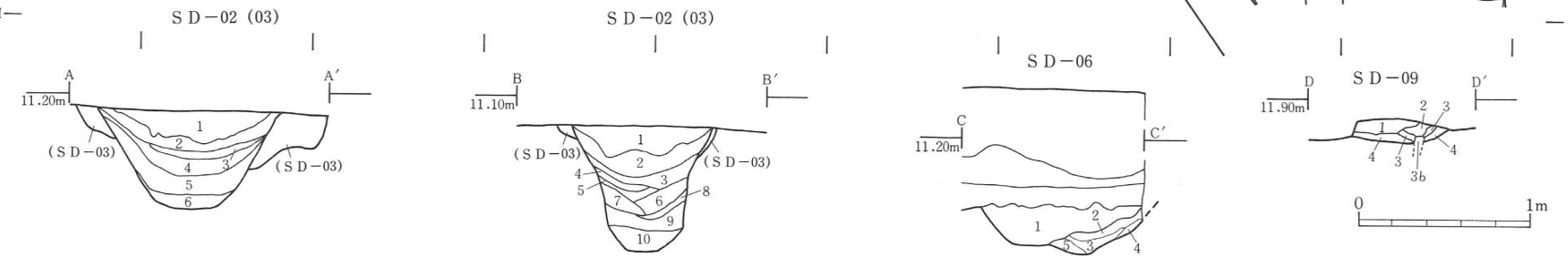
SD06（第55図）

II区（H・I－９区）に位置し、SD02・09・10と一連のものである。規模は、長さ1.4ｍ・幅約1.2ｍ・深さ約0.28ｍを測る。方向は真北方向に近く、北へ伸びる。屋敷跡の西辺を区画する溝跡である。溝底には段差があり、埋土の堆積状況から、２時期の変遷が考えられ、SD02と



第54図　ＳＤ－01出土遺物（８）





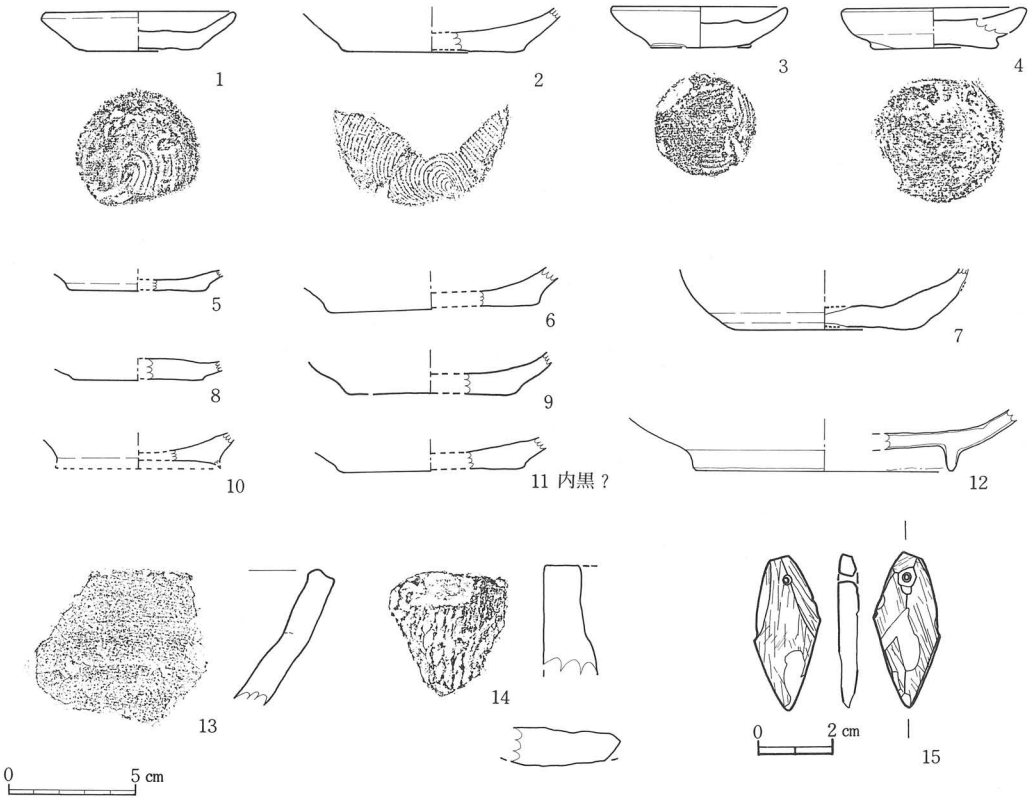
1	10YR4/2	灰黄褐色粘土質シルト	炭化物、鉄分、黄褐色土ブロック、グライ
2	2.5Y4/3	オリーブ褐色粘土質シルト	炭化物、鉄分、一部砂層、グライ
3	2.5Y4/2	暗灰黄色粘土質シルト	炭化物、鉄分、グライ
4	2.5Y3/2	黒色シルト	炭化物、鉄分、黄褐色土ブロック、砂、ややグライ
5	10YR3/4	暗褐色砂質シルト	炭化物、鉄分、砂との互層
6	2.5Y6/8	明黄褐色砂質シルト	鉄分ブロック

1	2.5Y4/2	暗灰黄色粘土質シルト	炭化物、斑状の鉄分、グライ
2	10YR3/3	暗褐色砂質シルト	炭化物、斑状の鉄分、黄褐色土ブロック、ややグライ
3	2.5Y4/3	オリーブ褐色粘土質シルト	炭化物、暗褐色土ブロック、砂混入、ややグライ
4	10YR4/3	にぶい黄褐色砂質シルト	炭化物、ややグライ
5	2.5Y4/6	オリーブ褐色砂	炭化物
6	10YR5/4	にぶい黄褐色砂	炭化物、黄褐色砂・オリーブ褐色粘土質シルトの薄層をはさむ
7	2.5Y4/2	暗灰黄色砂	炭化物
8	2.5Y5/4	黄褐色粘土	炭化物
9	2.5Y4/2	暗灰黄色粘土質シルト	炭化物、黄褐色粘土を縞状にはさむ
10	2.5Y5/3	黄褐色粘土質シルト	

1	10YR5/1	褐灰色粘土	鉄分ブロック、グライ
2	10YR7/4	にぶい黄橙色砂質粘土	
3	10YR4/1	褐灰色粘土	鉄分、グライ
4	2.5Y4/1	黄灰色粘土	グライ
5	10YR7/6	明黄褐色砂質粘土	褐灰色土混入

1	10YR6/1	褐灰色粘土	斑状の鉄分、グライ
2	10YR7/1	灰白色砂質シルト	斑状の鉄分
3a	10YR5/4	にぶい黄褐色粘土	灰白色土混入
3b	10Y4/3	にぶい黄褐色粘土	赤褐色粒子混入
4	2.5Y8/8	黄色砂質シルト	赤褐色粒子混入

第55図　ＳＤ−02・03・06・09平面・断面図



第56図　SD—02出土遺物　15：½

対応するものと思われる。出土遺物はない。

SD07（第57図）

VI区（B－14・15区）に位置し、天地返しによる撹乱を受けていたものの、掘り込み面はII層上面と推定される。規模は精査時には底部付近しか残存していないが、断面観察等によれば、長さ2.9m以上、幅1.35m以上、深さ0.4mを測る。方向は約N－73°－Wで、現在の道路や過去に調査された近世の溝跡や建物跡と方向がおよそ一致する。断面は皿状に近く、埋土は礫混り暗褐色シルトの単層である。底面には浅いピットがみられる。出土遺物はないが、中世の遺物包含層を切る点や前述の方向性の問題から、近世の溝跡と考えられる。

SD08（第58図）

II区（D・E－11区）に位置し、SD12内部で検出した。従って、SD12より新しく、SD15やSB01より古いことが明らかである。規模は、長さ約4.69m以上、幅0.49～0.75m、深さ0.16～0.23mを測り、方向はN－3°－Eである。断面は鍋底形である。埋土は基本的には黒色粘土質シルトの単層であるが、南端部では2層に細分される。また、南端部では浅い土坑が伴

なう。この溝の上部はSD12と共に埋め立てられたものと判断される。出土遺物は弥生土器片1点のみで、時期を決定できる遺物はない。

SD09（第55図）

II区（H－9区）に位置し、SD02・06のコーナー部分から南側へ伸びる。SD01に切られるが、SD02・06・10とは一連の溝と考えられる。規模は、長さ2.3m以上、幅0.5～0.6m、深さ0.15mを測るが、上部は天地返しにより撹乱を受けていることから、本来はもう少し規模が大きかったと考えてよい。断面は鍋底状に近く、埋土は粘土・砂質シルトが堆積している。溝の方向は、およそ真北方向と同じである。出土遺物はない。

SD10（第55図）

II区（H－9区）に位置し、SD02・06のコーナー部分から東側へ伸びる。上部は、天地返しによる撹乱を受けている。SD02・06・09と一連の溝と考えられる。規模は、長さ0.7m以上、幅0.55～0.6m、深さ約5cmを測る。方向は不明だが、SD02とほぼ同じになるだろう。ただ、V区で検出できないことから、南北どちらかに屈曲するかSD01に切られているものと予想される。出土遺物はない。

SD11（第58図）

II区（D・E－9区）に位置し、上部は近代のゴミ穴によって一部撹乱を受けている。近世の時期のSD01や通路跡に切られる。土塁やSB01（SX02）との関係は明確ではないが、溝上に土塁積土が認められないことから、土塁が機能していた時期と同じではないかと予想される。調査は、上面プランの確認とSD01との接合部の精査に留めざるを得なかった。規模は、長さ約7.5m以上、上幅5m以上、深さ1.48mを測る。南北方向の溝跡だが、方向は明確ではない。SD01との接合部には緩い段差があり、SD11の方が浅くなっている。出土遺物は、1層で常滑壷？1点、2層で土師質土器皿片12点があり、他に弥生土器・須恵器破片各1点ずつ出土している。時期決定資料は得られなかった。この溝は、城館内部をさらに区画するためのものと考えられ、同様の性格の溝はSD12・15も指摘できよう。

SD12（第58図）

III区（D・E－11・12区）に位置し、SD08・15、SB01（SX02）に切られ、SK12を切る。本溝跡については完掘できなかった。規模は、長さ5m以上、上幅約9m、深さ1.5m以上を測る。方向は、南北方向で真北に近い。埋土は、下半部が自然堆積を示し、前述のSD08使用後埋め立てられたもの（2a～5a層）と考えられる。埋め立ての理由は、後述するSD15の構築に求められよう。出土遺物は、下半の自然堆積層では鉄滓・多量の土師器片・石製模造品などがあるが、いずれも時期決定資料にならない。また、上半の盛土層では土師質土器皿丸瓦・須恵器などが出土し、土師質土器はSX02などと類似した特徴をもっている。しかし、SD01（中世

段階）に接続する溝跡であり、内部を区画する溝跡では最古のものである。溝内に古墳時代の遺物が多いのは、SK12を切っているためであろうか。

SD13（第57図）

VI区（A－14区）に位置し、SB05・06などの柱穴群に切られ、SI09を切る。規模は、長さ2.7m以上、上幅1.6～2.0m、深さ約0.7mを測る。方向は東西方向を示し、N－89°－Wでほぼ真北に直交する。出土遺物は、36層で土師質土器皿片4点・須恵器3点、下部（39層相当か）では、土師質土器か赤焼土器か判別し難いもの2点、須恵器2点が出土している。

古代か中世古段階の時期が想定され、城館造営以前とみられる。

SD15（第58図）

II区（D・E－10区）に位置し、SB01（SX02）に切られ、SD08・12上の盛土層を切っている。規模は、長さ6m以上・上幅約5.3m・深さ1.45mを測る。方向は南北方向で、約N－1°－Wを示す。この溝跡も一部の精査に留まった。埋土は、上層（1・2層）は黄褐色系砂層、下層（3・4層）は黒褐色ないし黄褐色砂質シルトでブロック土混入が見られ、最下層（5層）のみが自然堆積と思われる。大部分は人為的堆積ではないかと思う。また、壁面の下半部は入り組みが著しく、かなり水の影響があったものと予想される。

出土遺物は上層に多く、渥美壷？1点・土師質土器皿片3点（厚手）が出土し、他には須恵器・弥生土器・石製模造品などがある。

SD16（第57・65図）

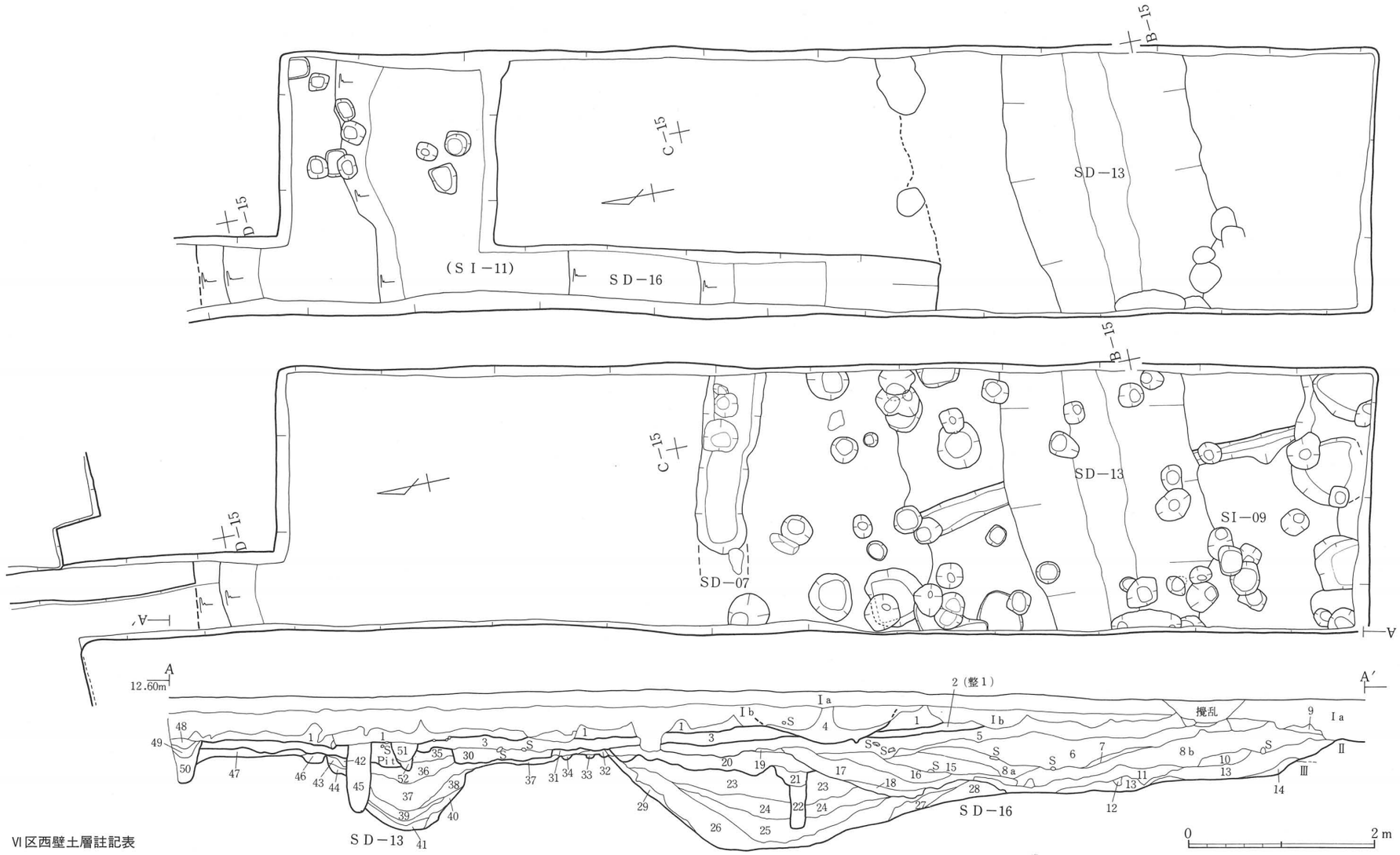
VI区（B・C－14区付近）に位置する。本遺構は調査区が狭いため性格が明確ではないが、溝跡として扱っておきたい。本溝跡は2時期に分かれ、古期段階はその上層に中世第2面が形成され、柱穴が検出されている。また、新期は古期の溝及び中世第2面を切り、埋土の上に中世の包含層及び中世第1面が形成されている。埋土の特徴は、両期とも褐色系と黒褐色系シルトの互層となっており、新期の8a・8b層には大量の礫が混入している。

出土遺物は、新期段階では在地鉢（8層）・土師質土器皿（8b層8点・13層8点・14層4点）・在地産壷？甕（埋土下部）が出土し、他に古代の丸瓦・須恵器・土師器・弥生土器・石製模造品が出土している。古期段階は若干の土師器が出土したものの、中世の遺物は出土していない。ただ、後述するように、中世第2面上の20層では土師質土器皿や常滑の製品が出土している。この20層の土師質土器は、新段階の8b・13層・SX02などと同様の特徴をもつ。

SD16は一般的な溝形態とは印象を異にし、特に新期のものは埋め戻された印象を強くもつ。土塁の構築などの土取り穴という見方もあるが、調査区が狭まい点明確でない。

その他の溝跡（第5図）

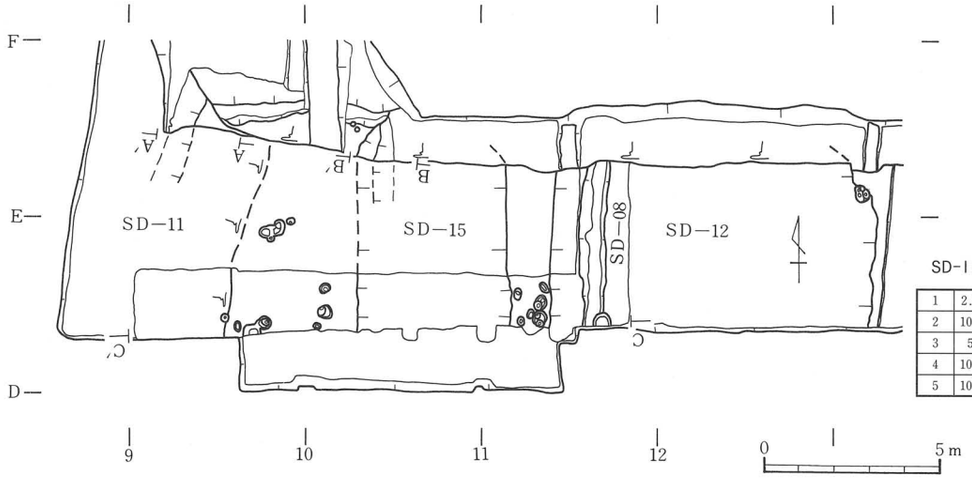
ここでは、調査終了後の工事に際し確認した溝跡について列記する。

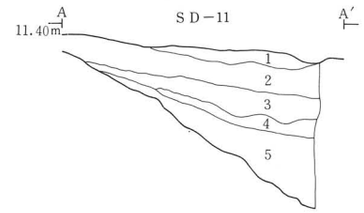


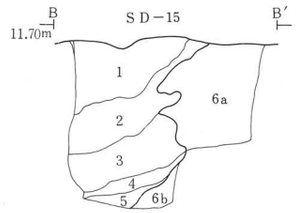
Ⅵ区西壁土層註記表

層位	土　色・土　性	備　考	層位	土　色・土　性	備　考	層位	土　色・土　性	備　考
1	10YR3/2　黒褐色シルト	炭	18	10YR3/3　暗褐色シルト	炭微量、褐色土ブロック多量	36	10YR3/2　黒褐色シルト	
2	10YR3/4　暗褐色シルト	炭・礫	19	10YR3/2　黒褐色シルト	焼土ブロック、炭	37	10YR3/2　黒褐色シルト	炭・褐色粒子
3	10YR2/3　黒褐色シルト	炭・礫（中世段階最新の整地層）	20	10YR3/3　暗褐色シルト	炭少量	38	10YR3/3　暗褐色シルト	褐色土ブロック多量、炭少量
4	10YR3/4　暗褐色シルト	礫　SD-07	21	10YR3/2　黒褐色シルト	炭・焼土粒・褐色土ブロック各少量　SB-05	39	10YR3/2　黒褐色シルト	黄褐色土ブロック多量
5	10YR2/2　黒褐色シルト	炭・褐色土ブロック少量、礫	22	10YR3/2　黒褐色シルト	炭・焼土粒・褐色土ブロック各多量　SB-05	40	10YR4/6　褐色砂質シルト	南壁側では黒壁土ブロック混入
6	10YR4/3　にぶい黄褐色砂質シルト	ブロック	23	10YR3/2　黒褐色シルト	褐色シルトの互層、炭少量	41	10YR3/3　暗褐色シルト	炭・南壁側では褐色土ブロック少量
7	10YR3/3　暗褐色シルト	小礫	24	10YR3/4　暗褐色シルト	黒褐色土ブロック少量	42	10YR3/2　黒褐色シルト	柱穴
8a	10YR3/2　黒褐色シルト	炭・礫・褐色ブロック	25	10YR2/3　黒褐色シルト	褐色砂質シルトの互層、炭	43	10YR2/2　黒褐色シルト	褐色土ブロック少量　柱穴
8b	2.5Y4/2　暗灰黄色シルト	黄褐色砂・黒褐色土ブロック	26	10YR3/4　暗褐色砂質シルト	礫少量	44	10YR2/3　黒褐色シルト	柱穴
9	2.5Y3/3　暗オリーブ褐色シルト	ややグライ	27	10YR3/4　暗褐色砂質シルト	炭	45	10YR2/3　黒褐色シルト	柱穴
10	10YR4/4　褐色シルト	小礫・炭	28	10YR2/2　黒褐色シルト	暗褐色シルトブロック混入・炭微量	46	10YR3/3　暗褐色シルト	褐色土ブロック多量
11	10YR3/3　暗褐色シルト	黒色土の大ブロック・炭	29	10YR2/3　黒褐色砂質シルト	褐色砂・炭少量	47	10YR3/4　暗褐色シルト	炭・黒褐色土ブロック少量
12	10YR2/2　黒褐色シルト	礫	30	10YR3/2　黒褐色シルト	礫・炭・各少量	48	10YR2/2　黒褐色シルト	炭・礫
13	2.5Y3/3　暗オリーブ褐色シルト	ややグライ・炭少量	31	10YR3/2　黒褐色シルト	褐色土ブロック・炭少量	49	10YR2/3　黒褐色シルト	褐色土ブロック多量、炭・礫
14	10YR2/3　黒褐色シルト	炭少量	32	10YR3/3　暗褐色シルト	炭・褐色土ブロック各少量	50	10YR3/2　黒褐色シルト	炭・褐色土ブロック・礫各少量
15	10YR2/3　黒褐色シルト	炭・礫・黄褐色ブロック	33	10YR2/3　黒褐色シルト	炭・褐色土ブロック	51	10YR2/2　黒褐色シルト	
16	10YR3/2　黒褐色シルト	礫・炭少量	34	10YR2/3　黒褐色シルト	炭・褐色土ブロック	52	10YR3/1　黒褐色シルト	
17	10YR2/2　黒褐色シルト	炭多量・礫	35	10YR3/3　暗褐色シルト	炭・小礫少量			

第57図　Ⅵ区ＳＤ−07・13平面・断面図





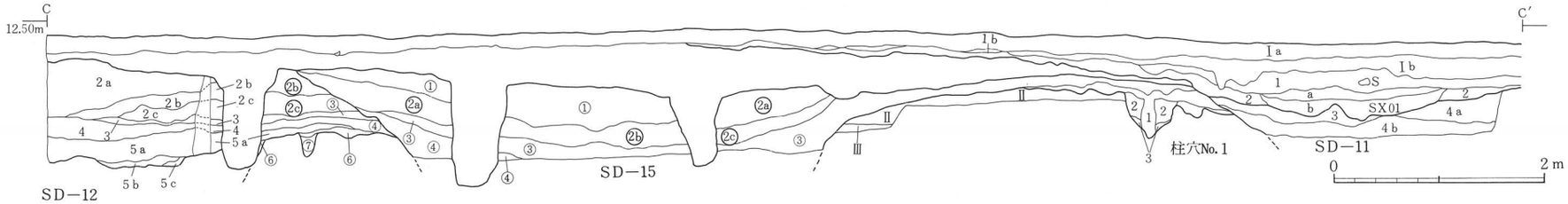


SD-11 土層註記表

1	2.5Y6/8	明黄褐色砂質シルト	褐色土が斑状に混入
2	10YR5/1	褐灰色シルト	黒色土粒子多量、酸化鉄、グライ
3	5Y4/1	灰色シルト	炭化物、酸化鉄多量
4	10YR4/1	褐灰色粘土質シルト	炭化物、酸化鉄多量、グライ
5	10YR6/1	褐灰色粘土質シルト	酸化鉄粒子多量、グライ

SD-15 土層註記表

1	10YR6/8	明黄褐色砂質シルト	黒褐色土斑状に混入
2	10YR3/1	黒褐色砂質シルト	明黄褐色土混入
3	10YR6/4	にぶい黄橙色砂	黒褐色土、灰白色土、酸化鉄斑状
4	10YR5/4	にぶい黄褐色砂質シルト	灰白色土酸化鉄、斑状に混入
5	10YR5/3	にぶい黄褐色砂	灰白色土酸化鉄、斑状に混入
6a	10YR6/6	明黄褐色砂	
6b	10YR6/4	にぶい黄橙色砂	



SD-12 土層註記表

2a	10YR7/8	黄橙色	小礫少量
2b	10YR7/6	明黄褐色	小礫少量
2c	10YR5/4	にぶい黄褐色	
3	10YR4/1	褐灰色	赤褐色粒子、炭化物粒子
4	10YR6/1	褐灰色	酸化鉄多量
5a	10YR3/1	黒褐色粘土質シルト	酸化鉄小礫少量
5b	10YR2/1	黒色粘土質シルト	SD-08
5c	10YR6/3	にぶい黄橙色シルト	SD-08

SD-15 土層註記表

①	10YR7/6	明黄褐色砂	小礫、砂
②a	10YR6/8	明黄褐色砂	灰白色土ブロック、酸化鉄
②b	10YR6/8	明黄褐色砂	
②c	10YR6/8	明黄褐色砂質シルト	黒褐色土斑状、明黄褐色土ブロック
③	10YR3/1	黒褐色砂質シルト	明黄褐色土混入
④		黄褐色シルト	礫
⑥	10YR5/1	褐灰色砂質シルト	
⑦	10YR5/4	にぶい黄褐色シルト	明黄褐色土（柱穴No. 2）

柱穴 No. 1

1	10YR4/1	褐灰色シルト	黄褐色粒子混入
2	7.5YR4/1	褐灰色シルト	
3	10YR4/4	褐色シルト	

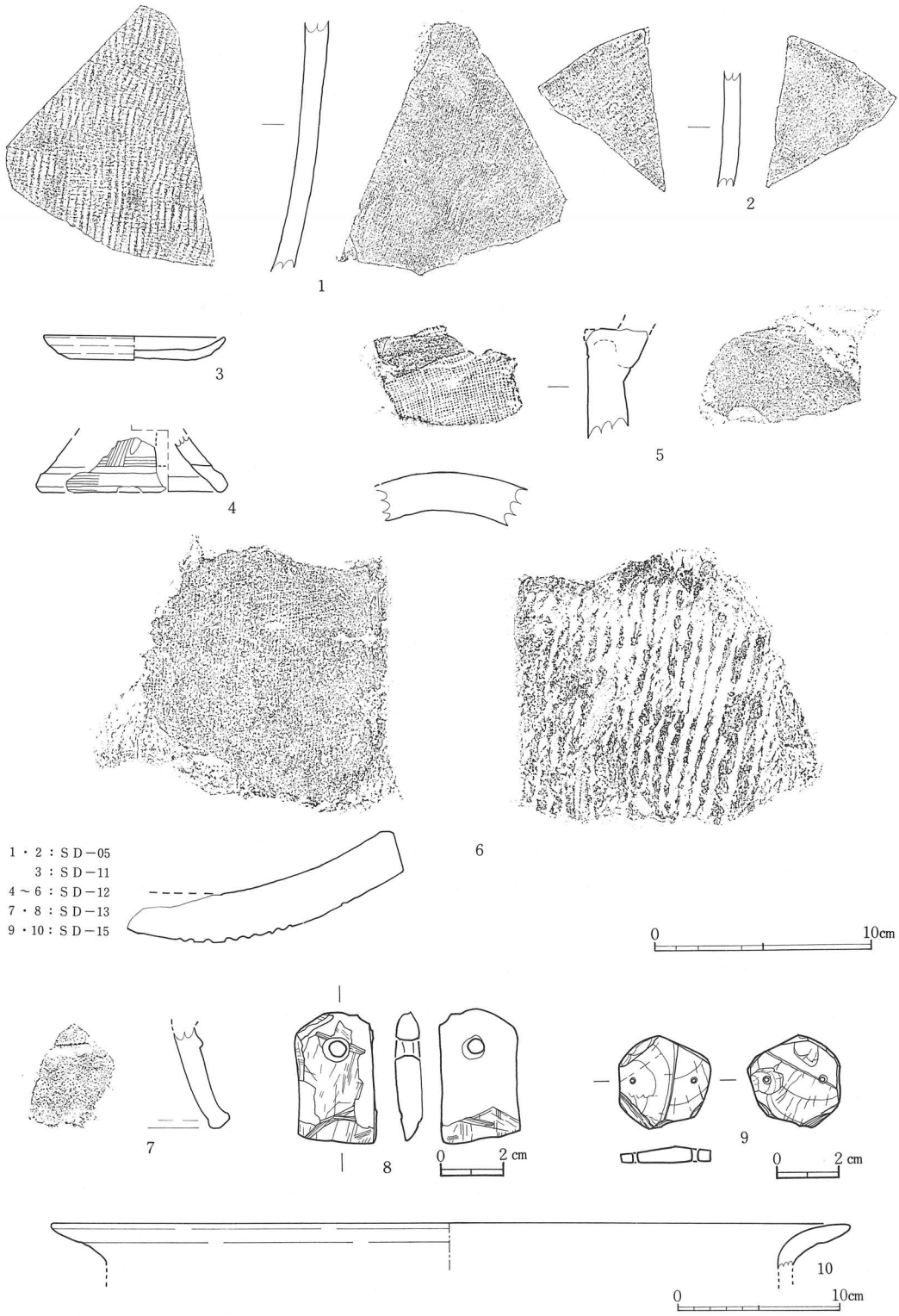
SD-11 土層註記表

1	10YR5/2	灰黄褐色シルト	褐灰色土、酸化鉄、炭化物(土壌整地)
2	10YR6/4	にぶい黄橙色砂質シルト	褐灰色土ブロック、酸化鉄
3	10YR4/1	褐灰色砂質シルト	黄橙色土ブロック、酸化鉄斑状
4a	10YR6/6	明黄褐色砂質シルト	灰白色土、黒褐色土、橙色土斑状
4b	10YR5/4	にぶい黄褐色砂	黒褐色土斑状

SX-01（撹乱か）

a	10YR5/1	灰色粘土質シルト	酸化鉄粒子斑状
b	10YR6/1	褐灰色シルト	灰白色土、酸化鉄粒子下部に酸化鉄層

第58図　ＳＤ—08・11・12・15平面・断面図



第59図　SD—05・11・12・13・15出土遺物　8・9：½、10：¼

SD06：II区の北側K－9区で南北溝確認。SD06の続きである。

SD17：J－11・12区南北溝。幅1.2m・深さ約0.25m。SD18と接する。

SD18：J－12区南北溝。幅2.4m・深さ0.42m。SD17の東側に接する。

SD19：J－12区南北溝。幅0.4m・深さ0.1m。SD18の東側で平均0.25m離れている。

SD20：J－14区。方向・規模不明。溝跡でない可能性もある。

SD21：J－20区。方向・規模不明。SD01に接続する溝跡か？。

SD22：H－21区。方向・規模不明。溝跡でない可能性もある。

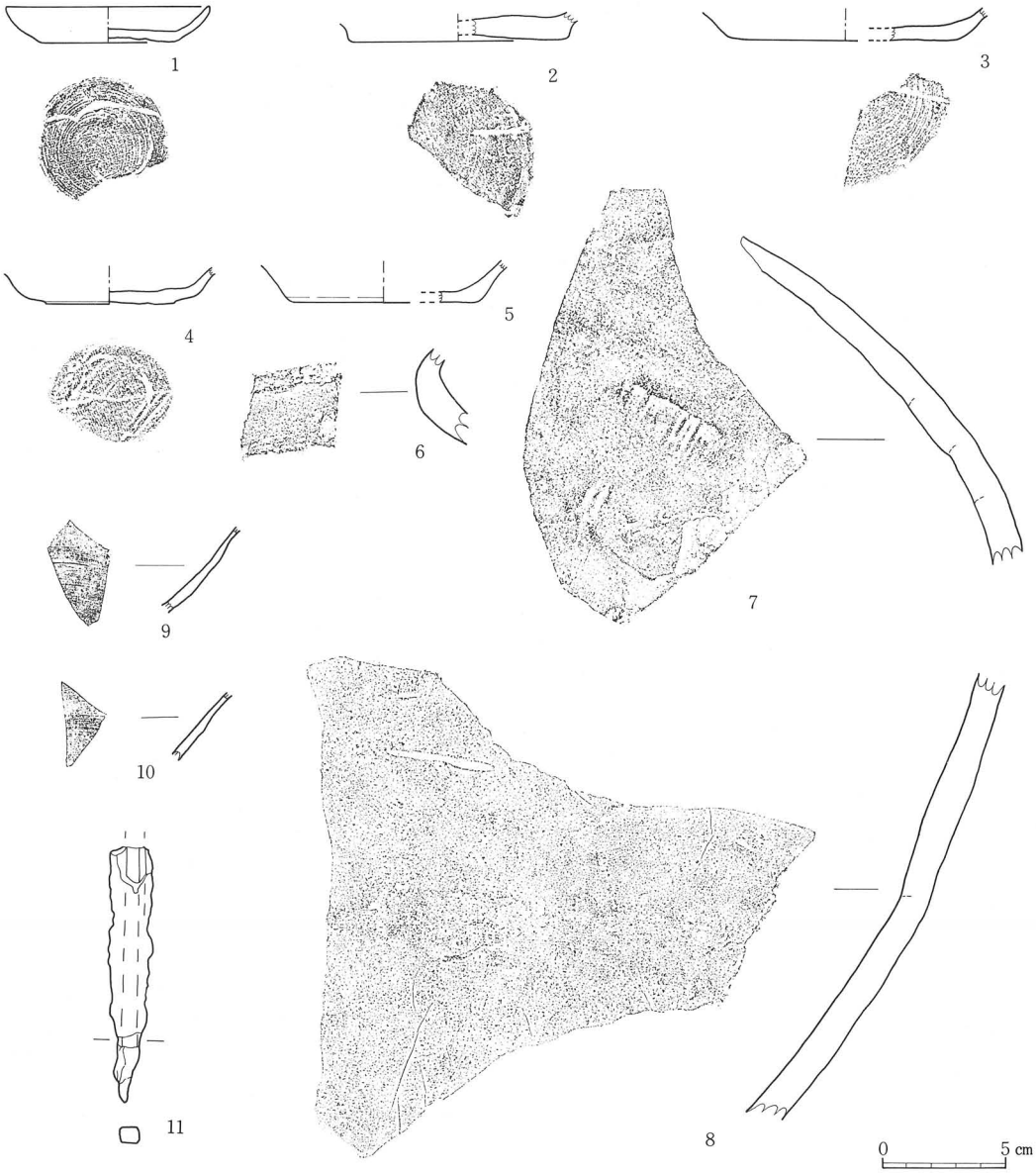
SD23：B－22区東西溝。幅約2m。VI区SD13あるいはVIII区南端溝？の続きか。

SD01：調査区東辺23ライン付近で、A～Eライン付近まで連続する南北大溝を確認。これは、SD01から続く、城館の西辺を区画する堀跡である。

土塁跡（SL01）（第5・34・60図）

土塁跡は、D－9～11区の精査開始後まもなく、北側から南側へ傾斜する人為堆積層を検出できたことにより、その存在が確認できた。人為堆積層は、土塁基底付近の積土と理解される。また、その範囲は調査区南壁付近まで確認でき、ちょうど、土塁基底部の南辺はDライン付近である。これに対応するように、VI区北部及びVIII区北部（セクション図参照）で段差が認められた。こうした特徴から、この城館跡の北辺には東西方向の土塁が存在していたことは確実である。ただし、城館造営当初から存在したものではない。重複関係をみると、土塁はSB01（SX02）より新しく、またSA01・02よりも新しいものと思われる。SD11との重複は認められず、同時期のものと理解している。規模は撹乱・削平が著しく明確ではないが、基底幅は約6m、長さは約60mと推定される。橋脚跡の南側では、土塁が切れていた可能性がある。また、E－10区では、長さ3.2m・幅0.5～0.6mの規模で段差が検出された。したがって、土塁と堀の間に幅の狭いテラス面が存在した可能性があろう。

出土遺物は、積土上面で渥美壺？1点・東濃産山茶碗1点・土師質土器皿1点・鉄製品（茎？）1点が出土し、他に瓦（古代）・須恵器・弥生土器がある。積土上部で渥美鉢？1点・角釘1点、8層で中国青磁碗1点・土師質土器皿片27点・炭化種子（米など）・弥生土器片3点が出土している。10層で東濃産山茶碗1点・土師質土器皿片50点・角釘2点・鉄製品1点・塊状を呈する炭化米が出土している。12層で土師質土器皿片9点・炭化種子（米など）が出土している。32層（東西セクションの5層相当）で土師質土器皿片7点・角釘1点・炭化種子（米など）が出土。積土最下部（11・12・14層相当）で渥美壺？1点・産地不明陶器1点・土師質土器皿片7点・須恵器1点が出土している。南側拡張区で土師質土器3点（層位不明）が出土している。これらの遺物のうち、最新のものは上面と10層で出土した山茶碗で14世紀後半とみられ、土塁構築時期はこれ以後になる。また、土師質土器皿は、SX02などと共通するロクロ調整で、底



第60図　Ⅱ区、土塁出土遺物

部に板状圧痕・内底面（見込）に指ナデ調整のみられる薄手のものが主体を占めている。なお、土塁が存在したと考えられるⅢ・Ⅳ区でも、天地返しによる撹乱坑から多数の遺物が出土している。特にⅣ区に多い。Ⅲ区では中世陶器（渥美・常滑・在地）・中国白磁・土師質土器皿などが、Ⅳ区では中世陶器（古瀬戸・常滑・在地）・東濃産山茶碗・楠葉型瓦器椀・中国磁器（龍泉窯系蓮弁文碗・小型盤、青白磁瓶子・合子蓋、白磁水滴）・土師質土器皿が出土している。土師質土器皿については、Ⅲ区ではSX02など共通する薄手のものが主体で、逆にⅣ区のものは、古

相を呈するとみられる厚手のものが主体である。また、Ⅲ区で渡金飾金具・炉壁、Ⅳ区で鉄滓・角釘・茎？　などが出土しているが、撹乱坑からは古代～近代のものも出土しており、時代を特定できない。中世の遺物については、おそらく土塁構築以前のものが主体となろう。瓦器椀は県内初の出土であり、山茶碗についてもそうであろう。

Ⅵ～Ⅷ区の調査状況

Ⅵ区（第５・57図）

Ⅵ区ではIa・Ib層で中・近世の遺物が出土しているが、それ以下の層では近世の遺物の出土はない。１～３・５・20層が中世の遺物包含層である。遺構は２・３層上面と20層下面（SD16古期の上面やSI09埋土上面）に認められる。前者を中世第１面、後者を中世第２面と理解している。こうした理解は柱穴の検出面に基づくが、SD16新期の検出面が20層上面である点で、20層上面が生活面であった可能性も考慮すべきであるが、調査区内では明確にできなかった。各層の遺物について述べる。１層では瀬戸瓶子？・在地産甕・土師質土器皿片29点、３層で土師質土器皿片73点、中国銭（宣和通宝）・刀子？・角釘・板状鉄製品・羽口片各１点が出土し、他に須恵器・土師器・弥生土器がある。５層では瀬戸灰釉盤（15世紀前半）・瓶類？、在地産（白石窯）甕、中国磁器（白磁合子身・青白磁梅瓶？）各１点、土師質土器皿片45点が出土し、他に須恵器などがある。20層では常滑甕１点、土師質土器皿片22点が出土し、他に須恵器などがある。このうち、土師質土器皿は、各層ともロクロ使用で底部に板状圧痕、内底面（見込）にナデ調整のある薄手のものが主体的である。ただし、20層ではロクロ使用の厚手も目立つ。薄手としたものは、SX02やSD01Ⅴ区８a層出土のものと共通した特徴をもつ。

Ⅶ区（第５図）

Ⅶ区としたトレンチは、SD01が南側へ方向を変える徴候が認められないかを確認するために設けたものである。しかし、ここでは確認できなかった。SD01が方向を南側へ変えるのは、23ライン付近であることは、すでに述べた。出土遺物は中・近世の陶磁器・土師質土器皿片などが少量出土している。そのうち、第63図８は常滑の甕窯系片口鉢で、市内では珍しい例である。

Ⅷ区（第５・40図）

Ⅷ区は、城館跡内部のコーナー付近の状況を知る目的で設けたトレンチである。柱穴は減少し、SK05（ゴミ穴）や配石遺構・土坑などが検出された。生活の主要な空間ではないことが確認できた。Ⅷ区では天地返しによる撹乱で明確ではないが、３・５層上に生活面があったようだ。また、12層上や精査最下面（Ⅲ層起源の整地層上面）に生活面がある。前者を第１面、後第２面と考えてよいが、Ⅵ区の生活面と直接対応するかは明確でない。特に、本区の場合、遺構の重複や細かな盛土整地、性格不明の落ち込みなどかなりの細かな変遷が予想される。第２

面の下を深掘した結果、さらに溝跡らしいもの（SX03）が存在している。充分な精査は行なえなかったが、これは、VI区のSD16と同様の溝の一部ではないかと推測される。北端の段差（セクション図参照）は、VI区北端部のものと同様ものであろう。また、北部ではIII・IV層起源とみられる盛土整地層（23層）がみられ、土塁と関連する整地層ではないかと推測している。

出土遺物はIa・Ib層で中・近世の遺物が出土している以外は、いずれも中世以前の遺物である。ただし、1層は遺物が出土しておらず明確でないが、他区の状況から近世以後の堆積層であろう。3層以下が中世の堆積層と考えられる。3層では、瀬戸鉄釉天目茶碗（15世紀）・灰釉盤（14世紀末～15世紀前半）、常滑壺？、在地産陶器（白石窯の甕・壺？、不明窯の甕・擂鉢）、角釘・鉄鍋（SX03のものとは別個体の口縁部破片）が出土し、他に須恵器・弥生土器などがある。23層では、中国白磁水滴、土師質土器皿片5点が出土している。南端の深掘区では、在地産陶器（白石窯鉢・不明窯鉢）、土師質土器皿片5点が上部（6～8層）で、土師質土器皿片6点が下部（9～11層）で出土している。土師質土器は、いずれもVI区と同様薄手のものがほとんどであり、わずかに、深掘区の下部のものに厚手のものがみられる。

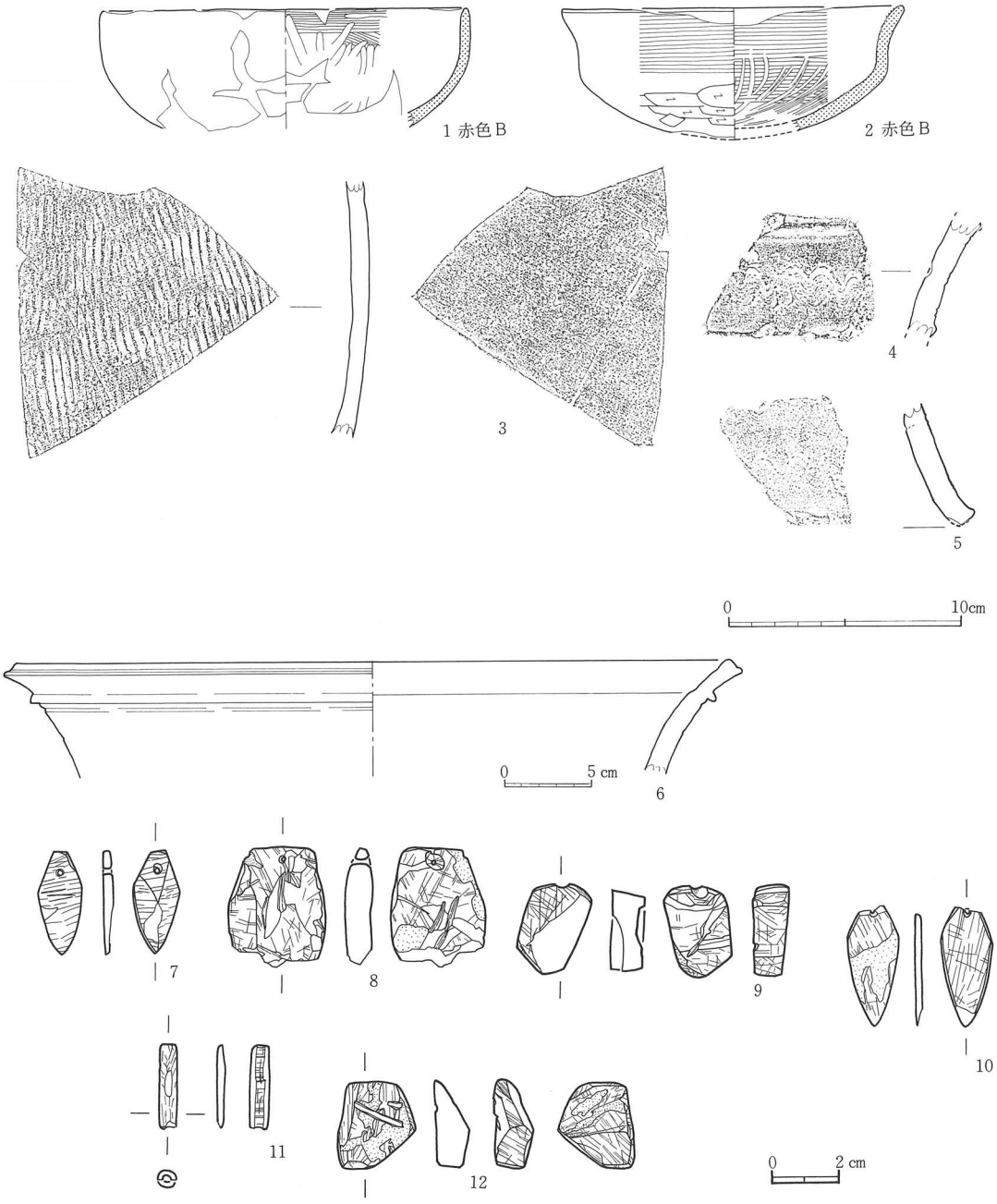
⑶　その他の遺物

ここでは弥生時代の遺物を扱う。遺構の検出はなく、いずれも古墳時代以後の遺構や包含層から出土したものである（第61図・第10・11表）。

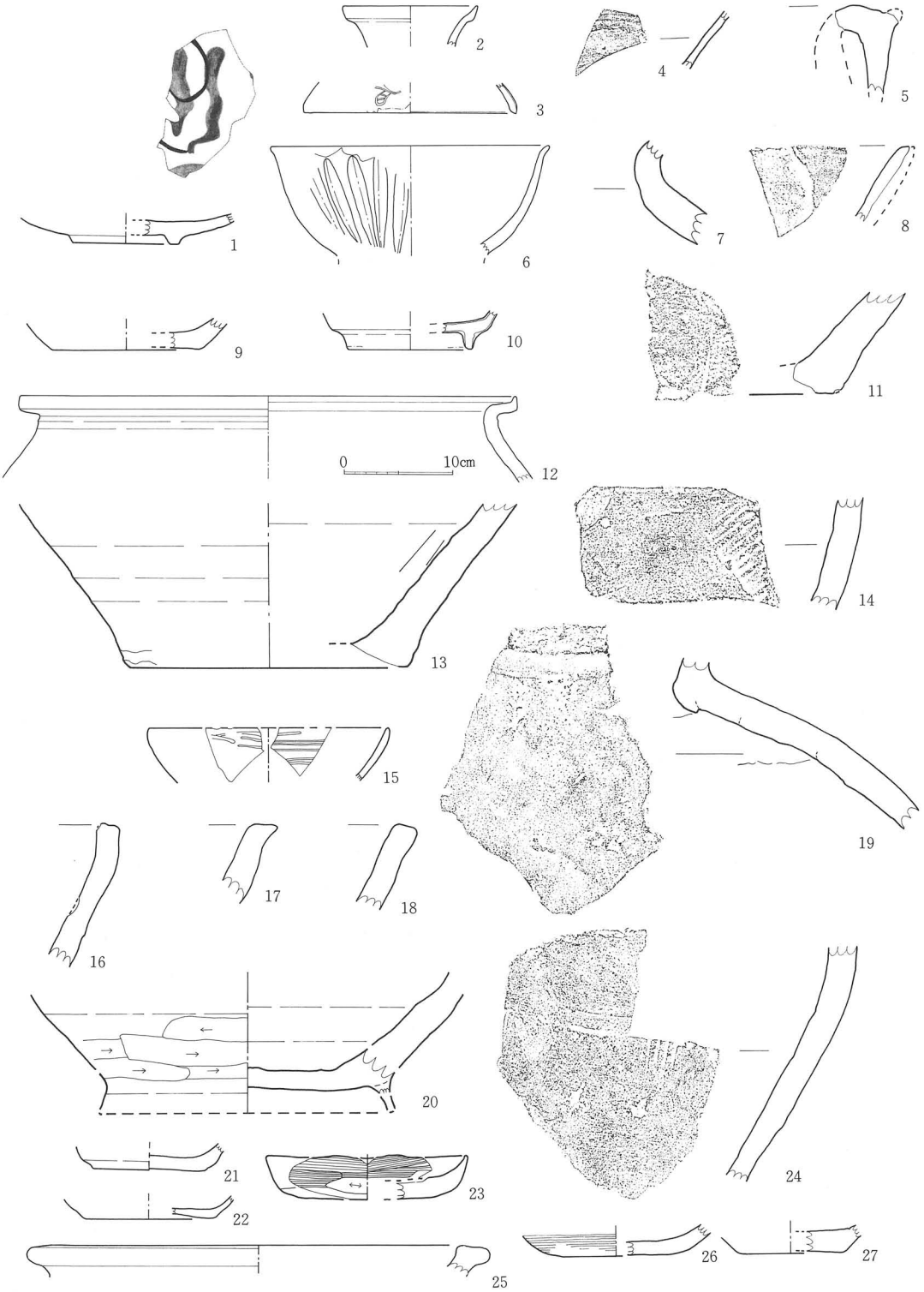
第61図4・6は桝形囲式以前と考えられ、特に、6は変形工字文とみられ、青木畑式併行と思われる。1～3・5・7・13～15・17・19・20・24～26は桝形囲式に属し、高坏・鉢・壺・甕・蓋などがある。この時期の遺物が最も多いようである。11・16・18～21～23・28は十三塚式に属し、ほとんど壺に限られるようである。その他については、地文のみで型式を特定できないものが大半である。また、破片総数240点のうち、天王山式の可能性をもつものは僅か1点である。

なお、中・近世の遺構などから出土した土師器・須恵器、遺構外から出土した中・近世の遺物については、特に説明を加えないので図・観察表を参照していただきたい（第62～66図・第11・12表）。

第61図　その他の出土遺物（1）弥生土器

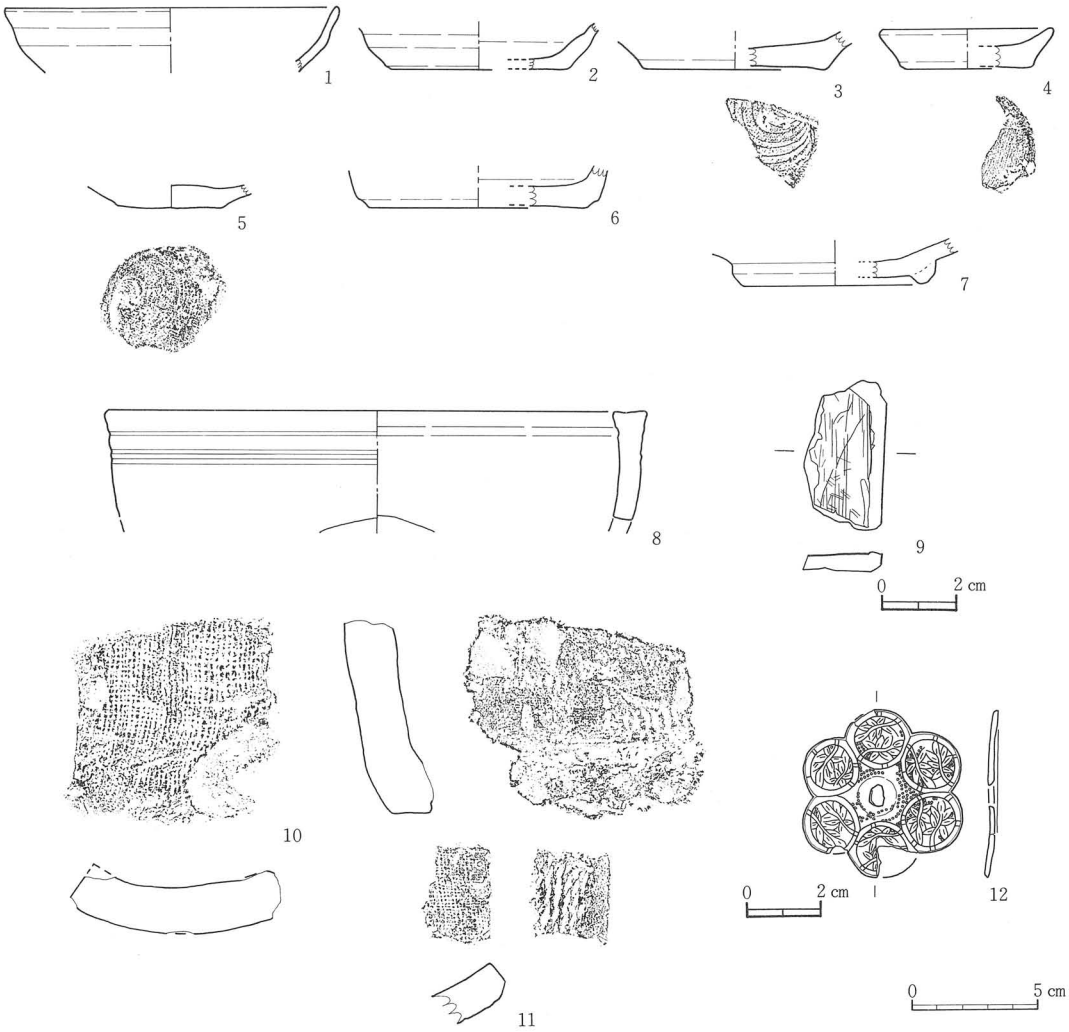


第62図　その他の出土遺物（２）遺構外（古墳）　7～12：½

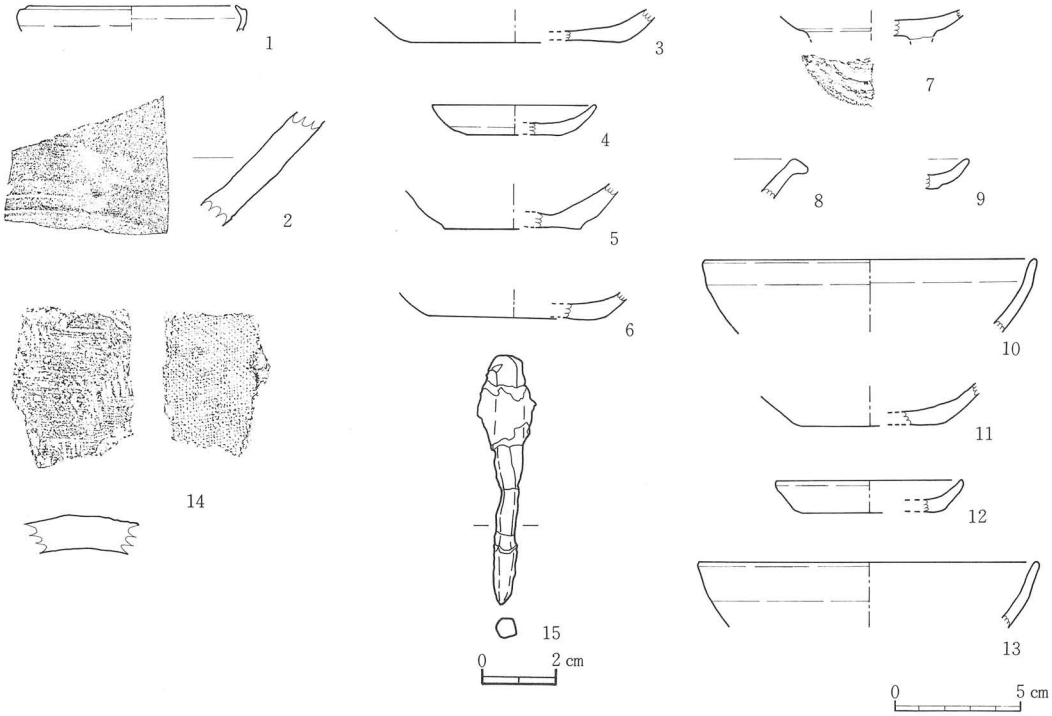


第63図　その他の出土遺物（3）遺構外（中・近世）

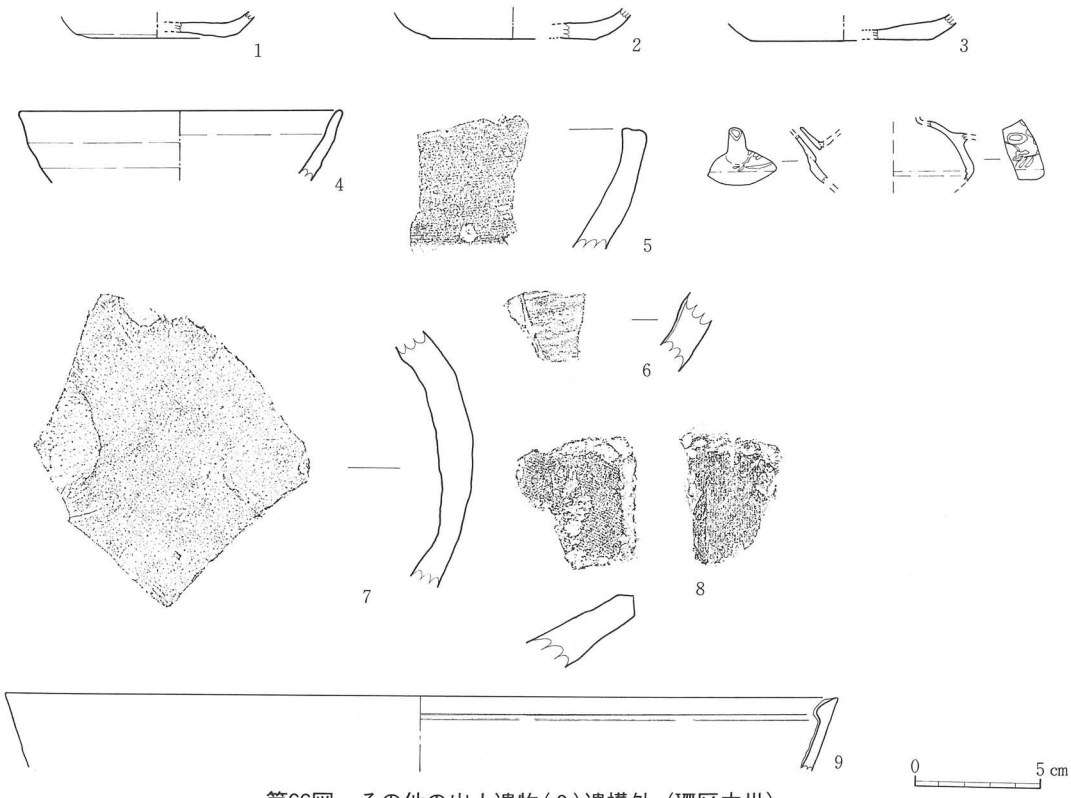
0　5 cm



第64図　その他の出土遺物（4）遺構外（Ⅲ区・Ⅴ区中世）　9・12：½



第65図　ＳＤ16・その他の出土遺物（５）遺構外（Ⅵ区中世）15：½



第66図　その他の出土遺物（６）遺構外（Ⅷ区中世）

1．第16次出土遺物観察表(1)

(単位 cm)

図版No.	遺物No.	層位	種類	器種	法量			特徴
SI－01（古墳）								
8－1	924	カマド南側床直	土師器	坏	口径 15.4	底径 －	器高 (4.3)	外面口縁部b、体部d、内面口縁部b、体部c→d、内面黒色処理、NO.12 A_3
2	890	床直	土師器	坏	－	－	(4.1)	外面口縁部b、体部c→d、内面口縁部b、体部c→d、両面黒色処理？ B
3	926 931	貯蔵穴埋2層	土師器	高坏	21.4	－	(4.9)	外面口縁部b、体部d、内面口縁部b、体部d、白針、NO.15
4	938 1008	カマド底面2号土坑	土師器	高坏	15.8	12.7	10.9	外面坏部b→d、脚部b→d、内面坏部b→d、脚部a、c→b、白針、短脚、支脚転用(脚部) NO.13、17、19 A_1
5	925 941	カマド南側2号土坑	土師器	高坏	20.2	－	(5.3)	外面口縁部b→d、体部c→d、内面口縁部b→d、体部b→d、白針
6	1007	貯蔵穴埋1層	土師器	高坏	15.9	－	(4.6)	外面口縁部b→d、体部e→d、内面口縁部d、体部e→d、赤色B
7	1006	床直	土師器	高坏	－	－	(12.5)	外面坏部c→d、脚部d、内面坏部c→d、裾部c→d、白針、NO.3 B_1
8	913 914	床直	土師器	高坏	－	－	(8.3)	外面脚部b→d、内面脚部c（ヘラ）→d？、NO.1 A_2
9	916	床直	土師器	高坏	17.8	－	(6.8)	外面口縁部b→d、体部c、e→d、内面口縁部b→d→c、体部b→d、赤色B NO.2
10	587	床直	土師器	壺？	－	6.2	(2.3)	外面体部c→d、内面体部c→d、白針、鋸歯文、8－13と同一固体か
11	1010	カマド内埋2層上面	土師器	壺（小）	10.1	4.05	11.35	外面口縁部b→d、体部e→d、内面口縁部b→d、体部c、NO.14 小型A
12	1009	カマド南脇土	土師器	壺（小）	11.0	4.5	14.6	外面口縁部b→d、体部c→e→d、内面口縁部b→c（ヘラ）→d、体部c 小型B
13	923 932	貯蔵穴埋1層	土師器	壺	13.7	－	(14.5)	外面口縁部b、体部c→e→d、内面口縁部b、体部c（ヘラ）NO.8 中型B
14	590	床直	石製品	剣形	長さ 3.4	幅 1.8	厚さ 0.45	欠損
15	587	床直	石製品	有孔円板	(3.0)	3.15	0.3	孔2ヶ、欠損
16	917	床面	石製品	紡垂車	径 (5.5)	孔径 (0.6)	1.3	重さ34.5g、軽石質凝灰岩、NO.5
SI－02								
10－1	524	床直	土師器	坏	口径 19.3	底径 －	器高 (3.6)	外面口縁部b、体部不明、内面口縁部b、体部不明、無彩 A_3
2	880	埋土	土師器	坏	－	－	－	外面口縁部b、体部d、内面口縁部d、体部d、無彩 A_2
3	900	床	土師器	高坏	12.8	－	(8.2)	外面柱状部d、裾部a→b→d、内面柱状部c、裾部a→b、白針、NO.2 B_2
4	888	床	土師器	甕	21.8	9.3	25.9	外面口縁部b、体部e→c→d、内面口縁部b、体部e→c→d、白針、無底式、NO.1 大型A
5	433	天地返し	須恵器	甕	－	－	－	外面降灰、内面ナデ、孔あり、TK208前後併行
6	910	埋土	石製品	有孔円板	長さ (1.7)	幅 (2.3)	厚さ (0.15)	孔2ヶ？、欠損
7	965	埋土	石製品	剣形	3.3	(1.75)	0.45	欠損
8	911	埋土	石製品	白玉	0.5	0.47	0.3	－
SI－05								
12－1	313	床直	土師器	坏	口径 13.8	底径 －	器高 (5.45)	外面口縁部b、体部e、内面口縁部b→d、体部c→d、白針、無彩、有段 C
2	615	埋土	土師器	坏	15.55	－	(5.5)	外面口縁部不明、体部e？、内面口縁部不明、体部不明、赤色B A_1
3	693	床 NO.1	土師器	坏	15.7	－	(5.8)	外面口縁部b→d、体部e→d、内面口縁部b→d、体部d、白針、無彩 B
4	1002	床 NO.5	土師器	坏	14.6	－	(5.3)	外面口縁部b、体部e→d、内面口縁部不明、体部d、白針、無彩 A_1
5	694	床 NO.2	土師器	坏	14.7	－	(6.6)	外面口縁部b、体部e、c→d、内面口縁部b→d、体部c→d、白針、赤色B A_1
6	712	床 NO.4	土師器	甕	22.0	8.5	29.8	外面口縁部b、体部c→d、内面口縁部b、体部c→d？ 大型B
13－1	788	床 NO.3	土師器	壺？	－	7.6	(25.1)	外面体部e→d、内面体部c（ヘラ）、白針
2	789	土坑粘土	須恵器	甕	－	－	(20.2)	外面平行叩き、降灰、内面ナデ消し、底部円弧状あて具痕、体部最大径推定30.8cm
14－1	742	床	石製品	－	長さ 33.8	幅 13.8	厚さ 9.1	裏面は深い溝が多い 砥石か
SI－06								
16－1	1003	床 NO.1	土師器	坏	口径 12.2	底径 3.5	器高 4.5	外面口縁部b、体部e→d、内面口縁部b→c（ヘラ）、体部c（ヘラ）→d、白針、無彩 B
2	730	床 NO.2	土師器	高坏	17.9	－	(7.1)	外面口縁部b、体部c、内面口縁部e→c、体部e→a、白針、無彩

2．第16次出土遺物観察表(2)

（単位 cm）

図版No	遺物No	層位	種類	器種	法量			特徴
3	882	貯蔵穴埋2層	土師器	高坏	－	－	(5.15)	外面体部e→d、内面体部c→d、白針、無彩
4	718	貯蔵穴埋2層	土師器	壺	16.0	－	(4.7)	外面口縁部b→c、体部b→c→d、内面口縁部b→c→d、体部c、白針、複合口縁　B
SI－06（古墳）								
16－5	719	床　NO.3	土師器	甕	口径 15.6	底径 －	器高 (10.75)	外面口縁部b→c、d、体部c→d？、内面口縁部b、体部c→d、白針　大型C
6	718	埋土下部	土師器	甕	15.4	－	(5.6)	外面口縁部b→c、体部c→d、内面口縁部b、体部a→c、白針
7	480	埋土下部	須恵器	壺？	－	－	－	外面ロクロ、内面ナデ？、白針、5c
8	467	埋土上部	須恵器	甕	－	－	－	外面平行叩き、内外ハジケ多数、5c
9	489	埋土上部	石製品	荒割	長さ 4.05	幅 2.2	厚さ 0.7	－
10	499	床直	石製品	有孔円板	2.0	(1.2)	0.2	孔1ヶ、欠損
11	481	床直	石製品	砥石？	(1.95)	(1.9)	(0.7)	欠損
12	458	埋土上部	金属製品	刀子？	4.4	1.05	0.2	鉄、茎
13	727	貯蔵穴埋土上部	金属製品	刀子	3.4	1.0	0.2	鉄、刃部？
SI－07								
19－1	1005	西壁溝	土師器	坏	口径 15.1	底径 3.8	器高 6.8	外面口縁部b、体部e→d、内面口縁部b、体部c→d、赤色B、NO.2　C
2	816	床直NO.1	土師器	坏	13.1	－	(5.5)	外面口縁部b、体部e→c、内面口縁部b→d、体部c→d、白針　D
3	825	床　NO.3	土師器	壺	13.6	7.4	(22.7)	外面口縁部b、体部c、e→d、内面口縁部b→c（ヘラ）、体部c（ヘラ）→d、白針
4	405	埋土上部	土師器	甕	13.2	－	(15.0)	外面口縁部b→a、体部c（ヘラ）、内面口縁部b→c（ヘラ）、体部c（ヘラ）、白針、小型A
SI－08								
21－1	327	埋土上部	土師器	坏	17.8	－	5.4	外面口縁部b、体部e、内面口縁部b、体部d、白針　A_3
2	794	床直 NO.3、4	土師器	坏	13.6	－	6.2	外面口縁部b、体部d、内面口縁部b、体部d、白針、SI－06と接合　A_2
3	740	床直	土師器	坏	－	－	－	外面体部e？→d？、内面体部c→d　B
4	483	埋土上部	土師器	壺	－	－	－	外面口縁部b、内面口縁部b、複合口縁　大型B
5	512	褐色土	土師器	壺	－	－	－	外面体部b、内面体部b、複合口縁　大型B
6	396 553	床直	土師器	甕	17.6	－	(8.4)	外面口縁部b、体部d、内面口縁部b→c、体部c、白針　大型A?
7	785	埋土	須恵器	甕	－	－	－	外面平行叩き、内面ナデ、白針、5c
8	323	埋土上部	須恵器	瓶	－	－	－	外面ナデ、内面ロクロ、孔は最大径より上位、TK208～23頃か
9	784	床(S－12)	石製品	敲石	長さ 18.3	幅 6.8	厚さ 3.4	2面使用
22－1	770	床(S－4)	石製品	剝片	5.2	3.25	1.05	荒割段階
2	775	床(S－9)	石製品	剝片	5.2	2.15	0.4	荒割段階
3	397	床	石製品	剝片	2.65	3.7	0.65	荒割段階
4	397	床	石製品	原石	4.8	2.5	1.0	荒割段階
5	768	床(S－2)	石製品	剝片	3.8	2.3	0.25	荒割段階
6	773	床(S－7)	石製品	剝片	3.55	3.35	0.6	荒割段階
7	772	床(S－6)	石製品	剝片	3.15	2.3	0.3	荒割段階
8	769	床(S－3)	石製品	フレーク？	3.5	1.4	0.25	－
9	776	床(S－10)	石製品	フレーク	2.4	1.75	0.25	－
10	771	床(S－5)	石製品	未成品	2.2	2.1	0.5	成形段階（円板？）
11	324	埋土	石製品	剣形	4.0	1.45	0.5	孔1ヶ

3．第16次出土遺物観察表(3)

（単位 cm）

図版No.	遺物No.	層位	種類	器種	法量			特徴
12	774	床(S－8)	石製品	チップ	1.9	1.5	0.2	(模造品)
13	767	床(S－1)	石製品	チップ	1.6	0.7	0.3	(模造品)
14	777	床(S－11)	石製品	フレーク	2.6	1.85	0.3	粘板岩？
15	778	床(S－16)	石製品	－	2.0	0.9	0.15	粘板岩？
SI－10（古墳）								
19－5	710 840	カマド底面	土師器	高坏	口径 －	底径 17.6	器高 (11.1)	外面坏部c、柱状部・裾部d、内面底部c→b、白針、支脚転用 A_2
SI－11								
24－1	897	C－14区埋土	土師器	高坏	口径 －	底径 14.4	器高 (7.3)	外面脚部b→d、内面脚部c→b、複合口縁 B_2
2	897	C－14区埋土	土師器	高坏	－	12.0	(9.05)	外面脚部d→b、内面脚部c、c（ヘラ）、白針、赤色A A_2
3	403	C－14区埋土	土師器	高坏	19.45	－	(7.3)	外面口縁部b→c、d、体部c→d、c、内面口縁部b、d、体部d、c、d区別しにくい
4	787	C－14区埋土	土師器	壺？	－	4.0	(15.9)	外面体部c、内面体部c、白針
5	300	C－14区埋土	土師器	壺	13.6	－	(22.5)	外面口縁部b→d、体部c、内面口縁部b、体部c、a、複合口縁 大型C
6	280	C－14区埋土	石製品	剣形	長さ 4.25	幅 2.5	厚さ 0.5	－
SK－03								
26－1	614 739	埋土	土師器	高坏	口径 17.8	底径 －	器高 (6.3)	外面口縁部上半b→d、体部下半e、内面口縁部b、体部d、赤色B
2	1004	埋土下部	土師器	甑	16.4	5.85	13.4	外面口縁部c（指）、体部c（指）、内面口縁部b→c、体部a、白針 小型 A_2
SK－06								
26－3	689	埋1層	土師器	坏	口径 －	底径 －	器高 －	外面口縁部b、体部d、内面口縁部b→d、体部d A_2
4	845	南壁面（テラス）	土師器	壺？	－	6.0	(7.6)	外面体部e→d、内面体部c、白針
5	1001	埋1層	土師器	甑	10.4	3.0	7.8	外面口縁部b→d、体部c、e→d、内面口縁部b→d、体部c？、白針 小型B
6	695 961	埋1層	土師器	甕	16.3	7.6	30.7	外面口縁部b、体部c、内面口縁部b、体部c、白針 大型B
7	705	埋2層	須恵器	甕	－	－	－	外面平行叩き、内面円弧、焼成不良、5c
8	446	粘土塊直上	須恵器	器台	－	－	－	外面ロクロ、内面ロクロ、凸帯2条（3条の可能性あり）5c
9	713	埋1層	石製品	チップ	長さ 1.55	幅 1.45	厚さ 0.25	(模造品)
SK－11								
26－10	675	底直	土師器	坏	口径 15.6	底径 －	器高 6.2	外面口縁部b、体部e→d、内面口縁部b、体部d、白針、無彩 E_1
11	675 802	底直	土師器	壺か	16.1	－	(16.5)	外面口縁部c→b、体部c→d、内面口縁部b→c、体部c（ヘラ）、白針 大型 A_1？
SK－12								
29－1	96	埋1層	土師器	高坏	口径 17.9	底径 －	器高 (6.5)	外面口縁部b、体部磨耗、内面口縁部b、d、体部d、赤色B
2	813	埋2層上部	土師器	高坏	18.6	－	(6.4)	外面口縁部b、体部c、e、内面口縁部b、体部磨耗
3	813	埋2層上部	土師器	高坏	18.4	12.5	(14.1)	外面坏部b→e、c、d、脚部b→d、内面坏部d、脚部e→d、坏底部e→c、赤色B
4	820	埋2層下部	土師器	高坏	15.7	11.7	13.9	外面坏部b→d、脚部d→b、内面坏部b→d→c、脚部d→b、白針、赤色B A_2
5	809	埋2層下部	土師器	高坏	21.0	15.1	16.5	外面坏部b→c、脚部b→d、内面坏部b、c、脚部c？、無彩 B_1
6	812	埋2層下部	土師器	高坏	17.5	13.4	16.6	外面坏部b→c→d、脚部e？→d、内面坏部b→d、脚部b、e、無彩 B_1
7	808	埋2層下部	土師器	高坏	－	－	(8.6)	外面脚部d、内面脚部c→d、白針 B？
8	806	埋4層	土師器	高坏	－	－	(5.0)	外面坏部b→d、坏底部d、内面坏部a→d、内底d、坏底部擦切痕
9	571 807	埋4層	土師器	高坏	裾径 (12.0)	－	(9.2)	外面脚部d、裾部不明、内面脚部e、裾部c、a、脚先端被熱、赤色A B_1
10	764	埋4層	土師器	高坏	口径 20.2	－	(7.2)	外面口縁部b、体部c（ヘラ）？内面口縁部b、体部d

4．第16次出土遺物観察表(4)

（単位 cm）

図版No.	遺物No.	層位	種類	器種	法量			特徴
11	830	埋 5 層	土師器	高坏	18.4	－	(6.65)	外面口縁部b→d、体部c、e→d、内面口縁部b→d、体部c→d
30－1	101	埋 1 層	土師器	甕	－	8.9	(8.4)	外面体部c？、内面体部c、白針、無底式
2	794	埋2層下部	土師器	壺	16.6	－	5.0	外面上部指オサエ→b、体部c、下部a→c→d、内面上部b→a→c→d、下部a→b→c、白針、複合口縁 大型B
3	741	埋2層上部	土師器	甑	長さ 5.7	－	－	表面c（ヘラ）把手
4	836	埋 2 層	土師器	壺（小）	12.0	－	(4.5)	外面口縁部b→c、内面口縁部b？、白針、赤色B 小型B
5	582	埋 4 層	土師器	坏	14.2	－	(5.3)	外面口縁部b、体部e→d、内面口縁部b、体部d、白針、無彩 大型B
6	826 828	埋 5 層	土師器	壺	－	6.0	(17.0)	外面口縁部b、体部d、内面口縁部c、体部c、白針、赤色A 中型A
SK－12（古墳）								
30－7	817 828	埋 4 層	土師器	壺	口径 11.8	底径 －	器高 (15.15)	外面口縁部b、体部c（ヘラ）、内面口縁部b、体部c（ヘラ） 中型B？
8	747	埋 4 層	土師器	壺（小）	12.0	－	5.8	外面口縁部b→d、内面口縁部b→d、白針
9	807	埋 4 層	土師器	壺（小）	－	3.65	(5.2)	外面頸部b→d、上部c→d、下部e→d、内面上部、指オサエ
10	569 809	埋2層下部	土師器	甕	17.8	－	(4.2)	外面口縁部b→a、内面口縁部a→b→c（ヘラ）
11	814	埋 5 層	土師器	甕	14.8	－	(4.7)	外面口縁部b、体部a、内面口縁部b、体部c（ヘラ）、白針
12	814	埋 5 層	土師器	壺（小）	10.8	－	(10.05)	外面口縁部b→d、体部c（ヘラ）→d、内面口縁部b、c（ヘラ）→d、体部c、白針 小型A
31－1	103	埋 1 層	土師器	坏	14.4	－	(4.7)	外面口縁部b、体部d、内面口縁部b、d、体部d、白針、無彩 A_1
2	812	埋2層下部	土師器	坏	14.3	－	3.8	外面口縁部b、体部e→c→d、内面口縁部b→d、体部d B
3	580	埋2層下部	土師器	坏	12.2	－	4.1	外面口縁部b→d、体部d、内面口縁部b、体部d、両面黒色処理、白針 A_2
4	557 581	埋 2 層	土師器	坏	11.4	－	6.1	外面口縁部b、体部d、内面口縁部b、体部c（ヘラ）→d、無彩 B
5	573 585	埋 2 層	土師器	坏	15.8	－	(5.8)	外面口縁部b→d、体部e→d、内面口縁部b→d、体部d、無彩 A_1
6	569	埋 2 層	土師器	坏	15.0	－	(4.3)	外面口縁部b、体部d、内面口縁部b、体部d、両面黒色処理、白針 A_1
7	582	埋 4 層	土師器	坏	14.2	－	(5.3)	外面口縁部b、体部e→d、内面口縁部b、体部d、白針、無彩 B
8	831	埋 4 層	土師器	坏	12.6	－	(7.15)	外面口縁部b、体部e→d、内面口縁部b、体部c→d、無彩 A_3
9	581 582	埋 4 層	土師器	坏	14.8	－	(5.8)	外面口縁部b→d、体部c→d、内面口縁部e→b、白針、無彩 B
10	800	埋 5 層	土師器	坏	13.6	3.8	(5.9)	外面口縁部b、体部d、内面口縁部b、体部c→d、白針、赤色A A_3
11	571	埋 4 層	土師器	坏	－	－	－	外面口縁部b、体部e→c、内面口縁部b、体部c（ヘラ）、白針、無彩 B
12	741	埋土上部	土師器	坏	－	－	－	外面口縁部b、体部d、内面口縁部b、体部c→d、無彩 A_2
13	759	南部 埋土上部	土師器	坏	－	－	－	外面口縁部b、体部c、内面口縁部b、体部d、白針、黒色処理？、赤色B A_2
14	599	埋1層下部	土師器	坏	－	－	－	外面口縁部b、体部C？、無彩 B？
15	599	埋1層下部	土師器	坏	－	－	－	外面口縁部b、体部c、内面体部c、無彩 A_2
16	103	埋 1 層	土師器	坏	－	－	－	外面口縁部b、体部c→d、内面口縁部d、体部d、白針、無彩 A_3
17	897	埋 1 層	土師器	坏	－	－	－	外面口縁部b→e、内面口縁部b→e、体部c→d、白針 A_2
18	558 559	北東コーナー	土師器	坏	－	－	－	外面口縁部b、体部c？、内面口縁部b、体部b→c？、白針、無彩 B
19	572	埋土上部	須恵器	甕	－	－	－	外面平行叩き、内面ナデ消し、5c
20	586	埋土上部	須恵器	甕	－	－	－	外面平行叩き、内面ナデ消し、5c
21	586	埋土上部	石製品	剣形	長さ (4.35)	幅 1.9	厚さ 0.4	模造品
22	569	埋土	石製品	有孔円板	(1.45)	(1.8)	0.25	孔2ヶ、欠損、模造品
23	599	埋1層下部	石製品	有孔円板	1.7	2.1	0.35	孔1ヶ、模造品
24	571	埋 4 層	石製品	有孔砥石？	(6.65)	4.1	1.25	粘板岩？、欠損

5．第16次出土遺物観察表(5)

（単位 cm）

図版No.	遺物No.	層位	種類	器種	法量			特徴
25	571	埋 4 層	石製品	剝片	5.5	6.25	0.85	粘板岩？、荒割？
SB－01（中世）								
35－1	439	埋 pit 3 土	土師質土器	小皿	口径 7.0	底径 4.4	器高 1.4	B、ロクロ、切り離し不明
SX－02								
35－2	117	埋土	中世陶器	壺？	口径 －	底径 －	器高 －	外面刷毛目、灰釉、12c～13c
3	117	埋土	土師質土器	小皿	－	5.4	(0.8)	A、ロクロ、見込みナデ、回転糸切り、板状圧痕
4	117	埋土	土師質土器	小皿	7.6	(5.4)	1.8	A、ロクロ、切り離し不明、厚手
5	117	埋土	土師質土器	小皿	8.1	5.4	1.5	B、ロクロ、切り離し不明、磨耗
6	115	埋土	土師質土器	小皿	7.0	5.1	1.3	A、ロクロ、見込みナデ、回転糸切り
7	115	埋土	土師質土器	皿	－	6.1	(1.5)	A、ロクロ、見込みナデ、回転糸切り、板状圧痕
SK－02（中世）								
35－8	115	埋土	土師質土器	皿	口径 －	底径 7.5	器高 (1.6)	A、ロクロ、見込みナデ、回転糸切り
9	115	埋土	土師質土器	小皿	7.6	6.0	1.1	A、ロクロ、見込みナデ、回転糸切り？、板状圧痕
10	115	埋土	土師質土器	小皿	6.8	4.9	1.2	A、ロクロ、回転糸切り、磨耗
11	115	埋土	土師質土器	小皿	7.5	5.1	1.2	B、ロクロ、切り離し不明、板状圧痕
12	115	埋土	土師質土器	小皿	6.5	4.5	1.9	A、ロクロ、切り離し不明
13	115	埋土	土師質土器	皿	13.2	－	(2.9)	A、ロクロ
14	115	埋土	土師質土器	小皿	8.6	－	(1.2)	A、ロクロ
15	115	埋土	土師質土器	皿	13.7	－	1.2	D、ロクロ
16	115 351	埋土 最下層	土師質土器	皿	－	7.3	(1.9)	D、ロクロ、見込みナデ、回転糸切り、板状圧痕
17	351	最下層	土師質土器	皿	12.8	7.1	3.9	A、ロクロ、回転糸切り
18	642	底面	土師質土器	小皿	－	5.0	(1.5)	B、ロクロ、回転糸切り
19	117	埋土	石製品	有孔円板	長さ 2.25	幅 3.7	厚さ 0.4	－
20	239	埋土	金属製品	釘	(3.9)	0.8	0.75	鉄、折釘、先端欠損
21	115	埋土	金属製品	釘	8.4	0.5	0.5	鉄、折釘
22	125	埋土	金属製品	釘？	(3.7)	0.9	0.6	鉄、欠損、西側土坑出土
SK－05								
41－1	526 533	埋土底面	中世陶器	甕	口径 －	底径 －	－	肩部厚手、在地(2)？、14c、取り上げ NO.3＋NO.5
2	486	埋土	金属製品	釘	長さ 5.25	幅 0.4	厚さ 0.48	鉄、折釘
3	486	埋土	金属製品	釘	7.9	0.56	0.5	鉄、折釘
4	535	埋土	石製品	硯	(11.1)	(9.3)	(2.1)	欠損品、周辺部は未加工、粘板岩
5	527 387	埋土2層	中世陶器	甕	－	－	－	刻線画、押印（格子状？）、在地(1)、14c
7	486	埋土	石製品	有孔円板	2.5	2.3	0.5	孔2ヶ
SK－07								
41－6	620	埋土	土師器	坏	口径 12.8	底径 －	器高 5.6	外面口縁部b、体部e→c→d、内面口縁部b、体部c、白針、赤色B C
SK－08								
41－8	525 537	埋土上部 埋土	中世陶器	甕	－	－	－	外面テリ有り、在地、ヘラ書き？SK－02と接合
SK－10								

6．第16次出土遺物観察表(6)

（単位 cm）

図版No.	遺物No.	層位	種類	器種	法量			特徴
41－9	662 658	埋土上部	中世陶器	甕	－	－	－	軽石、在地(1)
10	684	埋土	中世陶器	甕	－	－	－	口縁部（受口状）、白石窯系？、13c～14c
SD－01								
47－1	31	埋2層上面	近世陶器	碗	口径 －	底径 (4.8)	器高 (2.3)	灰釉、透明な淡黄色、貫入、畳付のみ露胎（研磨）、肥前系、京焼風、17c後葉～18c前葉
2	123	埋3、4層	近世陶器	碗	12.0	－	(4.6)	鉄釉、不透明、光沢なし、全体に細い貫入、産地不明（肥前系か）、17cか
3	33	埋2層	近世陶器	丸皿？	－	7.2	(1.0)	灰釉、透明な淡黄色、貫入、削り出し高台～高台内露胎、美濃、17c
4	38	埋2層下部	近世陶器	擂鉢	－	－	－	鉄釉、不透明な茶褐色、外面に粘土付着、美濃、18c
5	38	埋2層下部	近世磁器	皿	(14.0)	7.1	3.5	染付透明釉、口紅、畳付のみ露胎、型打か、肥前、1640代
6	38	埋2層下部	近世磁器	皿	－	高台径 6.8	(1.7)	染付透明釉、畳付露胎、肥前、1640～50年代
7	38	埋2層下部	近世磁器	ひだ皿	14.5	－	(3.0)	染付、青味の濃い透明な釉、亀甲菊唐文、肥前、1630～40年代
8	225	埋3層	近世磁器	輪花皿	13.8	－	(2.1)	染付、不透明な青白色釉、口紅、内面底部付近に界線
9	229	埋2層	近世陶器	火入れ	(11.5)	－	(2.1)	飴釉、透明な黄褐色、貫入、美濃、17c
10	192	南壁付近 埋土	近世陶器	天目茶碗	－	高台径 4.8	(3.7)	鉄釉、黒褐色、削り出し高台、瀬戸美濃、17c前葉
SD－01								
47－11	24	埋1、2層	近世陶器	丸皿？	口径 －	高台径 7.6	器高 (1.2)	黄瀬戸釉、不透明な黄褐色、削り出し高台、内面畳付～高台内露胎、貫入、美濃、17c前葉
12	670	排土	近世陶器	丸皿？	－	底径 7.1	(1.4)	黄瀬戸釉、透明な淡黄色、削り出し高台か、全体に貫入、見込みに目跡、美濃、17c前葉
13	32	埋1上面	近世陶器	天目茶碗	12.8	－	(4.2)	灰色系の釉、光沢あり、瀬戸美濃、大窯、16c末
14	32	埋1上面	中世陶器	天目茶碗	－	高台径 4.5	(1.9)	ロクロ調整、削り出し高台、外面露胎、内面全面施釉、鉄釉、光沢なし、瀬戸、15c初～前半
15	30	埋1層	中世陶器	おろし皿	－	底径 5.9	(1.3)	回転糸切り、瀬戸15c前半
16	49	埋1、2層	中世陶器	緑釉皿	－	－	(1.9)	ロクロ、灰釉、淡緑色、瀬戸、15c前半
17	49 274	埋3層	中世陶器	折縁皿	17.2	－	(1.2)	灰釉、淡緑色、貫入、釉剝落、瀬戸、14c後半
18	60	埋4層	中世陶器	おろし皿	13.1	－	(2.4)	ロクロ、灰釉、透明な灰緑色、貫入、瀬戸、14c末～15c前半
19	61	埋5層	中世陶器	入子小皿	－	4.4	(1.0)	回転糸切り、内外ロクロ→見込みナデ、磨耗、瀬戸、13c
20	983	埋10層	中世陶器	盤	－	－	(2.6)	ロクロ、灰釉、透明な緑灰色、貫入が著しい、瀬戸、15c前半
21	984	埋11上面	中世陶器	盤	－	22.2	(1.8)	灰釉、外面底部線刻あり（文字？）、瀬戸、15c前半、底付近露胎
22	981	埋土	中世陶器	折縁皿	－	11.9	(2.7)	灰釉、淡緑色、貫入、釉剝落、瀬戸、14c後半か
48－1	33	埋2層	近世陶器	刷毛文大鉢	31.0	－	(3.6)	長石釉系、白化粧土（刷毛文）唐津、17c
2	977	南壁付近	近世陶器	擂鉢	24.6	－	(8.7)	鉄釉系、口縁部に施釉
3	367	埋6層	近世陶器	擂鉢	－	－	－	鉄釉系、筋目10本、口縁部に施釉、鉄化粧、岸窯系か、17c前半
4	253	埋1層	中世陶器	甕	－	－	－	在地(2)、29、34、385と接合
5	93	南壁直上	中世陶器	片口鉢	(25.5)	－	(9.0)	ロクロ、内外面に鉄分の吹き出し、在地(3)、14c
6	494	埋土上部	中世陶器	擂鉢	－	－	－	内面に筋目6本以上、筋目は口縁部直下までくる、在地(1)、14c
7	54	埋3下部	中世陶器	鉢	－	13.6	(8.5)	ロクロ、内面やや磨耗、スス付着、在地、14c
8	180 333	埋2層 埋3層	中世陶器	擂鉢	－	－	－	口縁付近に横位の筋目4本あり、在地？、15c以後？
9	52	埋3層	中世陶器	鉢	－	13.2	(4.4)	ロクロ、内面著しく磨耗、在地、14c
10	60	埋4層	中世陶器	擂鉢	－	－	－	筋目2本以上、在地(2)、14c?（Ⅴ区）
11	59	埋5層	中世陶器	鉢	－	－	－	口縁部灰被り、白石系、13c～14c、5b層相当
12	253	埋1層	中世陶器	甕？	－	－	－	自然釉、白石系、14c、Ⅴ区

7．第16次出土遺物観察表(7)

（単位 cm）

図版No.	遺物No.	層位	種類	器種	法量			特徴
13	251	埋 1 層	中世陶器	甕	－	－	－	外面に布目圧痕、在地(2)
49－1	364	埋 4 層	中世陶器	鉢	－	－	(2.8)	明緑色の自然釉、常滑、13c 前半、山茶碗窯系
2	187	埋 8 層	中世陶器	片口鉢	26.8	－	(6.0)	口縁端部面取り、甕窯製品、常滑、14c 後半
3	62	埋 3 層	中世陶器	甕	－	－	－	灰被り、常滑（V区）
4	314 383	埋 4 層 底 部	中世陶器	甕	－	－	－	自然釉、押印（平行）あり、常滑
5	498	埋 6 層	中世陶器	甕？	－	－	－	内、外面ナデ、常滑(1)、34、78と接合
6	48	埋3層下部	中世陶器	壺	－	－	－	自然釉、押印（平行）あり、渥美、13c?（V区）
7	206	埋 1 層	中世陶器	壺	－	－	－	自然釉、押印（平行）、渥美、13c?（II区）
8	174	表 採	中 世 （中国）	碗	－	－	(2.4)	青磁、透明な淡緑色、鏑蓮弁文、13c 末～14c 前
9	189	埋 8 層	中 世 （中国）	碗	－	－	(2.3)	青磁、透明な淡緑色、鏑蓮弁文、14c 中～後半
10	187	埋 8 層	中 世 （中国）	碗	－	－	(1.4)	青磁、不透明な緑色、無文か、端反口縁、14c 後半以後
11	979	底 面	中 世 （中国）	（玉縁）碗	－	－	(5.3)	青磁、透明な暗緑色（若干貫入あり）、内面に陽刻文様あり、14c 後半以後
12	35	埋1、2層	中 世 （中国）	小 壺	－	6.8	(0.9)	青白磁、内面淡青灰色（若干貫入あり）、外面露胎、13c
13	82	埋 7 層	中 世 （中国）	蓋	7.1	頂上部 6.7	(3.5)	瓶類、半透明な淡青色、外面のみ施釉、内面口縁端部露胎　13c～14c
14	980	11 層上面	中 世 （中国）	盤	－	底径 10.9	(2.3)	青磁、淡緑色、大型品、畳付のみ露胎、龍泉系、14c 中～後半
15	982	埋 1 層	中 世 （中国）	瓶？	－	－	(3.7)	青白磁、半透明な青緑色、外面は被熱
SD－01（中世）								
16	33	埋 2 層	中 世 （中国）	梅瓶？	口径 －	底径 －	(2.2)	青白磁、不透明な淡青色、貫入、外面に露胎部あり、13c～14c
50－1	39	埋 3 層	中世陶器	甕	57.5	－	(10.0)	ナデ、在地(2)、14c か
51－1	48	埋3層下部	赤焼土器 ?	高台付鉢	－	8.2	(3.0)	A、ロクロ、切り離し不明、付高台
2	612	埋 11 層	赤焼土器 ?	高台付坏	－	6.0	(1.6)	A、ロクロ、切り離し不明
3	168	南部埋土	赤焼土器 ?	高台付坏	－	6.6	(0.9)	D、ロクロ
4	382	南壁付近	赤焼土器 ?	高台付坏	－	高台径 7.4	(1.4)	D、ロクロ、回転糸切り
5	977	南壁付近	土師質土器	不 明	－	－	－	外側凸帯（貼付）凸帯上－ロクロナデ凸帯下、縦ヘラナデ、凹線一条内面ロクロナデか
6	253	埋 1 層	土師質土器	皿	－	底径 7.1	(2.0)	A、ロクロ、見込みナデ、回転糸切り、内外面に油煙付着
7	231	埋1、2層	土師質土器	皿	－	9.4	(2.5)	D、ロクロ、切り離し不明
8	44	埋 3 層	土師質土器	小 皿	7.2	5.0	1.6	D、ロクロ、見込みナデ、回転糸切り
9	53 144	埋 7 層 (南壁グライ粘土)	土師質土器	小 皿	－	4.8	(0.7)	A、ロクロ、回転糸切り、板状圧痕
10	275	埋 4 層	土師質土器	皿	13.0	7.8	3.0	D、ロクロ、切り離し不明、磨耗が著しい（内外とも）
11	389	埋 5 層	土師質土器	小 皿	－	5.4	(1.6)	D、ロクロ、切り離し不明、厚手
12	276	南壁付近	土師質土器	小 皿	－	6.2	(1.8)	A、ロクロ、回転糸切り
13	428	埋8a層下部	土師質土器	小 皿	12.8	－	(2.8)	A、ロクロ、被熱
14	147	埋8a層上面	土師質土器	小 皿	－	6.0	(1.0)	D、ロクロ、回転糸切り
15	172	埋 8 a 層	土師質土器	皿	12.3	7.2	3.5	A、ロクロ、見込みナデ、回転糸切り、板状圧痕
16	82	埋 8 a 層	土師質土器	皿	－	7.8	(1.4)	D、ロクロ、見込みナデ、回転糸切り、板状圧痕？
17	172	埋 8 a 層	土師質土器	皿	－	7.2	(1.6)	A、ロクロ、回転糸切り
18	82	埋 8 a 層	土師質土器	皿	－	8.0	(1.5)	A、ロクロ、見込みナデ、回転糸切り、板状圧痕
19	173	埋 8 a 層	土師質土器	皿	12.2	7.5	3.3	A、ロクロ、見込みナデ、回転糸切り、板状圧痕 NO. 173 と 2 個セット

8．第16次出土遺物観察表(8)

（単位 cm）

図版No.	遺物No.	層位	種類	器種	法量			特徴
20	82	埋8a層	土師質土器	皿	－	7.2	(0.9)	A、ロクロ、回転糸切り、板状圧痕
21	144	埋8a層	土師質土器	小皿	8.3	5.8	1.8	A、ロクロ、見込みナデ、回転糸切り、板状圧痕、籾痕あり
22	144	埋8a層	土師質土器	小皿	7.9	5.6	1.7	A、ロクロ、見込みナデ、回転糸切り、板状圧痕
23	82、341 428	埋8a層（南壁際）	土師質土器	小皿	8.0	5.5	1.7	A、ロクロ、回転糸切り、全体に磨滅
24	341	埋8a層（南壁際）	土師質土器	小皿	8.6	－	1.7	A、ロクロ、全体に磨滅
25	164、241 165、274	埋8a層	土師質土器	皿	12.4	8.0	3.4	A、ロクロ、見込みナデ、回転糸切り、板状圧痕
26	173	埋8a層	土師質土器	皿	12.6	7.6	3.4	A、ロクロ、見込みナデ、回転糸切り、板状圧痕、磨耗が著しい
27	966	埋8a層（南壁際）	土師質土器	皿	13.2	7.7	3.3	A、ロクロ、見込みナデ、回転糸切り？、一括（NO.9）
28	966	埋8a層（南壁際）	土師質土器	皿	12.2	7.8	3.5	A、ロクロ、見込みナデ、回転糸切り、板状圧痕？、一括（NO.4）
29	165 966	埋8a層（南壁際）	土師質土器	皿	13.0	8.4	3.5	A、ロクロ、見込みナデ、板状圧痕、一括（NO.1）
30	966	埋8a層（南壁際）	土師質土器	小皿	8.1	5.0	2.0	D、ロクロ、見込みナデ、回転糸切り、板状圧痕、一括（NO.8）
52－1	966	埋8a層（南壁際）	土師質土器	皿	12.2	6.7	3.4	A、ロクロ、見込みナデ、板状圧痕、一括（NO.3）
2	966	埋8a層（南壁際）	土師質土器	皿	8.0	5.8	1.6	A、ロクロ、見込みナデ、回転糸切り、板状圧痕、一括（NO.5）
3	966	埋8a層（南壁際）	土師質土器	小皿	8.1	5.2	1.5	A、ロクロ、見込みナデ、回転糸切り、板状圧痕、一括（NO.2）
4	966	埋8a層（南壁際）	土師質土器	小皿	8.2	5.3	1.7	A、ロクロ、見込みナデ、回転糸切り、板状圧痕、一括（NO.6）
5	231	埋1～2層	瓦	丸瓦	長さ (4.5)	幅 (5.3)	厚さ 1.9	凹面布目、凸面ナデ
6	978	埋5層	石製品	不明	(5.1)	(5.35)	(4.6)	柱状石製品、多角形（10角）砂岩
7	36	埋2層下部	石製品	砥石	(4.75)	(1.9)	(1.6)	欠損品
8	275	埋4層	石製品	砥石	(7.0)	3.25	(2.4)	欠損品
SD－01（中世）								
52－9	1012	橋脚埋1層	金属製品	釘？	長さ (14.85)	幅 0.9	厚さ 0.4	鉄、頭部先端欠損、木質付着、柱穴 NO.1
10	208	埋1、2層	金属製品	釘	4.5	0.6	0.5	鉄、頭巻釘、頭部幅1.0
11	49	埋1、2層	金属製品	小柄刀子	茎長 2.0	0.4	0.2	鉄、刀身長2.5、幅0.7、厚さ0.15、欠損品、全身4.65
12	323	埋6層	金属製品	刀子？	長さ (4.0)	0.8	0.4	鉄、茎
13	82	埋8a層	金属製品	短刀？	(10.6)	1.9	0.4	鉄、2点総合茎長7.15以上、現存長13.71以上
14	82	埋8a層	金属製品	短刀？	茎片 (3.65)	1.1	背幅 0.3	本体残存せず、同一個体か
15	229	埋2層	金属製品	釘	長さ 4.1	0.9	厚さ 0.65	鉄、平釘、欠損、頭部幅1.05 cm
16	164	埋1、2層	金属製品	煙管（雁首）	直径 0.95	火皿径 (1.7)	0.08	合金、欠損、糸巻文様、油返しは短い、
17	225	埋3層	金属製品	金具	長さ 1.55	幅 1.4	厚さ 0.1	銅、変形
18	522	埋10層	金属製品	釘	(2.7)	0.45	0.4	鉄、折釘、先端部欠損
19	38	埋2層	金属製品	煙管（吸口）	(4.7)	－	0.05	合金、欠損、変形、直径（羅宇側）推定1.1、
53－1	422	埋3層	石製品	礎石？	30.5	23.2	13.8	凹みの直径約 16.5 cm
54－1	423	埋1層	中世陶器	高台付皿	口径 －	底径 9.5	器高 (2.1)	底部、腰部、ロクロ→回転ヘラ削り、産地不明、13c 前半以前か
2	364	埋4層	中世陶器	壺	17.5	－	(4.7)	内面ロクロ調整、鉄分の吹き出し、不明、12c～13c、須恵器系
3	32	埋土上部	須恵器	坏	16.4	－	(2.9)	外面ロクロ、内面ロクロ、底部ヘラ削り、丸底か、7c～8c
4	366	埋6層	須恵器	坏	－	(9.3)	(0.9)	外面ロクロ、内面ロクロ、回転ヘラ削り、切り離し不明
5	38	埋土2層上部	須恵器	高台付坏	－	(11.4)	(1.4)	外面ロクロ、内面ナデ、底部ロクロナデ、切り離し不明、白針、8c か
6	349	南壁付近	須恵器	瓶	－	頸部 (6.4)	(6.1)	外面濃緑色自然釉、内面ロクロ、フラスコ形？古墳後期か（搬入品？）

9．第16次出土遺物観察表(9)

（単位 cm）

図版No.	遺物No.	層位	種類	器種	法量			特徴
7	155	埋土	須恵器	甕	－	－	－	外面刷毛目？→ナデ、内面刷毛目？→あて具、古墳時代か、17次に類例あり
8	77 193	埋3層 埋6層	須恵器	大型甕	－	－	－	外面ロクロ、内面ロクロ、波状文＋凸帯2条、5c
9	283	埋土	須恵器	器台	－	－	(5.4)	外面ロクロ、内面ナデ、凸帯2条、脚部透し孔（2段以上）4ヶ所、5c
10	32	埋土上部	須恵器	器台	－	底径 (25.5)	(4.2)	外面ロクロ、内面ナデ、波状文1条
11	976	埋5層	須恵器	器台	－	－	(3.7)	内面ロクロ、波状文1条、凸帯2条、透し孔（円形と台形？）、5c
12	517	埋8層	須恵器	器台	－	(24.1)	(4.3)	内面ロクロ、波状文1条、透し孔
SD－02								
56－1	232	埋土上部	土師質土器	小皿	口径 7.6	底径 4.7	器高 1.6	A、ロクロ、静止糸切り？、磨耗が目立つ
2	217 232	埋土上部	土師質土器	皿	－	7.2	(1.8)	A、ロクロ、回転糸切り
3	967	埋土上部 (グライ層)	土師質土器	小皿	6.9	4.0	1.6	D、ロクロ、回転糸切り
4	974	埋土下部	土師質土器	小皿	7.4	5.0	1.6	D、ロクロ、回転糸切り
5	278	埋土	土師質土器	小皿	－	5.3	(0.8)	D、ロクロ、切り離し不明、磨耗
6	233	埋土上部 (グライ層)	土師質土器	皿	－	8.1	(1.5)	A、ロクロ、回転糸切り、磨耗が目立つ
7	167	埋土上部	土師質土器	皿	－	7.4	(2.4)	D、ロクロ、回転糸切り、剝落、磨耗
8	133	埋土	土師質土器	小皿	－	5.0	(0.9)	D、ロクロ、回転糸切り
9	211	埋土上部	土師質土器	皿	－	6.5	(1.7)	D、ロクロ、切り離し不明、磨耗
10	213	埋土上部	土師器	皿	－	6.4	1.3	外面ロクロ、内面内黒？、つまみ出しの高台？、磨耗が著しい
11	233	埋土上部 (グライ層)	土師質土器	皿	－	7.0	(1.2)	D、ロクロ、回転糸切り、磨耗
12	170	埋土	中世 (中国)	盤	－	高台 10.2	(2.1)	青磁（黄褐色）、貫入多、畳付のみ露胎、14c前～中
13	234	埋土	中世陶器	鉢	－	－	－	(片口) ロクロ、白石系？、13c後半～14c前半
14	233	埋土上部	瓦	平瓦	長さ (4.9)	幅 (4.4)	厚さ －	凹面剝落、凸面縄目
15	211	埋土上部	石製品	剣形	4.2	1.8	0.55	酸化鉄付着（全体）
SD－05（中世）								
59－1	503	埋1層下部	須恵器	大型甕	口径 －	底径 －	器高 －	外面平行叩き、内面円弧、ナデ消し、5cか
2	503	埋1層下部	須恵器	大型甕	－	－	－	外面格子叩き、内面同心円文、スリ消し、白針、5cか
SD－11								
59－3	703	(大別2層)	土師質土器	小皿	8.4	6.0	1.1	B、ロクロ、切り離し不明、磨耗が著しい
SD－12								
59－4	844	埋6層	土師器	高坏	－	8.3	(2.75)	外面脚端部b、沈線、体部b→c→d、内面脚端部c、透し孔（長方形？）、低脚　C
5	591	埋2層	瓦	丸瓦	長さ (5.0)	幅 (7.0)	厚さ 2.7	凹面布目、凸面ナデ
6	353	5層	瓦	丸瓦	(8.5)	(12.7)	2.3	凹面布目、凸面縄目
SD－13								
59－7	442	埋1層	須恵器	器台	－	－	－	内面ロクロ、波状文凸帯、5c
8	442	埋1層	石製品	垂飾品	4.15	2.4	(0.8)	孔径約0.5cm斧形（片刃）か
SD－15								
59－9	652	埋土上部	石製品	有孔円板	2.9	2.4	0.5	孔2ヶ
10	731	黒色シルトブロック層	中世陶器	甕 or 壺	口径 49.4	底径 －	器高 (2.8)	ロクロ、口縁部内面灰被り、渥美、13c中葉以前

10. 第16次出土遺物観察表(10)

(単位 cm)

図版No.	遺物No.	層位	種類	器種	法量			特徴
SD－16								
65－7	708	5層	土師質土器	－	－	－	(1.2)	D、ロクロ、回転糸切り
9	441	5層	土師質土器	小皿	－	－	1.2	A、ロクロ、回転糸切り
11	441	5層	土師質土器	小皿	－	5.8	(1.6)	A、ロクロ、見込みナデ、回転糸切り
12	649	整地層下部	土師質土器	小皿	7.3	5.4	1.3	A、ロクロ、切り離し不明、SD－16新期
14	649	埋土上部	瓦	丸瓦？	長さ (6.7)	幅 (4.5)	厚さ 1.3	凹面布目、凸面、縄目→ナデ消し、SD－16新期
II区土墨								
60－1	11	上面	土師質土器	小皿	口径 8.2	底径 5.3	器高 (1.5)	B、ロクロ、見込みナデ、回転糸切り、板状圧痕
2	516	積土10層	土師質土器	皿	－	8.8	(1.1)	B、ロクロ、見込みナデ、回転糸切り、再調整か
3	518	積土8層	土師質土器	皿	－	8.4	(1.3)	A、ロクロ、回転糸切り、板状圧痕
4	518	積土8層	土師質土器	小皿	－	5.2	(1.5)	B、ロクロ、回転糸切り？板状圧痕
5	551	積土12層	土師質土器	皿	－	7.3	(1.7)	A、ロクロ、見込みナデ、回転糸切り、板状圧痕
6	504	積土32層	中世陶器	壺	－	－	－	灰被り、小型品、在地（？）
7	20	積土上面	中世陶器	壺？	－	－	－	オリーブ灰色の釉、押印あり、内面に炭化物付着、渥美、12c～13c
8	504	積土32層	中世陶器	甕	－	－	－	内面横位ナデ、外面縦位ナデ、在地(3)
9	11	上面	中世陶器	山茶碗	－	－	(3.5)	ロクロ、薄手、内面磨耗、東濃産、14c後半
10	640	積土10層	中世陶器	山茶碗	－	－	(2.7)	ロクロ、薄手、内面磨耗、東濃産、14c後半
11	611	積土32層	金属製品	釘	長さ (6.85)	幅 0.4	厚さ 0.45	鉄、頭部欠損
弥生土墨								

図版No.	遺物No.	遺構名	層位	器種	文様		特徴
61－1	942	SI－01	床直	壺？	縄文（充塡）	変形エ字文？	桝形囲式
2	964	SD－02	6、7層	壺（小）	縄文	平行沈線文	桝形囲式
3	278	SD－02	埋土	鉢？	縄文（磨消）	変形エ字文	桝形囲式
4	195	I区西部	天地返し	鉢	縄文	変形エ字文	桝形囲式以前
5	963	SD－02	3、4層	蓋？	縄文	変形エ字文	桝形囲式、内面口縁にも縄文
6	653	SX－02下	整地1層	鉢？	－	平行沈線(変形エ字文？)	青木畑式？併行、口唇部刻目
7	729	SD－15	3層	鉢	縄文	平行沈線文	桝形囲式
8	182	SD－01	南壁付近	鉢 or 壺	縄文	－	底径4.8、器高1.7、木葉痕
9	513	SD－01	埋土上部	壺？	縄文	－	粗製？
10	116	撹乱坑 (SX－01)	埋土	甕？	－	－	網代痕（網代編み）
11	380	SD－01	埋土	壺？	－	沈線文(二本一描)	十三塚式
12	182	SD－01	南壁付近	甕	縄文	－	粗製
13	116	撹乱坑 (SX－01)	埋土	甕	偽縄文(植物茎)	刺突文	桝形囲式
14	514	II区拡張部	土墨 積土8層	不明	縄文	平行沈線文	桝形囲式、赤彩
15	495	SD－12	4、5a層	高坏？	縄文	沈線文	桝形囲式
16	107	III区中央	天地返し	壺	－	沈線文(二本一描)	十三塚式
17	585	SK－12	埋土	壺？	縄文（磨消）	平行沈線文	桝形囲式
18	105	SK－12	埋土	壺	－	沈線文(二本一描)	十三塚式
19	251	SD－01	1層	高坏	縄文	平行沈線文	桝形囲式、白針
20	325	－	II層	壺	縄文	平行沈線文	桝形囲式、内面口唇部、縄文、SI-07上

11．第16次出土遺物観察表(11)

（単位 cm）

図版No.	遺物No.	層位	種類	器種	文様		特徴
21	69	Ⅳ区西部	天地返し	壺？	－	沈線文(二本一描)	十三塚式
22	303	Ⅳ区中央	天地返し	不明	－	連孤文	十三塚式
23	386	Ⅳ区中央	天地返し	壺	－	平行沈線文	十三塚式、口径12.6、器高2.8、白針
24	374	SI－08	2層	鉢	偽縄文(磨消)	変形エ字文 or 菱形文	桝形囲式
25	329	SI－08	埋土上部	鉢？	－	重山形文	桝形囲式、口唇部縄文
26	85	Ⅳ区中央	天地返し	鉢？	－	沈線文	桝形囲式
27	268	Ⅳ区中央	天地返し	甕	－	撚糸文＋綾絡文	－
28	646	SD－16	埋土	壺	－	沈線文(二本一描)	十三塚式

遺構外（古墳）

図版No.	遺物No.	位置 層位	種類	器種	法量			特徴
					口径	底径	器高	
62－1	87	Ⅳ区中央 天地返し	土師器	坏	15.6	－	(5.1)	外面口縁部・体部磨耗、内面口縁部b→d、体部c→d、白針、赤色B　B
2	181	E－20区 天地返し	土師器	坏	14.6	－	5.6	外面口縁部b、体部e、内面口縁部b、体部c→d、赤色B　E_1
3	724	D－10区 Ⅱ層	須恵器	甕	－	－	－	平行叩き、スリ消し、白針、5c中葉
4	34	Ⅴ区 Ⅰc層	須恵器	甕	－	－	－	内面ナデ、波状文1条、凸帯2条、細砂(均質)多量、5c
5	140	表採	須恵器	器台	－	－	－	内面ナデ、5c
6	308	SK－01 埋土	須恵器	甕	(40.5)	－	(6.6)	外面ロクロ、内面ロクロ、白針（攪乱坑）
7	160	K－2区 天地返し	石製品	剣形	長さ 3.0	幅 1.4	厚さ 0.3	－
8	122	Ⅰ区中央 天地返し	石製品	垂飾？	3.45	2.8	0.8	欠損
9	152	D－14区 天地返し	石製品	不明	2.65	2.2	(1.0)	側面も加工痕あり、擦切溝？
10	152	D－14区 天地返し	石製品	剣形	(3.5)	1.5	0.2	－
11	74	Ⅳ区西部 天地返し	石製品	管玉	2.35	直径 0.55	－	回転運動の擦痕あり（穿孔時）
12	84	Ⅳ区中央 天地返し	石製品	未完成品？	(2.5)	幅 2.25	1.0	模造品？

遺構外（中世～近世）

図版No.	遺物No.	位置 層位	種類	器種	法量			特徴
					口径	底径	器高	
63－1	81	Ⅳ区西部 天地返し	近世磁器	Ⅲ	－	幅 5.0	厚さ (1.4)	染付、貫入、高台畳付露胎、研磨、肥前、17c前葉
2	57	Ⅳ区西部 表採	中国	瓶類	6.2	－	(1.9)	白磁、乳白色、釉切れが著しい、明末か
3	58	Ⅳ区 天地返し	中世（中国）	合子(蓋)	－	9.8	(1.4)	青白磁、草文、口唇部は露胎、外面に陽刻文様（唐草文か）13c～14c

遺構外（中世－近世）

図版No.	遺物No.	位置 層位	種類	器種	法量			特徴
					口径	底径	器高	
4	674	D－20区 天地返し	中世陶器	山茶碗	－	－	(2.7)	ロクロ薄手、内面磨耗、東濃産、14c後半
5	450	Ⅴ区表土	中世陶器	甕	－	－	－	常滑15c前
6	190	E－20区 天地返し	中世（中国）	碗	12.9	－	(5.1)	青磁、蓮弁文、端反口縁、若干の貫入あり、13c末～14c前半、E－20区
7	135	H、I－9区 天地返し	中世陶器	甕？	－	－	－	中型？常滑
8	10	Ⅳ区 表土	中世陶器	鉢	－	－	－	口縁部面取り、常滑、14c後半、(片口)
9	7	表採	近世陶器	小壺？	－	6.8	(1.4)	ロクロ、回転糸切り、内外面黒色、釉・産地不明、外面底部、赤銅色の付着物
10	63	D－15、16区 天地返し	中世（中国）	鉢	－	5.8	(1.7)	青磁、無文？淡青緑色、貫入多、畳付のみ露胎、龍泉窯系、14c
11	34	Ⅴ区 Ⅰc層	中世陶器	鉢	－	－	－	(片口)、割れ口磨耗（砥石転用？）、常滑
12	104	E－13、14区 天地返し	中世陶器	甕	(45.6)	－	(8.0)	受口状口縁、内外面灰被り、常滑、13c後半
13	34	Ⅴ区 Ⅰc層	中世陶器	擂鉢	－	12.8	(7.6)	内外ロクロ、筋目1本引（2条）か、内面磨耗、在地、剝落著しい
14	568	E－12、13区 天地返し	中世陶器	壺	－	－	－	黄灰～オリーブ灰色の釉（自然釉か）、押印、渥美、12c～13c
15	108	Ⅳ区中央 天地返し	瓦器	埦	(10.9)	－	(2.5)	ロクロナデ→ミガキ（雑）、胎土は灰白色、楠葉型、14c前半以前

12. 第16次出土遺物観察表(12)

（単位 cm）

図版No	遺物No	層位	種類	器種	法量			特徴
16	92	IV区中央 天地返し	中世陶器	鉢	－	－	－	（片口）在地(2)
17	67	IV区東部 天地返し	中世陶器	鉢	－	－	－	（片口）灰被り（内面）、在地(1)
18	139	IV区東部 天地返し	中世陶器	鉢	－	－	－	口縁部片、在地？
19	568	E－12、13区 天地返し	中世陶器	壺	－	－	－	黄灰～オリーブ灰色の釉（自然釉か）、押印、渥美、12c～13c
20	191	V区 Ic層	中世陶器	高台付鉢	－	(13.8)	(6.4)	外面休下部削り→高台付近ナデ、内面ロクロ、磨耗が著しい、在地13c前半か
21	391	D－10区 表土	土師質土器	小皿	－	5.3	(1.3)	C、ロクロ、見込み円周状のナデ→横方向ナデ、回転糸切り、再調整か
22	69	IV区西部 天地返し	土師質土器	小皿	－	5.9	(1.1)	D、ロクロ、見込みナデ、回転糸切り
23	85	IV区中央 天地返し	土師質土器	小皿	(9.2)	15.0	2.1	A、内外面ナデ→一部削り、手捏ね、低温焼成か
24	34	V区 Ic層	中世陶器	甕	－	－	－	押印（平行）あり、常滑
25	152	D－14区 天地返し	土師質土器	鉢	18.3	－	(1.4)	D、ロクロ
26	386	IV区東部 天地返し	土師質土器	小皿	－	4.8	(1.4)	A、口縁部横ナデ、手捏ね
27	177	D、E－20区 天地返し	土師質土器	小皿	－	5.0	(1.2)	A、ロクロ、見込みナデ？、静止糸切り→ナデ
64－1	13	II区土墨 上面	土師質土器	皿	13.0	－	(2.6)	A、ロクロ、回転糸切り
2	13	II区土墨 上面	土師質土器	皿	－	7.0	(1.9)	C、ロクロ、回転糸切り、ロクロ目が明瞭
3	85	IV区中央 天地返し	土師質土器	皿	－	7.2	(1.5)	D、ロクロ、回転糸切り
4	282 259	IV区東部 天地返し	土師質土器	小皿	6.6	5.2	1.6	A、ロクロ、見込みナデ、静止糸切り
5	28	V区 Ic層	土師質土器	小皿	－	4.1	(0.9)	D、ロクロ、回転糸切り、厚手
6	28	V区 Ic層	土師質土器	皿？	－	8.6	(2.0)	D、ロクロ、回転糸切り、硬質
7	19	III区 土墨上面	赤焼土器？	高台付坏	－	7.0	(1.8)	D、ロクロ、切り離し不明
8	25	V区 Ic層	土師質土器	火鉢？	18.8	－	(4.9)	硬質
9	23	V区 天地返し	石製品	硯？	長さ (4.0)	幅 (2.15)	厚さ (10.5)	－
10	198	D、E－12区 天地返し	瓦	軒平瓦？	(7.9)	(8.2)	1.9	凹面布目、凸面縄目→ナデ消し
11	75	IV区西部 天地返し	瓦	平瓦	(4.2)	(3.0)	1.5	凹面布目、凸面縄目、自然釉、焼成良好
12	65	IV区西部 天地返し	金属製品	飾金具	4.5	0.3	0.18	外面渡金、最大幅4.55 cm、中央に釘穴あり
65－1	699	VI区5層	中世 （中国）	合子（身）	8.2	－	(1.0)	白磁、透明でやや緑色、無文？、全体に貫入あり
2	230	VI区5層	中世陶器	盤	－	－	(4.5)	灰釉、くすんだ淡緑色、刷毛塗りか、沈線2条、瀬戸、15c前半
3	281	VI区p.6 埋土	土師質土器	皿	－	8.4	(1.3)	D、ロクロ、見込みナデ？回転糸切り、板状圧痕？
4	421	B－14区 3層	土師質土器	小皿	6.4	(3.8)	1.2	D、ロクロ、回転糸切り
遺構外（中世）								
65－5	421	B－14区 3層	土師質土器	小皿	口径 －	底径 5.6	器高 (1.8)	A、ロクロ、回転糸切り、VI区
6	421	B－14区 3層	土師質土器	皿	－	6.8	(1.1)	D、ロクロ、回転糸切り、VI区
8	417	C－14区 3層	土師質土器	皿？	－	－	(1.8)	D、VI区
10	417	C－14区 3層	土師質土器	皿	13.0	－	(2.9)	A、ロクロ、VI区
13	14	表土	土師質土器	皿	13.2	－	(2.6)	A、ロクロ、VI区
15	722	B－14区 5層	金属製品	釘	長さ 6.6	幅 0.5	厚さ 0.5	鉄、折釘
66－1	664	溝？ 埋土上部	土師質土器	小皿	口径 －	底径 5.4	器高 (1.0)	A、ロクロ、見込みナデ、回転糸切り、板状圧痕、VIII区南部
2	667	VIII区3層	土師質土器	皿	－	6.8	(1.3)	A、ロクロ、見込みナデ、回転糸切り、板状圧痕

図版No.	遺物No.	層位	種類	器種	法量			特徴
3	664	溝？埋土上部	土師質土器	皿	－	7.2	(1.0)	D、ロクロ、見込みナデ、回転糸切り、Ⅷ区南部
4	387	B－21区3層上部	中世陶器	天目茶碗	12.6	－	(2.8)	鉄釉（黒色系）、光沢なし、瀬戸、15c（後半か）
5	664	溝？埋土上部	中世陶器	鉢	－	－	－	(片口)、内外面ロクロナデ、白石系か、Ⅷ区南部
6	667	Ⅷ区3層	中世陶器	擂鉢	－	－	－	筋目あり、在地(1)
7	536	配石遺構	中世陶器	壺？	－	－	－	自然釉、内外貼布後漆接合、常滑、NO.2、B－21区
8	473	Ⅷ区表土	瓦	平瓦	長さ(5.0)	幅(4.7)	厚さ(1.6)	凹面平滑、凸面縄目→ナデ消し
9	658	SX－03埋3層	金属製品	鉄鍋	口径33.0	高さ(3.0)	厚さ0.4	口唇部厚さ0.65cm
10	1011 139	Ⅷ区23層	中世（中国）	水滴（把手部）	－	－	器高(2.4)	白磁、草文、陽刻の唐草文？、13c～14c、Ⅱ区、Ⅳ区と同一か

古銭

図版No.	遺物No.	遺構名	地区名	層位	銭名	初鋳年（西暦）	時代	書体	備考
1	971	SD－01	Ⅱ区	壁崩落土	寛永通宝	寛文8年 (1668年)	江戸	真	背「文」、正字文、2.5g
2	973	SD－01	H、G－8区	埋土上部	開元通宝	武徳4年 (621年)	唐	真	2.0g Ⅱ区
3	972	SD－01	Ⅱ区	埋8a層	洪武通宝	洪武元年 (1368年)	明	真	－
4	969	SD－01	F－9区	埋8層	永楽通宝	永楽6年 (1408年)	明	真	－ Ⅱ区
5	968	－	C－14区	5層	宣和通宝	宣和元年 (1119年)	北宋	篆	－ Ⅵ区
6	970	pit 30	Ⅳ区	埋土	祥符元宝	大中祥符元年 (1008年)	北宋	真	－

観察表凡例（第16～18次共通）

土師器「特徴」の覧

a：刷毛調整（刷毛目）

b：横ナデ

c：ナデ調整（ヘラ・指）

d：磨き

e：削り

矢印は新旧を示す（古→新）

土師質土器皿類「特徴」の覧

胎土A：砂粒を多く含み、白針（動物珪酸体）を含むもの

胎土B：砂粒は目立たないが、褐色粒や金雲母を含むもの

胎土C：砂粒は目立たないが、黒色粒を含むもの

胎土D：比較的均質な細砂を含む（or 粉質）

第2節　第17次調査

1．調査に至る経緯

南小泉遺跡内の宅地開発予定地について、昭和62年11月26日に開発行為者である菅原輝夫氏との間で事前協議が成立し、昭和63年3月15日に発掘届が提出された。計画では盛土工法となっており、調査は道路部分を対象とし、必要に応じて拡張することとした。調査は昭和63年7月より約3ヶ月間の予定で開始した。

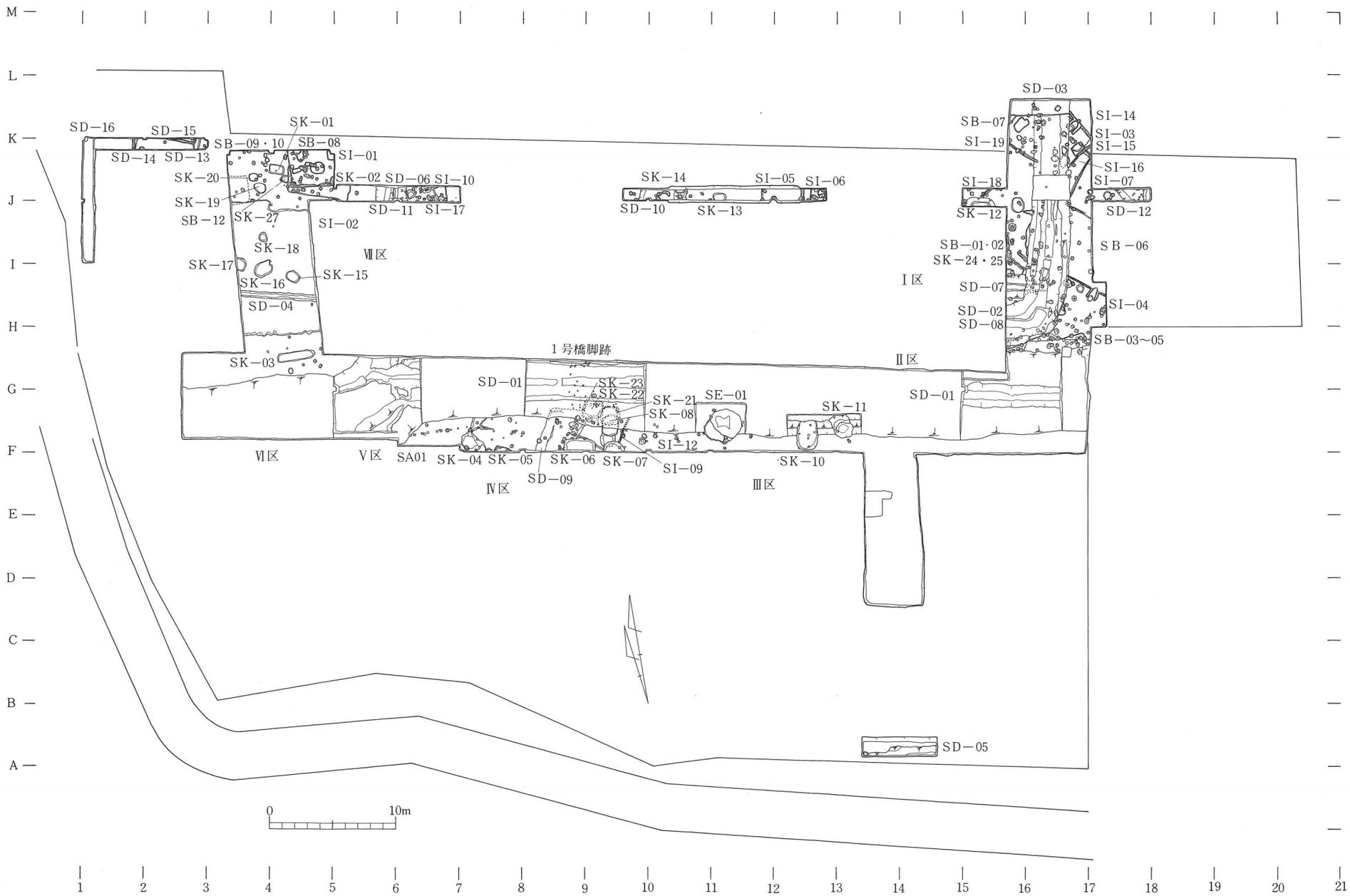
2．調査の経過

調査は、まず道路予定地部分の表土を機械力で除去し、以後人力による排土作業を行った。拡張トレンチも人力によった。調査開始後約1カ月間は、16次調査と併行の調査を余儀なくされる一方で、予想を上回る遺構が検出された。特に、当初これほどの中、近世遺構は予想できなかった。調査地は北から南へ下がっており、調査地北部と南側の堀付近とでは1mの比高差がある。この比高差は、南側の遺構ほど残存状況が悪いことから、削平によるものと考えられる。古墳時代中・後期の集落や中世の屋敷跡の変遷など、大きな成果を上げることができた。

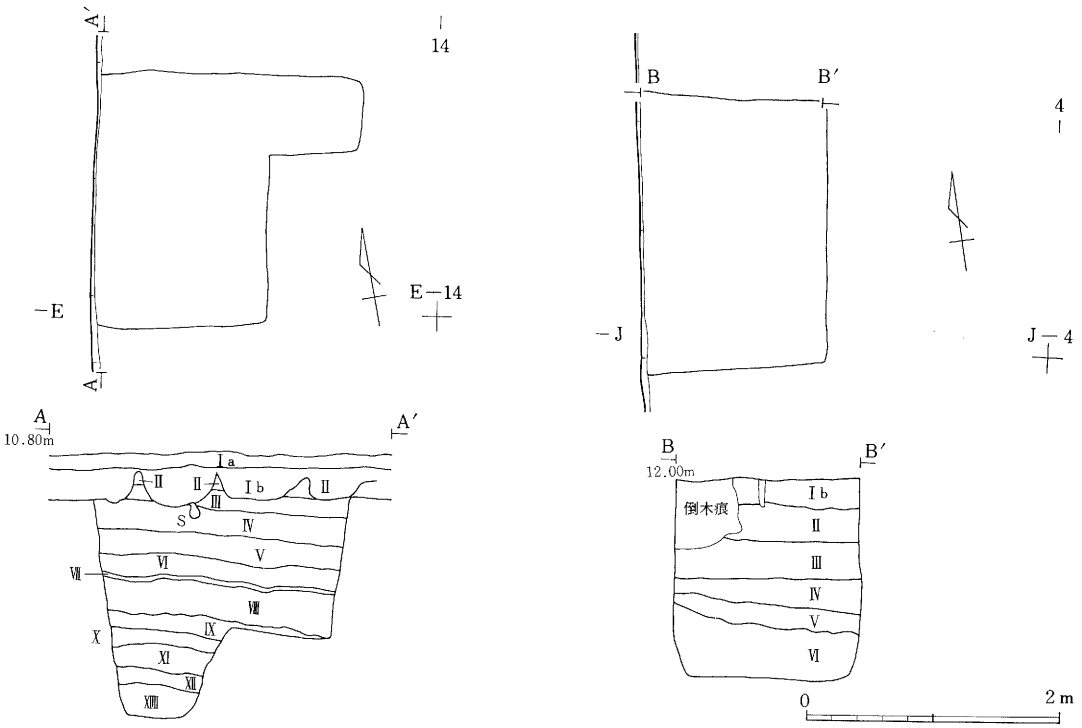
3．基本層位（第68図）

基本層位は、二ケ所の深堀トレンチ（III・VII区）を設定して、観察を行った。しかし、対応する層は少ない。I層は2層に細分される。Ⅰa層は現耕作土(畑)、Ⅰb層は畑地の土壌改良を目的とした天地返しにより形成された層で、I区南部～II区北部・III区・VII区南部などに認められた。II層は黄橙色系のシルトで、やや粘性がある。層厚は、撹乱を受けない部分で20～25cmである。この層は普遍的に認められ、近世に埋没を完了したSD01上にも認められる。したがって、近世～近代に形成されたものである。ただし、北部ではII層が認められない所が多い。III層は黄褐色～黄橙色シルトであるが、上部は粘土質、下部は砂質である。層厚は約30cmである。VII区付近では、上部の粘土質部分が失われている。今回検出された遺構は、この層の上面で検出されている。III層以下の層は、無遺物層である。

IV層以下の層は、III区・VII区では対応せず、最下層の砂礫層のみが対応すると推定される。III区では、IV～VIII層が粘土質シルトでVII区には認められない。酸化鉄を含む層が多く、VII層は鉄分の集積が著しい。また、下部に下がるほどグライ化が認められる。IX～XIIは砂質シルト～砂層で、鉄分の含有も少なく、グライ化も弱い。XIII層は砂礫層で、標高は8.8mである。VII区は、IV～VI層は黄褐色～褐色の砂質シルト主体の層で、薄い砂層が介在する。VII層は砂礫層で、径10cm前後の円礫を含んでいる。標高は9,8m前後で、III区の砂礫層とは1m前後の標高差


M
L
K
J
I
H
G
F
E
D
C
B
A
SD−16
SD−15
SD−14
SD−13
SB−09・10
SB−08
SK−01
SI−01
SK−20
SK−02
SD−06
SI−10
SK−19
SB−12
SK−27
SD−11
SI−17
SI−02
SK−18
SK−17
SK−16
SK−15
Ⅶ区
SD−04
SK−03
SK−14
SI−05
SI−06
SD−10
SK−13
SD−03
SB−07
SI−14
SI−03
SI−19
SI−15
SI−16
SI−18
SI−07
SK−12
SD−12
SB−01・02
SK−24・25
SB−06
Ⅰ区
SD−07
SI−04
SD−02
SD−08
SB−03～05
Ⅱ区
1号橋脚跡
SD−01
SK−23
SK−22
SK−21
SE−01
SK−08
SK−11
SD−01
SI−12
SK−10
Ⅵ区
Ⅴ区
SA01
SK−04
SK−05
SK−06
SK−07
SI−09
SD−09
Ⅳ区
Ⅲ区
SD−05
0
10m
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21

第67図　遺　構　配　置　図



III区深掘土層註記表

層位	土色・土性		備考
II	10YR 6/3	にぶい黄橙色シルト	
III	10YR 7/4	にぶい黄橙色砂質シルト	
IV	10YR 6/6	明黄褐色シルト	
V	10YR 6/4	にぶい黄橙色砂質シルト	酸化鉄まじりの灰白色土混入
VI	10YR 6/3	にぶい黄橙色粘土質シルト	灰白色土の互層、酸化鉄
VII	10YR 5/8	明褐色粘土質シルト	酸化鉄
VIII	7.5Y 7/1	灰白色粘土質シルト	酸化鉄混入、グライ
IX	10YR 5/4	にぶい黄橙色砂	下部にかけて灰黄褐色に近い色調
X	2.5Y 7/6	明黄褐色砂	灰黄褐色土ブロック状に混入
XI	10YR 7/2	にぶい黄橙色砂	灰黄褐色砂微量
XII	10YR 7/3	にぶい黄橙色砂	
XIII	10YR 6/2	灰黄褐色砂	

VII区深掘土層註記表

層位	土色・土性		備考
II	10YR 6/6	明黄褐色砂	
III	10YR 4/4	褐色砂	下部は浅黄橙色砂との互層
IV	10YR 5/6	黄褐色砂	にぶい黄橙色の小砂礫層
V	10YR 5/6	明褐色砂	にぶい黄橙色砂層混入
VI	10YR 6/3	にぶい黄橙色砂礫層	礫
倒木	2.5Y 7/3	浅黄色砂質シルト	黒褐色粒子、酸化鉄粒子

第68図　基　本　層　位

がある。全体的に、南東方向へ下がっているものと推定される。これらの砂礫層は、第16次調査地点のIV層、第14次調査地点のIII層に対応するものと考えられる。

4．検出遺構と出土遺物

(1)　古墳時代

古墳時代に属する遺構は、住居跡18軒・土坑跡9基・溝跡2条を検出した。なお、SI08は精査後溝跡（SD12）と判明したため欠番とし、時期決定資料を欠くが古墳時代として扱う。

住居跡（SI）

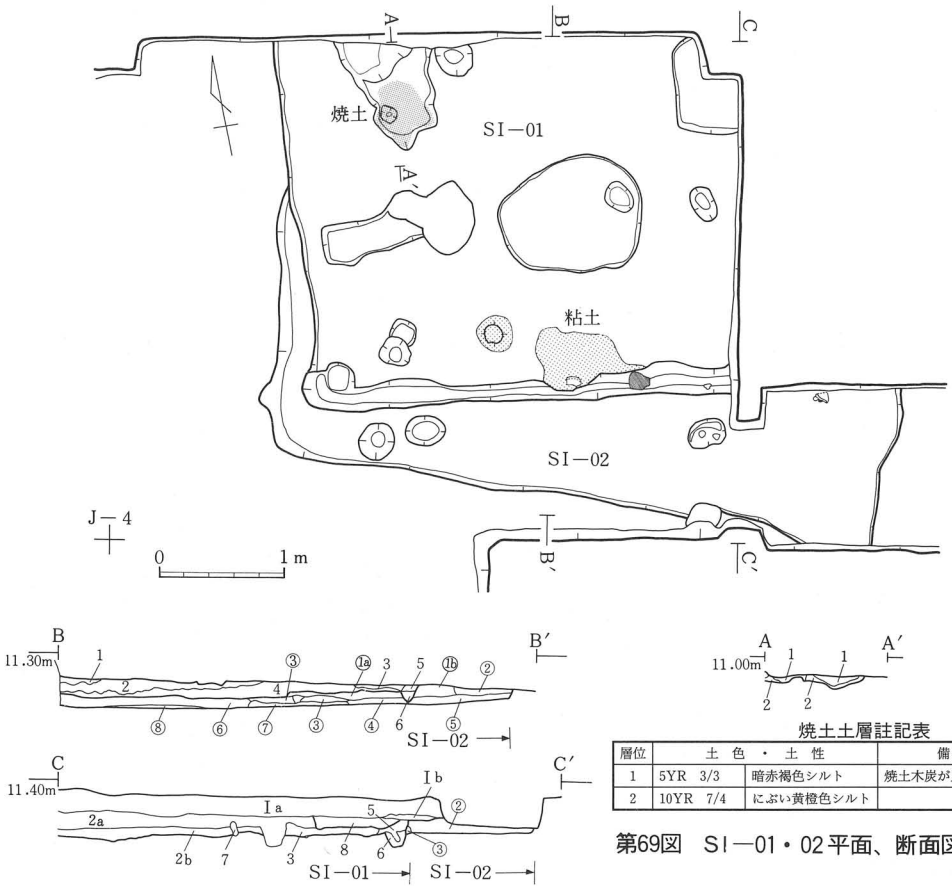
SI01（第69・71図）

SI-02 土層註記表

層位	土色・土性		備考
⑪a	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト	灰黄褐色小ブロック状に混入
⑪b	10YR 6/4	にぶい黄橙色シルト	
②	10YR 6/3	にぶい黄橙色シルト	炭化物粒子わずか混入
③	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	炭化物粒子普遍的に混入
④	10YR 6/4	にぶい黄橙色シルト	にぶい黄褐色土斑状に混入
⑤	10YR 7/4	にぶい黄橙色シルト	
⑥	10YR 6/4	にぶい黄橙色シルト	にぶい黄褐色土小ブロック状に混入
⑦	10YR 6/3	にぶい黄橙色シルト	
⑧	10YR 7/6	明黄褐色シルト	

SI-01 土層註記表

層位	土色・土性		備考
1	10YR 5/2	灰黄褐色シルト	
2a	10YR 3/2	黒褐色シルト	炭化物粒子わずか混入
2b	10YR 3/1	黒褐色シルト	にぶい黄橙色土混入
3	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	炭化物粒子混入
4	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト	炭化物粒子混入、明黄褐色土4層下部に混入
5	10YR 5/2	灰黄褐色シルト	灰白色わずか混入
6	10YR 4/3	にぶい黄褐色シルト	にぶい黄褐色土混入
7	10YR 6/3	にぶい黄橙色シルト	
8	10YR 4/2	灰黄褐色シルト	SK-02 黒褐色土と褐灰色土斑状に混入



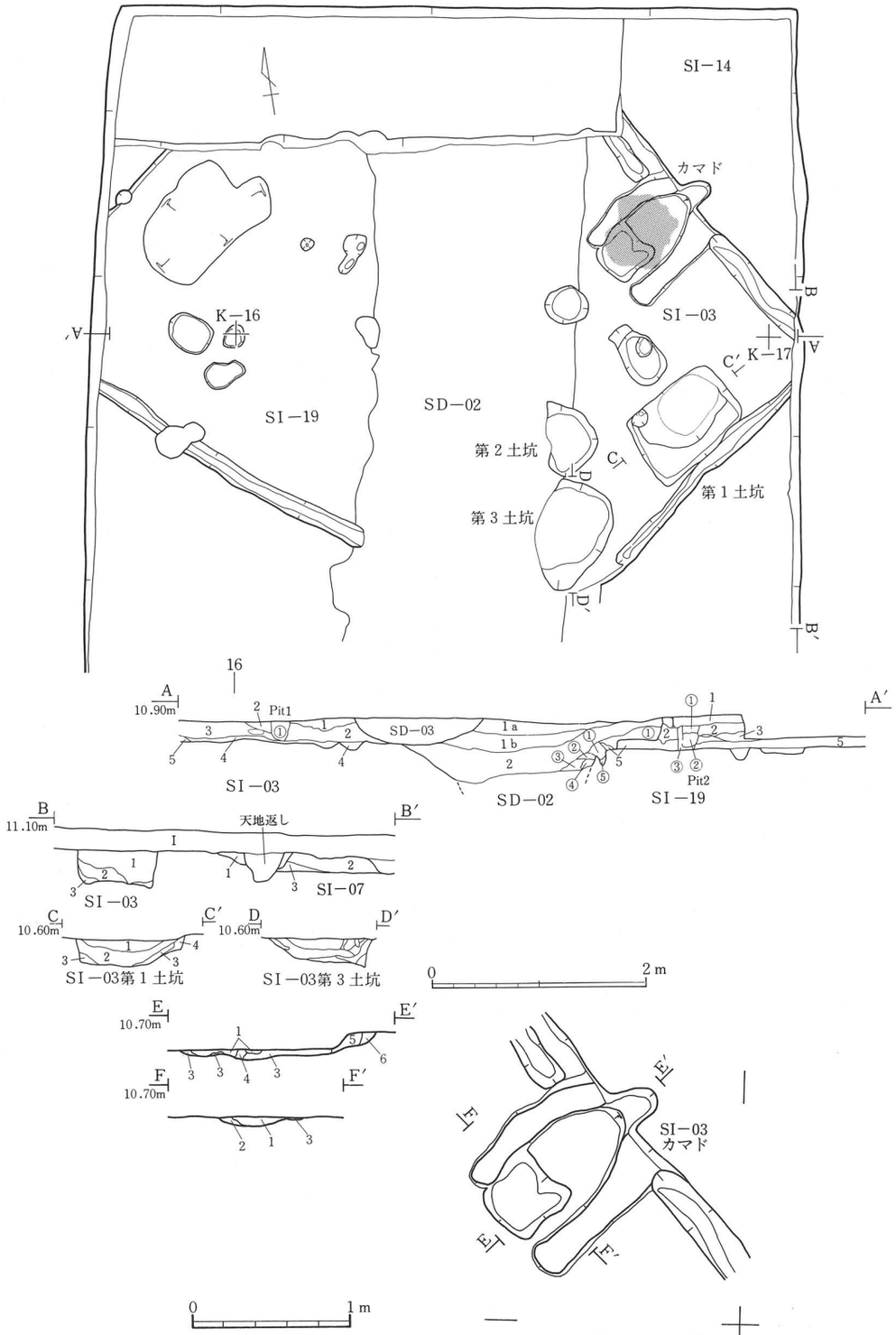
焼土土層註記表

層位	土色・土性		備考
1	5YR 3/3	暗赤褐色シルト	焼土木炭が入る
2	10YR 7/4	にぶい黄橙色シルト	

第69図　SI－01・02平面、断面図

Ⅶ区北部（J－4）区に位置し、SB08・10・12、SK02に切られ、SI02を切る。規模は、全体の2/3程の検出に留まったため不明であるが、西辺約3m・南辺約3.3mを検出した。壁高は上部が削平されており、最大10cmである。形態は方形で、北壁あるいは東壁にカマドが取り付くものと推測される。床面上で、不整の浅い土坑を4基検出したが、主柱穴は明らかでない。南壁で壁溝を検出し、粘土塊二ケ所・赤色顔料が出土している。

出土遺物には、土師器坏・ミニチュア、須恵器甕、土玉、鉄製品があり、他に弥生土器片・フレークがある。第71図1.は須恵器模倣とみられる無彩有段の坏である。2は軽い段を有し、口縁が外傾する坏で、内外面とも赤色塗彩である。3は南小泉式坏の混入品か。4は内面黒色処理の坏である。5は手捏ねによるミニチュアである。6～10は、埋土・床などから出土した土玉である。11は、基部に屈曲がみられる点から鉄鎌と予想される。須恵器は図示していない



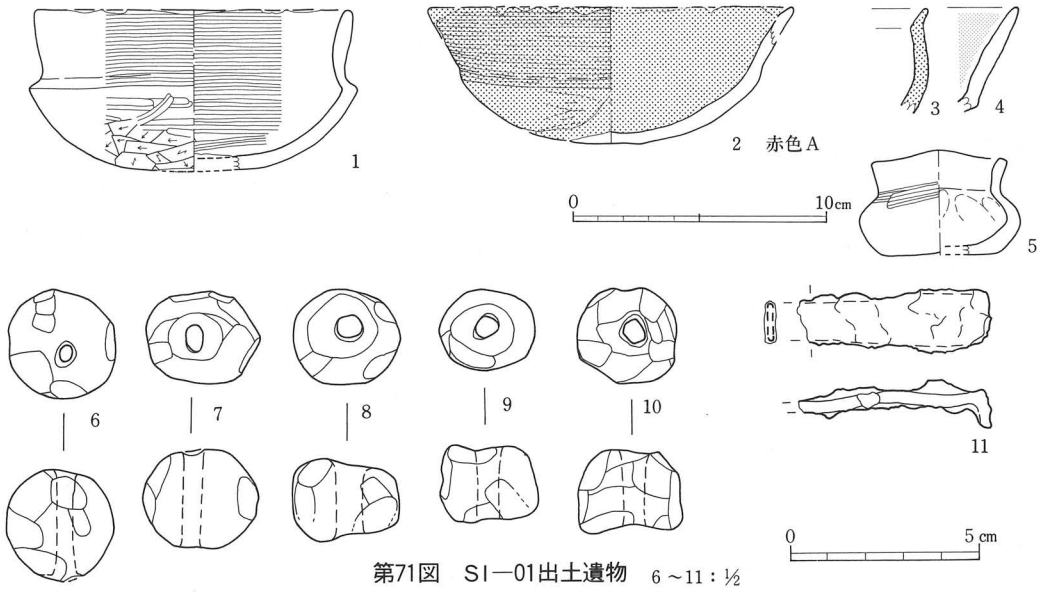
第70図　ＳＩ －03・19平面・断面図

SI-03 土層註記表

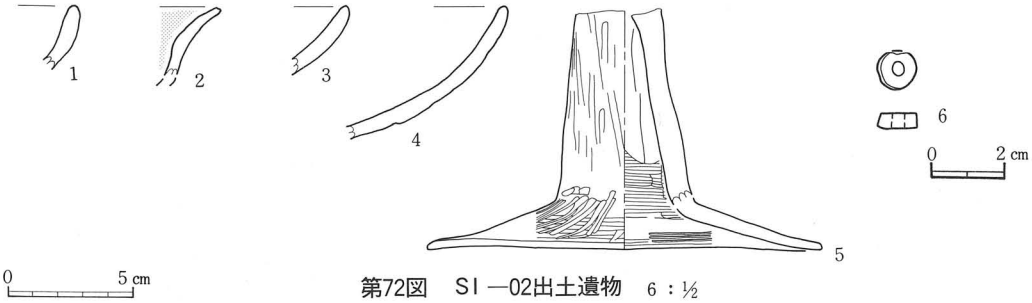
層位	土色・土性		備考
1	10YR 4/3	にぶい黄褐色シルト	炭化物粒子混入
2	10YR 4/4	褐色シルト	炭化物粒子混入
3	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト	炭化物・浅黄橙色土斑状に混入
4	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	浅黄橙色土普遍的に混入
5	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト	
pit 1	10YR 4/2	灰黄褐色シルト	炭化物粒子混入
SD-03			
		黄褐色粘質シルト	底面に灰褐色粘土質土の薄層あり
SD-02			
1a	10YR 7/4	にぶい黄橙色シルト	灰白色土斑状に混入
1b	10YR 7/1	灰白色シルト	にぶい黄橙色土との互層、酸化鉄土わずかに混入
2	2.5Y 6/1	黄灰色粘質シルト	炭化物混入、砂が小ブロック
5	10YR 6/1	褐灰色粘質シルト	炭化物微量、酸化鉄普遍的に混入
①	10YR 6/1	褐灰色シルト	炭化物・酸化鉄粒子・灰白色土が斑状に混入
②	10YR 6/1	褐灰色シルト	浅黄橙色土小ブロック
③	10YR 5/1	褐灰色シルト	炭化物混入
④	10YR 8/4	浅黄橙色シルト	
⑤	10YR 6/1	褐灰色シルト	灰白色土斑状に混入
SI-19			
1	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト	灰白色土斑状に混入
2	10YR 4/4	褐色シルト	灰白色土斑状に、浅黄色粒子混入
3	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	にぶい黄橙色土斑状に、炭化物、浅黄橙色粒子混入
4	10YR 6/4	にぶい黄橙色シルト	細い浅黄橙色粒子と褐灰色粒子が混入
5	10YR 7/3	にぶい黄橙色シルト	灰黄褐色土小ブロック、炭化物粒子、灰白色土、褐灰色土混入
6		暗黄褐色シルト	
SI-19 pit 2			
1	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト	
2	10YR 4/3	にぶい黄褐色シルト	
3	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	

SI-03 土層註記表

層位	土色・土性		備考
1	10YR 4/2	灰黄褐色シルト	にぶい黄橙色土混入
2	10YR 7/4	にぶい黄橙色シルト	褐灰色土小ブロック、炭化物粒子普遍的混入
3	10YR 4/3	にぶい黄褐色シルト	炭化物粒子かなり普遍的に細いにぶい黄橙色粒子混入
SI-07 B-B′			
1	10YR 4/1	褐灰色シルト	にぶい黄橙色土小ブロック
2	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	炭化物粒子普遍的に混入
3	10YR 4/2	灰黄褐色シルト	明黄褐色土普遍的に混入
天地返し	10YR 6/4	にぶい黄橙色シルト	ポソポソの褐灰色土ブロック
SI-03 第１土坑			
1	10YR 6/3	にぶい黄橙色シルト	炭化物、炭化物粒子を普遍的に、浅黄橙色土斑状に混入
2	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト	炭化物粒子、灰白色土斑状に混入
3	10YR 5/2	灰黄褐色シルト	炭化物粒子、灰白色土斑状に混入
4	10YR 6/4	にぶい黄橙色シルト	
SI-03 第３土坑			
1	10YR 7/2	にぶい黄橙色シルト	炭化物粒子、明黄褐色粒子も普遍的に混入
2a	2.5Y 7/1	灰白色シルト	炭化物粒子、明黄褐色粒子混入
2b	10YR 6/1	褐灰色シルト	炭化物粒子がかなり多量
3a	10YR 6/2	灰黄褐色シルト	褐色粒子混入
3b	10YR 6/2	灰黄褐色シルト	褐色粒子混入
4	10YR 6/1	褐灰色シルト	炭化物粒子普遍的に混入
SI-03 カマド			
1	2.5YR 4/2	灰赤色シルト	炭化物粒子、焼土粒かなり普遍的に混入
2	2.5YR 4/2	灰赤色シルト	炭化物粒子、細い焼土粒子を普遍的に混入
3	2.5Y 6/4	にぶい黄色シルト	灰褐色土かなり普遍的で斑状に、炭化物粒子混入
4	10YR 6/4	にぶい黄橙色シルト	炭化物粒子、にぶい黄色土が細い斑状に混入
5	10YR 6/3	にぶい黄橙色シルト	灰白色土がかなり普遍的に混入
6	10YR 5/2	灰黄褐色シルト	炭化物粒子、灰白色土が斑状に混入
SI-03 pit 1			
①	10YR 4/2	灰黄褐色シルト	炭化物粒子混入



第71図　SI—01出土遺物　6～11：½



第72図　SI —02出土遺物　6：½

が、甕小片で外面平行叩き、内面ナデ消し？が見られ、混入品であろう。また、ミニチュアや土玉は祭祀具であろう。

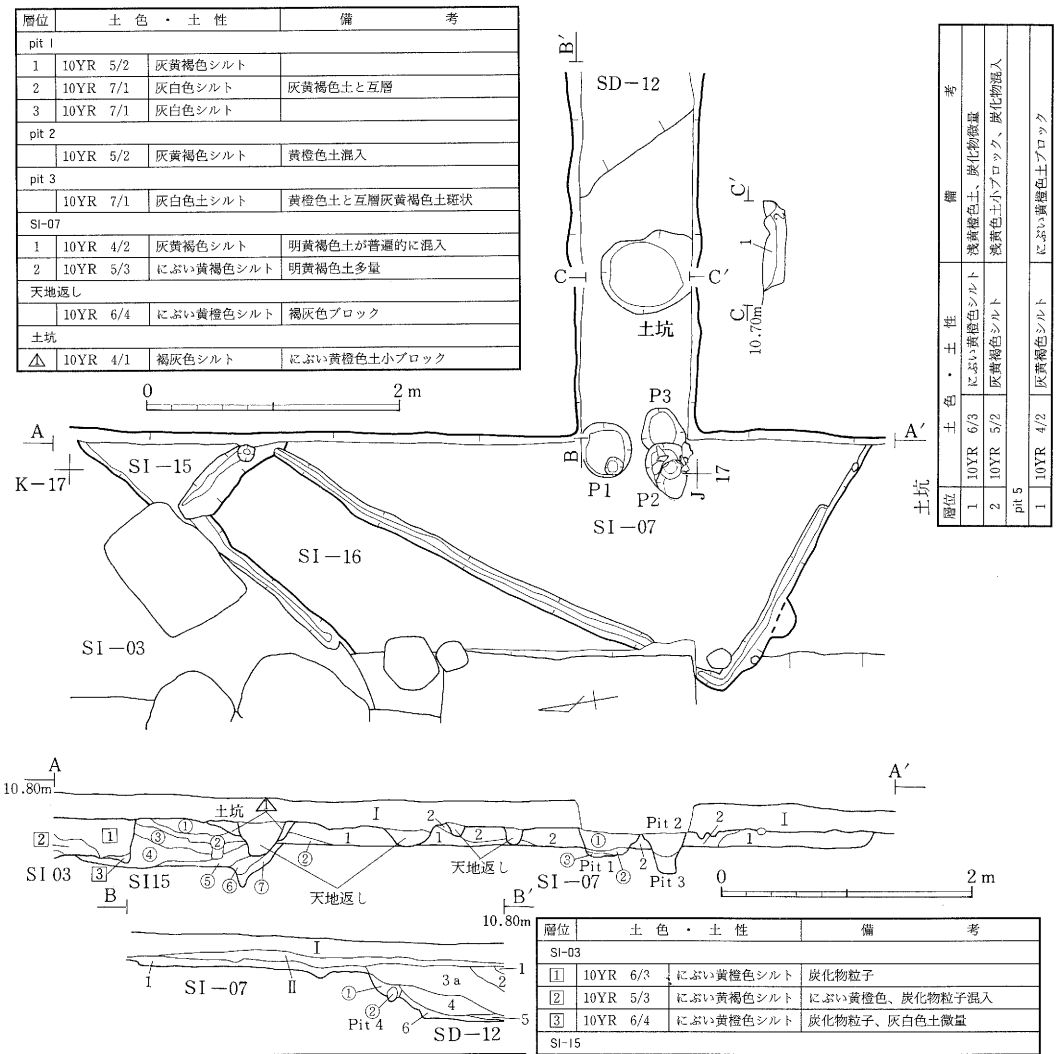
SI02（第68・72図）

Ⅶ区北部（J－4区）に位置し、SB08・10・11・12・SI01に切られ、SK27を切る。大半がSI01に切られ規模不明だが、南辺約4.8m、西辺3.25m以上で、壁高は最大9cmである。西壁際に焼土を伴なう土坑が検出されたが、炉あるいはカマドに関連するものかは明らかでない。柱穴は不明であり、壁溝はない。

出土遺物は、土師器坏・高坏、臼玉があり、他に弥生土器片がある。第72図1・3・4は口縁部が内弯する坏である。2は内面黒色処理の坏で、SI01の混入品であろう。5は床面出土の高坏。6はP_{12}出土の臼玉である。

SI03（第70・74・75図）

Ⅰ区北部（J・K－16区）に位置し、SB01・SD02に切られ、SI14～16を切る。また、直接確認できないが、SI19とも重複関係にあったものと思われる。東半部の調査に限られ、規模は明



層位	土色・土性		備考
pit 1			
1	10YR 5/2	灰黄褐色シルト	
2	10YR 7/1	灰白色シルト	灰黄褐色土と互層
3	10YR 7/1	灰白色シルト	
pit 2			
	10YR 5/2	灰黄褐色シルト	黄橙色土混入
pit 3			
	10YR 7/1	灰白色土シルト	黄橙色土と互層灰黄褐色土斑状
SI-07			
1	10YR 4/2	灰黄褐色シルト	明黄褐色土が普遍的に混入
2	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	明黄褐色土多量
天地返し			
	10YR 6/4	にぶい黄橙色シルト	褐灰色ブロック
土坑			
△1	10YR 4/1	褐灰色シルト	にぶい黄橙色土小ブロック

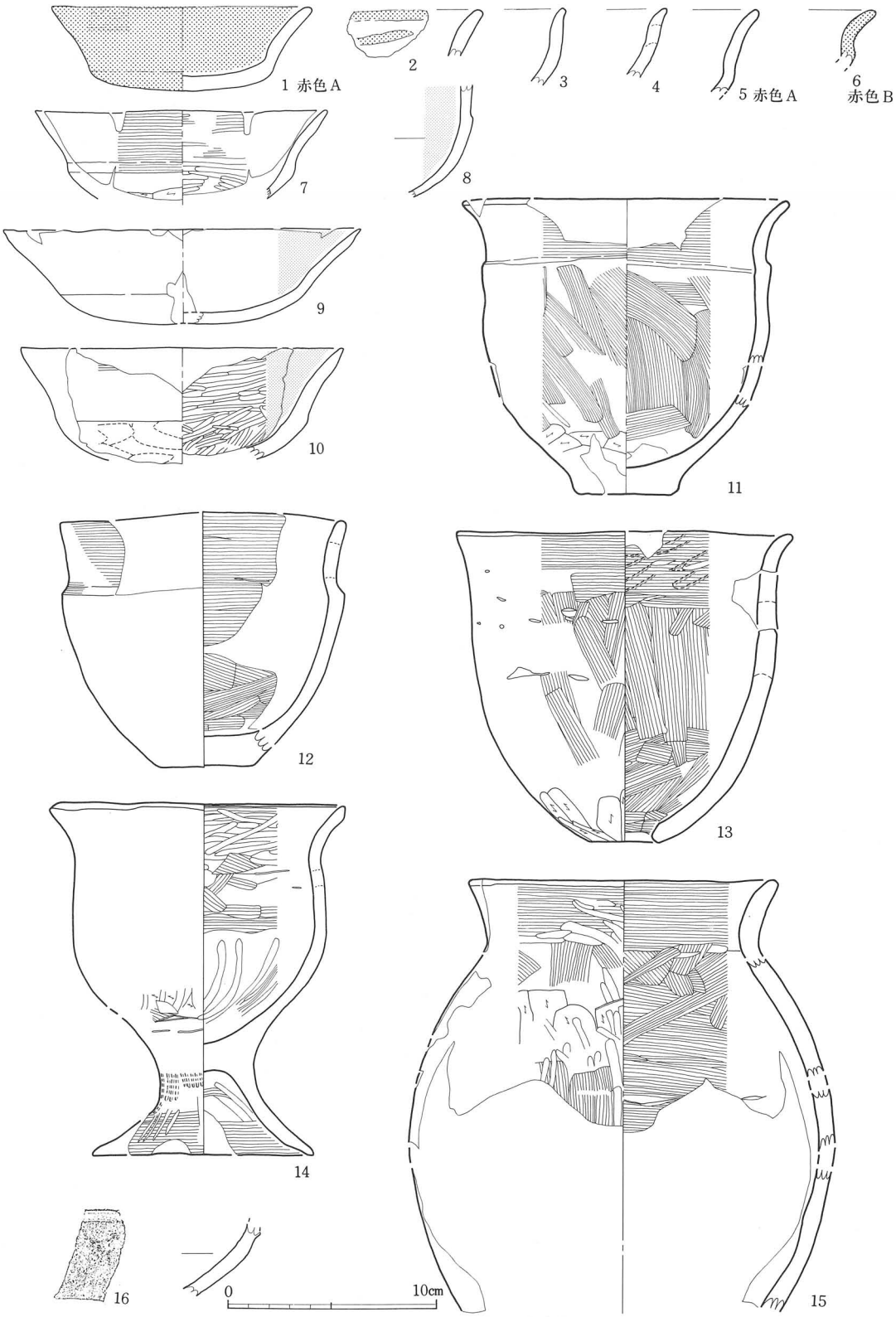
層位	土色・土性		備考
土坑			
1	10YR 6/3	にぶい黄橙色シルト	浅黄橙色土、炭化物微量
2	10YR 5/2	灰黄褐色シルト	浅黄色土小ブロック、炭化物混入
pit 5			
1	10YR 4/2	灰黄褐色シルト	にぶい黄橙色土ブロック

層位	土色・土性		備考
SI-03			
1	10YR 6/3	にぶい黄橙色シルト	炭化物粒子
2	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	にぶい黄橙色、炭化物粒子混入
3	10YR 6/4	にぶい黄橙色シルト	炭化物粒子、灰白色土微量
SI-15			
①	10YR 7/3	にぶい黄橙色シルト	褐灰色土粒子が普遍的に混入
②	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	炭化物粒子、にぶい黄橙色土小ブロック
③	7.5YR 5/3	にぶい褐色シルト	炭化物粒子が普遍的に混入
④	10YR 4/3	にぶい黄褐色シルト	炭化物粒子が普遍的に混入
⑤	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	炭化物、灰白色粒子
⑥	10YR 5/2	灰黄褐色シルト	灰黄色土斑状炭化物微量
⑦	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	灰色色土、浅黄橙色土炭化物微量

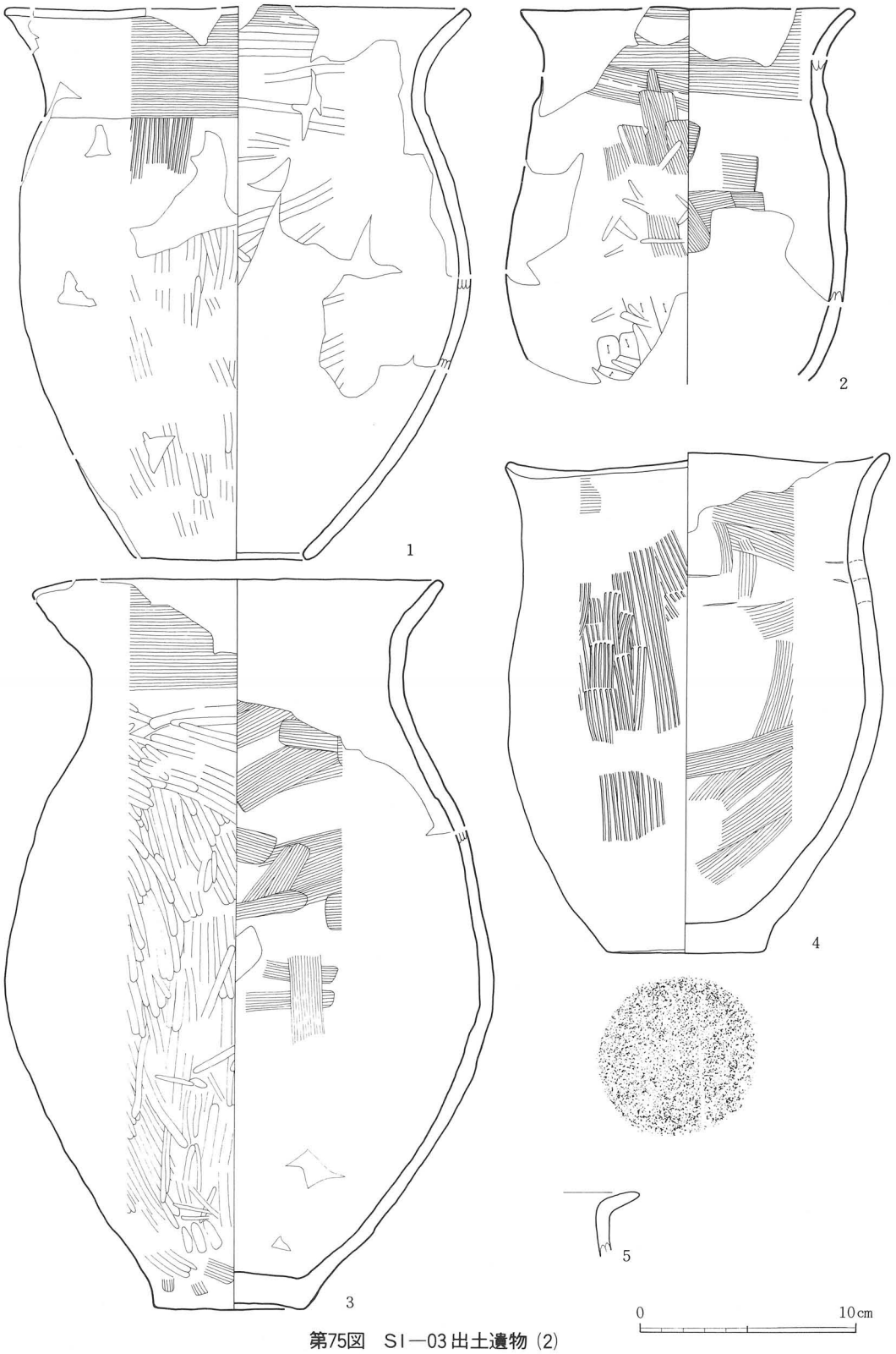
層位	土色・土性		備考
SI-07			
1	10YR 7/4	にぶい黄橙色シルト	灰黄褐色と互層
SD-12			
1	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト	
2	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	炭化物混入
3a	10YR 6/3	にぶい黄橙色シルト	浅黄橙色土、灰白色土、炭化物混入
4	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト	炭化物、浅黄橙色土混入
5	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	炭化物、浅黄橙色土混入
6	2.5Y 6/4	にぶい黄色	
pit 4			
①	10YR 7/4	にぶい黄橙色シルト	浅黄橙色土、炭化物混入
②	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	炭化物混入

第73図　ＳＩ－03・07・15・16平面図・断面図

確ではない。東壁 2.4 m 以上、南壁 2.5 m 以上を測る。壁高は上部を削平されているが、最大 23 cm を測る。形状は方形である。カマドは東壁中央部に位置すると予想されるが、削平を受けて特徴を充分把握できない。煙道の底面が一部残存している。床面は平坦で、土坑 3 基・ピット 3 基が検出された。このうち、1 号土坑は方形を呈し、貯蔵穴（深さ 37 cm）と考えられる。P_1が主柱穴の一部であろう（深さ 44 cm）。また、南壁に壁溝が確認された。カマド周辺に土器



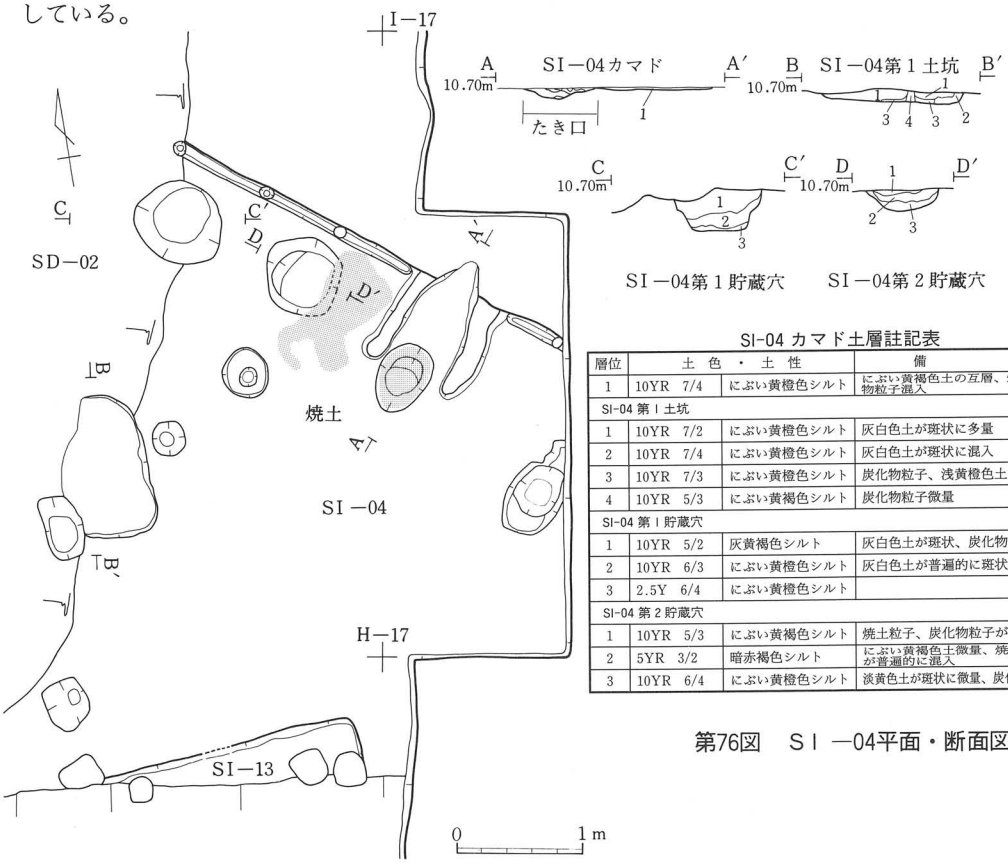
第74図　SI－03 出土遺物（1）



第75図　SI—03出土遺物（2）

が出土し、東側に集中傾向が認められた。

出土遺物は、土師器坏・鉢・甕・甑、須恵器高坏？、敲石？、フレークがある。坏は第74図1・2・5・6が赤色塗彩（以下、「赤彩」と省略する）を施すもので、1は内外全面、2は内部と外面に文様風に施すもの、5は内面全面と外面口縁部に施す。6は砂粒が目立たず、胎土も赤色系の色調を示している。図示できないが、外面赤彩・内面黒色処理を施す坏片もある。8～10は内面黒色処理を施すもので、8は埦形のものである。3・4・7は無彩の坏である。坏は有段で口縁部が外反あるいは外傾するものが主体で、赤彩するものが多いようである。12は段を有する小型鉢である。11・14・15・第75図2～5は甕で多様である。11は広口の小型甕、14は台付小型甕で、台というより形態や調整は高坏の脚と類似している。15・第75図3は胴部の膨らむもの、第75図2は下膨らみであろうか。同図5は甕の口縁部か。甕は、最終調整が精粗の差はあるものの、ミガキ調整が主体である。第74図13は小型甑、第75図1は大型で胴の膨らむ甑である。また、甕や甑の口縁部下半には、横ナデ調整以前にヘラで押さえるものがあるようだ。その結果、下半が直立ぎみとなり、時には下端（頸部）に段を形成する。第74図16は須恵器高坏の坏部とみられる。5世紀代の混入品か。他に、骨片・種子・琥珀片（？）が出土している。



SI-04 カマド土層註記表

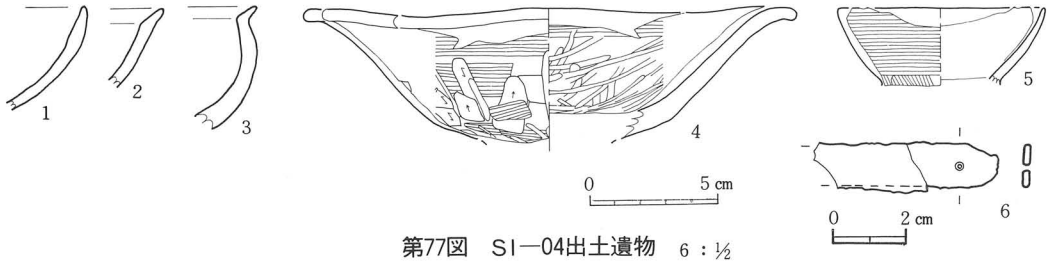
層位	土色・土性		備考
1	10YR 7/4	にぶい黄橙色シルト	にぶい黄褐色土の互層、焼土粒・炭化物粒子混入
SI-04 第1土坑			
1	10YR 7/2	にぶい黄橙色シルト	灰白色土が斑状に多量
2	10YR 7/4	にぶい黄橙色シルト	灰白色土が斑状に混入
3	10YR 7/3	にぶい黄橙色シルト	炭化物粒子、浅黄橙色土が混入
4	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	炭化物粒子微量
SI-04 第1貯蔵穴			
1	10YR 5/2	灰黄褐色シルト	灰白色土が斑状、炭化物粒子混入
2	10YR 6/3	にぶい黄橙色シルト	灰白色土が普遍的に斑状に混入
3	2.5Y 6/4	にぶい黄橙色シルト	
SI-04 第2貯蔵穴			
1	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	焼土粒子、炭化物粒子が混入
2	5YR 3/2	暗赤褐色シルト	にぶい黄褐色土微量、焼土粒・炭化物が普遍的に混入
3	10YR 6/4	にぶい黄橙色シルト	淡黄色土が斑状に微量、炭化物粒子混入

第76図　SI－04平面・断面図

SI04（第 76・77 図）

Ⅰ区南部（J－16・17 区）に位置し、SD01～03・SB04 に切られる。また、SI13 と重複関係にあるが、南部は床面を失なうほど削平を受け、新旧は確認できない。規模は北壁で 3.4 m を測る。おそらく、一辺 5 m 以上の方形プランとなろう。壁高は最大 10 cm で、後世の削平が著しい。カマドは北壁に位置し、袖は上部が削平され、煙道部は不明、焚き口の焼土は明瞭に残っている。カマドの西脇には、炭化物混りの焼土が検出された。柱穴とみられるピットは 3 基確認できた。西側に偏在して、土坑 3 基を検出した。このうち、2 号土坑は床下で検出した古い土坑である。いずれも不整形で、深さは 1 号 30 cm・2 号 20 cm・3 号 8 cm と比較的浅い。2 号から骨片・炭化物が出土した。北壁では壁溝が検出された。

出土遺物は、土師器坏・高坏・小型壺、刃子？がある。第 77 図 1 ～ 3 は坏で、口縁部が屈曲するものと内湾ぎみのものがある。4 は高坏で、口縁部が外反し下部の稜は不明瞭である。5 はピット出土の小型壷である。6 は 1 号土坑出土の刃子の茎であろうか。7 は剣形模造品。

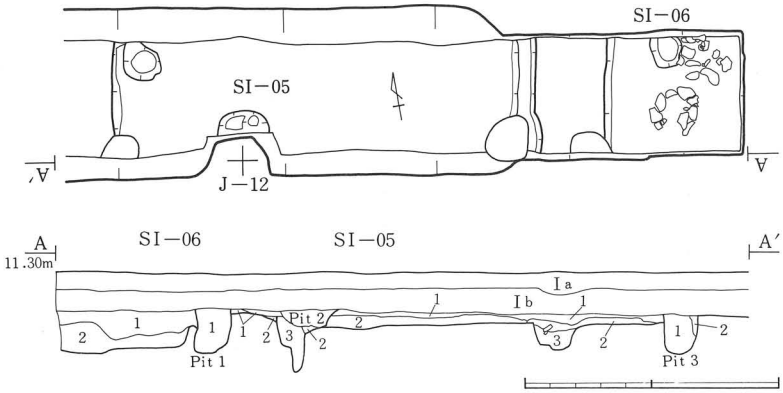


第77図　SI－04出土遺物　6：½

SI05（第 78・79 図）

3 トレンチの東部（J－12 区付近）に位置し、中世の柱穴群に切られる。規模は不明だが、東西約 3.35 m、壁高は最大 18 cm を測る。床は平坦であることから、住居跡あるいは竪穴遺構と考えられる。

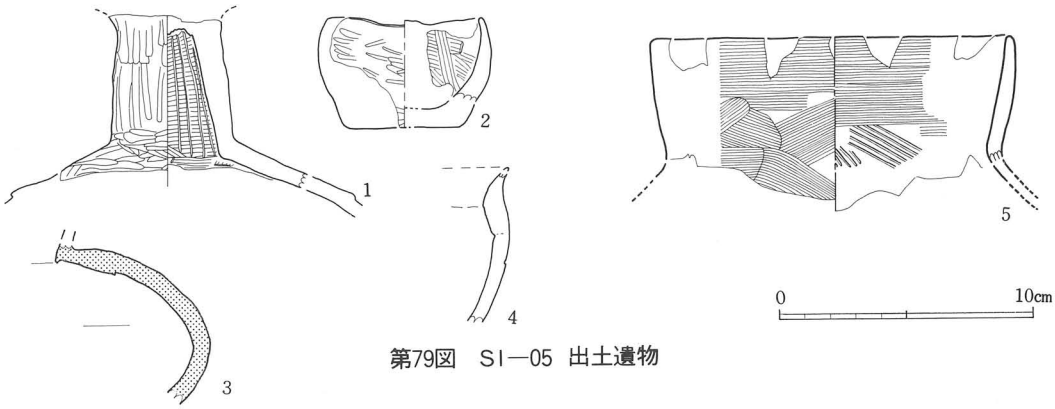
出土遺物は、土師器高坏・鉢・小型壺・壺・ミニチュア、弥生土器がある。第 79 図 1 は脚部



SI-05・06 土層註記表　10級枠あり

層位	土色・土性		備考
SI-05			
1	10YR 2/2	黒褐色シルト	
2	10YR 5/6	黄褐色シルト	黒褐色土との互層
3	10YR 4/3	にぶい黄褐色シルト	
SI-06			
1	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト	
2	10YR 6/4	にぶい黄橙色シルト	
pit 1、pit 2			
1	10YR 4/2	灰黄褐色シルト	黒褐色土ブロック混入
pit 3			
1	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト	

第78図　SI －05・06平面・断面図



第79図　SI—05 出土遺物

に段を有する高坏である。2はミニチュア土器である。これは東壁で重複する柱穴出土だが、住居に帰属するものと推定した。3は、砂粒をほとんど含まず、胎土が赤褐色を呈する小型壺であろう。

SI06（第78・80図）

3トレンチ東端部（I・J－12区）に位置し、中世の柱穴群に切られる。トレンチ調査のため、特徴は不明である。壁高は約24cmを測る。床面は平坦で、北部で深さ約13cmの浅い土坑を検出した。遺物は、床面から土坑に落ち込むように分布している。

出土遺物は、土師器坏・壺・甕、須恵器（器種不明）がある。第80図1～5は坏で、1・5は内湾するもの、2は直立する口縁部をもつもの、3・4は口縁部に屈曲をもつものである。6・7は壺と考えられる。8は大型で広口の甕であろう。須恵器は底部の破片で、坏かもしれない。

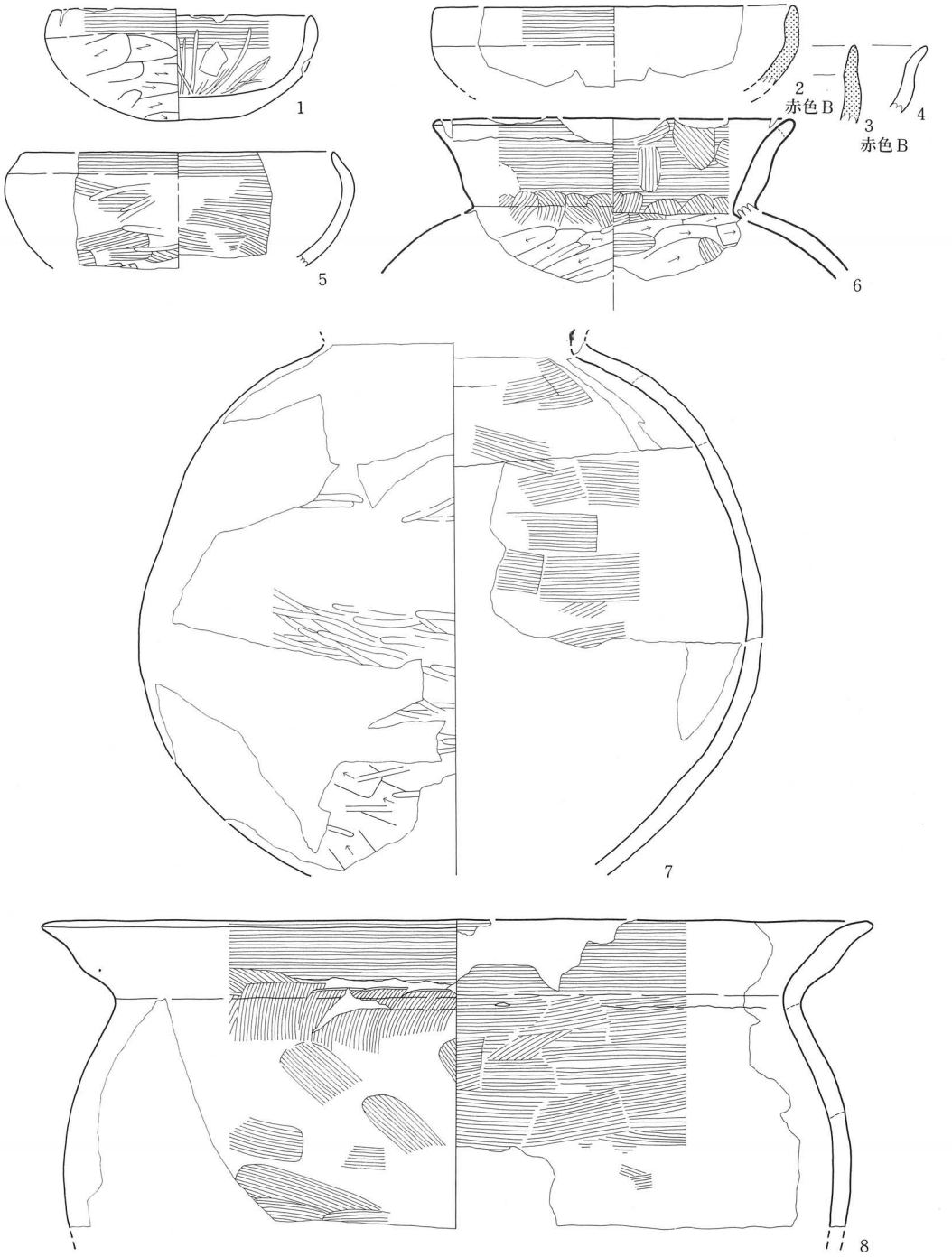
SI07（第73・81図）

1トレンチ（J－16・17区付近）に位置し、SB06、SD02・03・12に切られ、SI15・16を切る。規模は明確ではないが、西辺4.2m以上、南辺2.3m以上を測る。上部は削平されているが、壁高は最大14cmである。床面は平坦で、柱穴・土坑各1基、ピット3基が検出された。このうち、ピット1は柱穴を切っており、坏・高坏が出土している。3基のピットは性格が不明である。深さは、柱穴42cm・土坑17cm・ピット1 18cm・ピット1・2 12cmを測る。西壁・南壁で、壁溝が検出された。カマド・炉は確認できない。

出土遺物は、土師器坏・高坏、石製模造品がある。第81図1～6は坏で、2は内湾ぎみの口縁をもち、4は口縁端部に屈曲をもち、5は口縁部外面の一部にミガキ調整がみられ、下端に軽い稜が形成されている浅めの坏である。6は底部に台を有し、口縁端部に面取りが施されている特異なものである。7～9は高坏、10は石製模造品円板である。土坑より骨片出土。

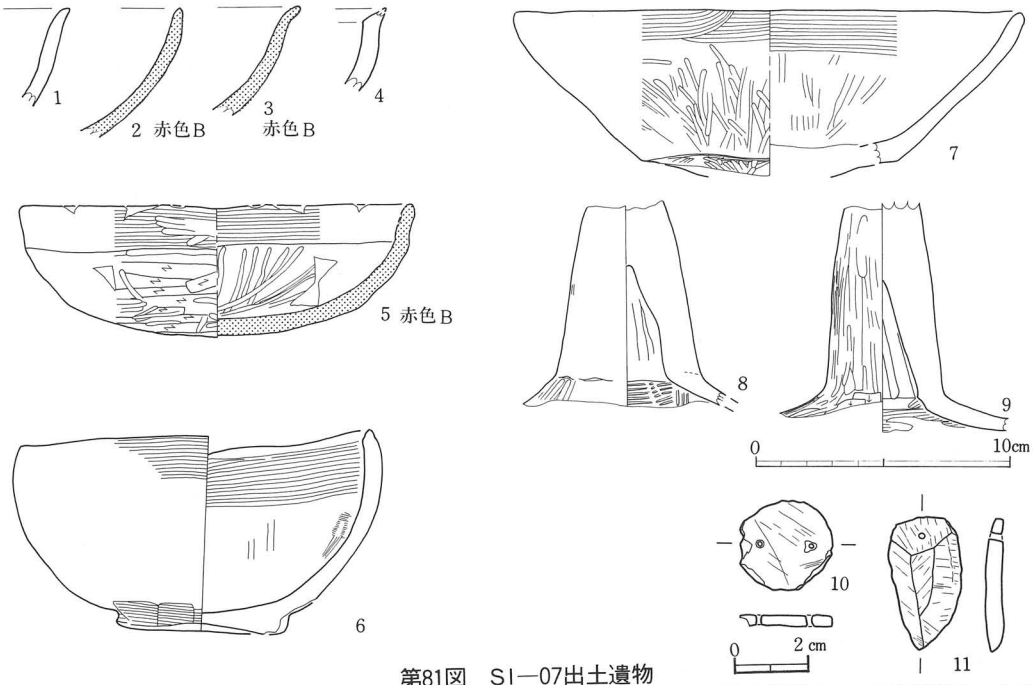
SI09（第82・83図）

Ⅳ区東部（F－9区）に位置し、SD01・09、SK 6～8・21～23に切られる。上部の削平や

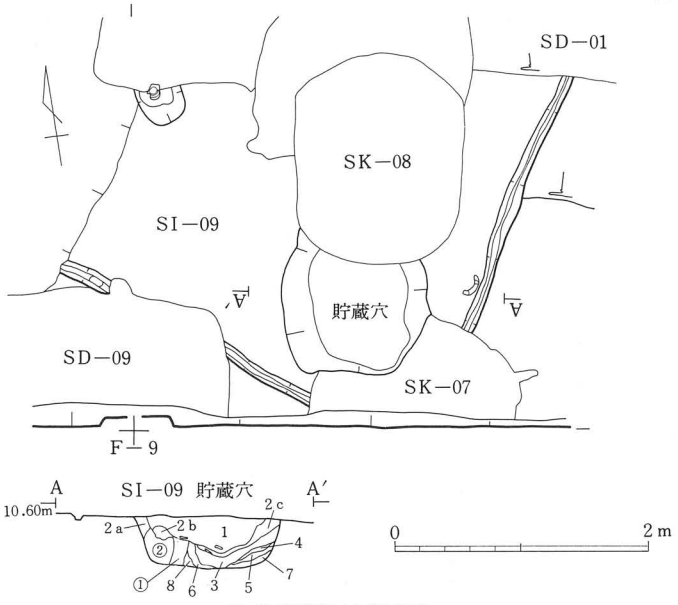


第80図　SI—06　出土遺物

他の遺構との重複が著しく、壁は消失している。規模は不明だが、東辺・南辺とも 2.2 m 以上を測る。カマドか炉か不明。貯蔵穴 1 基（1.16 m× 1 m 以上、深さ 0.43 m）とピット 3 基（いずれも柱穴とはならない）を検出した。東辺と南辺で壁溝を検出した。



第81図　SI—07出土遺物
10・11：½



SI-09 貯蔵穴土層註記表

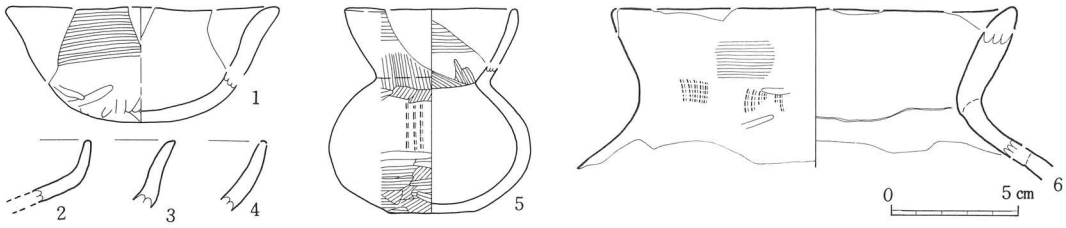
層位	土色・土性		備考	層位	土色・土性		備考
1	10YR 5/6	黄褐色シルト	炭化物粒子を普遍的・浅黄橙色土が斑状に混入	5	10YR 6/2	灰黄褐色シルト	炭化物粒子混入
2a	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	浅黄橙色と炭化物粒子が微量	6	5Y 8/2	灰白色シルト	灰黄褐色が斑状に微量
2b	10YR 5/2	灰黄褐色シルト	淡黄色土の互層	7	10YR 6/2	灰黄褐色シルト	淡黄色土が混入
2c	5Y 8/2	灰白色シルト	灰黄褐色土の互層、炭化物粒子混入	8	2.5Y 7/3	浅黄色シルト	灰白色土が斑状に混入
3	10YR 5/1	褐灰色シルト	炭化物粒子を普遍的、灰白色土が斑状に微量	①	10YR 7/3	にぶい黄橙色シルト	炭化物粒子、灰白色が斑状に混入
4	10YR 6/2	灰黄褐色シルト	灰白色土と炭化物粒子が微量	②	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	

第82図　SI —09平面・断面図

出土遺物は、土師器坏・小型壺•甕？がある。第83図1～4は坏で、1はミニチュアである。5は小型壺。6は甕とみられる口縁部破片である。他に、石製模造品（円板？）の残欠2点と弥生土器1点が出土している。

SI10（第84・85図）

4トレンチ（J－6区）に位置し、SB13、SD06•11に切られ、SI17を切る。トレンチ調査のため規模不明である。東壁・カマド・貯蔵穴の一部、柱穴1基を検出した。壁高は約25cmである。また、カマド前の床面で、深さ5cm前後の浅い不定形の凹地が認められた。遺物は、カマド内やその周辺及び貯蔵穴内



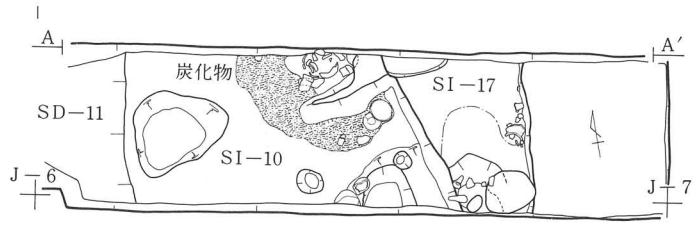
第83図　SI—09出土遺物

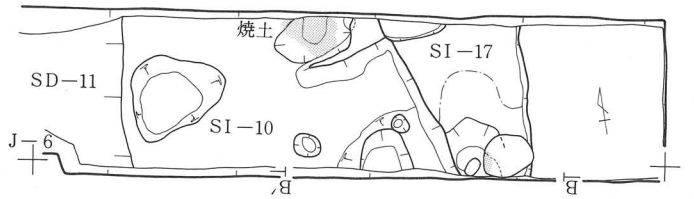
SI-17 土層註記表

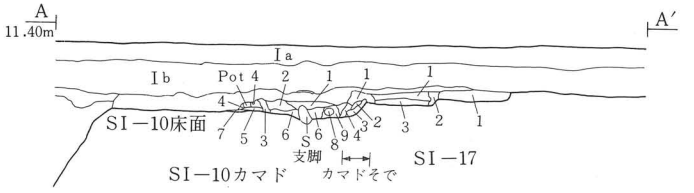
層位	土色・土性		備考
1	10YR 5/6	黄褐色シルト	炭化物粒子普遍的混入、浅黄色土斑状
2	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	炭化物粒子混入、灰白色土斑状
3	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト	炭化物粒子普遍的混入、灰白色土斑状
SI-10 カマドそで			
1	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	焼土粒子普遍的、明黄褐色粒子混入
2	7.5YR 3/3	暗褐色シルト	焼土粒子混入
3	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト	焼土粒多量、炭化物粒子混入
4	5YR 3/3	暗赤褐色シルト	にぶい黄褐色土混入

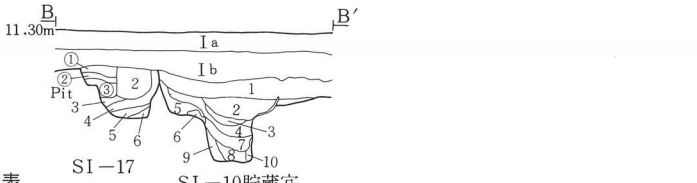
SI-10 カマド土層註記表

層位	土色・土性		備考
1	7.5YR 3/4	暗褐色シルト	焼土粒、炭化物粒子混入
2		焼土	
3	5YR 3/3	暗赤褐色シルト	焼土、炭化物粒子混入
4	5YR 3/3	暗赤褐色シルト	炭化物粒子混入
5	10YR 7/8	黄橙色シルト	焼土、炭化物粒子混入
6	5YR 3/6	暗赤褐色シルト	焼土、炭化物粒子混入
7	10YR 2/1	黒色シルト	炭化物混入
8		焼土層	煙道
9	5YR 3/4	暗褐色シルト	焼土、炭化物混入









SI-10 貯蔵穴土層註記表

層位	土色・土性		備考
1	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	炭化物粒子にぶい黄橙色粒貯蔵穴上面焼土粒子
2	10YR 3/1	黒褐色シルト	焼土粒子炭化物粒子普遍的混入、にぶい黄橙色ブロック
3	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	焼土粒子炭化物粒普遍的混入
4	10YR 4/3	にぶい黄褐色シルト	炭化物粒子普遍的混入
5	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト	炭化物粒子普遍的混入、灰白色土斑状
6	10YR 7/4	にぶい黄橙色シルト	
7	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	にぶい黄橙色土斑状、焼土粒子炭化物微量
8	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	
9	10YR 6/3	にぶい黄橙色シルト	
10	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト	にぶい黄橙色土ブロック

SI-07 pit 土層註記表

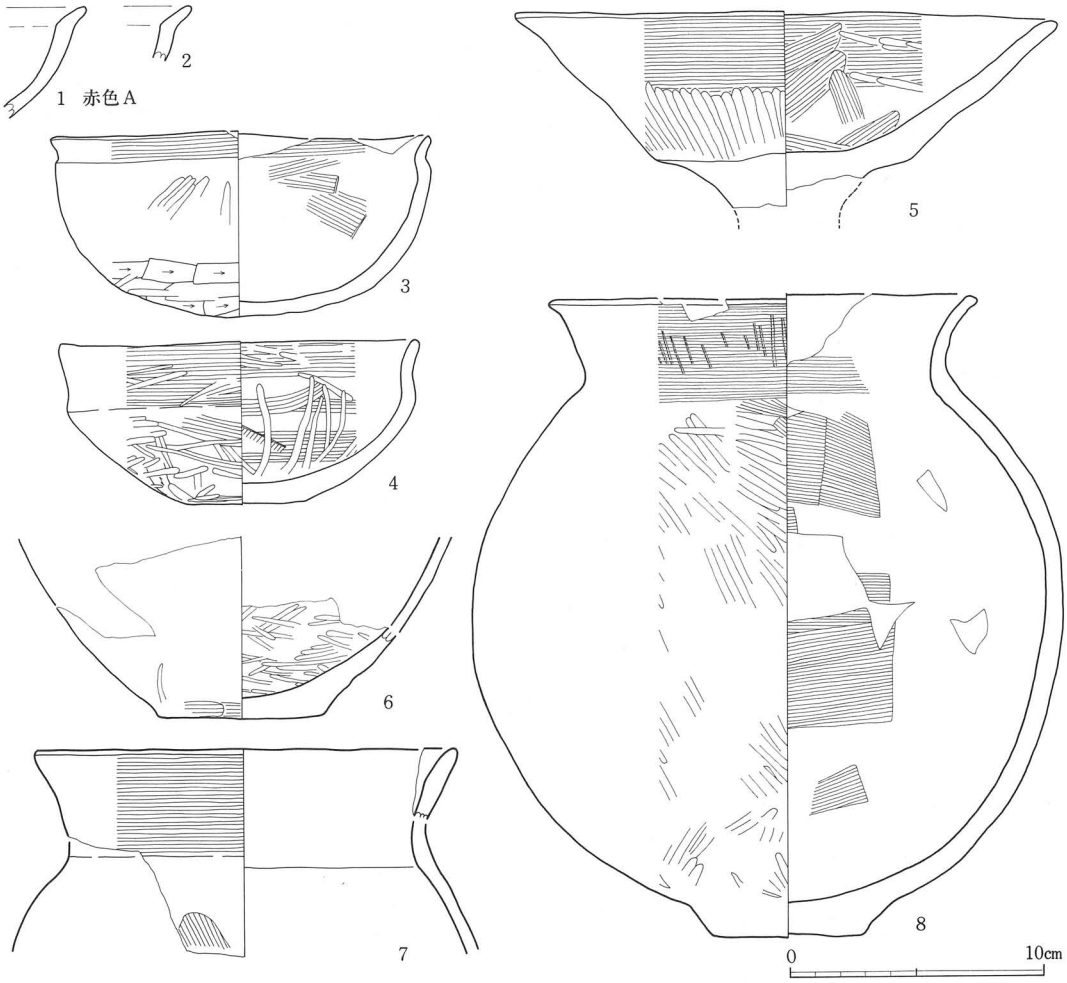
層位	土色・土性		備考
①	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	灰白色土斑状、炭化物粒子混入
②	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	灰白色土普遍的斑状
③	10YR 5/2	灰黄褐色シルト	炭化物粒子混入
SI-17			
2	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト	炭化物粒子灰白色土普遍的、にぶい黄橙色土斑状
3	10YR 4/2	灰黄褐色シルト	
4	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト	炭化物粒子にぶい黄橙色土粒子混入
5	10YR 5/3	にぶい黄橙色シルト	にぶい黄橙色土斑状
6	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト	

0　2 m

第84図　SI —10・17平面・断面図

で比較的まとまって出土している。

出土遺物は、土師器坏・高坏・甕があり、他に弥生土器・フレークが出土している。第85図1～4は坏で、口縁部に屈曲をもつものが多いが、4のように口縁部が外反傾向を示し、口縁部外面にミガキ調整が施されるものもある。6～8は甕で、特に6・7は長胴化の傾向が認め



第85図　ＳＩ—10出土遺物

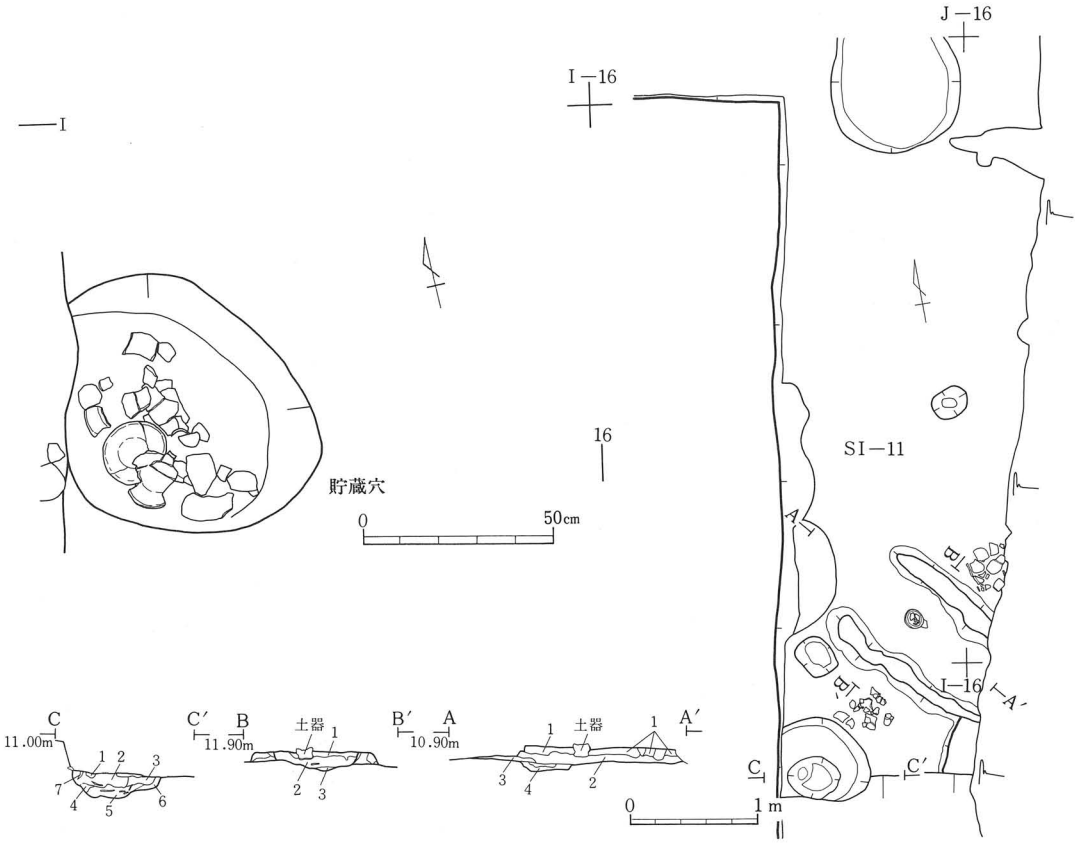
られる。5は貯蔵穴壁面にへばり付くように出土した高坏である。他に、骨片・琥珀？出土。

SI11（第86・87図）

Ｉ区中央（I－15区付近）に位置し、SB01・02、SD02・07に切られる。削平が著しく、壁は確認できず、床面も大部分を失っている。規模は、全く不明である。カマド・東壁の一部・貯蔵穴・ピット2基を検出したに過ぎない。カマドの袖は長い特徴をもつ。カマド内及び周辺、貯蔵穴で遺物が出土した。なお、カマドの西側の土坑は、本住居に帰属するかどうか不明であ

る。

出土遺物は、土師器坏・鉢・壺・甑・甕？、石製模造品がある。第87図1・3～10は坏であり、1は内外赤彩で口縁部が屈曲するもの、4・5・8～10は屈曲が省略化されて、口縁端部が外反するもの、3・6・7は口縁部が内湾するものである。3は表面だけでなく、胎土も赤い。6・7は口縁部横ナデ後、端部付近までミガキ調整が施される。11はカマド支脚に転用された鉢である。12は複合口縁の壺。13は口縁部に最大径をもつ、単孔の甑である。後期に一般化する形態に近づきつつあるものであろう。14は甕であろうか。3は、体部に孔のある破片



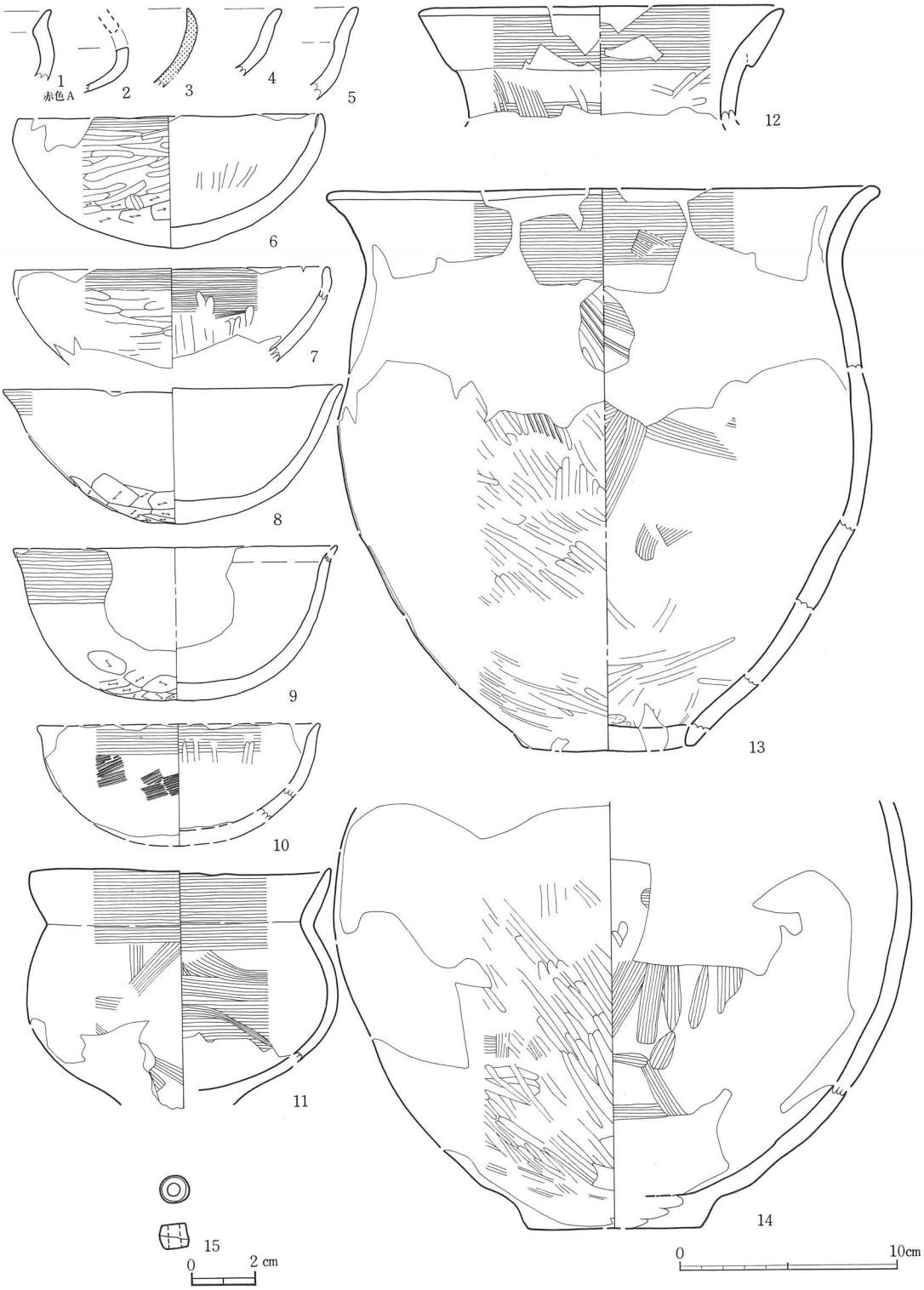
SI-11 貯蔵穴土層註記表

層位	土色・土性		備考
1	10YR 5/2	灰黄褐色シルト	
2	10YR 6/4	にぶい黄橙色シルト	炭化物粒子、灰白色土が斑状、褐灰色粒子が混入
3	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト	細い褐色粒子が普遍的に混入
4	10YR 5/2	灰黄褐色シルト	炭化物粒子、明黄褐色土が混入
5	10YR 4/3	にぶい黄褐色シルト	炭化物粒子、焼土粒を普遍的に混入
6	10YR 6/4	にぶい黄橙色シルト	細い褐色粒子が普遍的、灰白色粒子が混入

SI-11 カマド（南北）土層註記表

層位	土色・土性		備考
1	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	細かな焼土粒が斑状に混入
2	5YR 3/3	暗赤褐色シルト	焼土粒が多量、灰白色土がブロックに混入
3	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト	にぶい黄橙色土が斑状に混入
4	2.5Y 7/4	浅黄色シルト	黒褐色土の互層、焼土粒混入
5	10YR 4/3	にぶい黄褐色シルト	
SI-11 カマド（東西）			
1	2.5YR 4/6	赤褐色シルト	灰黄褐色土が斑状に混入
2	10YR 7/4	にぶい黄橙色シルト	焼土が若干・灰黄褐色土・灰褐色土が混入
3	2.5Y 7/3	浅黄色シルト	

第86図 SI－11平面・断面図

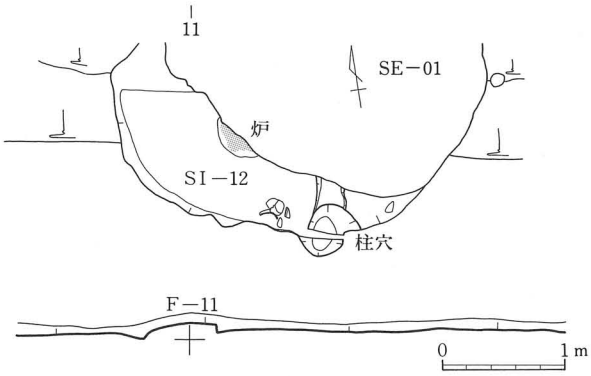


第87図　ＳＩ－11出土遺物

で、須恵器模倣の瑕であろう。15 は床面出土の臼玉である。他に、骨片・種子出土。

SI12（第 88・89～91 図）

Ⅳ区（F－11・12 区）に位置し、SD01・SE01 に切られる。本住居跡は削平が著しく、井戸跡(SE01)側に床面が約 40 cm ずり落ちた状態で検出された。周辺では、住居跡の痕跡はほとんどない。炉跡約 1/3 が残存している。炉内より骨片出土。柱穴 1 基検出したが、北半と南半で断層のごとくレベル差が生じている。規模や特徴はほとんど不明である。しかし、遺物は多く、埋土から床面に達するように検出され、一括廃棄されたものと推定される。また、井戸内からも多く出土し、本来本住居跡に帰属するものが多分に含まれていると考えられる。



第88図　SI－12平面図

出土遺物は、土師器坏・高坏・小型短頸壺・壺・複合口縁壺・甕・鉢形甑・刀子？・敲石・弥生土器がある。第 89 図 1～4 は坏で、1～3 は内湾するもの、4 は口縁部に屈曲をもつものである。また、1・2 は表面・胎土とも赤色を呈する。5 は小型の短頸壺で、須恵器の器形と共通する。6 は高坏で、裾部はスロープを描き屈曲はみられない。7 は単孔の鉢形甑であろう。8・9 は壺で、8 は複合口縁壺で、SI04 の破片と接合した。第 90 図 1 は壺、2・3 は甕であろう。4 は敲石である。円礫を握り安くするために半裁しブランディングを加え、端部を主要な使用面としている。また、半裁面にも僅かに敲打痕が認められる。5 は、刀子と考えられる。第 91 図は SE01 出土の土師器であるが、本住居跡に帰属すると推定される土器である。1～3 は高坏である。2・3 は第 89 図 6 と同類であり、表面、胎土が赤色を呈している。4 は鉢形甑で、単孔となろう。

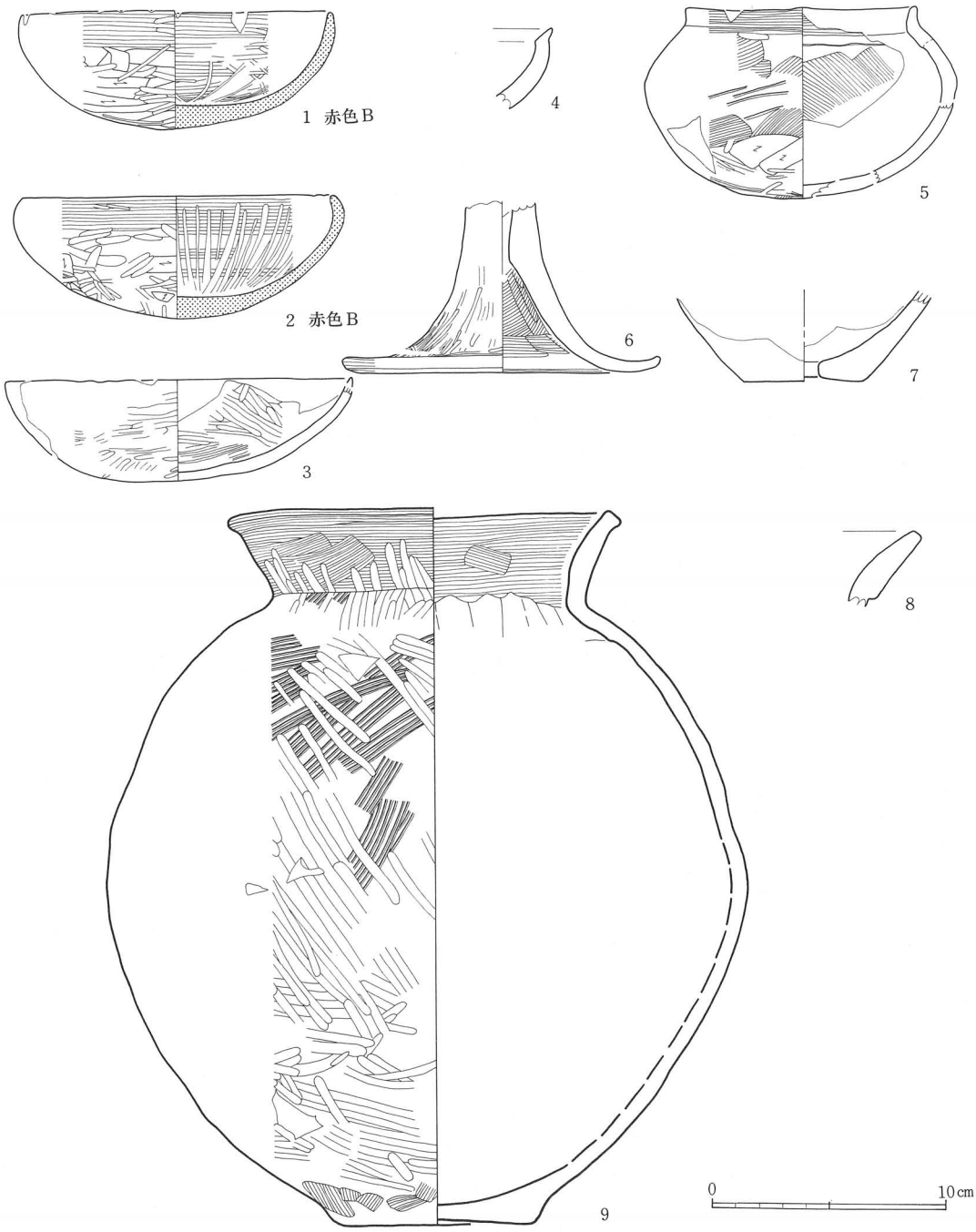
SI13（第 76 図）

Ⅰ区南端（G－16 区）に位置し、SB03～05・SD01 に切られる。また、SI04 と重複関係にあるが、その新旧は不明である。SD01 の開削や近年の天地反しにより大半を失っており、規模は不明である。僅かに、北壁（約 2 m）と東壁（約 0.5 m）そして床面の一部を検出したに過ぎない。壁高は 12 cm を測る。住居跡あるいは竪穴遺構の一部とみてよい。

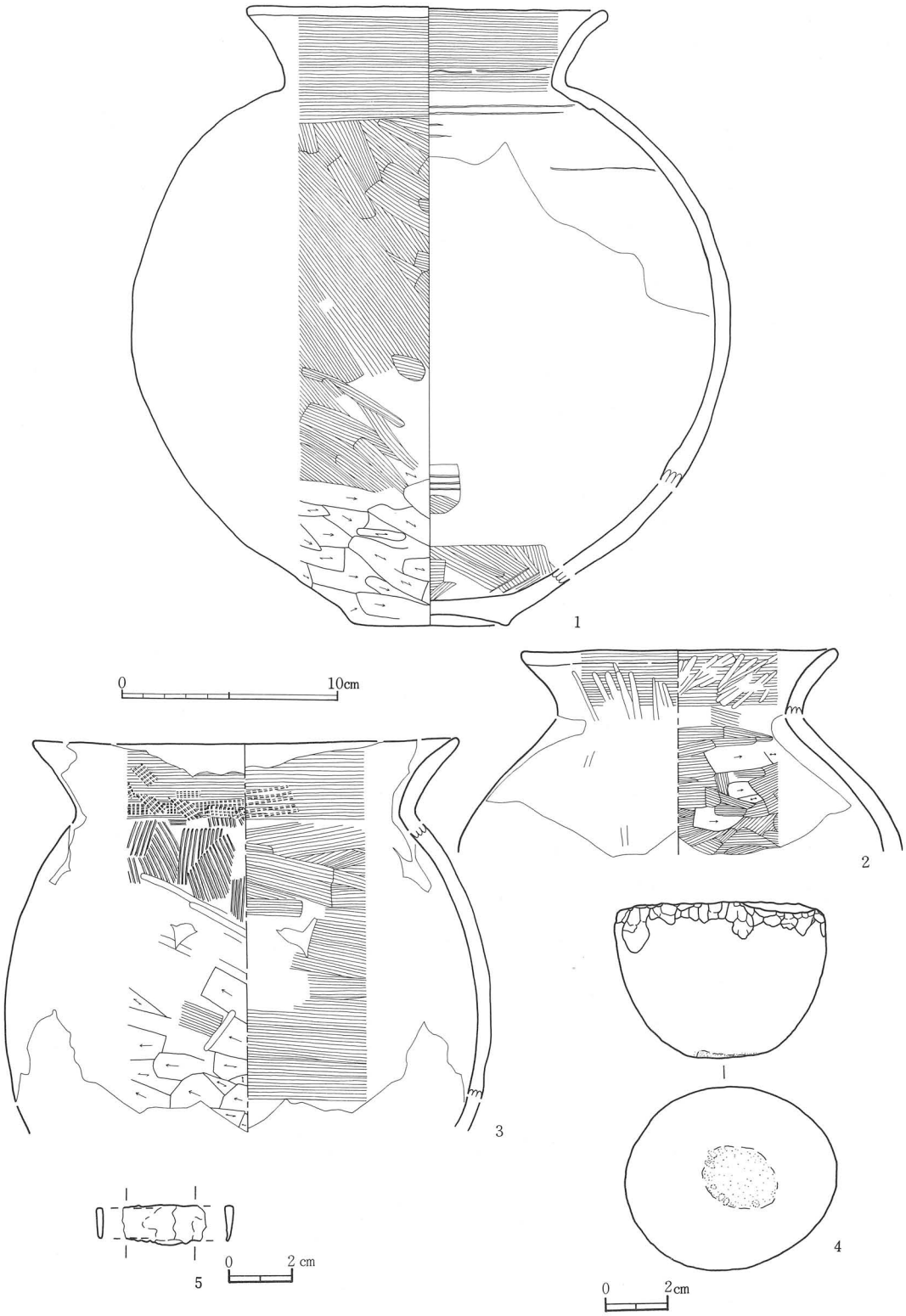
出土遺物は、赤彩の高坏など、土師器片が少量出土している。

SI14（第70・92図）

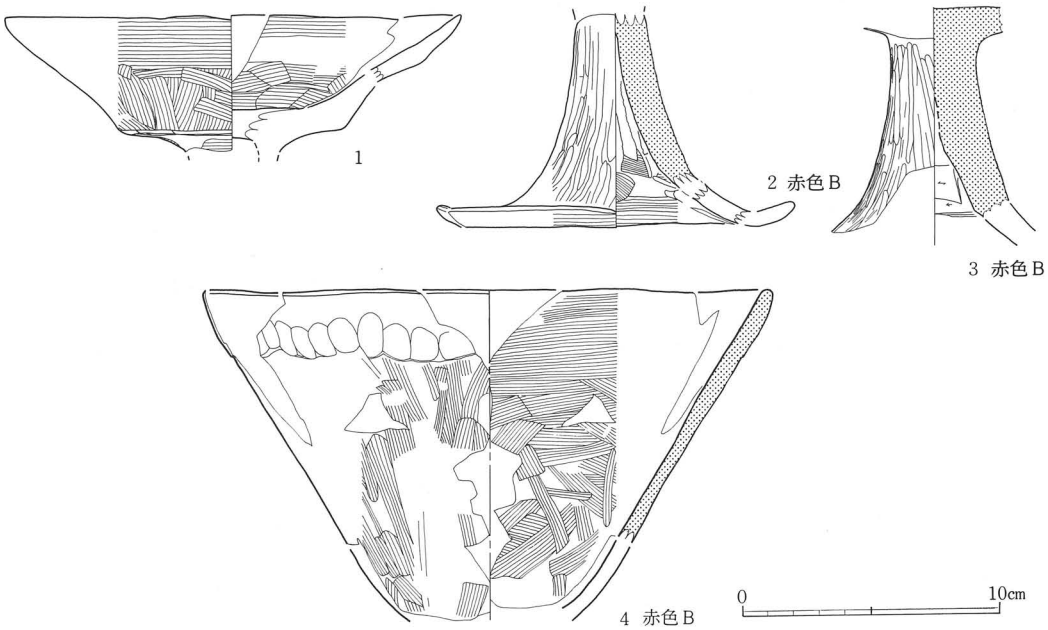
Ⅰ区北端（K－16 区付近）に位置し、SD02・03・SI03 に切られる。SI15 と重複しているが、



第89図　SI－12出土遺物（1）



第90図　ＳＩ－12出土遺物（２）４・５：½



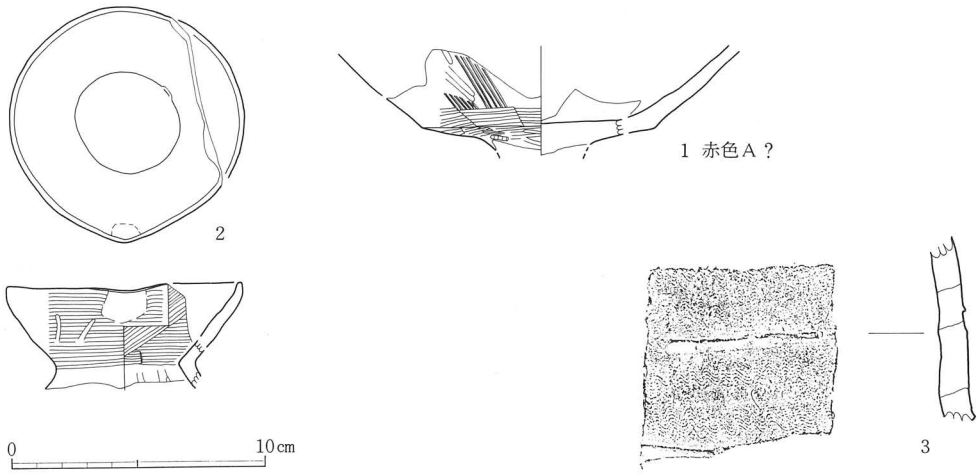
第91図　SI－12出土遺物（3）

新旧は不明である。規模や特徴は全く不明で、床の硬化面と少量の遺物を検出するに留まった。

出土遺物は、土師器高坏・小型壺・須恵器器台である。第92図1は高坏、2は指頭による摘み出しで形成された注口をもつ小型壺である。3は須恵器器台の破片で、凸帯は線状に近く、波状文が4条みられる。側辺には長方形の透しの存在が確認できる。存地の製品であろう。

SI15（第73図）

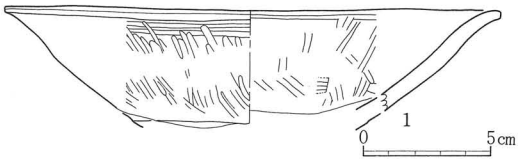
Ⅰ区北部（J－17区付近）に位置し、SI03・07に切られる。また、SI15・SD12と重複すると



第92図　SI－14出土遺物

考えられるが、新旧不明である。南西コーナー付近を検出したに過ぎず、規模・特徴は不明である。壁高は、残こりの良い場所で約 25 cm を測る。南壁には、壁溝が確認できた。

出土遺物は、土師器片が僅かにあるが、図示できるものはない。



第93図　SI—16 出土遺物

SI16（第 73・93 図）

Ⅰ区北部（J－16 区）に位置し、SB01・SD02・03・SI03・07 に切られ、SI15 を切る。硬化した床面のみの検出で、規模・特徴は全く不明である。柱穴 2 基の帰属は不明である。

出土遺物は、土師器片が僅かにあるが、図示できるのは高坏に限られる（第 93 図 1）。

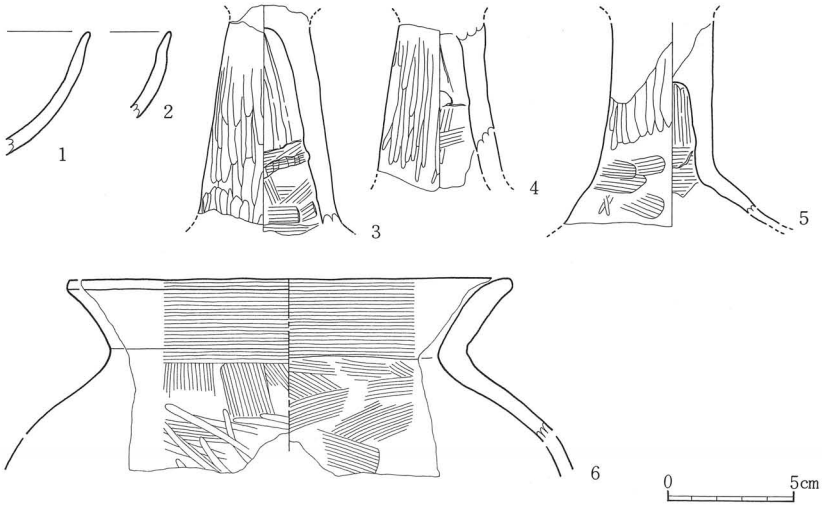
SI17（第 84・94 図）

4 トレンチの東部（J－ 6 区）に位置し、SB13・SI10 に切られる。トレンチ調査のため、規模・特徴は不明であるが、東壁約 1.2 m・壁高 9 cm を測る。床面は北半に貼床が認められ、南側に 1 号土坑（深さ 26 cm）、北側に 2 号土坑（深さ約 3 cm）が検出された。遺物は、 1 号土坑と東壁際で出土している。

出土遺物は、土師器坏・高坏・甕・弥生土器・剝片がある。第 94 図 1 ・ 2 は坏で、 2 は口縁部に弱い屈曲がある。 3 ～ 5 は高坏の脚部で、 5 は裾部が屈曲せずに、スロープ状になりそうである。 6 は体部が不明だが、甕であろう。

SI18（第 95・96 図）

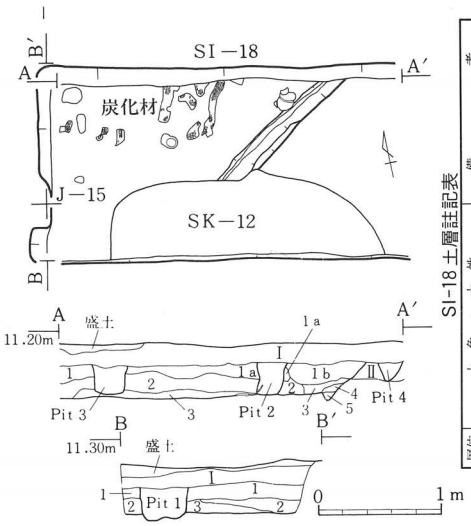
2 トレンチ（J－15 区）に位置し、SB01・SK12 に切られる。トレンチ調査のため規模は不明



第94図　SI—17 出土遺物

だが、東壁(約1m)と床の一部を検出した。壁高は12cmを測る。床面には、土器・円礫・炭化材が検出され、東壁には壁溝が確認された。本住居跡は焼失住居である。

出土遺物は、土師器坏・小型甕・甕・剝片がある。第96図1は内面黒色処理の坏。2は小型甕。3・4は甕であるが、3は長胴になると予想され、底部に木葉痕がある。



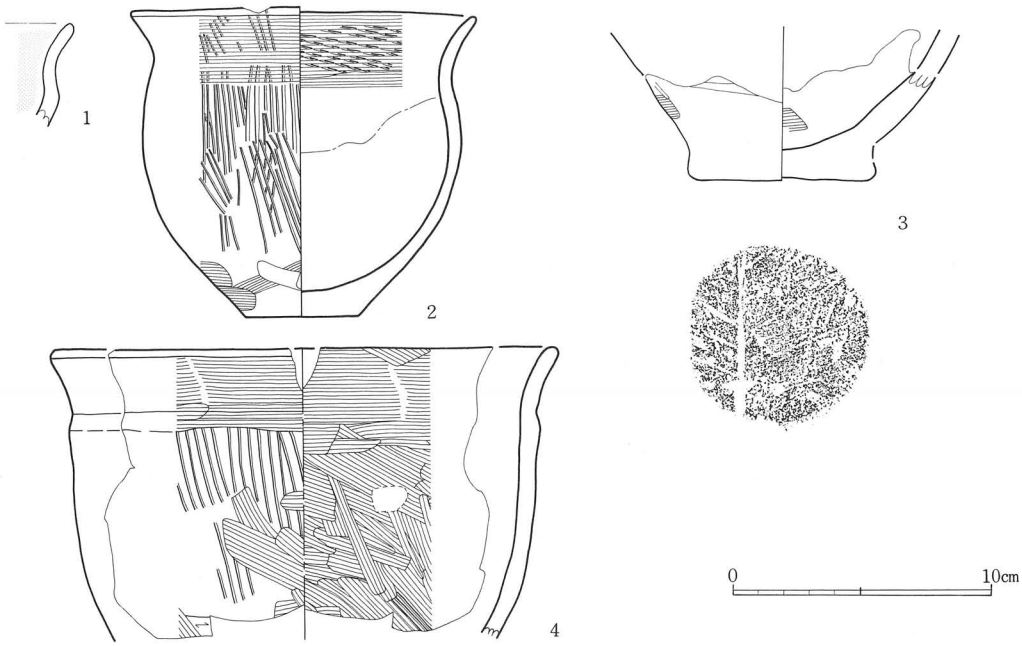
SI-18土層註記表

層位	土色	土性	備考
1a	10YR 4/4	褐色シルト	炭化物粒子普遍的に混入
1b	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	灰黄褐色土が斑状に混入
2	10YR 4/4	褐色シルト	炭化物粒子普遍的に混入
3	10YR 3/3	暗褐色シルト	木炭、炭化物粒子多量、浅黄色土が斑状に微量
4	10YR 4/2	灰黄褐色シルト	炭化物粒子普遍的に混入
5	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト	炭化物粒子微量
P1	10YR 4/1	褐灰色シルト	にぶい黄橙色土多量に普遍的、斑状に混入
P2	10YR 4/3	にぶい黄褐色シルト	炭化物粒子多量に混入、黄褐色土、灰黄褐色土斑状に混入
P3	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト	炭化物粒子、にぶい黄橙色粒子が斑状に混入
P4	10YR 5/1	褐灰色シルト	

第95図　SI－18平面・断面図

SI19（第70図）

I区北部（K－16区付近）に位置し、SB01・07・SD02に切られる。また、SI03と重複関係にあると考えられるが、直接確認できない。出土遺物から、本住居跡が古いと予想される。規模は明確ではないが、コーナー部分を推定すると、南辺3m以上、西辺1.8m以上になろう。



第96図　SI－18出土遺物

壁高は2〜3 cmの確認に留った。南壁に壁溝を伴なう。床面は不明瞭で、ピットや不整土坑が検出されたが、いずれも極めて浅い。

出土遺物は、古墳時代中期頃の土師器細片が少量出土しているが、図示できるものはない。

土坑跡（SK）

土坑跡は9基検出した。住居跡の分布の希薄なⅦ区に多い。

SK15（第97図）

Ⅶ区（H－4区）に位置し、天地返しによる撹乱を受けている。規模は、1.05 m× 0.83 m、深さ0.26 mを測る。平面は不整楕円形を呈する。遺物は出土していない。

SK16（第97図）

SK-15 土層註記表

層位	土色・土性	
1	10YR 8/3	浅黄橙色粘質シルト
2	10YR 6/3	にぶい黄橙色砂質シルト
3	2.5Y 7/2	灰黄色砂
SK-16		
1	10YR 6/2	灰黄褐色シルト
2a	10YR 6/4	にぶい黄橙色砂
2b	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト
2c	5Y 8/3	淡黄色砂
3	5Y 8/3	淡黄色砂
4	10YR 6/2	灰黄褐色砂
SK-17		
1	7.5YR 8/2	灰白色砂
2	2.5Y 6/4	にぶい黄色砂

SK-18 土層註記表

層位	土色・土性	
1	10YR 7/3	にぶい黄橙色砂質シルト
2	10YR 6/3	にぶい黄橙色砂質シルト
3	10YR 5/4	にぶい黄褐色砂

SK-19 土層註記表

層位	土色・土性	
1	10YR 8/3	浅黄橙色シルト
2	10YR 7/3	にぶい黄橙色シルト

SK-20 土層註記表

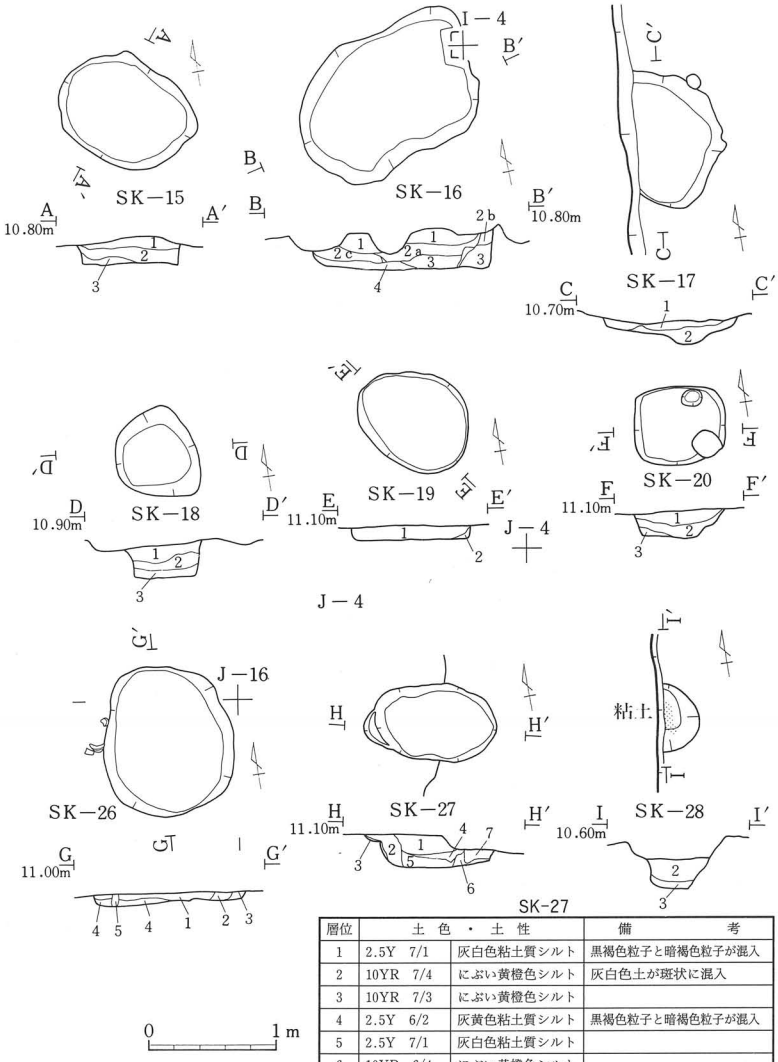
層位	土色・土性	
1	10YR 8/3	浅黄橙色シルト
2	2.5Y 7/3	浅黄色シルト
3	10YR 6/2	灰黄褐色シルト

SK-26 土層註記表

層位	土色・土性	
1	10YR 6/3	にぶい黄橙色シルト
2	10YR 6/4	にぶい黄橙色シルト
3	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト
4	10YR 7/6	明黄褐色シルト
5	10YR 4/1	褐灰色シルト

SK-28 土層註記表

層位	土色・土性	
2	10YR 7/6	明黄褐色シルト
3	2.5Y 7/2	灰黄色粘土質シルト



SK-27

層位	土色・土性		備考
1	2.5Y 7/1	灰白色粘土質シルト	黒褐色粒子と暗褐色粒子が混入
2	10YR 7/4	にぶい黄橙色シルト	灰白色土が斑状に混入
3	10YR 7/3	にぶい黄橙色シルト	
4	2.5Y 6/2	灰黄色粘土質シルト	黒褐色粒子と暗褐色粒子が混入
5	2.5Y 7/1	灰白色粘土質シルト	
6	10YR 6/4	にぶい黄橙色シルト	
7	10YR 5/1	褐灰白シルト	炭化物粒子を普遍、にぶい黄橙色混入

第97図　ＳＫ—15〜20・26〜28平面図・断面図

Ⅶ区（H－3区）に位置し、天地返しによる撹乱を受けている。規模は、1.54 m× 1.05 m、深さ 0.33 m を測る。平面は不整形である。遺物は出土していない。

SK17（第 97 図）

Ⅶ区（H・I－3区）に位置し、天地返しによる撹乱を受けている。規模は明確ではないが、0.8 m 以上、深さ 0.18 m を測る。平面は不整方形であろうか。遺物は出土していない。

SK18（第 97 図）

Ⅶ区（I－3区）に位置し、天地返しによる撹乱を受けている。規模は、0.77 m× 0.64 m、深さ 0.29 m を測る。平面は不整楕円形である。遺物は出土していない。

SK19（第 97 図）

Ⅶ区（J－3区）に位置し、SK20 の北側に隣接する。規模は、0.95 m× 0.77 m、深さ 0.11 m を測る。平面は楕円形である。遺物は出土していない。

SK20（第 97 図）

Ⅶ区（J－3区）に位置し、SB11 の柱穴に切られている。規模は、0.71 m× 0.62 m、深さ 0.21 m を測る。平面は隅丸方形である。遺物は出土していない。

SK26（第 97・102 図）

Ⅰ区（I－15区）に位置し、上部は削平を受けている。規模は 1.2 m× 1.03 m、深さ 0.12 m を測る。平面は楕円形である。遺物は第 102 図 5 のミニチュア土器 1 点がある。また、土坑の周囲にも土師器片が少量出土している。

SK27（第 97 図）

Ⅶ区（J－4区）に位置し、SI01・02 に切られる。規模は 1.07 m× 0.62 m、深さ 0.21 m を測る。平面は楕円形で、西側に張り出しがある。遺物は弥生土器細片 1 点がある。

SK28（第 97 図）

Ⅰ区南部（G－15区）に位置し、SD08 底面で約 1/2 を検出した。規模は南北で 0.54 m、深さ 0.24 m を測る。遺物は土師器片少量と白色粘土塊が出土している。

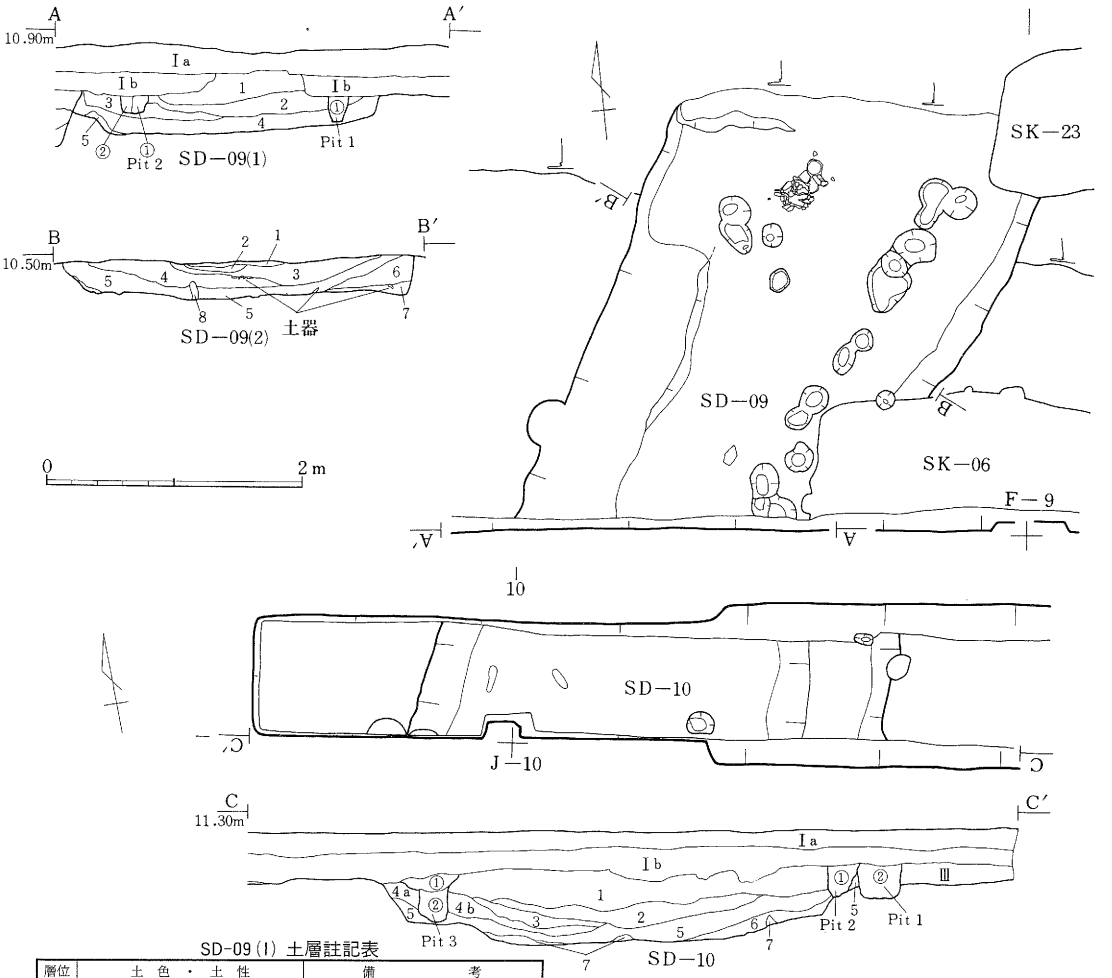
これらの土坑のうち、SK15～20・27 は埋土が灰白色～浅黄橙シルトで類似した特徴をもつ。それぞれ単独もので、およそ同時期と予想とれる。これらに類似するものは、第 11 次・14 次調査地点で検出されている。SK27 が SI02 に切られている点を考慮すると、古墳時代中期以前のものであろう。また、SK26・28 は単独で存在したかどうか不明で、あるいは住居跡などに付属するものだった可能性もある。これらは、出土土器片から古墳時代中期以後と予想される。

溝跡（SD）

溝跡は 3 ケ所で検出されている。

SD09（第 98・99 図）

Ⅳ区西部（F－８区）に位置し、SK06・22・SD01に切られ、SI09を切る。規模は、長さ3.6mを確認し、さらに南北に伸びる。幅2.95m、深さ0.4mを測る。西壁寄りにテラス状の段差がみられ、東壁側には連続するピットが検出された。このピットは4～14cmでいずれも浅い。方向は、N－31°－Eである。遺物は各層より出土しているが、特に3層に集中する傾向が認め



SD-09 (1) 土層註記表

層位	土色・土性		備考
1	10YR 3/1	黒褐色シルト	浅黄橙色土灰黄褐色土、炭化物
2	10YR 4/4	褐色シルト	灰白色土斑状、炭化物微量
3	10YR 7/4	にぶい黄橙色シルト	褐色土斑状
4	5Y 6/1	灰色粘土質シルト	酸化鉄、炭化物粒子混入
5	10YR 6/4	にぶい黄橙色シルト	灰白色土ブロック、明黄褐色粒子混入
pit 1			
①	10YR 3/4	暗褐色シルト	炭化物
pit 2			
①	10YR 4/3	にぶい黄褐色シルト	にぶい黄橙色土、灰黄褐色粒子
②	10YR 4/4	褐色シルト	にぶい黄橙色土

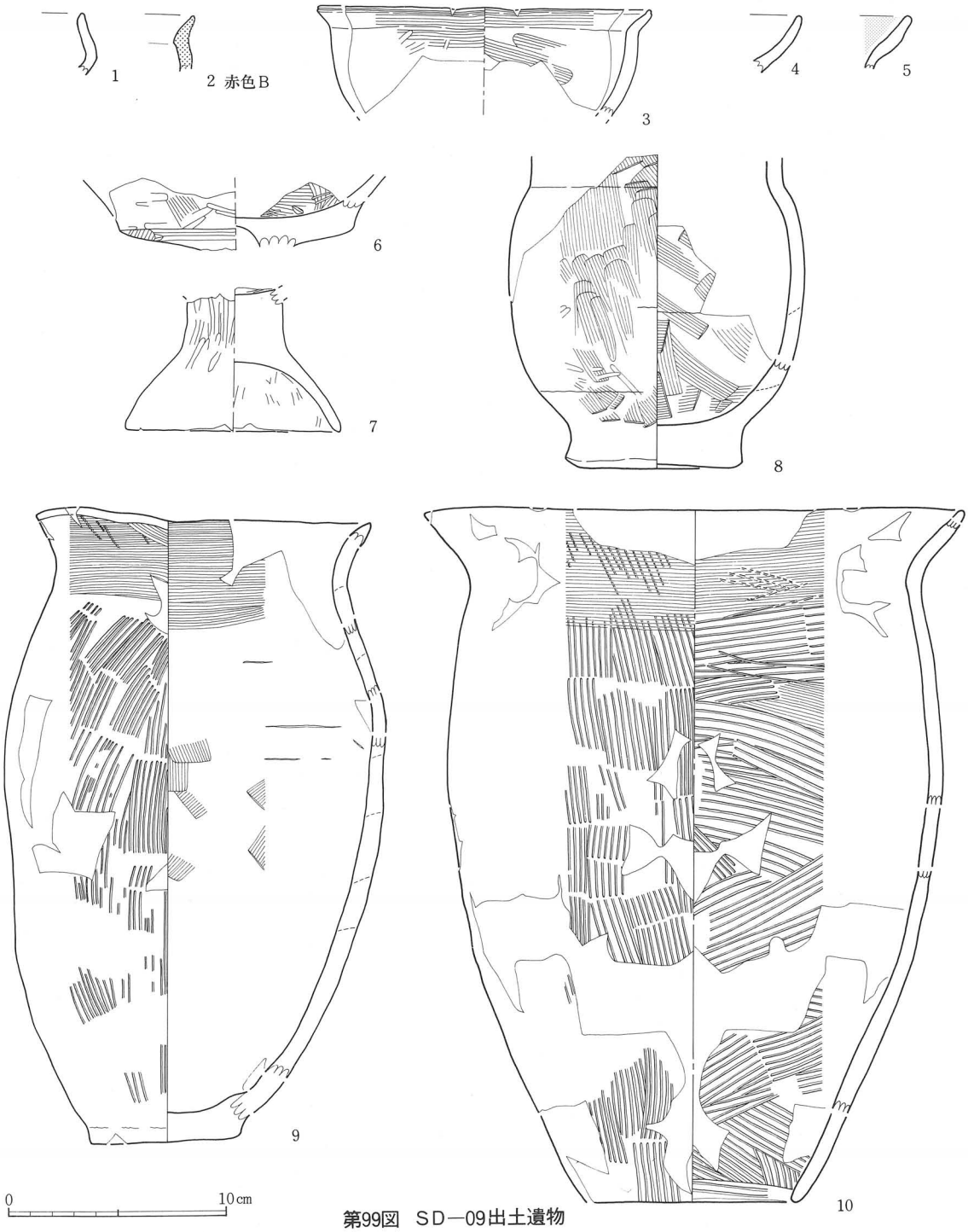
SD-09 (2)土層註記表

層位	土色・土性		備考
1	10YR 3/4	暗褐色シルト	炭化物粒子混入
2	10YR 4/3	にぶい黄褐色シルト	にぶい黄橙色土、灰黄褐色土粒子混入
3	10YR 4/4	褐色シルト	にぶい黄橙色土が斑状に混入
4	10YR 3/1	黒褐色シルト	炭化物粒子
5	10YR 4/4	褐色シルト	灰白色土が斑状に混入、炭化物微量
6	10YR 7/4	にぶい黄橙色シルト	褐色土が斑状に混入
7	5Y 6/1	灰色粘土質シルト	酸化鉄、炭化物粒子混入
8	10YR 6/4	にぶい黄橙色シルト	灰白色土、明黄褐色粒子混入

SD-10 土層註記表

層位	土色・土性		備考
1	10YR 3/4	暗褐色シルト	黒褐色土小ブロック、炭化物粒
2	10YR 3/1	黒褐色シルト	炭化物粒
3	10YR 6/3	にぶい黄橙色シルト	灰白色土と互層、にぶい黄橙色土炭化物
4a	10YR 6/6	明黄褐色シルト	灰黄褐色土と互層
4b	10YR 6/3	にぶい黄橙色シルト	灰白色土が斑状に混入
5	10YR 5/2	灰黄褐色シルト	にぶい黄橙色土斑状、炭化物
6	10YR 7/6	明黄褐色シルト	酸化物多量、炭化物粒
7	2.5Y 7/2	灰黄色シルト	酸化鉄粒子
pit 1			
①	2.5Y 4/3	オリーブ褐色シルト	明黄褐色土小ブロック
pit 2			
①	10YR 4/3	にぶい黄褐色シルト	にぶい黄橙色土微量
pit 3			
①	10YR 4/3	にぶい黄褐色シルト	
②	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト	

第98図　ＳＤ－09・10平面・断面図



第99図　SD—09出土遺物

られた。

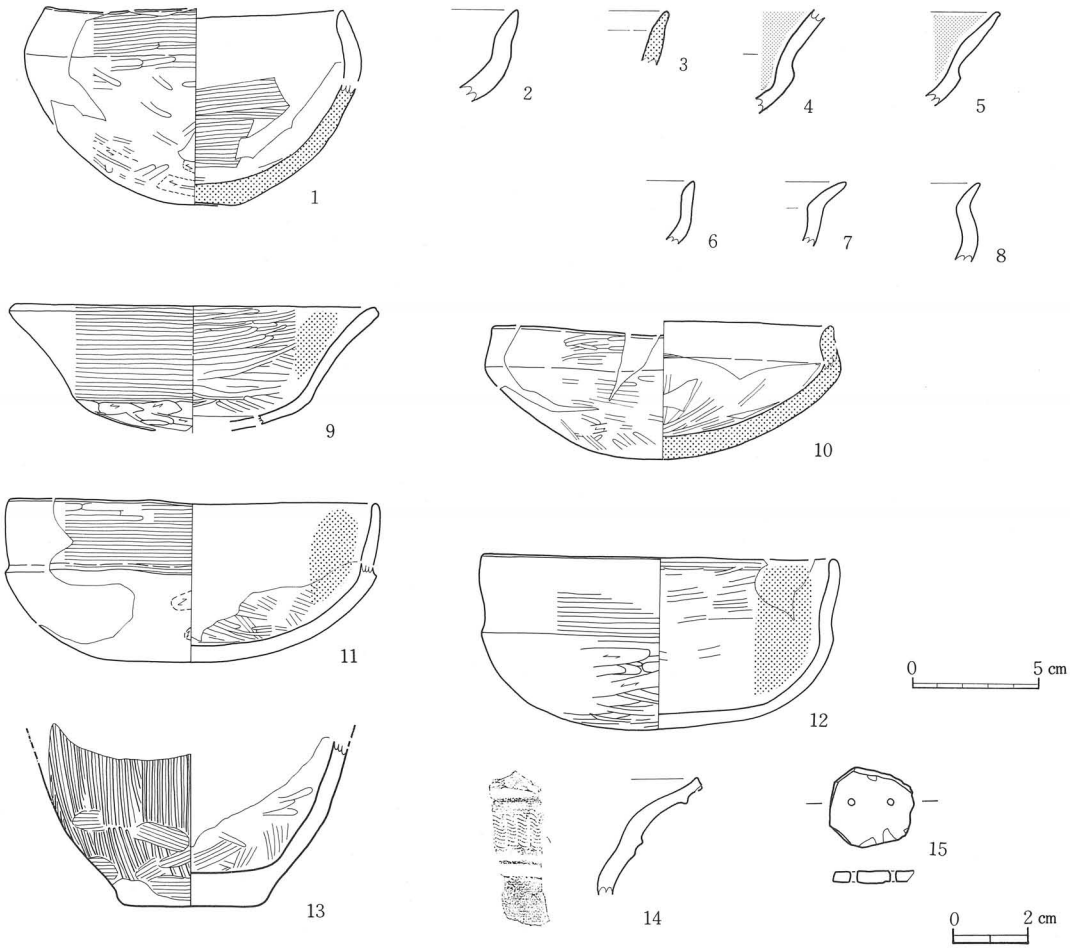
出土遺物は、土師器坏・高坏・小型甕・甕・甑・弥生土器・剝片（黒曜石など）、赤色顔料塊？

が出土している。第99図1～5は坏で、1・4は内湾するもの、2・3は屈曲をもつもの、5は外傾するものである。2は表面・胎土も赤色を呈し、5は内面黒色処理を施こす。また、3は、口縁端部は面取りされ沈線が巡ぐる。6・7は高坏で、6は古い時期の混入品であろうか。8は小型甕、9は長胴甕で底部に木葉痕がある。10は大型甑である。

SD10（第98・100図）

3トレンチ西部(I－10区)に位置し、SB14・SK14に切られる。規模は、長さ1mを確認し、幅3.50m・深さ0.56mを測る。方向は、N－32°－Eである。東壁寄りにテラス状の段差がある。遺物は各層より出土しているが、特に5層に多い。規模・形態・方向が類似していることから、SD09と一連の溝跡と理解される。

出土遺物は、土師器坏・小型甕・須恵器小型壺・甕・石製模造品、剝片（黒曜石）がある。第100図1～12は坏である。1・10は、口縁部が内湾あるいは内傾するもの、2・7・8は屈曲するもの、3・11・12は有段で直立ぎみのもの、4・5は有段で外傾するもの、9は大きく



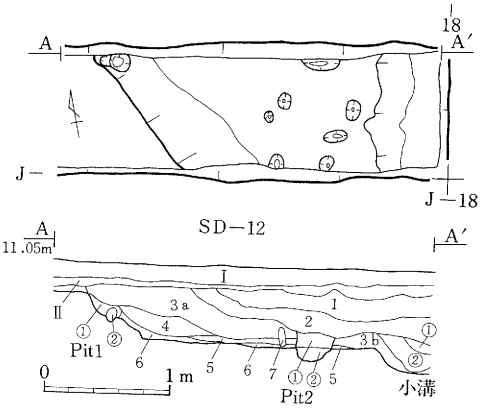
第100図　SD－10出土遺物　15：½

外反するものである。4・5・9・11・12は、内面黒色処理を施こす。1・3・10は、表面・胎土とも赤色を呈する。13は小型の甕と考えられる。14は須恵器小型壺と推定され、おそらくTK208頃であろう。混入品である。15は石製模造品（円板）で、これも混入品であろう。剝片については、帰属不明である。SD09とともに、関東系土器は出土していない。

SD12（第101・102図）

1トレンチ（J－17区）に位置し、SB06に切られ、SI07を切る。トレンチ調査のため、規模は不明であるが、深さ0.36～0.39mで、底面は平坦ではない。東端部はさらに一段下がり、深さ0.59mを測る。方向は、N－28°－Wである。遺物は土師器細片が多く、時期決定資料がない。一応、古墳時代と推定しておく。また、土坑の可能性も残こる。

出土遺物は、土師器坏・弥生土器・石製模造品（細片種類不明）・フレークがある。第102図1～4は坏である。1・2は、口縁部が直立するもの、3・4は屈曲するものである。3はSK26と接合した資料である。



SD-12 土層註記表

層位	土色・土性		備考
1	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト	
2	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	炭化物粒子混入
3a	10YR 6/3	にぶい黄橙色シルト	炭化物粒子を普遍的・浅黄橙色土・灰白色土が斑状
3b	10YR 6/3	にぶい黄橙色シルト	炭化物粒子を普遍的に混入、浅黄橙色小ブロック
4	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト	炭化物粒子を普遍的・浅黄橙色が斑状に混入
5	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	炭化物粒子を普遍的・浅黄橙色が斑状に混入
6	2.5Y 6/4	にぶい黄色シルト	明黄褐色土に近い色調
7	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	灰白色土が斑状に混入
pit 1			
①	10YR 7/4	にぶい黄褐色シルト	炭化物粒を普遍的・浅黄橙色土が斑状に混入
②	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	炭化物粒子が普遍的に混入
pit 2			
①	10YR 6/3	にぶい黄橙色シルト	炭化物粒、浅黄橙色土が斑状に混入
②	2.5Y 6/2	灰黄色シルト	炭化物粒混入
小溝			
①	10YR 6/3	にぶい黄橙色シルト	灰黄褐色土が斑状に混入
②	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	炭化物粒混入

第101図　SD－12平面・断面図

(2) 中世・近世

中・近世に属する遺構は、柱穴列1条・掘立柱建物跡14棟・井戸跡1基・土坑16基・溝跡13条がある。なお、当初SK09で登録した遺構は、井戸跡(SE01)と判明したので欠番とした。

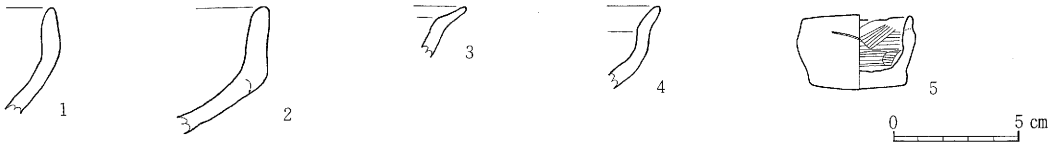
柱穴列（SA）

SA01（第103図）

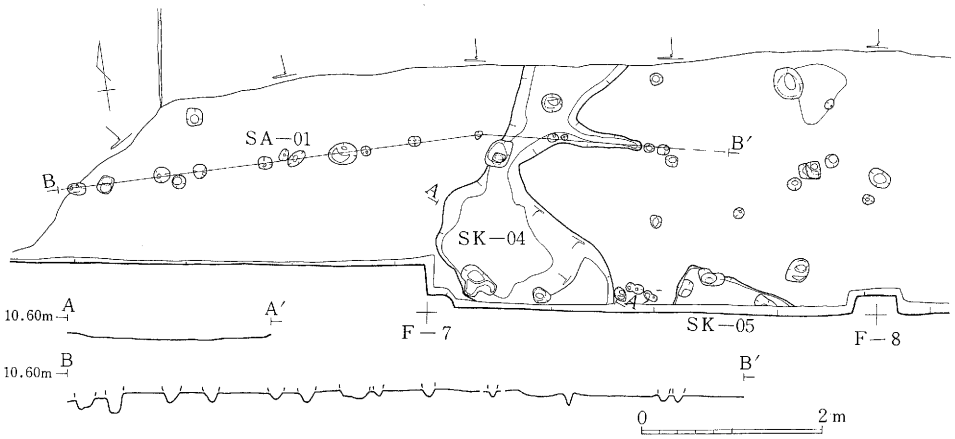
V区～Ⅳ区西部（F－6・7区）に位置し、SD01に切られ、SK04を切る。上部は、耕作により削平されている。柱穴は、打込みの杭だった可能性があり、SD01におよそ平行に並ぶ。柱穴は浅く、深さ6～22cmである。二本単位のようにも思え、柵あるいは垣根が想定されよう。時期を決める遺物はないが、長期間使用されたSD01の古い段階(中世)に並設されたものと推定しておきたい。確認できる長さは、約6.7mである。

掘立柱建物跡（SB）

SB01（第104図）



第102図　ＳＤ－12・ＳＫ－26出土遺物　1～4：SD12、5：SK26



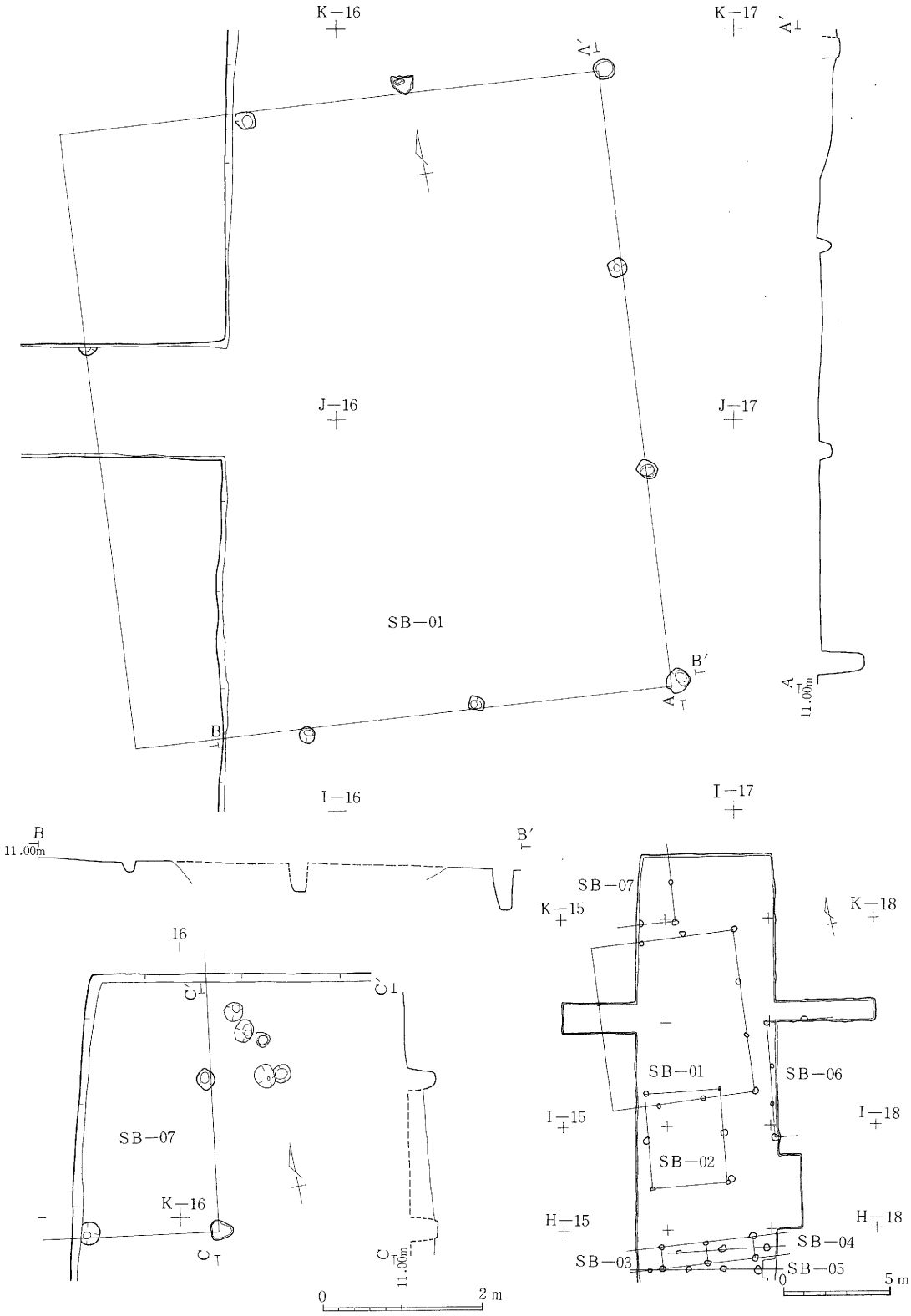
第103図　ＳＡ－01平面・断面図

Ｉ区北部に位置し、SD03 に切られ、SD02・08・SI07・11・15・18・19 を切る。上部は耕作によって削平されている。桁行３間（東辺総長 7.9 m）、梁行３間（南辺推定総長約 6.8 m）の南北棟建物跡である。西辺側は不明であるが、庇や縁は付かないものであろう。方向は、東辺で約 N－2°－E である。柱穴は 20～30 cm で、深さ 14～26 cm であるが隅柱は 53 cm と深い。柱穴寸法は、７尺・９尺が使用されている。一部に角柱が認められる。床束のような柱穴は検出されていない。時期を決定できるような遺物は出土していない。

SB02（第 105 図）

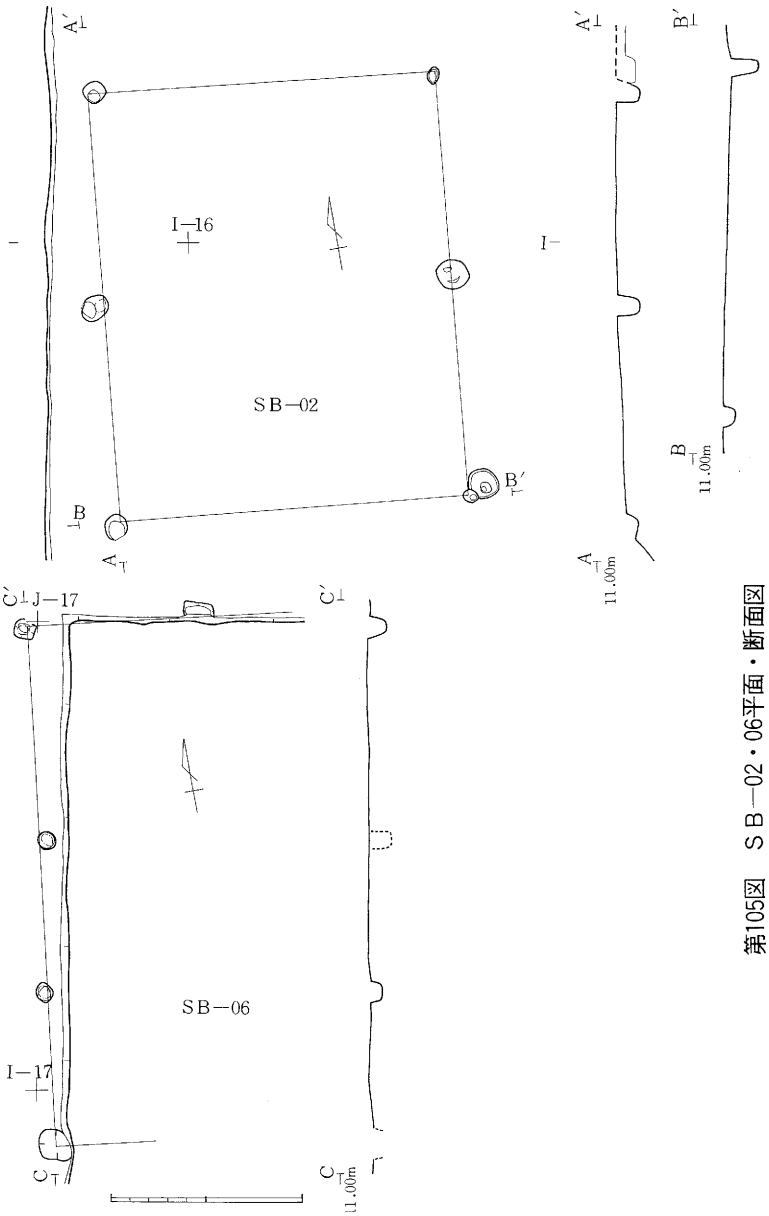
Ｉ区南部（H・I－16 区付近）に位置し、SD02・03 に切られ、SI11 を切る。上部は削平されている。桁行２間（西辺総長 4.56 m）、梁行１間（南辺総長 3.66 m）の小規模な南北棟建物跡である。梁行は２間だった可能性も残こる。方向は、西辺で N－６°－E を示す。柱穴は 20～30 cm で、深さは 20 cm 前後であるが、残りのよいものは 45 cm を測る。時期決定できる遺物はない。

SB03（第 106 図）



第104図　SB−01・07平面・断面図

Ⅰ区南端（G－16区付近）に位置し、SD01・02・08に切られ、SI04を切る。大部分はSD01に切られ、規模は不明である。北辺部2間（4.44 m）以上で、少なくとも北側に約1.2 m幅の庇または縁をもつ建物跡であろう。方向は、北辺でN－86°－Wである。柱穴は30 cm前後で、深さは残りのよいもので36 cmを測る。時期を決定できる遺物はない。



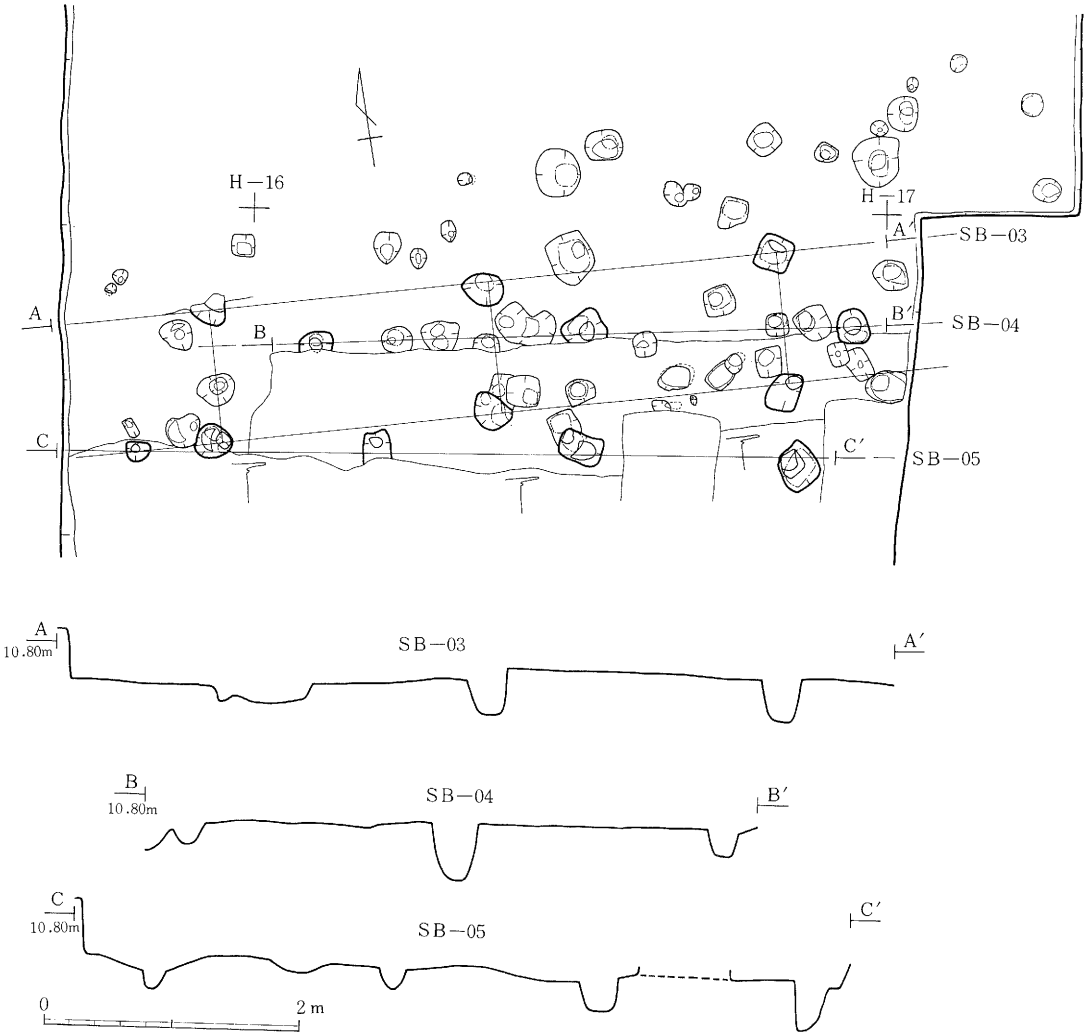
第105図　SB－02・06平面・断面図

SB04（第106図）

Ⅰ区南端（G－16区）に位置し、SD02・08に切られ、SI13を切る。天地返しによる攪乱を受けている。北辺部2間分を検出したに過ぎないが、ほぼ7尺等間隔に並ぶことから建物跡と推定した。柱穴は25～30 cm、深さは残りの良いもので46 cmを測る。方向は、北辺でN－82°－Wである。遺物は須恵器片などが出土しているが、時期決定できるものはない。

SB05（第106図）

Ⅰ区南端（G－15・16区）に位置し、SD01に切られる。天地返しによる攪乱を受けている。北辺部3間分を検出した。建物跡か塀跡と予想されるが、間尺がやや不揃いである点とSD01に並行することから後者と理解しておきたい。おそらく、時期決定できる遺物はないがSD01の古い段階に並設されていたものではないだろうか。柱穴は、柱穴痕跡も掘り方も角形であり、20×



第106図　ＳＢ－03・04・05平面・断面図

30 cm、深さ 18～29 cm で残りの良いものは 43 cm を測る。方向は、N－80°－W である。

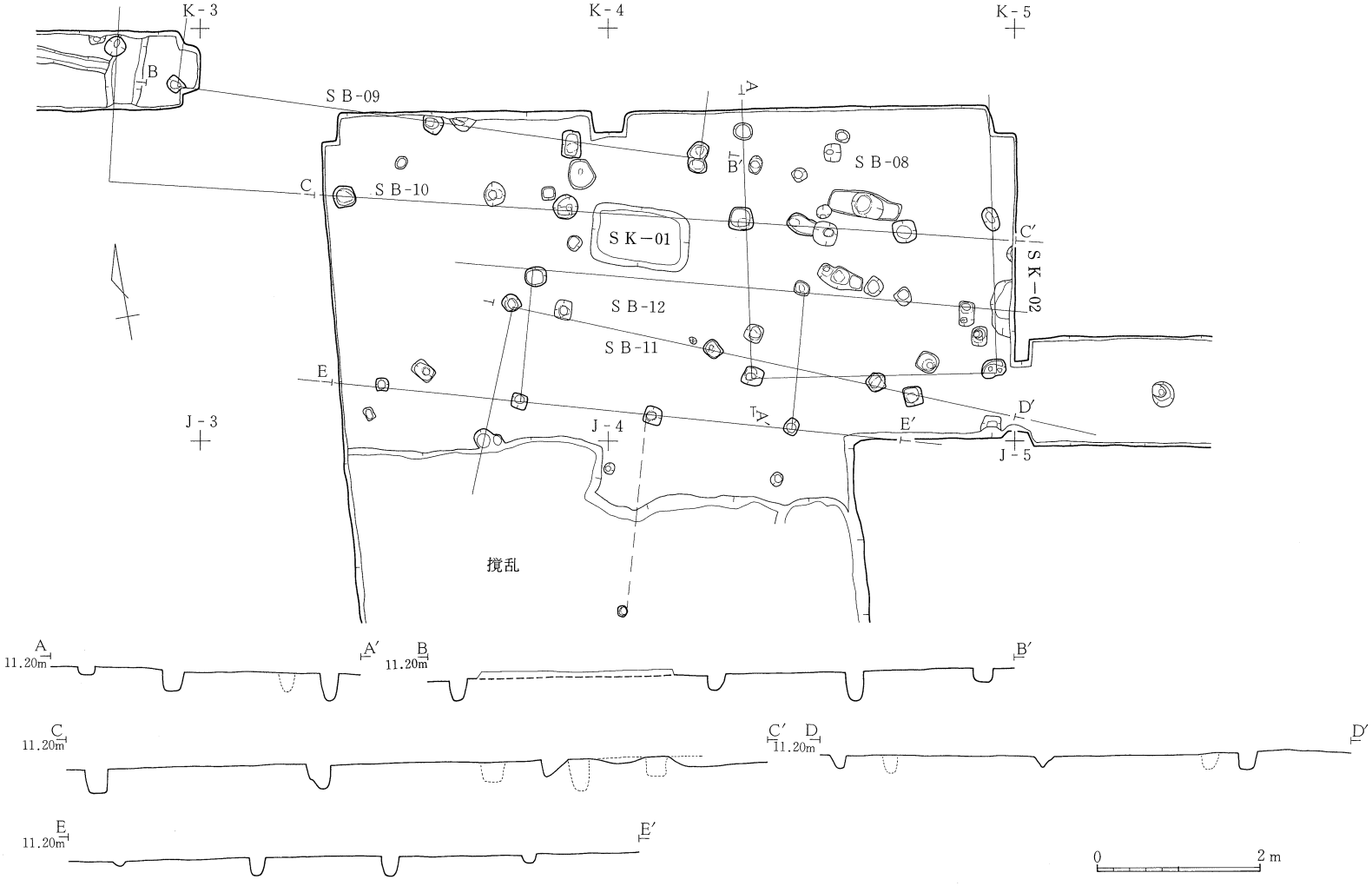
Ｉ区南端では、さらに多数の柱穴が検出されており、他にも建物跡が予想される。

SB06（第 105 図）

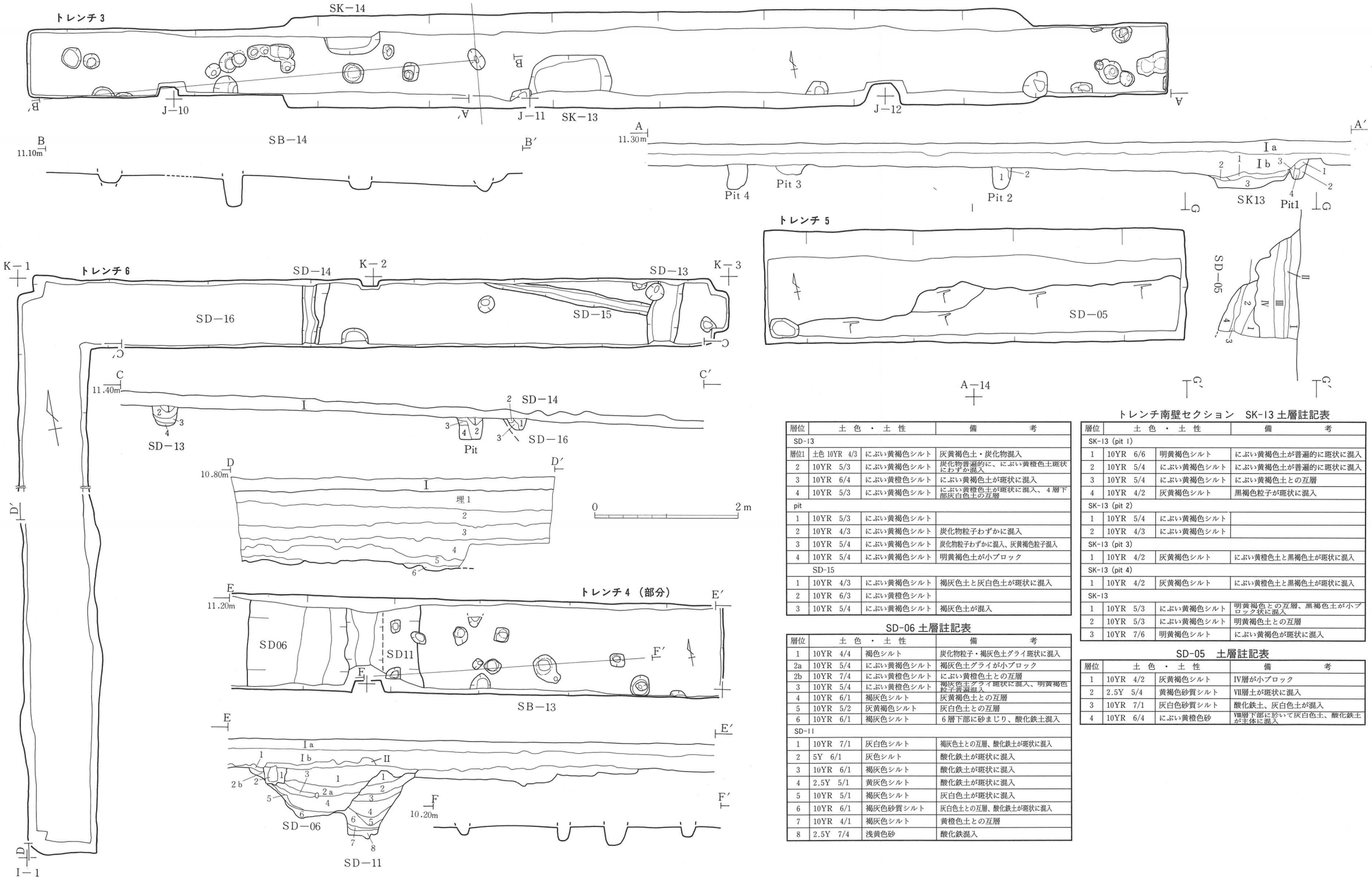
Ｉ区中央(I－17 区)と１トレンチにかけて位置し、SI07 を切る。上部は削平されている。規模は不明だが、西辺３間（5.5 m)、北辺１間（1.86 m 以上）を検出した。方向は、西辺 N－7°－W である。柱穴は約 20 cm、深さも 20 cm 前後である。遺物は出土していない。

SB07（第 104 図）

Ｉ区北端(K－15 区)に位置し、SI19 を切る。また、直接重複はないが、SD02 より層位的に新しい。規模は不明だが、建物跡の一部と推定した。南辺･東辺ともに１間分である。方向は、



第107図　ＳＢ―08～12平面・断面図



第108図　トレンチ平面・断面図

層位	土色・土性		備考
SD-13			
層位1	土色 10YR 4/3	にぶい黄褐色シルト	灰黄褐色土・炭化物混入
2	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	炭化物普遍的に、にぶい黄橙色土斑状にわずか混入
3	10YR 6/4	にぶい黄橙色シルト	にぶい黄褐色土が斑状に混入
4	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	にぶい黄橙色土が斑状に混入、4層下部灰白色土の互層
pit			
1	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	
2	10YR 4/3	にぶい黄褐色シルト	炭化物粒子わずかに混入
3	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト	炭化物粒子わずかに混入、灰黄褐色粒子混入
4	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト	明黄褐色土が小ブロック
SD-15			
1	10YR 4/3	にぶい黄褐色シルト	褐灰色土と灰白色土が斑状に混入
2	10YR 6/3	にぶい黄橙色シルト	
3	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト	褐灰色土が混入

SD-06 土層註記表

層位	土色・土性		備考
1	10YR 4/4	褐色シルト	炭化物粒子・褐灰色土グライ斑状に混入
2a	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト	褐灰色土グライが小ブロック
2b	10YR 7/4	にぶい黄橙色シルト	にぶい黄橙色土との互層
3	10YR 5/4	にぶい黄橙色シルト	褐灰色土グライ斑状に混入、明黄褐色粒子普遍混入
4	10YR 6/1	褐灰色シルト	灰黄褐色土との互層
5	10YR 5/2	灰黄褐色シルト	灰白色土との互層
6	10YR 6/1	褐灰色シルト	6層下部に砂まじり、酸化鉄土混入
SD-11			
1	10YR 7/1	灰白色シルト	褐灰色土との互層、酸化鉄土が斑状に混入
2	5Y 6/1	灰色シルト	酸化鉄土が斑状に混入
3	10YR 6/1	褐灰色シルト	酸化鉄土が斑状に混入
4	2.5Y 5/1	黄灰色シルト	酸化鉄土が斑状に混入
5	10YR 5/1	褐灰色シルト	灰白色土が斑状に混入
6	10YR 6/1	褐灰色砂質シルト	灰白色土との互層、酸化鉄土が斑状に混入
7	10YR 4/1	褐灰色シルト	黄橙色土との互層
8	2.5Y 7/4	浅黄色砂	酸化鉄混入

トレンチ南壁セクション　SK-13 土層註記表

層位	土色・土性		備考
SK-13 (pit 1)			
1	10YR 6/6	明黄褐色シルト	にぶい黄褐色土が普遍的に斑状に混入
2	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト	にぶい黄褐色土が普遍的に斑状に混入
3	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト	にぶい黄褐色土との互層
4	10YR 4/2	灰黄褐色シルト	黒褐色粒子が斑状に混入
SK-13 (pit 2)			
1	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト	
2	10YR 4/3	にぶい黄褐色シルト	
SK-13 (pit 3)			
1	10YR 4/2	灰黄褐色シルト	にぶい黄橙色土と黒褐色土が斑状に混入
SK-13 (pit 4)			
1	10YR 4/2	灰黄褐色シルト	にぶい黄橙色土と黒褐色土が斑状に混入
SK-13			
1	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	明黄褐色との互層、黒褐色土が小ブロック状に混入
2	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	明黄褐色土との互層
3	10YR 7/6	明黄褐色シルト	にぶい黄褐色が斑状に混入

SD-05　土層註記表

層位	土色・土性		備考
1	10YR 4/2	灰黄褐色シルト	Ⅳ層が小ブロック
2	2.5Y 5/4	黄褐色砂質シルト	Ⅶ層土が斑状に混入
3	10YR 7/1	灰白色砂質シルト	酸化鉄土、灰白色土が混入
4	10YR 6/4	にぶい黄橙色砂	Ⅷ層下部に於いて灰白色土、酸化鉄土が主体に混入

東辺でN－6°－Eである。柱穴は20～30 cm、深さは35～40 cmである。西端の柱穴は86 cmと深い。遺物は出土していない。

SB08（第107図）

Ⅶ区（J－4区）に位置し、SI01・02を切る。また、SB10～12と重複関係が認められるが、直接柱穴の重複はない。桁行1間以上（東辺長3.21 m）、梁行2間（南辺総長3.01 m）の南北棟と考えられる。柱穴は20～30 cm、深さ19～33 cmである。方向は、西辺でN－8°－Eである。柱痕跡を確認できるものは、いずれも角形である。時期の決定できる遺物はない。

SB09（第107図）

Ⅶ区（J－3区付近）に位置し、SB10と重複関係にあるが、その新旧は不明である。上部は、耕作により削平されている。規模は不明であるが、南辺4間（総長推定約6.4 m）が推定できる。柱穴は20 cm前後で、深さ16～33 cmである。方向は、南辺でN－71°－Wである。SD13に平行しているものと思われる。柱間寸法はやや不揃いで狭まい点、簡便な建物であろう。柱痕跡には、角形のものがみられる。遺物は出土していない。

SB10（第107図）

Ⅶ区（J－3・4区）に位置し、SI01・02・SD13を切り、SB08・09・SK01と重複関係にある。後者の場合、直接切り合いがないので新旧不明である。規模は不明だが、南辺推定3間（推定長11 m）以上、西辺1間（推定長1.7 m）以上で、比較的大型の建物跡と予想される。柱穴は上部を削平されているが、25～30 cm、深さは残りの良いもので30 cmある。南辺の柱間寸法は約9尺間隔であるが、西辺は約6.5尺であることから、庇部分を検出した可能性がある。柱痕跡には、角形のものがみられる。方向は、南辺でN－77°－Wである。時期を決定できる遺物は出土していない。

SB11（第107図）

Ⅶ区（J－3・4区）に位置し、SI02・SK20を切る。上部は削平を受け、南側は天地返しにより大半を失っている。規模は不明だが、北辺2間（7 m）以上、西辺1間（1.7 m）以上である。北辺の柱間寸法が約8尺に対して、西辺は6尺未満であることから東西棟であろうと予想される。柱穴は約20 cm、深さ14～22 cmで、角形の柱痕跡をもつものがある。方向は、北辺でN－67°－Wで、SB09とほぼ平行する。時期を決定できる遺物はない。

SB12（第107図）

Ⅶ区（J－3・4区）に位置し、SI02を切る。他にも重複する遺構があるが、いずれも建物跡より古いと考えられる。柱穴上部は削平を受け、南側の主要な部分は天地返しにより撹乱を受けている。規模は不明だが、北辺部3間（5 m）以上で、さらに北側で1間分の張り出し又は庇が付く可能性がある。柱穴は20 cm前後で他より小型であり、深さ7～26 cmである。柱穴掘り

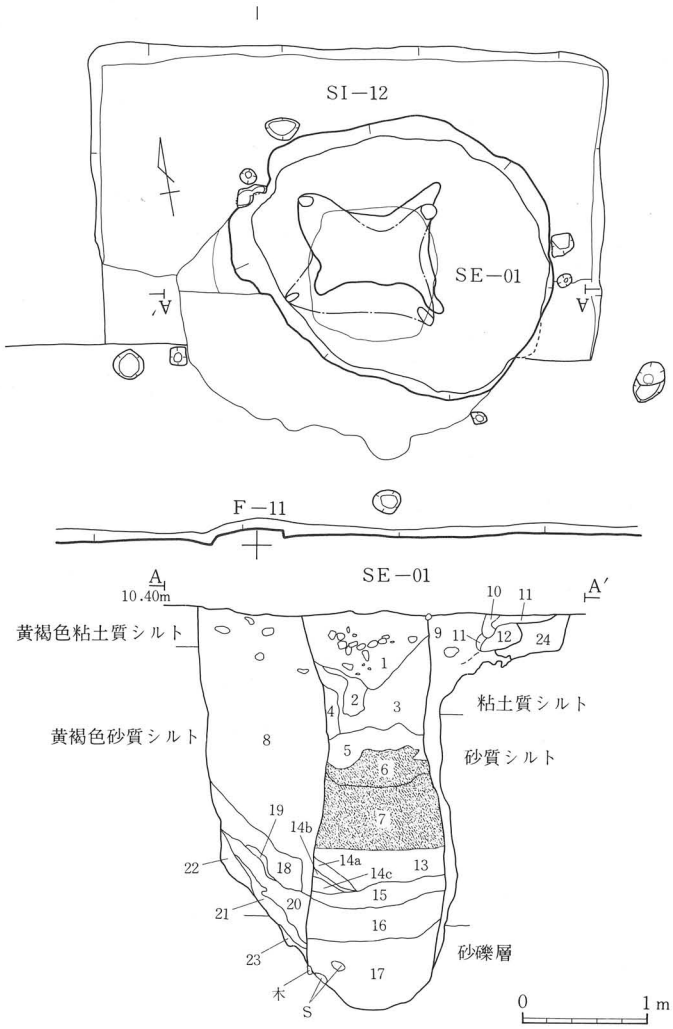
方はいずれも四角形で、柱痕跡も角形と確認できるものが多い。方向は、北辺でN－74°－Wである。SB10とほぼ平行する。時期を決定できる遺物はない。

SB09～12については、柱穴埋土が黄褐色～褐色シルトで類似し、基本層のⅠ・Ⅱ層とも類似している。これに対し、SB08はⅠ区の建物跡と類似して、暗褐色シルトで区別される。この特徴は建物跡の方向差とも良く合致しており、時期差あるいは時代差を反映していると考えられる。SB08が古いと考えられる。SB09～12は、現在の道路区画と方向がおよそ合っている。また、Ⅶ区やその周辺の表土中には、古墳時代の土師器や近代の陶磁器を除くと、志野織部丸皿や段付白天目茶碗（第120図18・4）など江戸時代初期のものが多く、建物跡の時期を推定する傍証になると思われる。

SB13（第108図）

SE-01　土層註記表

層位	土色・土性	備考	層位	土色・土性	備考
1	10YR 3/4 暗褐色砂質シルト		14a	10YR 4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト	
2	10YR 2/1 黒色ワラ灰層		14b	2.5Y オリーブ褐色粘土	
3	10YR 3/3 暗褐色シルト	炭少量	14c	2.5Y 4/2 暗灰黄粘土質シルト	
4	10YR 2/1 黒色ワラ灰層		15	2.5Y 3/2 黒褐色粘土	炭化物混入
5	10YR 3/4 明褐色粘土質シルト	ワラ灰土、炭少量	16	2.5Y 4/6 オリーブ褐色砂	
6	7.5YR 3/4 暗褐色粘土質シルト	ワラ灰土、炭少量、焼土少々	17	2.5Y 4/6 オリーブ褐色砂	暗灰黄色粘土との互層、円礫、鉄分多量
7	2.5Y 2/1 黒色灰層	暗褐色土ブロック多い	18	10YR 3/3 暗褐色粘土質シルト	炭化物混入
8	10YR 3/4 暗褐色砂質シルト	円礫、褐色シルトブロック多量	19	10YR 5/3 にぶい黄褐色シルト	
9	10YR 3/3 暗褐色シルト	円礫少量、褐色シルトブロック多量	20	10YR 5/1 褐灰色粘土質シルト	
10	10YR 4/3 にぶい炭褐色シルト		21	2.5Y 7/2 灰黄色粘土質シルト	下部に酸化鉄、褐灰色土ブロック状混入
11	10YR 4/4 褐色シルト		22	10YR 7/3 にぶい黄橙色粘土質シルト	
12	10YR 3/4 暗褐色シルト	炭化物少量、土器（土師器）多量	23	10YR 4/1 褐灰色粘土質シルト	暗褐色土との互層
13	10YR 3/4 暗褐色粘土質シルト	褐色シルトブロック多量	24	暗褐色シルト	



第109図　ＳＥ－01平面・断面図

4トレンチ（J－6区）に位置し、SD06・11・SI10・11を切る。柱穴4個が並び、建物跡の一部と推定される。規模・特徴は不明である。方向はN－85°－Wで、柱痕跡に角形のものが認められる。時期を決定できる遺物はない。

SB14（第108図）

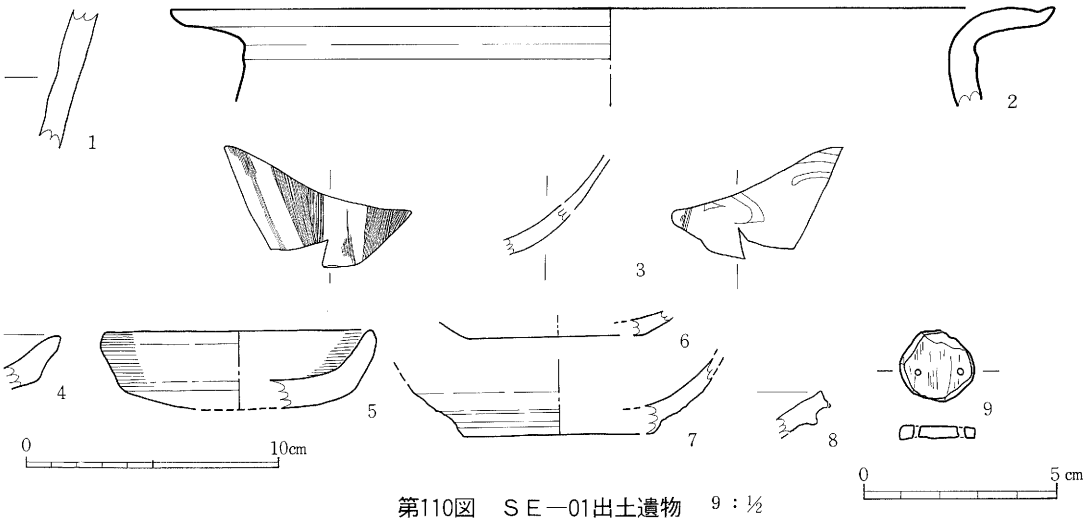
3トレンチ（J－10区付近）に位置し、SD10を切る。上部は耕作によって削平を受けている。一列に並ぶ柱穴4基（3間分）を検出し、建物跡の一部と推定される。長さ5.2mで、柱穴は約5.8尺等間隔で並ぶ。柱穴は約30cm、深さ12～20cmであり、角形の柱痕跡をもつものがある。方向は、N－86°－Wである。時期の決定できる遺物はない。

井戸跡（SE）

井戸跡はⅣ区で1基検出されたが、SD02や07で区画された北部には、さらに井戸跡の存在が予想される。なお、SE01については、当初SK09と登録したが、後に井戸跡と判明したことから改称し、SK09は欠番とした。

SE01（第109・110図）

Ⅳ区（F－10・11区）に位置し、SI12を切り、SD01に切られる。上部は削平を受けている。また、南西側は約34～40cm地滑りを起こし、変形している。この地滑りは、使用中に起きたものと考えられる。前述したSI12は、結果的に地滑り範囲部分のみが残り、他は削平されている。変形したために本来の規模は不明だが、掘り方は2.6m×2.1mの不整楕円形を呈する。井戸本体プランは、確認面で約1m幅の不整方形、中間の支柱プランの確認時には約1m四方の整形プランを呈している。底面では4本の支柱穴、本体壁面では縦板材残欠が検出された。支柱穴間の長さは、東西約1m・南北0.75～0.85mを測り、長方形を呈している。本井戸跡は、

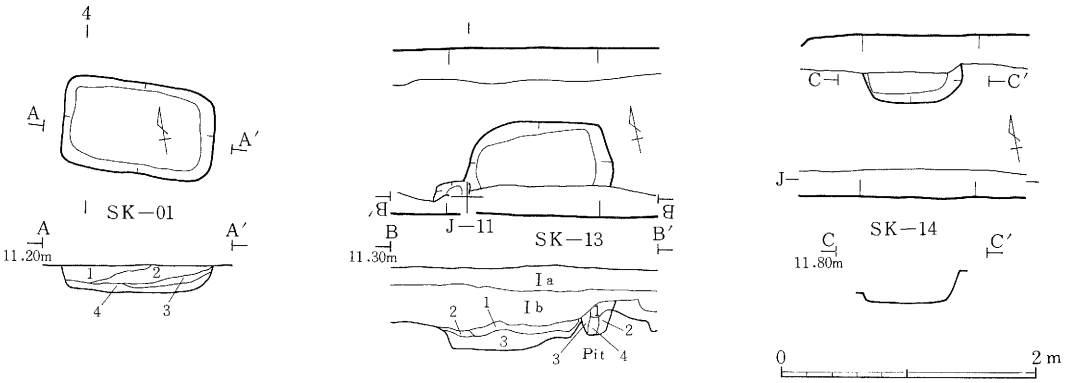


第110図　ＳＥ－01出土遺物　9：½

その特徴から「縦板組隅柱横桟どめ井戸」(宇野隆夫：1982)に分類される。井戸の深さは約2.75mで、深度約2.5m(標高約7.8m)で砂礫層に至り、さら掘り込んでいる。埋土の特徴は、本体部の1層で多量の円礫を含み、6・7層で多量の黒色（炭化？）の草の堆積がみられる。

出土遺物は、常滑甕口縁部（第110図2）・体部片（格子状押印）　中国龍泉窯系櫛描蓮弁文碗、土師質土器皿片（手捏ね2点、ロクロ使用4点)、外面橙色を呈する硬質の土器片（埦？）4点（第110図7)、炭化米・炭化種子があり、他に古墳時代の土師器多数、須恵器2点、有孔円板1点、平安時代の土師器坏・須恵器坏、布目瓦各1点、弥生土器片6点がある。古墳時代の土師器は、大半がSI12に帰属するものとみられる。須恵器片もその可能性がある。陶磁器や土師質土器が、井戸跡の時期決定資料となろう。

土坑（SK）



SK-01 土層註記表

層位	土色・土性		備考
1	10YR 4/2	灰黄褐色シルト	炭化物・明黄褐色土斑状に混入
2	10YR 5/2	灰黄褐色シルト	明黄褐色土多量・斑状に混入
3	10YR 3/1	黒褐色シルト	ワラ灰
4	10YR 4/2	灰黄褐色シルト	明黄褐色土普遍的・斑状に混入

SK-13 土層註記表

層位	土色・土性		備考
1	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	明黄褐色土との互層、黒褐色土小ブロック
2	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	明黄褐色土との互層
3	10YR 7/6	明黄褐色シルト	にぶい黄褐色土斑状に混入
P1	10YR 6/6	明黄褐色シルト	にぶい黄褐色土普遍的に斑状・炭化物
P2	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト	にぶい黄褐色土普遍的に
P3	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト	
P4	10YR 4/2	灰黄褐色シルト	黒褐色粒子斑状に混入

第111図　ＳＫ−01・13・14平面・断面図

SK01（第111・115図）

Ⅶ区（J−3・4区）に位置し、他の遺構と直接切り合いはない。なお、SB10と重複関係にあるが、その新旧は不明である。上部は削平されている。規模は、1.2m×0.75m・深さ0.22mを測る。形状は長方形で、底はほぼ平坦である。内部に、黒色の草の堆積層が認められた。

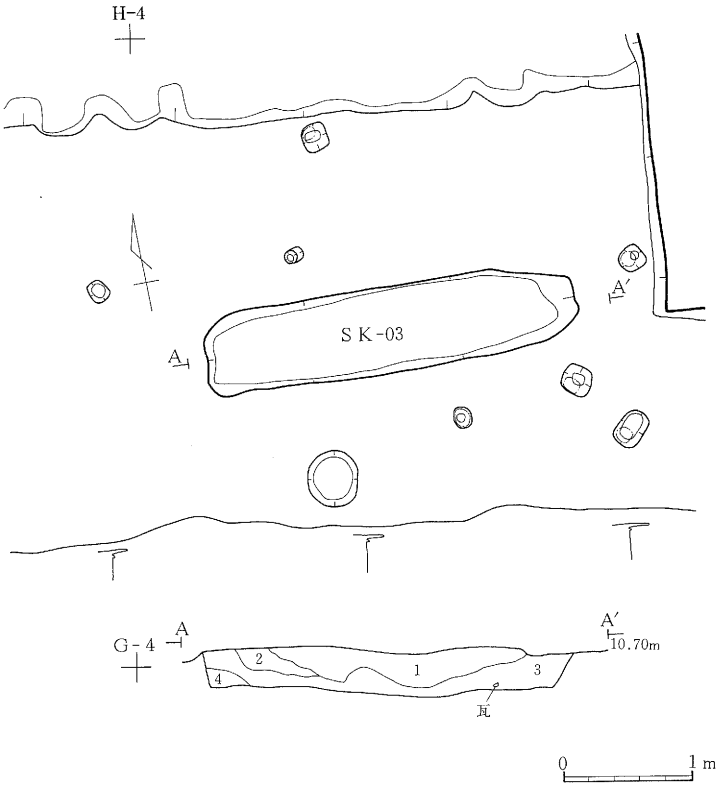
出土遺物は、須恵器甕片・弥生土器片・勾玉（第115図1)、スクレイパーがある。これらは、遺構の時期を決定できるかは疑わしい。埋土は、周囲の建物跡(SB09〜12)柱穴埋土と類似し、長軸方向（N−72°−W）も、先の建物跡（SB10・12）と類似する。従って、建物跡と関連するものと理解したい。

SK02（第107図）

Ⅶ区（J－4区）に位置し、SI01を切る。また、SB08・12と重複関係にあるが、その新旧は不明である。土坑の主体は調査区外にあり、規模・形状は不明である。深さは0.11mである。埋土は黒褐色シルトの単層である。遺物は、弥生土器片1点が出土しているが、時期決定資料ではない。埋土の特徴から中世のものであろう。

SK03（第112図）

Ⅵ区（G－4区）に位置し、単独のものである。規模は、2.99m×0.7m・深さ0.36mである。底面には起伏がみられる。埋土は、黄褐色シルト主体で基本層Ⅰ層と類似する。



SK-03 土層註記表

層位	土色・土性		備考
1	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	褐灰色土互層、灰白色土が小ブロック混入
2	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	
3	10YR 5/2	灰黄褐色シルト	
4	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	3層土が小ブロック混入

第112図　ＳＫ－03平面・断面図

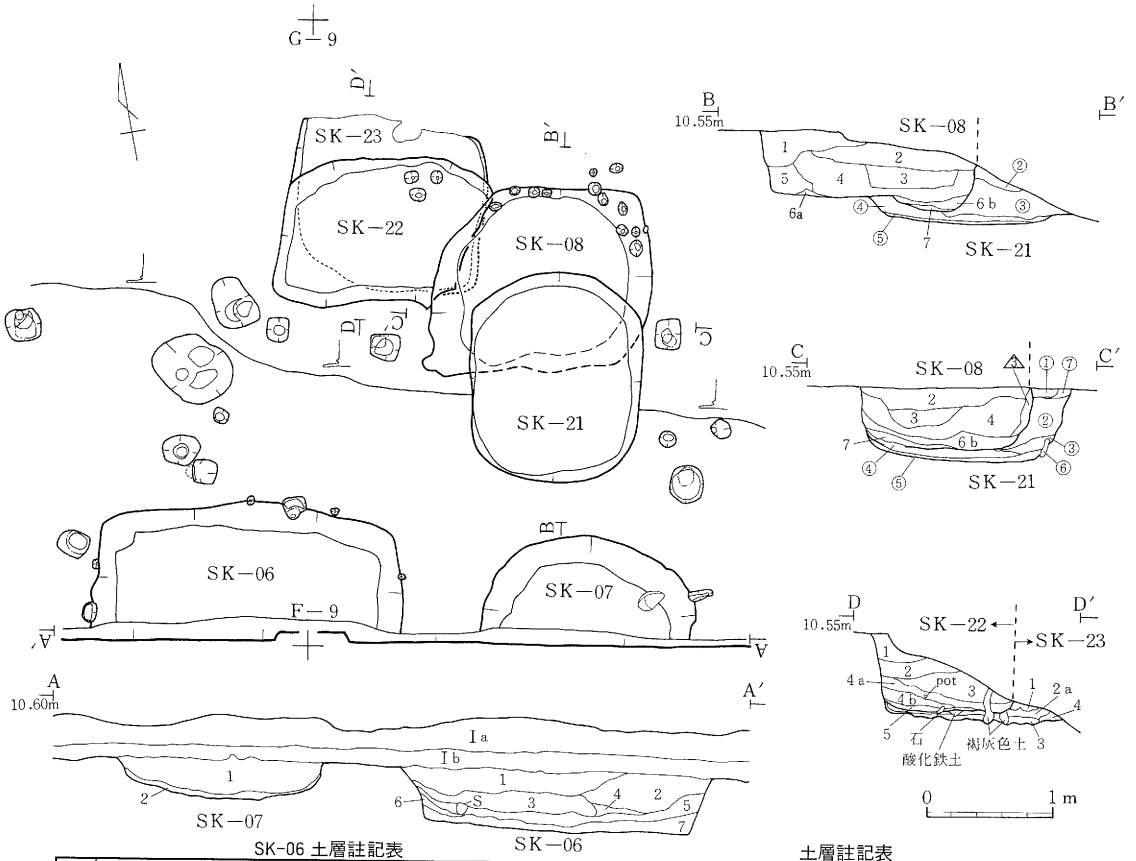
出土遺物は、土師質土器皿・燻瓦（丸瓦3点・平瓦3点）・近世陶器壷・弥生土器がある。土師質土器（第115図2）は、外底面に板状圧痕、内底面（見込）に指ナデがみられ、明らかに中世のものである。瓦は近世のものである。陶器は大堀相馬とみられ、海鼠釉風の釉であることから、18世紀以後のものであろう。建物跡との関連はないであろう。

SK04（第103図）

Ⅳ区西端部（F－7区）に位置し、SA01・SD01に切られる。上部は、耕作により削平を受ける。規模は、約2.9m×1.35m、深さ6cmである。不定形で、中央に屈曲がみられる。土坑として扱ったが、溝の可能性も残る。遺物は出土していない。重複関係から、中世以前とみられる。

SK05（第103図）

Ⅳ区西端部（F－7区）に位置し、柱穴に切られる。上部は、耕作により削平を受ける。規模は不明だが、北辺で約1.24m、深さ3cmである。遺物は出土していない。埋土の類似から、



SK-06 土層註記表

層位	土色・土性		備考
1	7.5Y 5/1	灰色粘土質シルト	淡黄色土と互層、酸化鉄粒子
2	10Y 3/1	オリーブ黒色粘土質シルト	酸化鉄粒子まじりの灰色土と互層
3	2.5Y 8/4	淡黄色粘土質シルト	灰色土と互層、酸化鉄
4	7.5Y 5/1	灰色粘土質シルト	灰色土と互層酸化鉄粒子
5	10Y 5/1	灰色粘土質シルト	酸化鉄炭化物微量
6	10YR 5/2	灰黄色粘土質シルト	酸化鉄混入
7	5Y 7/1	灰白色粘土質シルト	灰白色土が斑状に混入、グライ

SK-07 土層註記表

層位	土色・土性		備考
1	7.5Y 5/1	灰色粘土質シルト	淡黄色土と互層
2	5Y 7/1	灰白色粘土質シルト	酸化鉄粒子混入、グライ

SK-22 土層註記表

層位	土色・土性		備考
1	10YR 4/1	褐灰色シルト	炭化物、にぶい黄橙色土ブロック
2	10YR 7/3	にぶい黄橙色シルト	褐灰色土浅黄橙色土斑状炭化物
3	10YR 7/3	にぶい黄橙色シルト	褐灰色土斑状
4a	10YR 6/1	褐灰色シルト	酸化鉄褐灰色土ブロック
4b	10YR 5/1	褐灰色シルト	酸化鉄斑状、炭化物粒微量
5	10YR 4/1	褐灰色シルト	灰白色土ブロック、酸化鉄炭化物

土層註記表

層位	土色・土性		備考
SK-08			
1	10YR 6/2	灰黄褐色シルト	浅黄橙色土と互層、灰白色土ブロック
2	10YR 4/2	灰黄褐色シルト	浅黄橙色土小ブロック
3	10YR 4/1	褐灰色シルト	浅黄橙色土が普遍的に混入
4	10YR 5/1	褐灰色シルト	黄灰色土と互層、褐灰色ブロック
5	10YR 5/1	褐灰色粘土質シルト	黒褐色土ブロック、灰黄褐色土ブロック
6a	5Y 5/1	灰色粘土質シルト	
6b	10YR 6/1	褐灰色粘土質シルト	浅黄橙色土ブロック
7	2.5Y 8/1	灰白色粘土質シルト	下部に酸化鉄混入
SK-21			
①	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	
②	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト	浅黄橙色土斑状、炭化物
△1	10YR 3/1	黒褐色シルト	にぶい黄褐色土斑状、炭化物
③	10YR 5/1	褐灰色シルト	黒褐色土ブロック、浅黄橙色土微量
④	10YR 1.7/1	黒色シルト	ワラ灰層
⑤	10YR 4/1	褐灰色シルト	
⑥	10YR 3/1	黒褐色シルト	浅黄橙色土微量
⑦	10YR 4/3	にぶい黄褐色シルト	

SK-23 土層註記表

層位	土色・土性		備考
1	10YR 5/1	褐灰色粘土質シルト	酸化鉄
2a	2.5Y 8/1	灰白色粘土質シルト	酸化鉄
2b	7.5Y 5/1	灰色粘土質シルト	2a 層の下面全体に 2～4 mm の厚さ
3	2.5Y 8/2	灰白色粘土質シルト	酸化鉄
4	10YR 6/1	褐灰色粘土質シルト	浅黄橙色土ブロック
5	10YR 7/4	にぶい黄橙色粘土質シルト	

第113図　ＳＫ―06～08・21～23平面・断面図（Ⅳ区）

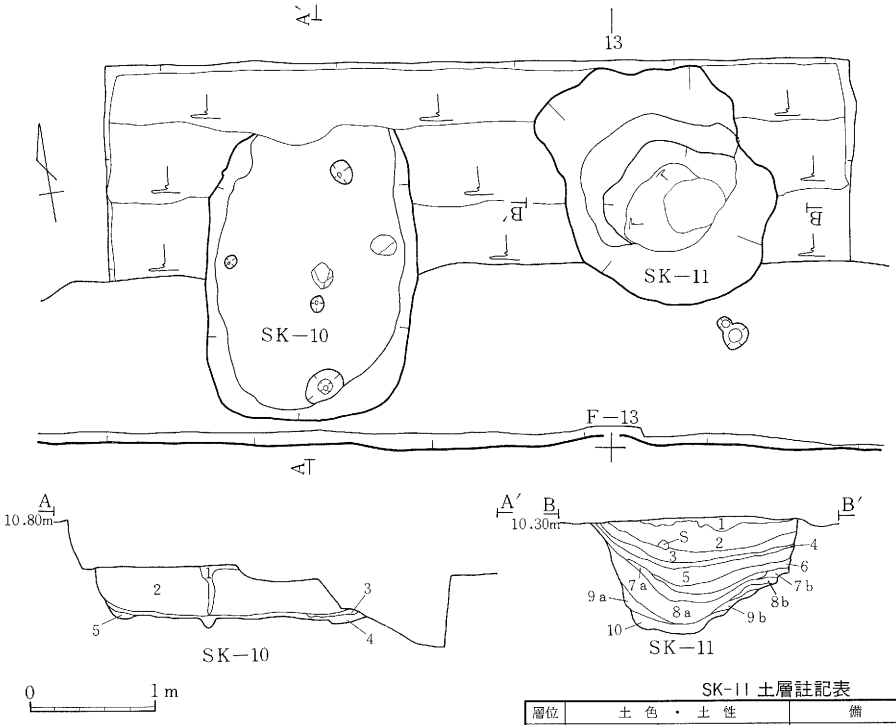
SK04 と関連するものと予想される。

SK06（第 113 図）

Ⅳ区（F－８・９区）に位置し、SI09・SD09を切る。規模は、東西2.49ｍ・南北0.94ｍ以上、深さ0.46ｍで、長方形を呈すると予想される。埋土は、いずれもグライ化し、酸化鉄を含んでいる。埋土１～４層は、ブロック土が混入し、人偽的に埋められたものとみられる。壁際に小ピット（杭？）が検出されている。遺物は、外面橙色を呈する硬質土器片（埦？）・須恵器甕（古墳時代？）・弥生土器が出土している。時期を推定できるのは硬質土器片で、同様のものがSE01で出土していることからほぼ同時のものであろう（第110図７と類似）。この土器は、他の遺跡の類例がないが土師質土器と理解しておきたい。

SK07（第113図）

Ⅳ区（F－９区）に位置し、SI09を切る。上部は削平を受けている。規模は東西1.68ｍ、南北0.76ｍ、深さ0.33ｍを測り、楕円形を呈するものと予想される。埋土１層は、ブロック土が多数入り、人偽的に埋められたものとみられる。底部には、鉄分の集積層が形成されている。底面直上で川原石が出土したが、他に遺物は出土していない。



SK-10 土層註記表

層位	土色・土性		備考
1	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	暗灰色粒子、明黄褐色粒子普遍的混入
2	10YR 6/6	明黄褐色粘質シルト	暗灰色土互層
3	10YR 7/3	にぶい黄橙色シルト	
4	5Y 5/1	灰色粘質シルト	
5	10YR 8/1	灰白色粘質シルト	

SK-11 土層註記表

層位	土色・土性		備考
1	10YR 5/6	黄褐色シルト	焼土粒混入、黒褐色粒子斑状
2	10YR 3/1	黒褐色シルト	2層上面に炭土粒子にぶい黄橙色ブロック混入
3	10YR 3/1	黒褐色シルト	黄橙色互層、にぶい黄橙色がブロック混入
4	10YR 4/4	褐色シルト	上面に炭化物多量、にぶい黄橙色土斑状
5	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	炭化物粒子多量明黄褐色粒子普遍的斑状
6	10YR 4/3	にぶい黄褐色シルト	黒褐色粒子普遍的混入、にぶい黄橙色土斑状
7a	10YR 5/2	灰黄褐色シルト	黒褐色土互層にぶい黄橙色ブロック混入
7b	10YR 7/6	明黄褐色シルト	黒褐色土粒微量
8a	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト	黒褐色土、にぶい黄橙色土斑状
8b	10YR 7/6	明黄褐色シルト	黒褐色土小粒にぶい黄橙色土ブロック混入
9a	10YR 6/4	にぶい黄橙色シルト	にぶい黄褐色土との互層
9b	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	黒褐色土普遍的混入
10	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	黒褐色粒子混入、にぶい黄橙色土斑状

第114図　ＳＫ－10・11平面・断面図（Ⅲ区）

SK08（第113図）

Ⅳ区（F－9区）に位置し、SI09・SK21を切り、SD01に切られる。規模は1.68 m×1.29 m、深さ0.53 mを測り、楕円形を呈する。この土坑もSK06・07と同様、浅黄橙色シルトブロックが埋土1～5・6 b層に認められ、人偽的に埋められたものとみられる。底面付近には酸化鉄が斑状に混じる。SK21と重複する部分の底面は窪んでいる。遺物は、ロクロ使用の白色土器（皿？）・須恵器甕（古墳時代？）・弥生土器が出土している。白色土器片はSD01でも出土しているが、これらは類例を知らず評価できない。一応、遺構の類似性からSK06などと同時期と理解したい。

SK10（第114・115図）

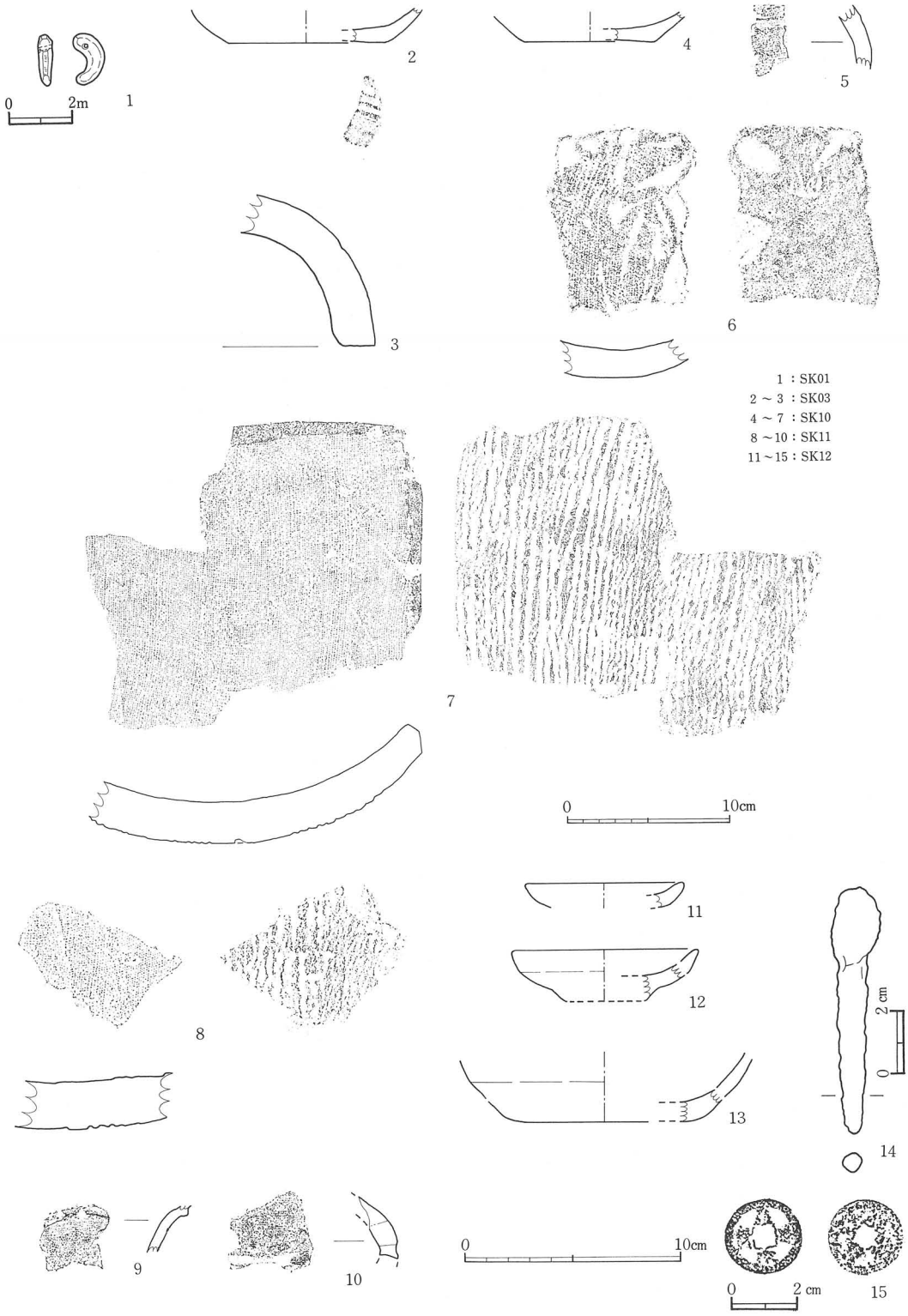
Ⅳ区（F－12区）に位置し、SD01に切られる。上部は削平を受けている。規模は、南北2.3 m以上・東西1.69 m、深さ0.43 mを測り、隅丸長方形を呈する。埋土の大部分（2層）はブロック状になっており、人偽的に埋められている。底面には鉄分の集積層が形成され硬化している。また、4基の浅いピット（深さ3～10 cm）と礫2個が検出された。SK07・08と類似した特徴をもっている。遺物は、土師質土器皿？・須恵器坏（平安？）・二重瓦片（第115図5）・布目瓦（第115図7、SE01と接合）が出土している。この土坑も、SK06などと同時期のものと考えられる。なお、遺物はいずれも人偽堆積層中のもので、瓦片はSD08出土のものと同一個体の可能性がある。このことから、SD08開削時に本土坑始め他の土坑も埋められたことも予想される。

SK11（第114・115図）

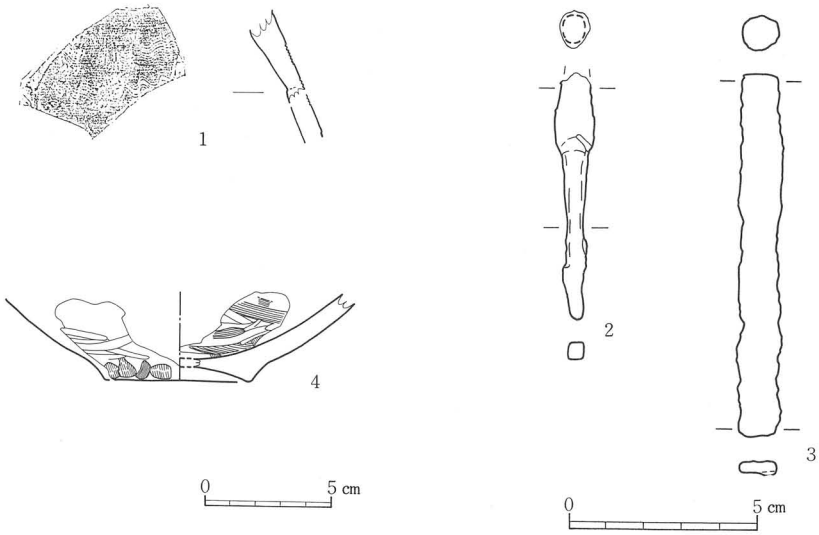
Ⅳ区（F－12・13区）に位置し、SD01に切られる。上部は削平を受ける。規模は、2.08 m×1.55 m、深さ1.23 mを測る。形状は、SD01と重複する部分は不整であるが、元来は楕円形とみられる。北側は階段状になる。埋土各層には、人偽的とみられる、ブロック土が混じり、また、1・2層に焼土粒、4・5層に炭化物がみられる。遺物は第115図9・10の須恵器坏（平安？）・壷・二重瓦（古墳）、フレーク・チップが出土している。図示したものも含めていずれも小片であり、遺構の時期を示すかは疑わしい。むしろ、SK06・10などと同じ頃と見るべきではないかと考えられる。

SK12（第68・115図）

2トレンチ（I・J－15区）に位置し、SI18を切る。また、SB01と重複関係にあるが、直接切り合いがない。SB01の重複関係と本土坑の出土遺物の比較から、SB01が新しいと考えられる。規模は不明だが、東西2.44 m・南北0.7 m以上、深さ1.03 mを測る。形状は、上面が楕円形、下半部が方形を呈するものと予想される。遺物は土師質土器皿、角釘・中国銭（皇宋通宝）があり、他に古墳時代の石製模造品の未製品が出土している。土師質土器には皿・小皿（第



第115図　ＳＫ―01・03・10・11・12出土遺物　1・14・15：½　7：¼



第116図　ＳＫ―13・21・23出土遺物

図11～13）があり、図示していないが、16次で多く出土した外底面に板状圧痕・見込ナデ調整を施すものもある。これらの皿類はいずれも埋土１・２層出土で、一応この土坑の下限時期に近いものであろう。

SK13（第111・116図）

３トレンチ（J－11区）に位置し、単独のものである。上部は削平を受けている。規模は不明だが、東西1.14ｍ・南北0.5ｍ以上、深さ0.29ｍを測る。埋土１・２層にはブロック土が混り、人偽的に埋められた可能性がある。Ⅳ区の土坑と類似している。遺物は須恵器器台（第116図１）とチップが出土している。器台は土坑の時期推定資料と考えるには疑わしく、Ⅳ区の土坑との類似から中世と予想しておきたい。

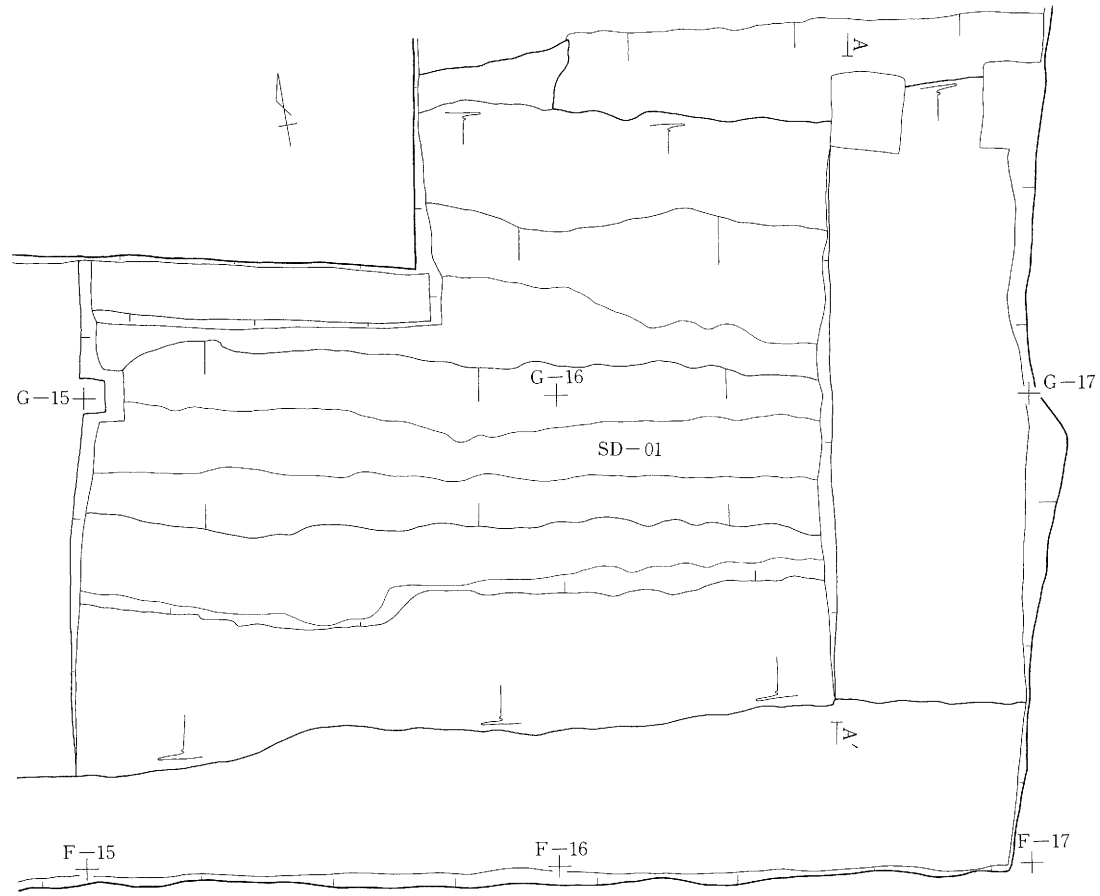
SK14（第111図）

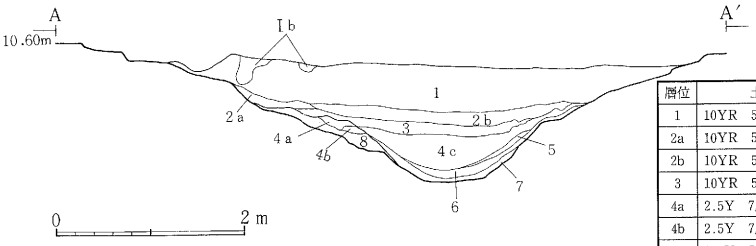
３トレンチ（J－10区）に位置し、SD10を切る。上部は削平を受けている。規模は不明だが、東西0.8ｍ・南北0.25ｍ以上、深さ0.25ｍを測る。遺物は出土していない。Ⅳ区の土坑と特徴が類似していることから、中世と予想しておきたい。

SK24（第122図）

Ⅰ区（I－15区）に位置し、SI11・SK25を切る。上部は削平を受ける。規模不明で、深さ0.15ｍである。埋土は暗褐色シルトの単層である。遺物は出土していない。時期不明だが、埋土の特徴から、中世と推定しておきたい。

SK25（第122図）





第117図　ＳＤ−01平面・断面図

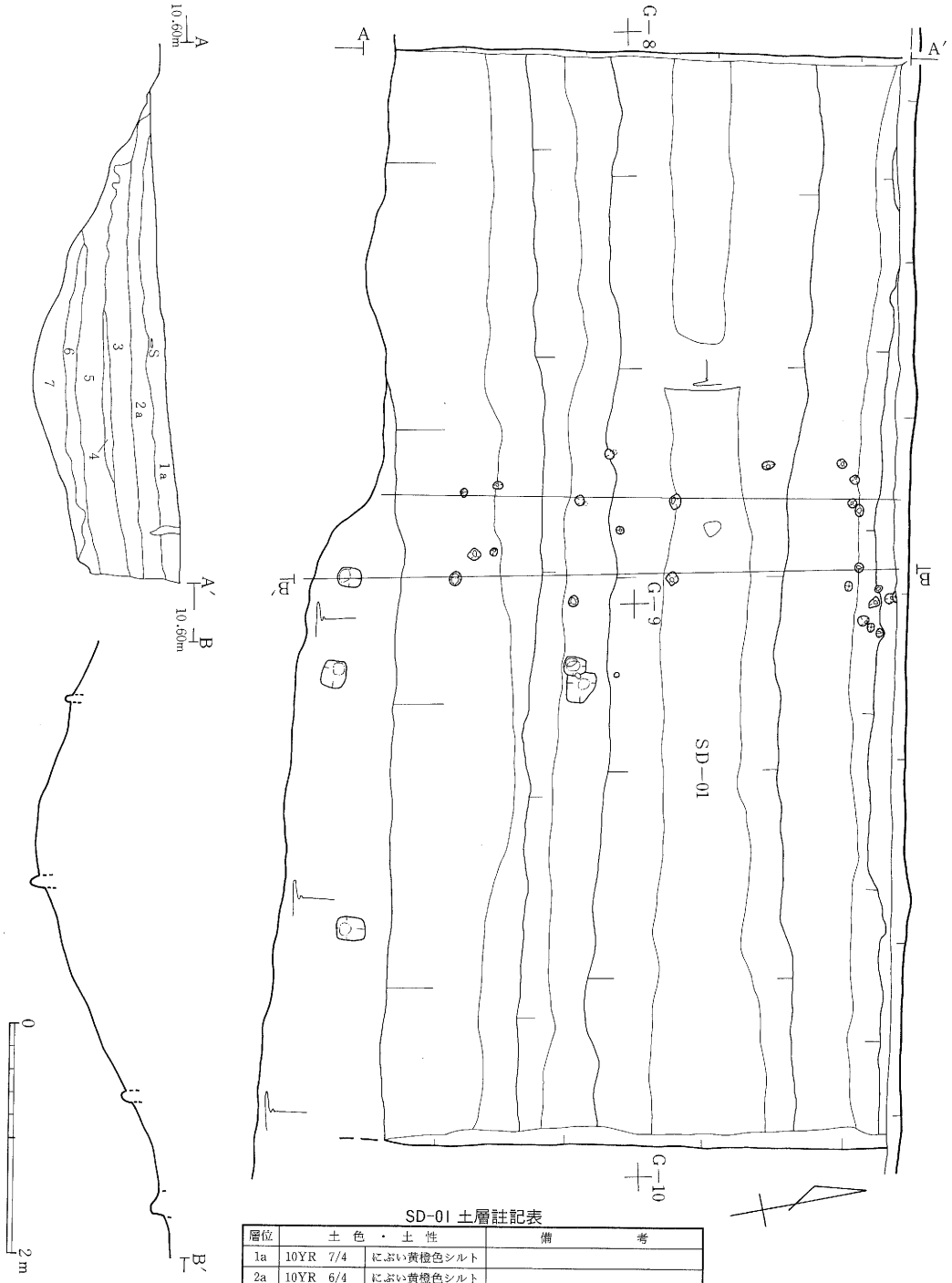
SD-01 土層註記表

層位	土色・土性		備考
1	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	
2a	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト	にぶい黄橙色土が普遍的に混入
2b	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト	黄橙色土が普遍的に混入
3	10YR 5/2	灰黄褐色粘土質シルト	灰白色土ブロック、炭化物微量
4a	2.5Y 7/1	灰白色粘土質シルト	灰黄褐色土ブロック、グライ
4b	2.5Y 7/1	灰白色粘土質シルト	橙色砂混入
4c	2.5Y 7/1	灰白色粘土質シルト	酸化鉄、グライ
5	10YR 8/2	灰白色粘土質シルト	酸化鉄、グライ
6	10YR 6/1	褐色粘土質シルト	酸化鉄が普遍的に混入
7	7.5YR 4/6	橙色砂	灰白色土がうすい縞状に混入
8	7.5YR 4/6	褐色砂	

Ｉ区（I−15区）に位置し、SI11を切り、SK24に切られる。規模不明で、深さ0.06ｍである。埋土は暗褐色シルトの単層で、SK24より明るい色調である。遺物は出土していない。時期不明だが、これも一応中世と推定しておきたい。

溝跡（SD）

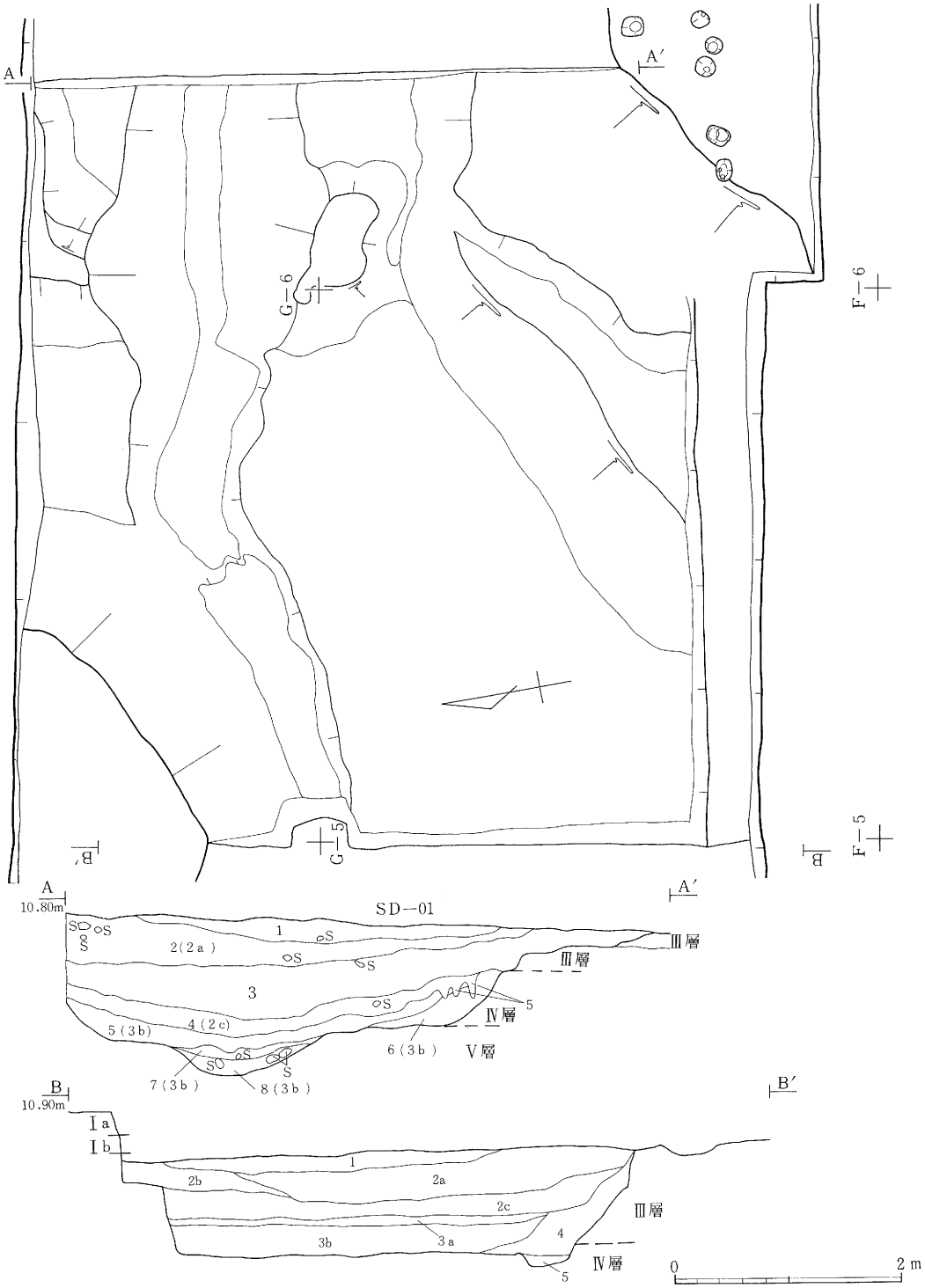
SD01（第117〜119図）



SD-01 土層註記表

層位	土色・土性		備考
1a	10YR 7/4	にぶい黄橙色シルト	
2a	10YR 6/4	にぶい黄橙色シルト	
3	10YR 4/3	にぶい黄褐色シルト	小砂礫炭化物
4	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト	灰白色土と互層酸化鉄粒子
5	10YR 7/4	にぶい黄橙色シルト	下部に浅黄橙色土ブロック
6	10YR 6/3	にぶい黄橙色シルト	灰白色土、酸化鉄粒子混入グライ
7	5Y 6/1	灰白色粘土質シルト	酸化鉄多量、グライ

第118図　SD—01 平面、断面図（Ⅳ区）



SD-01 西壁　土層註記表

層位	土色・土性		備考
1	10YR 6/6	明黄褐色砂質シルト	小礫多量
2a	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト	小礫普遍的に混入
2b	10YR 6/4	にぶい黄橙色シルト	炭化物粒子普遍的に混入
2c	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	炭化物粒微量、灰色土グライ酸化鉄粒混入
3a	5Y 6/1	灰色シルト	
3a	5Y 6/1	灰色シルト	グライ酸化鉄集積、赤褐色粒子多量
3b	5Y 5/1	灰色粘土質シルト	グライ炭化物粒子、赤褐色粒子普遍的混入
4	10YR 8/3	浅黄橙色粘土質シルト	にぶい黄橙色土との互層、下部に浅黄橙色土が多く灰色土酸化鉄粒子が混入
5	10YR 7/1	灰白色砂	上面に薄く酸化鉄粒、下部に灰黄褐色土砂で、酸化鉄土がブロックで混入
		8級枠あり次のページへ	

SD-01 東壁　土層註記表

層位	土色・土性		備考
1	10YR 6/6	明黄褐色シルト	17〜18c の自然堆移
2	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト	2a 層
3	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	小礫を普遍的混入、灰白色土が斑状に混入
4	10YR 5/3	にぶい黄褐色砂質シルト	小礫・浅黄橙色土斑状に混入
5	5Y 7/1	灰白色粘土質シルト	グライ層、酸化鉄粒子を普遍的に混入
6	5Y 6/1	灰色粘土質シルト	6層上面酸化鉄粒子灰色グライし6層下部灰白色土、酸化鉄粒子混入
7	5Y 7/1	灰白色粘土質シルト	グライ酸化鉄普遍的、砂がブロック状混入
8	5Y 6/1	灰色粘土質シルト	グライ酸化鉄粒子を普遍的に混入

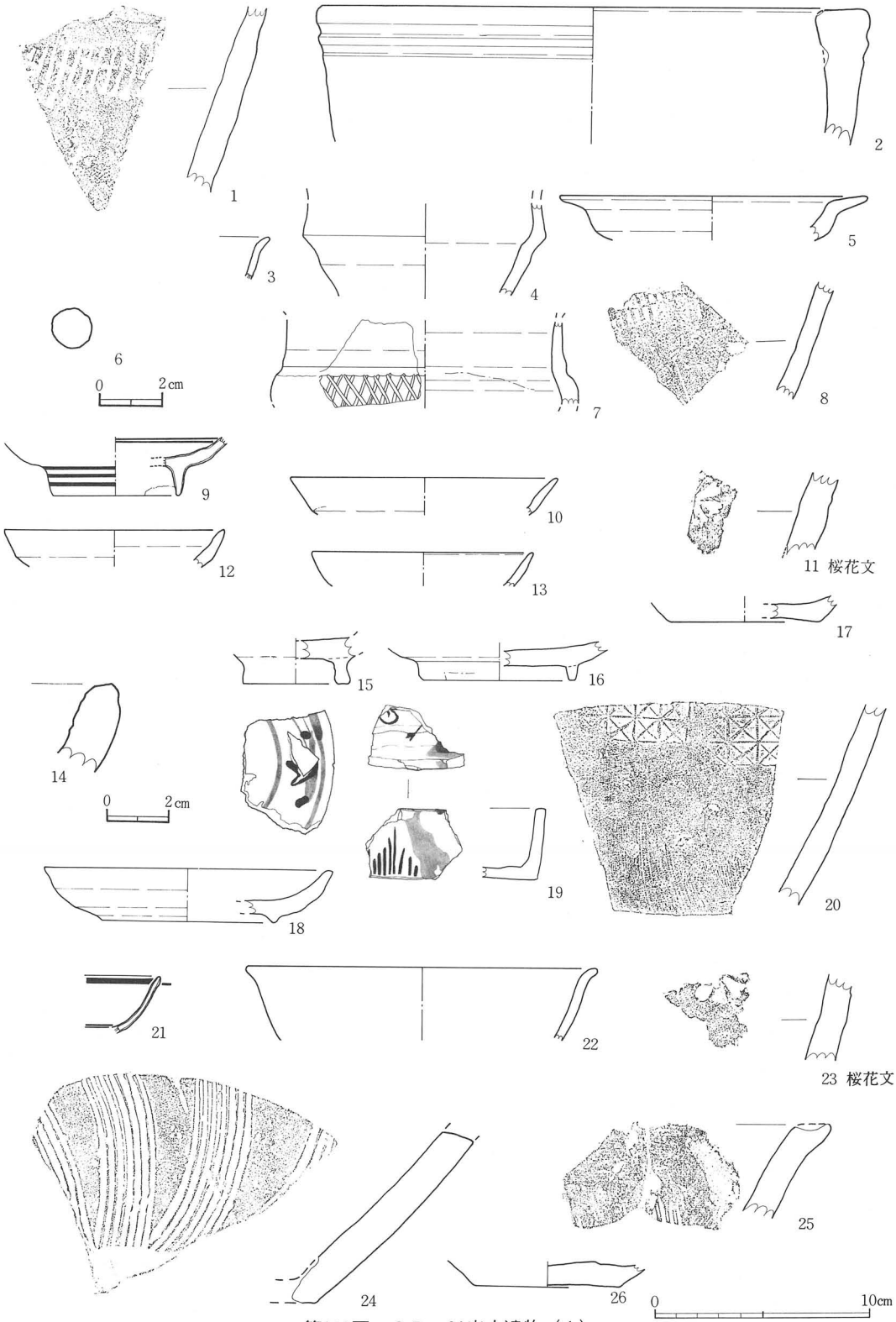
第119図　ＳＤ−01平面・断面図

II区～VI区に位置する東西方向の溝である。全体を完掘できなかったので、全体を1段掘り下げ、II、IV、V区については溝底まで精査した。SD01は、重複するすべての遺構を切っている。I区南端では、SD02・08を切っている。西側では、後述するSD16に接続していると考えられる。規模は、検出長72 m・最大上幅7.27 m、深さ最大1.77 mを測る。東西方向の溝跡で、約N－80°－Wを示す。II区では、上半部が緩斜面で、下半部は「U」字形に近い形態となり急傾斜となる。下半部では壁から底面に酸化鉄の薄い集積層が形成され、埋土はグライ化していることから、流水があったと考えられる。また、埋土の堆積状況から改修を受けて2時期の変遷があったようだ。また、北壁側上部では、天地返しにより撹乱されている。IV区では、南壁側の溝幅が狭まくなり、この部分の溝内に杭列が検出された(第118図)。また、杭列の西側の溝底が一段（10 cm前後）低くなる。

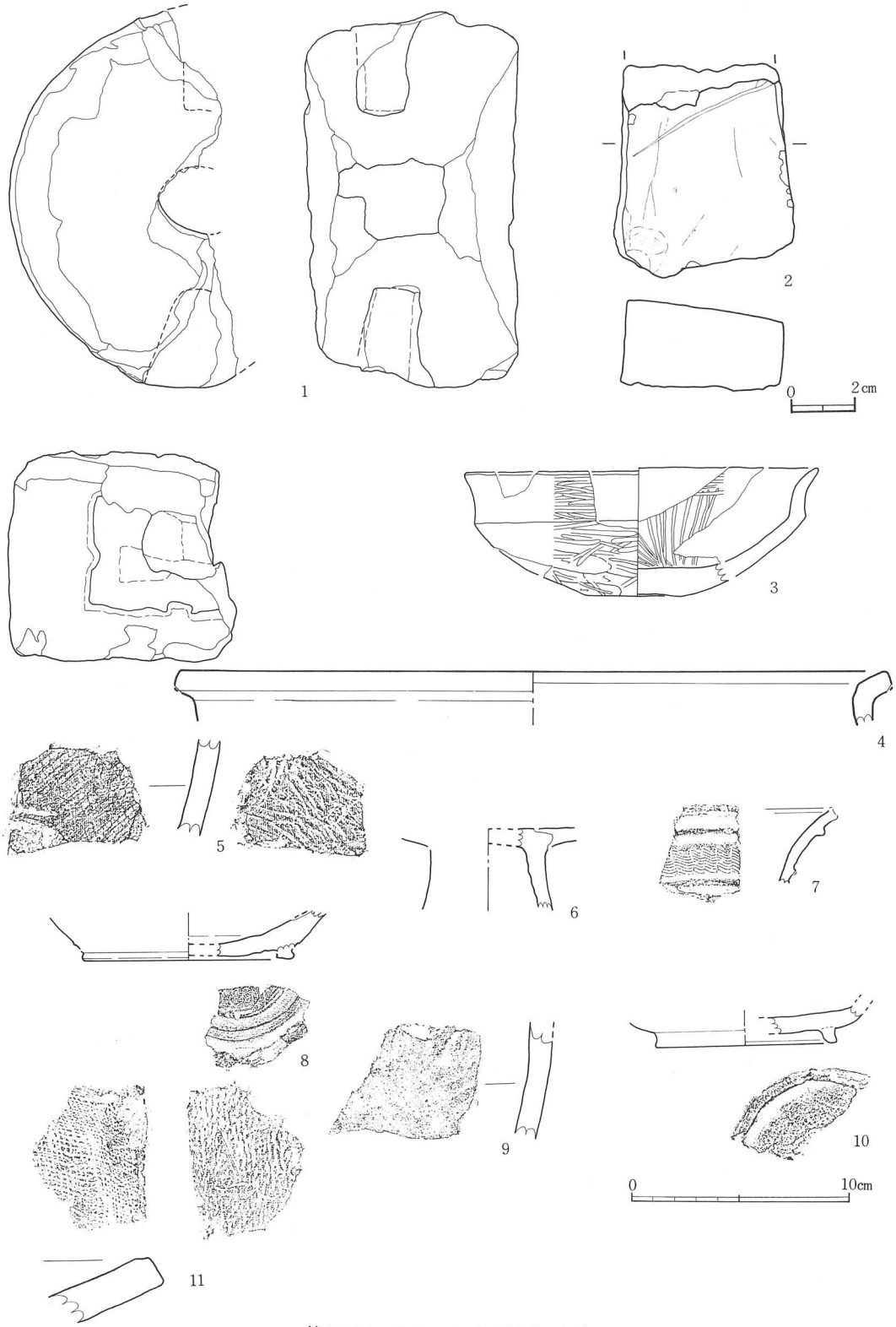
杭列については、2本一対で組むものが6本あり、1間×2間（北側の未調査部分にさらに1間分存在する可能性もある)となる。梁行が0.7～0.75 m、桁行は平均1.86 m＋1.56 mを測る。杭跡は10 cm前後、深さも10 cm前後である。組まないものも含めてみた場合、5層上面や6層上面から打ち込んだものがあるので、深さはさらに深かったものと思われる。溝開削時ではなく、使用期間のある時期に構築されたものと予想される。橋脚跡あるいは堰跡などの性格が考えられるが、規格性があることから前者の可能性を指示しておきたい。

V区では溝の屈曲が認められ、北壁側が一段深い溝となる。さらに北へ伸びる溝あるいは張り出し部が予想される。南壁側は、底面より約40 cm程高いテラス状の段が検出された。また、底面東寄りでは、不整形の凸部が検出された。V区では、基本層のVII層（砂礫層）を掘り込んでいる。ここでは、埋土2～3層は人偽的な埋め立て土で小礫を多く含んでいる。これらの層は、およそ8ライン以西でVI区まで分布しており、IV区以東では認められない。埋め立て土中には江戸初期の遺物が出土しており、VII区（建物跡付近）の出土品と接合するものもある。建物跡と溝の埋め立てとは密接な関連があったと考えられる。溝跡はこの埋め立てで機能を停止し、IV区以東も出土遺物から江戸後期頃(18 C)にはほぼ埋没が完了している。性格は、用水堀であろう。

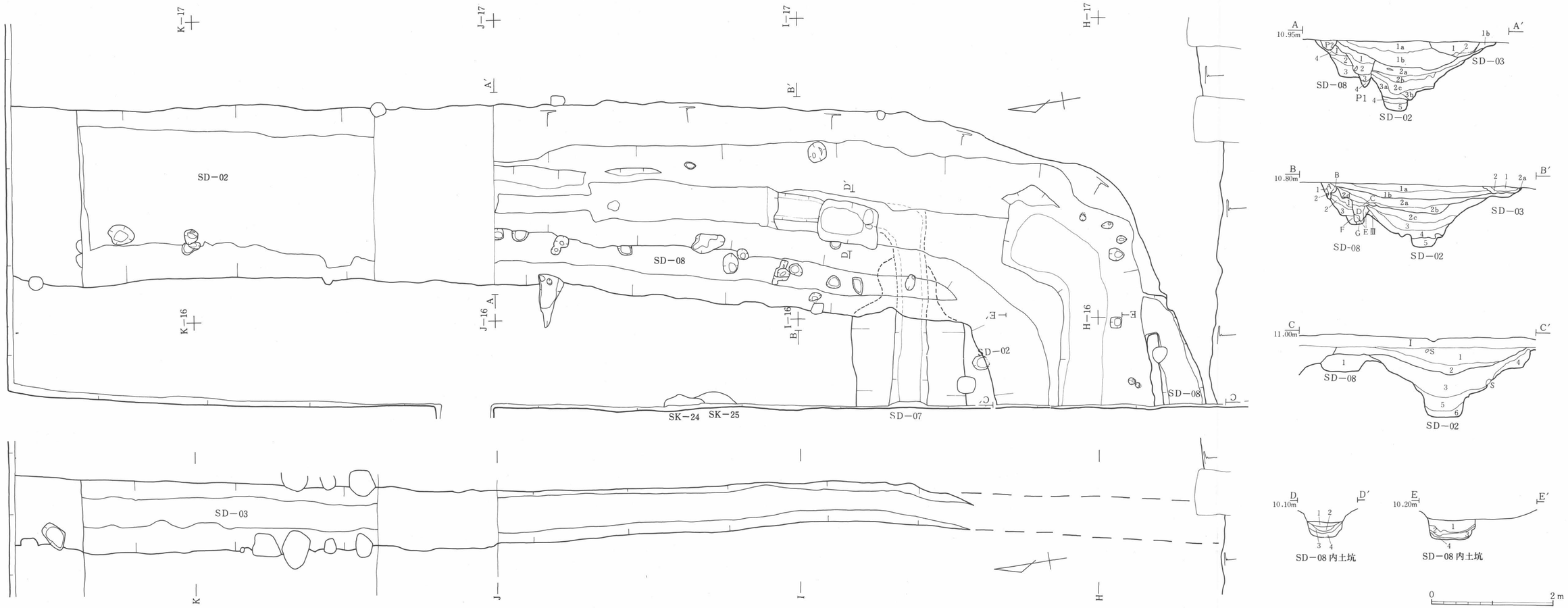
出土遺物については、区別に述べる（第120・121・123図)。II区は瀬戸・美濃？碗1点、在地（白石窯）甕4点、在地甕1点、常滑甕1点、渥美甕1点、中国陶磁器3点（青磁蓮弁文碗・青磁無文端反碗・染付)、角釘1点、鉄滓1点が出土している。他に、土師器・須恵器・布目瓦・石製模造品（母岩？)・弥生土器・スクレイパー・剝片がある。須恵器には猿投産の長頸瓶（9 C）が含まれている。大部分の陶磁器は中世であるが、瀬戸・美濃？は近世と考えられる。IV区は大堀相馬白濁釉碗1点、美濃皿3点（志野皿・黄瀬戸釉皿・織部折緑皿)、唐津青緑釉皿1点、在地（白石窯）甕2点、在地甕2点（桜花文)、常滑甕2点、渥美甕1点、古瀬戸灰釉香炉（斜



第120図　ＳＤ―01出土遺物（１）6・14：½



第121図　ＳＤ―01出土遺物（２）　2：½



SD-02　土層註記表

層位	土色・土性		備考
1 a	10YR7/4	にぶい黄橙色シルト	灰白土斑状
1 b	10YR7/1	灰白色シルト	にぶい黄橙色土と互層、酸化鉄微量
2 a	10YR6/4	にぶい黄橙色シルト	灰白色土斑状
2 b	10YR7/1	灰白色シルト	黄褐色砂多量
2 c	2.5Y7/1	黄灰色粘土質シルト	炭化物、砂ブロック
2 d	10YR7/3	にぶい黄橙色シルト	炭化物粒子微量
3 a	10YR6/1	褐灰色粘土質シルト	上面に黒褐色土、炭化物、酸化鉄
3 d	10YR6/2	灰黄褐色粘土質シルト	浅黄橙色ブロック、酸化鉄
4	10YR6/1	褐灰色粘土質シルト	淡黄色土ブロック
5	10YR6/1	褐灰色粘土質シルト	酸化鉄多量（SD-07）

SD-02　土層註記表

層位	土色・土性		備考
A	10YR5/6	黄褐色シルト	褐灰色土浅黄橙色斑状炭化物微量
B	10YR6/1	褐灰色シルト	酸化鉄
C	10YR6/4	にぶい黄橙色シルト	炭化物
D	10YR6/2	灰黄褐色シルト	灰白色土斑状
E	2.5Y6/1	黄灰色シルト	酸化鉄斑状
F	2.5Y2/2	灰白色粘土質シルト	酸化鉄普遍的に混入
G	5Y6/1	灰白色粘土質シルト	酸化的斑状

	Pit1		
1	10YR5/4	にぶい黄褐色シルト	
2	2.5Y5/1	黄灰色シルト	黄褐色土ブロック
3	2.5Y5/1	黄灰色シルト	
4	10YR7/2	にぶい黄橙色シルト	酸化鉄
	Pit2		
1	10YR4/1	褐灰色シルト	
	SD-03		
1	10YR8/6	黄橙色粘土質シルト	
2	5Y6/1	灰色粘土質シルト	上面に酸化鉄層

SD-02　土層註記表

層位	土色・土性		備考
1	10YR6/1	黄灰色シルト	酸化鉄粒子多量
2	10YR6/1	黄灰色シルト	酸化鉄粒子の集積層、黄橙色土ブロック
3	5Y5/1	灰色シルト	炭化物、酸化物普遍的黄橙色土斑状
4	10YR7/4	にぶい黄橙色シルト	黄橙色土小ブロック、炭化物粒子微量
5	10YR6/1	褐灰色粘土質シルト	浅黄橙色土ブロック、炭化物、酸化鉄微量
6	10YR5/1	褐灰色粘土質シルト	下部に浅黄橙色土ブロック、酸化鉄微量
	SD-08		
1	10YR5/1	褐灰色シルト	酸化鉄まじりの灰白色土ブロック

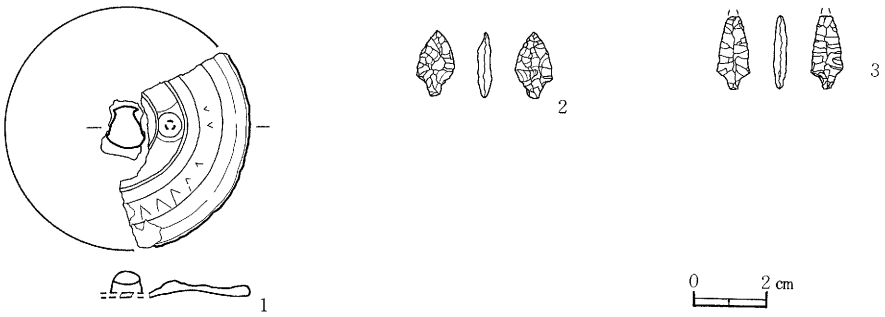
土坑（D-D′）

	SD02		
1	5Y5/1	灰白粘土質シルト	酸化鉄斑状
2	10YR6/2	灰黄褐色粘土質シルト	酸化鉄粒子
3	10YR6/1	褐灰色粘土質シルト	
4	10YR6/1	褐灰色粘土質シルト	酸化鉄斑状

土坑（E-E′）

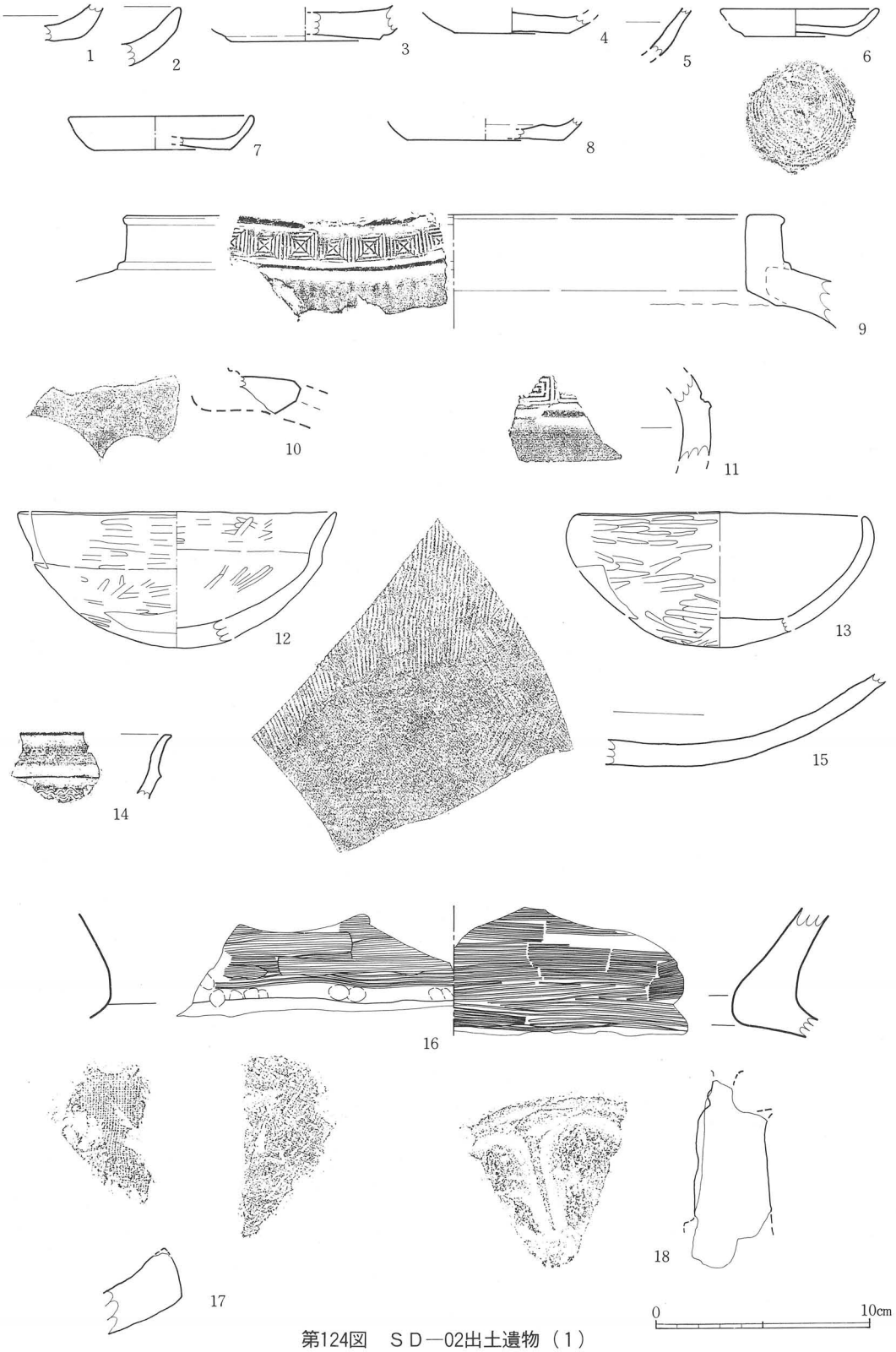
1	10YR7/1	灰白色粘土質シルト	酸化鉄粒子多量
2	5Y8/3	淡黄色粘土質シルト	灰白色土ブロック、酸化鉄粒子
3	10Y4/1	灰色粘土質シルト	酸化鉄粒子
4	2.5Y7/1	灰白色粘土質シルト	酸化鉄粒子、淡黄色土ブロック

第122図　ＳＤ—02・03・07・08平面・断面図

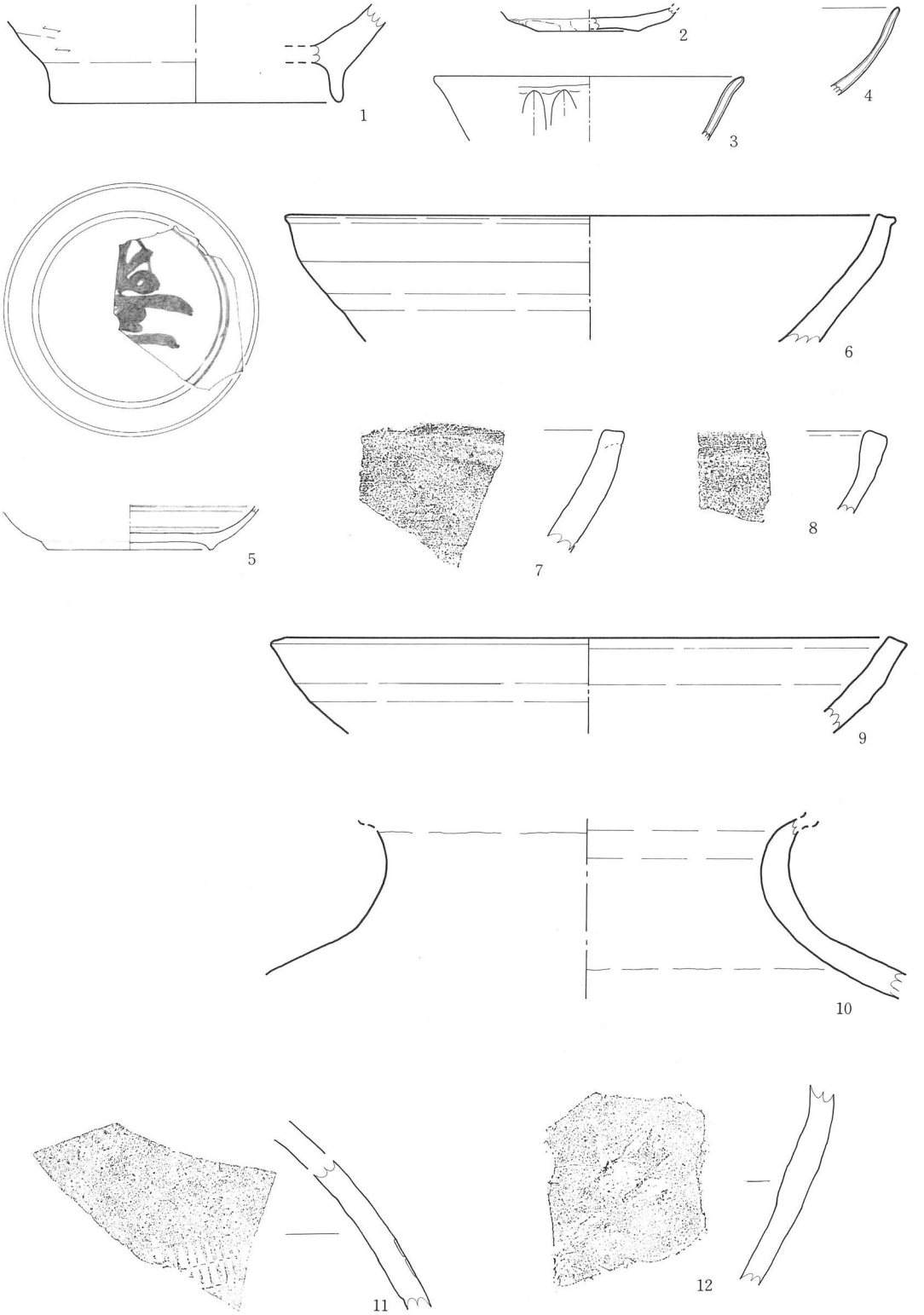


第123図　ＳＤ―01出土遺物（３）

格子文）１点、中国陶磁器４点（青磁蓮弁文碗・青磁劃花文碗・白磁皿・染付碗）、産地不明鉄釉蓋、土師質土器５点（皿１・小皿４）、白色土器１点、釘４点、鉄滓６点、鍋坩１点（内面に金粒？付着）が出土した。他に、土師器・須恵器（坏・蓋坏？・高坏・甕・瑳？）・銅鏡・石製模造品・弥生土器・石鏃・スクレイパー・剝片がある。銅鏡については、本遺跡で初めて出土したもので、古墳時代中期以前の倣製鏡であろう（第123図１）。約1/4が残存し、乳・鈕がある。陶磁器は、大堀相馬・美濃・唐津・中国染付は近世で、他は中世である。また、須恵器甕には内面に布目圧痕をもつものがある。Ｖ区は大堀相馬白濁釉埦１点、瀬戸・美濃灰釉埦１点、美濃５点（灰釉系折緑皿・織部皿・織部角形向付・志野埦・志野織部鉄絵皿）、産地不明陶器香炉１点、肥前染付磁器２点（碗・瓶）、肥前白磁１点、燻瓦７点、在地（白石窯）甕６点、鉢１点、在地甕４点、古瀬戸４点（鉄釉天目茶埦２・灰釉大鉢・盤）、常滑２点（甕・鉢）、渥美甕２点、中国磁器５点（青磁無文碗・青磁端反碗・青白磁梅瓶・染付皿２点）、瓦質擂鉢17点、瓦質？火鉢１点、土師質土器４点（皿２・小皿２）、角釘９点、鋏１点、鉄滓２点、銅製金具１点、砥石１点、茶臼（上臼）１点が出土した。他に、土師器、須恵器（坏・高台付坏・小型壷・長頸瓶）、弥生土器、石鏃、スクレイパー、剝片、石製模造品、骨片がある。須恵器長頸瓶は湖西産とみられる。Ⅳ区の溝底面で、在地（白石窯）甕６点の内の１点が出土している。また、瀬戸・美濃、美濃、肥前磁器、燻瓦などの近世陶磁器はいずれも３層より上位の層で出土している。Ⅵ区は大堀相馬白濁釉碗１点・土瓶？１点、堤鉛釉（橙色）焙烙１点、美濃段付白天目茶埦１点、産地不明陶器１点、肥前染付皿１点、中国染付皿１点、羽口１点が出土している。他に、土師器、須恵器（坏・甕）、弥生土器がある。この他に、地区不明の土師質火鉢１点がある。全体的にみると、上層では近世陶磁器が出土し、17Ｃ前半代が主体で一部は18Ｃ以後のものもみられる。下層では、量は少ないが中世陶磁器に限られる。Ｖ・Ⅵ区中心の埋め立てによって、近世初期には機能をほぼ停止したとみてよい。



第124図　ＳＤ―02出土遺物（１）

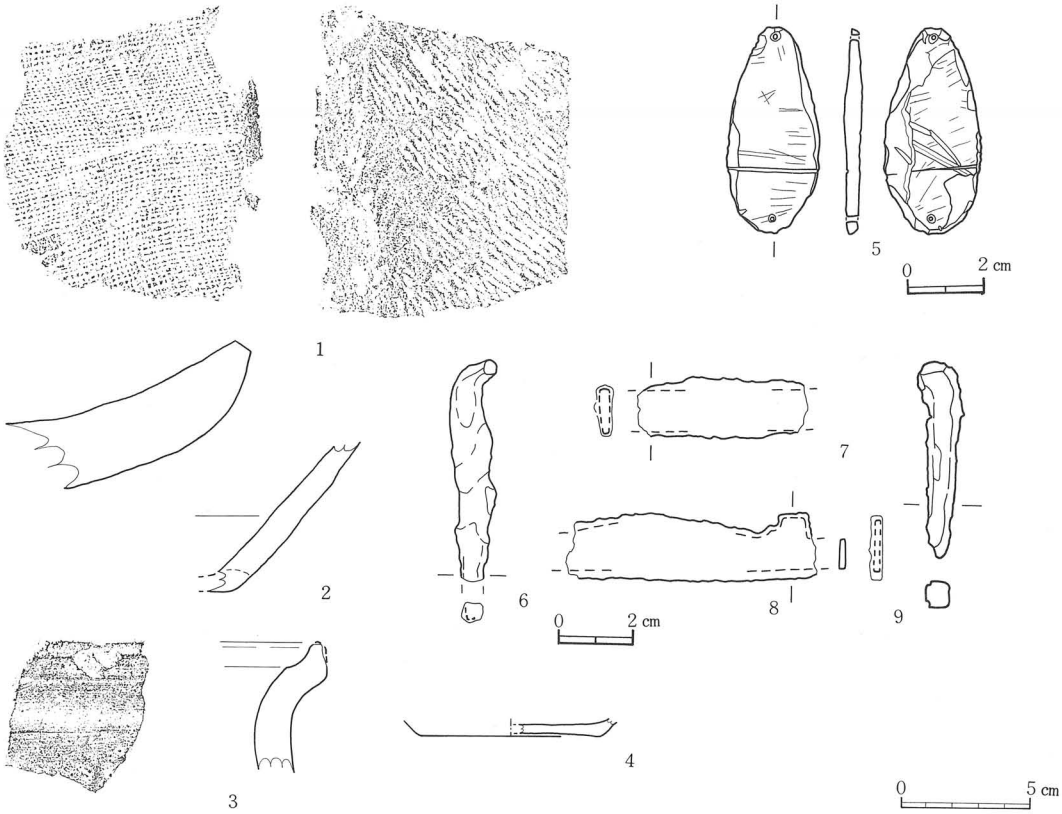


第125図　ＳＤ―02出土遺物（２）

SD02（第122・124～126図・129図１）

Ⅰ区に位置する南北溝で、南端では西側へ屈曲する。SI03・04・07・11・14・16・19、SB02～04、SD07・08を切り、SB01・07、SD01・03に切られる。ただし、SD01と中世段階には並存していた。溝底下にSD07が検出されている。規模は、長さ南北約18ｍ・東西約2.8ｍ、溝幅最大3.4ｍ、深さ0.9ｍ前後である。溝コーナー部には「L」字形や長方形の土坑状の掘り込みがみられる。前者は深さ0.35ｍ前後、後者は約0.4ｍを測る。溝西壁側では、ある程度埋没した段階で、柱穴が穿たれており簡易な柵が存在した可能性をもつ（SD08と重複する部分）。溝の方向は、南北が約N－11°－Wである。この溝跡はさらに北と西へ伸びるが、西へ伸びる溝はⅦ区で検出できないことから、４トレンチのSD06に接続し「コ」字あるいは方形プランになるものと考えられる。屋敷跡を区画する溝跡とみられ、半町規模と予想される。

出土遺物は、１層で在地（白石窯）甕３点、在地鉢２点、常滑鳶口壺？１点、青磁蓮弁文碗３点、同劃花文碗１点、中国染付皿１点、白磁皿１点、瓦質風炉３点、産地不明陶器鉢２点、土師質土器（小皿）14点、鉄滓１点が出土し、他に瓦、須恵器（坏・無蓋高坏・甕）、剝片がある。２層では在地（白石窯）甕３点、在地甕１点・鉢３点・壺？１点、常滑甕１点、産地不明



第126図　ＳＤ―02出土遺物（３）　5～9：½

陶器鉢1点・埦？1点、土師質土器皿21点（皿4・小皿16・手捏ね小皿1）、瓦質風炉3点、角釘3点、鉄滓1点が出土し、他に古代瓦、須恵器（坏・壺？・甕）、弥生土器、石製模造品、剝片がある。3層では、在地甕2点・鉢3点、常滑甕1点、産地不明陶器有台鉢1点・鉢（須恵器系？）1点、中国白磁皿1点、瓦質風炉1点、土師質土器小皿3点が出土し、他に古代瓦、須恵器（甕）、弥生土器、剝片がある。4層では在地（白石窯）甕1点、産地不明陶器鉢1点、土師質土器小皿1点、漆器片1点が出土し、他に須恵器(甕)、土師器、弥生土器がある。また、屈曲部の土坑より在地鉢1点、常滑甕1点、須恵器甕、石製模造品剝片、壁面ピットより中国銭が出土している。なお、1～4層より出土した産地不明陶器鉢（有台）は、同一個体と考えられ、常滑の製品の可能性がある。また、江戸時代以降の陶磁器は出土していない。

SD03（第122図）

Ⅰ区に位置する南北溝で、SD02上（東壁寄）にある。SB01・SI03・04・SD02を切る。Ⅰ区では最新の遺構である。規模は検出長約14m、幅1.22m、深さ0.26mを測る。方向はN－10°－Eである。南半はプランが不明確で、SD02東壁面に一部残存している。本来は、SD01に接続していたものと考えられるが、接続部付近は削平を受けている。埋土2層上部に鉄分の集積層が認められ、1層（基本層Ⅲ層起源か）は、人偽的な埋め立て土である。遺物は角釘・須恵器・弥生土器が出土している。時期は、重複関係などから中世末～近世初期とみられる。Ⅶ区の江戸初期頃の建物跡と関連するものと予想される。使用時には流水があったようだ。

SD04（第127・128図）

Ⅶ区（H－3・4区）に位置し、他の遺構との重複は認められない。上部は、天地返しにより削平されている。規模は検出長6.05m、幅0.47m、深さ0.63mを測る。方向は東西方向で、N－77°－Wを示す。SD06・16と接続している可能性がある。遺物は埋土中より土師質土器7点（皿1・小皿6）、土師器、弥生土器が出土している。第128図1・2は土師質土器である。

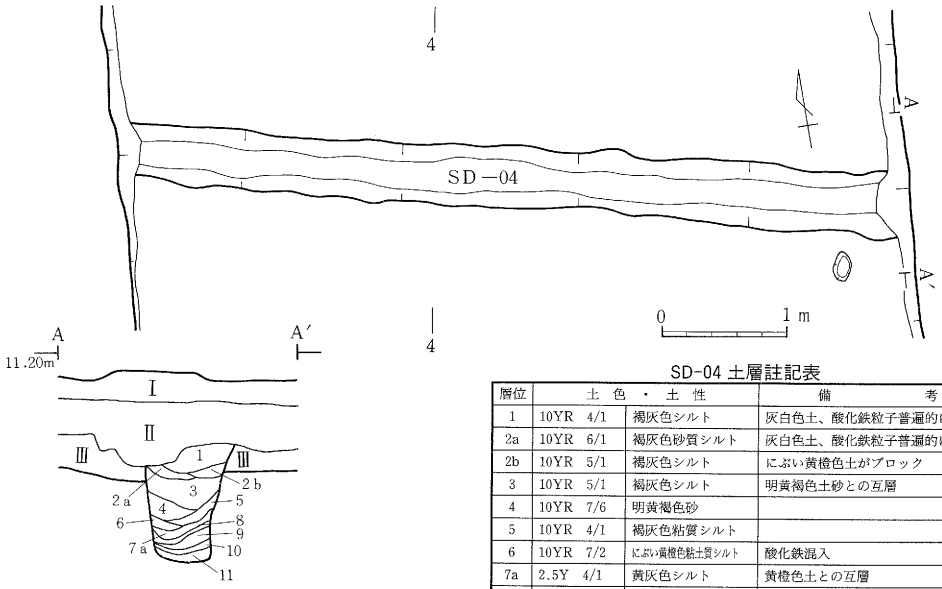
SD05（第108図）

5トレンチ（A－13・14区）に位置し、他の遺構との重複は認められない。規模は検出長5.8m、深さ0.58m以上である。かなり大きな溝（堀か）と予想されるが、トレンチ調査のため明確ではない。方向は東西を示し、約N－82°－Wである。およそSD01と平行する。遺物は、土師器細片が少量出土した。おそらく、中世あるいは近世の所産とみられる。

SD06（第108・128図）

4トレンチ（J－5・6区）に位置し、SI10・SD11を切る。規模は、検出長1.2m、幅2.37m、深さ0.7mを測る。方向は南北で、N－12°－Eを示す。東壁には軽い段差がみられる。

規模・形態・出土遺物から、SD02と同一の溝跡と予想される。また、SD01とも接続していた可能性が残こる。



第127図　ＳＤ—04平面・断面図

SD-04 土層註記表

層位	土色・土性		備考
1	10YR 4/1	褐灰色シルト	灰白色土、酸化鉄粒子普遍的に混入
2a	10YR 6/1	褐灰色砂質シルト	灰白色土、酸化鉄粒子普遍的に混入
2b	10YR 5/1	褐灰色シルト	にぶい黄橙色土がブロック
3	10YR 5/1	褐灰色シルト	明黄褐色土砂との互層
4	10YR 7/6	明黄褐色砂	
5	10YR 4/1	褐灰色粘質シルト	
6	10YR 7/2	にぶい黄橙色粘土質シルト	酸化鉄混入
7a	2.5Y 4/1	黄灰色シルト	黄橙色土との互層
8	10YR 8/3	浅黄橙色粘土質シルト	酸化鉄粒子混入
9	10YR 5/1	褐灰色シルト	酸化鉄粒子普遍的に混入
10	10YR 8/3	浅黄橙色シルト	酸化鉄粒子混入特に東壁に於いて9層が混入
11	10YR 6/1	灰色シルト	

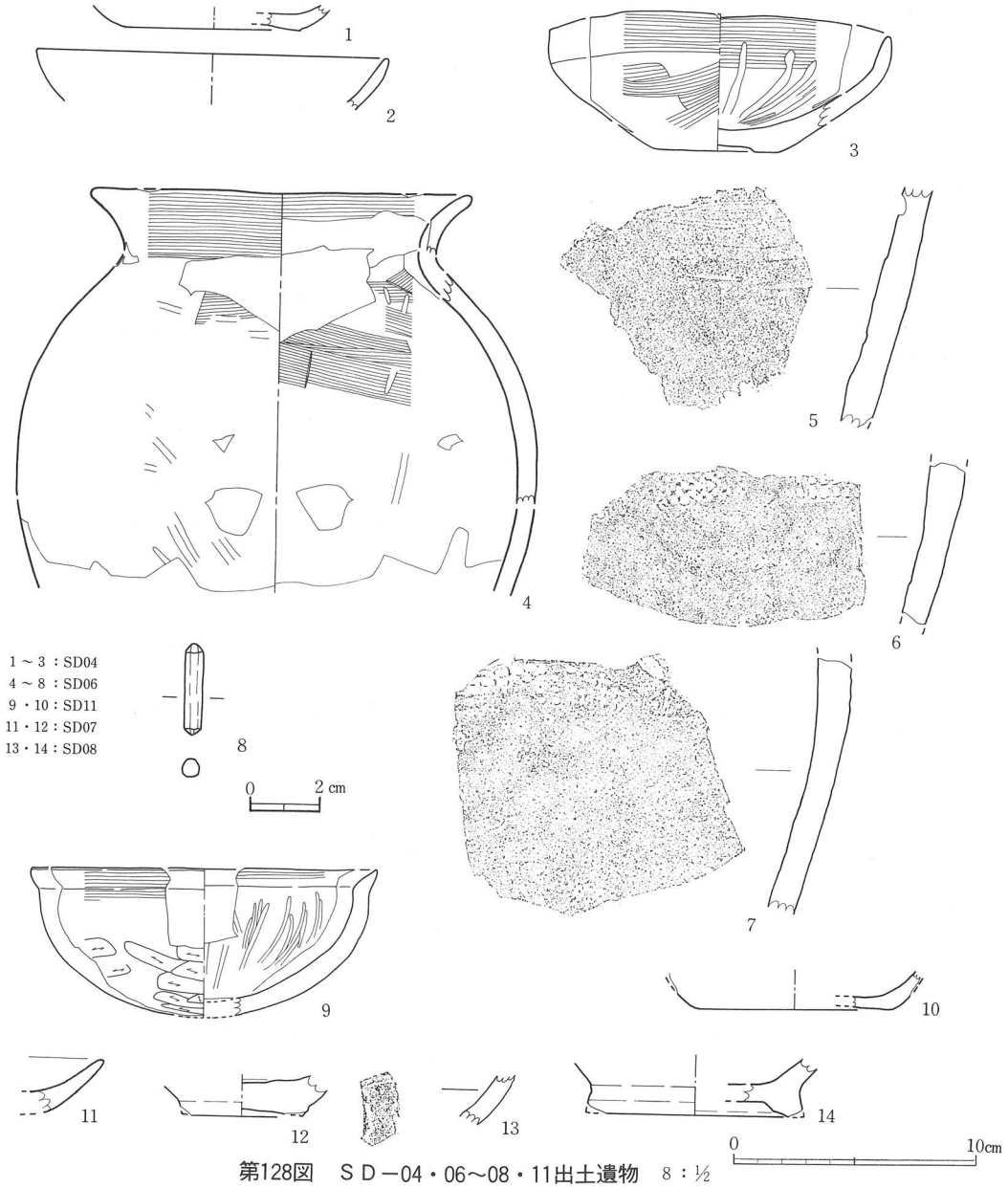
遺物は、在地（白石窯）甕１点、在地甕３点、渥美壷？１点、中国青磁蓮弁文碗１点、瓦質風炉１点、不明鉄製品１点、棒状石製品１点が出土し（第128図４～８）、他に土師器・須恵器弥生土器・縄文土器・石製模造品・剝片がある。在地陶器甕には格子状押印をもつもの（５層）、桜花文押印をもつもの（１層）がある。瓦質風炉とみられるもの（２層）は、SD02のものと類似する。縄文土器は中期末～後期初頭の深鉢片と考えられ、本遺跡では初めての出土である。

SD07（第108・128図）

Ⅰ区に位置する南北溝で、南部で西側へ屈曲する。SI11・SD08を切り、SD02に切られる。SB02と重複関係にあるが、本溝跡が新しいものと予想される。SD02と重複する部分では、SD02の溝底下で検出される。規模は不明確な部分が多いが、SD02と重複しない部分（H－15・16区）では、幅1.9 m、深さ1.13 mを測る。SD02と重複する部分では、長さ約15 m、深さ1.27 m、幅は不明である。方向は、SD02と同じである。遺物は産地不明陶器鉢１点（常滑？・有台か）、土師質土器皿４点（小皿２点、手捏ね？２点）が出土し、他に須恵器（甕）、弥生土器、敲石、剝片がある。陶器鉢は１層、土師質土器は１・２・４層から出土し、厚手のものもある。なお、規模・形態の類似から、SD11と同一溝の可能性が高い。

SD08（第122・128図）

Ⅰ区に位置する南北溝（SD02西壁部）で、南部で西側へ屈曲する。SI11・19・SK28・SB03・04を切り、SB01・07・SD02・07に切られる。規模は上部の削平や他の遺構との重複で不明確であるが、検出長（南北）約19.4 m、幅0.71 m、深さ0.62 mを測る。溝幅は、本来１m前後あったものと予想され、第16次調査のSD02等と類似した印象をもつ。方向は、やや湾曲して



第128図　ＳＤ－04・06～08・11出土遺物　8：½

いるが第17次SD02とほぼ同じで、N－11°－Eである。遺物は埋土中より、土師質土器？4点、須恵器2点（長頸瓶・二重瑤）、剝片1点が出土している。また、SD02との帰属が不明確となった古代瓦2点（平瓦・軒丸瓦）がある。出土した遺物では時期を明確にすることはできないが、他の遺構との重複から中世の溝跡と考えられる。SD08→SD07→SD02と規模を拡大し、防御性を増しながら変遷したものと思われる。ただ、SD08に関しては、西側で検出できずどのように展開するかは明らかにできなかった。

SD11（第108・128図）

4トレンチ（J－6・7区）に位置し、SB13・SD06に切られ、SI10を切る。規模はSD06に切られ明確ではないが、検出長1.16m、幅1.1m以上(推定約1.5m前後)、深さ0.99mを測る。方向は約N－7°－Eを示す。西壁には段が付く。埋土中には酸化鉄を多く含み、最下層は砂層である。遺物は土師質土器小皿2点、土師器、弥生土器が出土している。土師質土器は埋土の上半より出土し、板状圧痕・見込みナデ調整がみられる。土師器は、元来SI10に帰属していたものが落下したものと思われる。本溝跡は、規模・形態等からSD07と一連のものと考えられる。

SD13（第108図）

6トレンチ（J－2区）の東端に位置し、SB10に切られる。また、SD15が連結する。SB09は東側で並行している。規模は、検出長0.85m、幅0.46m、深さ0.28mを測る。方向は南北方向で、N－18°－Eである。埋土は、黄褐色シルトが主体で、SD14・15やSB09～12と類似する。遺物は弥生土器・石製模造品・剝片が出土したが、時期決定資料にはならない。

SD14（第108図）

6トレンチ（J－1区）に位置し、SD16を切る。また、SD15が連結するものと予想される。SD14～15は、同時期とみてよい。規模は検出長0.82m、幅0.28m、深さ0.16mを測る。方向は南北方向で、N－12°－Eである。遺物は弥生土器が出土したが、時期決定資料ではない。なお、上部は耕作により削平されているが、本来はもう少し規模が大きかったものと思われる。SD13とほぼ平行し、この2条の溝跡は道路の側溝の可能性もあろう。

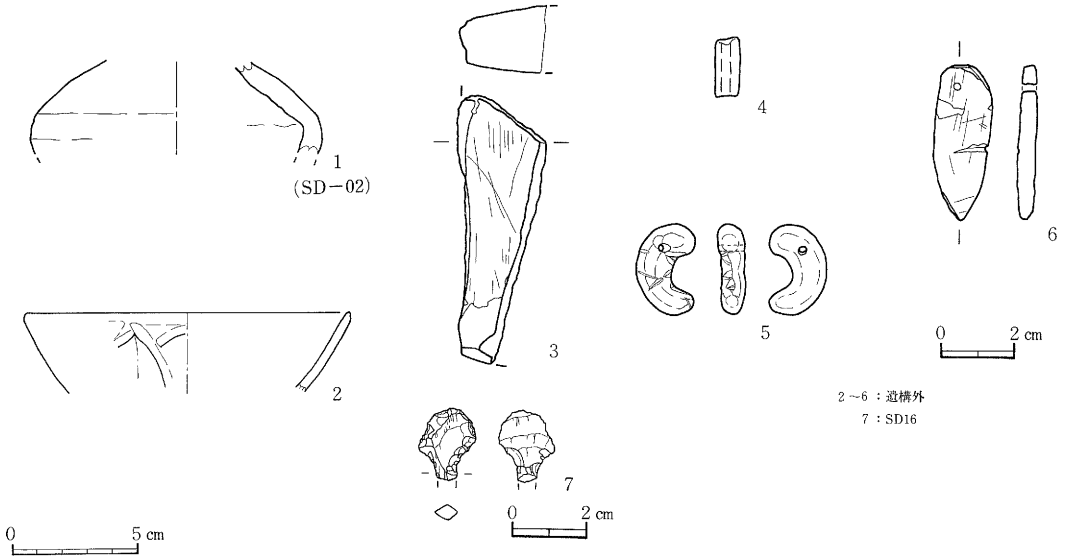
SD15（第108図）

6トレンチ(J－2区)に位置し、SD13に連結し、SD14とも連結するものと予想される。規模は検出長2.32m、幅0.2m、深さ0.15mを測る。方向は東西方向で、N－70°－Wである。遺物は出土していない。SD13・14間の連絡溝とみられる。

SD13～15は、Ⅶ区の建物跡の西側を規制する同時期の道路側溝と理解したい。ただ、SB10は、道路上にはみ出した（蚕食）建物跡と考えられる。

SD16（第108・129図）

6トレンチ（J・K－1区）に位置し、SD14に切られる。規模・特徴はトレンチ調査のため明確ではないが、幅4.3m以上、深さ1.1m以上である。方向は南北方向を示す。かなり大型の溝跡（堀）と予想される。埋土4～6層は、グライ化し酸化鉄を多く含んでいる点から水堀と考えられる。遺物は中世が最も新しく、近世のものは出土していない。在地（白石窯）甕1点、壺？2点、産地不明陶器甕1点、土師器、須恵器（甕）、弥生土器、石製模造品、石錐（第129図7）が出土している。



第129図　ＳＤ－02・16・遺構外・出土遺物（４～７は½）

SD16の西側には現在も使用されている用水堀（佐久間堀）が南流し、東へ屈曲して５トレンチの南側を東流している。この佐久間堀は、SD16やSD05が位置をやや変えながらも踏襲され、今日に至った可能性が充分考えられる。

(3) その他の遺物

その他として、遺構外や遺構の時期と異なる遺物が多数出土している。ここでは、それらの遺物の一部を紹介する。また、遺構の時期と異なる遺物でも、その遺構図版中に示したものも多い。SD01に図示した古墳時代の銅鏡など注目される遺物がある。

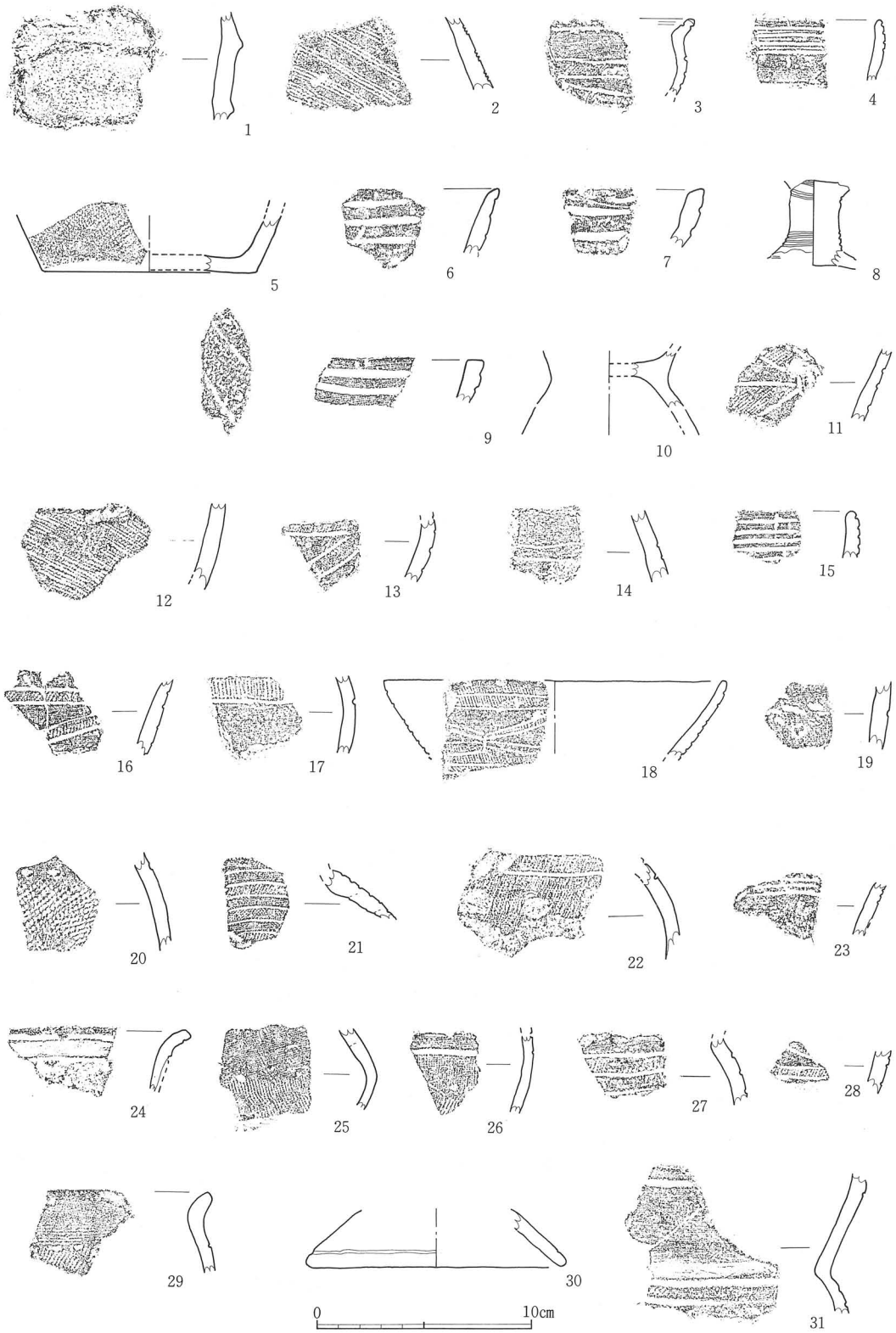
第129図１は常滑鳶口壺とみられ、当初帰属不明となったもので後にSD02出土と判明した。２は３トレンチＩ層出土青磁碗である。このトレンチでは土師質土器片が比較的多い。３・４は建物跡にならなかった柱穴出土の砥石・管玉である。５はＶ・Ⅵ区南壁清掃時に出土した勾玉である。管玉や勾玉は、本遺跡では珍しい出土品である。６はⅦ区北部出土の剣形模造品である。

縄文土器（第130図）

第130図１は縄文時代中期末～後期初頭の深鉢片である。SD06の項でも述べたが、縄文土器は本遺跡で初めての出土である。

弥生土器（第130図）

古墳時代以後の遺構から多く出土しており、ここでは比較的時期の分かるものについて述べる。第130図２・８は十三塚式期のもので、８は高坏であろう。３・11・13・16～18・20～27・



第130図　その他の出土遺物（縄文、弥生土器）

13. 第17次出土遺物観察表(1)

（単位 cm）

図版No.	遺物No.	層位	種類	器種	法量			特徴
SI－01（古墳）								
70－1	453	床 NO.1	土師器	坏	口径 12.6	底径 －	器高 6.4	外面口縁部b、体部e→d（一部）、内面口縁部b、体部c（ヘラ？）、無彩、須恵器模倣、白針 C
2	266 455	床直 1号土坑	土師器	坏	14.6	－	5.45	外面口縁部b、体部e、内面口縁部d、体部d、赤色A、白針 E_2
3	300	床	土師器	坏	－	－	－	外面口縁部b、体部e→d、内面口縁部b、体部d、赤色B A_2
4	282	埋土(東部)	土師器	坏	－	－	－	外面口縁部b、体部d、内面体部d、内黒 E
5	454	－	土師器	ミニチュア	5.4	4.5	4.2	外面頸部c（ヘラ）、内面口縁部c？体部指押え、壺形、白針、NO.2
6	210	埋1層	土製品	土玉	長軸 3.0	短軸 2.8	厚さ 2.9	重量21.5g、全面ナデ？、白針
7	282	埋土(東部)	土製品	土玉	3.0	2.5	2.6	重量16.5g、全面ナデ？、白針
8	282	埋土(東部)	土製品	土玉	2.8	2.6	2.2	重量13.0g、全面ナデ？
9	461	pit 15 埋土	土製品	土玉	2.6	2.1	2.0	重量10.0g、全面ナデ？、白針
10	300	床（西部）	土製品	土玉	2.8	2.6	2.2	重量14.0g、全面ナデ？、白針
11	300	床	金属製品	鎌か	長さ (5.2)	幅 1.3	厚さ 1.5	鉄、末端が屈曲
SI－02								
71－1	284	埋1層	土師器	坏	－	－	－	外面口縁部b、内面口縁部d、無彩 B
2	449	埋土	土師器	坏	－	－	－	外面体部b、内面体部d、内黒、白針 E
3	672	床直	土師器	坏	－	－	－	外面体部b→d、内面体部b→d、無彩 B
4	883	床直	土師器	坏	－	－	－	外面口縁部b、体部d、内面口縁部b、体部d、無彩 B
5	884	床直	土師器	高坏	－	底径 15.6	器高 (9.6)	外面脚部d、裾部b→d、内面脚部c（ヘラ）、褐部b→a、白針、NO.1 B_2
6	888	pit 12	石製品	臼玉	外径 0.5	円径 0.2	厚さ 0.2	孔1ヶ
SI－03								
74－1	568	床直	土師器	坏	口径 12.4	底径 －	器高 4.0	外面口縁部b、体部e？、内面体部d？、外底「＋」記号？、赤色A E_2
2	760	床直	土師器	坏？	－	－	－	外面口縁部b、赤彩文様？、内面口縁部b→d、赤彩、白針 E？
3	568	埋土下部	土師器	坏	－	－	－	外面口縁部b、体部e、内面口縁部b、体部d、無彩 A_3
4	774	柱穴(b) 最下層	土師器	坏	－	－	－	外面口縁部b、体部c→d、内面口縁部b、体部d、無彩 A_3
5	774	柱穴(b) 最下層	土師器	坏	－	－	－	外面口縁部b、体部e→d、内面体部d、赤色A E
6	10	柱穴(a)	土師器	坏	－	－	－	外面体部b、内面体部b→d、赤色B E_1 ？
7	855	床直	土師器	坏	14.0	－	(4.3)	外面口縁部b、体部e、内面口縁部d、体部d、無彩 E_2 ？
8	788	第1号土坑 埋土	土師器	坏	－	－	－	外面口縁部b→d、体部e、内面口縁・体部d、内黒 C
9	836	床直	土師器	坏	17.0	－	4.55	内外面磨耗の為調整不明、内黒、白針、NO.2 E_2
10	900	カマド東側床	土師器	坏	15.4	－	5.55	外面口縁部b、体部e、内面口縁部d、体部d、内黒、白針 E_2 ？
11	828	床直	土師器	小型甕	15.4	4.6	14.2	外面口縁部b、体部e→c（ヘラ）、一部d、内面口縁部b、体部c（ヘラ）、白針、NO.8 小型C
12	828	床直	土師器	鉢	13.6	4.7	12.2	外面口縁部b、体部不明、内面口縁部b、体部c（ヘラ）、被熱剝落、白針、NO.9
13	831	床直	土師器	甑	16.0	3.2	14.9	外面口縁部b、体部c（ヘラ）、底部e、内面口縁部a→b、体部c（ヘラ）粉痕、内面黒い 白針、NO.10 小型B
14	837	第1号土坑 底	土師器	小型甕	14.1	10.6	16.8	外面口縁部不明、体部e→d、a、脚部b→d、a、内面口縁部b→d、体部c（ヘラ）→d、脚部b、脚付、被熱剝落、白針 小型E
15	568 638	埋土下部	土師器	甕	14.8	－	20.8	外面口縁部b→d、体部e→c（ヘラ）→d、内面口縁部c（ヘラ）→b、体部c（ヘラ）、白針 中型B
16	568	埋土下部	須恵器	高坏？	－	－	－	外面ヘラ削り→ロクロ、内面ナデ、5c代か
75－1	840	床直	土師器	甑	21.8	8.2	26.2	外面口縁部b、体部上部a→d、下半e→d、内面口縁部b→d、体部d、無底式、白針、NO.15 大型A
2	826	床直	土師器	甕	15.6	－	(17.9)	外面口縁部b、体部c（ヘラ）→d、e、内面口縁部b、体部c（ヘラ）、白針NO.10、13 中型B？
3	1085	カマド脇床直	土師器	長胴甕	19.0	7.4	34.4	外面口縁部b、体部d、内面口縁部b、体部c（ヘラ）、白針、NO.11 大型D

14. 第17次出土遺物観察表(2)

(単位 cm)

図版No.	遺物No.	層位	種類	器種	法量			特徴
75－4	816	第3土坑 埋1層	土師器	甕	18.0	7.5	23.6	外面口縁部b、体部a、内面口縁部b→c（ヘラ）、体部c（ヘラ）、木葉痕　中型B
5	815	柱穴(a) 埋土	土師器	甕？	－	－	－	外面口縁部b、内面口縁部b、体部磨耗？、口縁屈曲
SI－03								
95－3	1068	埋土	須恵器	器台	口径 －	底径 －	器高 －	外面凸帯間に波状文（2段）、内面ロクロ、TK208～23併行か
SI－04								
77－1	655	貯蔵穴 埋土上部	土師器	坏	－	－	－	外面口縁部b？、体部e→d、内面口縁部d、体部縦位d、無彩　B
2	806	貯蔵穴(古) 埋2層	土師器	坏	－	－	－	外面口縁部b、体部無調整、内面体部c→d？、無彩　A_2
3	709	貯蔵穴 埋土	土師器	坏	－	－	－	外面口縁部b、体部c？、内面体部c→d、無彩、白針　A_1
4	655 214	第1貯蔵穴	土師器	高坏	19.4	－	(5.4)	外面口縁部b、体部c（ヘラ）→e→d、内面口縁部b、体部d、無彩、白針
5	1018	p. 152 埋土	土師器	壺（小）	(8.2)	－	(3.1)	外面口縁部c（ヘラ）→b、体部不明、内面不明　小型A？
6	703	貯蔵穴 埋1層	金属製品	刃子？	長さ (4.9)	幅 1.1	厚さ 0.2	鉄、目釘穴1ヶ、茎
7	616	pit 110 埋土	石製品	剣形	長さ 3.55	幅 2.0	厚さ 0.5	孔1ヶ
SI－05								
79－1	414 422	埋2層 床付近	土師器	高坏	口径 －	底径 －	器高 (6.9)	外面脚部d（ヘラ）、内面脚部c（ヘラ）　B_3
2	764	pit 3 上面	土師器	ミニチュア	6.15	4.8	4.4	外面d（ヘラ）、内面c（ヘラ）、鉢形
3	422 153	床付近 埋土	土師器	壺	－	－	－	外面体部d、内面体部c、赤色B　小型B？
4	422 136	床付近 天地返し	土師器	鉢？	－	－	－	外面口縁部b、体部d、内面口縁・体部c
5	422	床付近	土師器	壺？	14.0	－	(7.0)	外面口縁部b→c、内面口縁部a→c（ヘラ）、b、白針
SI－06								
80－1	717	埋土	土師器	坏	口径 11.2	底径 3.8	器高 5.0	外面口縁部b、体部e（ヘラ）、内面口縁部b→d（ヘラ）、体部d（ヘラ）、白針　B
2	153	土坑埋土	土師器	坏	15.6	－	(3.5)	外面口縁部b、内面口縁部b、赤色B、白針　D
3	717	埋土	土師器	坏	－	－	－	外面口縁部b、体部e、内面口縁部b、体部c、赤色B　A_2
4	717	埋土	土師器	坏	－	－	－	外面口縁部b、体部c？、内面口縁部b、体部c、無彩、白針　A_2
5	939 717	土坑 埋土	土師器	坏	13.4	－	(5.2)	外面口縁部b、体部c→d（ヘラ）、e（ヘラ）、内面口縁部b、体部c、無彩　B
6	997 717	床直 埋土	土師器	壺？	15.8	－	(7.3)	外面口縁部b、体部c（ヘラ）、e→d、内面口縁部b、体部e→c
7	750 745 761	床直	土師器	壺	－	－	(23.5)	外面体部e（ヘラ）→d（ヘラ）、内面体部c（ヘラ）、白針　大型A
8	775・776 757・746	床直 NO. 13 土坑埋土	土師器	甕 （広口）	36.4	－	(13.5)	外面口縁部b、体部c（ヘラ）→c、内面口縁部b、体部c（ヘラ）、白針　大型C
SI－07								
81－1	567	床直	土師器	坏	口径 －	底径 －	器高 －	外面口縁部b、体部a？→d、内面口縁部d、体部c→d、無彩　A_3
2	768 728	土坑 埋1層	土師器	坏	－	－	－	外面口縁部b、体部e→d、内面口縁部b、体部c→d、赤色B　B
3	730	土坑埋土	土師器	坏	－	－	－	外面口縁部b、体部e→d、内面口縁部b、体部c→d、赤色B、白針　A_3
4	729	土坑 埋土下部	土師器	坏	－	－	－	外面口縁部b、体部d、内面口縁部b、体部c？（縦位）、無彩、白針　A_2
5	730	土坑埋土	土師器	坏	15.2	－	5.3	外面口縁部b→d、体部e→d、内面口縁部b→d、体部c→d、赤色B　D
6	807	ピット1	土師器	埦	13.9	6.6	8.3	外面口縁部b、体部d？、内面口縁部b、体部c→d、底部付近c（ヘラ）、凹底、NO. 12
7	700	床直	土師器	高坏	(20.1)	－	(6.6)	外面口縁部b、底部d、内面口縁部b、体部d、無彩、白針
8	567	床直	土師器	高坏	－	－	(8.7)	外面脚部、裾部d、内面裾部a、外面剝落著しい、白針　B_2
9	840	ピット1	土師器	高坏	－	－	(9.9)	外面脚部e→d、内面柱状部オサエ（工具）、脚部c、黒色をおびる、白針、NO. 3　B_2
10	290	埋1層	石製品	円板	長さ 2.4	幅 2.45	厚さ 0.3	孔2ヶ

15. 第17次出土遺物観察表(3)

(単位 cm)

図版No.	遺物No.	層位	種類	器種	法量			特徴
SI－09（古墳）								
83－1	911	貯蔵穴	土師器	坏	口径 (10.8)	底径 －	器高 4.6	外面口縁部b、体部d、内面磨耗の為不明、無彩、白針 A_3
2	905	埋土	土師器	坏？	－	－	－	外面口縁部b→d、体部e、内面口縁部b D？
3	904	床直	土師器	坏	－	－	－	外面体部、内面体部磨耗、無彩 D
4	911	埋土	土師器	坏	－	－	－	外面口縁部b→d、内面口縁部b→d？、無彩、白針 B
83－5	979	pit 2 埋土	土師器	壺（小）	口径 6.8	底径 3.3	器高 8.2	外面口縁部c（ヘラ）→b、体部a→c（ヘラ）→d、体下部c（ヘラ）、内面口縁部c（ヘラ）→b、体部c（ヘラ）?、白針 小型A
6	537	床直	土師器	甕？	15.5	－	(6.9)	外面口縁部a→b→d、体部不明、内面不明、内外面磨耗が著しい
SI－10								
85－1	494	埋1層	土師器	坏	口径 －	底径 －	器高 －	外面口縁部b、体部d、内面口縁部b、体部c→d、赤色A、白針 A_2
2	501	埋2層	土師器	坏	－	－	－	外面口縁部b、内面口縁部b→c、無彩、白針 A_1
3	992	床直	土師器	坏	15.0	－	7.4	外面口縁部b、体部e（ヘラ）→d、内面口縁部b、体部c（ヘラ）、白針、NO.6 A_1
4	991	貯蔵穴上面	土師器	坏	13.8	4.6	6.5	外面口縁部b→d、体部e、c（ヘラ）→d、内面口縁部b→d、体部c（ヘラ）→放射状d、無彩、白針、NO.2 E_1
5	1031	貯蔵穴壁面	土師器	高坏	21.4	－	7.9	外面口縁部b、体部d、内面口縁部b→c→d、体部c→d、NO.1
6	1013	床直	土師器	甕？	－	6.5	(7.2)	外面体部c→d、内面体部c（ヘラ）→d、NO.5
7	994 1020	床直 カマド内	土師器	甕	16.6	－	(8.2)	外面口縁部b、体部c、内面口縁部b、体部c（ヘラ）、白針、NO.3、10 中型B？
8	1036	－	土師器	甕	16.9	6.0	25.6	外面口縁部a→b、体部c→d、内面口縁部b、体部c（ヘラ）、底部付近e 中型A
SI－11								
87－1	659	埋土	土師器	坏	口径 －	底径 －	器高 －	外面口縁部b、体部e、内面口縁部d、体部c→d、赤色A A_2
2	659	埋土	土師器	甕	－	－	－	外面体部剝落、内面体部c？
3	896	埋土 1号土坑	土師器	坏	－	－	－	外面口縁部b、体部c、内面口縁部b、体部c、赤色B、白針 B
4	741	床直	土師器	坏	－	－	－	外面口縁部b、体部d、内面口縁部b、体部d、無彩 A_3
5	927	床直	土師器	坏	－	－	－	外面口縁部b、体部d、内面口縁部b、体部d、無彩 A_2
6	643 925	床直	土師器	坏	14.1	－	6.2	外面口縁部b→d、体部e→d、内面口縁部b？、体部d、無彩、白針 B
7	878 957	床直 貯蔵穴	土師器	坏	(14.6)	－	(4.7)	外面口縁部b、体部e→d、内面口縁部b、体部c→d、無彩、白針、NO.3、15 B
8	957	貯蔵穴	土師器	坏	15.8	－	6.4	外面口縁部b、体部e、内面磨耗、無彩、白針、NO.15 A_3
9	959	貯蔵穴	土師器	坏	(15.0)	－	7.15	外面口縁部b、体部e、内面磨耗、無彩、白針、NO.16 A_2
10	963	貯蔵穴	土師器	坏	13.0	－	5.4	外面口縁部b→d、体部a、内面口縁部b、体部d、無彩、白針、NO.20 A_3
11	877	カマド内	土師器	鉢	14.0	－	11.1	外面口縁部b、体部c（ヘラ）、内面口縁部b、体部c（ヘラ）、白針、NO.2
12	942	床直 貯蔵穴	土師器	壺	17.0	－	5.4	外面口縁部b、下部c（ヘラ）→e、内面口縁部b、下部b→d、複合口縁、白針、NO.1 大型B
13	943	床直	土師器	甑	25.4	7.4	26.4	外面口縁部b、体部a→d、内面口縁部b、体部c、a、底部付近d→e 大型B
14	719 951	カマド底 貯蔵穴	土師器	甕？	－	(8.0)	20.0	外面体部c→d、内面体部c
15	1096	床直	石製品	臼玉	外径 0.45	内径 0.2	厚さ 0.4	孔1ヶ（S－1）
SI－12								
89－1	367	埋土	土師器	坏	口径 13.7	底径 －	器高 5.2	外面口縁部b→d、体部e→d、内面口縁部b、体部c→d、赤色B、白針 B
2	368	埋土	土師器	坏	13.5	－	5.4	外面口縁部b→d、体部e→d、内面口縁部b、体部c→d、赤色B、白針 B
3	680	埋土	土師器	坏	(15.0)	－	4.45	外面口縁部d、体部e→d、内面口縁部d、体部d、無彩、白針小）B B
4	566	埋土	土師器	坏	－	－	－	外面口縁部b、内面体部c→d？、無彩 A_1

16. 第17次出土遺物観察表(4)

（単位 cm）

図版No.	遺物No.	層位	種類	器種	法量			特徴
89－5	676	埋土	土師器	壺	10.2	－	8.4	外面口縁部b、体部上半a→c（ヘラ）、下半e→c（ヘラ）→d、内面口縁部b、体部c（ヘラ）、白針、（SE－01と接合） 小型D
6	366	埋土	土師器	高坏	－	13.8	(7.6)	外面脚部b→d、内面脚部c（ヘラ）、裾端部b、無彩、白針 A_2
7	676	床直	土師器	甑	－	(5.2)	(4.0)	磨耗の為調整不明、単孔、白針 小型A？
8	566 806	埋土 貯蔵穴	土師器	壺	－	－	－	外面口縁部e→c、内面口縁部d？、複合口縁、SI－04貯蔵穴と接合 大型B
9	346	埋土	土師器	壺	15.6	8.5	31.4	外面口縁部b→c→d、体部上部a→d、下部c、内面口縁部b→c、体部上部a、下部c、白針 大型 A_1
90－1	670	埋土下部 柱穴埋土	土師器	壺	16.8	7.2	29.2	外面口縁部b、体部上部c（ヘラ）、下部e（ヘラ）、内面口縁部b、下部c（ヘラ）、体部c（ヘラ）、白針 大型 A_1
2	424	埋土	土師器	甕	14.6	－	(9.5)	外面口縁部b→d、体部d、内面口縁部b→d、体部e→c、白針 中型A
3	680	埋土	土師器	甕	20.0	－	(18.8)	外面口縁部a→b、体部上半a→d、下半e→c→d、内面口縁部a→b、体部c（ヘラ）、白針 中型A
SI－12（古墳）								
90－4	341	埋土	石製品	敲石	長さ 6.5	幅 5.75	厚さ 4.95	重量244.5g、敲打痕二ヶ所
5	566	埋土	金属製品	刃子	長さ (2.6)	刃部幅 1.1	厚さ 0.29	鉄、茎部幅0.95、茎部厚さ0.2、区有無不明
91－1	794	掘り方埋土	土師器	高坏	口径 18.0	－	器高 (5.45)	外面口縁部b、体部c（ヘラ）、内面口縁部b、体部c（ヘラ）、底部c→d、白針
2	488	埋1層	土師器	高坏	－	(14.2)	(8.45)	外面脚部d、裾部b、内面脚部c→シボリメ、脚部b、赤色B、白針、（SE－01と接合） A_2
3	512	埋13層	土師器	高坏	－	－	(9.5)	外面坏部a→d、柱状部d、内面柱状部b、e、赤色B、白針 A_2
4	794 341	埋8層	土師器	甑	22.5	－	(14.2)	外面口縁部指オサエ、体部c（ヘラ）→d、内面口縁部c（ヘラ）、体部c（ヘラ）、鉢形、複合口縁、赤色B A_1
SI－14								
92－1	1068	埋土	土師器	高坏	－	－	器高 (4.5)	外面体部a→d、下部a→c（ヘラ）、内面体部d、赤色A？、白針
2	830	床直	土師器	壺（小）	口径 9.3	－	(4.2)	外面口縁部b→d、内面口縁部b→c（ヘラ）、片口（指つまみ出し）、白針
3	1068	埋土	須恵器	器台	－	－	－	脚部、凸帯、波状文2段、TK208～23頃
SI-16								
93－1	699	床直	土師器	高坏	(18.8)	－	(4.9)	外面口縁部b→d、体部d、内面口縁部b→d、体部c（ヘラ）→d、白針、NO.3
SI－17								
94－1	1040	埋土	土師器	坏	－	－	－	外面口縁部b、体部e→d、内面口縁部b、体部e→d？、無彩、白針 B
2	1065	第一土坑 埋土	土師器	坏	－	－	－	外面口縁部b、体部d？内面口縁部b、体部d？、無彩 A_2
3	1065	第一土坑 埋土	土師器	高坏	－	－	(9.25)	外面脚部d、内面脚部c（ヘラ） B_2
4	1054	第一土坑 埋土	土師器	高坏	－	－	(6.8)	外面脚部d、内面脚部c（ヘラ）、NO.9 B_2 ？
5	1060	第一土坑 埋土	土師器	高坏	－	－	(8.2)	外面脚部d、c、内面脚部c、NO.8 B_2
6	1056	床	土師器	甕	17.8	－	(8.0)	外面口縁部b、体部c（ヘラ）→d（ヘラ）、内面口縁部b、体部c（ヘラ）、白針、NO.1
SI－18								
96－1	1034	埋土	土師器	坏	－	－	－	外面口縁部b、体部e、内面口縁・体部d、黒色処理、白針 E_1 ？
2	1037	埋土	土師器	甕（小）	口径 13.6	底径 4.4	器高 12.3	外面口縁部a→b、体部a、体下部c（ヘラ）、内面口縁部a→b、体部c？、内面上半に炭化物、白針、NO.4 小型C
3	1038	埋土	土師器	甕	－	(7.0)	(6.1)	外面体部c（ヘラ）→d、内面体部c（ヘラ）、底部木葉痕、白針
4	696	埋土下部	土師器	甕	(19.6)	－	(11.5)	外面口縁部b→c（ヘラ）、体部a→c（ヘラ）、体下部e→c（ヘラ）、内面口縁部b、体部c→a（一部）、内面体部に木葉痕、白針 中型C
SD－09								
99－1	450	埋1層	土師器	坏	－	－	－	外面口縁部d、内面口縁部c、無彩 D？
2	796	埋1層	土師器	坏	－	－	－	外面口縁部b、内面口縁部b、体部c、赤色B、白針 A_2
3	515 685	埋土	土師器	坏	(15.2)	－	5.0	外面口縁部b、体部d、内面口縁部b、体部c、無彩、細沈線、白針 A_1
4	868	埋5層	土師器	坏	－	－	－	外面口縁部b、体部d、内面口縁部b、体部d、白針 B
5	521	底面	土師器	坏	－	－	－	外面口縁部b、内面口縁部d、黒色処理、白針 E？

17. 第17次出土遺物観察表(5)

(単位 cm)

図版No.	遺物No.	層位	種類	器種	法量			特徴
99－6	511	埋土	土師器	高坏	－	10.8	3.4	外面体部c→d、内面体部c（ヘラ）→d、底部回転c（ヘラ）、白針
7	513	埋土	土師器	高坏	－	(10.0)	(4.7)	外面脚部d、裾部磨耗剝落、坏部底面d、内面裾部d、無彩、白針 C
8	450 558	埋土	土師器	甕（小）	－	7.4	(14.6)	外面体部c（ヘラ）d、内面体部c（ヘラ）、白針 小型B
9	560	埋3層	土師器	甕	14.5	7.0	29.7	外面口縁部a→b→c、体部a、内面口縁部c→b、体部c、a、木葉痕、白針 中型B
10	866	埋3層	土師器	甑	24.8	孔径 10.0	32.5	外面口縁部a→b、体部c（ヘラ）→a、内面口縁部a→b、体部a、c（ヘラ）、白針 大型B
SD－10								
100－1	829 1077	埋土	土師器	坏	(11.8)	2.0	7.8	外面口縁部b、底部e→d、内面口縁部b、体部c（ヘラ）、d、赤色B、白針 B
2	495	埋2層	土師器	坏	－	－	－	外面口縁部b、体部d、内面体部d、無彩 A_2
3	1077	埋土下部	土師器	坏	－	－	－	外面・内面磨耗、赤色B
4	1077	埋土下部	土師器	坏	－	－	－	外面口縁部b、体部d？、内面口縁部、体部d、内黒、白針 E
5	508	埋5層	土師器	坏	－	－	－	外面口縁部b、内面体部d、黒色処理 E
6	862	埋5層	土師器	坏	口径 －	底径 －	器高 －	外面口縁部b、内面口縁部b、体部c、無彩 D
7	508	埋5層	土師器	坏	－	－	－	外面口縁部b、体部e、内面口縁部b、体部c、無彩 A_2
8	825	埋5層	土師器	坏	－	－	－	外面口縁部b、体部d、内面口縁部b、体部c、無彩 A_1
9	825	埋5層	土師器	坏	14.5	－	5.0	外面口縁部b、底部e、内面口縁部・体部d、黒色処理、白針 E_2
10	829 833	埋5層	土師器	坏	13.2	－	5.3	外面口縁部b→d、体部e→d、内面口縁部b→d、体部d、赤色B、白針 D
11	508 825	埋5層	土師器	坏	14.6	－	6.3	外面口縁部b→d、体部e、内面口縁部・体部d、黒色処理、白針 C
12	－	埋5層	土師器	坏	14.2	－	6.9	外面口縁部b、体部e、内面口縁部b→d、体部d、黒色処理 C
13	508 829	埋土5層	土師器	甕（小）	－	5.3	(7.3)	外面体部a→c、内面体部c（ヘラ）→d、白針
14	483	埋1層	須恵器	壺（小）	－	－	－	外面凸帯波状文、内面ロクロ、5c（TK208併行か）
15	852	埋5層	石製品	円板	長さ 2.1	幅 2.25	厚さ 0.32	孔2ヶ
SD－12								
102－1	933	埋1層	土師器	坏	口径 －	底径 －	器高 －	外面口縁部b、体部d、内面口縁部b、体部放射状d、無彩 B
2	510	埋3層	土師器	坏	－	－	－	外面口縁部b→d、内面口縁部b→d（横）、体部放射状d、無彩、白針 D
3	510	埋3層	土師器	坏	－	－	－	外面口縁部b、体部d？、内面口縁部b、体部d、無彩 SK26と接合 A_2
4	645	底面	土師器	坏	－	－	－	外面口縁部b、体部c、内面口縁部b、体部c→d、無彩
SK－26								
102－5	742	－	土師器	ミニチュア	4.5	3.8	3.0	外面磨耗、内面c→指ナデ、鉢形、白針、NO.1
SK－01（中世・近世）								
115－1	154	埋1層	石製品	勾玉	長さ 1.6	幅 0.6	厚さ 0.5	孔1ヶ、滑石製（古墳時代）
SK－03								
115－2	532	埋土	土師質土器	小皿	口径 －	底径 6.9	器高 (1.6)	A、ロクロ、見込みナデ、回転糸切り？、板状圧痕、中世
3	398 524	埋土	瓦	丸瓦	長さ (12.0)	幅 (7.2)	厚さ (1.8)	燻瓦、近世
SK－10								
115－4	1074	埋土	土師質土器	小皿	口径 －	底径 5.8	器高 (1.4)	A、ロクロ、回転糸切り、内面油煙付着（燈明皿）
5	1074	埋土	須恵器	二重●？	－	－	－	波状文（2段）SK－11と同一個体か（古墳時代）
6	401	埋2層	瓦	平瓦	長さ (8.3)	幅 (6.8)	厚さ (1.4)	凹面布目（細）、凸面縄目→ナデ消し、焼成不良薄手

18. 第17次出土遺物観察表(6)

（単位 cm）

図版No.	遺物No.	層位	種類	器種	法量			特徴
115－7	1076	埋土	瓦	平瓦	(20.1)	(19.8)	(2.6)	凹面布目、凸面縄目（太）、SE－01と接合
SK－11								
115－8	306	埋土上部	瓦	平瓦	長さ (7.0)	幅 (8.2)	厚さ (2.2)	凹面布目、凸面縄目（太）、模骨痕
9	306	埋土上部	須恵器	壺？	－	－	－	外面ロクロ、波状文、内面ロクロ、5c?
10	452	埋10層	須恵器	二重壺？	－	－	－	外面ロクロ、沈線、内面ロクロ、円孔透しあり、TK208～23併行か
SK－12								
115－11	415	埋1層	土師質土器	小皿	口径 7.4	底径 －	器高 (1.15)	B（粉質）、ロクロ、見込みナデ、厚手
12	414	埋2層	土師質土器	小皿	9.4	(3.7)	(2.4)	A、ロクロ、回転糸切り、厚手
13	414	埋2層	土師質土器	皿	－	7.8	(3.3)	B、ロクロ、見込みナデ、板状圧痕、厚手
14	415	埋1層	金属製品	釘？	長さ 7.65	幅 －	厚さ －	鉄
15	1091	埋土	金属製品	古銭	－	－	－	皇宋通宝、宝元2(1039)年、北宋、真書、重さ2.0g
SK－13								
116－1	503	埋土	須恵器	器台	－	－	－	外面波状文（2段）、内面縦位ナデ、脚部、5c
SK－21（中世）								
116－2	660	埋2下部	金属製品	鉄鏃？	長さ (6.5)	幅 (1.05)	厚さ －	鉄
3	660	埋2下部	金属製品	不明	9.65	1.15	上0.95 下0.3	鉄（工具？）
SK－23								
116－4	773	底面	土師質土器	埦	口径 －	底径 5.8	器高 (3.1)	D、外面C（ヘラ）→d、内面C（ヘラ）→d、削り出し高台？、外底面ミガキ
SE－01								
110－1	695	15層	中世陶器	甕？	－	－	－	格子押印、内面刷毛目状のナデ、常滑
2	649	16層	中世陶器	壺	34.8	－	(3.9)	内外面ロクロナデ、灰被り、常滑、12c末～13c初
3	384 539	埋7層	中世（中国）	碗	－	－	－	青磁、櫛描蓮弁文、内面花文？、龍泉窯系、12c後半以後
4	557	本体7層	土師質土器	小皿	－	－	－	D（灰白色）、口縁部横ナデ、厚手、手捏ね、
5	648	本体15層	土師質土器	皿	10.6	－	3.1	D（灰白色）、口縁部横ナデ、厚手、手捏ね、
6	649	本体16層	土師質土器	小皿	－	6.8	(0.9)	D、ロクロ、回転糸切り
7	646	掘り方南部8層	土師質土器	埦？	－	7.4	(3.0)	A、ロクロ、回転糸切り
8	383	本体埋土中部	須恵器	甕	－	－	－	凸帯、波状文、5c、TK208以前か
9	648	15層	石製品	円板	長さ 1.9	幅 1.95	厚さ 0.4	孔2ヶ
SD－01								
120－1	150	II区 埋3・4c層	中世陶器	壺	口径 －	底径 －	器高 －	平行押印、渥美、13c?
2	149	II区 埋3・4c層	土師質土器	火鉢	25.6	－	(6.4)	沈線2条、内面炭化物付着、在地？
3	22	II区 埋土	中世（中国）	碗？	－	－	－	青磁、文様？、透明な淡緑色、端反、龍泉窯系、14c後半以後
4	162 108 45	VI区 埋1層	近世陶器	天目茶碗	－	－	(5.1)	長石釉、貫入、段付白天目、美濃、17c第2四半期
5	31 32 33	IV区 埋1層	近世陶器	折縁皿	14.4	－	(2.1)	銅緑釉、貫入、口縁部内面沈線、美濃、総織部、17c前
6	9	II区 埋1層	金属製品	鉄鉋玉	直径 1.25	－	－	鉛、重さ8.5g
7	353	IV区 埋2層	中世陶器	香炉	胴部 14.4	－	(4.0)	灰釉、淡緑灰色、貫入、斜格子文、瀬戸、15c前半
8	39	IV区 埋土上部	中世陶器	甕？	－	－	－	格子状押印、内外ナデ、常滑、小型か
9	33	IV区 埋土上部	近世（中国）	碗	－	高台径 6.0	(2.8)	染付、見込み文様（不明）、畳付露胎、景徳鎮窯系、16c後半以後

19. 第17次出土遺物観察表(7)

(単位 cm)

図版No.	遺物No.	層位	種類	器種	法量			特徴
120－10	316	Ⅳ区 埋1層	中世(中国)	皿	口径 12.5	－	(1.8)	白磁？、無文、淡オリーブ灰色、若干貫入、13c か
11	285	Ⅳ区 埋1層	中世陶器	甕？	－	－	－	桜花押印、在地
12	311	Ⅳ区 埋1層	土師質土器	小皿	10.4	－	(1.8)	D、ロクロ？、内外磨耗　G－9区
13	328	Ⅳ区 埋5層	土師質土器	小皿	10.4	－	(1.6)	A？、ロクロ、内反り口縁　F－9区
14	43	Ⅳ区 埋1層	土製品	鳩坩	高さ (2.75)	－	厚さ 1.4	内面に金粒？付着、(金細工用か)
15	139	Ⅴ区 埋2層	近世陶器	碗	口径 －	底径 6.0	器高 (2.15)	長石釉、高台部露胎、内底面に目あと、志野、17c 前半以前
16	52	Ⅴ区 埋1層	近世陶器	皿	－	7.1	(18.5)	長石釉、焼成不良、貼付輪高台、内底面に目あと、志野、17c 前半以前
17	322	Ⅴ区 南壁面	土師質土器	小皿	－	7.0	(1.2)	A、ロクロ、回転糸切り(幅広)、厚手、F－9区
18	139	Ⅴ区 埋2層	近世陶器	丸皿	13.6	8.2	(2.5)	長石釉、内面鉄絵、界線、美濃、志野織部、17c 前半
19	73	Ⅴ区 埋2層	近世陶器	向付	－	－	3.4	銅緑釉、流し掛け、鉄絵、美濃、青織部、17c 前半
20	172	Ⅴ区 埋3上部	中世陶器	壺	－	－	－	外面押印、刷毛目、内面刷毛目、ナデ、渥美、13c?
21	142	Ⅴ区 埋2層	近世(中国)	皿	－	－	(2.7)	染付、内外面に界線、景徳鎮窯系、16c 後～17c 前
22	170	Ⅴ区 埋3上部	中世(中国)	碗	16.5	－	(3.5)	青磁、無文、緑灰色、貫入、端反口縁、龍泉窯系、14c
23	168	Ⅴ区 埋2下部	中世陶器	甕	－	－	－	桜花押印(8弁か)、在地産
24	74	Ⅴ区 埋2層	近世陶器	擂鉢	－	－	(8.2)	瓦質、内外ナデ、筋目7本、白針、在地、17c 前半
25	74 66	Ⅴ区 埋2上面	近世陶器	擂鉢	－	－	(4.9)	瓦質、在地、17c 前半、24と同一個体か
SD－01 (中世)								
120－26	169	Ⅴ区 埋3層	土師質土器	小皿	口径 －	底径 7.0	器高 (1.2)	A、ロクロ、回転糸切り、内外磨耗、F－5区
121－1	101	Ⅴ区 埋2層	石製品	茶臼(上)	直径 18.0	高さ 9.9	ふくみ 2.0	供給口、3.5～3.9、芯棒孔2ヶ、欠損
2	187	Ⅴ区 底付近	石製品	砥石	長さ (6.7)	幅 5.6	厚さ 2.7	欠損品、四面使用
3	77 87	Ⅱ区 埋1層	土師器	坏	口径 16.4	底径 4.4	器高 6.1	外面口縁部b→d(ヘラ)、体部e(ヘラ)→d(ヘラ)、内面口縁部b→d(ヘラ)　E,
4	18	Ⅵ区 埋1層	近世陶器	甕？	33.0	－	(2.6)	素焼、焼成良好、産地不明、17c 前
5	105	Ⅴ区 埋2層	須恵器	甕	－	－	－	外面平行叩き、内面円弧、古墳後期？
6	39	Ⅳ区 埋土上部	須恵器	高坏	－	－	－	外面ロクロ、内面ロクロ、窓なし、古墳後期以後？
7	168	Ⅴ区 埋2下部	須恵器	壺(小)	－	－	－	凸帯波状文、内面ロクロ、灰被り、TK208 併行？
8	161	Ⅴ区 埋2下部	須恵器	長頸瓶	－	(9.7)	(2.3)	外面自然釉、内面ロクロ、湖西産？、7c 末～8c 前
9	307	Ⅳ区 埋1層	須恵器	甕	－	－	－	外面平行叩き、内面ナデ、布目痕、奈良～平安？
10	105	Ⅴ区 埋2層	須恵器	高台付坏	－	高台径 8.5	(1.6)	外面ロクロナデ、内面ロクロナデ、搬入品？
11	147	Ⅱ区 埋1層	瓦	平瓦	長さ (7.6)	幅 (5.4)	厚さ (1.7)	凹面布目(粗)、凸面縄目・磨面あり、砥石転用か
122－1	83	Ⅳ区 埋1層	金属製品	銅鏡	直径 6.5	－	厚さ 0.14～0.3	圏線、鋸歯文？、乳1ヶ、円形鈕、(捩文鏡？)
2	345	Ⅳ区 埋2層	石製品	石鏃	長さ 1.75	1.0	0.4	重量 0.5 g
3	161	Ⅴ区 埋2下部	石製品	石鏃	(1.95)	(0.85)	0.4	重量 0.5 g
SD－02								
124－1	639	埋土	土師質土器	小皿	口径 －	低径 －	器高 －	D、回転糸切り、厚手
2	1069	埋1層	土師質土器	小皿	－	－	－	D、ロクロ、厚手、3と同一個体？
3	205	埋2層	土師質土器	小皿	－	7.0	(1.6)	D、ロクロ、見込みナデ、回転糸切り、厚手、2と同一個体？
4	206	埋2層	土師質土器	小皿	口径 －	底径 5.3	器高 (1.2)	A、ロクロ、見込みナデ、回転糸切り、内外油煙付着
5	209	埋2層	土師質土器	小皿	－	－	－	A、手捏ね、口縁部横ナデ、内外油煙付着

20. 第17次出土遺物観察表(8)

(単位 cm)

図版No.	遺物No.	層位	種類	器種	法量			特徴
124－6	211	埋2層下部	土師質土器	小皿	7.4	4.9	1.3	A、ロクロ、見込みナデ、回転糸切り、板状圧痕
7	682	埋2層	土師質土器	小皿	8.1	6.4	1.6	A、ロクロ、見込みナデ、回転糸切り、板状圧痕
8	463	埋2a層	土師質土器	小皿	－	7.2	(1.1)	D、ロクロ、回転糸切り？
9	674	埋1層	瓦質土器	風炉	31.5	－	(5.4)	スタンプ文（口縁）、内外ロクロナデ、体部内面ナデ、16c
10	697	埋1層	瓦質土器	風炉	－	－	－	窓部破片、外面銀化、16c
11	209	埋2層	瓦質土器	風炉？	－	－	－	凸帯、押印（雷文）、外面銀化、16c
12	245 251	埋土	土師器	坏	(15.0)	－	6.4	外面口縁部b→d、体部d、内面口縁部b→d、体部d、無彩、白針 E_1
13	225 214 220	埋2、3層	土師器	坏	13.7	－	(6.4)	外面口縁部d、体部e（ヘラ）→d、内面口縁部b？、体部d、無彩 B
14	1070	埋1層	須恵器	無蓋高坏	－	－	－	外面凸帯・波状文、内面ロクロ、TK23併行か
15	246	埋3層	須恵器	甕	－	－	－	平行叩き、円弧→ナデ消し、叩き目→ケズリ、5c?
16	465	2c層	須恵器	甕	－	－	(6.1)	外面ロクロ→刷毛目→横ナデ・刷毛目、頸部径33cm、古墳後期？
17	242	埋2層	瓦	平瓦	長さ (8.7)	幅 (6.6)	厚さ (2.4)	縄目布目（細）凸面＋側面、磨面あり、砥石転用か
18	224	西壁際	瓦	軒丸瓦	(8.4)	－	(3.5)	蓮花文（SD08の可能性もある）
125－1	218	埋3層	中世陶器	鉢	口径 －	底径 13.3	器高 (4.6)	外面体部ケズリ、内面磨耗、産地不明（常滑？）、13c
2	666	埋1層	中国磁器	皿	－	4.55	(0.9)	青磁？、オリーブ灰色、下半露胎、体部・底部、回転ヘラケズリ、13c
3	658	埋1層	中国磁器	碗	14.4	－	(3.0)	青磁、不透明な緑灰色、蓮弁文、貫入、端反口縁、龍泉窯系、13c末～14c前
4	203	埋1層	中国磁器	碗	－	－	(4.1)	青磁、半透明な淡緑色（厚い）、鎬蓮弁文、龍泉窯系、13c末～14c前
5	196	埋1層	中国磁器	皿	－	高台径 7.8	(2.1)	染付、見込「寿」?、若干貫入、畳付～高台内露胎、砂敷、16c後半？
6	205	埋2層	中世陶器	鉢	28.2	－	(5.9)	内外ロクロ、在地(1)
7	219	埋2層	中世陶器	鉢	－	－	－	ロクロ、在地
SD－02（中世）								
125－8	336	埋3層	中世陶器	鉢	口径 －	底径 －	器高 －	内外ロクロ調整、在地
9	211	埋2下部	中世陶器	鉢	29.4	－	(4.5)	内外ロクロ調整、在地、14c?
10	677	埋2層	中世陶器	壺？	－	－	－	外面自然釉、内面指紋、鉄分の吹き出し、在地（白石窯）、13～14c
11	737	埋2層	中世陶器	甕	－	－	－	押印、在地
12	211	埋2下部	中世陶器	甕	－	－	－	外面縄圧痕、内面ナデ、在地
126－1	224	西壁際	瓦	平瓦	長さ (13.3)	幅 (10.1)	厚さ (2.8)	縄目、布目（粗）、糸切り痕（SD08の可能性もある）
2	227	埋4層	中世陶器	鉢	－	－	－	内面磨耗、外面ケズリ、在地(1)
3	213	埋4層	中世陶器	甕？	－	－	－	口唇部・側面に磨面（砥石転用？）在地、13c
4	227	埋4層	土師質土器	小皿	－	7.0	(0.7)	A、ロクロ調整？、回転糸切り？、内外磨耗
5	408	コーナー土坑部	石製品	円板	長さ 5.5	幅 2.5	厚さ 0.5	孔2ヶ、変形
6	21	埋1層	金属製品	釘	(5.9)	0.45	0.45	鉄、(折釘)
7	21	埋1層	金属製品	刃子？	(4.5)	1.1	0.3	鉄、茎
8	1069	埋1、2層	金属製品	不明	(6.7)	(1.35)	7.15	鉄、(折釘？)
9	209	埋2層	金属製品	釘	5.2	0.7	0.6	鉄、(折釘)
SD－04								
128－1	174	H－4区埋土	土師質土器	皿	口径 －	底径 7.4	器高 (1.1)	A、ロクロ、回転糸切り、板状圧痕
2	174	H－4区埋土	土師質土器	皿	14.6	－	(2.15)	A、ロクロ

21. 第17次出土遺物観察表(9)

(単位 cm)

図版No.	遺物No.	層位	種類	器種	法量			特徴
128－3	174	H－4区 埋土	土師器	坏	(14.2)	(5.2)	(5.75)	外面口縁部b、体部c、内面口縁部b、体部d、無彩、白針 D
SD－06								
128－4	166	埋土	土師器	甕	口径 15.6	底径 －	器高 (16.7)	外面口縁部b、体部c（ヘラ）→d、内面口縁部b、体部c（ヘラ）→d、白針
5	236	埋1層	中世陶器	甕？	－	－	－	桜花押印、外面指ナデ？、内面ヘラナデ、在地
6	506	埋5層	中世陶器	甕	－	－	－	格子押印、在地、7と同一個体
7	506	埋5層	中世陶器	甕	－	－	－	格子押印、在地、6と同一個体
8	489	埋1層	石製品	？	長さ 2.55	幅 0.5	厚さ 0.51	棒状石製品、表面面取り
SD-07								
128－11	640	埋1層	土師質土器	皿？	口径 －	底径 －	器高 (2.3)	B、調整不明
12	642	埋4層	土師質土器	小皿	－	5.0	(1.7)	D、ロクロ、回転糸切り(幅広)、厚手
SD－08								
128－13	668	埋土	須恵器	二重蓋？	－	－	－	5c
14	668 84	埋土中部	須恵器	長頸瓶	－	9.0	(2.5)	外面ロクロ、内面ロクロ、白針、8c?
SD－11								
128－9	522	埋土	土師器	坏	(14.3)	－	(6.1)	外面口縁部b、体部e、内面口縁部b、体部d、白針 A_1
10	518	埋土	土師質土器	皿	－	8.0	(1.6)	B、ロクロ、見込みナデ、回転糸切り？、板状圧痕
SD－16								
129－7	1011	埋4層	石製品	錐	長さ (1.9)	幅 1.5	厚さ 0.4	重量0.75g、刃部欠損
その他の出土遺物								
129－1	1097	SD－02 埋1層	中世陶器	鳶口壺？	口径 －	底径 －	器高 －	外面刷毛目、内面ナデ、常滑、13c
2	109	3トレンチ 表土	中国磁器	碗	13.0	－	(13.2)	青磁、透明な淡緑色、錦蓮弁文、13c末～14c前
3	627	G－16区 pit129	石製品	砥石	長さ (7.1)	幅 (2.8)	厚さ (1.8)	欠損品、一面使用？
4	577	K－16区 pit14	石製品	管玉	1.6	外径 0.65	－	孔径約0.25、へき玉製？
5	4	V～VI区 南壁表土	石製品	勾玉	長さ 2.45	幅 1.0	厚さ 0.7	孔1ヶ
6	89	VII区 II層上面	石製品	剣形	4.15	1.5	0.5	孔1ヶ、稜なし、擦切痕、模造品
縄文土器								
図版No.	遺物No.	遺構名	層位	器種	文様			特徴
130－1	234	SD－06	埋3層	深鉢	－		方形区画文	中期末～後期初
弥生土器								
130－2	721	SI－03	最下層	壺	－		沈線文(三本一描)	十三塚式
3	205	SI－02	埋2層	鉢？	縄文		変形工字文	桝形囲式、小波状口縁、内面沈線文
4	923	I区 pit 150	埋土	壺 (広口？)	－		平行沈線文	青木畑式～円田式
5	424	SI－12	埋1層	－	縄文		－	木葉痕（底部）
6	247	SK－06	埋土	－	－		平行沈線文	青木畑式～山王III層式併行
7	39	SD－01	埋土上部	高坏？	－		平行沈線文(太)	青木畑式～山王III層式併行、脚？
8	450	SD－09	埋土	高坏	－		沈線文(二本一描)	十三塚式
9	794	SE－01	8層	鉢？	－		平行沈線文(太)	青木畑式～山王III層式

22．第17次出土遺物観察表(10)

（単位 cm）

図版No.	遺物No.	遺構名	層位	器種	文様		特徴
130－10	226	SI－01	埋1層	高坏	－	－	桝形囲式以前
11	210	SI－01	埋1層	鉢	偽縄文	変形エ字文	桝形囲式
12	210	SI－01	埋1層	－	縄文	－	－
13	300	SI－01	埋2層	鉢	縄文（磨消）	変形エ字文	桝形囲式
14	300	SI－01	埋2層	壺	－	平行沈線文	－
15	449	SI－02	埋土	－	－	平行沈線文（5条）	青木畑式～山王III層式
16	199	SK－01	埋土	鉢	縄文（磨消）	変形エ字文？	桝形囲式
17	199	SK－01	埋土	壺？	偽縄文（磨消）	平行沈線文	桝形囲式
18	174	SD－04	埋土	鉢	偽縄文（磨消）	変形エ字文	桝形囲式
19	174	SD－04	埋土	甕？	－	格状帯圧痕文	－
20	276	VII区 pit 47	埋土	甕	縄文	刺突文	桝形囲式
21	129	J－4、5区	表土	壺	縄文（磨消）	円心円文（渦巻文）	桝形囲式
22	131	J－4、5区	表土	壺	縄文（細い）？	平行沈線文	桝形囲式
23	489	SD－06	埋1層	鉢	－	平行沈線文	桝形囲式
24	489	SD－06	埋1層	甕	－	平行沈線文	桝形囲式、口唇部縄文？
25	518	SD－11	埋土	壺	偽縄文	－	桝形囲式
26	522	SD－11	埋土	壺	偽縄文（磨消）	平行沈線文	桝形囲式
27	494	SI－10	埋1層	－	縄文（磨消）	平行沈線文	桝形囲式？
28	494	SI－10	埋1層	鉢？	縄文（磨消）	変形エ字文	－
29	824	SI－10	埋土下部	甕	縄文	刺突文	桝形囲式
30	1028	SI－17	埋土上面	蓋	－	沈線文（1条）	桝形囲式
31	235	J－5、6区	表土	甕？	縄文（磨消）	平行沈線文	青木畑式～山王III層式

古銭

図版No.	遺物No.	遺構名	地区名	層位	銭名	初鋳年	西暦	時代	書体	備考
1	1092	SD－02	I区	pit 108	開元通宝	武徳4年	621	唐	真	
2	1090	SD－08	I－16	壁際黒色土	治平元宝	治平元年	1064	北宋	篆	
3	41	－	VII区	天地返し埋土	富士一銭	昭和17年	1942	昭和	－	0.5g

29・30は桝形囲式期のものである。18は鉢、30は蓋である。6・7・9・15・31は桝形囲式以前で、青木畑式～山王III層式に納まるものであろう。4は壺とみられ、青木畑式以後、円田式以前のものであろう。5・12・14・19・28については、時期不明である。桝形囲式が主体であるが、それ以前のものも目立つ。天王山式に属するものは出土していないようである。

第3節　第18次調査

1．調査に至る経緯

南小泉遺跡内の宅地開発予定地について、昭和62年度に開発行為者の株式会社大東・仙台土地開発株式会社、協進開発株式会社(仲介者)との間で事前協議が成立し、昭和63年7月12日に発掘届が提出された。計画では盛土工法となっており、調査は道路部分を対象とし、必要に応じて拡張することとした。調査は昭和63年10月18日より約3ケ月間の予定で開始した。

2．調査の経過

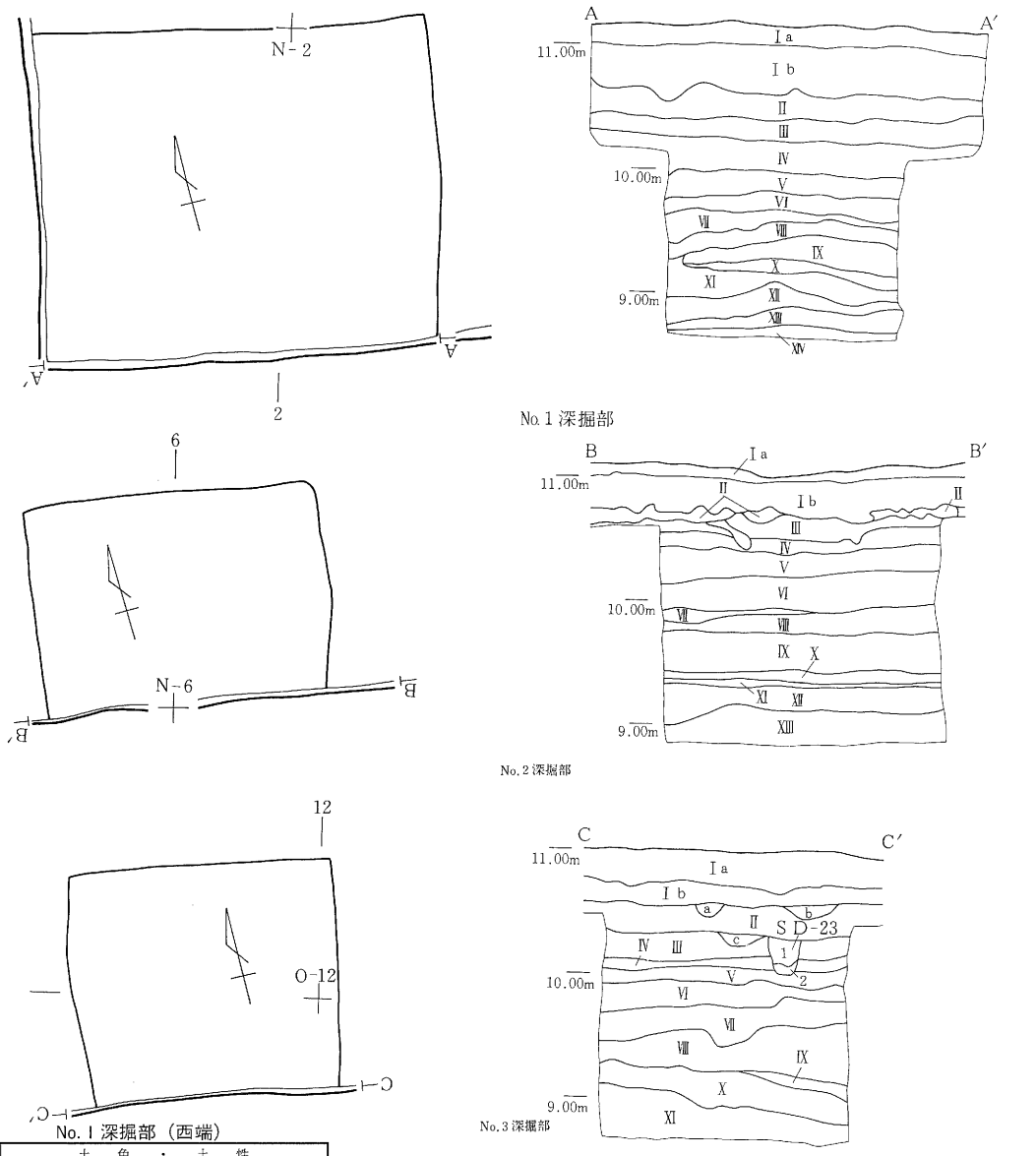
調査は、道路予定地部分の表土を機械により除去し、以後人力による排土作業を行った。調査開始後、1.5ヶ月間は第17次調査と併行の調査を余儀なくされた。調査に際して、道路部分が南北二ケ所に分かれることから、北側をⅠ区、南側をⅡ区として区別した。Ⅰ・Ⅱ区とも天地返しや撹乱が認められたが、特にⅡ区の天地返しは著しい。また、Ⅰ区とⅡ区の間に塚が存在するが、土地所有者が不明で調査することができず、周辺のトレンチ調査をした。

調査の結果、古墳時代後期の集落や中世の遺構群の拡がりを確認することができた。また、平安時代の保存良好な住居跡の調査を行うことができた。

3．基本層位

砂礫層に至るまでの基本層を確認する目的で、Ⅰ区3ケ所・Ⅱ区2ケ所の深掘トレンチを設定し観察を行った。その結果、どのトレンチも埋没河川と関連することから、本来の連続的な層序を確認できなかったが、その中でⅡ区東部のトレンチセクションが比較的良好であったことから、これを基準とした。なお、Ⅰ区のトレンチは過去の調査から判断して、砂層が厚く堆積していることなどから、いずれも埋没河川内とみられる。

Ⅰ層は2層に細分される。Ⅰａ層は現耕作土、Ⅰｂ層は畑地の土壌改良を目的とした天地返しにより形成された層で、にぶい黄褐色シルトであり時に暗褐色～黒褐色シルトブロックが混じる。調査区全域に広がっている。層厚は様々である。Ⅱ層は褐色シルトを主体とするもので、層厚は良好な地点で20～30 cmである。全域に分布するが、天地返しなどで消失した所も多い。Ⅱ層は中世の遺構上を覆っていることから、およそ近世以後の堆積と考えられる。Ⅲ層は暗褐色シルト主体で、黄褐色シルトブロックが混入する場合がある。層厚は6～7 cmである。Ⅱ区の天地返しを受けない地点やⅠ区の北部で確認できる。本来は、広く遺跡内に分布していたと予想されるが、大部分は天地返しにより消失したようだ。この層に類似する層は、16次調査地点や中世の遺構内で認めることができる。Ⅳ層は褐色シルトで、灰白色火山灰ブロックを混入



No. 1 深掘部（西端）

層位	土色・土性		
Ⅰa	10YR 3/4	暗褐色シルト	
Ⅰb	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト	
Ⅱ	10YR 6/4	にぶい黄褐色シルト	
Ⅲ	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	弥生土器
Ⅳ	10YR 4/4	褐色シルト	
Ⅴ	10YR 6/3	にぶい黄褐色砂質シルト	
Ⅵ	2.5Y 5/6	黄褐色砂	
Ⅶ	10YR 5/2	灰黄褐色砂質シルト	
Ⅷ	10YR 6/3	にぶい黄橙色砂と褐灰色砂との互層	
Ⅸ	10YR 5/4	にぶい黄褐色砂	
Ⅹ	10YR 5/4	にぶい黄褐色砂と褐灰色砂との互層	
Ⅺ	10YR 6/6	明黄褐色砂と褐灰色シルトがブロック状に入る	
Ⅻ	10YR 6/6	明黄褐色砂と褐灰色砂との互層	
XIII	10YR 7/3	浅黄色砂と明黄褐色砂との互層	
XIV	10YR 5/4	黄褐色砂	
		Ⅳ～XIV層は埋没河川堆積層と考えられる	

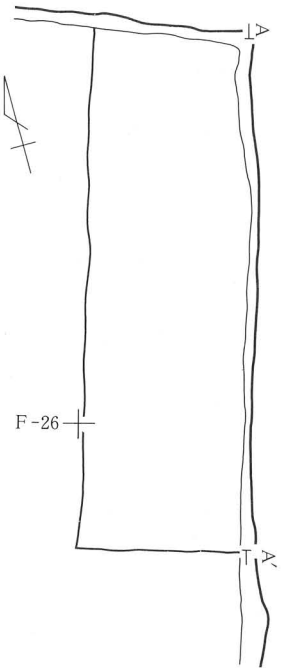
No. 2 深掘部（中央）

層位	土色・土性	
Ⅰa	10YR 3/4	暗褐色シルト
Ⅰb	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト
Ⅱ	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト
Ⅲ	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルトと灰白色シルトが斑状
Ⅳ	10YR 5/6	黄褐色砂質・褐灰色砂質シルトが斑状
Ⅴ	10YR 4/3	にぶい黄褐色砂
Ⅵ	10YR 4/3	にぶい黄褐色砂と黄橙色砂との互層
Ⅶ	10YR 3/3	暗褐色砂
Ⅷ	10YR 4/4	褐色砂と黄橙色砂との互層
Ⅸ	10YR 4/4	褐色砂と黄橙色砂との互層
Ⅹ	10YR 7/1	灰白色シルト
Ⅺ	5YR 3/3	暗赤褐色シルト
Ⅻ	10YR 6/1	褐灰色粘土質シルト
XIII	10YR 5/1	褐灰色粘土質シルト

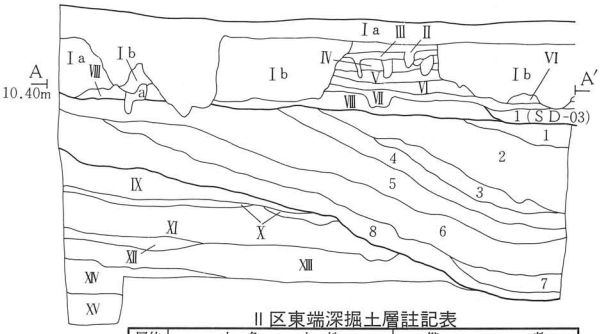
No. 3 深掘部（東端）

層位	土色・土性	
Ⅰa	10YR 3/4	暗褐色シルト
Ⅰb	10YR 5/4	にぶい黄褐色砂質シルト
Ⅱ	10YR 5/4	にぶい黄褐色粘土質シルト
Ⅲ	2.5Y 5/4	黄褐色粘土質シルト
Ⅳ	10YR 5/4	にぶい黄褐色砂質シルト
Ⅴ	2.5Y 6/4	にぶい黄色粘土質シルト
Ⅵ	2.5Y 5/3	黄褐色粘土
Ⅶ	2.5Y 5/4	黄褐色粘土質シルト
Ⅷ	2.5Y 6/3	にぶい黄色粘土
Ⅸ	2.5Y 5/3	黄褐色粘土
Ⅹ	2.5Y 5/4	黄褐色粘土質砂
Ⅺ	2.5Y 5/3	黄褐色粘土質砂

第131図　基本層位（Ⅰ区）

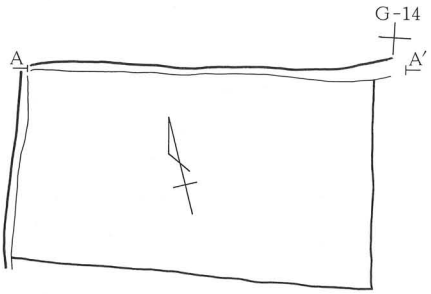


Ⅱ区東端深掘部



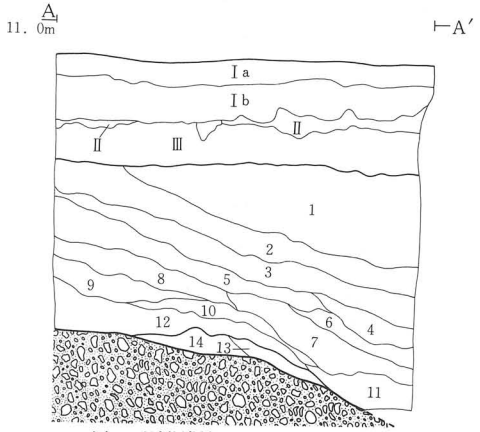
Ⅱ区東端深掘土層註記表

層位	土色・土性		備考
Ⅰa	10YR 4/3	にぶい黄褐色シルト	
Ⅰb	10YR 4/3	にぶい黄褐色シルト	Ⅱ～Ⅷ層混入
Ⅱ	10YR 4/4	褐色シルト	
Ⅲ	10YR 3/3	暗褐色シルト	黄褐色土ブロック含む
Ⅳ	10YR 4/4	褐色シルト	灰白色火山灰ブロックまれに含
Ⅴ	10YR 4/6	褐色シルト	炭化物粒子少量、白色粒子微量
Ⅵ	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト	炭化物粒子少量、マンガン斑少量
Ⅶ	10YR 4/4	褐色シルト	炭化物粒子少量、マンガン斑多量、白色粒子微量
Ⅷ	10YR 5/8	黄褐色シルト	上部マンガン斑少量
Ⅸ	10YR 4/6	褐色砂	
Ⅹ	2.5Y 5/4	黄褐色シルト質砂	
Ⅺ	10YR 5/4	にぶい黄褐色粘土質砂	炭化物微量
Ⅻ	2.5Y 6/4	にぶい黄色シルト質砂	
XIII	2.5Y 5/6	黄褐色砂	円礫微量
XIV	2.5Y 5/4	黄褐色細砂	円礫、亜角礫少量
XV	2.5Y 5/6	黄褐色細砂	炭化物微量
(SD03)	7.5YR 4/4	褐色シルト	炭化物粒子少量
a	10YR 4/6	褐色シルト	
1	10YR 5/6	黄褐色シルト	
2	10YR 5/6	黄褐色シルト	炭化物粒微量
3	10YR 5/6	黄褐色粘土質シルト	炭化物粒微量
4	10YR 5/6	黄褐色砂質シルト	軽石微量
5	10YR 5/6	黄褐色砂	
6	10YR 6/4	にぶい黄橙色シルト質砂	
7	10YR 6/6	明黄褐色砂	
8	10YR 5/6	黄褐色粘土質砂	



Ⅱ区西端深掘土層註記表

層位	土色・土性		備考
Ⅰa	10YR 4/4	褐色シルト	
Ⅰb	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト	
Ⅱ	10YR 4/3	にぶい黄褐色シルト	黄褐色土ブロック多量、炭化物少量
Ⅲ	10YR 6/6	明黄褐色粘土質シルト	炭化物粒、微量
1	10YR 5/6	黄褐色粘土質シルト	炭化物粒多量
2	10YR 6/4	にぶい黄橙色砂質シルト	
3	10YR 5/3	にぶい黄褐色砂	炭化物微量
4	10YR 5/6	黄褐色砂	
5	10YR 5/4	にぶい黄褐色粘土質シルト	円礫、炭化物粒、微量
6	2.5Y 5/4	黄褐色粘土質シルト	
7	2.5Y 5/4	黄褐色粘土質シルト	円礫、亜角礫少量、下位に鉄分
8	2.5Y 5/4	黄褐色シルト	
9	2.5Y 5/4	黄褐色シルト質粘土	炭化物微量
10	2.5Y 5/2	暗灰黄色粘土	グライ化
11	2.5Y 6/3	にぶい黄色シルト質砂	グライ化、上部に鉄分
12	2.5Y 6/4	にぶい黄色砂	炭化物微量
13	2.5Y 6/3	にぶい黄色粘土質シルト	砂多量
14	2.5Y 6/4	にぶい黄色シルト質粘土	
15	2.5Y 4/4	オリーブ褐色粘土質砂	砂、礫



Ⅱ区　西端深掘部

0　2m

第132図　基本層位（Ⅱ区）

する場合がある。層厚は約 10 cm である。Ⅳ層も遺跡内では、大部分失なわれている。火山灰が混入することから平安時代前半以後に形成されたものであろう。Ⅴ層は褐色シルト主体で、炭化物粒子が混じる。Ⅵ層はにぶい黄褐色シルト主体で、炭化物粒子を含む。層厚は 5～10 cm である。この層も、大部分天地返しにより失なわれている。Ⅶ層は褐色シルト主体で、炭化物粒子を含む。層厚は約 5 cm 前後である。古墳時代の土師器を含んでいる。Ⅷ層は黄褐色シルト主体で、粘性がある。層厚は 20 cm 前後である。従来、いわゆる「地山」と認識してきた層である。遺跡内では多くの場合、天地返しがこの層まで達する。本層の上面で、古墳時代中～後期の遺構が検出される。ところで、Ⅵ～Ⅷ層は層位的に区別できない場合も多いし、Ⅰ区西部の深掘トレンチでは、Ⅵ・Ⅶ層相当層に弥生土器が含まれていた。弥生時代の生活面がどの層か、解明されていない。Ⅸ層は褐色砂で、層厚は約 30 cm である。Ⅷ層との間に埋没河川の堆積層が介在することから、Ⅷ層と整合性のある堆積層序であるか確認できなかった。Ⅹ層は黄褐色シルト質砂で、層厚は 5 cm 前後である。Ⅺ層はにぶい黄褐色粗砂で、層厚は約 30 cm である。炭化物を僅かに含んでいる。Ⅻ層はにぶい黄色シルト質砂で、層厚は 10 cm 前後である。ⅩⅢ層は黄褐色砂で、1 cm 前後の円礫が混じる。層厚は 20 cm 前後である。ⅩⅣ層は黄褐色細砂で、3 cm 前後の円礫～亜角礫が混じる。Ⅱ区西部のトレンチでは、約 20 cm の円礫がみられる。層厚は 25 cm 前後である。ⅩⅤ層は黄褐色細砂で、礫は含まないようである。層厚は 25 cm 以上とみられる。

現状では、Ⅷ層以下が無遺物層と考えられる。これまで、本遺跡では層位別に時代を理解することが困難であったが、今回時代別の層位が理解できたのは大きな成果である。17 次調査で縄文土器が発見されたことから、縄文時代・弥生時代の生活面や遺構の存在の確認が課題となろう。

4．検出遺構と出土遺物

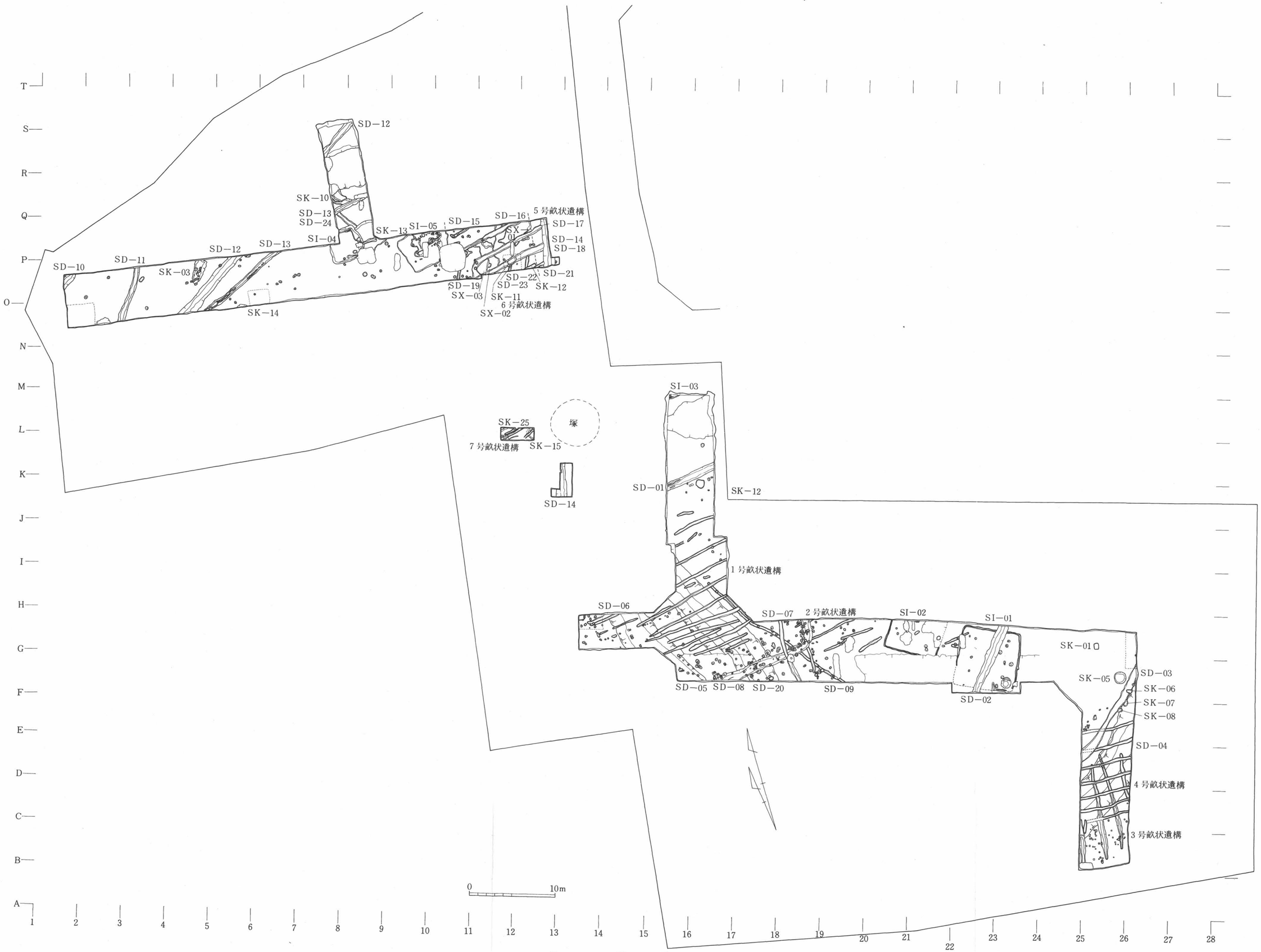
(1) 古墳時代

古墳時代に属する遺構は、住居跡 3 軒・竪穴遺構 1 基・土坑跡 6 基・溝跡 5 条・畝状遺構 2 基・性格不明遺構 3 基を検出した。SK09 は性格不明遺構（SX03）に改称した。

住居跡（SI）

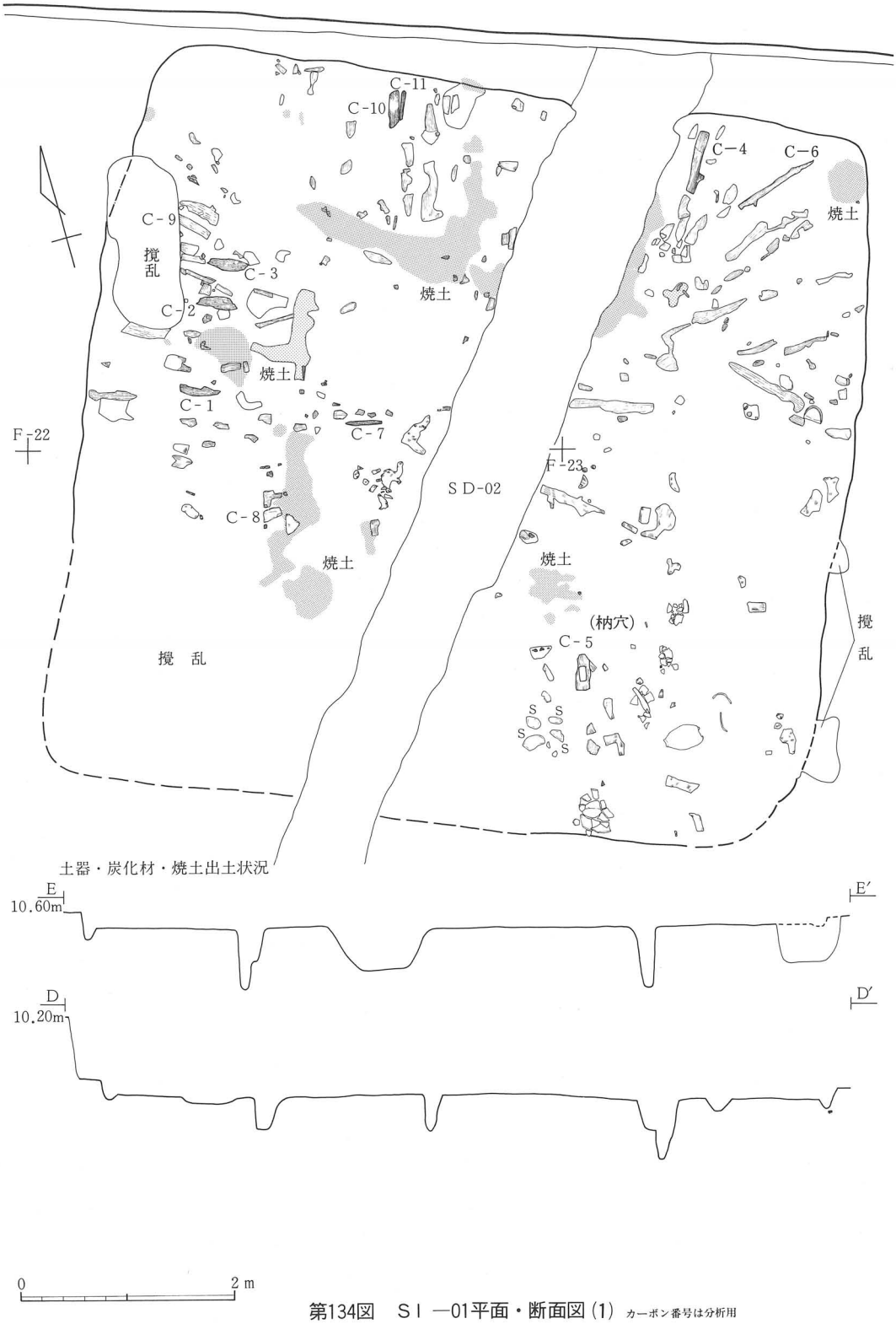
SI01（第 134～139 図）

Ⅱ区（E・F－22・23 区）に位置し、SD02・2 号畝状遺構（溝 f）に切られる。上部は天地返しにより削平を受け、南西部は特に著しい。床面やカマド西袖を失っている。規模は一辺約 6.4 m で方形を呈する。壁高は最大 22 cm である。この住居跡は火災にあったもので、炭化材・焼土が残存していた。材はその出土状況から判断して垂木材であり、梁・桁材は確認できなかっ

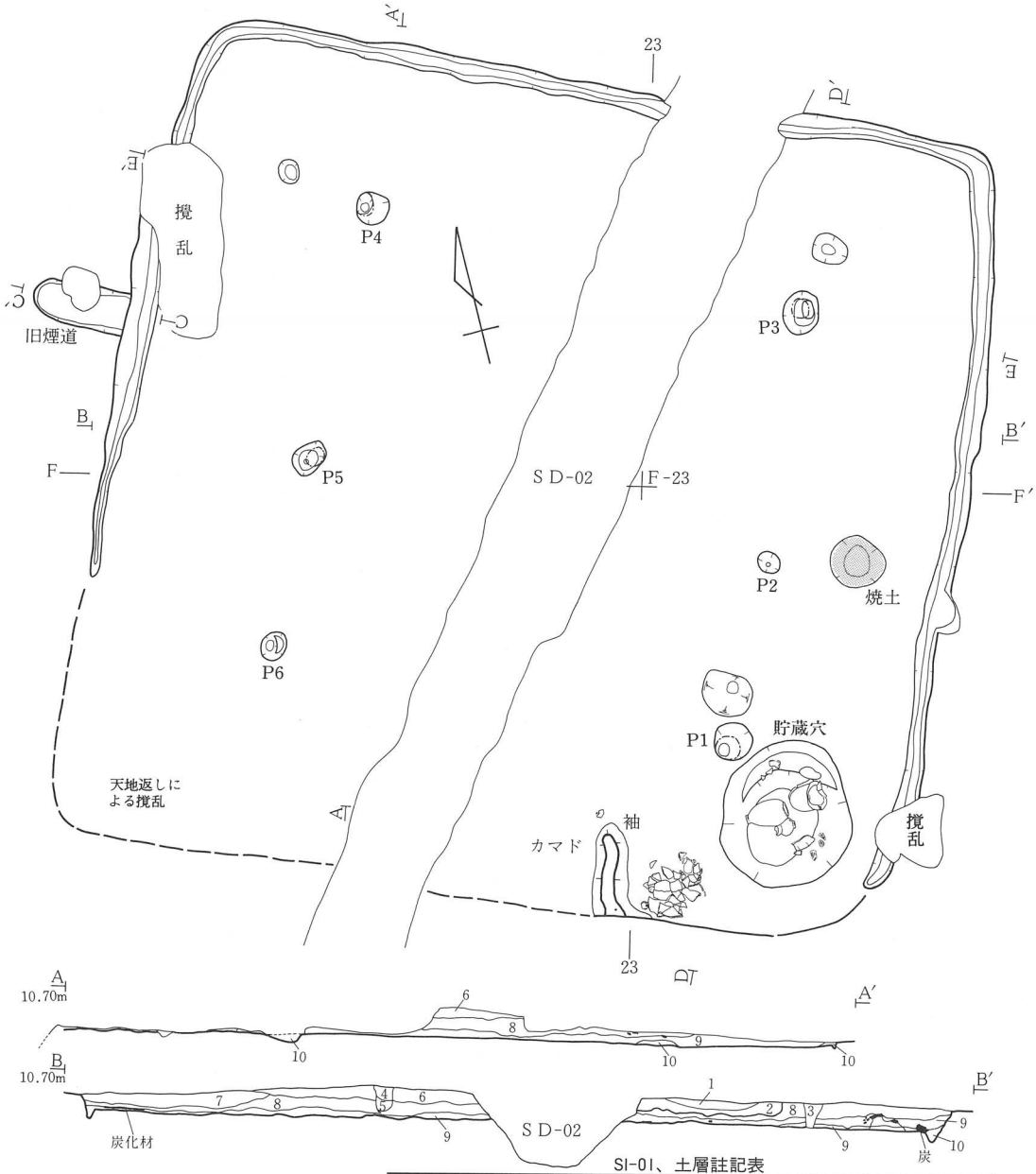


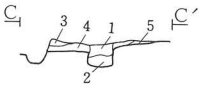
第133図 遺 構 配 置 図

調査区内の点線で示した
方形区画は深掘トレンチ



第134図　SI —01平面・断面図 (1)　カーボン番号は分析用





SI-01　旧煙道

0　2m

第135図　SI—01平面・断面図（2）

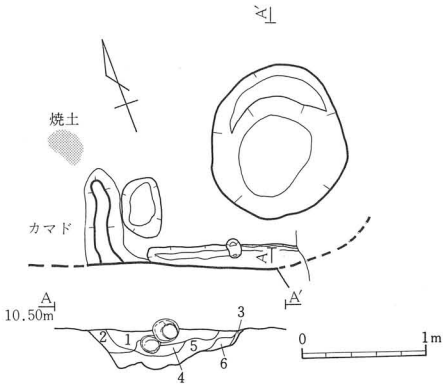
SI-01、土層註記表

層位	土色・土性		備考	
1	10YR 4/4	褐色砂	鉄分を斑状	SD02 関連
2	10YR 5/1	にぶい黄褐色砂シルト	鉄分を斑状、炭化物少量	SD02 関連
3	10YR 3/4	暗褐色シルト		
4	10YR 3/3	暗褐色シルト	炭化物粒少量	
5	10YR 3/4	暗褐色シルト		
6	10YR 3/4	暗褐色シルト	炭化物、炭化材少量	
7	10YR 4/3	にぶい黄褐色シルト	炭化物粒子微量	
8	10YR 4/4	褐色シルト	炭化物、炭化材少	
9	10YR 4/4	褐色シルト	炭化物、炭化材多量、焼土ブロック（部分的）	
10	10YR 5/6	黄褐色シルト	炭化物粒微量	

SI-01、煙道土層註記表

層位	土色・土性		備考
1	10YR 4/4	褐色シルト	
2	10YR 4/6	褐色シルト	
3	10YR 4/4	褐色シルト	土器片
4	7.5 3/4	暗褐色シルト	こげた天井壁ブロック多量、褐色土ブロック少量
5	10YR 3/3	暗褐色シルト	こげた天井壁ブロック多量、褐色土ブロック多量

た。ただし、カマド寄りの位置に、角形の柄穴をもつ材が出土しており、後者の可能性がある。材は広葉樹を使用している(第4章参照)。カマドは南壁やや東寄りに位置し、片袖と燃焼部・煙道部を天地返しにより失っている。カマド東脇に浅い窪みが認められた。柱穴は、主柱穴と考えられるものを6個検出した。柱穴の深さは、P_1 30 cm・P_2 36 cm・P_3 44 cm・P_4 58 cm・P_5 50 cm・P_6 41 cm である。また、南東コーナー付近に貯蔵穴が検出され、規模は1.26 m× 1.09 m、深さ0.35 m を測る。北壁には段が付く。内部から、炭化材と共に土師器甕・壷・甑などが出土した。壁際には壁溝があり、全周しているようだ。西壁には古い煙道、東壁際床面には焼土の詰まった浅い土坑（カマド燃焼部？）が検出された。



SI-01 貯蔵穴

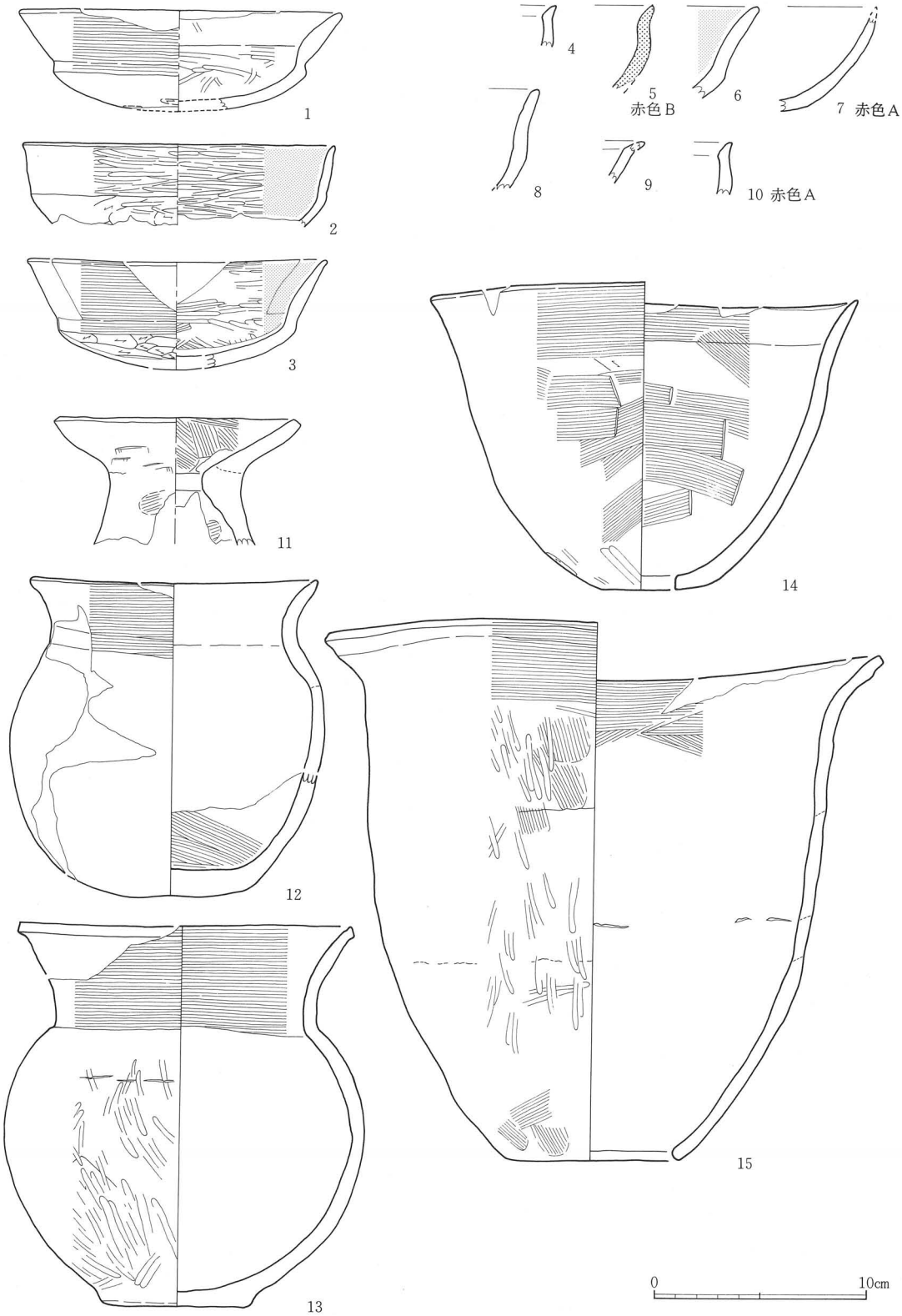
層位	土色	土性	備考
1	10YR 5/3	にぶい黄褐色砂質シルト	炭化物粒子が普遍的に混入
2	10YR 4/3	にぶい黄褐色シルト	焼土粒微量、炭化物粒子混入
3	10YR 6/4	黄橙色シルト	
4	10YR 4/3	にぶい黄褐色シルト	上面に炭化材、焼土炭化物粒子が普遍的に混入
5	10YR 3/3	暗褐色シルト	炭化物多量
6	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト	炭化物粒子が普遍的に混入

第136図　カマド付近平面・断面図

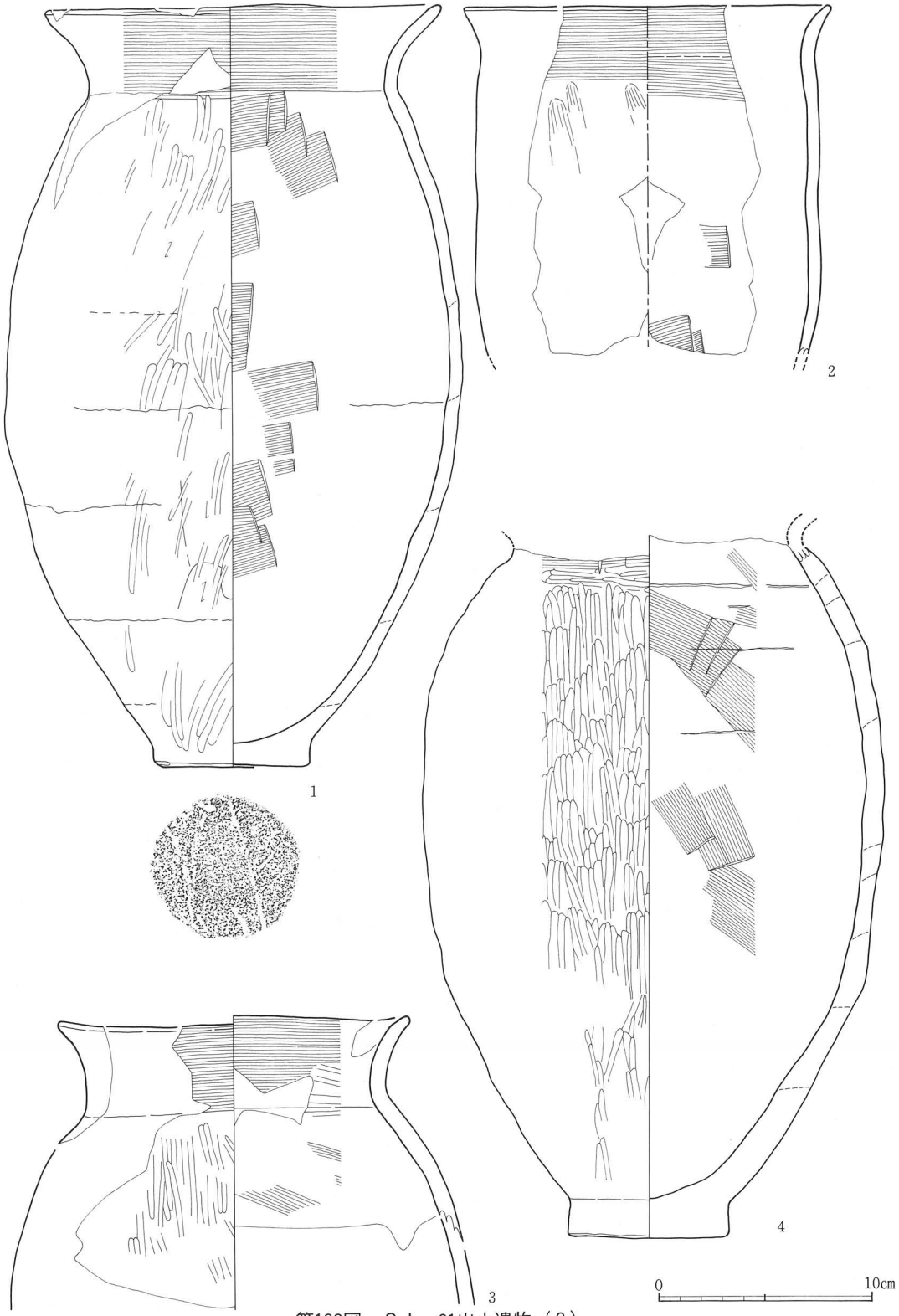
出土遺物は、土師器坏・壷・甕・甑・支脚？・高坏？・ミニチュア土器・切子玉（琥珀？）・石製模造品（円板・破片）・弥生土器・剝片が出土している。坏は有段で黒色処理するもの（外面赤彩のものあり）と古墳時代中期の系譜をひく内湾するものや口縁部に屈曲をもつものがある(赤彩のものあり)。甕は長胴のもの、広口のもの、小型品の三種がある。甑は砲弾形に近い大小二種がある。支脚？としたものは、西壁の古い煙道部から出土したものである。ただ、塩釜式の器台の可能性も残こるが、調査区内では塩釜式の土師器は出土していない。祭祀具とみられるミニチュア土器が、カマド内や脇などから出土した。琥珀製らしい褐色の切子玉や石製模造品（円板）が出土しているが、後者はこの住居の時期まで存続するのか、混入品とみるべきか問題が残こる。これらの遺物の大部分は、住居の東半部より出土し、特にカマド付近と貯蔵穴に集中する。また、炭化材が多数検出されたが、板状のもの、分割材、角形に近い分割材がみられた。炭化材の一部は分析を依頼し、コナラ属が多く、クリ・ヤマグワが判明している。

SI02（第140・141図）

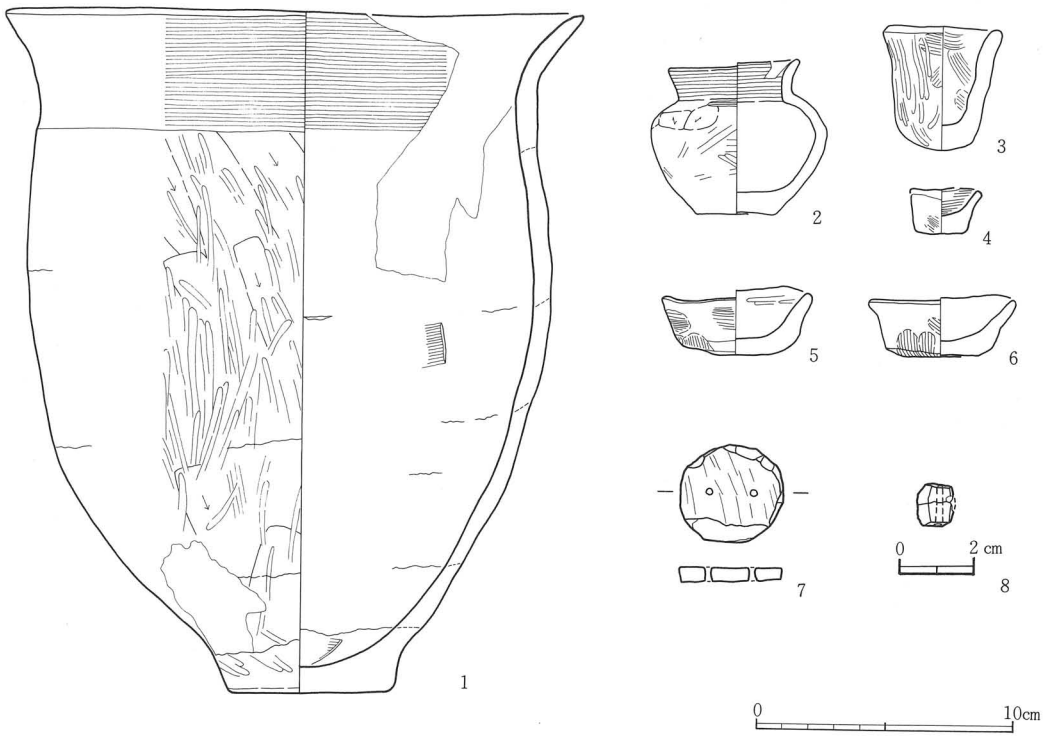
II区(F－20・21区)に位置し、他の遺構との重複は認められない。天地返しや撹乱坑により、残りは良くない。規模は不明であるが、南辺で約6 m 前後と推定される。壁高は残こりの比較的良い所でも約7 cm である。大半は削平されている。カマドの存在ははっきりしないが、東壁



第137図　ＳＩ－01出土遺物（１）



第138図　ＳＩ―01出土遺物（２）



第139図　ＳＩ－01出土遺物（３）　７・８：½

推定部分に焼土の詰った浅い土坑が検出された。これはカマドの燃焼部の残存とみられる。柱穴は、P_1・P_2としたものが該当し、それぞれ深さ 17 cm・26 cm である。その他のピットは、いずれも浅く、柱穴ではない。貯蔵穴・土坑は検出されなかった。壁溝は全周するものと予想される。床面上には炭化材や炭化物が出土しており、火災にあった住居と考えてよい。

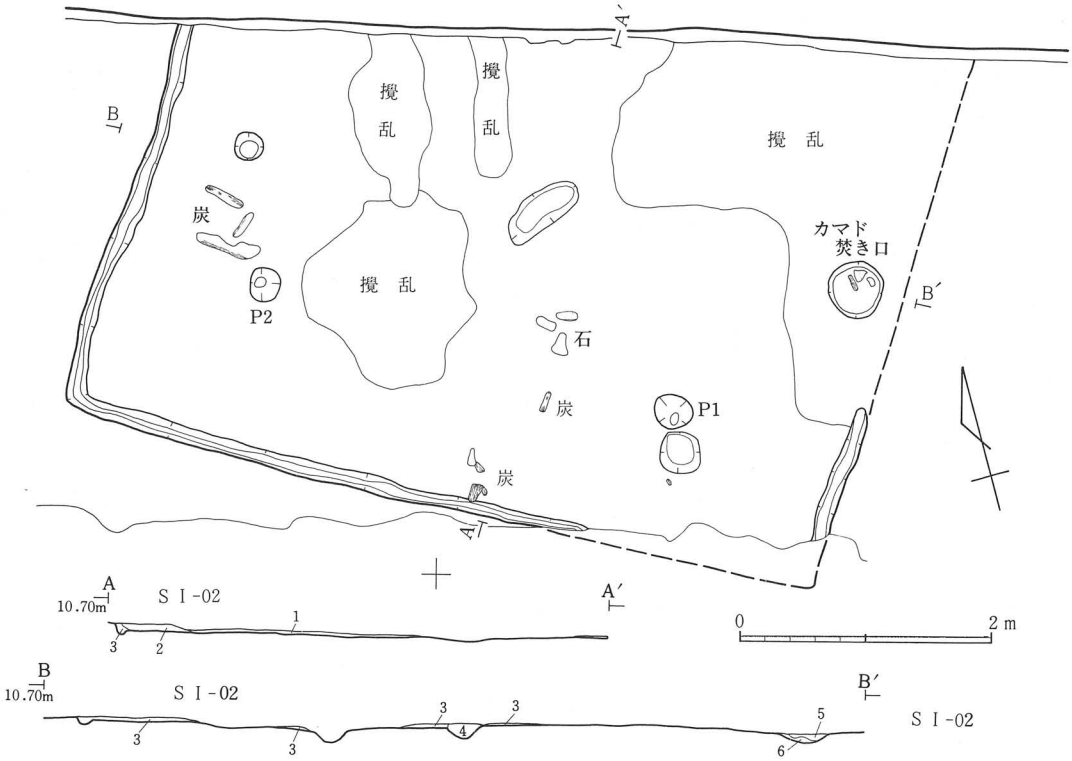
出土遺物は僅かで、土師器坏・弥生土器がある。坏は、燃焼部とみられる土坑と床面から出土したものである。弥生土器は床下の掘り方から出土している。燃焼部より炭化米・炭化種子が出土している。SI01 とほぼ同時期の住居跡と考えられる。

SI03（第 142 図）

II区北部（K－15 区）に位置し、極く一部を検出したに過ぎない。規模や特徴は不明である。直立する壁と壁溝が確認され、住居跡と推定しておく。遺物は、古墳時代とみられる土師器片が僅かに出土している。

SI05（第 143・144 図）

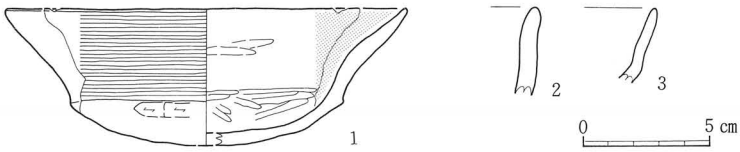
Ｉ区東部（O－ 9 区付近）に位置し、他の遺構との重複は認められない。撹乱坑や天地返しにより削平され、非常に残りの悪い遺構である。特に東壁は全く不明であり、床面上には新しい撹乱坑以外にも時期不明の不整土坑やピットにより切られている。規模は西壁が 4.12 m、南壁



SI-02 土層註記

層位	土色・土性		備考	層位	土色・土性		備考
1	10YR 3/3	暗褐色シルト	炭化物、炭化材を含む	4	10YR 3/3	暗褐色シルト	褐色シルトブロック多量、炭化物粒少量
2	10YR 4/3	褐色シルト	炭化物少量	5	10YR 3/4	暗褐色シルト	焼土ブロック、炭化物多量、炭化材少量
3	10YR 4/4	褐色シルト	焼土粒少量	6	10YR 4/4	褐色シルト	焼土ブロック、炭化物微量

第140図　S I ―02平面・断面図



第141図　SI ―02出土遺物

3 m 以上で、壁高は残こりの良い場所で約 15 cm である。カマド・炉は検出できない。南西コーナーの床面上に、淡い焼土が検出された。ピットが 5 個検出されたが、柱穴ではない。壁溝も検出されなかった。こうした特徴から、この遺構は竪穴遺構と理解される。

出土遺物は少なく、土師器坏・ミニチュア土器がある。坏は有段で内面黒色処理をするものと無彩で口縁が直立するものの 2 種が出土している。

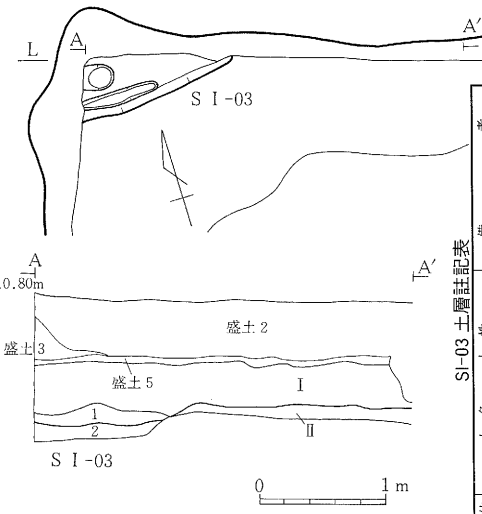
土坑（SK）

SK03（第 145・146 図）

Ⅰ区西部（N－4 区）に位置し、ピット（P_6）に切られる。上部は天地返しにより削平されて

いる。規模は2.85m以上×1.36m、深さ0.18mで、略長方形を呈する。底面や壁面にはピットが検出された。

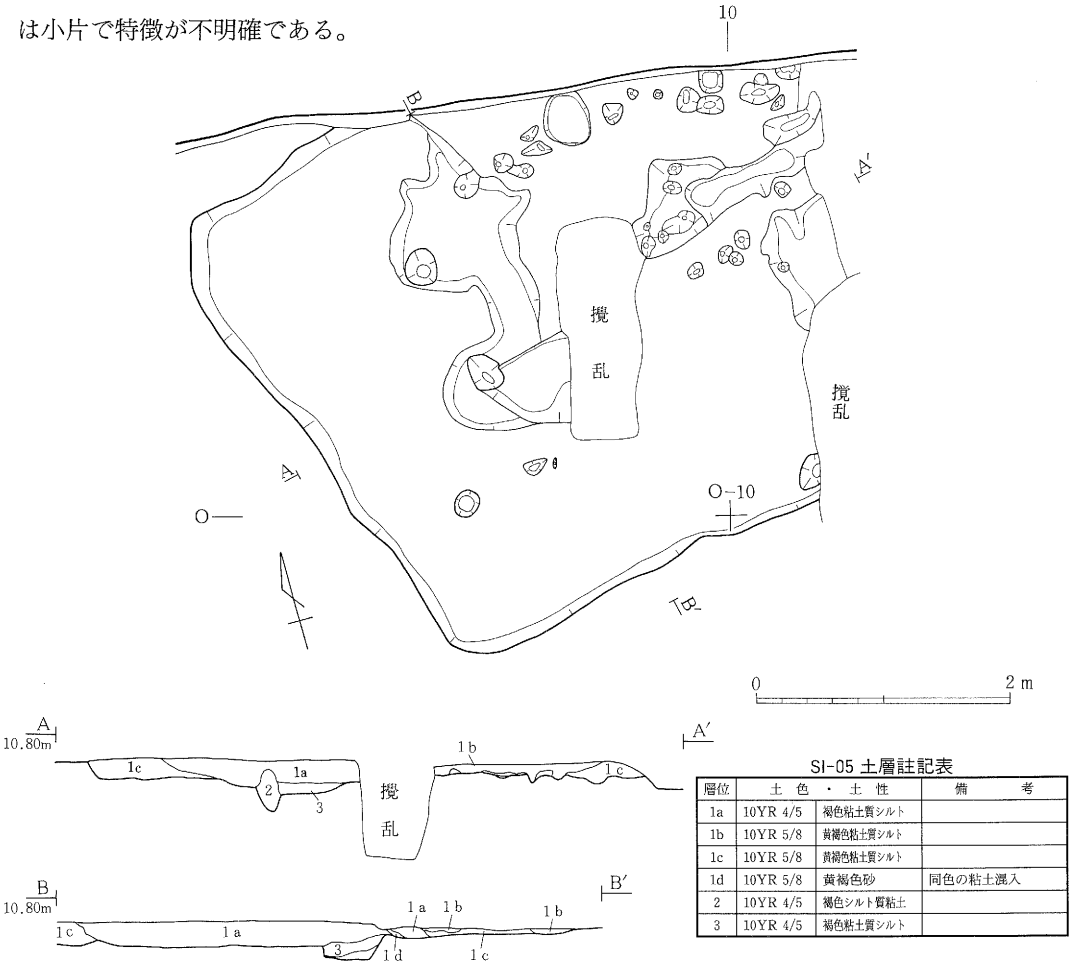
出土遺物は、土師器坏・須恵器壷？・弥生土器が出土している。坏は古墳時代中期の内湾する坏の系譜をひくものと考えられるが、口縁部は直立ぎみである。中期のものに比較して浅い。体部～底部は内外面ともハケ調整で、ミガキや削りが認められない珍しい例であろう。須恵器は小片で特徴が不明確である。



SI-03 土層註記表

層位	土色・土性		備考
壷2	10YR 4/4	褐色	礫まじり
盛3	10YR 8/6	黄橙色土	ゴミまじり
盛5	10YR 5/2	灰黄褐色土	一部グライ化して褐灰色となっている
I	10YR 6/4	にぶい黄橙色シルト	カーボン粒子混入
II	7.5YR 4/4	褐色シルト	灰黄色土が斑状にまじる
1	10YR 5/6	黄褐色シルト	カーボン粒子普遍的に混入
2	10YR 6/4	にぶい黄褐色シルト	カーボン粒子わずかに混入

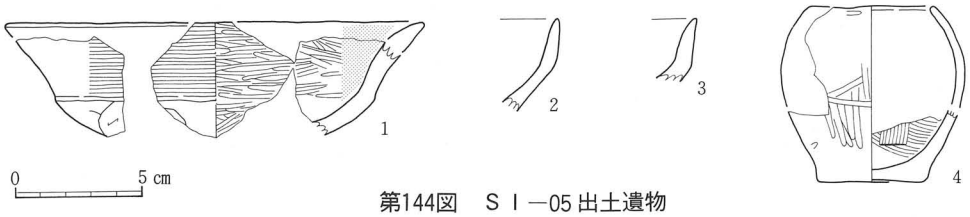
第142図　S I —03、平面、断面図



SI-05 土層註記表

層位	土色・土性		備考
1a	10YR 4/5	褐色粘土質シルト	
1b	10YR 5/8	黄褐色粘土質シルト	
1c	10YR 5/8	黄褐色粘土質シルト	
1d	10YR 5/8	黄褐色砂	同色の粘土混入
2	10YR 4/5	褐色シルト質粘土	
3	10YR 4/5	褐色粘土質シルト	

第143図　S I —05平面・断面図



第144図　ＳＩ－05出土遺物

SK05（第145図）

Ⅱ区東部(E－25区)に位置し、重複は認められない。上部は天地返しにより削平されている。規模は1.35 m× 1.34 m、深さ0.22 mで、円形を呈している。

出土遺物は、土師器坏（内黒）・高坏・小型壺・甕があるが、図示できるものはない。

SK06（第145図）

Ⅱ区東部（E－26区）に位置し、SD03･04を切る。上部は天地返しにより削平される。規模は0.65 m× 0.44 m、深さ0.22 mで、不整方形を呈する。

出土遺物は土師器甕の口縁部1点であるが、図示できない。

SK07（第145図）

Ⅱ区東部（E－26ポイント）に位置し、SD03･04を切る。上部は天地返しにより削平されている。規模は0.74 m× 0.44 m、深さ0.19 mで、楕円形を呈する。遺物は出土していない。

SK08（第145図）

Ⅱ区東部（D－25区）に位置し、SD03・04を切る。上部は天地返しにより削平されている。規模は0.63 m× 0.42 m、深さ0.19 mで、不整楕円形を呈する。遺物は出土していない。

SK10（第145・146図）

Ⅰ区北部（P－7区）に位置し、SD13から北へ派生する溝に切られる。北側は、天地返しやゴミ穴により撹乱を受けている。規模は1.34 m以上× 0.96 m、深さ0.21 mで、不整形である。北端では、さらに幅が広がり伸びていくようである。

出土遺物は、土師器小型甕あるいは小型甑とみられる土器が1点出土している。

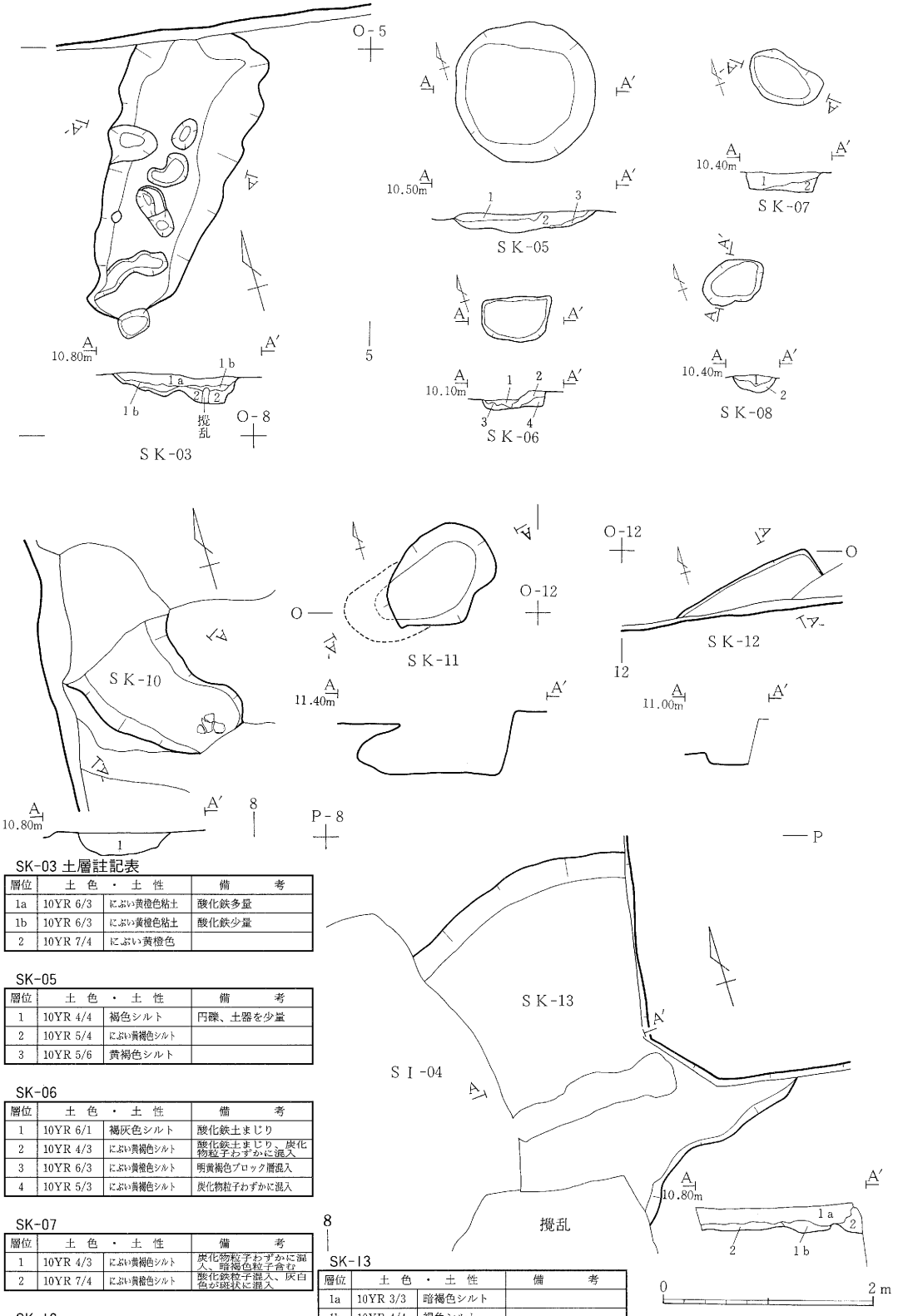
溝跡（SD）・畝状遺構

SD03（第147・150図）

Ⅱ区東部に位置し、Ⅷ層上面で検出した。SK06～08に切られ、4号畝状遺構(溝i･j)･SD04を切る。規模は、検出長約12 m、幅1.1 m、深さ0.16 mを測る。方向は約N－37.5°－Eで、南端部で若干方向が変わるようである。

出土遺物は、土師器片少量と石製模造品の原石？1点である。無彩で口縁部が外傾する坏(第150図1）や有段丸底で黒色処理を施す坏などがある。

SD04（第148・150図）



SK-03 土層註記表

層位	土色・土性		備考
1a	10YR 6/3	にぶい黄橙色粘土	酸化鉄多量
1b	10YR 6/3	にぶい黄橙色粘土	酸化鉄少量
2	10YR 7/4	にぶい黄橙色	

SK-05

層位	土色・土性		備考
1	10YR 4/4	褐色シルト	円礫、土器を少量
2	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト	
3	10YR 5/6	黄褐色シルト	

SK-06

層位	土色・土性		備考
1	10YR 6/1	褐灰色シルト	酸化鉄土まじり
2	10YR 4/3	にぶい黄褐色シルト	酸化鉄土まじり、炭化物粒子わずかに混入
3	10YR 6/3	にぶい黄橙色シルト	明黄褐色ブロック層混入
4	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	炭化物粒子わずかに混入

SK-07

層位	土色・土性		備考
1	10YR 4/3	にぶい黄褐色シルト	炭化物粒子わずかに混入、暗褐色粒子含む
2	10YR 7/4	にぶい黄橙色シルト	酸化鉄粒子混入、灰白色が斑状に混入

SK-10

層位	土色・土性		備考
1	10YR 4/6	褐色粘土質シルト	炭化物微量

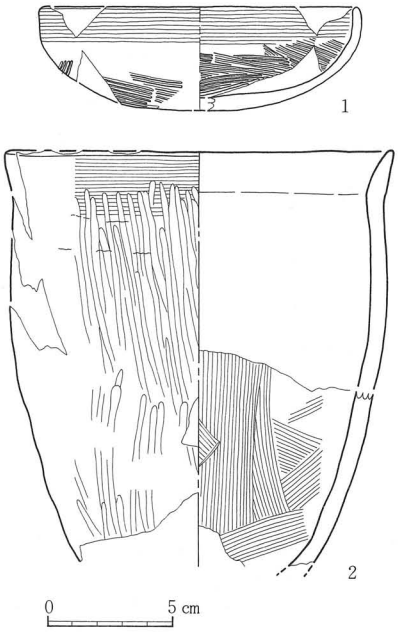
SK-13

層位	土色・土性		備考
1a	10YR 3/3	暗褐色シルト	
1b	10YR 4/4	褐色シルト	
2	10YR 5/6	黄褐色シルト	

第145図　SK－03～13平面・断面図

II区東部に位置し、埋没河川上にある。溝として扱ったが、埋没河川の凹部の可能性もある。底面下には基本層Ⅷ層の2次堆積とみられる黄褐色シルト層、さらに下位は砂質シルト・砂層となる。規模は検出長約13m、幅4.6m、深さ0.7mを測り、断面は皿状に近い。埋土は、薄層が幾重にも重なるようで、いずれも自然堆積を示す。方向はゆるい弧を描くが、およそN－52.5°－Eである。

出土遺物は、土師器坏・甕、砥石、石製模造品（円板・原石）、スクレイパーが出土している。第150図2の坏は、畝状遺構との関係から直接溝跡埋土として扱えないが、溝跡の下限を予想できる資料であろう。また、同図4の甕は壁面直上で潰れた状態で出土したものである。古墳時代中期のものと考えられる。



第146図　ＳＫ—03・10出土遺物

SD05（第149・150図）

II区西部に位置し、SA01・SB02～05・1号畝状遺構に切られる。上部は、天地返しにより削平されている。溝として扱ったが、埋没河川上にあり河川の凹部の可能性もある。SD04と同様、ここでも底面下にⅧ層の2次堆積とみられる層がある。規模は検出長約11m、幅約4.2m、深さ0.23mを測る。断面形は皿状を呈す。方向は約N－30°－Wである。

出土遺物は、土師器坏・ミニチュア土器、須恵器甕、剝片（チップ）がある。坏は第150図8のように有段丸底と予想されるものが多いが、内面黒色処理をするものが主体とはなっていない。同図11の坏は、表面・胎土ともに赤色を呈するものである。

SD20（第151・150図）

II区西部に位置し、SA01・SB02～05・SD08・1号畝状遺構に切られる。上部は、天地返しにより削平されている。これも溝として扱ったが、埋没河川上にあり河川の凹部の可能性もある。SD05と同様、底面下はⅧ層の2次堆積とみられる層がある。規模は検出長約18.5m、幅約5m、深さ0.37mを測り、断面形は皿状を呈す。方向は約N－30°－Wである。

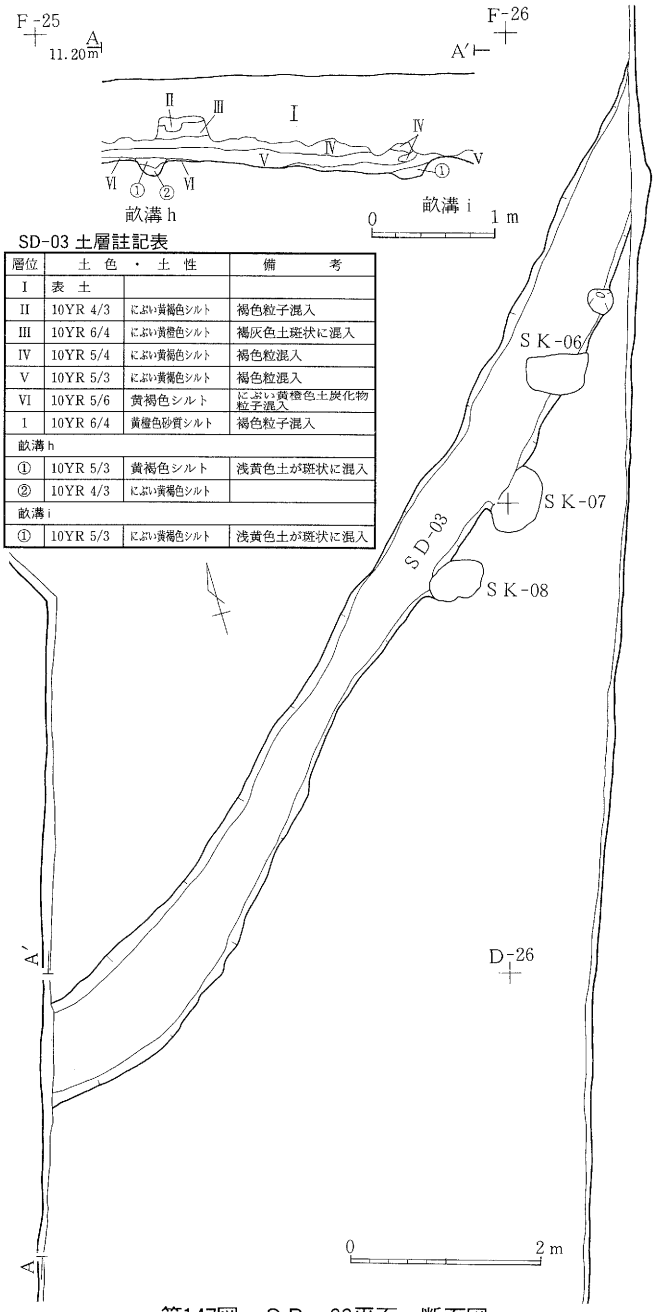
出土遺物は僅かで、土師器高坏、須恵器壺？・甕、石製模造品（剣形・臼玉）、剝片がある。いずれも、古墳時代中期とみられ、後期の遺物はないようである。

3号畝状遺構（第152図）

およそ並行する細い溝が3条以上検出された場合、これを畝状遺構とし、報告する。この場合、畠跡と断定できないものの、その可能性があることから溝跡間の平坦部分も含めて一つの遺構と理解したい。各溝跡の名称は小文字のアルファベットを付して呼ぶことにする。

3号畝状遺構は、II区東部に位置し、4号畝状遺構に切られ、SD04を切る。上部は、天地返しにより削平を受けている。規模は、溝b•cに基づくと南北約11.2m、東西は5.8m以上を測る。東西にさらに広がる。溝跡は溝a～dで構成され、長さ約11.2m、幅0.2～0.7m、深さ およそ0.1～0.4mを測る。方向はやや不規則で、N－0°～11°－Eとばらつきがある。溝跡の深度は、中央部が深く両端が浅くなる特徴がある。溝跡間の平坦部では不規則な小ピット群が検出されたが、SD04と重複する部分では明確にできなかった。

出土遺物は、古墳時代の甕細片が少量出土しているが、溝bの南部で比較的多い。



SD-03 土層註記表

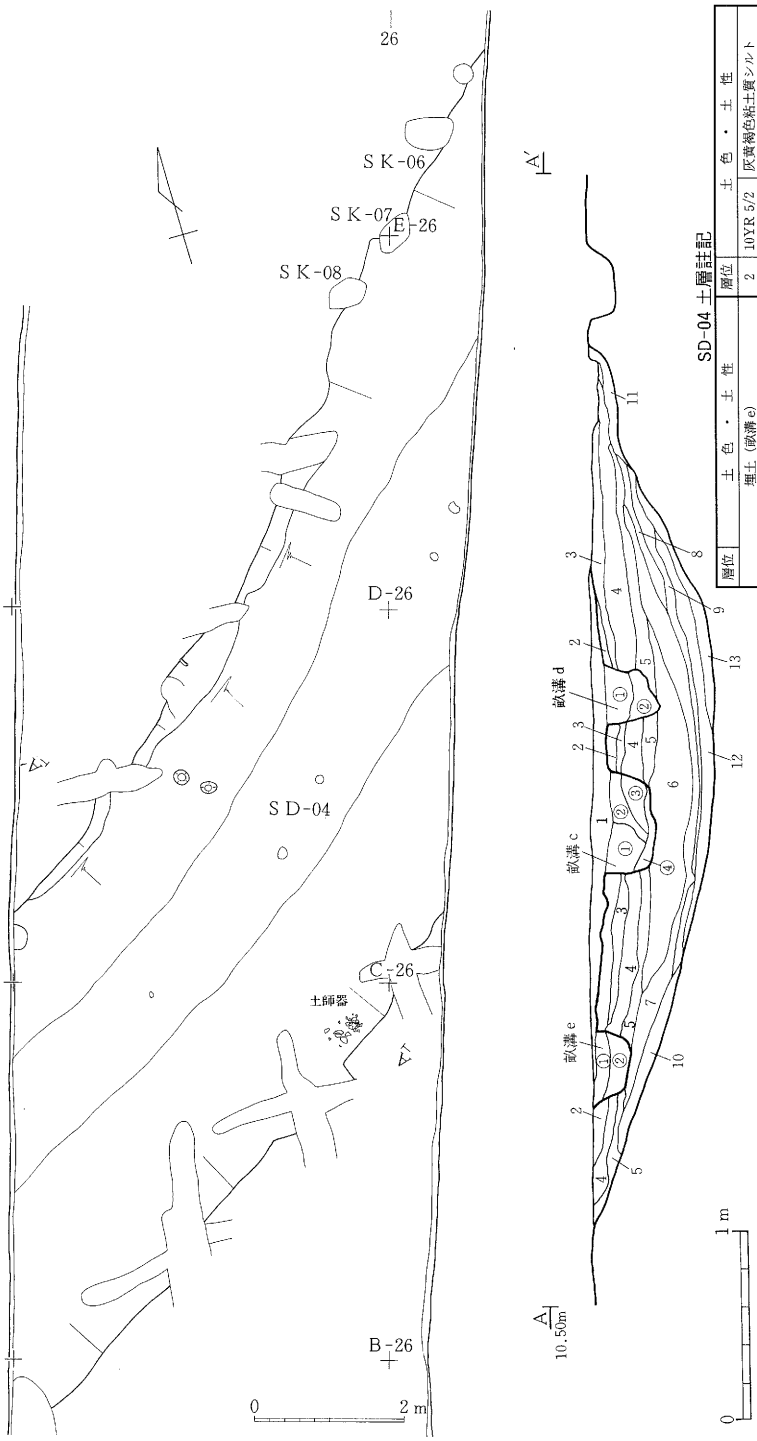
層位	土色・土性		備考
I	表土		
II	10YR 4/3	にぶい黄褐色シルト	褐色粒子混入
III	10YR 6/4	にぶい黄橙色シルト	褐灰色土斑状に混入
IV	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト	褐色粒混入
V	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	褐色粒混入
VI	10YR 5/6	黄褐色シルト	にぶい黄橙色土炭化物粒子混入
1	10YR 6/4	黄橙色砂質シルト	褐色粒子混入
畝溝h			
①	10YR 5/3	黄褐色シルト	浅黄色土が斑状に混入
②	10YR 4/3	にぶい黄褐色シルト	
畝溝i			
①	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	浅黄色土が斑状に混入

第147図　ＳＤ―03平面・断面図

4号畝状遺構（第152図）

II区東部に位置し、SD03に切られ、SD04・3号畝状遺構を切る。上部は天地返しにより削平を受けている。規模は南北約10m•東西6m以上で、この範囲におよそ平行する溝が7条検出された。溝跡はe～kで構成され、長さ約6m、幅0.2～0.4m、深さ0.03～0.2mを測る。

溝跡の間隔はおよそ1.4〜1.5mである。溝跡は孤状を呈しているが、その方向は約N−88°−Wである。この4号及び前述の3号ともに、SD04（埋没河川？）を意識した立地を示しているように思われる。出土遺物はない。



SD-04 土層註記

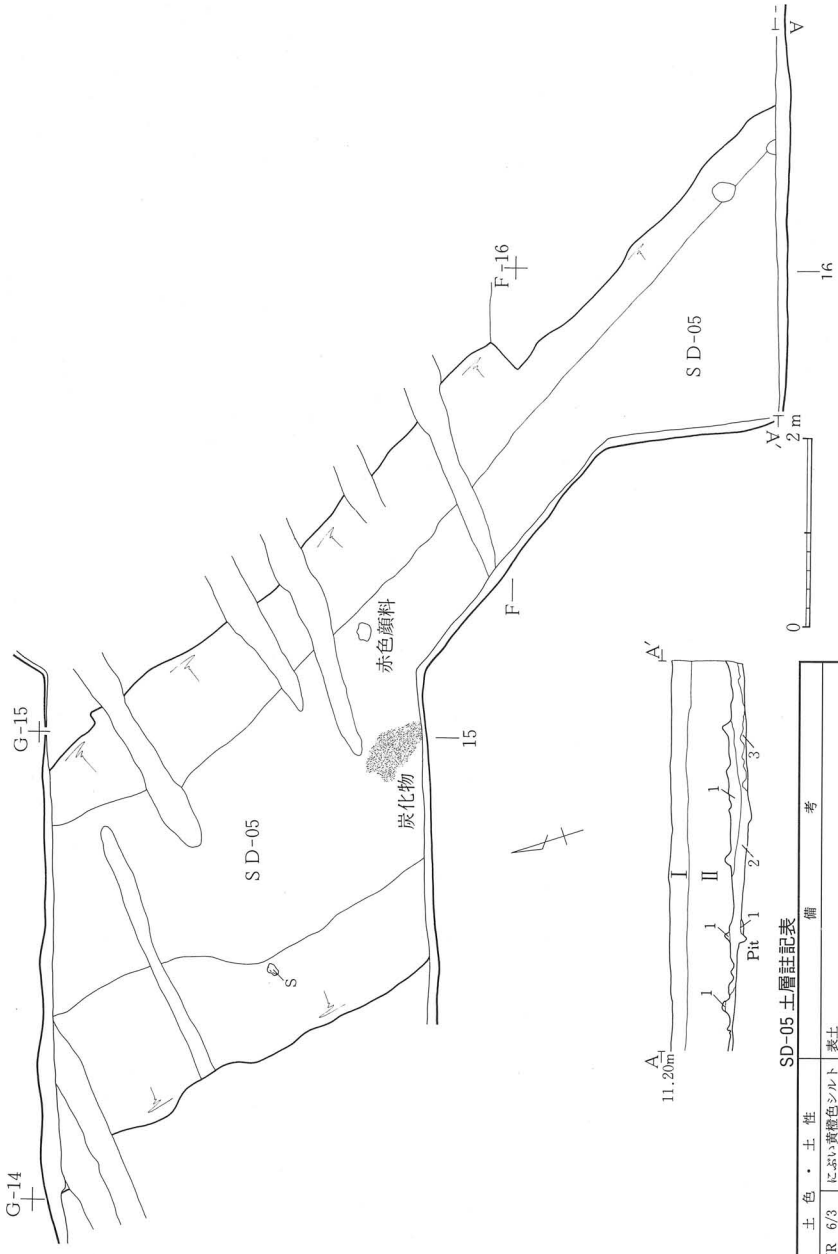
層位	土色・土性	層位	土色・土性
	埋土（敲溝e）	2	10YR 5/2 灰黄褐色粘土質シルト
①	10YR 4/4 褐色粘土質シルト	3	10YR 4/2 灰黄褐色粘土質シルト
②	10YR 4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト	4	10YR 4/2 灰黄褐色粘土質シルト
	埋土（敲溝c）	5	10YR 5/2 灰黄褐色粘土質シルト
①	10YR 5/3 にぶい黄褐色粘土質シルト	6	10YR 4/1 褐灰色粘土質シルト
②	10YR 5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト	7	10YR 4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト
③	10YR 4/2 灰黄褐色粘土質シルト	8	10YR 5/3 にぶい黄褐色粘土質シルト
④	10YR 4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト	9	10YR 4/1 褐灰色粘土質シルト
	埋土（敲溝d）	10	10YR 5/3 にぶい黄褐色粘土質シルト
①	10YR 5/3 にぶい黄褐色粘土質シルト	11	10YR 6/3 にぶい黄色シルト
②	10YR 4/3 にぶい黄褐色粘土質シルト	12	10YR 5/3 にぶい黄褐色粘土質シルト
	埋土（SD-04）	13	10YR 4/4 褐色粘土質シルト
1	10YR 6/1 褐灰色粘土質シルト		

第148図　ＳＤ—04平面図・断面図

性格不明遺構（SX）

SX01（第153図）

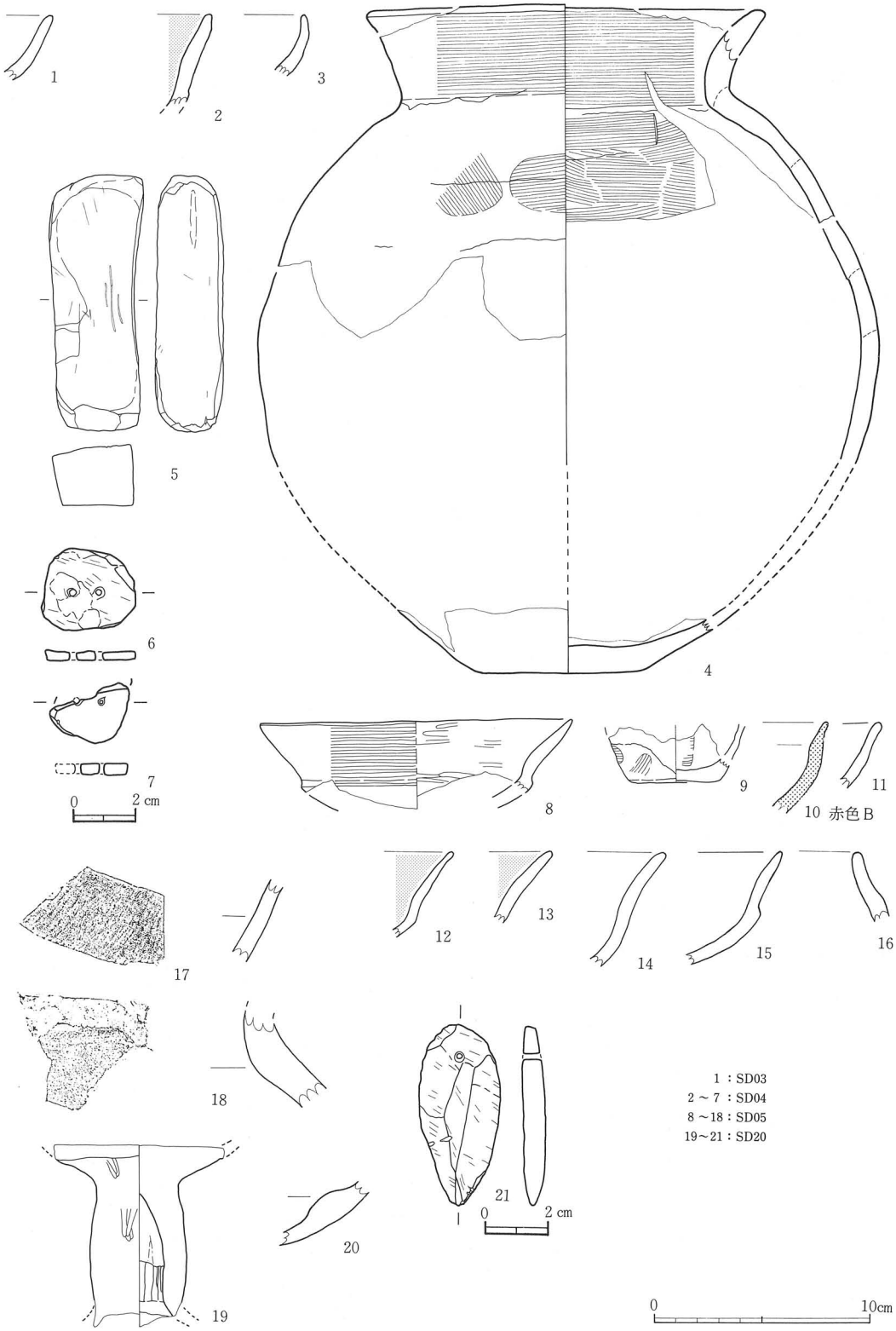
Ⅰ区東部（0－11・12区）に位置し、5号畝状遺構（溝b・c）に切られる。また、Ⅱ区から続くとみられる埋没河川跡上に位置している。規模は3.23 m×2.21 m、深さ0.07 mで、形状は不定形である。



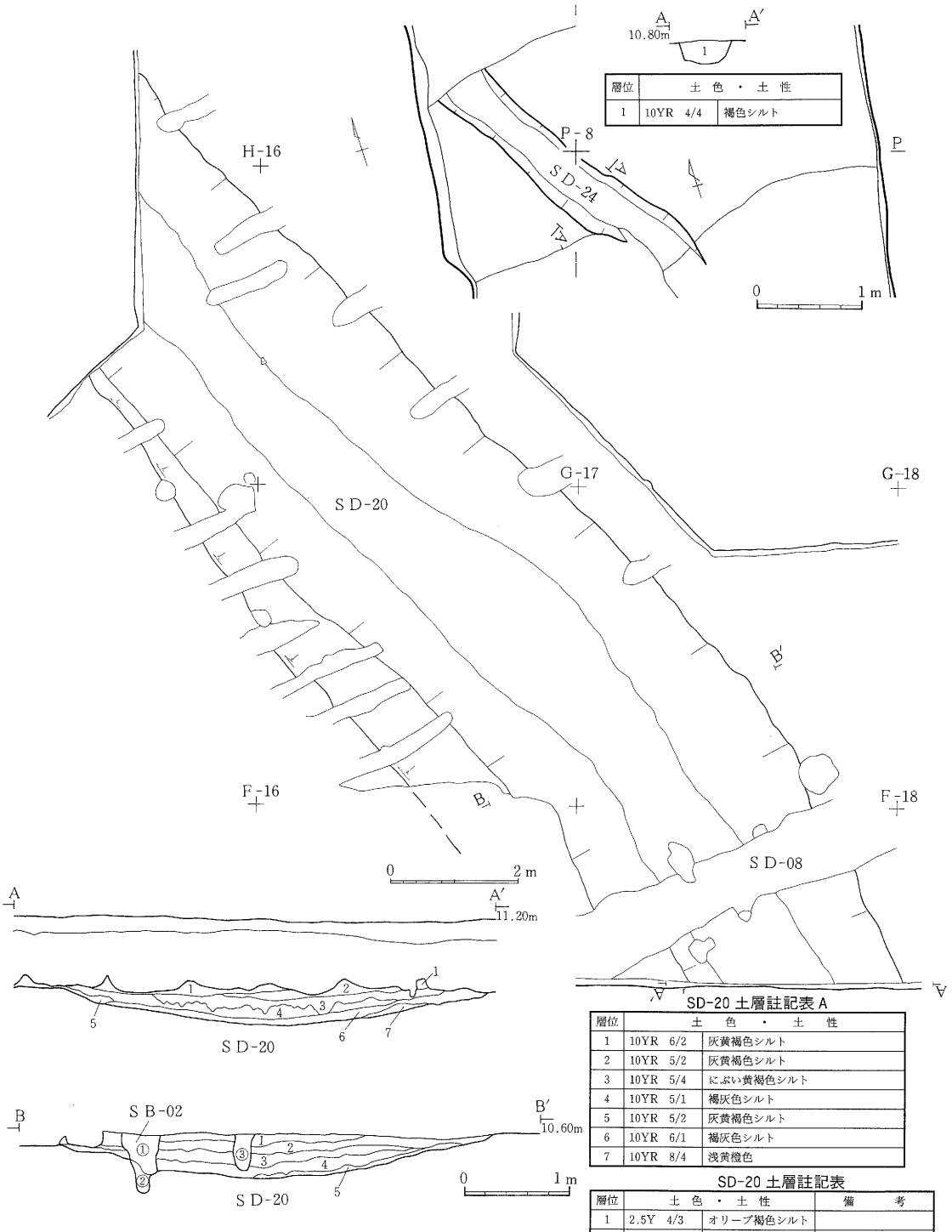
SD-05 土層註記表

層位	土色・土性		備考
I	10YR 6/3	にぶい黄橙色シルト	表土
II	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	耕作土、10YR 3/1黒褐色シルトがブロック状に混入
III	10YR 4/2	灰黄褐色シルト	10YR 7/1 灰白色シルトが細く斑状に混入
1	10YR 6/1	褐灰色シルト	10YR 4/6 褐色粒子が普遍的に混入
2	10YR 5/2	灰黄褐色シルト	10YR 7/4 にぶい黄橙色シルトが細く斑状に混入
3	5Y 8/3	淡黄色シルト	黄橙色シルトと明黄褐色粒子がブロック状に混入
pit	2.5Y 8/4	淡黄色シルト	灰黄褐色シルトが斑状に混入

第149図　S D-05、平面、断面図



第150図　ＳＤ—03・04・05・20出土遺物　6・7・21：½



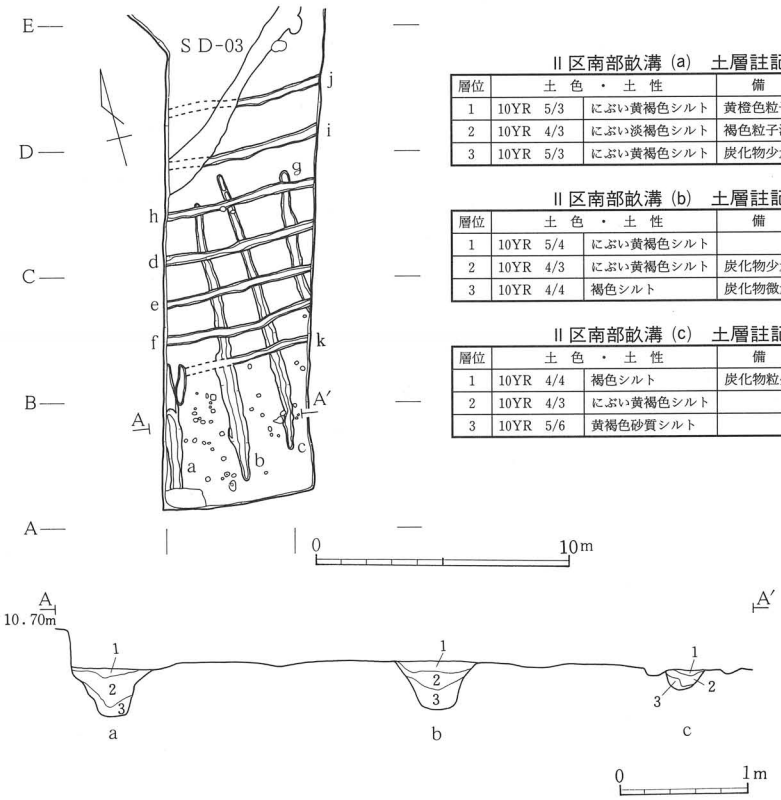
第151図　ＳＤ－20・24平面・断面図

SD-20 土層註記表 A

層位	土色・土性	
1	10YR 6/2	灰黄褐色シルト
2	10YR 5/2	灰黄褐色シルト
3	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト
4	10YR 5/1	褐灰色シルト
5	10YR 5/2	灰黄褐色シルト
6	10YR 6/1	褐灰色シルト
7	10YR 8/4	浅黄橙色

SD-20 土層註記表

層位	土色・土性		備考
1	2.5Y 4/3	オリーブ褐色シルト	
2	10YR 4/2	灰黄褐色シルト	
3	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト	
4	10YR 5/1	褐灰色シルト	
5	10YR 8/4	浅黄橙色シルト	
①	5Y 6/1	灰色シルト	SB-02 柱穴
②	10YR 5/2	灰黄褐色シルト	SB-02 柱穴
③	10YR 6/6	明黄褐色シルト	柱穴



II 区南部畝溝 (a)　土層註記表

層位	土色・土性		備考
1	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	黄橙色粒子
2	10YR 4/3	にぶい淡褐色シルト	褐色粒子混入
3	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	炭化物少量

II 区南部畝溝 (b)　土層註記表

層位	土色・土性		備考
1	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト	
2	10YR 4/3	にぶい黄褐色シルト	炭化物少量
3	10YR 4/4	褐色シルト	炭化物微量

II 区南部畝溝 (c)　土層註記表

層位	土色・土性		備考
1	10YR 4/4	褐色シルト	炭化物粒少量
2	10YR 4/3	にぶい黄褐色シルト	
3	10YR 5/6	黄褐色砂質シルト	

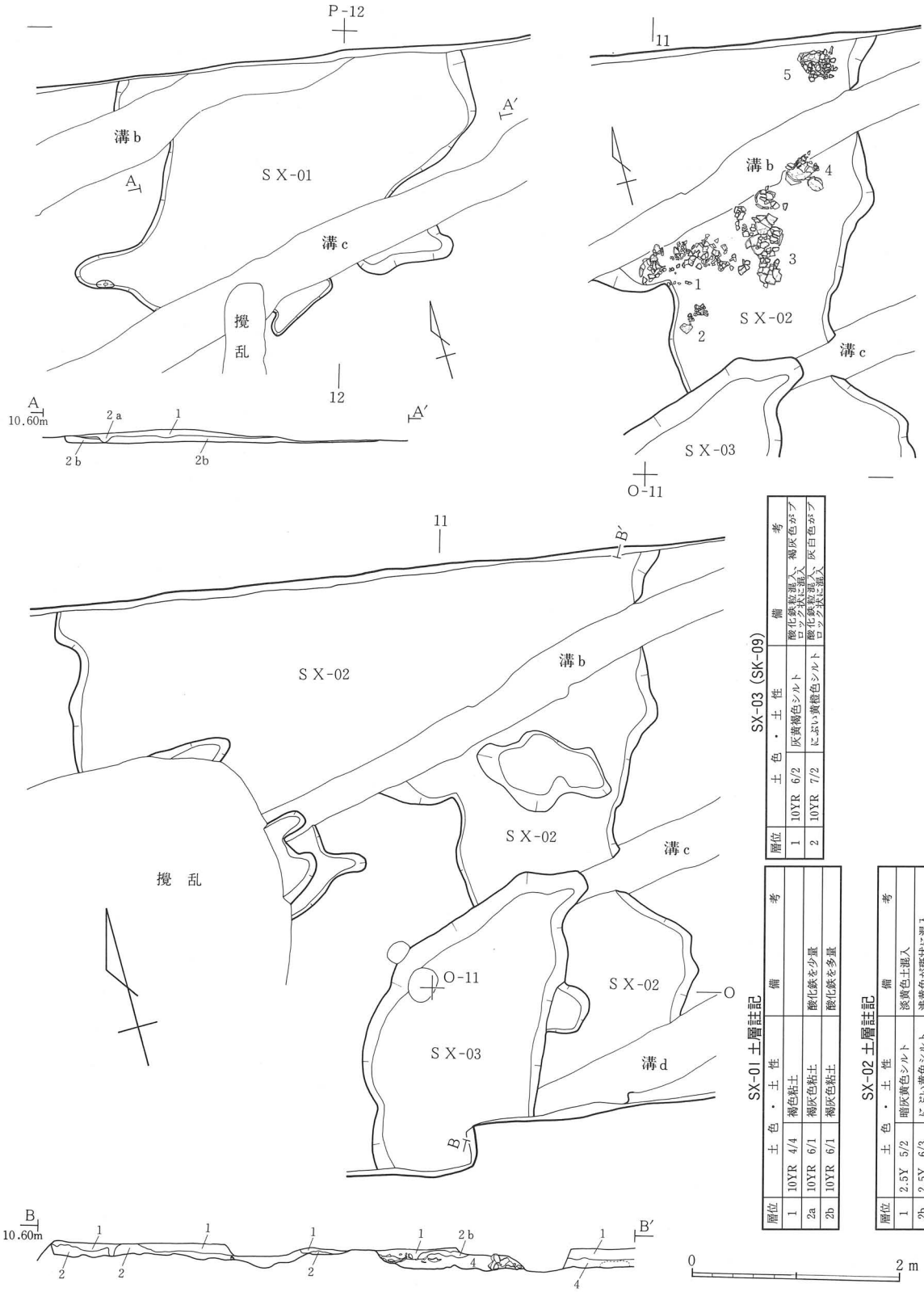
第152図　畝状遺構、平面・断面図（II 区）

出土遺物はない。後述する SX02・03 と一連のものである。

SX02（第 153～156 図）

I 区東部（0 －10•11 区付近）に位置し、5 号畝状遺構（溝 a～d）に切られる。上部は、天地返しにより削平され、また、新しい土坑（鉄塔の基礎坑など）により撹乱を受けている。規模は東西約 5.5 m×南北 5.6 m 以上、深さ 0.04～0.19 m で、さらに調査区外に伸びる。形状は不定形で、調査時にもプランは不明瞭であった。東壁寄り底面には不定形の浅い凹部があり、この付近で、甕 6 個体・坏 4 個体・鉢 1 個体（実測可能分）・須恵器壺片 1 点が、集中的に出土している。

出土遺物は上述のとおりで、甕は長胴形と球胴形の 2 種類があり、底部に木葉痕をもつものがある。甕体部の調整は粗密があるが、最終調整は磨きが多い。坏は、有段丸底のものが多いが、第 154 図 1 のように口縁部が屈曲しやや内傾するものもある。第 154 図 2 ・ 7 の坏や甕の口縁端部が角頭状を呈するものがある。この特徴は古墳時代中期後半～後期頃に時折みかける。



SX-01 土層註記

層位	土色・土性	備考
1	10YR 4/4 褐色粘土	
2a	10YR 6/1 褐灰色粘土	酸化鉄を少量
2b	10YR 6/1 褐灰色粘土	酸化鉄を多量

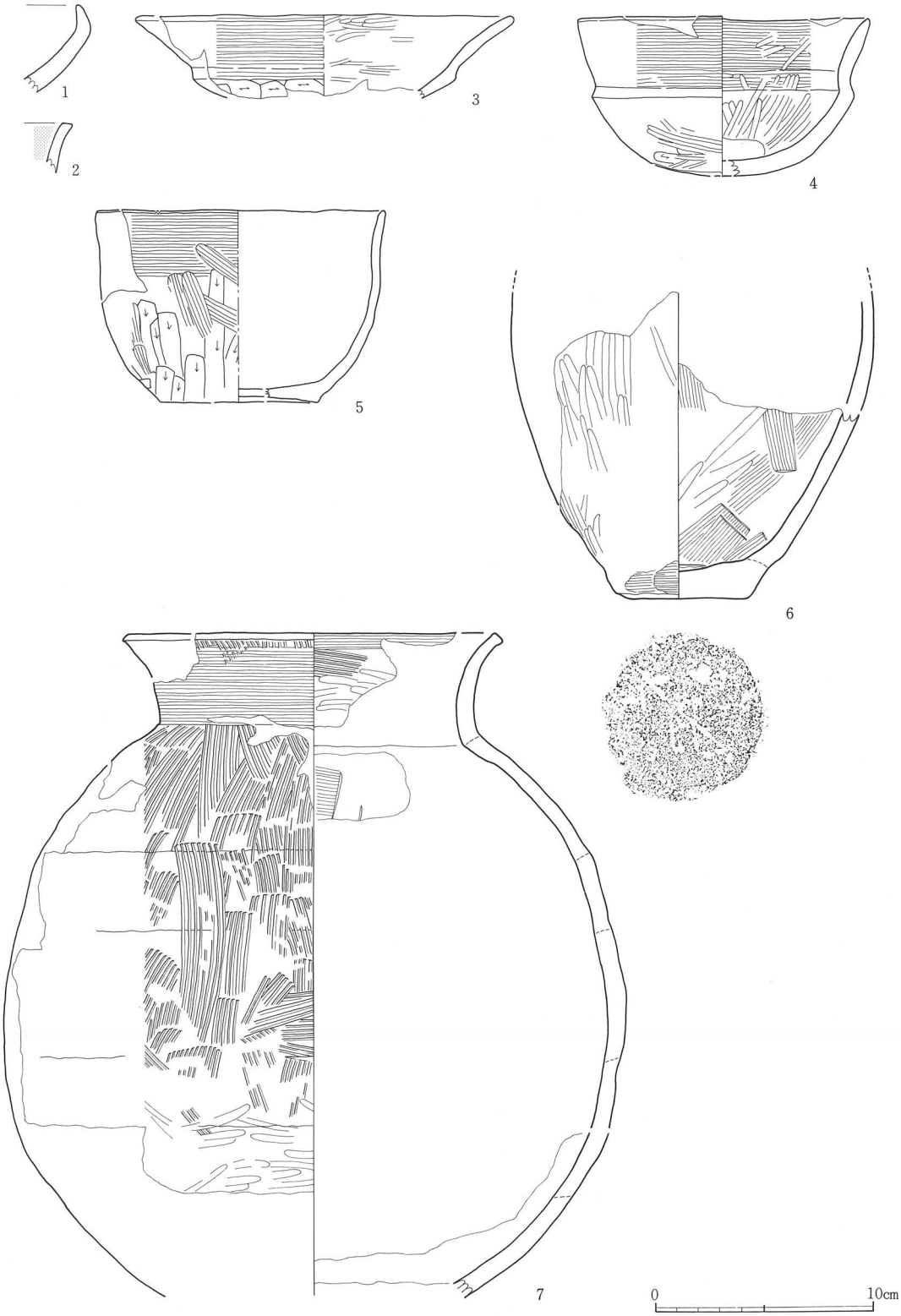
SX-03 (SK-09)

層位	土色・土性	備考
1	10YR 6/2 灰黄褐色シルト	酸化鉄粒混入、褐灰色がブロック状に混入
2	10YR 7/2 にぶい黄橙色シルト	酸化鉄粒混入、灰白色がブロック状に混入

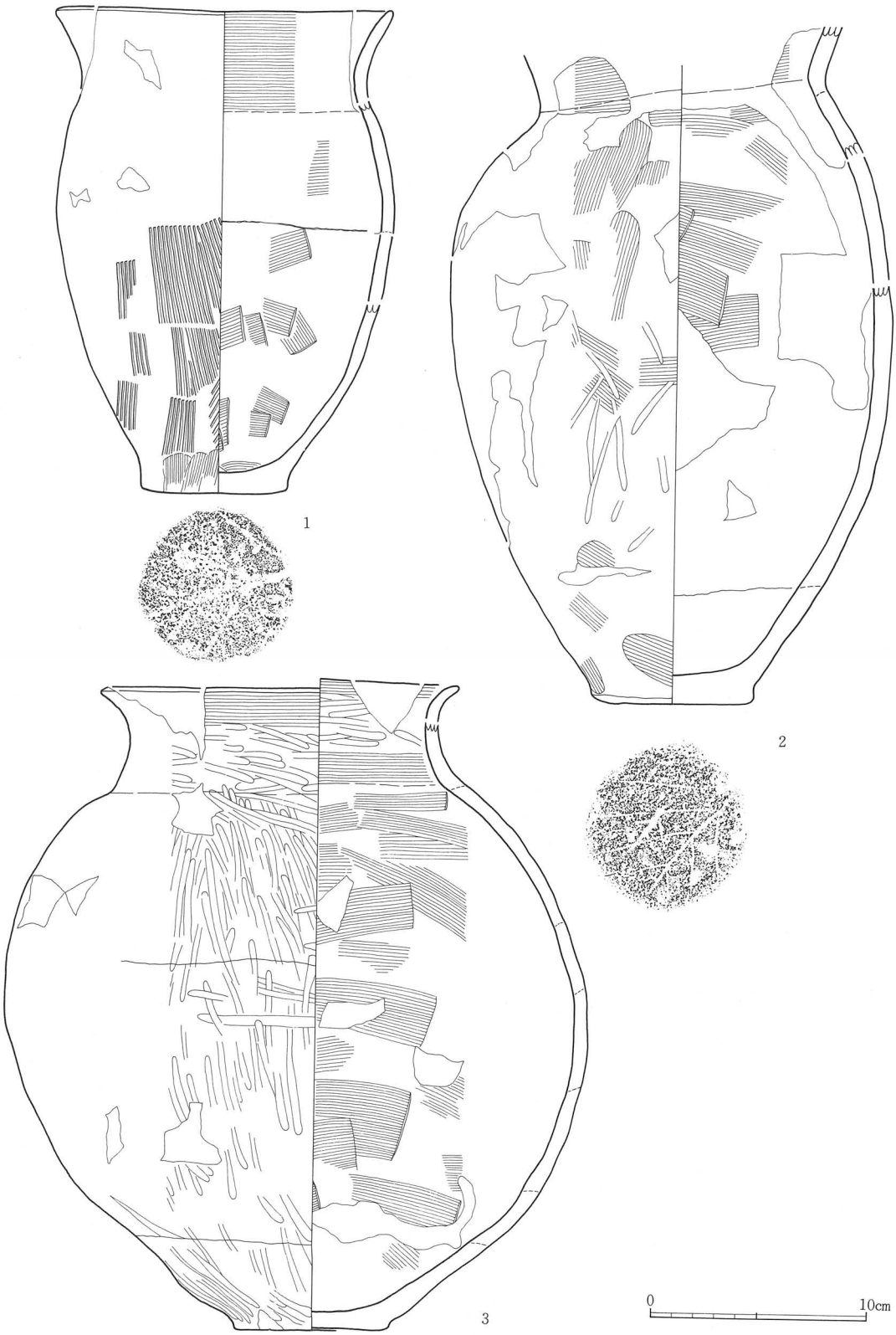
SX-02 土層註記

層位	土色・土性	備考
1	2.5Y 5/2 暗灰黄色シルト	淡黄色土混入
2b	2.5Y 6/3 にぶい黄色シルト	淡黄色が斑状に混入
4	2.5Y 6/2 灰黄色シルト	灰白色土が斑状に混入

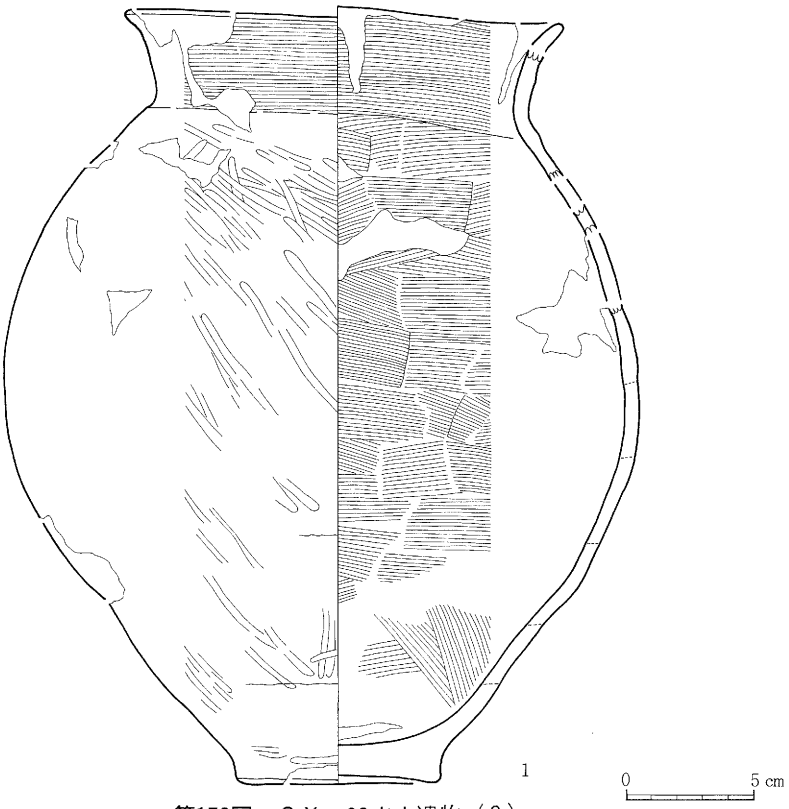
第153図　ＳＸ―01・02・03平面・断面図



第154図　ＳＸ－02出土遺物（１）



第155図　ＳＸ－02出土遺物（２）



第156図　ＳＸ－02出土遺物（３）

第155図2の甕胎土には金雲母が目立つ。これらの土器群は、底面あるいは底面よりやや浮いた状態で出土したが、一括性の高いものと判断される。祭祀行為に関わるものであろうか。

SX03（第153図）

Ｉ区東部（N－10・11区付近）に位置し、５号畝状遺構（溝c・d）に切られる。SX02との重複関係は明確でない。規模は2.55ｍ以上×1.16ｍ以上、深さ0.09～0.15ｍで、形状は不定形である。

出土遺物はなく、また、SX02より浅い点から独立して扱ったが、あるいはSX02と一体のものかもしれない。

(2)　奈良・平安時代

奈良・平安時代に属する遺構は、住居跡１軒・土坑跡１基・溝跡３条・畝状遺構５基を検出した。SD06としたものは、１号畝状遺構の一部と理解し欠番とする。

住居跡（SI）

SI04（第157～161図）

Ⅰ区中央（0－7・8区）に位置し、SK13・SD24を切る。南東部は電力鉄塔の基礎坑により一部破壊されているが、他は削平や撹乱を受けておらず極めて保存状態が良い。南北に拡張し、床を上げて改築を行っている。規模は、新期が3.94 m×3.87 m・壁高約58 cm前後を測る。形状は不整方形である。カマドは東壁南寄りに位置するが、残存状況は悪く、故意に破壊したものであろうか。内部には支脚に転用されたとみられる須恵器坏（第160図8）が出土した。煙道はトンネル状を呈し天井部が残っている。長さ1.65 m、幅0.36 m、深さ0.35 m（煙出し部深さ0.48 m）を測る。床面は古期の住居を埋めて床面とし、その後2回の貼床を行っていることから、新期床面は計3回の変遷が認められる。5層上面（床1）、6ａ層上面（床2）、7ａ層（床3）の3面である。このうち、床3では、東壁寄りにカマド焚き口焼土や袖の基底部が若干検出された。柱穴・貯蔵穴・壁溝は不明である。床1の上面では炭化物層あるいは炭化物を含む層（2ａ・3ａ・3ｃ層）が認められたことから、住居の最終段階あるいは廃絶後に火災にあった可能性もある。

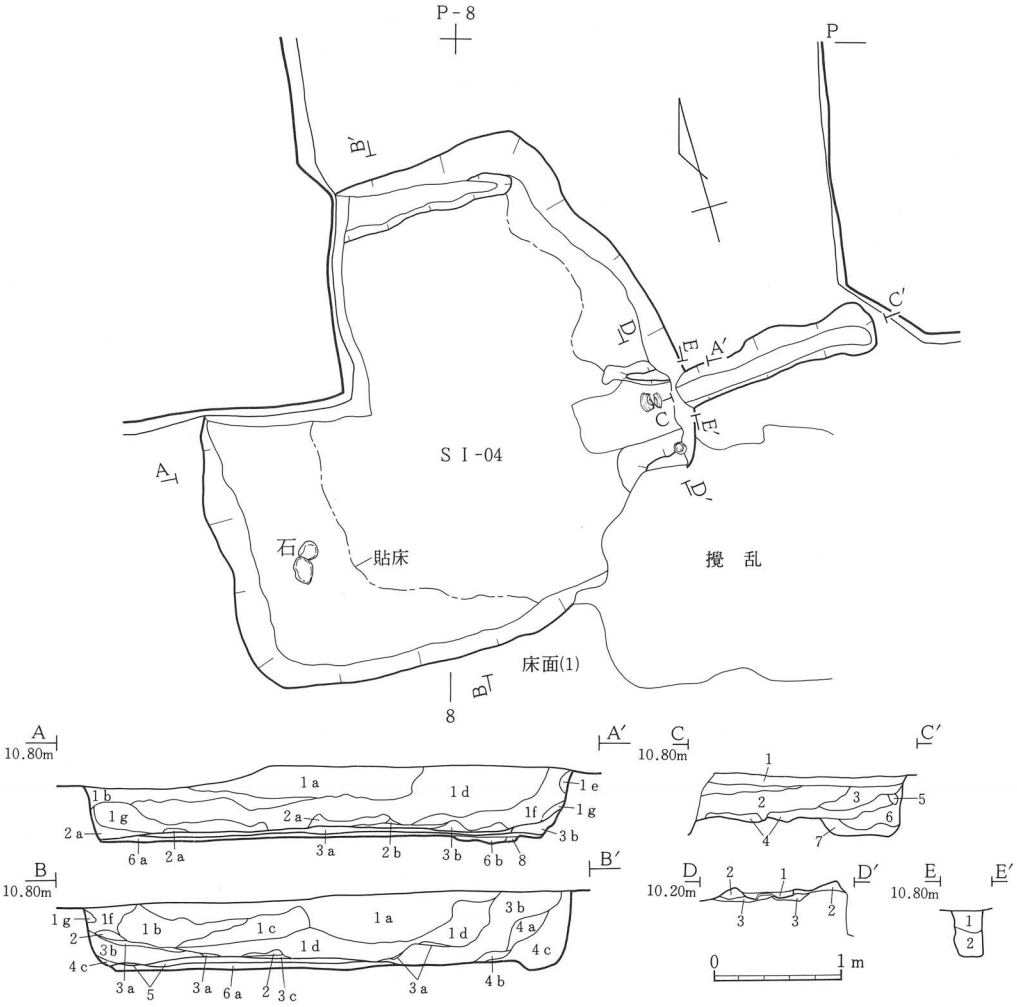
古期の住居跡は、新期のものより小さく、深い。その規模は、検出面で3.47 m×3.24 m、壁高推定約74 cmを測る。形状は方形である。カマドは東壁やや南寄りに位置するが、残存状況は悪い。煙道の特徴は前述したとおりで、改変した痕跡はなく古期のものを新期段階で再利用している。床面（床4）は平坦で、南壁よりに、ピット、不定形の凹地、カマド前と南脇に炭化物の分布が認められた。また、カマド手前より鍬鋤先・鉄鏃が出土し注意をひいた。古期段階でも柱穴・貯蔵穴は不明であり、壁溝はない。古期段階は、奈良時代の可能性もある。

出土遺物は、土師器坏・小型甕・長胴甕、須恵器坏・高台付坏・甕、鉄器（鍬鋤先・鉄鏃・不明）、弥生土器がある。第160図1・2は土師器坏で、ロクロ調整？後いずれも体部下端に削り調整を加えている。3・4は土師器甕で、3は小型、4は長胴甕であろう。5～14は須恵器坏で、いずれも底部切り離しは回転ヘラ切りで、9・13は体部下端に削り調整を加えている。8は、新期段階（床1・2に対応）のカマド支脚に転用されたとみられる坏で、外面には7条の沈線が巡り、内底面には浅く凹線が認められる珍しいものである。沈線は金属器を模倣したものであろうか。15・第161図1～5は鉄器である。15は鍬鋤先の完形品である。第161図1・3は鉄鏃であろう。2は、図上端に木質が残り、下端は尖っており錐のような製品が考えられる。4・5は性格不明であるが、ベルトの鉸金具あるいは釘などが予想される。

土坑（SK）

SK12（第166図）

Ⅰ区東端（N－12区）に位置し、5号畝状遺構に切られ、6号畝状遺構を切る。上部は天地返しにより削平されている。規模は北辺1.4 m以上、東辺0.3 m以上である。深さは0.1 m前後で、底面は平坦である。方形の土坑と理解したが、竪穴住居跡の可能性もあろう。遺物は出



SI-04 土層註記表

層位	土色・土性		備考
1a	10YR 5/8	黄褐色粘土質シルト	明黄褐色土少量
1b	10YR 6/8	明黄褐色粘土質シルト	黄褐色土を含む
1c	10YR 5/8	黄褐色粘土質シルト	明黄褐色土少量
1d	10YR 5/8	黄褐色粘土質シルト	
1e	10YR 3/4	暗褐色粘土質シルト	
1f	10YR 6/8	明黄褐色粘土質シルト	
1g	10YR 6/6	明黄褐色粘土質シルト	
2a	10YR 4/4	褐色粘土質シルト	炭化物少量
2b	10YR 6/8	明黄褐色砂質シルト	
3a	10YR 3/4	暗褐色炭層	
3b	10YR 6/8	明黄褐色粘土質シルト	
3c	10YR 4/4	褐色シルト質粘土	炭化物少量
4a	10YR 4/6	褐色粘土質シルト	
4b	10YR 4/6	褐色シルト質粘土	
4c	10YR 7/6	明黄褐色砂質シルト	
5	10YR 8/4	浅黄橙色粘土	上面に炭化物（第1貼床面）
6a	1.5Y 8/3	淡黄色シルト質粘土	（第2貼床）
6b	10YR 6/6	明黄褐色粘土	焼土
7a	10YR 7/6	明黄褐色粘土	（第3貼床）
7b	10YR 7/6	明黄褐色粘土	
8	10YR 2/2	黒褐色炭層	

SI-04 煙道東西土層註記

層位	土色・土性		備考
1	10YR 5/3	にぶい黄褐色粘土質シルト	
2	10YR 6/4	にぶい黄橙色シルト	
3	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト	焦土ブロックを含む
4	10YR 3/3	暗褐色粘土質シルト	焦土ブロックを含む
5	10YR 5/6	黄褐色シルト	
6	10YR 3/4	暗褐色粘土質シルト	焦土ブロックを含む
7	10YR 4/6	褐色粘土質シルト	

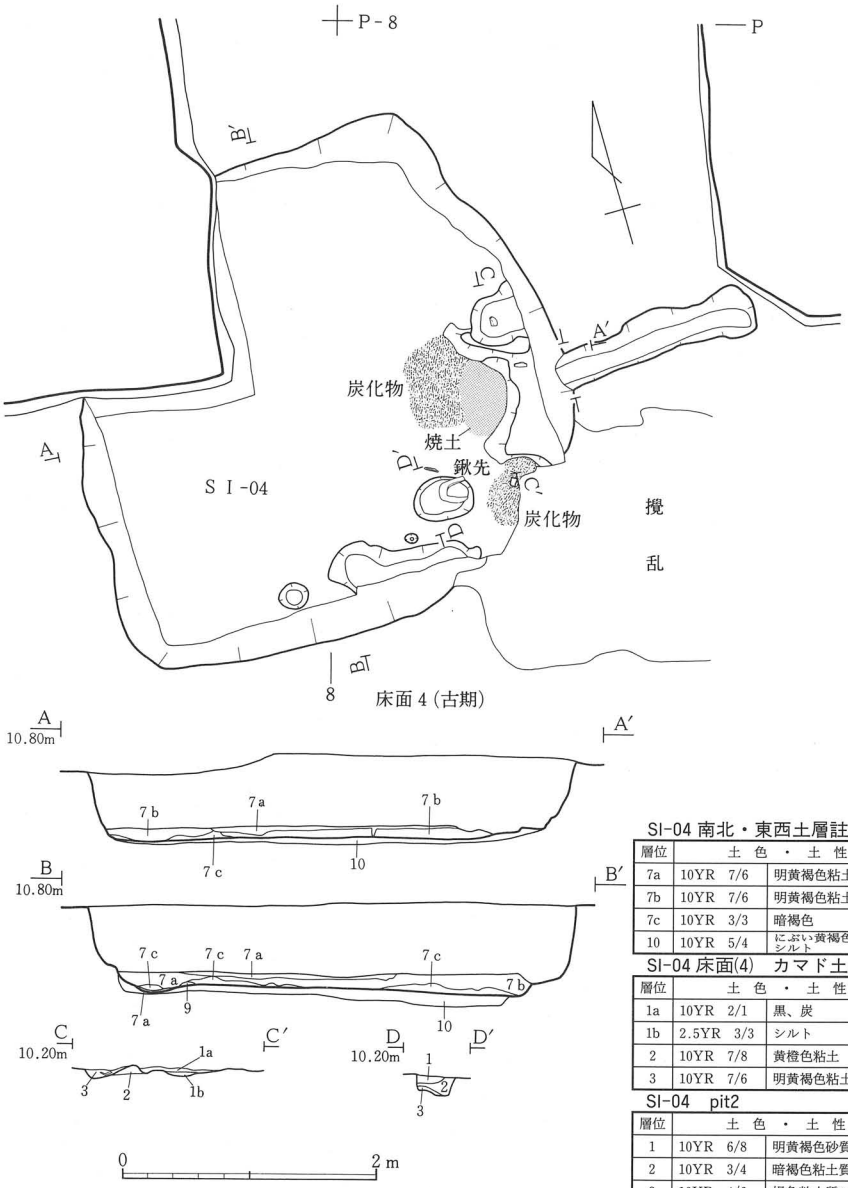
SI-04 カマド土層註記

層位	土色・土性		備考
1	10YR 2/1	炭化物	焼土を含む
2	10YR 4/4	褐色粘土質シルト	
3	10YR 8/3	浅黄橙色粘土	

SI-04 煙道南北土層註記

層位	土色・土性		備考
1	10YR 5/3	にぶい黄褐色粘土質シルト	黒色粘土をブロック状に含む
2	10YR 6/4	にぶい黄橙色シルト	沿辺部が焼けている

第157図　SI —04平面・断面図（1）



SI-04 南北・東西土層註記

層位	土色・土性		備考
7a	10YR 7/6	明黄褐色粘土	第3貼床
7b	10YR 7/6	明黄褐色粘土	
7c	10YR 3/3	暗褐色	
10	10YR 5/4	にぶい黄褐色粘土質シルト	灰白色土ブロック層、第4貼床

SI-04 床面(4)　カマド土層註記

層位	土色・土性		備考
1a	10YR 2/1	黒、炭	焼土少量
1b	2.5YR 3/3	シルト	焼土
2	10YR 7/8	黄橙色粘土	炭化物焼土を多量
3	10YR 7/6	明黄褐色粘土	

SI-04　pit2

層位	土色・土性		備考
1	10YR 6/8	明黄褐色砂質シルト	炭化物を少量
2	10YR 3/4	暗褐色粘土質シルト	炭化物
3	10YR 4/6	褐色粘土質シルト	

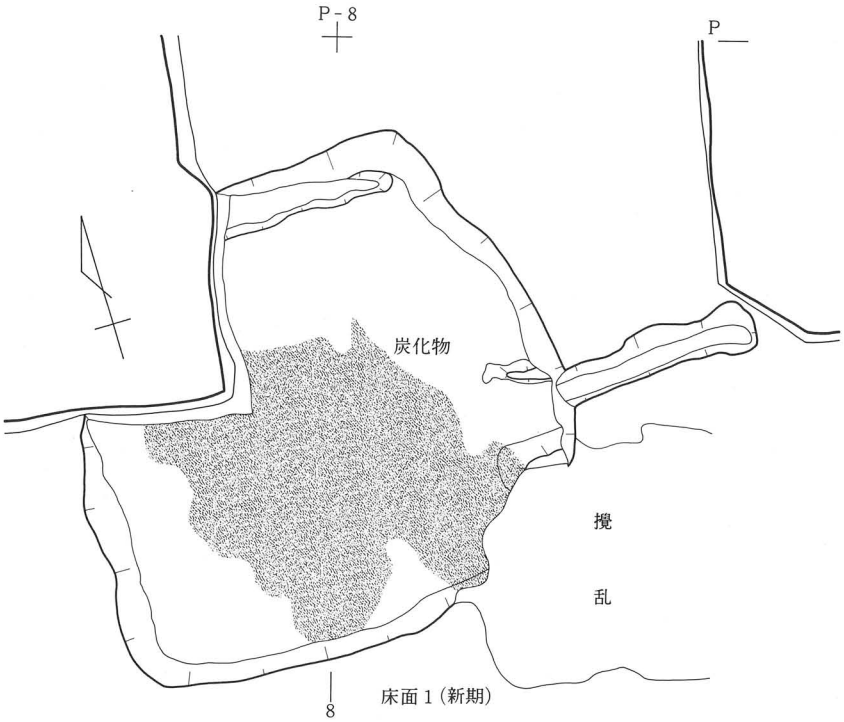
第158図　SI－04平面・断面図（2）

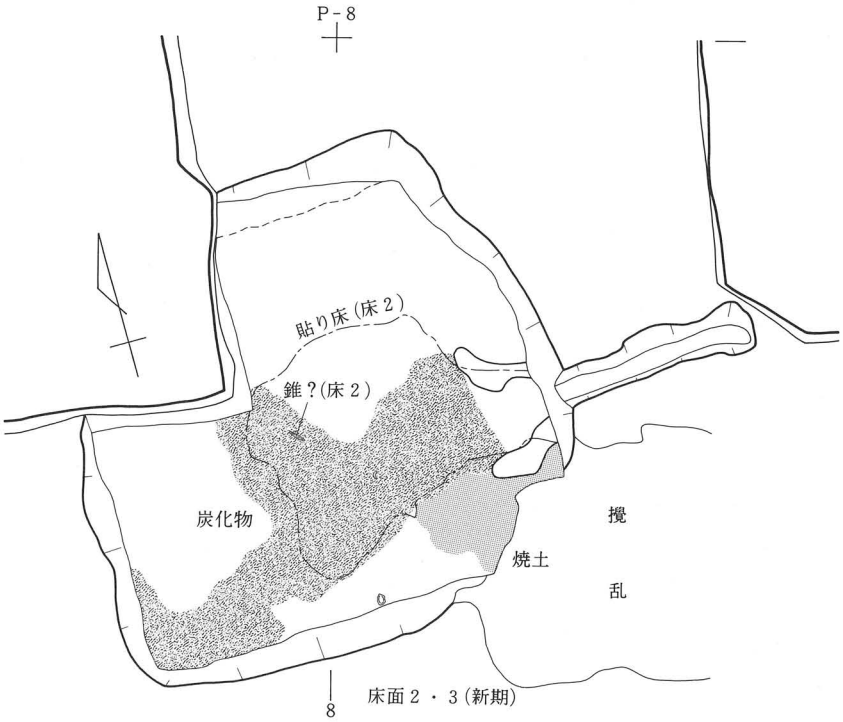
土していない。遺構の重複関係から、奈良～平安時代のものと考えられる。

溝跡（SD）

SD07（第162図）

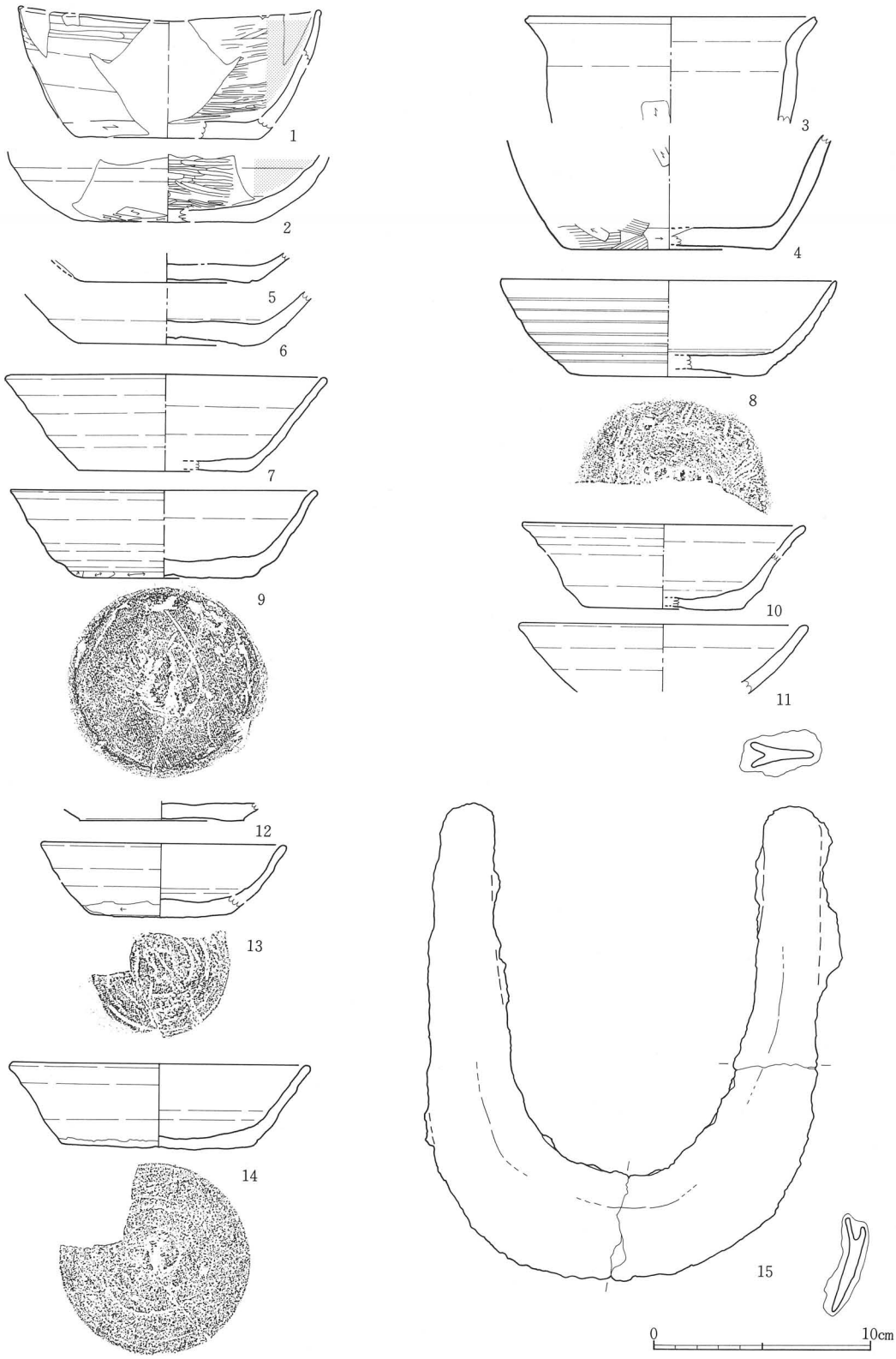
II区西部（E・F－18区）に位置し、SD08・09を切る。上部は天地返しや撹乱坑により、削平されている。規模は検出長約7.2m、幅0.4～0.5m、深さ0.03～0.19mを測る。方向は南北で真北に近いが、緩く孤状を呈している。



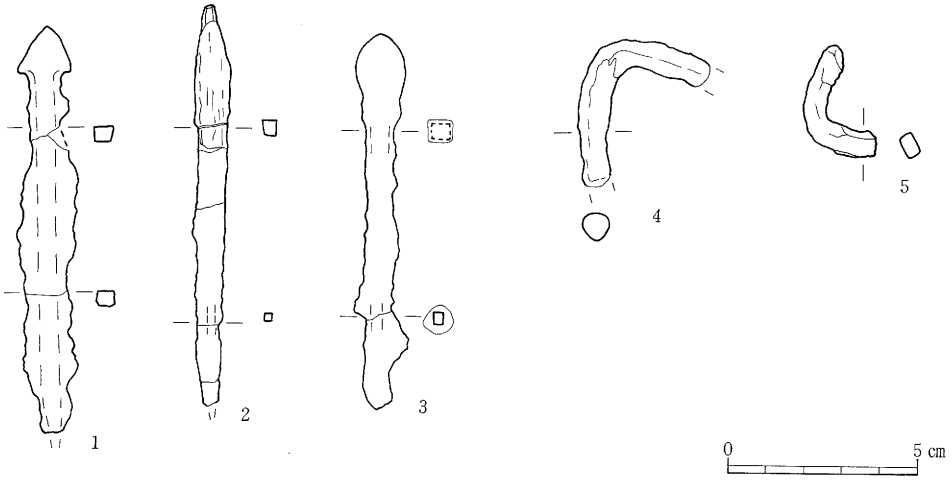


0　2 m

第159図　ＳＩ―04平面・断面図（３）



第160図　ＳＩ－04出土遺物（１）



第161図　ＳＩ－04出土遺物（２）

出土遺物は土師器片(非ロクロ)、須恵器甕片がある。図示できるものはない。重複関係から平安時代の溝跡と考えられる。

SD08（第162・163図）

II区西部（E－16・17、F－18区）に位置し、SD09・２号畝状遺構を切り、SB01～05・SD07に切られる。上部は、天地返しにより削平をうける。規模は検出長13.3ｍ以上、幅１ｍ前後、深さ0.17～0.46ｍを測り、西側で序々に深度を増していく。方向は南北方向から西方へ屈曲し、N－9°－EからN－81°－Eへ変化する。断面形は鍋底状に近い。

出土遺物は、土師器鉢・甕、須恵器坏・鉢・短頸瓶・長頸瓶？・甕、弥生土器がある。第163図１は口縁部が屈曲する土師器鉢で、管見では類例がない。内面は淡青色を呈し、底部に木葉痕がある。２は土師器甕で、底部に木葉痕がある。３は同一個体とみられる坏で、底部切り離しは回転ヘラ切りである。４は短頸壺。５は口縁部が内側に屈曲する鉄鉢形鉢である。６・７は甕体部破片である。３～７は、いずれも須恵器である。遺物から判断して、奈良時代の溝跡である。位置関係から、後述する２号畝状遺構を区画していた可能性もあろう。

SD25（第168・169図）

１トレンチ西部（J・K－11区）に位置し、７号畝状遺構に切られる。上部は、天地返しにより削平をうける。規模は検出長1.8ｍ、幅約0.7ｍ、深さ約0.2ｍを測る。方向は東西を示し、N－82°－Eである。また、規模を減じる溝跡が南へ伸びる。方向はほぼ真北を示す。断面形は鍋底状を呈する。

出土遺物は、土師器坏、須恵器坏がある。第169図２は丸底風平底の内黒坏である。３・４

は須恵器坏底部片である。3は切り離し不明で、回転ヘラ削り調整を施こす。4は明確でないが、回転ヘラ切り？後ナデ調整を施こしているものと思われる。これらの遺物の特徴から、奈良時代の溝跡と考えられる。

1号畝状遺構（第164・165図）

II区西部に位置し、SA01・SB05に切られ、SD05・09・20を切る。上部は、天地返しにより削平を受けている。規模は南北（溝a～n間）16.7m、東西（溝e）17.2m以上を測る。東側にさらに広がり、北側へも広がる可能性がある。溝跡はa～nの14条あり、南側では間隔が不規則である。長さは最長のもので17.2m以上、幅は0.3m前後が多く、深さは0.2～0.3mで両端部が浅くなっていく。方向は北部のもので、N－75～77°－E、南部のものでN－80～88°－Eである。

出土遺物は、土師器高坏・小型壺、須恵器坏、石製模造品、種子、昆虫（羽）がある。第165図1・2は古墳時代中期の高坏と小型壺であろう。3・4も中期の石製模造品で、円板と剣形のものである。須恵器坏は図示できないが、底部切り離しが回転ヘラ切りのようで、奈良・平安時代のものと考えられる。SI04と関連する可能性もあろう。

2号畝状遺構（第164図）

II区中央部に位置し、SD08・SB01に切られ、SI01を切る。上部は、天地返しにより削平を受けている。規模は南北8.7m以上、東西約18mと推定される。溝跡はa～gの7条あり、いずれも深い部分が削平を免れて残ったものと考えられる。また、溝gは方向を異にするが、特徴が類似していることから、この遺構の一部と理解した。長さは最長の溝で5.4m、幅は0.3m前後、深さは0.1m未満のものが多い。方向は、N－74°～87°－Eでややばらつきがある。

出土遺物は、非ロクロの土師器片が少量ある。

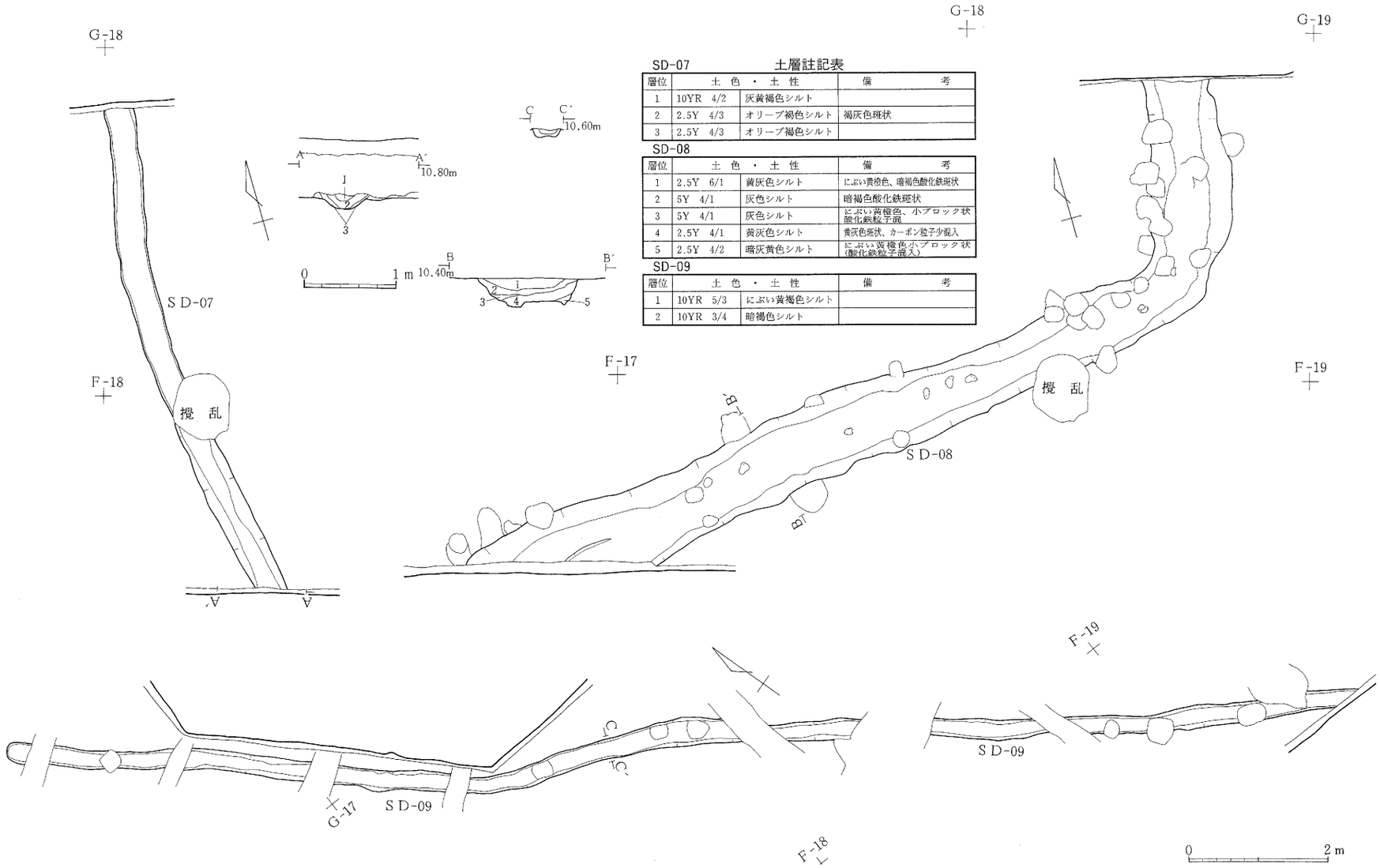
5号畝状遺構（第166・167図）

I区東部に位置し、SD14に切られ、SX01～03・SK11・12・6号畝状遺構を切る。上部は天地返しにより削平され、溝bは撹乱を受けている。規模は南北8m以上、東西10m以上とみられる。溝跡はa～eの5条あり、ほぼ等間隔で並ぶ。西辺の溝端がおよそ揃っている。長さは最長の溝（溝d）で約9m、幅は0.2～0.7m、深さ0.1～0.15mである。方向はN－74°～80°－Eで、各溝間の振れ幅は少ない。

出土遺物は土師器坏・高坏・甕がある。第167図1は住社式の坏、2は南小泉式の高坏と考えられ、溝bから出土した。甕は図示できないが、ロクロ使用のもので溝cから出土している。この甕破片から、平安時代の遺構であろう。

6号畝状遺構（第166図）

I区東部位置し、5号畝状遺構・SK12に切られる。SK11との重複は明確ではないが、この



SD-07　　土層註記表

層位	土色・土性		備考
1	10YR 4/2	灰黄褐色シルト	
2	2.5Y 4/3	オリーブ褐色シルト	褐灰色斑状
3	2.5Y 4/3	オリーブ褐色シルト	

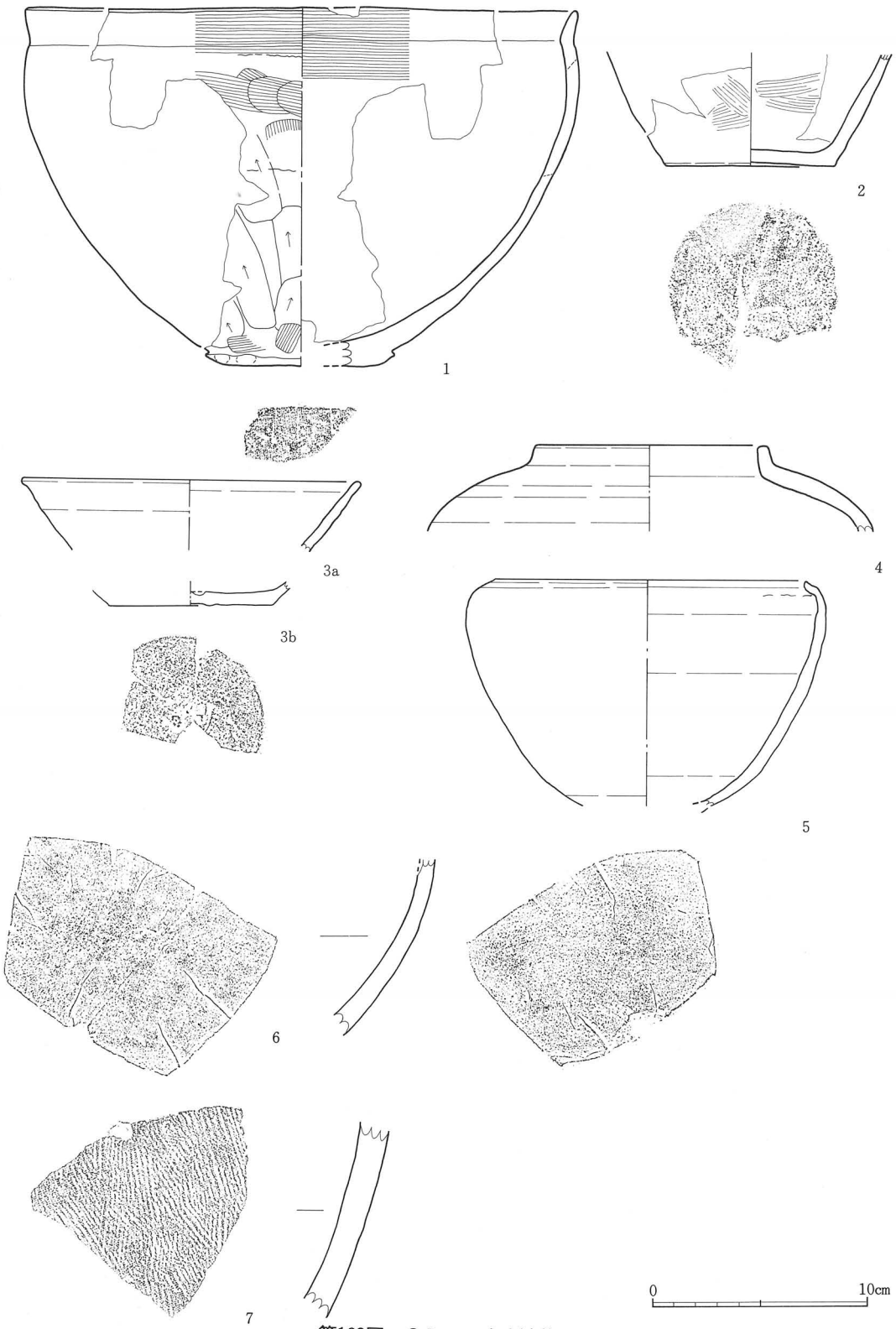
SD-08

層位	土色・土性		備考
1	2.5Y 6/1	黄灰色シルト	にぶい黄橙色、暗褐色酸化鉄斑状
2	5Y 4/1	灰色シルト	暗褐色酸化鉄斑状
3	5Y 4/1	灰色シルト	にぶい黄橙色、小ブロック状酸化鉄粒子混
4	2.5Y 4/1	黄灰色シルト	黄灰色斑状、カーボン粒子少混入
5	2.5Y 4/2	暗灰黄色シルト	にぶい黄橙色小ブロック状(酸化鉄粒子混入)

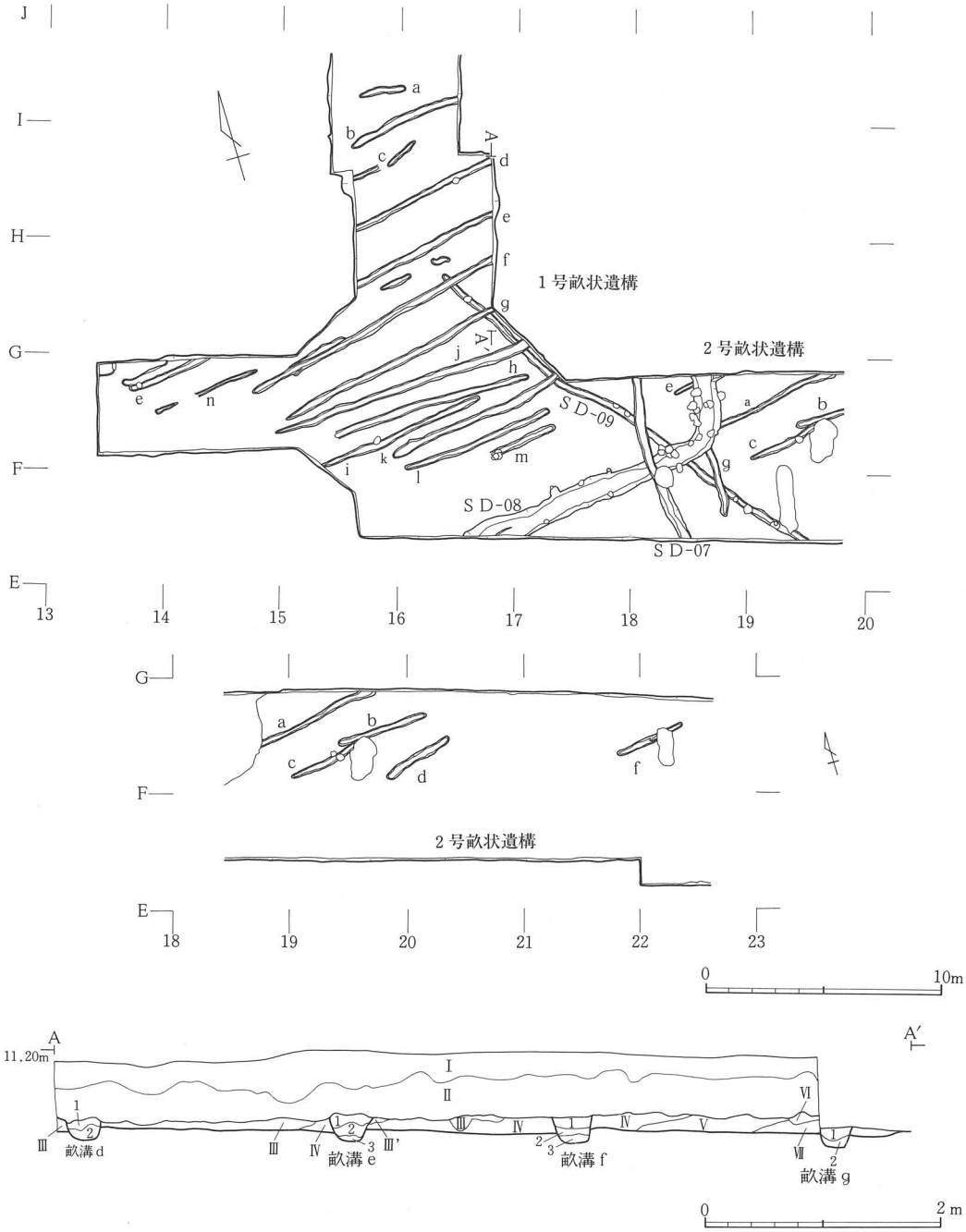
SD-09

層位	土色・土性		備考
1	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	
2	10YR 3/4	暗褐色シルト	

第162図　ＳＤ―07・08・09平面・断面図



第163図　ＳＤ－08出土遺物



1号畝状遺構土層註記表

層位	土色・土性		備考
Ⅰ	10YR 6/3	にぶい黄橙色シルト	表土
Ⅱ	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト	天地返し黒褐色土
Ⅲ	10YR 7/1	灰白色シルト	酸化鉄集積
Ⅲ′	10YR 8/6	黄橙色シルト	
Ⅳ	10YR 7/1	灰白色シルト	褐色粒子多量
Ⅴ	2.5YR 4/3	オリーブ褐色シルト	褐色粒子多量、灰白色土微量、酸化鉄粒子混入
Ⅵ	10YR 6/1	褐灰色シルト	明黄褐色土が斑状に混入
Ⅶ	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	褐色粒子多量

畝溝d土層註記表

層位	土色・土性		備考
1	10YR 4/4	褐色シルト	浅黄橙色粒子混入
2	10YR 3/4	暗褐色シルト	炭化物粒子わずかに混入

畝溝e土層註記表

層位	土色・土性		備考
1	10YR 6/1	褐灰色シルト	酸化鉄集積
2	10YR 6/1	褐灰色シルト	酸化鉄粒子混入
3	2.5YR 7/3	浅黄色シルト	酸化鉄粒子混入、褐灰色土斑状に入る

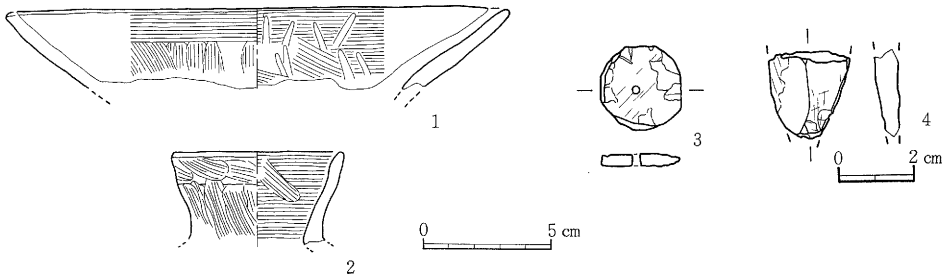
畝溝f土層註記表

層位	土色・土性		備考
1	10YR 6/1	褐灰色シルト	浅黄色シルトブロック、酸化鉄粒子多量
2	5Y 6/1	灰色シルト	1、土が混入
3	2.5Y 6/3	にぶい黄色シルト	酸化鉄粒子混入、灰色土斑状にまじる

畝溝g土層註記表

層位	土色・土性		備考
1	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	
2	2.5Y 5/4	黄褐色シルト	

第164図　1号・2号畝状遺構（Ⅱ区）平面・断面図



第165図　畝状遺構（Ⅱ区）出土遺物　3・4：½

土坑より新しいものと思われる。上部は天地返しにより削平、西端の溝 f は撹乱坑により撹乱をうけている。規模は南北 1.6 m 以上、東西 8 m 以上で、南側や東側へさらにひろがるものと予想される。溝跡は f～h の 3 条あり、f と g の間にもう 1 条あった可能性もある。長さは溝 h で 1.6 m を測るが、本来の長さは不明である。幅はいずれの溝も 0.3 m 前後、深さは 0.05～0.12 m である。方向は、N－24°～29°－E でほぼ揃っている。

出土遺物はないが、遺構の重複関係や調査時の所見から、奈良～平安時代の遺構と理解した。

7 号畝状遺構（第 168・169 図）

1 トレンチに位置し、SK15・SD25 を切る。上部は、天地返しにより削平を受ける。規模は不明である。溝跡は a～d の 4 条ある。長さは溝 b で 2.9 m を測る。幅は 0.2～0.3 m、深さ 0.05～0.13 m を測る。方向は N－80°－E 前後であるが、溝 d は N－65°－E とずれている。

出土遺物は、土師器坏・須恵器甕がある。第 169 図 1 は溝 b から出土した土師器坏で、逆台形を呈する。奈良時代のものであろう。須恵器甕は体部破片で、時期を特定できない。坏の出土から奈良時代頃の遺構と考えられるが、溝 b は溝 c に切られており時間差がある。

(3)　中世・近世

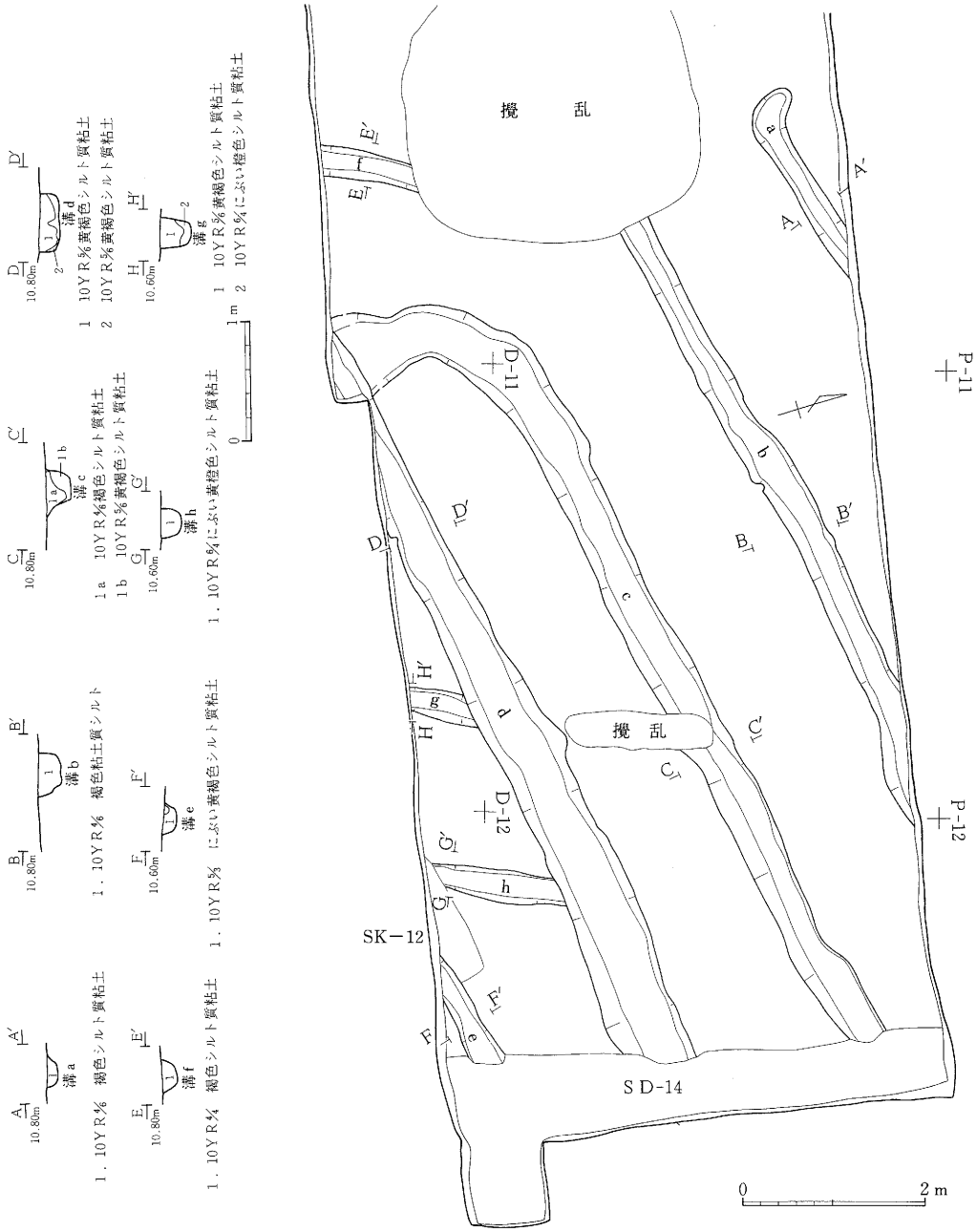
中世・近世に属する遺構は、柱穴列 1 条・掘立柱建物跡 6 棟・溝跡 6 条・塚 1 基である。このうち、塚に関しては精査を行っていない。

柱穴列（SA）

SA01（第 170 図）

Ⅱ区西部（F－13～15）に位置し、SD 5・20・1 号畝状遺構を切る。上部は削平を受け、残存状況は不良である。この遺構は、西端で北側へ曲がり、東西 9.3 m、南北約 3.2 m 以上を測る。東側は、さらに伸びるかどうかは不明である。柱穴は、主要なものは 20～30 cm で、深さ 6～20 cm の規模である。主柱穴とみられるものは、1.6～2.2 m（約 5.3～7.3 尺）と間隔が不揃いである。方向は東西が約 N－86°－E、南北が N－11°－W である。

出土遺物はない。後述する建物跡と方向がおよそ合うこと、柱穴の特徴の類似や重複関係に



第166図　5号・6号畝状遺構（Ⅰ）平面・断面図

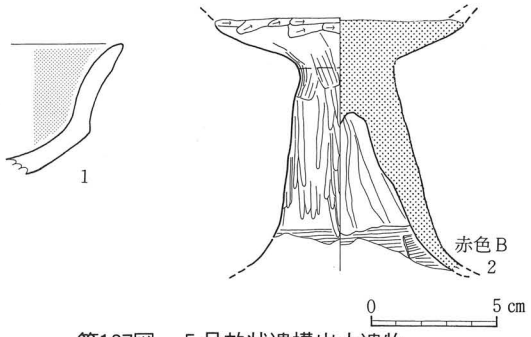
矛盾しないことから、中世と考えられる。ただ、どの建物跡に対応するか不明である。また、柱痕跡の認められるものがあることから、塀や柵が想定されよう。

掘立柱建物跡（SB）

SB01（第171図）

Ⅱ区中央付近（E･F−18･19付近）に位置し、SD08･09･2号畝状遺構を切る。また、SB02･

03と重複関係にあるが、新旧は不明である。上部は天地返しにより、削平を受けている。規模は不明だが、南辺部3間（6.7 m）以上、西辺部2間（6.25 m）以上である。南側に庇が付くものと考えられる。柱間寸法は、7尺・8尺が混用されている。方向は西辺でN－28°－Wを示す。柱穴は25～35 cmのものが多く、深さは23～56 cmで、特に南辺の柱穴は50 cm前後で揃う。柱痕跡には、角柱を使用したことが判明するものもある。時期を決定できる遺物は出土していない。



第167図　5号畝状遺構出土遺物

SB02（第172図）

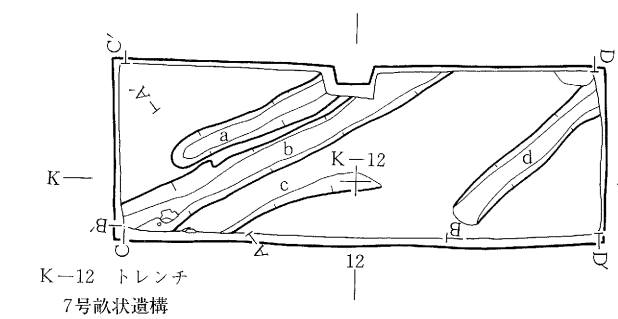
II区西部（E・F－16～18）に位置し、SB04・SD08・09・20を切る。また、SB01～03とも重複関係にあるが、新旧は不明である。上部は天地返しにより、削平を受けている。規模は東西4間（推定10.4 m）、南北3間（約7.2 m）以上とみられる。この建物跡は、東西2面に庇が付くものと考えられ、北辺側は縁であろうか。柱間寸法は、7～9尺がみられる。方向は東辺でN－16°－Wを示す。柱穴は残存状況の良いもので30～40 cm、深さは16～58 cmまであるが、残こりの良いもので40～50 cmを測る。柱痕跡は四角形を呈するものが多く、角柱を多様している。このことから、II区の建物跡のうち最も新しいものと予想される。土師器が少量出土しているが、時期を決定できる遺物はない。

SB03（第173図）

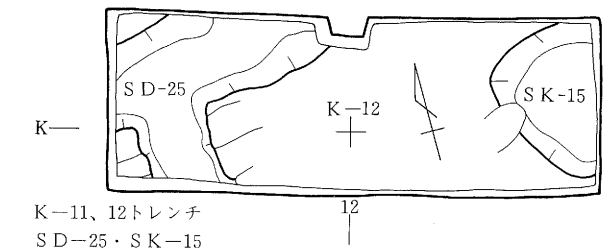
II区西部（E・F－16～18区）に位置し、SD08・09・20を切る。SB01・02・04と重複関係にあるが、新旧は不明である。上部は天地返しにより削平を受けている。規模は不明だが、東西3間（7.36 m）以上、南北2間（推定5.3 m）以上と予想される。北側に半間とみられる縁あるいは庇が取り付く。柱間寸法は7～9尺がみられる。方向は東辺でN－15°－Wを示す。柱穴は20～30 cmで、深さ30～40 cm代のものが多い。一部に角柱が認められる。出土遺物はない。

SB04（第174図）

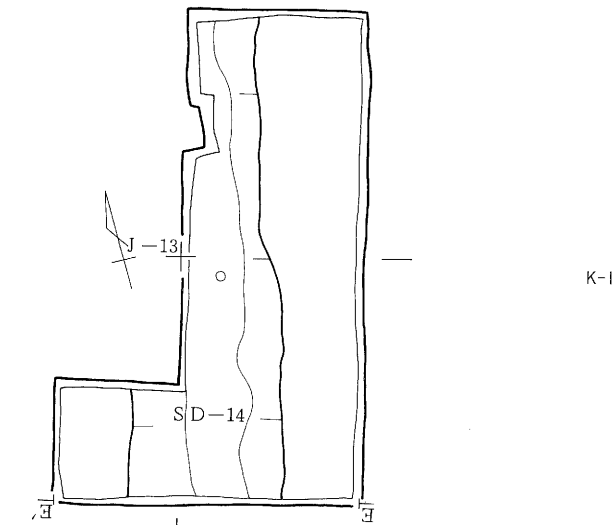
II区西部（F－16～18区）に位置し、SD05・08・20を切る。SB02・03・05と重複関係にあるが、新旧は不明である。上部は天地返しにより削平を受けている。規模は不明だが、東西3間（9.2 m）、南北1間（3.8 m）以上である。北側に庇が付くが、東側は半間程（4尺）しかなく縁であろうか。柱間寸法は不揃いである。方向は東辺でN－3°－Eと、他の建物跡に比べ、真北に近い。柱穴は20～30 cmが平均的で、深さは30～40 cm代が多い。時期決定できる遺物はないが、角柱と確認できる柱穴はなく、最も古相を呈する建物跡と思われる。



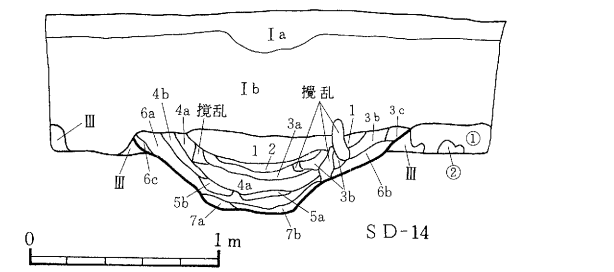
K—12 トレンチ
7号畝状遺構

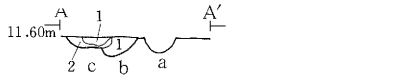


K—11、12トレンチ
SD—25・SK—15

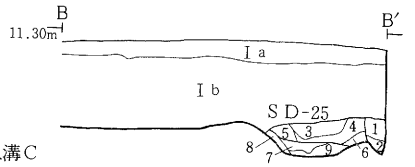


J—13 トレンチ
SD—14



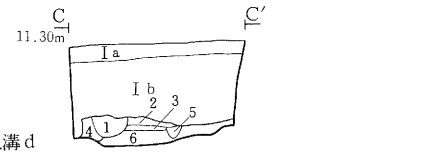


畝溝a		10YR 3/3	暗褐色シルト	灰褐色土、酸化鉄混入
畝溝b	1	10YR 3/3	暗褐色シルト	酸化鉄混入
	2	10YR 4/2	灰黄褐色シルト	酸化鉄混入



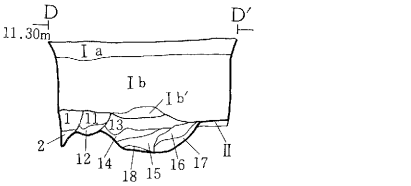
畝溝C

1	10YR 3/2	黒褐色シルト	炭化物粒、褐色土粒少量
2	10YR 4/3	にぶい黄褐色シルト	褐色シルト多量、炭化物粒少量
3	10YR 4/2	灰黄褐色シルト	炭化物粒少量、鉄分微量
4	10YR 4/3	にぶい黄褐色シルト	炭化物粒、鉄分微量
5	10YR 4/2	灰黄褐色シルト	炭化物粒、鉄分微量
6	2.5Y 4/2	灰黄褐色シルト	炭化物粒、鉄分微量
7	10YR 3/3	暗褐色シルト	炭化物粒、鉄分少量
8	10YR 4/4	褐色砂質シルト	黄褐色シルト少量
9	2.5Y 5/4	黄褐色砂質シルト	円礫、鉄分微量



畝溝d

1	10YR 4/2	灰黄褐色シルト	灰黄褐色シルトブロック少量、炭化物少量
2	10YR 4/4	褐色シルト	炭化物粒、鉄分微量
3	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	炭化物粒、鉄分微量
4	10YR 5/2	灰黄褐色シルト	鉄分多量
5	10YR 4/3	にぶい黄褐色シルト	炭化物粒、鉄分微量
6	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト	鉄分多量、炭化物粒微量



K-12 トレンチ東壁セクション

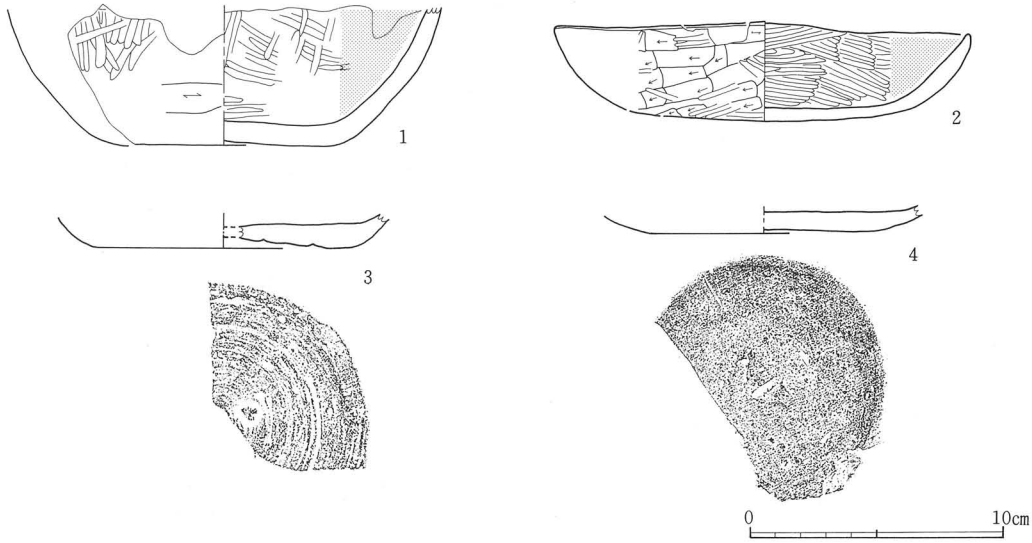
Ia	10YR 3/3	暗褐色シルト	
Ib	10YR 4/4	褐色シルト	天地返し
Ib′	10YR 4/4	褐色シルト	オリーブ褐色シルトブロック混入
1	10YR 3/2	黒褐色シルト	炭化物粒、褐色シルト粒少量
2	10YR 4/3	にぶい黄褐色シルト	褐色シルト多量、炭化物少量
11	2.5Y 4/2	暗灰黄色シルト	炭化物粒、鉄分微量
12	2.5Y 4/2	暗灰黄色シルト	黄褐色シルトブロック、鉄分微量
13	2.5Y 4/3	オリーブ褐色シルト	炭化物粒、鉄分微量
14	2.5Y 4/3	オリーブ褐色シルト	黄褐色シルトブロック多量、鉄分微量
15	10YR 4/4	褐色シルト	黄褐色シルトブロック、鉄分少量
16	10YR 4/3	にぶい黄褐色シルト	炭化物粒微量
17	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	鉄分微量
18	2.5Y 6/3	にぶい黄色シルト質砂	鉄分微量

J-13 トレンチ　SD-14

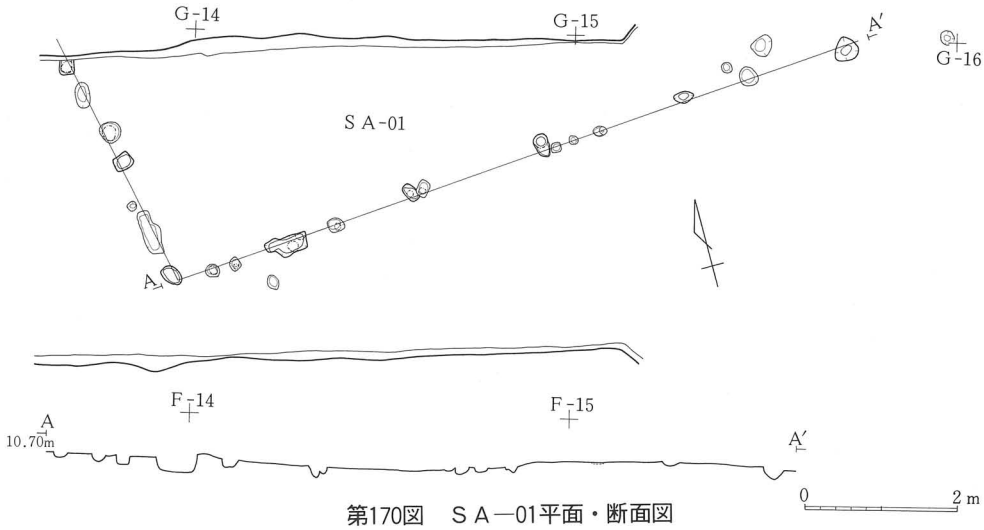
1	10YR 4/4	褐色シルト	にぶい黄褐色シルト、明黄褐色粒混入
2	10YR 4/3	にぶい黄褐色シルト	浅黄色シルト混入
3a	5Y 7/3	浅黄色砂質シルト	にぶい黄褐色シルトとの互層、酸化鉄多量
3b	10YR 4/3	にぶい黄褐色シルト	炭化物粒混入
3c	10YR 4/3	にぶい黄褐色シルト	黄褐色土粒混入
4a	10YR 5/2	灰黄褐色砂質シルト	酸化鉄多量
4b	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	
5a	10YR 4/2	灰黄褐色シルト	酸化鉄粒混入
5b	10YR 4/2	灰黄褐色シルト	淡黄色シルトとの互層
6a	10YR 5/1	褐灰色シルト	酸化鉄混入
6b	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	にぶい黄橙色シルトとの互層、酸化鉄多量
6c	10YR 4/2	灰黄褐色シルト	酸化鉄粒混入
7a	10YR 6/1	褐灰色シルト	酸化鉄粒混入
7b	10YR 7/6	明黄褐色シルト	下部は酸化鉄の集積層
①	10YR 4/3	にぶい黄褐色シルト	褐灰色土との互層、酸化鉄粒混入
②	10YR 6/3	にぶい黄橙色シルト	酸化鉄粒混入

搬乱は木の根

第168図　トレンチ平面・断面図



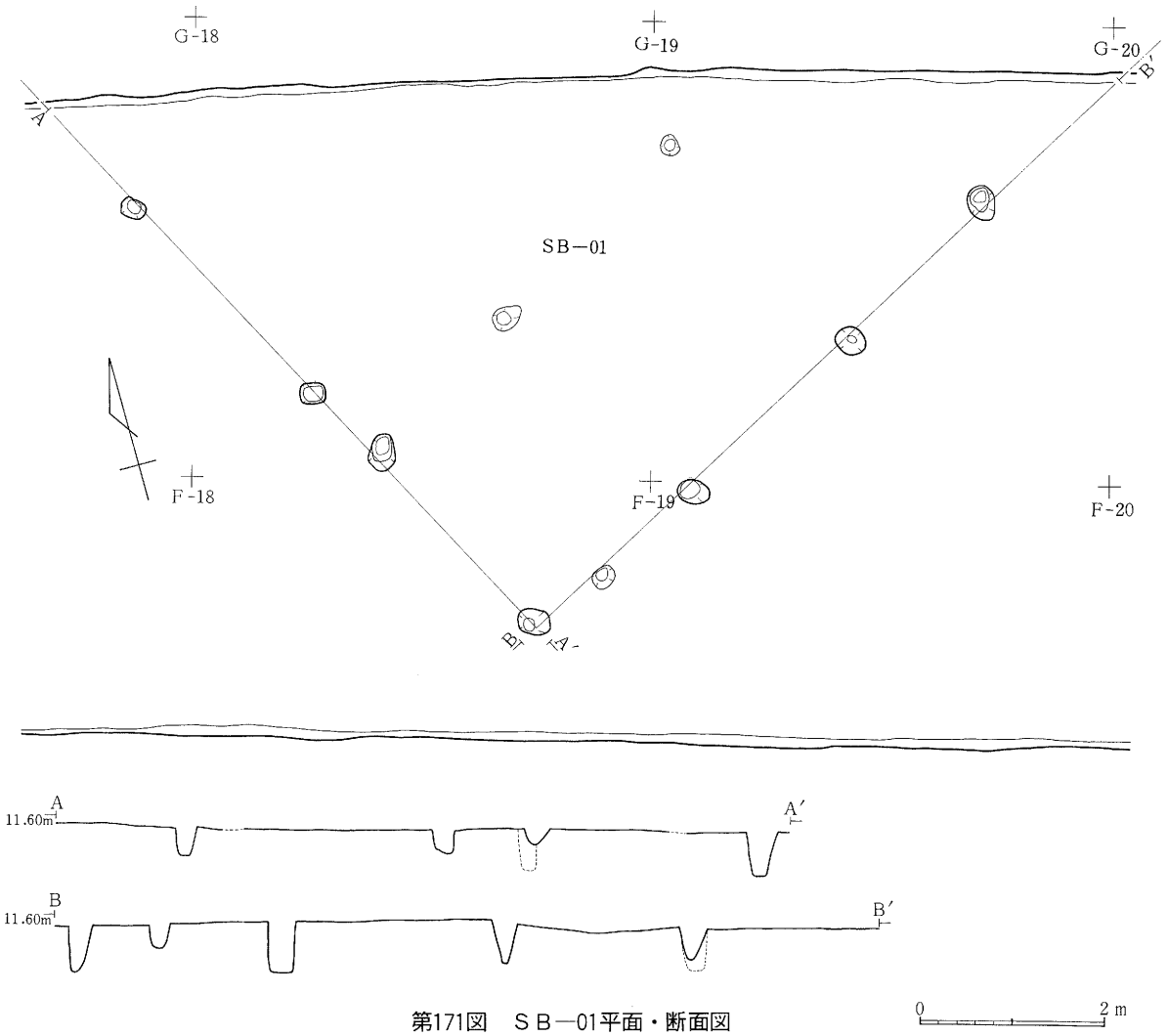
第169図　ＳＤ－25・７号畝状遺構（トレンチ）出土遺物



第170図　ＳＡ－01平面・断面図

SB05（第 175 図）

II区西部（F－15・16 区）に位置し、SD05・08・１号畝溝状遺構を切る。SB04 と重複関係にあるが、新旧は不明である。上部は天地返しにより削平を受けている。規模は不明だが、南北２間（5.5 m）以上の建物跡と推定した。方向は東辺で N－27°－W を示す。柱穴は 30～40 cm で、深さ 18～29 cm を測る。柱間寸法は 8.5 尺前後である。柱痕跡は北端は不明確だが、他は四角形を呈し、角柱とみられる。建物方向が SB01 とほぼ一致し、対をなす建物跡の可能性もあろう。時期決定できる遺物は出土していない。



第171図　ＳＢ−01平面・断面図

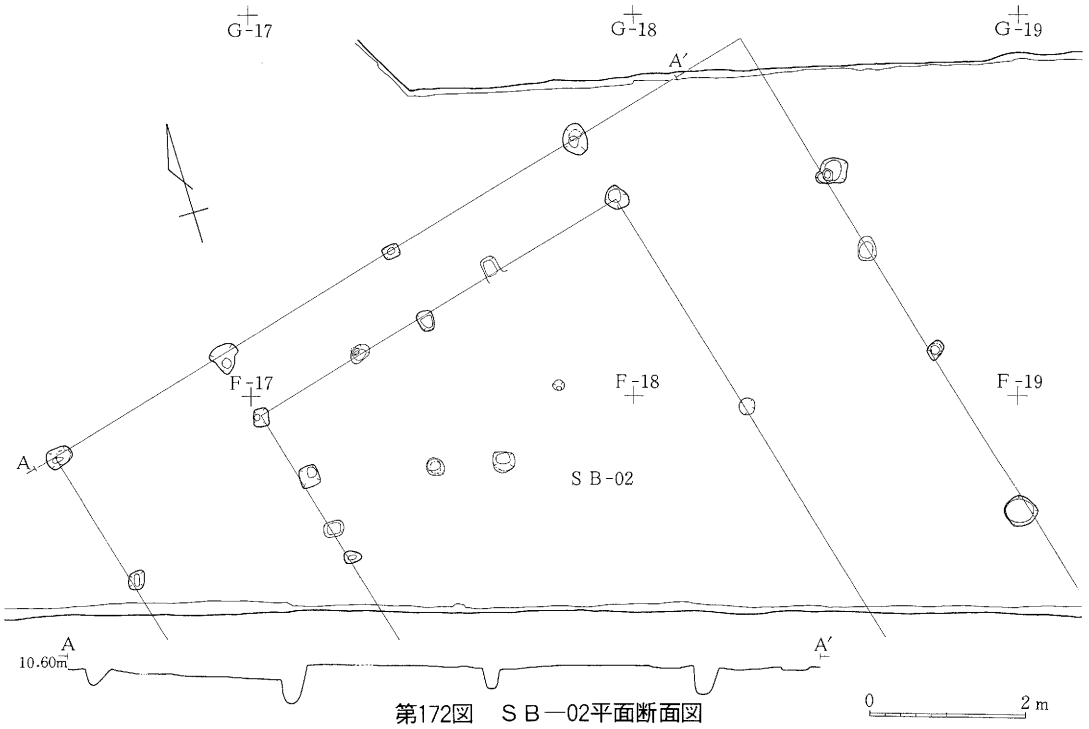
SB06（第176図）

Ｉ区中央（N－５・６区）に位置し、SD12に切られる。SD13と重複関係にあるが、直接新旧を決められない。規模は桁行３間（南辺総長7.5 m）、梁行２間？（西辺総長4.52 m）の東西棟建物跡である。西辺中央には、柱穴の痕跡らしいものがあった。柱間寸法は、８尺を基準にしているものとみられる。方向はN－8°－Wを示す。柱穴は20～35 cmで、深さ14～30 cmである。出土遺物はないが、手捏ねの土師質土器が出土したSD12より古いことから、鎌倉時代前半頃と予想される。また、在地の甕が出土したSD13より古いと考えられる。

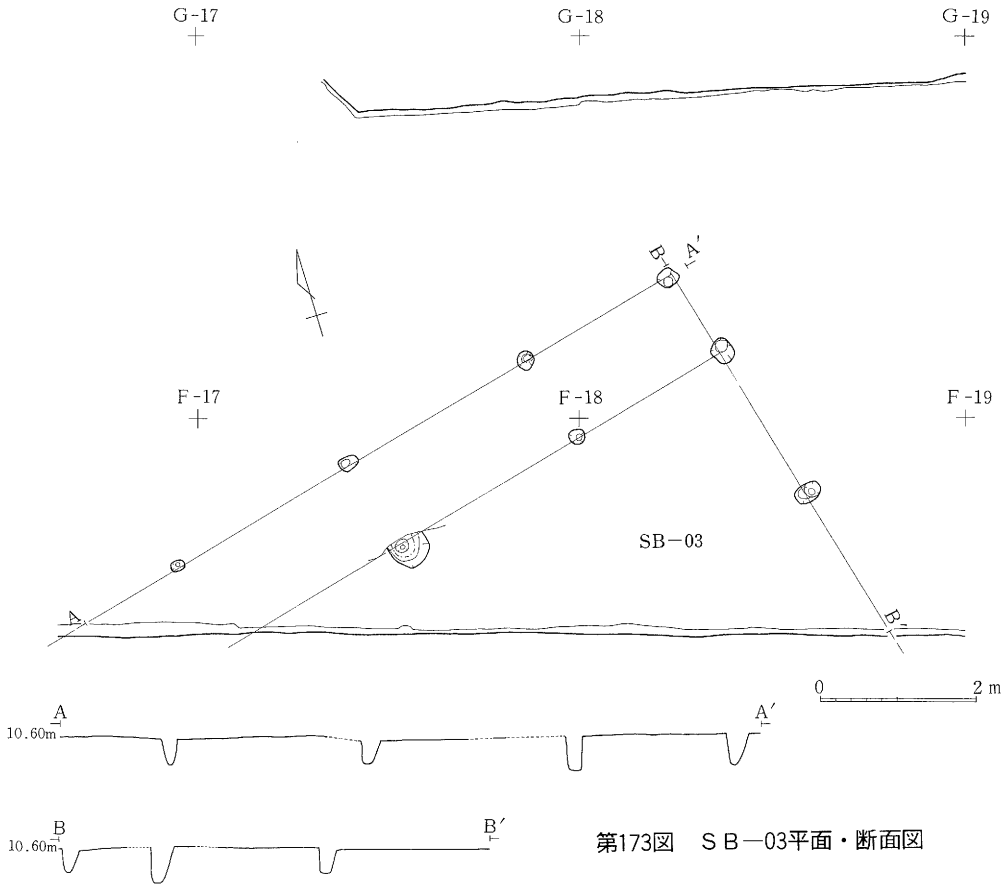
溝跡（SD）

SD01（第177・178図）

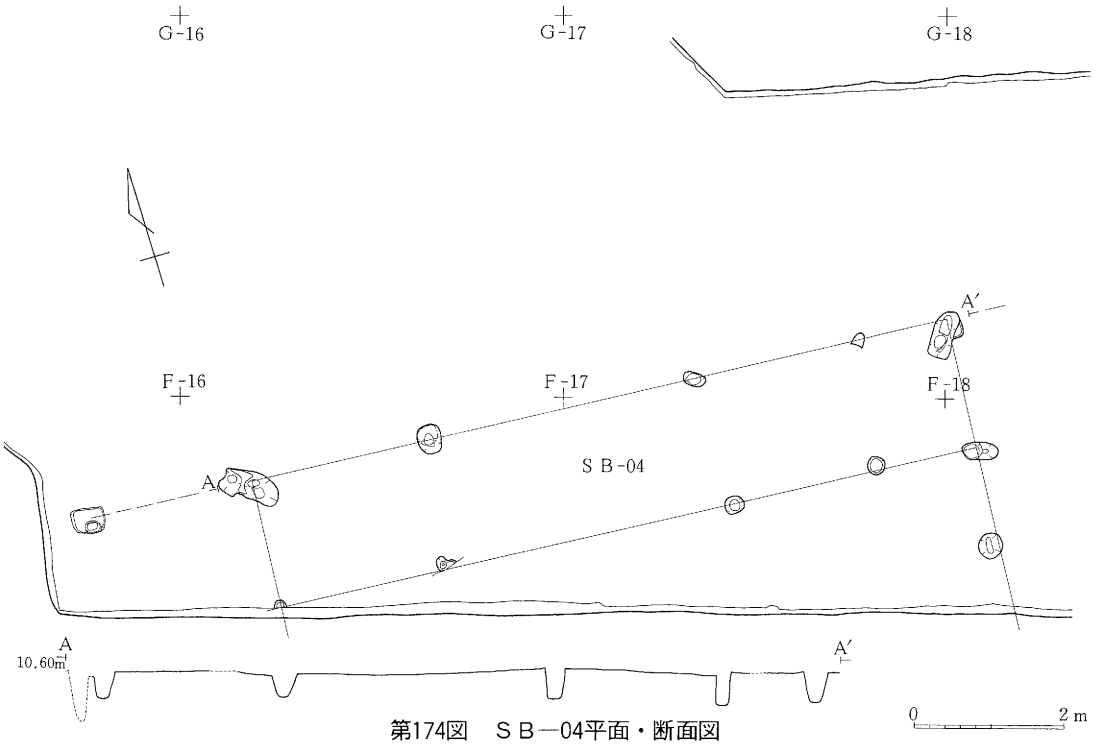
II区北部（I・J－15・16区）に位置し、他の遺構との重複はない。上部は天地返しにより削



第172図　ＳＢ―02平面断面図



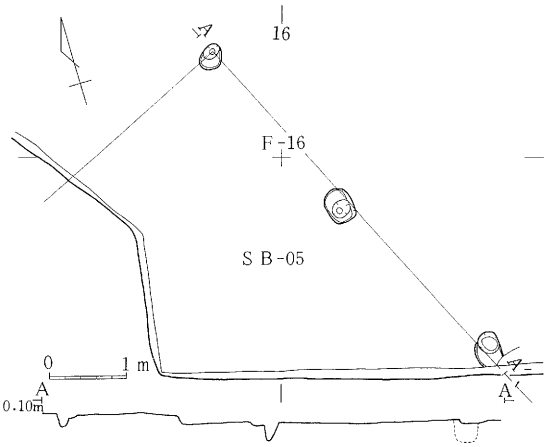
第173図　ＳＢ―03平面・断面図



第174図　ＳＢ—04平面・断面図

平を受けている。規模は検出長が 5.58 m、幅 70～97 cm、深さ 27～42 cm を測る。方向は東西方向を示し、N－82°－E である。断面形は鍋底状を呈し、西側では段差が認められる。

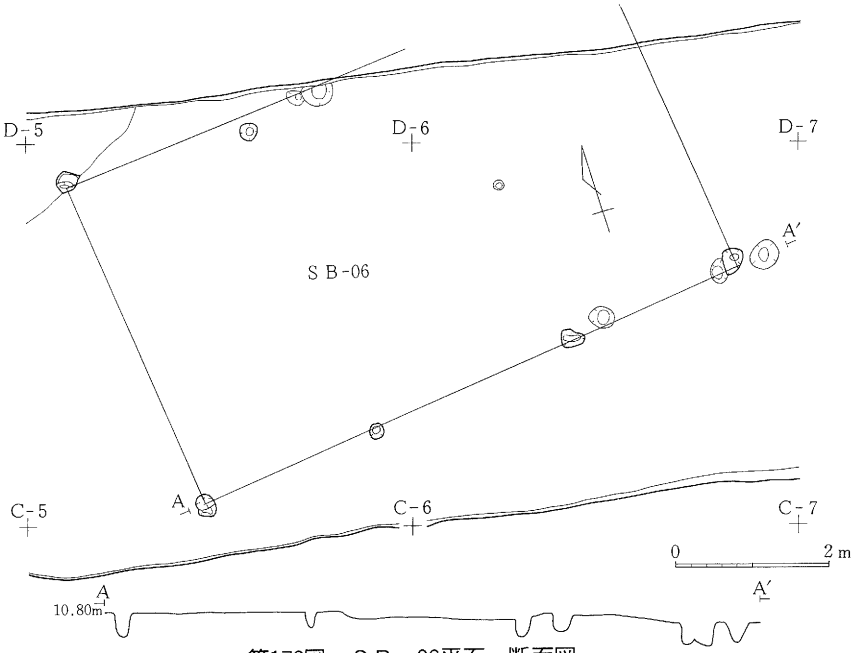
出土遺物は、土師質土器皿・土師器片・須恵器高台付坏・甕・瓦がある。第 178 図 1 は布目瓦である。他は図示できない。土師質土器皿は、ロクロ使用の小皿体部片であり、この皿の出土から、溝跡は中世と考えられる。



第175図　ＳＢ—05平面・断面図

SD02（第 177・178 図）

II 区東部（E・F－22・23 区）に位置し、SI01 を切る。上部は、天地返しにより削平を受けている。規模は検出長約 8.2 m、幅 80～126 cm、深さ 31～61 cm を測る。方向は N－39°－E である。底面や壁面下部では鉄分の集積が認められ、底面レベルは北東側へ下がる。この溝は水路と考えられる。断面形は、鍋底状を呈している。



第176図　ＳＢ—06平面・断面図

出土遺物は、土師質土器皿・土師器坏・瓦・弥生土器片がある。第178図2は内黒の土師器坏で、古墳時代後期のものである。3・4は土師質土器皿で、底部には糸切り痕を残こす。中世のものである。5・6は布目のある平瓦で、古代のものである。土師質土器の存在から、この溝跡は中世と考えられる。

SD10（第177図）

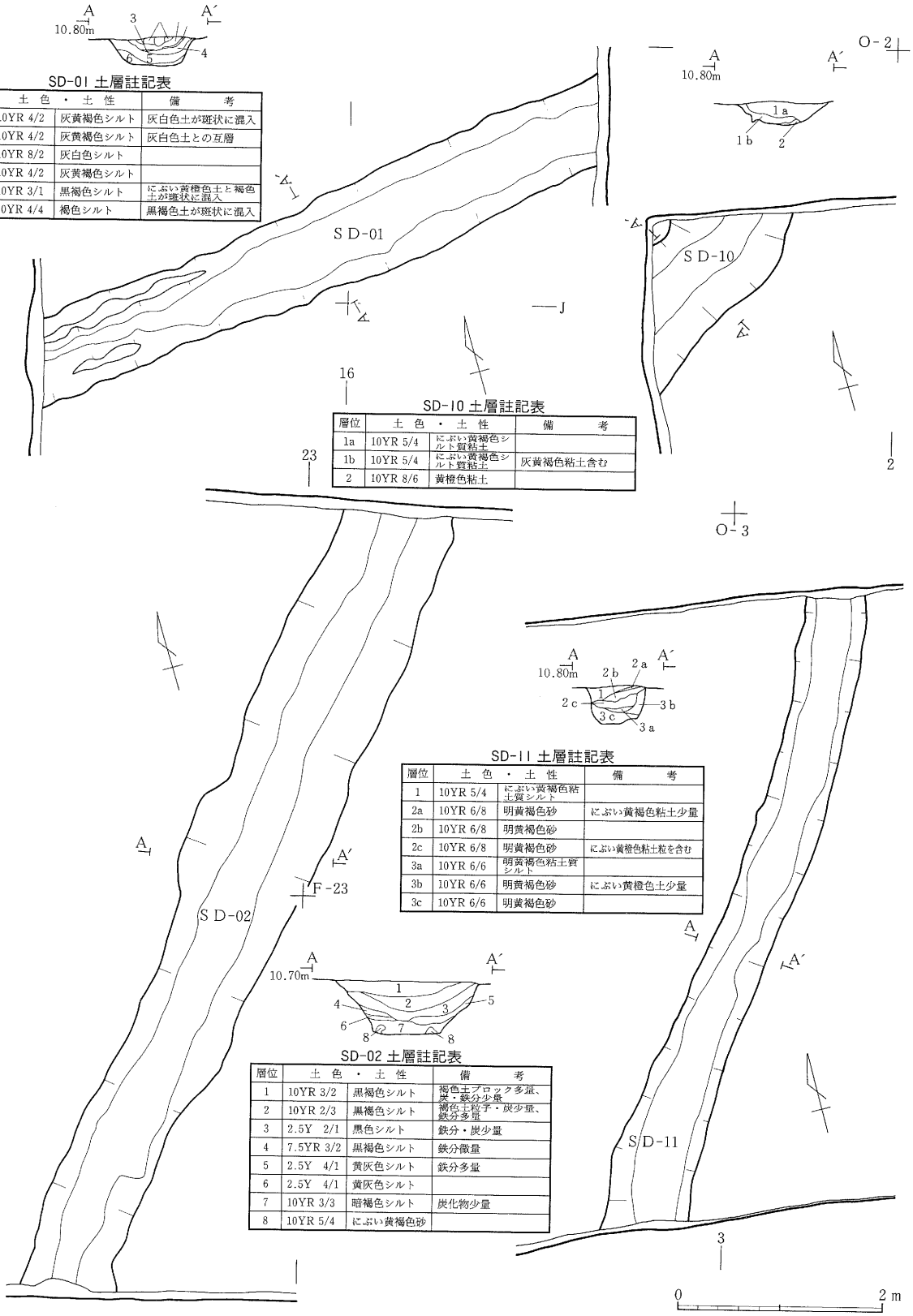
Ｉ区西端部(N－１区)に位置し、他の遺構との重複はない。上部は、天地返しにより削平を受けている。規模は検出長2.2m、幅約1m、深さ22～26cmを測る。方向はN－61°－Eである。断面形は皿状を呈している。

出土遺物は、土師質土器皿・須恵器甕がある。第180図1は土師質土器の小皿で、底部には糸切り痕が認められる。この小皿の出土から、溝跡は中世と考えられる。

SD12（第179・181図）

Ｉ区西部（N－４・５区付近）と北部（Q・R－７区）の二ケ所で検出し、SB06を切る。西部は天地返しにより、北部は近代の水田により、それぞれ上部を削平されている。規模は西部と北部を合わせると、長さ28.6m、幅1.06～1.3m、深さ40cm前後であるが、北部では削平が著しい。方向は約N－56°－Eである。断面形は「U」字形に近く、底面レベルは北東側へ下がっていく。

出土遺物は、土師質土器皿・須恵器坏・甕・石製模造品（円板形）がある。図示できるものはないが、土師質土器は手捏ねの小皿と思われる。この小皿の出土から、溝跡は中世と考えら



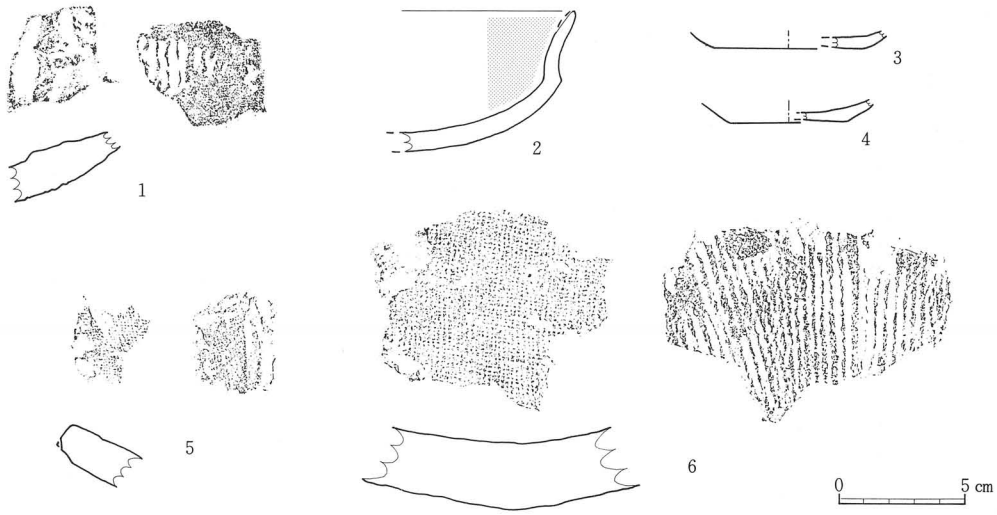
層位	土色・土性		備考
1	10YR 4/2	灰黄褐色シルト	灰白色土が斑状に混入
2	10YR 4/2	灰黄褐色シルト	灰白色土との互層
3	10YR 8/2	灰白色シルト	
4	10YR 4/2	灰黄褐色シルト	
5	10YR 3/1	黒褐色シルト	にぶい黄橙色土と褐色土が斑状に混入
6	10YR 4/4	褐色シルト	黒褐色土が斑状に混入

層位	土色・土性		備考
1a	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト質粘土	
1b	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト質粘土	灰黄褐色粘土含む
2	10YR 8/6	黄橙色粘土	

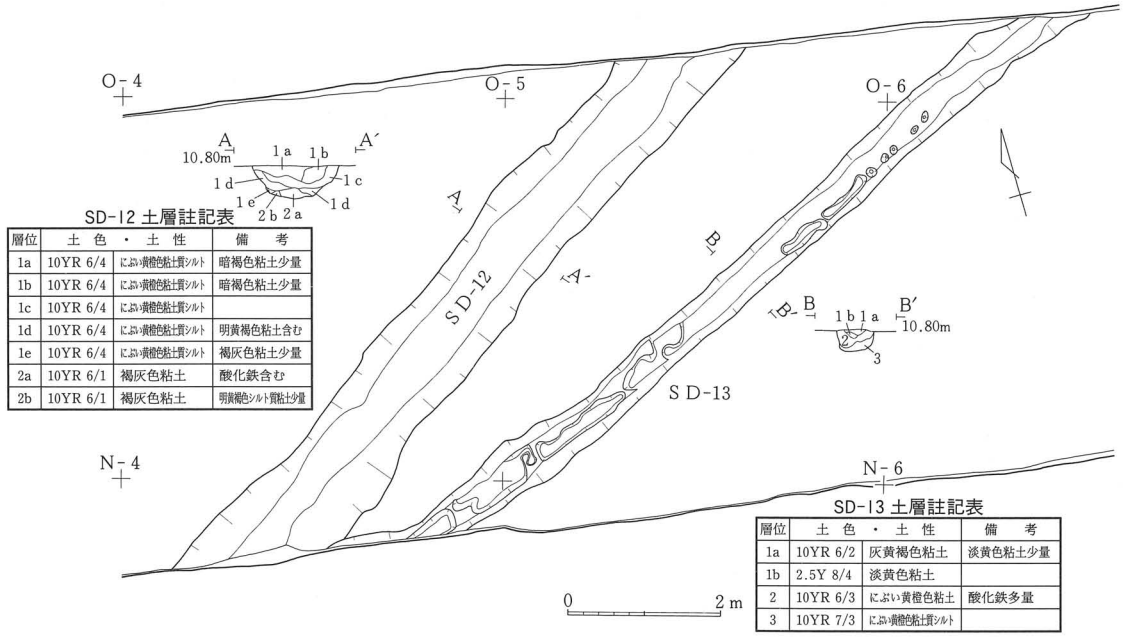
層位	土色・土性		備考
1	10YR 5/4	にぶい黄褐色粘土質シルト	
2a	10YR 6/8	明黄褐色砂	にぶい黄褐色粘土少量
2b	10YR 6/8	明黄褐色砂	
2c	10YR 6/8	明黄褐色砂	にぶい黄橙色粘土粒を含む
3a	10YR 6/6	明黄褐色粘土質シルト	
3b	10YR 6/6	明黄褐色砂	にぶい黄橙色土少量
3c	10YR 6/6	明黄褐色砂	

層位	土色・土性		備考
1	10YR 3/2	黒褐色シルト	褐色土ブロック多量、炭・鉄分少量
2	10YR 2/3	黒褐色シルト	褐色土粒子・炭少量、鉄分多量
3	2.5Y 2/1	黒色シルト	鉄分・炭少量
4	7.5YR 3/2	黒褐色シルト	鉄分微量
5	2.5Y 4/1	黄灰色シルト	鉄分多量
6	2.5Y 4/1	黄灰色シルト	
7	10YR 3/3	暗褐色シルト	炭化物少量
8	10YR 5/4	にぶい黄褐色砂	

第177図　ＳＤ―01・02・10・11平面・断面図（中世）



第178図　ＳＤ—01・02出土遺物　（1：SD01、2～6：SD02）



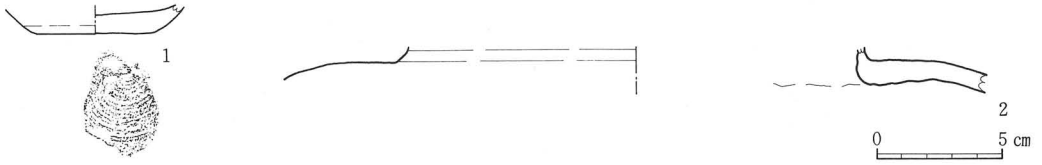
SD-12 土層註記表

層位	土色・土性		備考
1a	10YR 6/4	にぶい黄橙色粘土質シルト	暗褐色粘土少量
1b	10YR 6/4	にぶい黄橙色粘土質シルト	暗褐色粘土少量
1c	10YR 6/4	にぶい黄橙色粘土質シルト	
1d	10YR 6/4	にぶい黄橙色粘土質シルト	明黄褐色粘土含む
1e	10YR 6/4	にぶい黄橙色粘土質シルト	褐灰色粘土少量
2a	10YR 6/1	褐灰色粘土	酸化鉄含む
2b	10YR 6/1	褐灰色粘土	明黄褐色シルト質粘土少量

SD-13 土層註記表

層位	土色・土性		備考
1a	10YR 6/2	灰黄褐色粘土	淡黄色粘土少量
1b	2.5Y 8/4	淡黄色粘土	
2	10YR 6/3	にぶい黄橙色粘土	酸化鉄多量
3	10YR 7/3	にぶい黄橙色粘土質シルト	

第179図　ＳＤ—12・13平面・断面図



第180図　ＳＤ—10・13平面・断面図　（1：SD10、2：SD13）

れる。

SD13（第179・181図）

Ⅰ区西部（N－5区付近）と北部（P－7・8区）の二ケ所で検出し、SD24・SX04を切る。また、SB06より新しい（SB06の項参照）。西部では、上部を天地返しにより削平されている。規模は西部と北部を合わせると、長さ21.6m、幅49～70cm、深さ33～40cm（西部は削平のため浅い）である。方向は西部でN－64°－E、北部でN－78°－Eと弧状を呈する。断面形は鍋底状を呈し、溝底レベルは北東側へ下がっていく。西部では、溝底にピットや段差がみられる。北部では、北西方向に派生する極めて浅い溝跡？がみられる。

出土遺物は、土師質土器の小型鉢？と須恵器坏・短頸壺がある。第180図2は奈良時代と考えられる短頸壺である。土師質土器は図示できないが、中世あるいは近世のものと考えられる。溝跡の時期は、中世以降と考えてよい。

SD14（第168・181図）

Ⅰ区東端部（0－12区）と2トレンチの二ケ所で検出した。規模・形態・方向・埋土の特徴から、二ケ所で検出した溝跡を同一のものと判断した。5号畝状遺構を切る。上部は天地返しにより削平されているが、特に2トレンチで著しい。規模は長さ約32.2m以上、幅1.2～1.3m、深さ53～60cm（2トレンチでは約30cm）である。方向は南北方向で、約N－10°－Eを示す。断面形は鍋底状に近いが、壁は開らく。溝底や壁面下半部には、SD02同様鉄分の集積層がみられる。遺構内に鉄分の集積層が形成される現象は、当遺跡では中世以降に特徴的に現われる。古代に比べて、使用期間が長くなったためか滞水を目的にするためであろう。

SD-12 (2)

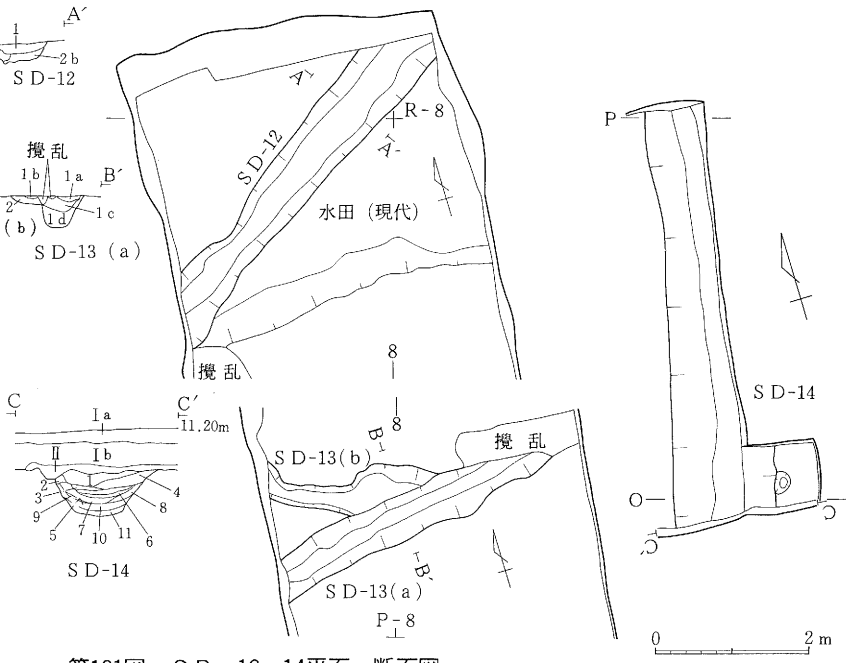
層位	土色・土性		備考
1	10YR 6/6	明黄褐色粘土質シルト	
2a	10YR 6/2	灰黄褐色シルト質粘土	明黄褐色粘土質土含む
2b	10YR 6/2	灰黄褐色シルト質粘土	

SD-13 (2)

層位	土色・土性		備考
1a	10YR 6/4	にぶい黄橙色粘土質シルト	酸化鉄含む
1b	10YR 6/3	にぶい黄橙色粘土質シルト	酸化鉄含む
1c	10YR 6/3	にぶい黄橙色シルト質粘土	酸化鉄含む
1d	10YR 6/3	にぶい黄橙色シルト質粘土	酸化鉄含む
2	10YR 5/8	黄褐色粘土質シルト	

SD-14 土層註記表

層位	土色・土性		備考
1	10YR 4/3	にぶい黄褐色シルト	
2	10YR 4/4	褐色シルト	褐灰色土混入
3	10YR 6/1	褐灰色シルト	酸化鉄粒子混入
4	10YR 4/4	褐色シルト	
5	10YR 6/3	にぶい黄橙色シルト	酸化鉄粒子,褐灰色土混入
6	10YR 6/1	褐灰色シルト	酸化鉄粒子混入
7	10YR 5/1	褐灰色シルト	酸化鉄普偏的混入
8	10YR 5/1	褐灰色シルト	にぶい黄褐色砂と互層,酸化鉄粒混入
9	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト	
10	10YR 5/1	褐灰色シルト	にぶい黄褐色土砂が斑文状に入る
11	10YR 5/1	褐灰色シルト	にぶい黄褐色土がブロック状に混入



第181図　SD－12・14平面・断面図

出土遺物はない。５号畝状遺構を切り、後述する塚の直下を通ることから、中世頃の溝と考えられる。

塚（第133図）

Ⅰ区とⅡ区の間に位置する。塚の精査は、所有者不明で行っていない。SD14上にのるものと思われる。規模は直径約５m、高さ約１mである。周辺部は削られており、本来は若干大きいもの予想された。塚の西および南へトレンチを設定して古墳の可能性を探ったが、周溝等は確認できなかった。頂上部には、天保年間と思われる墓石（女性）がある。従って、近世の塚と推定した。

⑷ その他の遺構と遺物

その他の遺構

この項では、時期を特定できない遺構を扱う。土坑７基・溝跡２条・埋没河川がある。

土坑（SK）

SK01（第182図）

Ⅱ区東部（F－25区）に位置し、他の遺構との重複関係はない。上部は、天地返しにより削平を受けている。規模は0.74×0.59m、深さ0.13mで、方形を呈している。この土坑は二重構造になっており、下部にさらに土坑が認められる。下部の土坑は、1.06×0.91m、深さ0.59mで、楕円形を呈している。性格・用途は不明である。出土遺物はない。

SK02（第182図）

Ⅱ区北部（I・J－16区）に位置し、他の遺構との重複関係はない。上部は、天地返しにより削平を受けている。規模は1×0.94m、深さ0.2mで、不整円形を呈している。出土遺物は、非ロクロの土師器甕・須恵器甕の細片がある。この遺物で、時期を決定するのは難しい。

SK04（第182図）

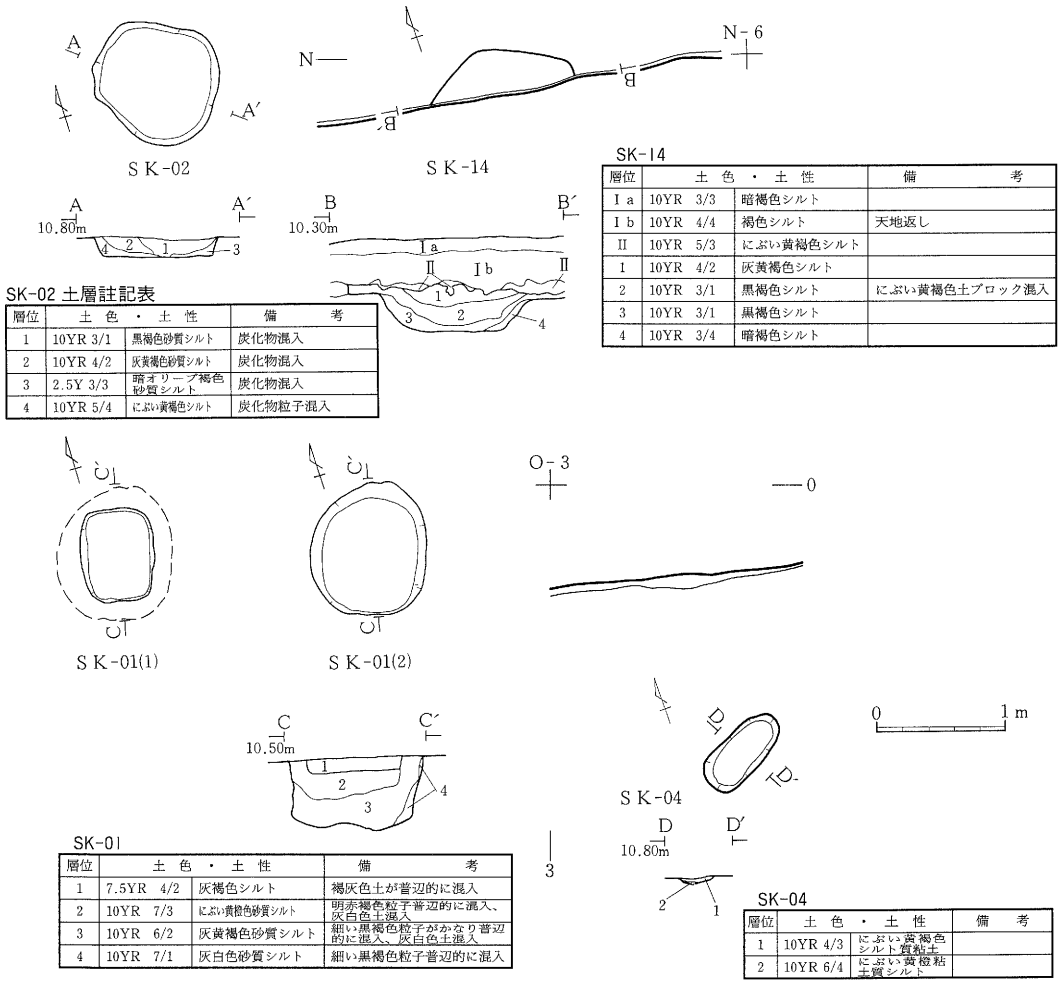
Ⅰ区西部（N－３区）に位置し、他の遺構との重複関係はない。上部は、天地返しにより削平を受けている。規模は0.73×0.34m、深さ0.09mで、楕円形を呈している。底面は北東側へ下がる。埋土は２層あり、粘土（10 YR4/3）・シルト（10 YR6/4）である。出土遺物はない。

SK11（第145図）

Ⅰ区東部（N・０－11区）に位置し、５号畝状遺構に切られる。また、６号畝状遺構よりも古いと考えられる。規模は1.52×0.89m、深さ0.8mで、不整楕円形を呈している。出土遺物はない。時期は明らかではないが、あるいは古墳時代のSX02などと関連する可能性もある。

SK13（第145図）

Ⅰ区中央部（０－８区）に位置し、SI04・鉄塔基礎坑に切られ、SD24を切る。規模は東西2.9



SK-02 土層註記表

層位	土色・土性		備考
1	10YR 3/1	黒褐色砂質シルト	炭化物混入
2	10YR 4/2	灰黄褐色砂質シルト	炭化物混入
3	2.5Y 3/3	暗オリーブ褐色砂質シルト	炭化物混入
4	10YR 5/4	にぶい黄褐色シルト	炭化物粒子混入

SK-14

層位	土色・土性		備考
Ⅰa	10YR 3/3	暗褐色シルト	
Ⅰb	10YR 4/4	褐色シルト	天地返し
Ⅱ	10YR 5/3	にぶい黄褐色シルト	
1	10YR 4/2	灰黄褐色シルト	
2	10YR 3/1	黒褐色シルト	にぶい黄褐色土ブロック混入
3	10YR 3/1	黒褐色シルト	
4	10YR 3/4	暗褐色シルト	

SK-01

層位	土色・土性		備考
1	7.5YR 4/2	灰褐色シルト	褐灰色土が普辺的に混入
2	10YR 7/3	にぶい黄橙色砂質シルト	明赤褐色粒子普辺的に混入、灰白色土混入
3	10YR 6/2	灰黄褐色砂質シルト	細い黒褐色粒子がかなり普辺的に混入、灰白色土混入
4	10YR 7/1	灰白色砂質シルト	細い黒褐色粒子普辺的に混入

SK-04

層位	土色・土性		備考
1	10YR 4/3	にぶい黄褐色シルト質粘土	
2	10YR 6/4	にぶい黄橙粘土質シルト	

第182図　土坑平面・断面図（時代不明）

m以上・南北3.2m、深さ0.2mで、楕円形を呈するものと予想される。出土遺物は、住社式とみられる土師器坏・甕？、南小泉式とみられる高坏が出土している。しかし、いずれも小破片で、時期決定は難しいが、平安時代以前であることは確実である。

SK14（第182図）

Ⅰ区中央部（M－5区）に位置し、他の遺構との重複関係はない。規模は一部の調査に限られたため不明であるが、検出長は1.3m、深さ0.39mである。出土遺物はなく時期は明確ではないが、黒褐色シルトが堆積しているのが特徴的で、中世の可能性もあろう。

SK15（第168図）

1トレンチ東部に位置し、7号畝状遺構（溝d）に切られる。上部は、天地返しにより削平を受けている。規模は一部の調査に留ったため明確ではないが、南北で1.23m、深さ0.16mである。形状は楕円形を呈するものと予想される。出土遺物は住社式とみられる土師器坏、非ロ

クロの土師器甕がある。しかし、いずれも小破片で時期決定が難しい。

溝跡（SD）

SD11（第177図）

Ⅰ区西部（M・N－2・3区）に位置し、他の遺構との重複関係はない。上部は天地返しにより削平を受けている。規模は検出長約6.4m、幅0.54～0.8m、深さ0.33～0.38mである。方向はN－33°－Eを示する。溝底レベルは北東側へ下がっていく。Ⅰ・Ⅱ区通して、この溝跡だけに砂の堆積が認められた。流水によって運ばれたものであろう。出土遺物はない。

SD24（第151図）

Ⅰ区北部（0・P－7・8区）に位置し、SI04・SK13・SD13に切られる。規模は検出長2.65m、幅0.43～0.55m、深さ約0.2mである。方向はN－33°－Wを示す。出土遺物は土師器坏甕があるが、小破片で時期決定は難しい。古墳時代以前とみられる。

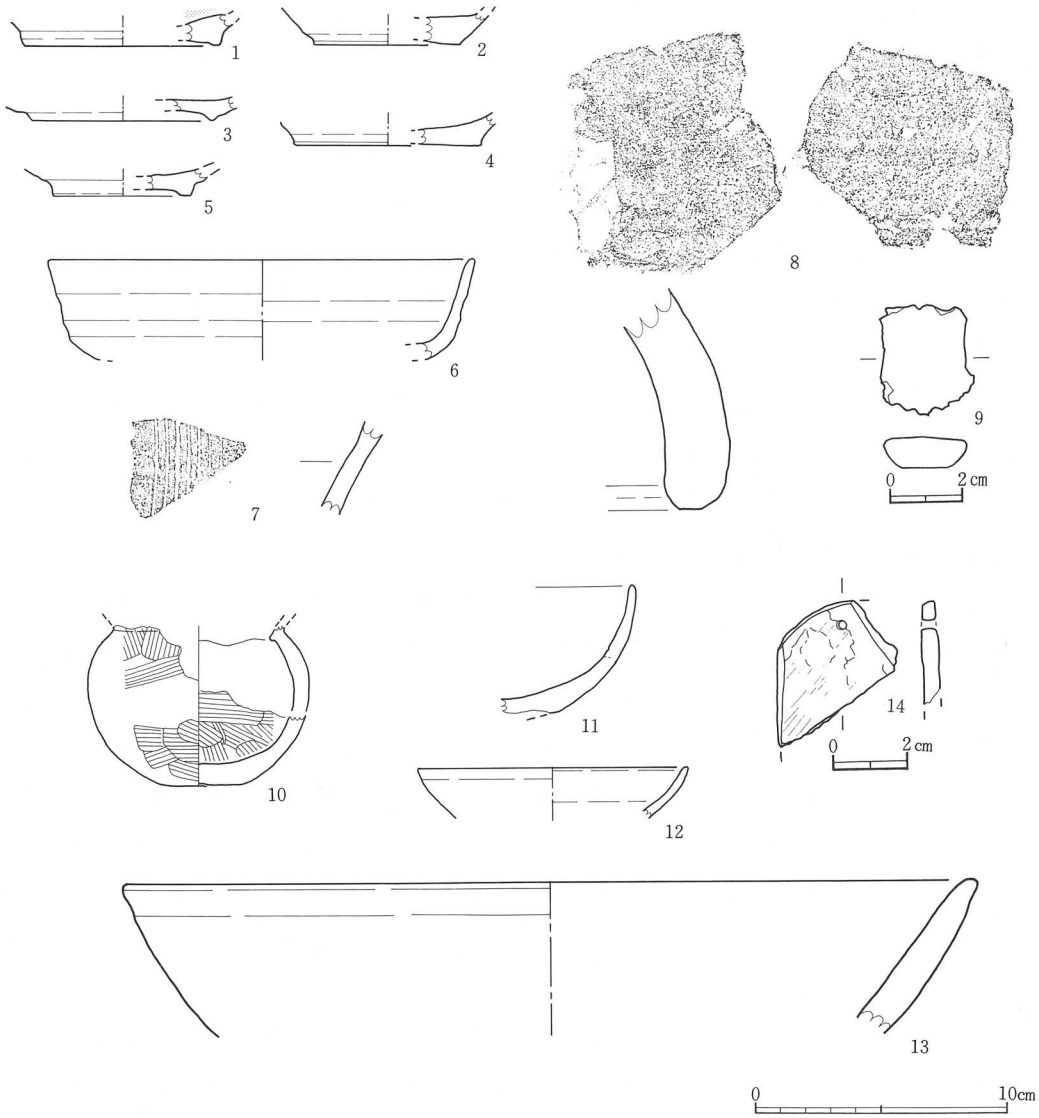
埋没河川（第133図）

Ⅱ区では二ケ所に深掘トレンチを入れたが、両者ともに不整合で傾斜する層群を確認した。Ⅱ区東部の深掘トレンチでは基本層のⅧ層とⅨ層の間（第132図）に、Ⅱ区西部の深掘トレンチではⅧ層とⅩⅣ層の間（第132図）にみられる。どちらも、氾濫原堆積物である砂礫層を削り込んで下がっていき、埋没河川と考えられた。東部の河川跡は、SD04やSD03の直下にあり、方向もSD04とほぼ同じとみられる。規模は不明である。古墳時代以前の河川跡であろう。西部の河川跡は、SD05とSD20の直下にあり、これらの溝跡よりもさらに広い川幅と予想される。北は、Ⅰ区東部へ伸び、南は東部の河川跡に合流する可能性がある。なお、河川堆積層を直接不整合に覆うⅥあるいはⅦ層相当層より、土師器小型壺・坏（第183図10・11）が出土している。河川跡は、古墳時代中期以前であろう。

Ⅰ区では三ケ所に深掘トレンチを入れ、標高8.7～8.8mまで下げたが、Ⅱ区で確認した砂礫層（標高9m前後）は検出できず、変って厚い砂層の堆積がみられた。埋没河川が何条存在するのかは不明だが、Ⅰ区の全域に渡って河川あるいはこれと関連する土層が堆積しているものと予想される。Ⅰ区東部の河川跡は、SX01～03・5号・6号畝状遺構の直下にあるものと思われ、Ⅱ区西部の河川跡と連続するものであろう。西部の深掘トレンチ（第184図）では、河川跡内に堆積したⅥあるいはⅦ層相当層より、弥生時代の甕が出土している（第185図1）。Ⅰ区中央～西部にある河川跡は、古墳時代あるいは弥生時代以前とみられる。本調査区の南西側、第14次調査地点でも埋没河川跡が検出されており、どうやら遠見塚古墳の西側に集中しているようで今後も注意しておく必要があろう。

その他の出土遺物（第183・185図）

この項では、基本層・河川跡・天地返しなどから出土した主な遺物を扱う。第183図1は低

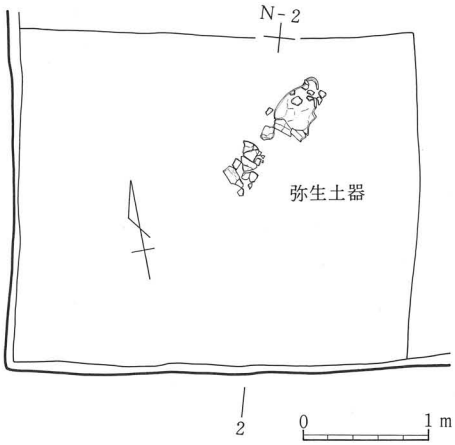


第183図　その他の出土遺物（遺構Ⅰ区・Ⅱ区）9・14：½

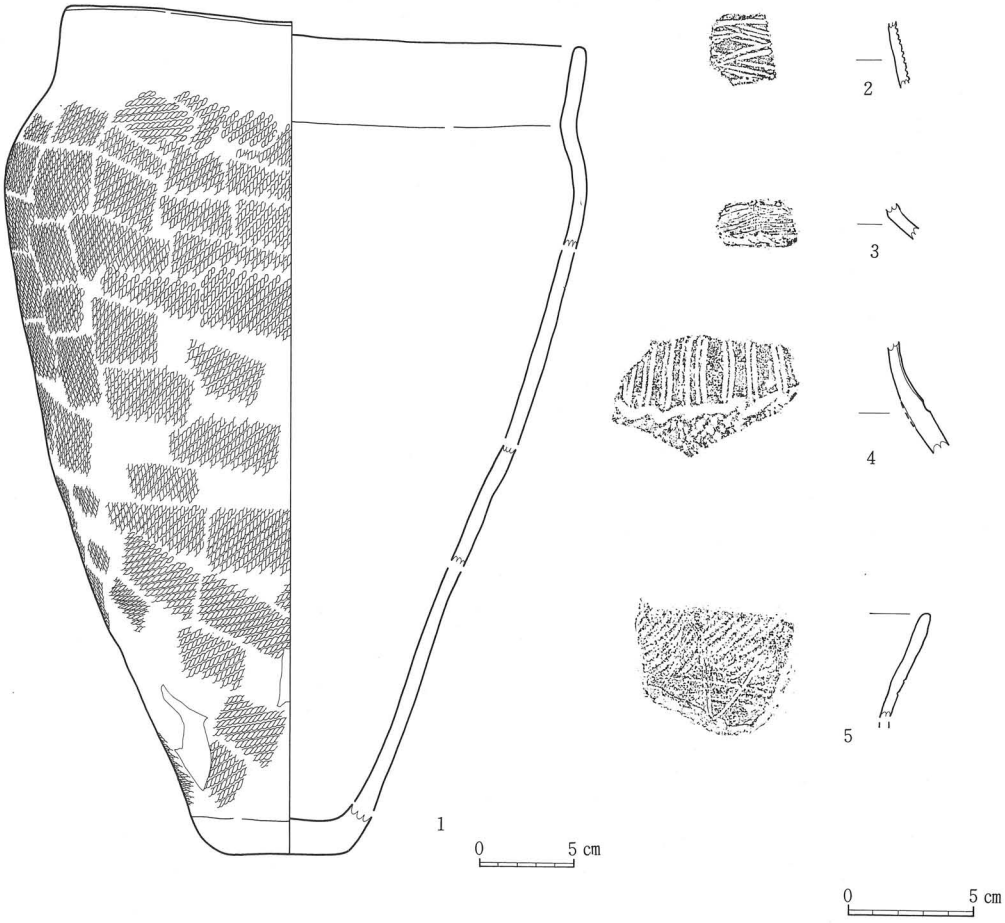
高台の土師器坏で、ロクロ使用・内面黒色処理を施こしている。2・4は土師質土器小皿で、底部には糸切り痕が認められる。3は志野丸皿と予想される。16C末～17C初と考えられる。5は瀬戸・美濃の鉄釉皿であろう。江戸時代のものとみられる。6は須恵器坏である。7は鉄釉擂鉢で、岸窯系であろうか。8は古代の丸瓦であるが、布目や縄目はみられない。9は鉄製の把手あるいは耳と思われる。10は基本層のⅥあるいはⅦ層相当層から出土した土師器小型壺である。南小泉式期のものであろう。11も同一層から出土した土師器坏で、10と同一時期のものであろう。12はロクロ使用の土師質土器小皿である。中世のものである。13は、渥美産とみ

られる鉢で、12〜13 C 頃のものであろう。14 は剣形の石製模造品で、古墳時代のものである。1 〜 9 は、Ⅰ区の天地返しから出土したものである。10〜14 はⅡ区から出土したもので、10•11 はⅡ区西部深掘トレンチ、12〜14 は天地返し出土である。

第 185 図 1 〜 5 は弥生土器である。1 はⅠ区西部深掘トレンチ（NO. 1）出土の甕で、桝形囲式以前とみられる（第 184 図）。2 〜 4 は十三塚式と考えられる壷であろう。5 は山形沈線文をもつ甕の口縁部であろう。時期は不明である。



第184図　深掘トレンチ土器出土状況



第185図　その他の出土遺物（弥生土器）

23. 第18次出土遺物観察表(1)

(単位 cm)

図版No.	遺物No.	層位	種類	器種	法量			特徴
SI−01（古墳）								
137−1	143 31	ブラン内 天地返し	土師器	坏	口径 (15.3)	底径 −	器高 (4.7)	外面口縁部b、体部e、内面口縁部b→d、体部d、無彩、白針 E_1
2	182 309	床直	土師器	坏	14.8	−	3.9	外面口縁部d（ヘラ）、体部e（ヘラ）→d（ヘラ）、内面口縁部、体部d（ヘラ）、黒色処理、白針 C
3	370	床 カマド袖	土師器	坏	(14.0)	−	(5.2)	外面口縁部b、体部e、内面口縁部d、体部c→d、黒色処理、白針 E_2
4	139	埋1下部	土師器	坏	−	−	−	外面口縁部b、体部d？、内面口縁部b、体部a、無彩 A_2
5	251	埋8層 （ベルト）	土師器	坏	−	−	−	外面口縁部b、体部d？、内面口縁部b→d、体部d、赤色B A_3
6	251	埋8層 （ベルト）	土師器	坏	−	−	−	外面口縁部b、体部d、内面d、黒色処理、白針 E
7	143	ブラン内 天地返し	土師器	坏	−	−	−	外面不明（磨耗）、内面d、内外赤彩、赤色A B
8	31	ブラン内 天地返し	土師器	坏	−	−	−	外面口縁部b、体部d、内面d、無彩、白針
9	398	床直	土師器	坏	−	−	−	外面口縁部b、体部e？、内面口縁部b、体部d、無彩、白針 A_2
10	130	埋1上部	土師器	坏	−	−	−	外面口縁部b、体部？、内面口縁部b、体部d、内外赤彩、赤色A A_2
11	116 372	旧煙道 埋土	土師器	支脚？	(11.7)	−	(6.0)	外面c（ヘラ）、内面c（ヘラ）、白針
12	16	住居付近 天地返し	土師器	甕（小）	13.6	−	15.2	外面口縁部b、頸部c（ヘラ）、内面口縁部c（ヘラ）、磨耗が著しい 小型A
13	377	貯蔵穴	土師器	壺（小）	15.8	6.8	18.2	外面口縁部b、体部e（ヘラ）→d（ヘラ）、白針、NO.6 中型B
14	298 299	床直	土師器	甑（小）	20.2	−	14.7	外面口縁部b、体部e→c（ヘラ）d、内面口縁部b、体部c（ヘラ）、単孔式、白針 小型 A_1
15	337 366	貯蔵穴	土師器	甑	26.5	8.1	25.9	外面口縁部b、体部c（ヘラ）→d、内面口縁部b、体部c（ヘラ）→c、白針、NO.7 大型B
138−1	363	カマド脇床	土師器	甕	18.6	7.3	36.2	外面口縁部b、体部e（ヘラ）→c→d（ヘラ）、内面口縁部b、体部c（ヘラ）、底部木葉痕？、NO.3 大型D
2	365 178	貯蔵穴 カマド2層	土師器	甕	(17.4)	−	(16.6)	外面口縁部b、体部c、内面口縁部b、体部c（ヘラ）、内面黒色、白針、NO.4
3	303 369	床直 貯蔵穴	土師器	甕	16.1	−	(13.9)	外面口縁部b、体部e→d、内面口縁部b、d、体部c（ヘラ）d、白針、NO.10 大型D？
4	376	貯蔵穴	土師器	甕	−	7.55	(33.4)	外面頸部c（ヘラ）？、体部d、内面体部c（ヘラ）、白針、NO.5 大型D
139−1	364	カマド脇 床面	土師器	甕	22.8	6.1	27.2	外面口縁部b、体部e（ヘラ）→d（ヘラ）、内面口縁部b、体部c（ヘラ）、欠損、白針、NO.3 中型C
2	361	カマド脇 埋土下層	土師器	ミニチュア	5.1	3.1	6.2	外面口縁部b、体部e→c→d、内面口縁部b、体部c、壺形？、白針、NO.1
3	16	住居付近 天地返し	土師器	ミニチュア	4.7	−	4.9	外面c→d（ヘラ）、内面体部c、鉢形、丸底、白針
4	395	カマド内 焼土	土師器	ミニチュア	2.8	−	1.8	外面c？、内面c、鉢形、手捏ね、白針
5	301	埋8層	土師器	ミニチュア	5.9	−	2.75	外面口縁部c、体部c、内面c、d、鉢形、NO.4
6	362	カマド脇 床直	土師器	ミニチュア	5.8	3.1	2.4	外面c、内面不明、鉢形、手捏ね、NO.2
7	127	床直	石製品	円板	長さ 2.6	幅 2.7	厚さ 0.4	孔2ヶ
8	424	南東部 炭化材上面	石製品	コハク玉	1.1	1.0	孔径 0.2	不整六角柱状、孔1ヶ、欠損
SI−02								
141−1	355	カマド たき口	土師器	坏	口径 16.0	底径 −	器高 5.45	外面口縁部・くびれ部b、体部e（ヘラ）、内面口縁部d、黒色処理、磨耗 E_2
2	103	床直	土師器	坏？	−	−	−	外面口縁部b、体部e？、内面d、無彩、白針 A_3
3	102	床直	土師器	坏	−	−	−	外面口縁部b、体部e？、内面口縁部b、体部d、無彩、白針 E
SI−05								
144−1	198 142	埋1層	土師器	坏	16.6	−	(4.6)	外面口縁部b、体部e（ヘラ）、内面e（ヘラ）、黒色処理、白針 E_2
2	132	埋土	土師器	坏	−	−	−	外面口縁部b、体部e→c、内面全面d、黒色処理？、白針 D
3	142	埋1層	土師器	坏	−	−	−	外面口縁部b、体部e→c、内面全面d、無彩 D
4	142	埋1層	土師器	ミニチュア	(4.9)	4.2	7.0	外面口縁部d、体部e→d、内面体部c（ヘラ）、壺形？、白針
SK−03								
146−1	76	埋土	土師器	坏	(13.0)	−	4.2	外面口縁部b、体部a、内面口縁部b、体部a、無彩、白針 B

24. 第18次出土遺物観察表(2)

(単位 cm)

図版No.	遺物No.	層位	種類	器種	法量			特徴
SK－10								
146－2	331	底面	土師器	甕	(15.6)	－	16.7	外面口縁部b、体部d（ヘラ）、内面口縁部b、体部c（ヘラ）、白針　小型D
SD－03（古墳）								
150－1	40	埋土	土師器	坏	口径 －	底径 －	器高 －	無彩　A_3
SD－04								
150－2	257	埋1層	土師器	坏	－	－	－	外面口縁部b→d、体部d？、内面口縁部b→d、体部c→d、黒色処理、白針　E
3	276	埋土下部	土師器	坏	－	－	－	外面口縁部b、内面口縁部b、白針　B
4	359 328	B－25区 10層	土師器	甕	18.6	7.7	(31.3)	外面口縁部b、体部c、内面口縁部b、体部c（ヘラ）、外面磨滅が著しい、白針　大型A
5	360	西壁肩部 直下	石製品	砥石	長さ 12.0	幅 4.4	厚さ 2.9	四面使用S－1
6	281	13 最下層	石製品	円板	2.55	2.4	0.35	孔2ヶ
7	91	埋1層	石製品	円板	(1.9)	(2.5)	0.4	孔2ヶ、欠損品
SD－05								
150－8	57	埋土	土師器	坏	口径 14.6	底径 －	器高 4.1	外面口縁部b、体部e（ヘラ）？、内面口縁部・体部d（ヘラ）、内面黒ずむ　E_2
9	51	埋土	土師器	ミニチュア	－	4.2	(2.2)	鉢形？、粘土貼り合せ
10	51	埋土	土師器	坏	－	－	－	外面口縁部b、体部e→c→d、内面口縁部b、体部c→d（放射状）、白針、赤色B　A_2
11	53	埋土	土師器	坏	－	－	－	外面不明、内面口縁部b？、体部c→d　A_3
12	57	埋土	土師器	坏	－	－	－	外面不明、内面d？、黒色処理　E_2 ？
13	57	埋土	土師器	坏	－	－	－	外面b、内面d、黒色処理　E
14	57	埋土	土師器	坏	－	－	－	外面d、内面口縁部b→d、体部c→d　E
15	57	埋土	土師器	坏	－	－	－	外面口縁部b、体部e、内面d、内面淡黒色　E
16	57	埋土	土師器	坏？	－	－	－	外面b？　B？
17	57	埋土	須恵器	甕	－	－	－	外面平面叩き、内面、あて具痕→ナデ消し？　5cか？
18	47	埋土上部	須恵器	甕	－	－	－	外面自然釉、内面ロクロ、体部ナデ
SD－20								
150－19	340	6層上面	土師器	高坏	－	－	(8.5)	外面脚部d、内面脚部工具痕？、無彩、白針　B_1
20	248	埋土	須恵器	壺？	－	－	－	
21	189	埋土上部	石製品	剣形	長さ 5.6	幅 2.5	厚さ 0.7	孔1ヶ
SX－02								
154－1	285	埋土	土師器	坏	口径 －	底径 －	器高 －	外面口縁部b、体部c→d、内面口縁部b、体部c→d（放射状）　D
2	296	底部付近	土師器	坏	－	－	－	外面d、内面d、黒色処理、角頭状、NO.4　E？
3	292	底	土師器	坏	17.6	－	(3.9)	外面口縁部b、体部e、内面口縁部・体部d、無彩、NO.2　E_2
4	296	底部付近	土師器	坏	13.6	－	(7.5)	外面口縁部b、d、体部e→d、内面口縁部b、d、体部d、淡黒色（黒色処理？）、白針　E_2
5	283 293	底	土師器	鉢（小）	(13.5)	－	9.1	外面口縁部b、体部e→c、内面全面c（ヘラ）、NO.2
6	294	底	土師器	甕	－	5.3	14.5	外面体部d、c、内面体部c（ヘラ）→d、底部木葉痕、NO.3
7	283 294	底	土師器	甕	17.8	－	(31.2)	外面口縁部a→b、体部a→d（ヘラ）、内面口縁部a→b→d（ヘラ）、体部c（ヘラ）→a→c、白針、NO.3　大型B
155－1	292	底	土師器	甕	15.9	6.9	23.1	外面口縁部磨耗、体部a→c、内面口縁部b、体部c（ヘラ）、底部木葉痕、NO.1　中型B
2	295 296	底部付近	土師器	甕	－	7.7	(32.3)	外面口縁部b、体部c→d（ヘラ）、内面口縁部b、体部上半c（ヘラ）、下半c、底部木葉痕、NO.4　大型D
3	283 294	底	土師器	壺	16.5	7.3	31.0	外面口縁部b、d（ヘラ）、体部d（ヘラ）、内面口縁部b、d（ヘラ）、体部c（ヘラ）、底部d（ヘラ）、白針、NO.3　大型A_2

a：ハケメ　b：横ナデ　c：ナデ（ヘラ・指）　d：ミガキ　e：削り

25. 第18次出土遺物観察表(3)

（単位 cm）

図版No.	遺物No.	層位	種類	器種	法量			特徴
156－1	297	底	土師器	甕	17.3	8.0	30.9	外面口縁部b、体部d、内面口縁部b、体部c（ヘラ）、内面黒色、白針、NO.5　大型D
SI－04（奈良、平安）								
160－1	318	床面(2)6層	土師器	坏	14.0	6.1	8.4	外面口縁部c（ロクロ？）→d、体部ロクロ→回転ヘラ削り、内面口縁部d、黒色処理、底部切り離し不明、回転ヘラ削りか
2	247 352	カマド内	土師器	坏(大型)	－	8.4	(3.2)	外面ロクロ？、底部付近e（ヘラ）、内面体部d、黒色処理
3	245	カマド袖構築土	土師器	甕（小）	口径 13.2	底径 －	器高 (5.0)	外面ロクロ→e、内面ロクロ、ロクロ目は不明瞭
4	352	pit2. 埋土	土師器	甕（長胴か）	－	9.6	(5.3)	外面c→e、内面c、ロクロ不使用か
5	131	埋1層	須恵器	坏	－	7.7	(1.35)	外面、内面ロクロ、回転ヘラ切り
6	131	埋1層	須恵器	坏	－	8.4	(2.6)	外面、内面ロクロ、回転ヘラ切り、内外面火襷
7	131	埋1層	須恵器	坏	14.5	8.0	4.5	外面、内面ロクロ、回転ヘラ切り、ヘラ記号（1条）、白針
8	269	カマド内	須恵器	坏	15.4	8.8	4.5	外面、内面ロクロ、回転ヘラ切り、内底に凹線、外面沈線（金属器模倣か）火襷、白針
9	268	カマド構築土中	須恵器	坏	14.0	8.2	4.1	外面ロクロ→再調整（削り）、内面ロクロ、回転ヘラ切り、ヘラ記号（2条）、白針
10	287	床(2)	須恵器	坏	13.6	7.4	3.9	外面、内面ロクロ、回転ヘラ切り、白針
11	353	カマド内埋土	須恵器	坏	13.4	－	(3.2)	外面、内面ロクロ、床(4)相当、小型、白針
12	320	埋7b層	須恵器	坏	－	7.6	(0.8)	外面、内面ロクロ、回転ヘラ切り、内外面火襷
13	354	床面(4)	須恵器	坏	11.0	6.5	3.4	外面ロクロ→再調整（削り）、内面ロクロ、回転ヘラ切り、小型、白針
14	269 373	床面(4)	須恵器	坏	15.6	8.8	4.0	外面、内面ロクロ、回転ヘラ切り、外面体下部に煤付着
15	428	床面(4)	金属製品	鍬、鋤先	長さ 22.1	幅 17.8	厚さ －	鉄、pit2上面
161－1	131	埋1層	金属製品	鉄鏃	全長(10.8) 茎長(3.65)	0.45	0.45	鉄、茎末端欠損
2	425	床面(2)	金属製品	不明	全長 (10.6)	0.4	0.4	鉄、端部に木質残存、錐？
3	427	床面(4)	金属製品	不明	長さ 9.95	1.3	－	鉄、鏃？
4	426	床面(3)	金属製品	不明	(3.5)	－	0.7	鉄、鉸金具あるいは釘？
5	381	床面(4)	金属製品	不明	約3.8	0.6	0.4	鉄、鉸金具あるいは釘？
SD－08								
163－1	55 63	埋土	土師器	鉢	口径 (26.0)	底径 (8.8)	器高 17.0	外面口縁部b、体部e、c、内面口縁部b、体部c、底部木葉痕
2	60 62	埋土	土師器	甕	－	8.0	(5.4)	外面体部c、内面体部c、底部木葉痕、白針
3a 3b	58 62	埋土1層 埋土上部	須恵器	坏	16.0	7.8	(4.5)	外面ロクロ、内面ロクロ、回転ヘラ切り
4	62	埋土上部	須恵器	短頸壺	11.0	－	(4.1)	外面ロクロ、内面ロクロ
5	141 28	埋土上部	須恵器	鉢	14.6	－	(10.7)	外面ロクロ、内面ロクロ、（鉄鉢形）
6	62	埋土上部	須恵器	瓶？	－	－	－	外面ロクロ、内面ロクロ、回転ヘラ削り
7	62	埋土上部	須恵器	甕	－	－	－	外面平行叩き、内面円弧のあて具痕、白針
1号畝状遺構（II区）								
165－1	264	溝h埋土	土師器	高坏	19.85	－	(3.3)	外面口縁部b、体部c（ヘラ）、内面口縁部b→c（ヘラ）、体部c（ヘラ）→d、無彩、白針
2	344 157	溝hg埋土	土師器	壺（小）	6.7	－	(3.75)	外面口縁部b、c、内面口縁部b、c、無彩
3	83	溝a埋土	石製品	円板	長さ 2.3	幅 2.15	厚さ 0.3	孔1ヶ、模造品
4	155	溝g埋土	石製品	剣形	(2.3)	(2.1)	(0.6)	欠損品、模造品
5号畝状遺構（I区）								
167－1	173	埋土	土師器	坏	口径 －	底径 －	器高 －	外面口縁部b、体部d、内面d、黒色処理、白針　E

26. 第18次出土遺物観察表(4)

(単位 cm)

図版No	遺物No	層位	種類	器種	法量			特徴
167－2	192	埋土	土師器	高坏	－	－	(10.1)	外面坏部e、脚部b、d、内面脚部b→c（ヘラ）、赤色B　A_2
7号畝状遺構（K－11、12トレンチ）								
169－1	371	溝b埋土	土師器	坏	－	(8.2)	(5.6)	外面底部e（ヘラ）→d（ヘラ）、内面底部d（ヘラ）、黒色処理、白針
SD－25（K－11・12トレンチ）								
169－2	406	埋土	土師器	坏	16.5	－	3.95	外面全面e→d、内面口縁部d、黒色処理、白針
3	406	埋土	須恵器	坏	－	10.4	(1.4)	外面ロクロ、回転ヘラ削り、内面ロクロ
4	406	埋土	須恵器	坏	－	9.2	(1.0)	外面ロクロ、回転ヘラ切り？→c、内面ロクロ
SD－01（中世）								
178－1	41	埋土	瓦	平瓦	長さ (4.8)	幅 (4.5)	厚さ (1.7)	凹面布目、凸面縄目→ナデ消し、焼成不良、薄手、(古代)
SD－02								
178－2	188	埋土	土師器	坏	口径 －	底径 －	器高 －	外面口縁部b、体部e？、内面d、黒色処理、SI－01と関連か　E_1 ？
3	188	埋土	土師質土器	小皿	－	6.0	(0.7)	C、回転糸切り、見込みに若干赤色顔料付着
4	188	埋土	土師質土器	小皿	－	4.6	(0.85)	D、回転糸切り？
5	7	埋土 北壁付近	瓦	平瓦	長さ (4.8)	幅 (3.2)	厚さ (1.5)	凹面布目、凸面ナデ？、胎土致密、還元（古代）
6	188	埋土	瓦	平瓦	(8.0)	(10.8)	(2.8)	凹面布目、凸面縄目（太）、(古代)
SD－10								
180－1	77	埋土	土師質土器	小皿	口径 －	底径 4.7	器高 (1.1)	A、ロクロ、回転糸切り、厚手
SD－13								
180－2	431	南壁	須恵器	短頸壺	－	－	－	外面ロクロ、内面口縁部ロクロ、体部あて具痕
遺構外（I、II区）								
183－1	112	I区東部 天地返し	土師器	坏	－	7.8	(1.25)	外面ロクロ（底部削り）、内面d、黒色処理、高台、削り出し？
2	26	I区西部 天地返し	土師質土器	小皿	－	5.8	(1.2)	C、ロクロ、回転糸切り、厚手
3	413	I区 天地返し？	近世陶器	皿	－	7.2	(1.0)	長石釉、美濃（志野）、17c前
4	26	I区西部 天地返し	土師質土器	小皿	－	7.4	(1.3)	D、ロクロ、回転糸切り、厚手、建物跡群と関連か
5	416	O－12区 天地返し	中世陶器	皿？	－	高台径 5.4	(1.4)	鉄釉、削り出し高台、瀬戸美濃、16c?
6	108	I区 天地返し	須恵器	坏	17.0	－	(4.0)	外面ロクロ、底部付近c（ヘラ）、内面ロクロ、切り離し不明、白針
7	23	O－12区 天地返し	近世陶器	擂鉢	－	－	－	鉄釉、卸目7条（間隔広い）、瀬戸美濃系？、17c
8	23	O－12区 天地返し	瓦	丸瓦	長さ (9.3)	幅 (4.2)	厚さ (2.5)	凹面ナデ、凸面ナデ、還元焼成
9	23	O－12区 天地返し	金属製品	把手(耳)	2.9	2.5	0.83	鉄、重さ14.0g、鋳物？
10	411	F－13区 VI～VII層	土師器	壺（小）	口径 －	底径 3.2	器高 (6.4)	外面上部c、下部e→c、内面上部c（指？）、白針　小型A？
11	334	F－13区 VI～VII層	土師器	坏	－	－	－	外面口縁部b、体部c→d、内面口縁部b、体部c→d、無彩、白針　C
12	143	E－22区 天地返し	土師質土器	小皿	10.8	－	(2.0)	A、ロクロ
13	422	E－22区 天地返し	中世陶器	鉢	34.2	－	(6.1)	ロクロ、渥美？、12c～13c
14	28	II区西部 天地返し	石製品	不明	長さ (3.9)	幅 (3.2)	厚さ (0.5)	孔1ヶ、大型品

27. 第18次出土遺物観察表(4)

(単位 cm)

図版No.	遺物No.	層位	種類	器種	文様		特徴
弥生土器							
185－1	259	I区深堀	III層	甕	縄文（LR）	－	口径 底径 器高 27.2 6.0 45.0 口縁部内外面・体部内面・底部磨き・桝形囲式以前
2	95	SD－02	埋1層	壺？	－	沈線文(二本一描)	十三塚式
3	195	SI－04	埋1層	壺？	－	沈線文(二本一描)	十三塚式
4	226	II区 pit 99	埋1層	壺	縄文（単節）	沈線文(二本一描)	十三塚式
5	22	O－12区	天地返し	甕？	縄文（単節）	山形沈線文	－

第３章　分析と考察

ここでは、第16～18次の出土遺物・検出遺構について分析・考察を行う。出土遺物は縄文時代～江戸時代のものがあるが、数量の多い古墳時代と中世～近世を扱う。

第１節　古墳時代

古墳時代の遺物・遺構は各次調査区毎に存在するが、ここではそれらを総合的に扱う。

１．土師器の分類

土器の分類は、第14次調査時の分類（佐藤洋：1987）を基に新たに分類を行った。その結果、中期～後期の土器群は５大別11形式41類型が明らかとなった。これは、器種別に形態や法量をグルーピングして得られたものである。

坏

坏Ａ：体部が内弯しながら立ち上がり、口縁部が屈折し端部が開くもの。この類型には、内外面に屈折（稜）をもつもの（A_1）や内面に屈折（稜）をもつもの（A_2）、さらに、内外面の屈折が不明瞭あるいは省略され、口縁端部がやや外反するもの（A_3）がある。底部は、平底・凹底・丸底がある。（A_1：第31図１・A_2：第87図９・A_3：第87図８）

坏Ｂ：体部が内弯しながら立ち上がり、そのまま口縁部に至るもの。この類型には、深浅の差がある。底部は平底・丸底がある。（第12図３・第89図３・第100図１）

坏Ｃ：体部と口縁部の境に段をもつもので、口縁部は直立ぎみのものが多い。境の段は器高の上半部にある。底部は凹底・丸底があるが、平底は不明である。須恵器坏の影響で出現するものであろう。（第12図１・第19図１）

坏Ｄ：体部が内弯しながら立ち上がり、口縁部がほぼ直立するもの。体部と口縁部の境に稜が形成されるものと不明瞭なものがある。また、口縁部は若干内傾や外傾の変異がみられる。底部は凹底・丸底のものがある。（第19図２・第80図２）

坏Ｅ：体部が内弯しながら立ち上がり、口縁部が外反あるいは外傾するもの。体部と口縁部の境に稜や段をもつ。稜や段が器高の上半部に位置するもの（E_1）と下半部に位置するもの（E_2）がある。E_1類には平底・丸底、E_2には丸底がある。（E_1：第85図４・E_2：第137図３）

坏類は変異が大きく、今後は資料の増加に伴って分離独立すべきものが存在する可能性もあろう。また、黒色処理や赤彩を施すものがある。黒色処理は坏Ｅ類に特徴的にみられるが、坏Ａ・Ｃ類にも存在することが判明した。赤彩土器には、器表面に赤色顔料を塗布したもの（赤色Ａ）と、あたかも粘土中に顔料を混ぜたごとく胎土自身が赤色～赤褐色を呈するもの（赤色

B）がある。後者には胎土中の砂粒が目立たず、精製の胎土のものがある。この他にも、赤彩文様と思われるもの（第74図２）や内面黒色処理・外面赤彩を施した破片がE類にみられる。

高坏　坏部と脚部が揃っているものが少ないので、脚部に主眼をおく。

高坏A：脚部が「ハ」字状に開く、開脚形のもの。A類には、脚部が末広がりのもの（A_1）と裾部として明瞭に区別できないが、下半部が急に広がるもの（A_2）がある。A_2類には、脚端部が捲れ上がるものがある。坏部は、口縁部が外傾や外反するもの、下端の稜の有無の差がある。（A_1：第８図４・A_2：第89図６）

高坏B：脚部に屈折があり、柱状部と裾部に区別できるもの。柱状部が中膨らみのもの（B_1）と柱状部が円筒状あるいは下方にやや開くもの（B_2）、そして、裾部が有段のもの（B_3）がある。A類同様、坏部口縁が外傾・外反するものや坏部下端の稜の有無があり、口縁外反や稜の消失は新しい要素とみられる。（B_1：第29図９・B_2：第71図５・B_3：第79図１）

高坏C　高坏Bと同じ形態で、柱状部が中実となる短脚のもの（第99図７）。このC類は、第14次調査のSI01の高坏（B_2類で、やや短脚化し柱状部の器厚が肥厚したもの）や第29図４から形態変化したものと予想される。

高坏には、この他に須恵器の影響とみられる短脚で透かし（長方形か）のある破片（第59図４）がある。また、坏同様赤彩土器（赤色A・B）がある。

壺　壺類は、大型・中型のものが甕と区別しにくいが、球胴で体部最大径が、頸部径の約２倍以上のものを一応の目安とした。なお、大型のものはちょうど２倍前後で、器面の特徴や調整などから分類したものもあり、また器高が30cm以上・25cm以下を基準に３種に大別した。

大型壺A：体部が球形で、「く」字状口縁のもの。口縁部が外傾するもの（A_1）と外反するもの（A_2）がある。（A_1：第89図９・A_2：第155図３）

大型壺B：複合口縁（有段）のもの。口縁部の粘土紐を折り返すか、段が残るように貼付して段を形成している。（第30図２）

大型壺C：口縁部の中位に粘土紐を貼付して、凸帯状に仕上げたもの。実際には、段状に仕上がっておりB類と類似している。（第24図５）

中型壺A：体部が球形で、「く」字状口縁のもの。（第30図６）

中型壺B：体部が球形で、口縁部が直立ぎみのもの。（第８図13・第19図３）

中型壺C：体部が球形で、口縁部が外反するもの。（第137図13）

小型壺A：口縁部径が器高や体部最大径とほぼ等しいもの。（第８図11）

小型壺B：口縁部径が体部最大径より小さく、体部はソロバン玉に近い状態を呈するもの。口縁部高は、体部高の約½以下である。A類より大型化する。（第８図12）

小型壺C：口縁部が有段のもの。体部の特徴が不明で、中型になる可能性もある。(第30図4)

小型壺D：短頸のもの。(第89図5) 須恵器短頸壺の影響であろうか。

小型瓿　：小型壺で、体部に穿孔をもつもの。体部は不整球形である。小型壺Bとほぼ同じ形態のもの（A）と口縁部が外反するもの（B）がある。B類は外面のほぼ全面がミガキ調整に変化している。(A：第87図2・B：第26図5)

甕　甕類は法量の差により、器高28cm以上・20cm以下を基準に3種に大別した。

大型甕A：体部は球形に近く、口縁部が屈折して「く」字状を呈するもの。(第12図6)

大型甕B：体部は球形に近く、口縁部が直立ぎみで上半部が外傾(外反)するもの。口縁部の下半にヘラナデを施した後に、口縁部を横ナデしたものがある。(第26図6・第154図7)

大型甕C：体部は球形に近く、「く」字状口縁で、口縁部径が体部最大径を上回るかほぼ等しい広口のもの。(第80図8)

大型甕D：体部中央付近に最大径をもつ胴張り長胴のもの。口縁部の屈曲が弱く、外反あるいは上半部が外反（B類の口縁部類似）する。底部に木葉痕をもつものもある。体部にミガキ調整を施すものが多い。(第75図3・第138図1)

中型甕A：体部は球形に近く、口縁部が屈折して「く」字状を呈するもの。(第19図3・第85図8)

中型甕B：体部が張り、口縁部に屈折がなくゆるく外反する長胴のもの。底部に木葉痕をもつものがある。(第75図4)

中型甕C：体部が上方に開き、口縁部は屈折せずゆるく外反する広口のもの。頸部に段の付くものもある。(第96図4・第139図1)

この他に、体部の最大径が下半部にある下膨れの甕の存在も大型・中型に予想されたが、断定できるものはない。

小型甕A：体部は球状に近く、口縁部が外傾・外反するもの。(第87図11・第137図12)

小型甕B：体部が張り、口縁部は屈折が弱く直立あるいはゆるく外反するもの。(第99図8)

小型甕C：体部は上方に直立あるいはやや開き、口縁部はゆるく屈曲・外反する広口のもの。口縁部径が体部最大径を上回るものが多いとみられる。また、頸部に段のつくものがある。(第74図11・第96図2)

小型甕D：体部は直立ぎみで、口縁部が屈折するもの。(第146図2)

小型甕E：台付のもの。台部は、高坏の脚部の形態・調整と類似している。(第74図14)

甑　法量に大小の差があり、器高25cm以上と15cm以下の2種に大別した。ただし、中型のものが存在するかは不明である。

大型甑Ａ：体部が球形に近く、口縁部が「く」字状を呈する無底のもの。（第10図４）

大型甑Ｂ：中型甕Ｃと同形態で、広口・無底のもの。（第87図13・第137図15）

小型甑Ａ：体部が上方に開き、口縁部に至る鉢形単孔のもの。口縁部の屈折のないもの（A_1）と、あるもの（A_2）がある。Ａ類には、口縁部が肥厚するもの、やや外反するもの、指押え痕などがみられる。（A_1：第91図４・A_2：第26図２）

小型甑Ｂ：砲弾形で無底のもの。口縁部は外反する。（第74図13）

甑には、この他に第30図３の把手の出土例から、把手付甑の存在が予想される。また、底部が多孔のものも予想されたが出土していない。

以上が土師器の分類であるが、他に埦・小型鉢・ミニチュア土器・支脚用土器？が出土している。なお、本遺跡では11次調査時に関東系土師器が出土しているが、今回は出土していない。

２．須恵器

古墳時代の須恵器は、器形全体が判明するものがなく分類は割合する。ここでは調査区毎の器種を提示するに留めたい。

第16次調査区：有蓋直口壺（台付？）・小型瑳・瓶類・器台（高坏形か）・甕

第17次調査区：坏・無蓋高坏・小型壺・小型瑳・二重瑳？・器台（高坏形か）・甕

第18次調査区：明確に古墳時代に属するものはないようである。

なお、17次調査区付近で、過去に樽形瑳が表採されている。また、調査時に、17次調査区西側の畑地表採という土師器模倣の無蓋坏（坏E_1類か）を、地元の方に見せていただいた。

調査時に出土した須恵器は、陶色 TK208 前後のものが主体であるが、陶邑窯と比較した場合シャープさに欠けるなど、ストレートな対比ができない。大部分は、在地などの地方窯の製品とみられ、明確に陶邑窯など遠隔地の製品と理解されるものはないように思われる。

３．各器種の消長と土器組成

ここでは、遺構単位に器種の組み合わせを検討し、器種毎の消長や組み合う頻度などを明らかにし、画期の抽出を試みてみたい。検討する土器群は、先行研究の結果明らかにされた南小泉式から住社式に属することは明らかであるが、各型式の概念や土器組成が充分明らかになっているとは言いがたい。宮城県を中心として、東北地方の土師器編年を明らかにしたのは氏家和典氏（氏家和典：1957）で、この点は高く評価されるが、氏の提示された編年資料を今日的視点からみれば、南小泉式土器のなかには帰属型式を誤認していると思われるものがある。また、引田式土器には、宮城県と福島県では形態の異なる坏類が同一型式として認識され、かなり時間幅のあるものとなっている。両型式の土器組成は、型式学的に選別されたものが多く、確証がもてないものもある。こうした点から結果的に、その後の土器組成の理解に差や混乱が生じている。ここでは、この問題に充分答えることができるか分からないが、本遺跡の組成や

●は床及び床面相当、○は埋土出土、？は推定器種、三角形は細分器種不明（▲床相当、△は埋土）　黒：黒色処理、赤：赤彩、平：平底、凹：凹底、丸：丸底

	遺構名	器種	坏								高坏						大型壺				中型壺			小型壺				小型甕		大型甕				中型甕			小型甕					大型甑		小型甑			その他	須恵器
			A1	A2	A3	B	C	D	E1	E2	A1	A2	B1	B2	B3	C	A1	A2	B	C	A	B	C	A	B	C	D	A	B	A	B	C	D	A	B	C	A	B	C	D	E	A	B	A1	A2	B		
第16次	SI01	カマド			●黒	●黒					●	●	○									●		●	●																						
	SI02	炉		○	●?									●																												●					
	SI05	なし	●赤丸			●丸	●丸																							●																	
	SI06	不明	△			●平													○												●																刃子	●甕
	SI07	炉					●凹	●丸														●														○											○甕？甕
	SI08	炉		●丸	○丸	●													○										●																		
	SI09	不明									△																																				○甕・甑
	SI10	カマド										●																																			
	SI11	不明										○赤		○						○																											
	SK03	-----									△赤																																	●			
	SK06	-----		○丸？																									○		○																
	SK11	-----							●平								●?																														○器台・甕
	SK12	-----	○丸？	○黒丸	○赤平	○丸						○赤	○赤	○?		○?			○		○赤	○		○		○							△								△					把手鉄滓	○甕(SI05)
第17次	SI01	不明		●			●丸		○黒？	●赤丸																																					ミニュチュア鎌？	
	SI02	炉？				●丸？			△滓入					●																																		
	SI03	カマド			●		○黒丸		○?	●黒丸																						●		●				●		●	●				●		
	SI04	カマド	●	●		●					▲													●?																							刀子	
	SI05	不明													●										●?																						小鉢ミニチュア	
	SI06	不明		○		○平		●									▲														●																	
	SI07	不明		●	●	●		●丸						●																																	埴	
	SI09	不明			●丸	○		○																●									▲														
	SI10	カマド	●丸	○					●平		▲																						●	●?													
	SI11	カマド		●平	●丸	●丸													●								△									●							●				
	SI12	炉	○丸			○丸						○					○		○							○丸							○?											○		一括廃業	
	SI14	不明									△													●?																								○器台
	SI16	不明									▲																																					
	SI17	不明		●	○									●																▲																		
	SI18	不明							○黒？																										○				●								
	SD09・10	-----	○	○		○丸	○丸	○丸		○黒丸?						○																		○	△		○					○				
	SD12	-----		○		○		○																																						SK26と接合	
	SK26	-----		○																																										ミニチュア	

表28　第16～18次調査主要遺構器種組成表（1）

●は床及び床面相当、○は埋土出土、？は推定器種、三角形は細分器種不明（▲床相当、△は埋土）　黒：黒色処理、赤：赤彩、平：平底、凹：凹底、丸：丸底

	遺構名	器種	坏								高坏						大型壺				中型壺			小型壺				小型甕		大型甕				中型甕			小型甕						大型甑		小型甑			その他	須恵器
			A1	A2	A3	B	C	D	E1	E2	A1	A2	B1	B2	B3	C	A1	A2	B	C	A	B	C	A	B	C	D	A	B	A	B	C	D	A	B	C	A	B	C	D	E	A	B	A1	A2	B		
第	SI01	カマド		●	○	○丸？	●黒			●黒丸												●										●			●	●						●	●			ミニチュア	
	SI02	カマド			●					●丸？																																						
	SI05	な し						○		○丸？																																				ミニチュア	
	SK03	-----				○丸																																									
18	SK10	-----																																						●								
	SD03	-----			○丸																																										
	SD04	-----				○？			○																			○																				
次	SD05	-----		○	○	○				○黒？																																				ミニチュア	○甕
	SD20	-----											○																																		○甕
	SX02	-----						●		●丸						●		●												●		●			●											小 鉢	
第	1号住	炉																																													●甑
	3号住	炉 ？				●平						○		○			△		●									△																		砥 石	
4	7号住	炉		○平										●																			▲															甑 樽形甑？
次	16号住	カマド		●凹				●丸																																				●			●坏器台
10	3号住	カマド		●平		●丸		●丸							●													●			●																
次	4号住									●黒																						●								●？							
12	住居	炉				●平					●		○	●														●					●			○？											刀 子	
13	1号住	カマド	●平								●			●			△		●					●				●					●									●？					鉄 鏃	
14	SI01	カマド		●	●	●		○	●					●														●								●											
15	SI1	カマド	●黒	●丸	●丸																								●				●														
	SI2	炉 ？			●丸	○平丸		●丸											○									●		●			●													小 鉢	
次	SI3	不 明		●丸										○？													●																				
遠見塚	12トレンチ第III群	-----			●丸	●丸？			●丸																																						●（坏C）
	12トレンチ第IV群	-----																																													●（坏E1）
埋文研	昭和62年1号住	炉カマド		○平	●平丸	●平					●		●	●			●							○	●					○				●													
	昭和63年1号住				●			●			▲																	●				●															中型壺C類の小型品	

遠見塚古墳トレンチ出土須恵器坏は、土師模倣の坏である。

第18次調査以下は過去の調査出土資料
遠見塚は、遠見塚古墳のトレンチ調査出土資料
埋土研は、埋蔵文化財発掘調査研究所が組織した調査団の出土資料

表28　第16～18次調査主要遺構器種組成（２）

その変遷の試案を示すことにしたい。

さて、各調査区の出土土器を主要遺構別に表１・２に示した。この表は、遺構毎にどのような器種組成となるか、さらに遺構間の器種組成の差を比較するために作成したもので、数量を示したものではない。この表に基づいて特徴を比較すると、いくつかの差を見出すことができる。たとえば、坏では坏A～D類のいずれかにE_1類が共伴するもの、E_1・E_2類が共伴するもの、E類が全く共伴しないものなど組成に差が見出せる。氏家氏の編年によれば、坏E_1類は引田式、坏E_2類は住社式以後と理解される。また、坏E_2類と大型甕Dは遺構内で共伴する頻度が高い。次に、小型壺のうちA類は南小泉式、B類は引田式の特徴とされている。本遺跡では過去の調査において共伴した例はないが、今回の第16次調査区 SI01 でA・B類の共伴例が確認でき、過渡期の現象であろう。したがって、小型壺はA類の消長の中でB類が出現し、B類の盛行期にはA類は消滅しているものと予想される。B類の出現をもって型式を区別する目安になるものと思われるが、この点はB類の消長が明確になることが望まれる。このように、各器種内での時間的変化や組み合う頻度を検討し、遺構の重複・土器の接合関係や過去の調査例を考慮した結果、以下のような器種組成及びその変化によるグルーピングが理解できた。

〈第１グループ〉

坏はA_1～A_3・B・C・D類があり、特にB類が主体的である。底は平底・丸底が混在し、凹底は少ない。平底から丸底へ変化していくものと考えられるが、平底の比率が比較的高い。高坏はA・B各類があるが、B_2類が多く、B_3類は不明である。壺類は大・中・小の各類型があり、小型壺A類が多く、大型壺B類の存在が特徴的である。壺類の数量は、甕類を上回る。甕は大・中・小の各類型があるが、相対的に少ない。大・中・小いずれもA類がみられ、体部が長胴化するものが現れる。大型甕B類も出現するようであるが、極めて少ない。甑は大型A類があり、おそらく小型A_1類が伴うのであろう。

このグループの住居跡は基本的に炉をもつ。また、このグループに属するとみられる昭和60年度調査１号住居跡（埋蔵文化財発掘調査研究所：1987）では、炉とカマドが共存しているようで、本遺跡では古いカマドの例であろう。須恵器出土例は、第17次 SI14 で埋土中に TK208 併行とみられる器台があり、また、第４次調査１号住居跡は炉をもつので、床面より TK216～208 頃の瑕が出土している。このグループは、遅くとも TK208 以前であることを示している。また須恵器の出土しない住居跡のなかには、第12次調査住居跡出土土器のように坏の保有数が少なく平底である点、高坏の保有数が多い点など古相を呈するものがあり、時期的に細分されることが予想される。このグループでは、遺構単位にみた場合に坏の保有数の増加や丸底化が進行しているものとみられる。細分の問題については、資料の増加を待ちたい。

〈第２グループ〉

坏類はA_1～A_3・B・C・D類があり、A_2・B類が主体的である。平底は激減し、丸底が主体となる。遺構毎の坏保有数は、第1グループに比べ増加している。また、A・B類には、後期以後の特徴とされる黒色処理を施すものが少数出現している（第16次SI01など）。黒色処理を施す坏は、第3グループ以後に引き継がれるが、祭祀行偽などと関連して出現するものかもしれない。この坏の出自や出現時期の再検討が必要である。高坏は、A・B各類型のものがある。A_2類には脚柱状部が中実のものがあり、C類の祖形となる可能性がある。遺構単位でみた場合、高坏が出土するものとしないものの差があるが、いずれにしろ第1グループに比較して、総体的に減少している。坏部の口縁が外反するものや下端の稜の消失したものが、目立つようになる。脚部が短脚のものも、少数みられる。壺類は大・中・小あり、大型B類は段が目立たなくなる。小型壺はB類が増加し、A類は僅かに残る。C・D類もみられ多様である。小型瑳はA・B類がある。このうちA類は小型壺B類に穿孔をもつものであるが、第15次調査SI 3より出土している（渡辺・宮崎：1989）。甕類は大型A～C類、中型A類があり、長胴化を示すものがある。小型甕は不明である。甑は大型A類・小型A_1類に、小型A_2類が加わるようである。

このグループの住居跡は、ほとんどカマドへ変化しているが、炉が僅かに残る。須恵器を出土した住居跡は、第16次SI08（埋土中）・第4次16号住居跡（土坑内）にあり、いずれもTK208～23頃とみられる。

〈第3グループ〉

坏はほぼ丸底であり、A_1～A_3・B・D類に、E_1類が加わる。C類は不明である。坏口縁部外面にまでミガキ調整を施すものがあり、第4グループへ引き継がれる。高坏は激減し、B_2類が残る。このB_2類は短脚化の傾向を示し、柱状部の器厚が厚手となるもの（第14次SI01）がある。壺も激減し、大型A_1類などが僅かに残る。小型瑳はB類があり、外面全面ミガキ調整で、口縁部が外反するものが出現する。甕は大・中・小がある。いずれもA類が主体的であるが、大型B類・中型B類の存在が特徴的である。甑は詳細不明である。

このグループと同時期と考えられる遠見塚古墳12トレンチ出土の第Ⅲ・Ⅳ群土器（結城慎一・工藤哲司：1979）には、土師器模倣の須恵器坏がある。この坏は、今回分類した土師器坏C・E_1類と同形態の二種類であり、陶邑とは比較しにくい在地の須恵器である。なお、赤彩土器のうち、赤色Bとしたものはこのころ減少するようである。

〈第4グループ〉

坏はE_2類が新たに加わり、分類したすべての類型が出揃う。ただし、これまで伝統的に製作されていたA_1～A_3類は激減する。また、黒色処理するものと赤彩するものが、どちらが主体とは言えない状況である。高坏はほとんどみられないが、A_2類あるいはB_2類から変化したとみられるC類が出現し、短脚となる。壺も僅かで、大型A_2類・中型C類がみられる。甕は増加し、

表29　段階別器種組成と消長

◎出現率の高いもの　○出現率の並のもの　○出現率の低いもの

器種	坏								高坏						大型壺				中型壺			小型壺				小型甕		大型甕				中型甕			小型甕					大型甑		小型甑			備考
段階	A1	A2	A3	B	C	D	E1	E2	A1	A2	B1	B2	B3	C	A1	A2	B	C	A	B	C	A	B	C	D	A	B	A	B	C	D	A	B	C	A	B	C	D	E	A	B	A1	A2	B	
	↓	↓		↓					↓	↓							↓					↓				↓		↓				↓			↓							↓			
第1段階	○	○	○	◎	○	○			○	○	○	○	?		○		○	○	?	○		○	○	?		○		○				○			○					○		○			須恵器TK208以前か
第2段階	○	◎	○	○	○	○			○	○	○	○	○		○		○		○	○		○	○	○	○	?		○	?	○		○			?					○		○	○		須恵器TK208～23頃 黒色処理出現、鉄器の生産
第3段階	○	○	◎	◎	?	○	◎			?		○			○					?							○	○	○			○	○		○										石器模造品の激減
第4段階	○	○	◎	◎	○	○	○	◎						○		○					○							○	○		◎		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○		○	ミニチュア土器増加 黒色処理増加
				↓	↓			↓						↓		↓												↓	↓		↓		↓			↓	↓				↓			↓

注：この表は、各段階における遺構単位の類型出現率をみたもので、必ずしも出土量が反影されていないものもある。
矢印は推定した系譜を示す。
？は存在するかどうか確認できないことを示す。

表30　段階別主要遺構一覧

	第16～18次調査区遺構	過去の調査資料
第1段階	16次 SI02・SI06・SI07・SI11	4次（1号住居跡・3号住居跡・7号住居跡）、12次住居跡、13次1号住居跡
	17次 SI02・SI09・SI14・SI12	埋文研 昭和62年度1号住居跡
第2段階	16次 SI01・SI05・SI08・SK03・SK12	4次 16号住居跡、10次 3号住居跡、15次 SI2・SI3
	17次 SI04・SI05・SI07・SI11	
第3段階	16次 SK06・SK11	14次 SI01、15次 SI1、埋文研 昭和62年度1号住居跡
	17次 SI10?	遠見塚古墳第12トレンチ第III群・第IV群土器
第4段階	17次 SI01・SI03・SI18・SD09・SD10	10次 4号住居跡
	18次 SI01・SI02・SI05・SD05・SK03・SK10・SX02	

多様である。大型では、新たにD類が出現し主体となる。小型甕も多く、バラエティに富む。大型・中型の甕底部に木葉痕をもつもの、中型・小型の甕頸部に段の付くものが現れる。下膨れの長胴甕は明確なものは確認できず、ハケ調整の甕が主体とはなっていない。甕や壺では口縁部高が大きくなり、ゆるく外反するものへ変化している。

〈第5グループ〉

本遺跡では、第4グループに後続するグループが存在する。これからは、栗囲式に相当する土器群であるが、まだ資料が少なく今後の課題としたい。

以上のグルーピングに基づいて、各グループの器種組成・各器種の消長を表29に示した。まだアバウトなグルーピングであるが、各グループはそのまま画期として理解できるものと判断し、時期的変化を示す「段階」と呼称する。なお、時期的に近接する混入品を選別廃除できなかった点や、各グループ内で時期差の予想されるものがあるなど、今後精度を高めなければならないと考えている。

4．編年との対比

県内の土師器の編年研究には、氏家和典氏編年・宮城県教育委員会編年(丹羽茂：1983)・加藤道男氏編年（加藤道男：1989）などがある。このうち、前2者と比較する。また、最近福島県で行われた編年に関するシンポジウムのうち、柳沼賢治氏編年（柳沼賢治：1989）と比較する。ただし、簡単な対比に留めざるを得ない。

第1段階は、氏家編年の南小泉式に相当し、宮城県編年の南小泉式A～B群段階に相当するものであろう。また、柳沼編年の南小泉式古～中段階に相当するものと考えられる。第2段階は黒色処理など後期的様相が現れ初める段階で、氏家編年の引田式、宮城県編年の南小泉式B～C群段階以後とみられる。柳沼編年では、南小泉式新段階から引田式古段階に相当するものであろう。第3段階は、従来資料が少なく、県内では充分に区別認識されていなかった段階である。この段階は、特に坏E_1類と甕大型B類・中型B類の出現および坏A_3類の増加が特徴的である。住社式に至る過渡的な様相をもつ。氏家編年の引田式から福島県栃木遺跡資料を分離し、「佐平林式」を福島県では提唱されたが（目黒吉明他：1978)、これに近い内容をもっているようである。また、柳沼編年の引田式新段階に相当するものであろう。第4段階は、氏家編年の住社式である。柳沼編年では住社式古段階を中心に、新段階を含んでいるもの(第18次SI01出土土器など）と考えられる。

なお、第1段階以前に、塩釜式との過渡的な段階が存在するのかどうか問題となるが、この点は不明である。今回は出土していないが、第11次調査の住居跡や溝跡から関東系土器が出土し、これらは第4～5段階の土器群と関連するものとみられる。第4段階から第5段階への変化にはなお介在する土器群が予想されるが、本遺跡では不明である。おそらく、栗遺跡の9・

10号住居跡出土土器（東北学院大学研究部：1979）例のような土器群が、住社式の終末あるいは過渡期として予想される。続く第5段階の土器の把握も、今後の資料の増加を待ちたい。

5．遺構の時期

以上のような土器の分類、段階の設定に基づいて、遺構を選別したものを表30に示した。本遺跡の古墳時代の集落跡は、第2段階を主体とするようであるが、時期を確定できない遺構も多い。今回も例外ではなく、確定できなかった遺構については出土遺物や重複関係から、以下のようにまとめることができる。

第16次

第1段階以前：SI03・SK13、第2段階以前：SI09・SK14、第3段階以前：SK07・09、第4～5段階：SD05

第17次

第1段階以前：SK15～20・SK27、第1～2段階：SI06・SI17、第1～3段階：SK28、第2段階以前：SI16、第2段階以後：SI13、第2～3段階：SI15、第3段階以後：SK26・SD12、古墳時代（段階不明）：SI19

第18次

第2段階以前：SD20、第4段階以前：SK13・SK15・SD04、第4段階頃？：SK05・SD03・SD05・3号敏状遺構・4号敏状遺構・SX01・SX03、第4段階以後：SK06～08、古墳時代（段階不明）：SI03・SD24

6．注目される遺構・遺物

次に各調査区で注目される特徴的な遺構・遺物についてふれておきたい。

〈土器製作〉第16次調査では、火処のないSI05で粘土溜の土坑が検出され、工房跡あるいはその関連施設と考えられた。この土坑の粘土中からは、捏ね鉢として転用された須恵器の甕下半部が出土した（写真3左・上から2段目）。なお、甕上半部破片は、床面とSK12から出土したものが接合した。さて、粘土は前述したように、単味で土器焼成実験を陶芸家の大場拓俊氏にしていただいたところ、製作が可能であることが判明している。したがって、SI05の性格は土器製作に関連する施設とみられ、本遺跡では初めての検出である。

〈SK12について〉第16次調査SK12は出土遺物が特徴的で、出土土器の約九割が坏・高坏・壺（中型・小型が出土し、後者が主体）で占められ、これに若干の甕・甑・大型壺・須恵器甕がある。調査時でテンバコ約4箱分の量があり、本遺跡の1基の遺構の土器量としては異常に多い。器種組成の偏在性は、祭祀行偽を示唆するものと思われ、行偽後に土坑に廃棄されたものと考えられる。また、黒色処理した坏も出土している点も注目される。この坏は、初現期に祭祀用として出現し、集落内や墓前の祭祀に使用されたのではないかと予想している。長野県

などでも5世紀後半頃に、黒色土器が出現しているようで興味深い(原明芳：1989)。なお、この種の土器は、一般に普及するのは第4段階以後である。また、この土坑では木炭片・焼土と共に、鉄滓2点の出土が注目される。鉄滓の出土は、本遺跡内で鉄器生産が第2段階には始まっていたことを示すものであろう。さらに、大沢正巳氏の分析（第4章参照）では、この鉄滓が大陸系の鉄素材を原料としている可能性が高いとの結果を得ている。やや先行する時期には、在地の須恵器生産も開始されており、仙台付近では在地首長が先進地から工人あるいは技術を積極的に取り入れていたと評価されよう。なお、本遺跡では第14次調査SD07（第4段階以前）からも鉄滓1点、また、古墳時代の鉄製品は、これまでに刀子・鉄鏃・鎌？が出土している。

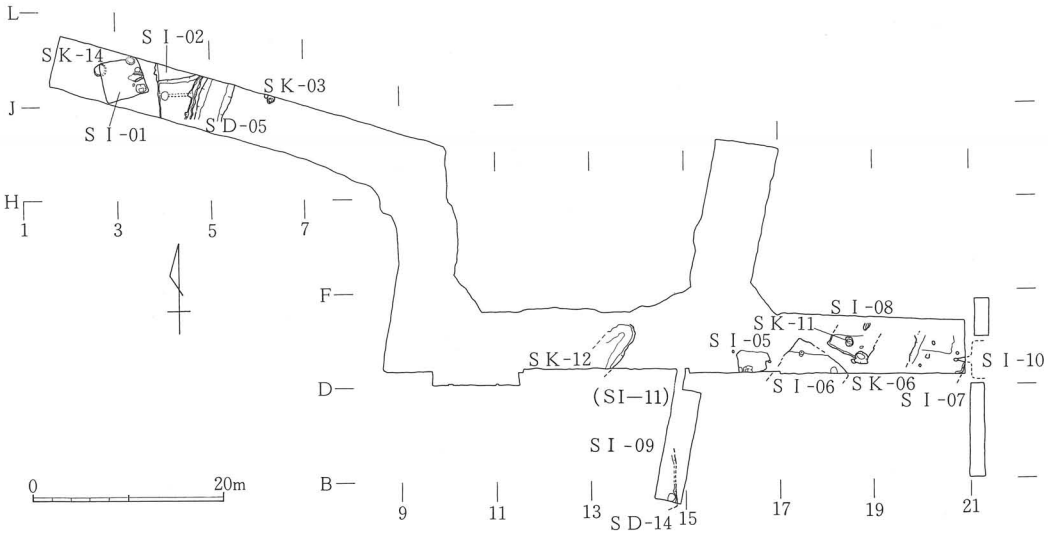
〈石製模造品の製作〉第16次調査SI08では、本遺跡で初めて石製模造品の製作工程を知ることのできる資料が得られた（第22図）。この住居跡は、模造品の工房を兼ねていたことになる。その工程は、まず集落内に一定の大きさの母岩を搬入し、1段階として剝離加工や切断調整(施溝は確認できない）を行って、目的の大きさに近づける（荒割)。荒割のものは、SK12でも出土している。荒割と次の形割とは、区別のつけにくいものもある。2段階として、前述の加工を側辺部を中心に加工し、さらに目的の大きさに近づける(形割)。3段階はさらに加工を加え、円板や剣形など目的の形が明確になる整形の段階である。続く4段階は、研磨や穿孔の段階と考えられるが、この段階の資料は得られなかった。5段階として完成となる。また、加工する過程で生じたチップも出土している。石質は、粘板岩・片岩に近いものと思われる。他に、砥石はないが敲石が出土しており、関連するものと予想される。県内では、専用工房や工房を兼ねる住居跡の発見はないようで、貴重である。なお、古墳時代の祭祀体系を明らかにし、これへの位置づけが今後必要であろう。

〈出土鏡〉第17次調査SD01より、銅鏡が出土している（第123図)。この鏡は全体の約¼の破片で、鈕の部分は分離している。青緑色の錆がつき変形していて、全体の特徴は明確でない。推定鏡径約6.5cm、厚さ0.3cm（鏡縁部）である。鏡背の文様は鋳上がりが悪く、錆が付着して判然としない。乳が1ヶ所認められ、鈕は円鈕である。最も内側の円圏を鈕座と判断して作図した。内区では乳と孤状の文様らしきものがあり、外区には一部に鋸歯文帯がみられる。以上の特徴から、小型倣製鏡と考えられる。内区の文様が定まらない点鏡式は不明であるが、あるいは捩文鏡の一種かもしれない。この鏡はSD01（中世～近世）の南壁付近より出土し、ちょうどSD09重複する部分に相当する。鏡は古墳時代中期以前とみられるが、遺構の年代とは一致しない。なお、出土鏡としては、県内で3例目となろう。

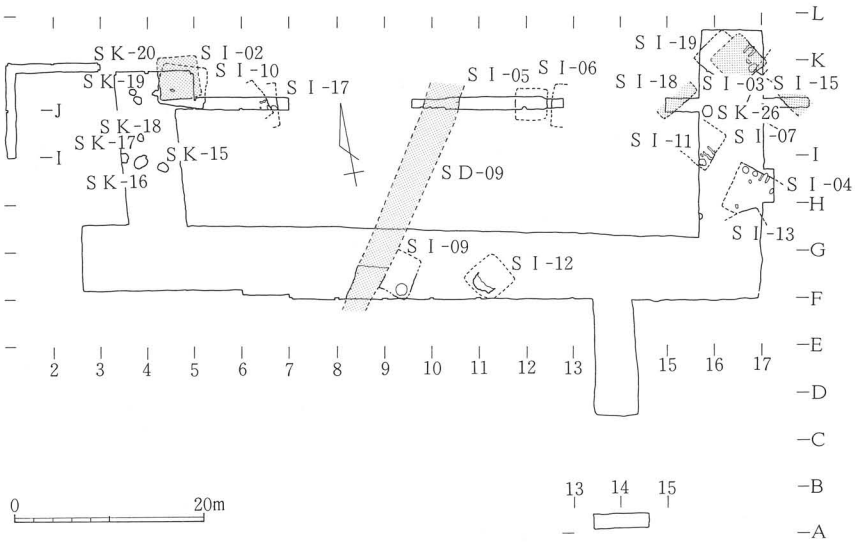
〈焼失住居跡〉第16次SI01・第18次SI01は焼失住居跡で炭化材が比較的良く残存していた。第16次SI01は垂木材の残りは悪いが、桁・梁材とみられる部材が位置関係を保って検出された。その外周には、炭化材片や粘土質シルトの混じる比較的厚い焼土が分布している。焼土に

粘土質シルトが混じるのは何故なのか。あるいは土屋根であった可能性があるかもしれない。次に、第18次 SI01 は垂木材とみられるものが多く、分割材を使用しているようである。これらの配置には、一定の方向性や単位をもっている。また、枘穴をもつ材（第134図C－5）や板状に比較的薄く加工した材もみられる。炭混じりの焼土は、柱穴に沿うように分布しているが、北側では壁側へ2条伸びており、間仕切りや入口施設を反映している可能性もあろう。

以上が、竪穴住居跡の上屋構造を予想できる貴重な事例であるが、他に第16次 SI07・SI11、第18次 SI02 も焼失住居である。また、炭化材の樹種同定の結果、5種類以上の樹種を使用していることが明らかになっている（第4章参照）。

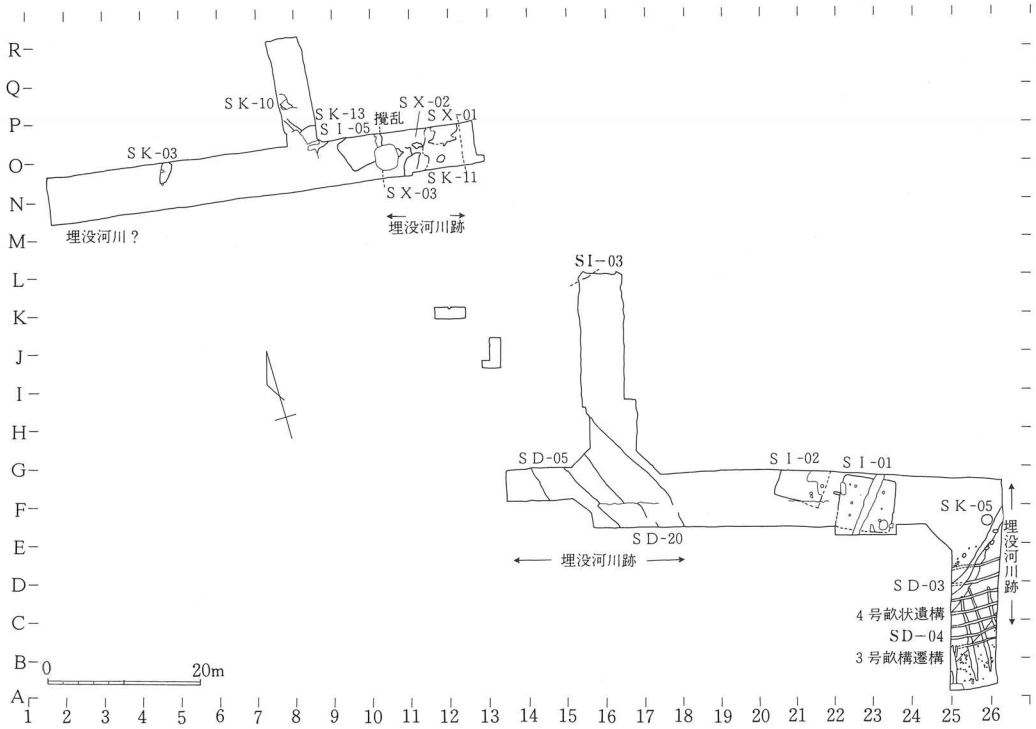


第16次遺構配電図（古墳時代）

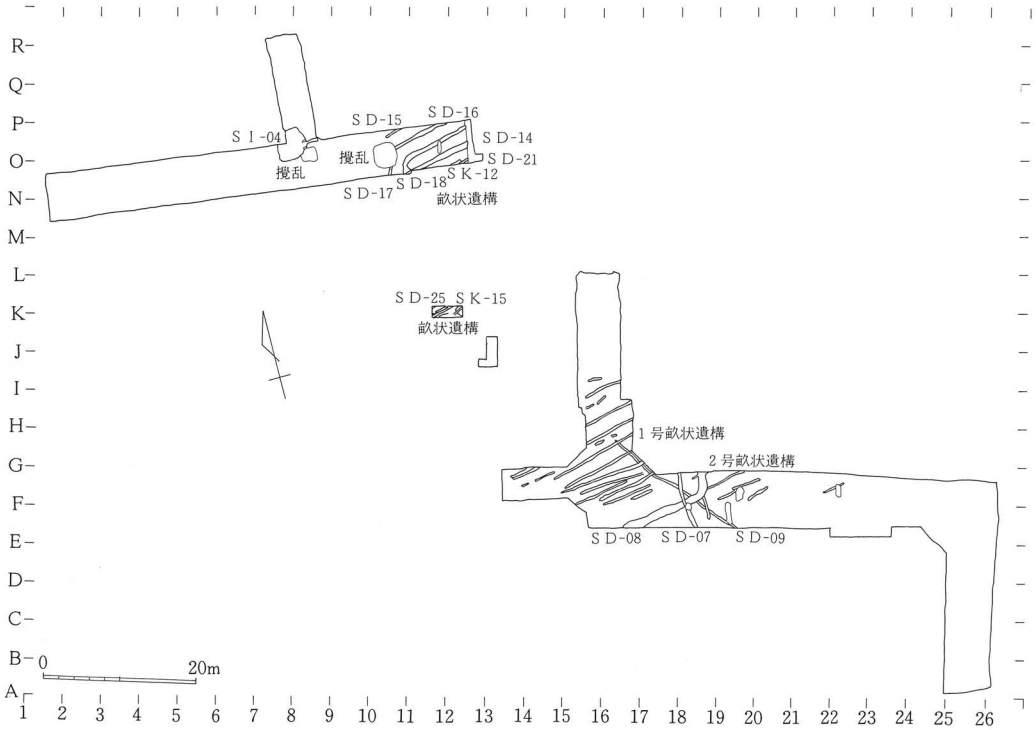


第17次遺構配置図（古墳）

第186図　各次時代別遺構配置図（1）



第18次遺構配置図（古墳）



第18次遺構配置図（奈良・平安）

第187図　各次時代別遺構配置図（2）

第２節　中世・近世

１．中世遺物

１）土師質土器

土師質土器には、皿類（かわらけ）を主体に埦・鉢類がある。その概要は、第16次が1,309点（皿1,307点・鉢２点）、第17次が118点（皿109点・埦７点・鉢２点）、第18次が10点（皿のみ）で、破片総数1,437点が出土した。各次調査区の皿類の出土率を比較すると、第16次1.57/1m²・第17次0.14/1m²・第18次0.009/1m²の個数となる。各調査区は200～250m で近接しており、著しい差を示している。換言すれば、皿類は特定の場所で大量に消費されていることになる。ちなみに、第16次の皿類出土量は第17次の約12倍、第18次の約131倍の量で、皿類の性格・使用方法を反映している。本遺跡では、むしろ第18次の出土傾向が一般的である。また、古代の集落跡出土土師器とは、その傾向を異にしている。なお、埦・皿以外の器種は、後述する中世陶磁器の項で扱う。

分類

さて、ここでは埦・皿について分類を行う。

埦　全体の器形が理解できるものはないが、埦と予想されるものを扱う。

埦Ａ：輪高台のもの。高台は貼付によるものか不明で、高台内は屈折なく皿状にくぼむ。内外面に粗雑なナデ及びミガキ調整を施す。ミガキは、高台内にもみられる。内外面は赤褐色を呈し、竪地で砂粒はほとんど含まれないようである。ロクロ使用と予想されるが、明確ではない。（第116図２）

埦Ｂ：体部が内弯して立ち上がり、底部の厚い平高台のもの。ロクロ使用（底部回転糸切り）で、内面は再調整によりロクロ目を消去している。内外面は橙色を呈するが、芯の部分は埦Ａ同様黄褐色を呈している。焼成は竪致で気孔がみられ、砂粒は僅かである。深皿の可能性もあるが、埦として扱う。（第110図７）

皿　皿は、法量・ロクロの使用の有無・器厚差により分類できる。法量差によって区別し、ロクロを使用しないものをＡ、使用するものをＢとし、形態・器厚等で細分する。法量差は、口径12～13cm代（底径は主に７～８cm代）のものを大皿（Ｌ）、口径６～８cm代（底径は主に４～５cm代）のものを小皿（Ｓ）とする。なお、口径９～10cm代、底径５～６cm代のものが僅かにあるが、今回は小皿として扱っておく。器厚差は、底部や体部下半に主眼をおき、厚さ１cm前後のものを厚手、厚さ0.4～0.6cmを薄手とする。

Ａ類：Ａ類は手づくね手法で製作されたもので、底部は丸底あるいは丸底風平底である。口縁部に横ナデ調整を施す。型押成形のものはない。大小の皿の存在が予想されるが、

大皿は確認できない。個体数は少ない。３種に細分される。

SA_1類（厚手）：丸底で、口縁部に横ナデ（１段）調整を施す。底部との境に明瞭な屈曲をもち、底部には不明瞭な指頭痕がみられる。口縁端部は、三角形状を呈する。厚手で、灰白色を呈している。（第110図５）

SA_2類（厚手）：粘土円板の縁辺を摘み上げて成形したと思われる厚手のものである。口縁部は、横ナデを施す。底部外面は平滑で、口縁部との境に稜をもつ。丸底風平底である。稜の一部にけずり調整がみられる。（第63図23）

SA_3類（薄手）：全体は不明だが、口縁部横ナデが底部近くまでみられる。底部は丸底風平底である。口縁部との境に稜はなく、底面に指頭痕がみられる。薄手である。（第63図26）

B類：B類はロクロ使用のもので、大皿、小皿があり、厚手・薄手の差が認められる。大皿（L）は６種類、小皿（S）は８種類に細分した。底部切り離しは、基本的に回転糸切りである。

LB_1類（厚手）：全体に厚手で、体部は内弯ぎみに立ち上がる。底部糸切りで、見込み（内底面）に指ナデ調整はみられない。（第56図７）

LB_2類（厚手）：全体に厚手で、体部は内弯ぎみに立ち上がる。底部糸切りで、見込みに指ナデ調整が施される。外底面には糸切り後に板状圧痕の有無が認められる。口縁端部は、三角形状を呈する。（第124図２・３）

LB_3類（薄手）：全体の器形は不明で、底部糸切り、見込みに指ナデ調整はない。外底面の板状圧痕は付かないようである。薄手である。（第56図２）

LB_4類（薄手）：体部は内弯ぎみに立ち上がり、立ち上がりがLB_1～$_3$類より急である。底部糸切りで、見込みに指ナデ調整・外底面に板状圧痕が認められる。薄手である。本類が最も主体である。（第51図28）なお、見込みの指ナデ調整の例を第52図１・２に示した。

LB_5類（薄手）：全体の器形は不明であるが、ロクロ目が比較的明瞭なものである。大型品として扱ったが、その中では小ぶりの一群である。底部糸切りで、見込み指ナデ調整や外底面の板状圧痕はみられない。比較的薄手である。（第64図２）

LB_6類：その他のもの。類型化できるかどうか判断できないものを一括する。本類には、口縁端部が屈折し稜を形成するもの（第35図15）、口縁端部が外反するもの（第51図29）、口縁端部が外方へ屈折するもの（第65図８）などがある。いずれも薄手のものである。

SB_1類（厚手）：口径・底径の差が大きい厚手のもので、口・底径比0.4前後である。体部にゆるい屈曲をもつ。底部は糸切りであろう。（第115図12）

SB_2類（厚手）：口・底比約0.6前後の厚手のもので、底部は高台状に厚く切り離されている。糸切りは、幅広で低速回転によるものであろう。内底面が凸状を呈するものもある。

（第56図３・４）

BS_3類（厚手）：直線的に外傾して立ち上がる比較的厚手のものである。口・底径比は約0.6である。SB類の底部切り離しは回転糸切りであるが、本類には静止糸切りもみられる。（第56図１）

SB_4類（厚手）：口径と底径の差が小さい厚手のもので、見込みに指ナデ調整を加える。口・底径比は0.7～0.8である。底部は明確ではないが、静止糸切りの可能性がある。（第35図４・第64図４）

SB_5類（薄手）：体部外面に屈曲をもつ薄手のもので、見込みに指ナデ調整を加える。口・底径比は0.7前後である。上半部は比較的直立ぎみである。（第51図８）

SB_6類（薄手）：外傾するか、やや内弯ぎみに立ち上がり、口径と底径の差が比較的小さい薄手のもので、見込みに指ナデ調整、外底面に板状圧痕がみられる。口・底比は0.7前後で、やや変移が大きい。まれに、口縁端部が平坦あるいは内ソギとなるものや器高の低いものがある。SB類では、本類が主体となる。（第51図23・第52図２）

SB_7類（薄手）：体部の内弯度の比較的強い薄手のもので、見込み指ナデ調整、外底面に板状圧痕がみられる。口・底径比0.6～0.7である。（第35図12・第51図30）

SB_8類（薄手）：体部は外傾して直線的に立ち上がるものとみられ、見込みの指ナデ調整や外底面の板状圧痕はみられない。口・底径比は明確ではないが、0.6前後であろうか。数量が少ないので明確ではないが、将来は細分が可能かもしれない。薄手とやや厚手のものがあり、底部は糸切りである。（第65図４・５）

その他のSB類：分類不可能のものが多数存在し、今後類型が増加する可能性もあろう。

以上が土師質土器の分類であるが、小型の鉢や古代の赤焼土器などと区別しにくいものもある。

次に、遺構別の出土傾向を検討し、各種型の組み合わせ及び消長について考えてみたい。出土傾向については、表31・32に示した。まず、第16次出土資料を検討する。この表をみると、SD02が特自の組成を示している。手づくねのものはないが、LB_1・SB_2・SB_3類の組成が分かり、厚手のものが主体で、薄手のLB_3類が加わる。この溝跡から在地鉢・中国青磁皿が出土し、前者は13C後半～14C前半、後者は上層より出土し14C前半ないし中頃と考えられる。従って、土師質皿は鎌倉時代と理解できる。さらに、SB_2類は鎌倉との比較（服部実喜：1984・河野真知郎：1986）から、12C末～13C前半に納まるものと推定され、この組成中古相を呈するものと考えたい。

また、SD01 8 a層とSX02（SB01）の皿類組成は、LB_4・SB_6・SB_7の各類の組み合わせに共通性がみられ、これにLB_6・SB_4類が僅かにみられる。SD01では、底面で14C後半～15C前

半の中国青磁玉縁碗、10・11層で15C前半頃の中国青磁盤が出土されている。橋脚跡は底面で検出されたが、SD01南壁側では橋脚柱穴跡が8a層上面より掘り込まれていることから、8a層中の皿類は先の玉縁碗の年代より古いと考えられる。SD01開削後で、橋脚構築以前の土器群と評価してよいのではないか。一方、8a層と共通するSX02（SB01）の皿類は、土塁構築以前のもので、共伴した渥美・在地の陶器は、同時期かこれより古いもので矛盾しない。薄手で法量に規格性がみられ、14C中葉前後と推定しておきたい。またSD01はSD02より新しいことから、LB_3類からLB_4類へ変化したものと考えられ、皿類の薄手化は14C前半頃に始まるものと想定される。鎌倉でも、薄手化の傾向が指摘されている（河野真知郎：1986）。

土塁積土の皿類はSX02と共通する特徴のものや手づくね（SA類）など古い時期のものが含まれるが、土塁上面でLB_5類の皿、14C後半の東濃産山茶碗片が出土している。LB_5類は14C後半頃の後出の類型と考えられる。同類の皿は、第17次調査SD02でも出土している。

Ⅵ区では、3層が最新の中世の包含層であるが、ここからSB_8類が出土した。この包含層からは、14～15C前半代の陶器が出土し、15C前半の古瀬戸陶器が最も新しい。従って、SB_8類は上・下限は明確ではないが、15C前半頃に存在した類型とみられ、前述のLB_5の消長と重複していた可能性もある。

Ⅳ区の天地返しでは比較的多くの皿片が出土し、SX02の皿類に近い特徴もみられるが、厚手のものも多くSD02の皿類と共通する皿類もある。SA_2・SA_3類もここより出土している。これらの皿類は、元来土塁積土中に包含されていたものと予想される。注目されるものは、14C前半以前の楠葉型瓦器椀が出土している点である。県内初の出土であり、SD02の皿組成からSX02やSD01 8a層の皿組成への変化が、14C前半以後にあることを傍証するものと理解したいのだが、天地返し出土というのは、誠に残念である。

次に、第17次出土資料を検討する。

SE01は、埦B類・皿SA_1類及び若干のLB類・SB類が出土している。埦は第17次調査区の特徴で、第16次調査区では出土していない。さらに、ここからは中国青磁櫛描蓮弁文碗・常滑甕が出土し、前者は山本信夫氏の御教示では、12C後半～末頃のもので、後者は岩手県柳ノ御所跡（筆者実見）に類例があり、12C末前後と考えられる。従って、埦B類・皿SA_1類は、12C末以前と考えられる。SE01とほぼ同時期には、SK06・08・23などがある。これらの遺構から、埦A・B類・白色土器片（皿？）が出土している。SK23出土の埦Aは、類例がなく評価が定まらないが、12C代を想定しておきたい。

SK12出土の皿には、SA_3・LB_2・SB_1類がある。このうち、SA_3類は第16次Ⅳ区、LB_2類は第16次の土塁積土より出土している。この二種類の皿は、14C前半以前と理解される。SB_1類は、本遺跡では他に出土例がない。このSB_1類に類似する例は、多賀城跡第50次調査南区第2層出

表31　遺構別土師質土器器種組成表（第16次調査実測図分）

器種	椀			手づくね皿				ロクロ大皿									ロクロ小皿									土質土器		瓦質土器			瓦器
				厚手		薄手		厚手		薄手							厚手				薄手										
遺構	A	B		SA_1	SA_2	SA_3	SA	LB_1	LB_2	LB_3	LB_4	LB_5	LB_6	LB 厚手	LB 薄手	LB	SB_1	SB_2	SB_3	SB_4	SB_5	SB_6	SB_7	SB_8	SB	鉢	擂鉢	風炉	火鉢	鉢	椀
I区 SD02							1	2		3								3	1						1						
研究所 SD03																			1												
V区 SD01 8a層											10											9	2								
II区 SX02											3		1							1		5	5							1	
II区 SB01																						1									
II区 土墓中									1		2											1									
II区 土墓上面												1			1							1									
IV区						1	1			1										2		1				1					1
VI区3層										1														2							
VI区5層													1		1																
VI層20層										1											1?	1?									
VIII区										1	2				1							1				2					

研究所：埋蔵文化財発掘調査研究所 昭和63年度調査分

表32　遺構別土師質土器器種組成表（第17・18次調査実測図分）

器種	椀			手づくね皿				ロクロ大皿									ロクロ小皿									土質土器		瓦質土器			瓦器
				厚手		薄手		厚手		薄手							厚手				薄手										
遺構	A	B		SA_1	SA_2	SA_3	SA	LB_1	LB_2	LB_3	LB_4	LB_5	LB_6	LB 厚手	LB 薄手	LB	SB_1	SB_2	SB_3	SB_4	SB_5	SB_6	SB_7	SB_8	SB	鉢	擂鉢	風炉	火鉢	鉢	椀
SE01		4		2											1	1									2						
SK12						1			1							2	2								1						
SK23	1																														
SK06		2														1															
SK08																1															
SK10																									1						
SD04										2?						1									4						
SD07							2											1							1						
SD11											1														1						
SD02							1		2	1		2?			1	1		1?				2			25			5	1		
SD06																												1			
SD01								1？		1						4									5						
SD08																2									2						
(18次)																															
I区 天地返し																									3						
SD10																1															
SD12							1																								
II区 天地返し																									2						
SD01																									1						
SD02																									2						

土例など「かわらけII_B類」とする皿に側面観・法量が近く（宮城県多賀城跡調査研究所：1987）、時期は12C代と理解されている。SB_1類も12C代と理解し、前述のSA_3・LB_2類とは時期の異なるものと考えておきたい。

SD02では各種の皿がみられ、使用期間が比較的長かったものと考えられる。上層では、中国梁付碗・皿・瓦質風炉などが出土し、16Cまで下がることが確実であることから、皿類の中にも16C代のものが含まれている可能性もある。例えば、SD01や02でSB_6類の中の口縁端部が軽く面取りされているもの（第120図12・第124図6）が、その可能性があるかもしれない。

以上の検討の結果、以下のような組成と変遷が理解できよう（第33表・第188図）。

A期：埦A・B類、皿SA_1・SB_1類

B期：皿SA_2・SA_3、LB_1・LB_3、SB_2・SB_3類

C期：皿LB_4・(LB_6)、SB_4・SB_6・SB_7類

D期：皿LB_5、SB_8類など

A期は、埦・手づくね皿・ロクロ皿の組成で、12Cと考えられ、上限は不明確だが後半から末期頃のものである。B期は13C～14C前半とみられ、器種のバラエティに富んでおり、今後類型の増加や時期的細分が可能になるものと思われる。なお、LB_6類はまれな存在である。C期は14C中葉を中心に、その前後のもの考えられる。下限が不明確であるが、この時期の皿類が最も多い。D期は、おそらく15C前半を中心としたものとみられる。この時期には、C期にみられた器種がなお存続していた可能性がある。

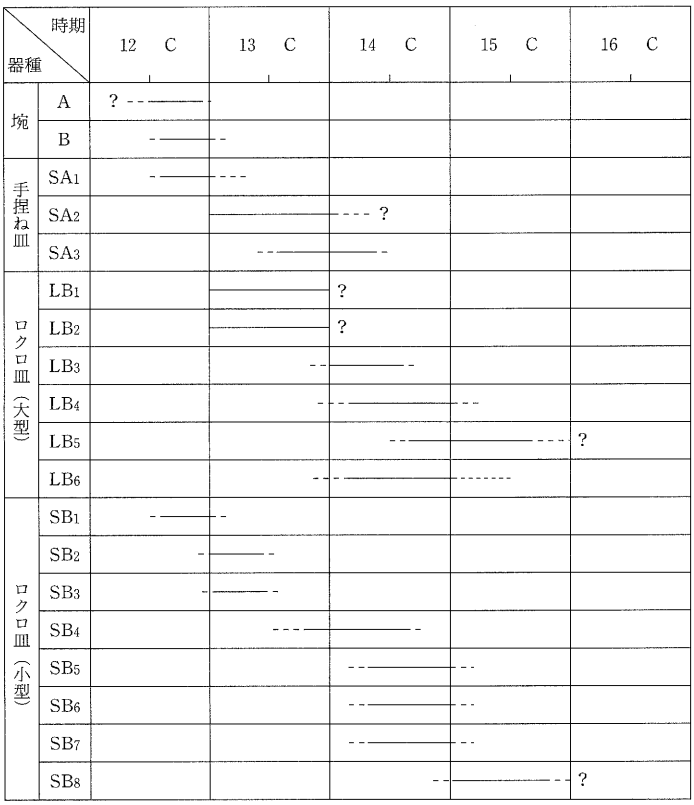
ここで注意したい点は、器種組成が上述のように明確に変化するのではなく、他の時期の器種を混じえながら漸次変遷していくのが実態であろう。従って、上記の器種組成の変遷案は、特徴的なものを抽出して示したものにすぎない。また、A期の段階には、SA_1類の大型品（LA類）の存在も予想されたが、全く確認できなかった。これは、柳ノ御所遺跡や多賀城跡で出土していることから、遺跡の性格差によるものかもしれない。

最後に、胎土の特徴について述べておく。A期では、砂粒の目立たない比較的良好な粘土で赤褐色・橙色・灰褐色などを呈している。古代の赤焼き土器と区別しにくいものがある。B期は砂粒の目立たないもの、砂粒を多量に含むもの、粉質のものなど精粗の差が大きい。この差は、工人の違いや時間差等によるものかもしれない。C・D期のものは、細砂を含むがあまり目立たないものに統一された感がある。若干、金雲母・黒色粒子・褐色粒子（スコリア？）が含まれる場合がある。

2）中世陶磁器

ここでは、調査区及び産地別に述べる。なお、数量に関しては、接合後の破片数である。

表33　土師質土器皿類の推定消長



第16次調査区

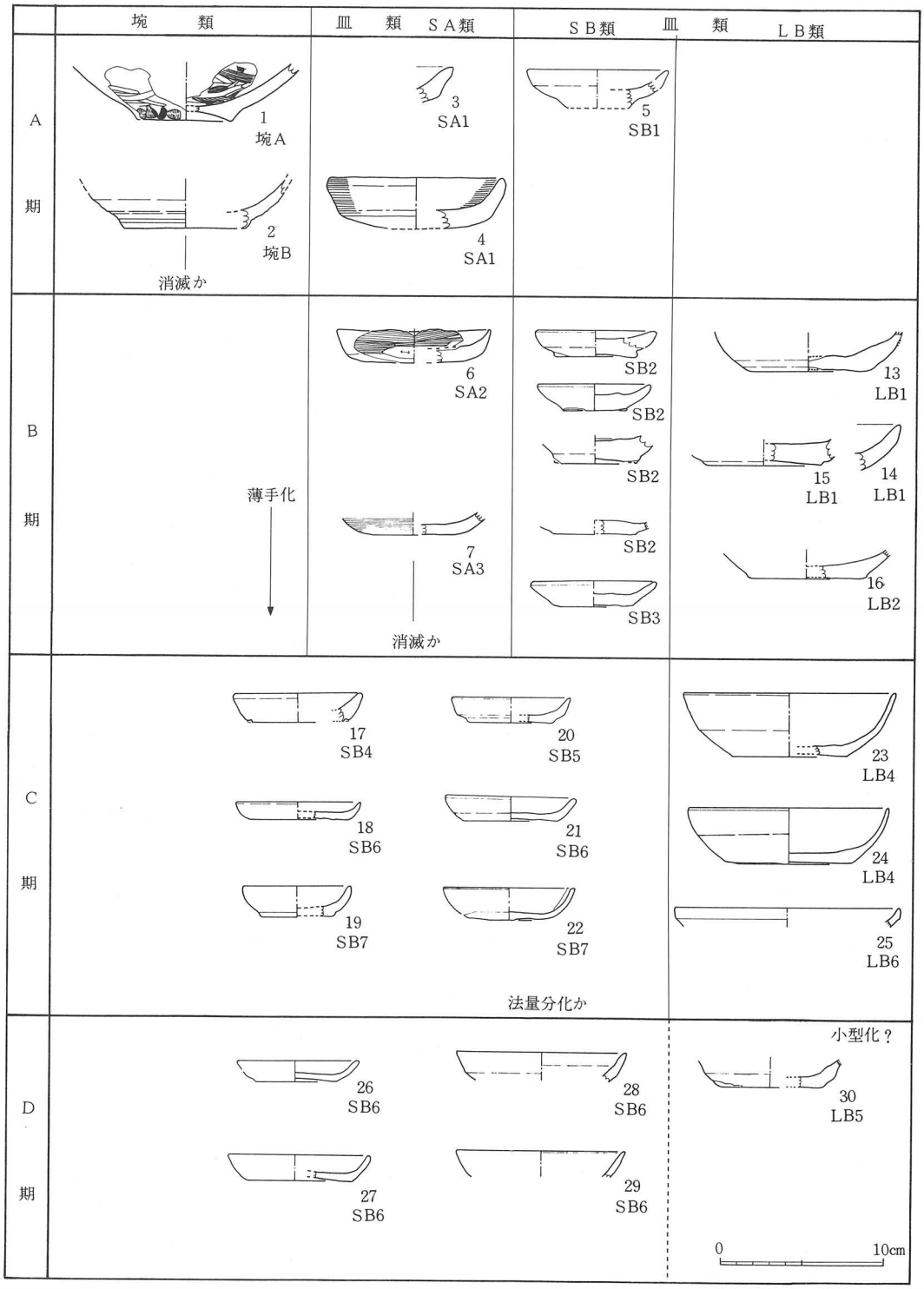
この調査区では、古瀬戸24点・常滑62点・渥美17点・東濃３点・須恵器系陶器？２点・在地107点・不明（東海地方か）４点・不明８点・中国磁器36点・瓦器１点（楠葉型）・瓦質土器１点・土師質土器1,309点が出土し、総計1,574点である。

古瀬戸　古瀬戸製品は24点であるが、内訳は平碗２点・天目茶碗２点・碗？２点・折縁皿２点・おろし皿２点・入れ子１点・盤７点・瓶類４点・小型壺？１点・合子１点である。これらは、井上喜久男氏の御教示によると13～15Ｃの窖窯の製品で、大窯製品はみられない。13Ｃ代のものは少なく、14Ｃ後半～15Ｃ前半のものが主体を占めている。

常滑　常滑（知多）製品は62点あり、器種を特定しにくいが甕51点・壺７点・鉢４点と理解した。鉢には、山茶碗窯系とみられるもの２点が含まれる。時期の明確でないものもあるが、13～15Ｃ前半の時期のものと考えられる。

渥美　渥美製品は17点あり、鉢１点・壺２点・大型甕14点である。時期は明確ではないが、12～13Ｃ頃のものと考えられる。

東濃　美濃東部の製品は３点あり、いずれも薄手の山茶碗である。県内では初めての出土と



1	第17次ＳＫ23	6・7	第16次Ⅳ区	17～19	第16次ＳＸ02	26・27	第17次ＳＤ02
2～4	第17次ＳＥ01	8・9・11・12	第16次ＳＤ02	20～22	第16次ＳＤ01	28・29	第17次ＳＤ01
5	第17次ＳＫ12	10	第17次ＳＤ07	23・24	第16次ＳＤ01	30	第16次ＳＤ01
		13～16	第16次ＳＤ02	25	第16次ＳＸ02		

第188図　南小泉遺跡土師質土器椀・皿類変遷試案

思われるが、過去の調査で須恵器などと誤認されている可能性があるかもしれない。時期は、井上喜久男・藤沢良祐両氏の御教示によると14C後半である。

須恵器系陶器　須恵器系陶器とみられるものは2点あり、壺の頸部付近の破片で叩き目は確認できない。12～13C代のものであろう。

在地陶器　ほぼ県内で生産されたと考えられる瓷器系陶器である。県内には幾つかの窯が発見されており（藤沼邦彦：1976・1982）、水沼窯を除けばいずれも生産時期は13C中葉～14C前半頃と考えられている。ちょうど、北条得宗家が県内にも所領を拡大した時期と符号する。また、後述する白石窯を例にとれば、流通圏は狭く、おそらく半径30～50kmではないかと想定され、水運や陸路が利用されたのであろう。

さて、在地陶器は総数107点出土しているが、その特徴によつて5グループに分類される。

1類、白石窯　県南の白石市内にあり、東北（とうきた）窯に代表される窯跡群である。焼成が良好である場合は胎土が黒色系の色調を示し、胎土中に大きな白色粒子（長石か）を含み、器表面に鉄分の噴き出しがみられる。この窯跡群の製品と考えられるものは39点あり、甕23点・鉢（無台）10点・壺3点・小型壺？3点である。SD02出土例が最古で、SD01で多い。

2類、未発見の窯の製品であろう。胎土の色調は暗緑灰色～暗青灰色のものが多く、胎土中に白色針状物質（海綿骨針）を含むのが特徴で、まれに軽石あるいは凝灰岩片を含む。本類は12点あり、すべて甕片である。Ⅷ区での出土が多く、線刻画らしきものがある。また、SK02と08の接合例もみられる。

3類、未発見の窯の製品であろう。胎土の色調は灰色～緑灰色を呈し、焼き締めが弱く、厚手の一群である。胎土中には、まれに軽石あるいは凝灰岩片が含まれ、2類との類縁関係が予想される。本類は26点あり、甕15点・鉢（無台）7点・擂鉢4点である。擂鉢は、擂目が1条・2条・6条のものがみられる。甕には、表面に布目圧痕をもつ例がある。

4類、未発見の窯か、あるいは白石窯の系統と予想される。胎土の色調は、青黒色～暗緑灰色のものが多い。サンドイッチ状に色調の差がみられる場合が多い。白色粒子（長石か）や鉄分の噴き出しが、まれにみられる。本類は17点あり、甕16点・鉢1点である。SD01で出土例が多く、SX02や土塁積土中でも出土している。

5類、上記以外の在地窯の製品と推定されるものである。本類の中には、比較的均質な砂粒を多く含むものがやや目立ち、資料の増加によって一群を成す可能をもつものがある。本類は13点あり、甕5点・壺？2点・鉢3点・有台鉢1点・台付皿1点・器種不明1点である。有台鉢は13C前半頃と推定され、福島県八郎窯（寺島文隆・飯村均：1987）の製品に類似する。台付皿は、須恵器系陶器の可能性もあり12～13Cと予想される。

以上、在地陶器について述べたが、「今泉城」での所見（佐藤洋：1983）の延長線上で理解し

ており、本遺跡や今泉城跡などの遺跡では複数の在地窯から供給されていたと理解される。

産地不明陶器　産地を特定できないものは11点あり、甕４点・壺３点・鉢２点・皿１点・器種不明１点である。これらには、東海地方のものと予想されるものが４点ある。

中国陶器　中国製品は36点あり、いずれも磁器である。青磁は19点で、碗14点・盤１点・皿２点・器種不明２点である。碗には、鎬蓮弁文６点・細弁蓮弁文１点・無文３点（端反り１点）・玉縁口縁（内面に陽刻文様）のもの１点・器種不明２点がある。いずれも、龍泉窯系とみられる。青白磁は10点あり、小壺１点・合子蓋１点・瓶子６点・壺（瓶）蓋１点である。白磁は６点あり、印花文水滴３点・合子２点・小壺１点である。水滴は２個分とみられる。合子のうち１点は印花呉須斑文をもつもので、伊野近富氏の御教示によれば、福建省徳化窯系の製品とみられる。釉調は、やや白濁している。時期は不明確である（明代か）。染付（青花）は、碗と思われる小片が１点ある。染付製品などの出土から、城館の機能が停止あるいは低下した後も、住居者がいた可能性が残る。

以上、中国陶器について述べてきたが、優品が含まれ器種もバラエティに富んでいる点、青白磁が多い点、他の調査区と比較して階層差を示しているものと思われる。

土師質土器　前述した皿以外では、鉢が２点出土している。時期は不明であるが、一応中世として扱う。鉢には、小型鉢と予想されるもの（第64図６）と口縁部の突出するもの（第63図25）がある。後者は口縁部の特徴から、近世に近い後出のものと考えられる。

瓦質土器　明確ではないが、瓦質土器らしき鉢片が１点SX02より出土している。

瓦器　瓦器は、楠葉型小型碗がⅣ区で１点出土している。県内では初めて確認されたものである。この瓦器は、かつて河内国摂管家領楠葉牧だった周辺で生産されたもので、生産地から直接搬入されたものか、鎌倉などを経由して間接的に入ったものか興味のある問題である。時期は、小片である点や編年が確定されていないことから、14C前半以前としておく。いずれにせよ、城館成立以前の可能性が強く、住居者の性格とも関わるものと思われる。

以上、第16次調査地点では、土師質土器の多量消費、古瀬戸盤などの大型品の存在、中国磁器の特色、山茶碗・瓦器碗という希少品の存在など、本遺跡での他の調査区にはみられない特徴が指摘できる。

第17次調査区

この調査区では、古瀬戸９点・常滑21点・渥美５点・在地51点・産地不明陶器４点・中国磁器23点・土師質土器122点・瓦質土器８点が出土しており、総計244点の陶磁器片が出土している。

古瀬戸　古瀬戸製品は９点あり、天目茶碗３点・鉢１点・盤（大鉢）２点・香炉１点・梅瓶？１点・器種不明１点である。このうち、鉄釉製品は天目茶碗と梅瓶？で、他は灰釉製品である。

天目茶碗のうち１点は、大窯期の美濃窯の製品の可能性もある。香炉は、体部に斜格子文をもつ珍しい例である。13～16Ｃのものがあり、14～15Ｃ前後のものが多い。SD01 に多い。

常滑　常滑製品は21点あり、甕12点・鉢７点（有台６点・無台１点）・壺１点・鳶口壺１点である。有台鉢は、同一個体の破片とみられる。甕のうち、SE01 から出土した２点が12Ｃ末頃、有台や鳶口壺は13Ｃ頃とみられる。その他は、時期が明確でない。SD01･02 で多く出土している。

渥美　渥美製品は５点あり、いずれも甕あるいは壺の破片である。12～13Ｃ頃のものとみられ、SD02 などで出土している。

在地陶器　在地製品は51点あり、第16次の分類に基づくと１類（白石窯）25点・２類３点・４類６点・５類17点である。１類には、甕22点・壺２点・鉢１点、２類は３点とも鉢、４類は甕４点・鉢２点、５類は甕10点・壺１点・鉢６点である。４類には格子状押印をもつものがある。５類は、第16次と同様砂粒を多く含むものや桜花印をもつもの（４点）が注意を引く。桜花印は、県内の中世窯では確認されておらず、やはり未発見の窯の存在が予想される。３類としたものは出土していない。これらは、第16次同様13Ｃ中葉～14Ｃ前半頃のものであろう。

産地不明陶器　産地不明のものは４点あり、碗？１点・壺２点・器種不明１点である。

中国磁器　中国製品はいずれも磁器で、23点出土している。内訳は、青磁17点・白磁５点・染付１点である。青磁には、劃花文碗１点･蓮弁文碗８点･無文碗３点（端反２点）･輪花碗（内面に輪花文）１点･櫛描蓮弁文碗１点･碗と思われるもの２点･梅瓶１点がある。これらは、龍泉窯とみられる12Ｃ後半～15Ｃ頃のものである。白磁は内面に文様をもつ印花文碗１点・文様の有無の確認できない皿４点である。碗は14Ｃ、皿は13Ｃのものとみられる。染付は、SD02 から出土した皿１点がある。見込みに「寿」字文をもつもので、16Ｃ後半のものであろう。

第16次のものと比較すると、器種は碗・皿が主体で、瓶類は僅か１点で器種組成に大きな差が認められる。

土師質土器　前述した碗･皿以外では、鉢類２点が出土している。このうち、１点（第120図２）は、口縁部に凸帯の巡ぐる火鉢かと思われる。もう１点は詳細不明である。

瓦質土器　瓦質土器は７点あり、土風炉６点・火鉢１点である。土風炉は茶の湯などに使用する道具で、SD02 の１～３層と SD06 の２層より出土している。口縁部にスタンプ文、胎土に細砂が含まれている。これらは、同一個体の可能性がある。堀内明博氏の御教示では16Ｃ中～後葉とみられる。火鉢は外面の磨きが顕著で、口縁部凸帯間に雷文帯、体部上半に火窓をもつ。これは、タイプの異なる土風炉の可能性もあるが、火鉢として扱っておく。前述の土風炉とほぼ同時期のものであろう。第16次調査区にはこれらの器種は出土していないが、これは第16次の城館がすでに衰退したためであろう。

第18次調査区

この調査区では、古瀬戸４点・常滑１点・産地不明陶器１点・中国陶器２点・土師質土器10点が出土しており、総計18点である。

古瀬戸　古瀬戸製品は４点あり、Ⅰ区東端部で鉄釉皿？・鉢？各１点、Ⅱ区では灰釉瓶類１点、SD01上の天地返しより灰釉卸皿１点が出土している。小片で時期が明確ではないが、14～15Ｃ頃のものであろうか。

常滑　常滑製品は、Ⅱ区西部の甕１点があるにすぎず、時期も不明である。

産地不明陶器　産地不明のものは、Ⅰ区西部より出土した壺の口縁部破片１点がある。須恵器系陶器の可能性もある。

中国磁器　Ⅱ区より青磁碗２点が出土している。文様の有無不明で、龍泉窯系のものとみられる。釉層の厚手と薄手のものがあり、13～14Ｃ頃のものであろうか。

土器類　皿以外の土師質土器や瓦質土器は、出土していない。

以上、調査区別・産地別に遺物を概観してきたが、これらを表34にまとめた。本遺跡では、第18次調査区のような出土傾向が一般的で、第16・17次の傾向はむしろ特異であり、住居者の性格・階層と密接に関っていると考えられる。特に、第16次調査区の遺物は、在地有力者層から城館期には、のちに国人領主クラスへと成長するような身分・階層の居住者の存在を推定させる。非日常性をもつ土師質土器皿については、地域の政治的権力の集中度と皿の数量は相関関係にあるように思われる。土師質土器皿の多さは、中国製品の出土率を下げる結果となり、関東あるいはそれ以西の遺跡の出土傾向に近い。一方、第17次調査区では12Ｃ後半頃から16Ｃと居住期間が長いが、第16次調査区と重複する期間をもち、少なくともこの期間は被官層や近親者の屋敷だったのではなかろうか。ここでの陶磁器の出土傾向は、在地陶器の出土率が高く、中国磁器は碗・皿に器種がほぼ限定されているのが特徴である。また、第18次調査区では建物跡の変遷が認められるが、遺物が少なく性格や評価を定めにくい。

２．近世遺物

ここでは、調査区別に遺物について述べる。なお、以下で使用する「城下町期」は位置と環境の頃で述べたように、若林城下町の存在した寛永４年から同14・15年頃の期間を指す。従って、城下町期の遺物は、およそ1.630年代を下限とすることができる。

第16次調査区

この調査区では、中国磁器２点、肥前磁器40点、瀬戸・美濃磁器２点、産地不明磁器27点、瀬戸・美濃陶器13点、唐津系陶器11点、北部九州陶器１点、岸窯系８点、大堀相馬19点、堤15点、産地不明陶器22点、瓦質土器１点、土師質土器５点があり、総計166点の陶磁器・土器類が出土している。明治以後の染付（摺絵・銅版転写）や色絵磁器などもあるが、これらは割愛す

表34　産地別出土破片数とその比率（中世）

調査区／産地	第16次		第17次		第18次		数量
	数量	%	数量	%	数量	%	
中国磁器	36	2.29	23	9.6	2	11.1	61
古瀬戸	24	1.52	9	3.8	4	22.2	37
常滑	62	3.94	21	8.8	1	5.6	84
渥美	17	1.08	5	2.1	0	—	22
東濃	3	0.19	0	—	0	—	3
須恵器系	2	0.13	0	—	0	—	2
在地	107	6.80	51	21.3	0	—	158
不明陶器	12	0.76	4	1.7	1	5.6	17
土師質土器	1,309	83.16	118	49.4	10	55.6	1,437
瓦質土器	1	0.06	8	3.3	0	—	9
楠葉（瓦器）	1	0.06	0	—	0	—	1
計	1,574	99.99	239	100	18	100.1	1,831

る。

磁器

中国　中国磁器は２点あり、染付皿・白磁瓶類各１点である。前者は小片で特徴不明であり、後者は口縁端部に虫喰がみられる。いずれも明末頃のものと考えられ、城下町期のものであろう。

肥前　肥前磁器は40点あり、染付35点・白磁１点・色絵２点である。器種は碗８点・皿20点・壺瓶類５点・鉢２点・器種不明５点である。これらの磁器には、SD01出土の染付ひだ皿（第47図７）や山水文皿（第47図５）、Ⅳ区西部出土の染付皿（第63図１）など古手の一群がある。これらは1,630～1.640年代の製品であるが、城下町期かその直後のものと考えられる。城下町期直後の1,640～1,650年代には、SD01出土の染付皿（第47図６）などがあり、17Ｃ後半にかけて増加傾向を示す。また、いわゆる「くらわんか手」など18Ｃのものもある。19Ｃには色絵碗などが加わるが、陶器の出土が多くなり肥前磁器の出土率は下がる。城下町廃止後は畠地となったと言われるが、17Ｃ中葉以後増加傾向を示すことから、城下町期以後も住居者がいたことは明らかであろう。

瀬戸・美濃　瀬戸・美濃磁器は２点あり、いずれも染付碗である。これらは、幕末かそれ以後のもので、SD01 Ⅱ区１層・Ⅴ区Ⅰｅ層出土である。これ以外にも表土や天地返しより出土し

ているものに可能性があるが、明確ではない。

産地不明　産地不明は27点あり、染付10点・白磁？13点・色絵（上絵付）１点・青磁？１点・不明２点である。器種は、碗９点・端反碗１点・皿３点・小坏？１点・段重１点・瓶類２点・急須２点・型物１点・不明７点である。大部分は表土や天地返し出土のもので、19Ｃ以後のものであろう。染付などには、東北地方や瀬戸・美濃の製品が含まれている可能性もあろう。

陶器

瀬戸・美濃　瀬戸・美濃陶器は13点出土している。ほとんど美濃窯製品とみられ、鉄釉天目茶碗１点・灰釉皿４点・志野菊皿１点・鉄釉擂鉢２点・飴釉火入？１点・鉢４点（灰釉１点・鉄釉１点・長石釉２点）がある。長石釉鉢は、いわゆる「笠原鉢」である。天目茶碗・志野菊皿は大窯終末期のもので、他は連房式窯の製品であろう。16Ｃ末～18Ｃのものがあり、17Ｃ代が主体である。このうち、城下町期のものは、天目茶碗・志野菊皿・灰釉鉢・長石釉鉢各１点と灰釉鉢２点の計６点である。大部分は、SD01（II・Ｖ区）より出土したもので、志野菊皿はSD01（Ｖ区）６層（近世の最下層）より出土している。

唐津系陶器　唐津系のものは11点あり、灰釉碗４点（２点は京焼風）・褐色釉碗１点・青緑釉皿２点・刷毛目文皿１点・灰釉鉢？１点・鉄釉瓶１点・器種不明（灰釉）１点である。灰釉碗・褐色釉碗・青緑釉皿は、17Ｃ後半～18Ｃ前半のものである。刷毛目文皿・器種不明のものは17Ｃ代であろう。灰釉鉢？・鉄釉瓶は時期が不明確であるが、17～18Ｃのものであろう。大部分はSD01より出土し、特にＶ区１・２層に多い。確実に、城下町期と言えるものはない。

北部九州　北部九州のものは壺１点で、SD01（II区）６層より出土したものである。斑唐津に類似するもので、内面にアテ具痕を有する。これは城下町期のもので、17Ｃ前半以前のものである。

岸窯系陶器　岸窯系陶器は、福島市飯坂所在の岸窯及び周辺で予想されている窯跡群を指す。鈴木功氏の御好意で、調査資料を実見させていただいた。開窯時期はまだ明確ではないが、本遺跡の出土例から推定して、寛永年間頃と考えている。この窯の製品とみられるものは８点あり、いずれも擂鉢である。体部上半を鉄化粧し、口縁部に黒褐色の飴釉を掛けるもので、この窯の製品では古手のタイプと予想される。本遺跡などでは、この窯が調査される以前は唐津系統の一種と誤認、あるいは産地不明として扱っていたものである。これまで、第９次調査区や第14次調査の近世墓などで出土しており、城下町期のものと考えている。

大堀相馬　大堀相馬焼は、元禄年間頃に開窯したと伝えられる福島県浪江町に所在する民窯である。この製品は19点あり、碗６点（灰釉５点・白濁釉１点）・皿２点（白濁釉）・土瓶４点（白濁釉・灰釉山水文・黒色釉・青釉各１点）・瓶類２点（鉄釉・なまこ釉？）・器種不明３点（灰釉２点・飴釉と白濁釉の内外掛け分け１点）である。これらの製品は19Ｃ代を中心とするもの

だが、灰釉碗などには18C代に遡るものがある。大部分は、表土や天地返し出土のものである。

堤　堤焼は、元禄年間頃開窯と伝える地元（仙台市）の窯である。藩制時代には、杉山焼とも称していた民窯である。一時期献上品も生産していたと言われるが、はっきりしない。考古学的調査も行われたことはなく、内容は未解明のままである。さて、堤の製品は15点出土し、甕５点（鉄釉３点・なまこ釉１点・不明１点）・小型甕１点（飴釉）・鉢？２点（飴釉）・焙烙２点（鉛釉）・器種不明５点（鉄釉４点・飴釉１点）がある。いずれも、19C前半以後と予想される。器種は、大堀相馬・肥前磁器などと競合するものはほとんどなく、この窯の性格を良く示している。大部分は、表土や天地返しより出土したものである。

産地不明　産地不明のものは22点あり、碗５点・鉢？６点・急須１点・土瓶（蓋）１点・甕？１点・器種不明７点である。これらは、17～19Cのものであるが、城下町期のものはない。

瓦質土器　この土器には、SD01（V区）３層より出土した鉢１点がある。近世のものとみられるが、時期不明である。

土師質土器　この土器は５点あり、火鉢（火窓あり）１点・角鉢１点・型物（人形？）１点・器種不明２点である。火鉢は中世の可能性もあるが、城下町期のものと推定しておきたい。角鉢は、赤色顔料が塗られている。これらは、SD01（II区）・表土・天地返しより出土している。近世の皿類はないようである。

第17次調査区

この調査区では、中国磁器５点、肥前磁器23点、産地不明磁器10点、瀬戸・美濃陶器24点・唐津系陶器２点・岸窯系陶器２点・大堀相馬17点・堤６点・産地不明陶器11点・瓦質土器19点・土師質土器３点があり、計122点である。

磁器

中国　中国磁器は５点あり、いずれも染付である。碗１点・皿３点・器種不明１点である。文様は詳細不明で、底部に砂粒の付着したものもある。これらは16C末～17C前半のものと考えられ、SD01 1・2層より出土している。城下町期のものであろう。

肥前　肥前磁器は23点あり、染付17点・白磁６点である。染付は、碗８点（陶胎１点）・皿３点・瓶２点・土瓶？１点・徳利１点・壺？１点・器種不明１点である。白磁は、皿１点・紅皿１点そして、白磁か染付の無文部か不明のもの４点（碗２点・皿１点・器種不明１点）である。これらのうち、染付網目文碗（一重）が17C後半で最も古く、染付広東碗・型押白磁紅皿・白磁皿（蛇ノ目凹形高台）は、19C前半頃で最も新しいものである。SD01や北側トレンチ表土に多い。城下町期のものはない。

産地不明　産地不明のものは10点あり、染付５点・白磁か染付の無文部か不明のもの３点・種類不明２点である。器種は、碗３点・小型碗１点・皿２点・鉢１点・急須１点・不明２点で

ある。白磁とみられる急須は19C前半以後とみられ、瀬戸・美濃の可能性もある。その他も19C以後のものであろう。

陶器

瀬戸・美濃　この製品は23点あり、大部分は美濃窯製品である。志野2点（碗・皿）・志野織部2点（鉄絵丸皿）・織部5点（折縁皿2点・皿1点・角向付1点・器種不明1点）・鉄釉天目茶碗2点・灰釉碗1点・灰釉皿8点（折縁皿）・段付白天目茶碗1点・黄瀬戸釉鉢？（緑斑）1点があり、これらは城下町期のものである。志野は大窯、その他は連房式窯の製品とみられる。SD01（Ⅳ～Ⅵ区）の1・2層に多く、Ⅶ区表土のものと接合するもの（志野織部皿・白天目茶碗など）がある。調査区西部のSD01やⅦ区付近に集中する傾向がある。

城下町以後には、5トレンチで出土した鉄絵の筒茶碗1点がある。19Cのものであろか。

唐津系　この製品は2点出土している。青禄釉皿（17C後半～18C前半）と長石釉香炉（17Cか）である。いずれもSD01（Ⅳ・Ⅴ区）出土のものである。

岸窯系　岸窯系のものは2点あり、灰釉壺？と鉄釉擂鉢である。17～18Cと予想され、城下町期のものではないようである。

大堀相馬　大堀相馬は17点あり、灰釉碗2点・白濁釉3点（碗2点・不明1点）・白濁釉端反碗3点（飴釉流し）・青灰色釉碗2点・青釉土瓶5点・なまこ釉？土瓶1点・土瓶（釉不明）1点である。皿類は確認できない。これらは、18～19Cもので、出土傾向に偏在性はみられない。表土出土のものも多いが、SD01やSK03からも出土している。

堤　堤の製品は6点あり、鉛釉焙烙2点・鉢？1点・土瓶？1点・なまこ釉甕1点・器種不明（飴釉）1点である。いずれも、19Cのものと思われる。

産地不明　産地不明のものは10点あり、碗2点・皿1点・壺1点・香炉1点・器種不明5点である。時期は不明確だが、近世のものであろう。いずれも、表土出土のものである。

瓦質土器　この土器は19点あり、擂鉢18点・火鉢？1点である。擂鉢は、口縁部が外方に水平に突出するもので、擂目は太く7条前後のものである。SD01（Ⅴ区）2層に多く、市内の他の遺跡でも目立つものである。本遺跡では、第7次調査区第6号土坑（井戸）で17C前半の美濃灰釉皿と共伴し（結城慎一・工藤哲司：1983）、また、仙台城三ノ丸跡のⅠ期の遺構より出土したもの（結城慎一・佐藤洋：1985）と類似している。今回出土したものも、17C前半の瀬戸・美濃製品と共伴し矛盾しない。城下町期のものと考えてよい。火鉢と予想されるものも、SD01出土で、城下町期のものと思われる。

土師質土器　この土器は2点あり、詳細不明であるが鉢・甕の可能性がある。いずれも、SD01より出土し、近世のものである。

第18次調査区

この調査では、肥前磁器25点。産地不明磁器36点。瀬戸・美濃陶器７点、唐津系陶器７点、大堀相馬22点、堤10点、産地不明陶器11点があり、計118点である。本調査区はⅠ・Ⅱ区の二ヶ所に分かれており、南側のⅡ区で多く出土し偏在性が認められる。なお、中国磁器・瓦質土器・土師質土器は出土していない。また、トレンチ出土のものはⅡ区に含めた。

磁器

肥前　肥前磁器は25点あり、染付碗13点（Ⅰ区９点・Ⅱ区４点）・染付広東碗１点（Ⅰ区）・染付皿３点（Ⅰ区１点・Ⅱ区２点）・染付壺１点（Ⅰ区）・白磁？碗１点（Ⅱ区）・種類不明の碗１点（Ⅰ区）・青磁１点（器種不明・Ⅱ区）・上絵付色絵皿１点（Ⅰ区）・種類不明の壺１点（Ⅱ区）・器種不明２点（Ⅰ・Ⅱ区各１点）である。これらのうち、染付網目文碗が最も古く、17Ｃ中～後葉である。染付広東碗・同端反碗・色絵皿などは、19Ｃ前半のものである。総じて、江戸時代後期～幕末頃が主体である。Ⅰ・Ⅱ区表土や天地しより出土している。

産地不明　産地不明のものは36点あり、染付碗16点（Ⅰ区１点・Ⅱ区15点）。染付皿２点（Ⅱ区）・染付鉢１点（Ⅱ区）・白磁碗７点（Ⅰ区１点・Ⅱ区６点）・白磁皿３点（Ⅰ区１点・Ⅱ区２点）・白磁鉢１点（Ⅰ区）・白磁徳利１点（Ⅱ区）・白磁壺１点（Ⅱ区）・白磁器器種不明２点（Ⅰ区）・色絵碗２点（Ⅰ・Ⅱ区各１点）・色絵皿１点（Ⅰ区）・色絵鉢１点（Ⅰ区）・種類不明の瓶１点（Ⅱ区）である。このうち、白磁としたものには、染付の無文部破片の可能性もある。瀬戸・美濃、肥前、地方窯の可能性があるが、不明確である。Ⅰ・Ⅱ区の天地返しに多い。

陶器

瀬戸・美濃　瀬戸・美濃製品は７点あり、灰釉碗１点（Ⅱ区）・灰釉皿１点（Ⅱ区）・志野皿４点（Ⅰ区）・飴釉鉢１点（Ⅰ区）である。このうち、志野や灰釉の皿５点は16Ｃ末～17Ｃ前半と考えられ、城下町期のものである。その他のものは、城下町以後の17～18Ｃ代と考えられる。Ⅰ・Ⅱ区の天地返しより出土している。

唐津系　唐津系のものは７点あり、碗２点（長石釉・灰釉各１点）・刷毛目文皿？１点・鉄釉鉢２点・刷毛目文大鉢１点・器種不明（長石釉）１点である。このうち、鉄釉鉢・刷目文皿？各１点が16Ｃ末～17Ｃ前半と考えられ、城下町期のものであろう。その他は、城下町以後で17～18Ｃ代と考えられる。すべてⅡ区天地返しより出土した。

大堀相馬　大堀相馬の製品は22点あり、碗10点（灰釉５点・灰釉鉄釉掛け分け１点・鉄釉１点・淡青色釉２点・不明１点）・皿２点（灰釉１点・灰釉鉄絵１点）・山水文土瓶２点・器種不明８点（灰釉３点・淡青色釉２点・白濁釉１点・不明２点）である。碗は灰釉・掛け分け各１点がⅠ区出土で、他はⅡ区である。皿・土瓶・器種不明は、すべてⅡ区出土である。これらは18～19Ｃのもので、天地返しや表土のものである。

堤　堤の製品は10点あり、鉛釉焙烙３点（Ⅰ区１点・Ⅱ区２点）・鉄釉鉢５点（Ⅱ区）・素焼き鉢１点（Ⅰ区）・器種不明１点（Ⅰ区）である。いずれも19Ｃのものであろう。天地返しや表土から出土している。

産地不明　産地不明のものは11点あり、灰釉碗１点（Ⅰ区）・飴釉小皿１点（Ⅱ区）・鉢３点（Ⅱ区鉄絵２点・Ⅰ区素焼き１点）・擂鉢１点（Ⅰ区）・土瓶１点（Ⅱ区）・器種不明４点（Ⅰ・Ⅱ区各２点）である。擂鉢は18Ｃ以前のように思われるが、他は19Ｃ頃のものであろう。

以上、第16～18次の近世陶磁器の概要について述べたが、表35・36に城下町期とそれ以後の時期に２大別し、破片数とその比率を示した。これらの表から、城下町期は破片数が少ないが瀬戸・美濃の共膳具を主体に、中国磁器や唐津系陶器がこれを補っていた。調理具は岸窯系と在地の瓦質擂鉢がある。また、今回は出土していないが、遺跡には丹波焼の擂鉢が少量搬入されているようである。一方、貯蔵具は全くみられない。共膳具や貯蔵具には、漆器や木器の存在が予想されるが、本遺跡では地下水位が低いためか出土例がほとんどない。

城下町期以後は、瀬戸・美濃が減少し、変わって肥前磁器・唐津系陶器の共膳具が増加してくる。中国磁器は全く出土しなくなる。18Ｃ以後は肥前磁器と競合しながら、大堀相馬の共膳具が増加してくる。幕末頃には大堀相馬が主体的となり、肥前や瀬戸の磁器が補っている。堤も器種が競合しない形で、調理具や貯蔵具が増加してくる。

陶磁器の変遷をみると、第16次調査区付近では近世を通じて住居者がいたことが推定される。第17次調査区では、城下町期には建物跡の発見もあり屋敷跡とみられるが、その後は屋敷地だった可能性は低い。第18次調査区は屋敷地だったかどうか疑わしいが、江戸時代末期には陶磁器が急増する点から、付近に住居者が現れた可能性が考えられる。

３．第16～18次調査区出土瓦

今回出土した三ヶ所の調査区の瓦は、過去の調査と比較して多い傾向が指摘できる。特に第16・17次調査区に多い。第16次調査区では66点出土し、布目瓦16点・燻瓦46点・種類不明４点である。布目瓦の内訳は、軒平瓦１点（文様不明）・平瓦５点・丸瓦９点・不明１点である。燻瓦は、平瓦33点・丸瓦３点・桟瓦５点・不明５点である。布目瓦には、縄目や布目をナデ消すものや小型品と予想されるものがあるが、中世と判断できるものはないようで、いずれも古代瓦と考えられる。燻瓦はすべて近世のものと考えられ、桟瓦を含むことからおよそ18Ｃ以後の瓦も含まれている。第17次調査区では36点出土し、布目瓦13点・燻瓦22点・不明１点である。布目瓦は、平瓦11点、軒丸瓦１点（重弁蓮華文）・丸瓦１点である。中世の遺構から出土する瓦は、布目瓦に限られ燻瓦は出土していないが、布目瓦も中世と判断できるものはない。なお、SE01とSK10の布目瓦に、接合関係が認められた。燻瓦は、平瓦11点・丸瓦３点・桟瓦１点・不明７点である。燻瓦は調査区西部に集中する傾向があり、SD01（Ⅳ・Ⅴ区）やⅦ区周辺に多

表35　産地別出土破片数と比率（城下町期）

産地＼数量		第16次 数量	第16次 %	第17次 数量	第17次 %	第18次 数量	第18次 %	計
中国磁器		2	11.1	5	10.9	0	—	7
陶器	瀬戸・美濃	6	33.3	22	47.8	5	71.4	33
	唐津系	0	—	0	—	2	28.6	2
	北部九州	1	5.6	0	—	0	—	1
	岸窯系	8	44.4	0	—	0	—	1
瓦質土器		0	—	19	41.3	0	—	19
土師質土器		1	5.6	0	—	0	—	1
計		18	100	46	100	7	100	71

表36　産地別出土破片数と比率（城下町期以後）

産地＼数量		第16次 数量	第16次 %	第17次 数量	第17次 %	第18次 数量	第18次 %	計
磁器	肥前	40	28.0	23	31.5	25	22.5	88
	瀬戸・美濃	2	1.4	0	—	0	—	2
	産地不明	27	18.9	10	13.7	36	32.4	73
陶器	瀬戸・美濃	7	4.9	1	1.4	2	1.8	10
	唐津系	11	7.7	2	2.7	5	4.5	18
	岸窯系	0	—	2	2.7	0	—	2
	大堀相馬	19	13.3	17	23.3	22	19.8	58
	堤	15	10.5	6	8.2	10	9.0	31
	産地不明	22	15.4	10	13.7	11	9.9	43
	土師質土器	0	—	2	2.7	0	—	2
計		143	100.1	73	99.9	111	99.9	327

い。VI区 SK03 では平瓦・丸瓦各 3 点が出土し、大堀相馬の土瓶と共伴していることから18C以後と考えられる。また、調査区西部に集中する傾向は、VII区で発見された建物跡と関連する可能性があるかもしれない。第18次調査区では26点出土し、布目瓦 4 点、燻瓦22点である。布目瓦は、平瓦 2 点（I区 1 点・II区 1 点）・丸瓦 2 点（II区）である。中世遺構では SD01・SD02 で出土しているが、古代の瓦と考えられる。燻瓦は、平瓦 9 点（I区）・丸瓦 2 点（I区）・熨

斗瓦？1点（Ⅰ区）・不明9点（Ⅰ区3点・Ⅱ区6点）である。この瓦は近世と考えられるが、平瓦には砂粒が目立たず焼成良好のものがあり、近代の瓦が含まれている可能性が残る。

瓦について概観してきたが、中世には瓦葺建物はないものと考えられ、近世についても総瓦葺建物は予想しにくく、棟や庇など部分的に葺かれていた可能性はある。古代瓦は、平安時代の集落跡が存在しているが、これまで瓦葺建物跡は発見されたことはなく、瓦葺建物を想定するのは難しい。集落の住居者が他の遺跡より持ち込んだものであろう。

4．中世・近世の遺構について

ここでは、遺構の重複関係や出土遺物の検討に基づいて、遺構の特徴・組み合わせ・変遷について述べる。なお、ここで使用する「屋敷跡」は、後述する第17次調査において建物跡・井戸・土坑類等がセットとなることから、これらの遺構組成が一世帯を単位とする遺構群（「屋敷跡」）と理解できよう。この屋敷跡には、敷地を区画する溝（堀）の有無がみられる。官衙遺跡などの特殊な遺跡を除けば、古代の集落では竪穴住居跡や建物跡1軒が基本的単位とみられることと大きな違いがある。このような遺構のセットは、中世以後の基本的な単位であろう。これに共通する例は、山口遺跡第10次調査地点（中富洋：1989）でも確認され、また、多賀城跡第50次調査SX1629平場跡の遺構群（宮城県多賀城跡調査研究所：1987）も類似した特徴をもっている。このような屋敷跡の成立は、第17次調査区の例を始め、上述の2遺跡例等から考えて、遅くとも12C後半頃と考えられ、以後近世を通じて、前述の遺構のセットが基本的な構成単位となったのであろう。ただし、中世城館や近世城郭とは区別して考える必要がある。土塁の有無や堀といった防御施設の内容や規模などが問題となろうが、今は検討の余裕がなく今後の課題としたい。現状では、防御施設のないものや防御機能の低いものを想定している。

第16次調査区

中世遺構

屋敷跡A　北西部（Ⅰ・Ⅱ区）で、SD02・06の区画溝で囲まれた空間が屋敷跡となろう。内部には、SB02・03、SK02やピット群が存在する。SD04も、内部の区画溝の可能性がある。時期は、出土遺物からほぼ鎌倉時代を通じて存在していたものと考えられ、SD02上層より出土した中国青磁皿が下限を示すものと考えている。また、屋敷跡西辺の区画溝は、西側の調査区（埋蔵文化財発掘調査研究所：1988）のSD03やその北側の第5次調査区の1号溝（金森安孝：1982）が該当するものと推定され、一辺約半町規模の区画溝をもつ屋敷跡を想定することが可能となる。建物跡の重複や区画溝（SD02）の改修から、この屋敷跡は2時期の変遷があったものと考えられる。SD02の中央部の浅い部分が入口部分を示すもの考えられ、SD02から派生するSD09・10が排水溝とみられる。

屋敷跡B　屋敷跡Bは重複から2時期に細分され、古期はSD12・15とSD01古期（南側の10・

11層堆積部分）で区画される屋敷跡と判断した。東辺の区画溝は不明だが、北辺で約60m と推定される規模をもつようである。内部の遺構は、Ⅷ区南端溝？（SX03）・SK09 などで構成される。SD16（古期）も、この段階の可能性がある。時期は、13C中～後葉と考えられる。新期は、SD01（古期）をそのまま利用し、西辺は SD11 に変えられ規模を拡大する。内部の遺構は、柵跡とみられる SA01・02、そして、SD12・15 を埋め立てて SB01・SX02 が構築される。SB01 は、柱穴深度が約 1 m もあり矢倉跡と予想される。SD08 もこの段階のものであろう。VI区では中世第 2 面（SB05）が相当するとみられる。Ⅷ区では、重複の認められる SD08・SK05・08・10・15 がこの時期のものと考えられる。北部の23層下で予想される溝もこの頃のものと思われる。このうち SK08 出土陶器は、屋敷跡Aの SK02 出土のものと接合関係が認められる。また、この屋敷跡では、土師質土器皿 BS_2・BS_3類が出土しておらず、屋敷跡Aより後出と考えられるが、接合資料などから併存する時期があったと理解される。新期段階は、柵・矢倉とみられる施設が付設され、溝が移設され溝幅の拡張など防御性が現れてくる特徴がある。後続する城館跡へ変化する過渡的な段階の屋敷（館）跡と考えられる。時期は、14C前葉頃であろう。

城館跡　城館跡は、II区で発見された土塁跡と北辺を区画する幅14～15m の SD01（古期）で区画されるものである。Ⅷ区北部でも、土塁の基底部かさらに下位の整地層とみられる土層が確認されている。II区の土塁積土は版築状を呈し、SB01 や SX02 を覆っている。SD01（古期）は城館北辺を区画する溝で、東西約76m 以上の規模をもつ外堀であろう。外堀は、Ⅷ区の東側で南方向へ曲がることが推定できる。SD01（古期）は、V区で橋脚跡が発見されたことから、城館北側に出入口があったと考えてよい。内部では、VI区中世第 1 面・SD16（新期）・SB06・07 があり、遺物包含層の 2・3・5 層などもこの段階のものである。これらの層は新旧関係が認められることから、さらに細かな変遷がある。Ⅷ区では、中世第 1 面・集石遺構・遺物包含層（3・5 層）・前述した北部盛土整地層（23層）が、城館段階のものである。時期は、出土遺物から14C後半から15C前半頃に存続していたと考えられる。

城館廃絶後の特徴　この時期にはどのように利用されていたか明確ではない。ただ、SD01（古期）II区 8 層は、中国染付碗・永楽銭などが出土し、志野など近世陶磁器を混じえない特徴的な層である。SD01（V区）との対応は不明である。城館跡かその近隣に、16C中～後半頃に住居者がいた可能性がある。

近世遺構　現在みられる道路や建物などは近世の城下期の町割方向を踏襲していると考えられる。方位は、南北方向がおよそN－10°～20°－Eである。過去の調査でもこの方位と一致するものと考えられる遺構がある。I区の SD04、VI区II層上面で検出した SD07 が該当するものと考えられる。また、前述した SD01 も新期段階のものは、中世の堆積層を掘り直し、方向はそのままで再利用している。志野などの近世陶磁器が出土している。近世段階の堀底は、7 層（鉄

分集積層）である。SD01は18C頃には埋没がほぼ完了し、その後は傾斜地か若干の凹地となった。

第17次調査区

中世遺構

屋敷跡C　この屋敷跡はSE01の位置や時期が目安となり、SB02～04・SK06～10・SK21～23で構成される。ただし、区画溝は伴わないようである。調査区外にも、遺構の存在が予想されるが、規模は不明である。また、SK04・05も帰属する可能性がある。この屋敷跡は、建物・土坑に重複関係が認められることから、2時期以上の変遷があり、井戸跡出土遺物から12C後半～13C初頭頃と考えられる。ただし、SK23出土の埦Aの評価が定まらず、上限は検討の余地を残す。区画溝の確認できない屋敷跡の例には、山口遺跡第10次調査区の遺構群があり、現在刊行準備中である。時期もほぼ同じである。

屋敷跡D　SD08で区画された屋敷跡と理解した。主要な遺構は調査区外と予想されるが、屋敷造営時には、前述の屋敷跡Cの土坑群を埋め立てたものと考えられる。なお、SK12は、この屋敷跡か後述する屋敷跡Eの段階のものであろう。時期は、屋敷跡CとEの中間に位置づけられることから、13C前半頃と推定したい。

屋敷跡E　SD07・11で区画される屋敷跡と理解した。屋敷跡Dとほぼ重複する位置にある。SD07と11との距離は約52mあり、一辺約半町規模と推定される。SD04はSD11に接続するものと考えられ、給水用の溝であろう。SD07では常滑有台鉢・在地の白石窯甕（1類）など、SD04ではLB_4類とみられる土師質皿が出土していることから、13C中葉から14C前葉頃に納まる時期と考えられ、第16次調査屋敷跡Bとおよそ併行する。

屋敷跡F　SD02・06で区画される屋敷跡と理解した。屋敷跡Eと重複した位置にある。SD02・06間は約52mあり、一辺約半町規模をもつ屋敷跡と推定される。西辺のSD02はSD07と重複し、溝幅は増しているが深度は浅くなっている。南辺の溝はSD01寄りに移設していることから、南北規模は屋敷跡Eより拡大している可能性もある。SD02の溝底には土坑（陥穴？）が付設され、西壁面には柱穴列が検出されたことから柵が付設されたと考えられる。防御性が付与された屋敷（館）跡である。ただし、土塁は確認できない。SD02上層では16C後半頃の中国染付が出土し、近世陶磁器を混じえない。瓦質風炉も出土しているが、同一固体とみられるものはSD06でも出土している。この屋敷跡は、出土遺物や屋敷跡Eに後続することから考えて、14C中葉以降から16C後半頃に納まる時期と推定される。

屋敷跡F廃絶後　この段階の遺構は、屋敷跡と理解してよいか不明である。SB01・07・SD03が、この段階のものである。SB01とSD03には重複があり、幾つかの変遷が予想される。また、SD03はⅢ層起源とみられる土層によって埋め立てられている。出土遺物がほとんどなく時期

を決定しにくいが、屋敷跡Fより後出であることは、明らかである。下限は明確ではないが、SD03が埋められている点やⅦ区で多く出土した江戸初期の陶磁器がⅠ区で階無に近いことから、16C後半頃から17C初頭頃（城下町期以前）と推定しておきたい。

その他の中世遺構　帰属の不明確な遺構には、SB06・08・13・14・SK02・13・14・24・25がある。これまで述べてきた屋敷跡の何れかに属するものと考えてよいと思われるが、評価が定まらない。また、SD01は中国青磁端反無文碗の出土から、14C後半頃には開削されたと考えられる。中世期にはSD16から分岐する用水堀と考えられるが、城下町期にはⅤ・Ⅵ区の分岐部分が埋め立てられ機能を停止した。その後、Ⅴ区以東は18C頃に埋没をほぼ完了していたと考えられる。SD16は、在地の白石窯の甕・壺片が4層～底面で出土し、遅くとも14C代には開削されたと考えられる。SD01と同時期か先行する堀と理解している。また、SD16は、5トレンチのSD05へ続くものと予想され、現在も使用されている「佐久間堀」のルーツとみられる。ただし、近世段階には、調査区外に移動しているらしい。Ⅰ区SB05やⅣ区SA01は、SD01の中世段階に並設された柵などの可能性もある。

近世遺構

近世遺構は、城下町期とそれ以後に分けられる。

屋敷跡G　城下町期と考えられる遺構は、SB09～12・SK01・SD13～15がある。建物跡は軸線が中世のものと異なり。城下町々割と一致する。Ⅴ～Ⅶ区では、江戸初期の遺物が集中的に出土している。このような特徴から、上述の遺構群は城下町期の屋敷跡の一部と推定する。SD13～15は道路跡の側溝と考えられることから、屋敷跡西辺には南北方向の道路や堀が存在したものと思われる。なお、SB10とSD13には道路からはみ出すように蚕食現象が認められる。

城下町期以後の遺構の状況は、良く分かっていない。基本層のⅡ層が耕作土になった可能性があるが、遺構の発見は階無に近い。今回の調査では、SK03が城下町以後の遺構で出土遺物から18C以後のものである。

第18次調査区

中世遺構

第18次調査区では、発見された建物跡が、中世の屋敷という単位で理解できるかどうか明確ではない。Ⅱ区西部の建物跡に可能性があるが、井戸や土坑などの関連遺構が検出されず、区画施設も明確ではない。SA01・SD02・03なども、建物群を囲うような施設かどうかはっきりしない。発見された遺構に比べ、中世の出土遺物が極端に少なく、生活の匂いが薄い。

細かな時期を推定できる遺構は少ない。Ⅰ区では、SB06・SD12・13が鎌倉時代の遺構と思われる。SD12からAS類の土師質土器皿、SD13から在地の中世鉢が出土している。Ⅱ区では、角柱の存在や方向から建物跡は中世と予想できるが、細かな時期は推定できない。角柱を多用

するものほど新しいと推定して良ければ、SB04 → SB01・03・05 → SB02 の変遷が想定できる。ところで、建物跡の性格は不明だが、特定の位置に 4 回程の立て変えを行っている点は、建物の性格や空間利用に何にか特別のものがあったのではなかろうか。

推定を重ねてきたが、一応の特徴は指適できたものと思われる。

近世遺構

この調査区では、近世と判断できる遺構はないが、幕末頃に陶磁器が急増する特徴がみられる。なお、調査区外に墓石（天保期）を乗せる塚が存在する。

以上、各次の中世・近世遺構について概観してきたが、総合的にみると 6 時期の変遷が考えられる。これらを整理し、まとめると表37になる。

Ⅰ期は、建物・井戸・土坑という中世的な屋敷を構成する遺構の組成が揃う段階である。その起源は、古代の官衙遺構や国守館に求め得るかもしれない。この段階では、溝や柵などの区画施設の有無があるようで、第17次の屋敷跡Ｃは区画施設のない事例と考えられる。市内に類例を求めると、前述の山口遺跡第10次調査区例があり、今泉遺跡のⅠ期の遺構群（1983：佐藤洋他）及び昭和54年度調査（1980：篠原信彦）の 1 号堀立柱建物跡や 2 号井戸跡などで構成されるものも可能性がある。この段階の屋敷跡の住居者は、中世初期の開発領主層と評価できるかが課題となろう。この時期は、12Ｃ末あるいは13Ｃ初頭頃を下限とする。

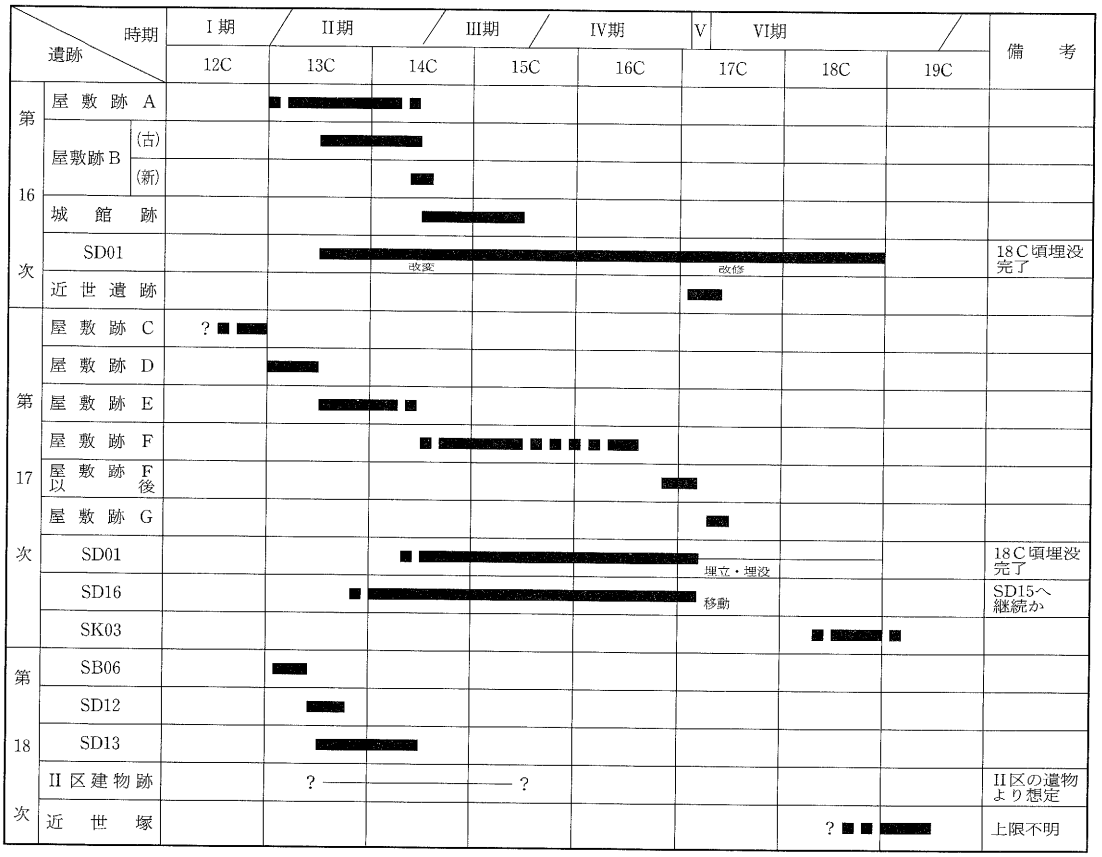
Ⅱ期は、Ⅰ期と同様の遺構構成であるが、区画を目的とした溝が伴う。第16次の屋敷跡Ａ・Ｂ、第17次の屋敷跡Ｄ・Ｅがあり、成立の遅い屋敷跡ほど区画溝の幅や深さが拡大する傾向がありそうである。この時期は、14Ｃ前葉頃を下限としてほぼ鎌倉時代に相当する。

Ⅲ期は、国人領主クラスの城館が出現する。第16次の城館跡が該当する。土塁は版築状に積まれ、外堀（SD01）は幅14～15m と巨大で、おそらく一辺約 1 町規模のもの予想される。在地の領主として知られる国分氏との関連が問題となろう。Ⅱ期末からⅢ期初頭には、軍事緊張が高まる社会情勢に対応するように、第16次屋敷跡Ｂ（新期）や第17次屋敷跡Ｆに防御施設や溝幅の拡大などの特徴がみられる。また、第16次城館跡の南200m の第 4 次調査区では、15Ｃ前半頃を下限とする屋敷跡が発見されており（1984：結城・佐藤）、この時期の屋敷跡である。

Ⅳ期は、第16次の城館廃絶後の時期で、およそ戦国期から若林城下町成立以前と考えられる。ただし、城館は遠隔地に移動したということではなく、隣接し後に若林城となった城館が、戦国期以後の中世城館の可能性を残している。屋敷跡などの遺構が激減し、現状では第17次の屋敷跡Ｆとその後の遺構群だけである。この屋敷跡Ｆも、15Ｃ後半～16Ｃ前半の遺物は明確ではない。この地の住居者たちは、他の地点へ移動したものと思われる。戦国期を中心とした遺構の発見に期待したい。

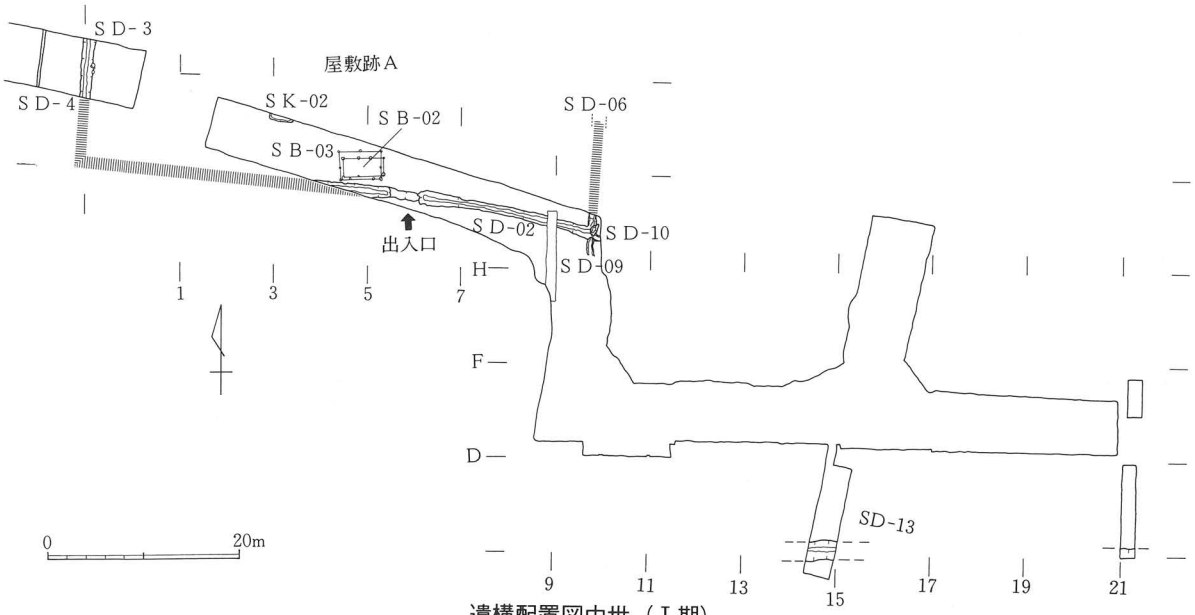
Ⅴ期（城下町期）は、若林城やその城下町が形成された時期である。若林城は伊達政宗晩年

表37　時期別遺構の変遷時

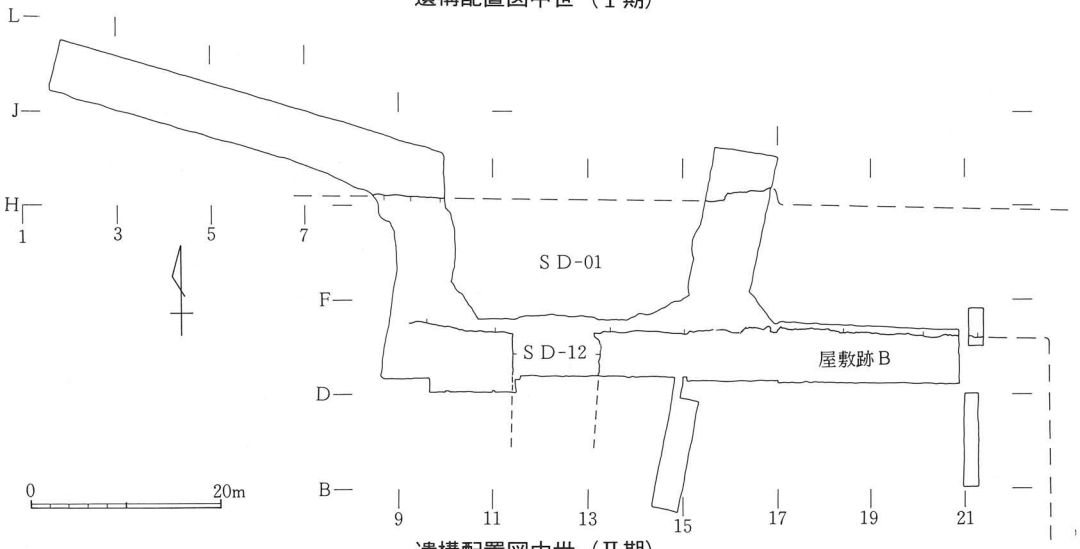


の城跡で、石垣は使用されていないようで、堀と土塁で築かれたものと予想される。『仙台市史1』によれば、この城は寛永4年に造営され、同16年解体されたという。城下町のうち武家地部分は、寛永14・15年頃には解体移転したようである。また、町奉行がおり、一個の独立した府城を形成したと指摘されている。その後は近世絵図類をみると、武家地は畠地に、町屋は城下町「仙台」に組み変えられた。

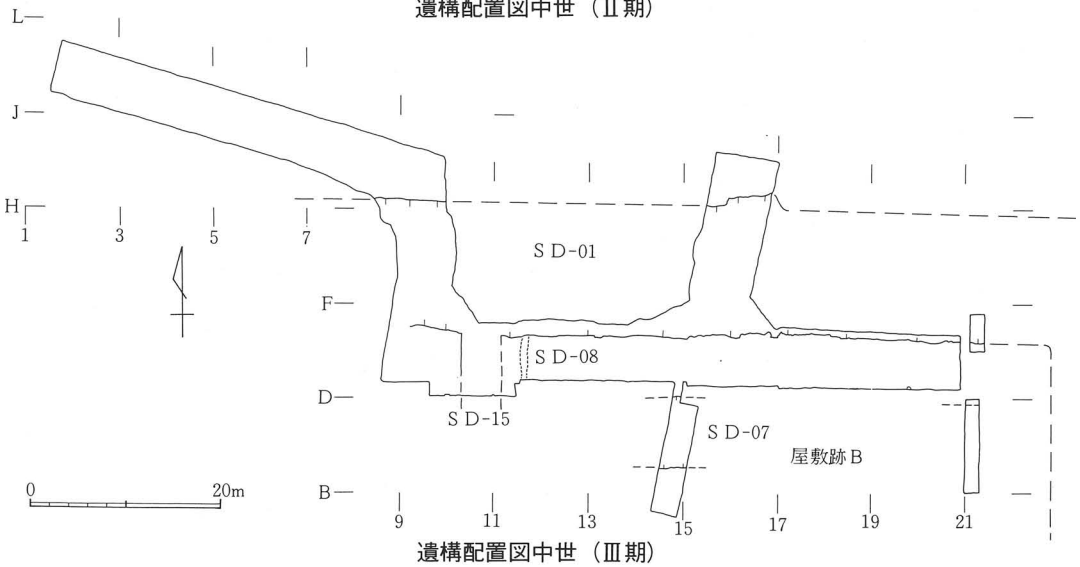
さて、第17次調査区では屋敷跡の一部が検出されたが、城下町の屋敷跡のモデルとなる事例は、第14次調査地点の屋敷跡（第17次の西方約230m）である（佐藤洋：1987）。この地点では、庇付建物・井戸・墓・区画塀で構成される屋敷跡で、墓には金箔押巴文鳥衾瓦の瓦当部や仙台城三ノ丸跡出土と同文の軒平瓦などが副葬されていた（結城慎一・佐藤洋：1985）。また、第11次調査地点では、屋敷跡のうち入口付近を調査した（結城慎一・佐藤洋：1984）。ここでは、屋敷区画溝とそれから派生する溝（道路側溝か）、階段を伴う半地下式室（ムロ）・門柱（冠木門か）などが検出されている。近世の屋敷跡の構成も、基本的には中世屋敷と変わらない。屋敷普請に伴う盛土造成などは、これまで確認されていない。今後は、屋敷跡の構造や規模の解明などが課



遺構配置図中世（Ⅰ期）

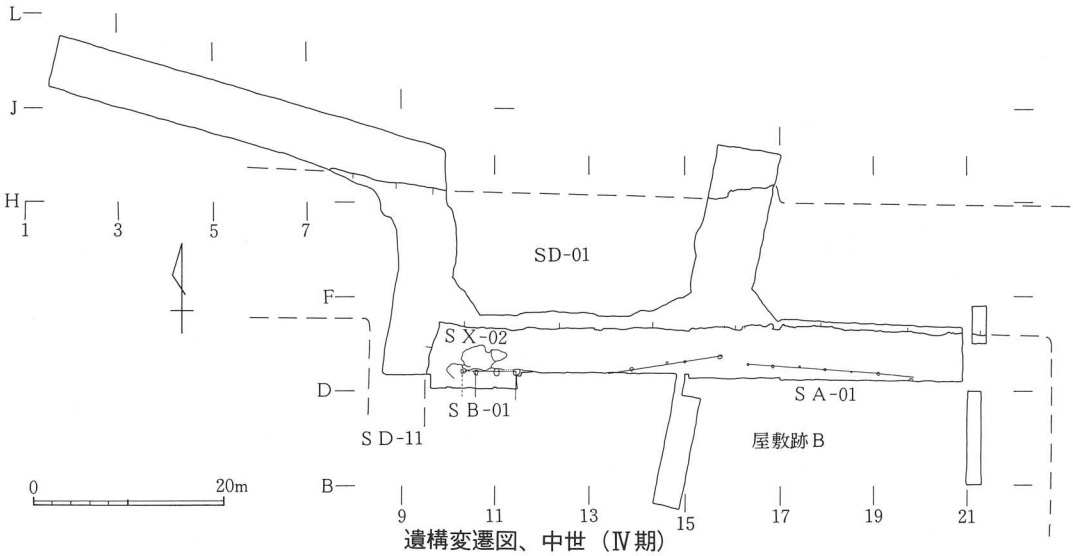


遺構配置図中世（Ⅱ期）

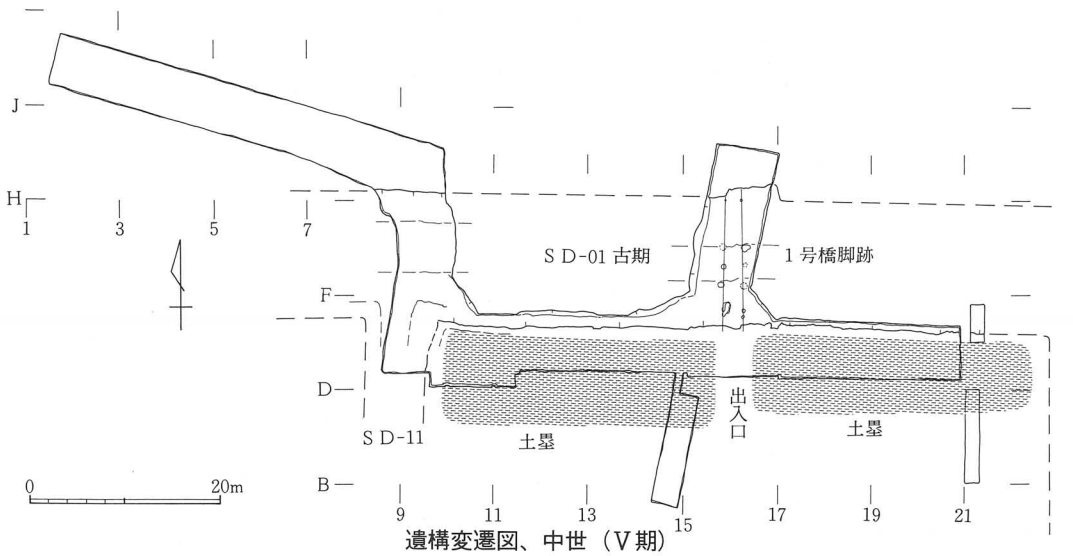


遺構配置図中世（Ⅲ期）

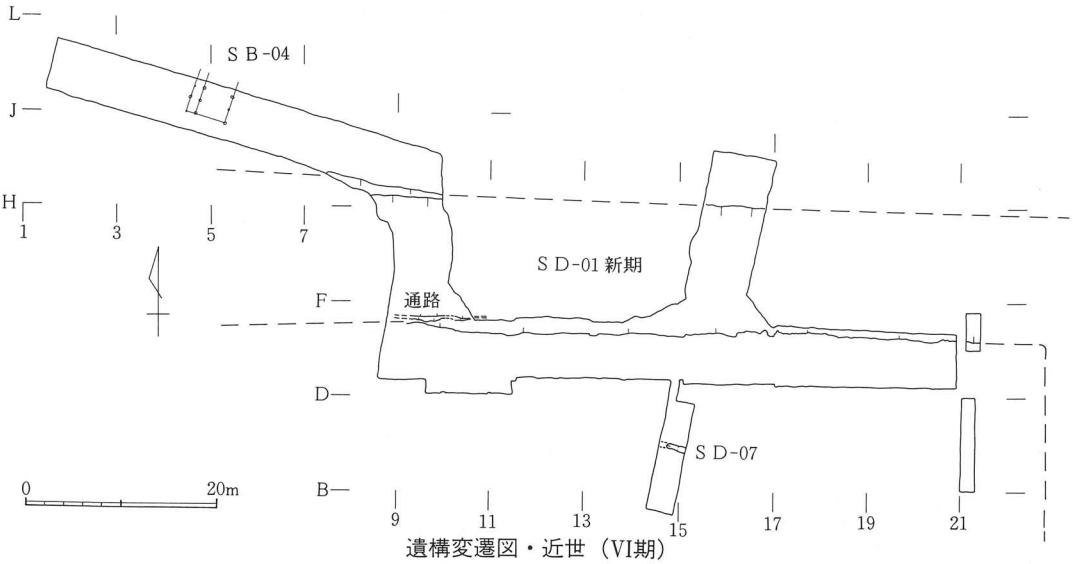
第189図　中世・近世遺構変遷図



遺構変遷図、中世（Ⅳ期）

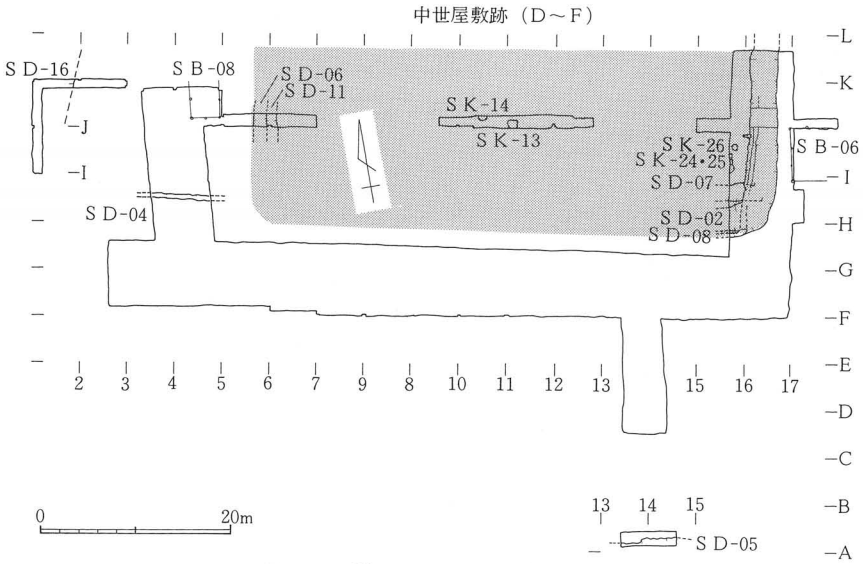


遺構変遷図、中世（Ⅴ期）

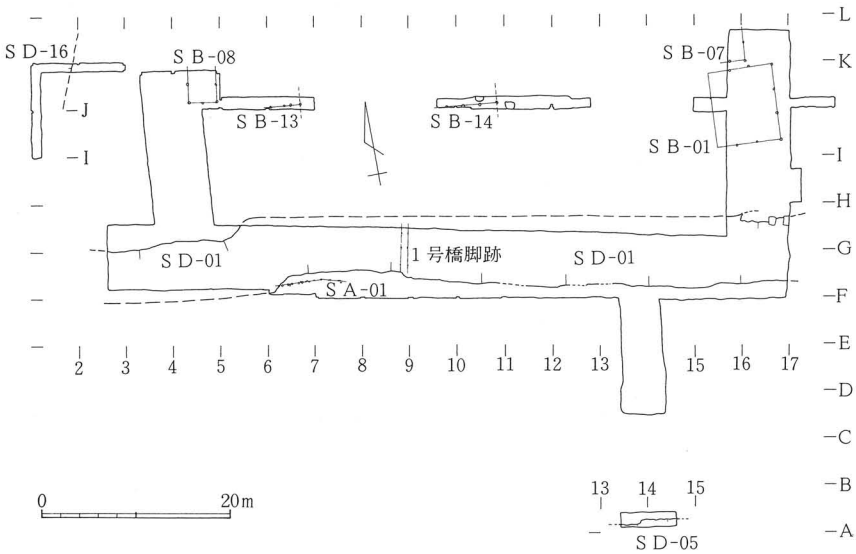


遺構変遷図・近世（Ⅵ期）

第190図　中世・近世遺構変遷図

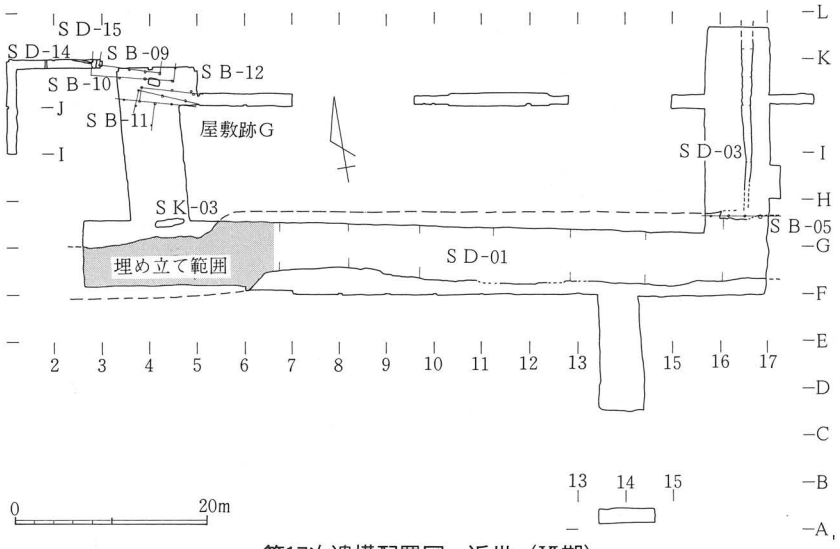


第17次遺構配置図、中世（Ⅱ～Ⅳ期）網点は屋敷範囲

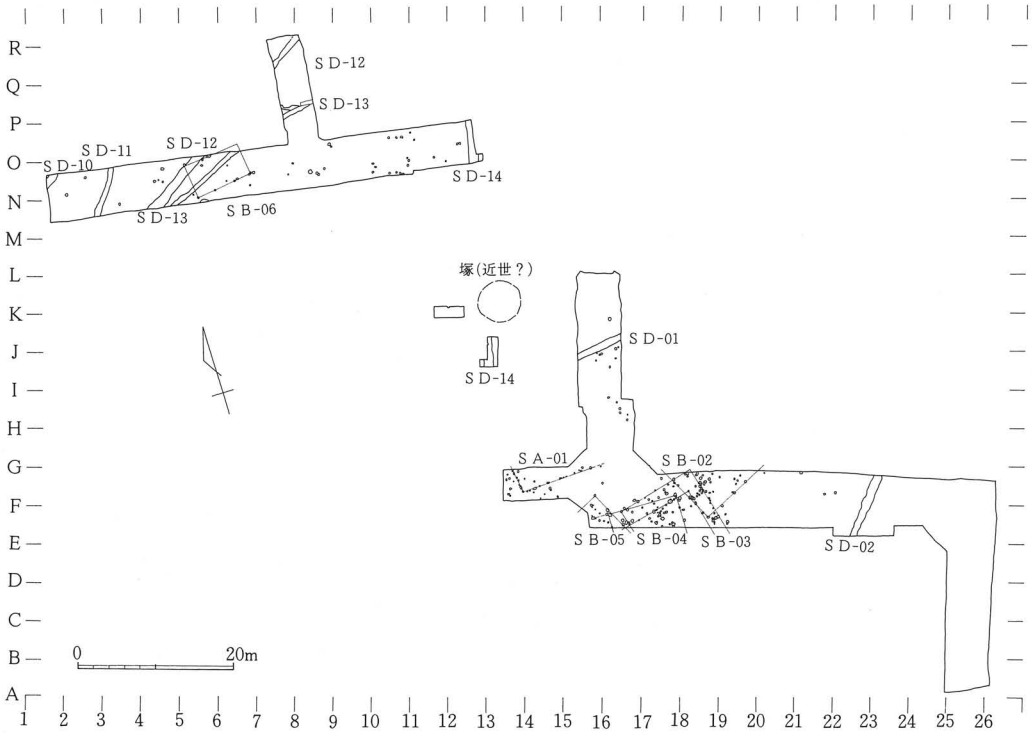


第17次遺構配置図、中世（中世屋敷廃絶後）

第191図　中世・近世遺構変遷図



第17次遺構配置図、近世（Ⅵ期）



第18次中世遺構配置図（中世）

第192図　中世・近世遺構変遷図

題となろう。

VI期は、城下町廃止後の時期である。前述したように、近世絵図類をみると町屋以外は、畠地になったようである。これまでの調査では、ほとんど遺構は検出されていない。僅かに、今回報告した第17次調査のSK03と第6次調査III区14号土坑(渡辺弘美：1983)が確認されているに過ぎない。その他では、V期以前の溝や堀の上層部、あるいは表土や天地返しから遺物が出土する程度である。なお、第18次の塚は未調査であるが、近世のものと考えられる。

以上であるが、各期の内容は今後さらなる検討が必要があり、今後の課題としたい。

引用文献

氏家和典　1957　「東北土師器の形式分類とその編年」『歴史』第14輯　東北史学会

宇野隆夫　1982　「井戸考」『史林』第65巻第5号　後に、『考古資料にみる古代と中世の歴史と社会』真陽社　1989　所収

奥津春雄　1977　『大仙台圏の地盤・地下水』　宝文堂

金森安孝　1982　「南小泉遺跡」　『年報3』　仙台市教育委員会　（第5次）

北村信・石井武政・寒川旭・中川久夫　1986　『仙台地域の地質』　地質調査所

工藤哲司・結城慎一　1983　『南小泉遺跡　都市計画街路建設工事関係第2次調査報告』　仙台市教育委員会　（第7次）

河野真知郎　1986　「鎌倉における中世土器様相」『神奈川考古』第21号　神奈川考古同人会

小林清治　1954　「第2章　城下の拡張と二ノ丸の構築」『仙台史1』　仙台市

佐藤甲二　1985　『南小泉遺跡　第12次発掘調査報告書』　仙台市教育委員会

佐藤洋・山田しょう　1983　『今泉城跡』　仙台市教育委員会

佐藤洋　1987　『南小泉遺跡第14次発掘調査報告書』　仙台市教育委員会

篠原信彦　1980　『今泉城跡発掘調査報告書』　仙台市教育委員会

寺島文隆・飯村均　1987　『八郎窯跡群』　福島県梁川町教育委員会

東北学院大学考古学研究会　1979　『仙台市中田町栗遺跡発掘調査報告書』　仙台市教育委員会

中富洋　1990　『山口遺跡　第9・10次調査報告書』　仙台市教育委員会（近刊予定）

丹羽茂　1983　「宮前遺跡」『朽木橋横穴古墳群・宮前遺跡』　宮城県教育委員会

服部実喜　1984　「中世都市鎌倉における出土かわらけの編年的位置づけについて」『神奈川考古』第19号　神奈川考古同人会

原明芳　1989　「長野県における「黒色土器」の出現とその背景　―5世紀末の食膳具様式の成立との関連で―」『東国土器研究』第2号　東国土器研究会

藤沼邦彦　1976　「宮城県地方の中世陶磁器窯跡（予窯）」『東北歴史資料館研究紀要』第2巻　東北歴史資料館

藤沼邦彦・中村光一　1982　「袈裟襷文を出土した石巻市水沼窯跡」『東北歴史資料館研究紀要』第8巻　東北歴史資料館

埋蔵文化財発掘調査研究所　1987　『宮城県仙台市南小泉遺跡』第4集

埋蔵文化財発掘調査研究所　1988　『宮城県仙台市南小泉遺跡』第11集
宮城県多賀城跡調査研究所　1987　「II区第50次調査」『多賀城跡』
目黒吉明他　1987　「佐平林遺跡（I～IV区）」『母畑地区遺跡発掘調査報告II』　福島県教育委員会・(財) 福島県文化センター
柳沼賢治　1989　「福島県中通り地方の土師器について」『福島県に於ける古代土器の諸問題』　万葉の里シンポジウム実行委員会・鹿島町教育委員会
結城慎一・工藤哲司　1979　『史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報』　仙台市教育委員会
結城慎一・佐藤洋　1984　『南小泉遺跡都市計画街路建設工事関係第３次調査報告』　仙台市教育委員会　(第11次)
結城慎一・佐藤洋　1985　『仙台城三ノ丸跡』　仙台市教育委員会
渡部弘美　1983　『南小泉遺跡　―青葉女子学園移転新営工事地内調査報告書―』　仙台市教育委員会　(第６次)
渡部弘美・宮崎明　1989『南小泉遺跡　―第15次発掘調査報告書―』　仙台市教育委員会

参考文献

赤羽一郎　1984　『常滑焼―中世窯の様相―』　ニューサイエンス社
加藤道男　1989　「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢』　芹沢長介先生還暦記念論文集刊行会
小林三郎　1983　「古墳時代倣製鏡の鏡式について」『明治大学人文科学研究所紀要』第21冊
佐賀県立九州陶磁文化館　1984　『国内出土の肥前陶磁』　図録
白鳥良一・加藤道男　1974　「岩切鴻ノ巣遺跡」『東北新幹線関係遺跡調査報告書I』　宮城県教育委員会
芹沢長介他　1981　『日本やきもの集成〔1〕北海道・東北・関東』　平凡社
田口昭二　1983　『美濃焼』　ニューサイエンス社
田辺昭三　1981　『須恵器大成』　角川書店
辻　秀人　1989　「東北古墳時代の画期について（その１）」『福島県立博物館紀要』第３号
中村浩　1978　「第６章　和泉陶色窯出土遺物の時期編年」『陶色III』　(財) 大阪文化財センター
樽崎彰一編　1977　『世界陶磁全集』３　小学館
日本貿易陶磁研究会　1982　『貿易陶磁研究』第２号
長谷部楽爾編　1977　『世界陶磁全集』12　小学館
藤沢敦　1988　「裏町古墳出土の銅鏡について」『年報９』　仙台市教育委員会
藤田良章　1988　「中世の食器・考―〈かわらけ〉ノート―」『列島の文化史』５　日本エディタースクール出版部
三上次男編　1981　『世界陶磁全集』３　小学館

第４章　自然科学的分析

第１節　南小泉遺跡炭化材同定報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

１．試料

試料は№１～24の24点である。いずれも古墳時代のものとされる住居址から検出されたもので、各住居の建築材と考えられている。№１～11と№12、13はそれぞれ中期（５世紀）のものとされる第16次 SI01 と SI07 から、№14～24は後期（６世紀）のものとされる第18次 SI01 から検出されたものである。なお、第16次 SI01 は第18次 SI01 より古いものとされている。

２．方法

試料を乾燥させたのち木口・柾目・板目の３断面を製作、実体顕微鏡と走査型電子顕微鏡（無蒸着・反射電子検出型）で観察・同定した。同時に電子顕微鏡写真図版（図版１～３）も製作した。

３．結果

№４は材の実体がなかった。また、№７、９、10は試料の状態が不良で広葉樹としか判らなかった。これらを除く20点が以下の５種類（Taxa）に同定された。試料の主な解剖学的特徴や一般的な性質は次のようなものである。

・コナラ属（コナラ亜属コナラ節）の一種［Quercus（subgen. Lepidobalanus sect. Prinus）sp.］　ブナ科　　№２、３、５、11.

環孔材で孔圏部は１～２列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火災状に配列する。大道管は横断面では円形～楕円形、小道管は横断面では多角形、ともに単独。単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状～網目状となる。放射組織は同性、単列、１～20細胞高のものと複合組織よりなる。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

コナラ節は、コナラ亜属（落葉ナラ類）の中で、果実（いわゆるドングリ）が１年目に熟するグループで、モンゴリナラ（Quercus mongolica）とその変種ミズナラ（Q. mongolica var. grosseserrata）、コナラ（Q. serrata）、ナラガシワ（Q. aliena）、カシワ（Q. dentata）といくつかの変・品種を含む。モンゴリナラは北海道・本州（丹波地方以北）にミズナラ・カシワは北海道・本州・四国・九州に、ナラガシワは本州（岩手・秋田県以南）・四国・九州に分布する。

このうち平野部で普通に見られるのはコナラで樹高20mになる高木である。古くから薪炭材として利用され、植栽されることも多かった。材は重硬で、加工は困難、器具・機械・樽材などの用途が知られ、薪炭材としてはクヌギ（Q. acutissima）に次ぐ優良材である。

・コナラ属（コナラ亜属クヌギ節）の一種［Quercus（subgen. Lepidobalanus sect. Cerris）sp.］　ブナ科　№14、15、16、17、18、19、21、22、24.

環孔材で孔圏部は1～3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら放射状に配列する。大道管は横断面では円形、小道管は横断面では角張った円形、ともに単独。単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状となる。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合組織よりなる。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

クヌギ節は、コナラ亜属の中で果実が2年目に熟するグループで、クヌギとアベマキ（Q. variabilis）の2種類がある。クヌギは本州（岩手・山形県以南）・四国・九州に、アベマキは本州（山形・静岡県以西）・四国・九州（北部）に分布するが、中国地方に多い。材の解剖学的特徴のみで両者を区別することはできないが、試料はクヌギである可能性が高い。クヌギは樹高15mになる高木で、材は重硬である。古くから薪炭材として利用され、人里近くに萌芽林として造林されることも多く、薪炭材としては国産材中第一の重要材である。このほかに器具・杭材・榾木などの用途が知られる。

・クリ（Castanea crenata）　ブナ科　№1、12、13、20.

環孔材で孔圏部は1～4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では円形～楕円形、小道管は単独および2～3個が斜（放射）方向に複合、横断面では角張った楕円形～多角形。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状～網目状となる。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

クリは北海道南西部・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、加工はやや困難であるが耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材、榾木や海苔粗朶などの用途が知られている。

・ヤマグワ（Morus bombycis）　クワ科　№23.

環孔材で孔圏部は1～5列、晩材部へ向かって管径を漸減させ、のち塊状に複合する。大道管は横断面では楕円形、単独または2～3個が複合、小道管は横断面では多角形で複合管孔をなす。道管は単穿孔を有し、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性II～III型、1～6細胞幅、1～50細胞高。柔組織は周囲状～翼状および散在状。年輪界は明瞭。

ヤマグワは北海道・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木で、多くの園芸品種があり、養蚕に利用されている。材はやや重硬で強靭、加工はやや困難で、保存性は

高い。装飾材や器具・家具材として用いられる。

・ケンポナシ（Hovenia dulcis）　クロウメモドキ科　　№6、8.

環孔材で孔圏部は1～3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減する。大道管は横断面では楕円形、単独、小道管は管壁が厚く、横断面では円形～楕円形、単独および放射方向に2～3個が複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性III～II型、1～5細胞幅、1～50細胞高。柔組織は周囲状～翼状、散在状およびターミナル状。年輪界は明瞭。

ケンポナシは北海道（奥尻島）・本州・四国・九州に自生する落葉高木で、時に植栽される。材の重さ・硬さは中程度で、加工は容易、材質は良好である。このため建築装飾材・家具材として賞用され、器具・楽器・旋作・薪炭材などにも用いられる。

以上の同定結果を一覧表で示す（表1）。

表1　南小泉遺跡出土炭化材の樹種

試料番号	検出遺構など	種　　名
1	16次 SI01 1	クリ
2	16次 SI01 2	コナラ属（コナラ亜属コナラ節）の一種
3	16次 SI01 3	コナラ属（コナラ亜属コナラ節）の一種
4	16次 SI01 4	材実体なし
5	16次 SI01 5	コナラ属（コナラ亜属コナラ節）の一種
6	16次 SI01 6	ケンポナシ
7	16次 SI01 7	広葉樹（散孔材）
8	16次 SI01 8	ケンポナシ
9	16次 SI01 9	広葉樹（散孔材）
10	16次 SI01 10	広葉樹（散孔材）
11	16次 SI01 11	コナラ属(コナラ亜属コナラ節）の一種
12	16次 SI07	クリ
13	16次 SI07	クリ
14	18次 SI01 1	コナラ属（コナラ亜属クヌギ節）の一種
15	18次 SI01 2	コナラ属（コナラ亜属クヌギ節）の一種
16	18次 SI01 3	コナラ属（コナラ亜属クヌギ節）の一種
17	18次 SI01 4	コナラ属（コナラ亜属クヌギ節）の一種

18	18次 SI01 5	コナラ属（コナラ亜属クヌギ節）の一種
19	18次 SI01 6	コナラ属（コナラ亜属クヌギ節）の一種
20	18次 SI01 7	クリ
21	18次 SI01 8	コナラ属（コナラ亜属クヌギ節）の一種
22	18次 SI01 9	コナラ属（コナラ亜属クヌギ節）の一種
23	18次 SI01 10	ヤマグワ
24	18次 SI01 11	コナラ属（コナラ亜属クヌギ節）の一種

4．考察

今回同定された樹種は炭化材としての検出の報告例の多いものであるが、各住居址別の樹種構成にはやや違いが認められる(表２)。ただ、この違いが、推定されている建築時期の違いと関連づけられるものであるのか否かは、群馬県渋川市中筋遺跡出土炭化材の同定例＊（高橋 1988a)もあり即断できない。また、各資料はその使用部位も推定されているが、添付資料に示されているような出土状況は、着火後速やかに土屋根＊＊の崩壊などによって埋積し、空気から遮断されることで炭化した部材のみが残存できたものであることを示していると思う。したがって、このような状況での少数の試料から用材の違いを読み取ることは困難である。

なお、遺構や出土状況などの詳細は不明であるが、栗遺跡試料（光谷　1982）では、今回同定された樹種は認められていない。

表２　南小泉遺跡出土炭化材の住居址別の樹種構成

樹種／住居址	16次 SI07	16 次 SI01	18 次 SI01
コナラ節		4	
クヌギ節			9
クリ	2	1	1
ヤマグワ			1
ケンポナシ		2	
広葉樹		3	
合　計	2	10	11

＊：ここでは同時期に建築・使用されたと思われる隣接する住居址間で、その樹種構成に明らかな差が認められている。

＊＊：筆者は、群馬県富岡市田篠遺跡発掘報告書中で触れられているように（高橋　1988b）、当時の竪穴住居は、（少なくとも関東地方では）土屋根をもつものがより一般的な形態ではなかったかと考えているが、東北地方ではこうした考えを支持するような知見は得られていないのであろうか。

引用文献

光谷　拓実　1982　栗遺跡出土炭化材樹種同定結果、「仙台市文化財調査報告書第43集　栗遺跡　栗囲式土師器標式遺跡調査報告」、仙台市教育委員会、299.

高橋　利彦　1988a　中筋遺跡出土炭化材の樹種、「渋川市発掘調査報告書第18集　中筋遺跡第２次発掘調査概要報告書」、群馬県渋川市教育委員会、42-47.

1988b　炭化材の樹種、「（財）群馬県埋蔵文化財発掘調査報告第84集・関越自動車道（上越線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第２集　田篠上平遺跡　後期古墳と奈良・平安時代の集落跡の調査」、群馬県教育委員会・（財）群馬県埋蔵文化財調査事業公団・日本道路公団、287-293.

第２節．南小泉遺跡祭祀土壙出土鉄滓の金属学的調査

大澤　正己

概要

宮城県下でも最古級に属する南小泉遺跡出土の鉄滓を調査して次のことが判明した。

(1)　鉄滓は、鉱石系鉄素材を原料として、鉄器鍛造時に排出された鍛錬鍛滓冶（小鍛冶滓）に分類される。

(2)　鉱物組成はヴュスタイト（Wüstite : FeO）主体、化学組成は全鉄分（Total Fe）が56.5％と多く、ガラス質成分（$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+Na_2O+K_2O$）は、21.75％と少ない。随伴微量元素は低め傾向で、特に、二酸化チタン（TiO_2）0.12％、バナジウム（V）0.002％と低値を特徴とする。

(3)　鍛冶に供された鉄素材は、不純物の少ないもので、大陸産の可能性をもつ。産地同定は、今後の研究課題としておきたい。

１．いきさつ

南小泉遺跡は、仙台市若林区遠見塚一丁目に所在する。当遺跡の５世紀中頃に比定される祭祀土壙より出土した鉄滓は、宮城県下でも最古級で、当時の鍛冶工房の所在を実証する重要試料となる。仙台市教育委員会より、この鉄滓の金属学的調査の依頼を受けたので、鉱物組成の調査を行った。

２．調査方法

２－１　供試材

２－２　調査項目

(1)　肉眼観察

(2)　顕微鏡組織

Table.1　供試材の履歴と調査項目

符号	試料	出土位置	試料サイズ		調　査　項　目			
			計測値	重量	顕微鏡組成	断面硬度	CMA	化学組成
MSB1	鉄滓	祭祀土壙 SK12 2層上部	80×65×30 (mm)	215 (g)	○	○	○	○

供試材は、水道水でよく洗浄した後、中核部をベークライト樹脂に埋め込み、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1,000と順を追って研磨し、最後は被研面をダイヤモンドの3μと1μで仕上げている。

(3) CMA（Computre Aided X-ray Micro Analyzer）調査

EPMA（Eleectron Probe Micro Analyzer）にコンピューターを内蔵させた新鋭分析機器である。別名X線マイクロアナライザーとも呼ばれる。分析の原理は、真空中で試料面（顕微鏡試料併用）に電子線を照射し、発生する特性X線を分光後にとらえて画像化し、定性的な測定結果を得る。これを標準試料とX線強度の対比から元素定量値をコンピューター処理してデータを得る方法である。

(4) ビッカース断面硬度

ヴ$_{ス}$タイト（Wüstite : FeO）の鉱物組成の同定を目的として、ビッカース断面硬度計（Vickers Hardness Tester）を用いて硬度の測定を行った。試験は、鏡面琢磨した試料に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもってその荷重を除し商を硬度値としている。

(5) 化学組成

鉄滓の分析は次の方法をとっている。

全鉄分（Total Fe）、酸化第1鉄（FeO）：容量法、炭素（C）、硫黄（S）：燃焼赤外線吸収法、他成分：ICP法（高周波プラズマ発光分光分析法）。

3．調査結果

(1) 肉眼結果

表皮は赤褐色と黒色のまだらを呈する。上面側は平坦で肌は滑らかであるが周辺部の一部に気泡を露出し、木炭痕を少々残す。裏面は半円突起状で、弱い反応痕をもち、赤褐色で木炭痕がある。破面は赤褐色で気泡少なく、緻密質である。比重大。金属鉄の銹化物を少量含む。

(2) 顕微鏡組織

Photo. 1に示す。組織の大半は①～③で占められる。鉱物組成は、白色粒状で大きく成長したヴ$_{ス}$タイト（Wüstite : FeO）が大量に晶出し、その粒間を淡灰色棒状結晶のフェアライト（Fayalite : $2FeO \cdot SiO_2$）と基地の暗黒色ガラス質スラグが埋める。これらの組織は、鍛錬鍛冶滓特有の晶癖を示すものである。

④、⑤は、金属鉄の銹化したゲーサイト（Goethite : α-FeO・OH）が残存する。該品には、炭化物のパーライト（Pearlite）の析出した痕が認められて、鉄中の炭素（C）量は、0.2%前後であろう。

当鍛冶工房で使用された鉄素材の一部は、このレベルの炭素量であったと想定される。

(3) CMA 調査

Table. 2 に高速定性分析結果を示す。分析箇所は Photo. 2 の SE（2 次電子像）に示したヴ$_{ス}$タイト（Wüstite : FeO）とファイヤライト（Fayalite : 2FeO・SiO_2）の晶出部と基地の暗黒色ガラス質部分である。

検出元素は、基地の鉱物組成に見合ったもので、強度（Count）順に並べると鉄（Fe）、珪素（Si）、アルミ（Al）、カルシウム（Ca）、カリウム（K）、マグネシウム（Mg）、ナトリウム（Na）となる。随伴微量元素は少ない。リン（P）やチタン（Ti）を極く微量含有するので、磁鉄鉱系素材を用いた鍛冶作業での排出滓の可能性をもつ。

Photo. 2 は高速定性分析で検出した元素を視覚化した特性X線像である。白色輝点の集中度が分析元素の存在を表す。

白色粒状結晶のヴ$_{ス}$タイト（Wüstite : FeO）から鉄（Fe）が、淡灰色棒状結晶のファイヤライト（Fayalite : 2 FeO・SiO_2）は珪素（Si）と鉄（Fe）に白色輝点が集中する。また、暗黒色ガラス質部分は、ガラス質成分の珪素（Si）、アルミ（Al）、カルシウム（Ca）、カリウム（K）、マグネシウム（Mg）、ナトリウム（Na）らに白色輝点が表れる。これらの結果から鍛冶に供された鉄素材は、不純物の少ない高純度材だったと推定される。

(4) ビッカース断面硬度

Photo. 1 －⑥にヴ$_{ス}$タイト（Wüstite : FeO）結晶の硬度圧痕を示す。硬度値は、433～442Hv である。ヴスタイトの文献硬度値（日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真及び識別法』1968）が 450～500Hv であり、これに準じるものである。

(5) 化学組成

Table. 3 に示す。南小泉遺跡出土鉄滓は、顕微鏡組織で見たように、ヴ$_{ス}$タイト（Wüstite : FeO）が大量に晶出していたので鉄分は多い。全鉄分（Total Fe）が56.5%で、このうち、酸化第 1 鉄（FeO）が54.4%と酸化第 2 鉄（Fe_2O_3）が20.2%の割合である。

ガラス質成分（造滓成分系：SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋K_2O＋Na_2O）は、21.75%と逆に低めである。該滓の特徴は、随伴微量元素が少なく、特に、二酸化チタン（TiO_2）0.12%、バナジウム（V）0.002%と砂鉄特有成分は少なく、更に硫黄（S）0.030%、銅（Cu）0.002%となる。

鍛冶に供された鉄素材は、砂鉄系は否定されて鉱石系となる。このことは、CMA 調査で述べた如く、磁鉄鉱系の可能性が高い。

参考までに、Table. 3 に仙台市内周辺の 8 ～10世紀末に属する砂鉄系鉄素材を鍛冶した時に排出された滓（精錬鍛冶滓・鍛錬鍛冶滓）や砂鉄製錬滓を提示している。南小泉遺跡出土鉄

Table.2　高速定性分析

```
POS.NO.    HOLDR NO.    X(MM)    Y(MM)    Z(MM)    COMMENT (8 CHARACTER)
           [0 : END]                                [C・R.:SAME]
    3      : 1          40,000   40,000   11,000   MSB-11
POS.NO. 3                                   READY(PAGE)?
  COMMENT : MSB-11
  ACCEL. VOLT. (KV) : 15
  PROBE CURRENT : 5,000E-08 (A)
  STAGE POS. : X 40,000   Y 40,000   Z 11,000              28-JUN-90
```

		CH(1)	TAP			CH(3)	LIF			CH(2)	PET
EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)	EL	WL	COUNT	INTENSITY(LOG)
Y-l	6.45	238	**********	BI-l	1.14	70	**********	TI-K	2.75	123	**********+
RE-m	6.73	302	**********+	PB-l	1.18	64	**********	BA-l	2.78	97	**********
SR-l	6.86	206	**********	TL-l	1.21	67	**********	CS-l	3.03	82	**********+
W-m	6.98	193	**********	HG-l	1.24	68	**********	SC-k	3.15	64	**********
◎ SI-l	7.13	3812	**********+++++	AU-l	1.28	55	**********	I-l	3.15	64	*********
TA-m	7.25	177	**********	PT-l	1.31	62	**********	TE-l	3.29	50	********
RB-l	7.32	147	**********	IR-l	1.35	49	*********	○ CA-k	3.36	810	**********+++++
HF-m	7.54	129	**********	OS-l	1.39	55	**********	SB-l	3.44	66	**********
LU-m	7.84	205	**********	ZN-k	1.44	54	**********+	SN-l	3.60	46	*********
YB-m	8.15	469	**********	CU-k	1.54	41	*********	○ K-k	3.74	391	**********++++
◎ AL-k	8.34	1191	**********++++	NI-k	1.66	35	********	IN-l	3.77	40	*********
BR-l	8.37	164	**********	TM-l	1.73	37	*********+	U-m	3.91	41	*********
ER-m	8.82	77	**********	CO-k	1.79	36	*********	CD-l	3.96	35	********
SE-l	8.99	65	**********+	◎ FE-k	1.94	6028	**********+++++++++	TH-m	4.14	25	********
HO-m	9.20	54	**********+	GD-l	2.05	16	*******	AG-l	4.15	23	*******
DY-m	9.59	42	*********	MN-k	2.10	24	*******+	PD-l	4.37	20	*******
AS-l	9.67	46	*********	EU-l	2.12	15	******	RH-l	4.60	17	*******
○ MG-k	9.89	121	**********+++	SM-l	2.20	10	*****	CL-k	4.73	17	*******
TB-m	10.00	39	*********	CR-k	2.29	10	*****	RU-l	4.85	15	******
GE-l	10.44	22	*******	ND-l	2.37	7	***++	S-k	5.37	10	*****
GA-l	11.29	22	*******	PR-l	2.46	6	****	MO-l	5.41	11	******
○ NA-k	11.91	82	*******++++	V-K	2.50	7	****+	NB-l	5.72	10	*****
**	14.72	8	*****	CE-l	2.56	6	****	ZR-l	6.07	8	****+
F-k	18.32	6	****	LA-l	2.67	8	****+	P-k	6.16	14	*****+

RESULTS:
THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT
　NA　MG　AL　SI　K　CA　FE　検出元素
THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY PRESENT
　P　TI　SE　ND　ER

Phot.2 の SE（2次電子像）の分析結果である。ヴスタイト（Wüstite : FeO）とファイヤライト（Fayalite : $2FeO \cdot SiO_2$）、ガラス質スラグを分析対象としている。検出元素を強度順に並べると次の様になる。鉄（Fe）6028、珪素（Si）3812、アルミ（Al）1191、カルシウム（Ca）810、カリウム（K）391、マグネシウム（Mg）82 である。鉄とガラス質成分で不純物はほとんど認められない。燐（P）、チタン（Ti）が微量含有されているところから磁鉄鉱系の鉄素材の可能性をもつ。

Table.2　南小泉遺跡出土鉄滓（MSB-11）のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果。

Table.3　仙台市周辺出土鉄滓の化学組成

試料番号	遺跡名	出　土　位　置	種　別	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallit Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	二酸化第2鉄 (Fe_2O_3)	二酸化珪素 (SiO_2)	酸化アルミニウム (Al_2O_3)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化カリウム (K_2O)	酸化ナトリウム (Na_2O)	酸化マンガン (MnO)	二酸化チタン (TiO_2)	酸化クロム (Cr_2O_3)	硫　黄 (S)	五酸化燐 (P_2O_5)	炭　素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	造滓成分	Ti/T・Fe	V/T・Fe	注
MSB11	南小泉	SK12,2 層上部，祭祀土壙	鍛錬鍛冶滓	5 C中頃	56.5	0.09	54.4	20.2	14.7	3.33	1.98	0.63	0.72	0.39	0.05	0.12	0.020	0.030	0.22	0.10	0.002	0.002	21.75	0.0012	0.0000	1
MSB 1	下ノ内	SI-28a 区 4層	鍛錬鍛冶滓	9 C	50.8	0.10	53.8	12.7	20.9	6.34	1.09	0.64	0.89	0.41	0.07	0.37	0.019	0.061	0.16	0.16	0.007	0.009	37.03	0.0043	0.0001	2
2	〃	SI-28　埋土	〃	〃	56.1	0.07	54.2	20.0	12.3	4.36	0.82	0.49	0.61	0.30	0.06	0.38	0.024	0.067	0.13	0.13	0.006	0.005	18.88	0.0041	0.0001	〃
2A	〃	SI-28　埋土	〃	〃	9.36	0.10	2.65	10.3	58.5	17.1	2.75	1.73	2.21	1.69	0.17	0.68	0.046	0.049	0.33	0.13	0.010	0.007	83.98	0.043	0.0011	〃
3	〃	SI-28　埋土	精錬鍛冶滓	〃	47.3	0.13	46.8	15.4	20.1	5.42	1.22	1.04	0.64	0.37	0.14	4.99	0.039	0.055	0.26	0.29	0.039	0.005	28.79	0.063	0.0008	〃
4	〃	SI-28　埋土	〃	〃	49.0	0.52	51.7	11.8	18.9	5.32	1.21	1.02	0.74	0.40	0.13	5.20	0.050	0.085	0.23	0.19	0.044	0.008	27.59	0.061	0.0009	〃
5	〃	SI-28　埋土	鍛錬鍛冶滓	〃	56.5	0.24	62.5	10.9	17.1	4.81	0.80	0.54	0.53	0.32	0.09	0.24	0.023	0.031	0.44	0.10	0.046	0.003	24.10	0.0025	0.0008	〃
6	〃	SI-28　埋土	〃	〃	13.2	0.12	5.89	12.2	52.9	17.6	2.04	1.56	2.71	1.24	0.20	0.99	0.041	0.025	0.25	0.18	0.016	0.007	78.05	0.045	0.0012	〃
7	〃	SI-28 Pit2 埋土	粘土	〃	5.79	0.06	1.84	6.15	67.3	17.7	0.82	0.58	1.07	0.87	0.03	0.82	0.044	0.005	0.05	0.13	0.008	0.001	88.34	0.085	0.0014	〃
D-881	郡山		精錬鍛冶滓	8 C代	50.3	—	57.2	8.36	18.40	4.35	0.97	0.70	—	—	0.09	1.74	0.03	0.016	0.20	0.08	0.027	Nil	24.42	0.021	0.0003	3
D-882	〃		鍛錬鍛冶滓	〃	60.6	—	62.5	16.53	8.40	1.91	0.36	0.25	—	—	0.04	0.37	0.02	0.011	0.12	0.15	0.009	Nil	10.92	0.0037	0.0001	〃
D-883	〃		砂鉄製錬滓	〃	50.8	—	54.9	11.63	9.63	3.21	0.70	1.18	—	—	0.23	10.04	0.06	0.013	0.21	0.09	0.012	Nil	14.77	0.1185	0.0001	〃
D-884	〃		精錬鍛冶滓	〃	52.0	—	53.0	15.34	15.64	3.42	0.67	0.52	—	—	0.07	1.25	0.02	0.015	0.15	0.17	0.019	Nil	20.25	0.0144	0.0002	〃
G-881	黒森山	1 号土壙	砂鉄製錬滓	10C頃	37.0	—	44.5	3.541	15.60	4.78	2.38	2.61	—	—	0.95	23.10	0.055	0.029	0.032	0.09	0.18	0.005	25.37	0.3742	0.0027	4
G-882	〃	〃	〃	〃	47.1	—	50.9	10.79	8.26	3.51	1.09	1.96	—	—	0.83	21.93	0.074	0.027	0.069	0.10	0.27	0.006	14.82	0.2791	0.0032	〃
G-883	〃	7 号土壙	〃	〃	31.0	—	37.0	3.20	27.0	5.89	2.17	2.44	—	—	0.96	19.90	0.062	0.023	0.046	0.10	0.28	0.007	37.50	0.3848	0.0051	〃
G-884	〃	3 号土壙	〃	〃	21.48	—	10.85	17.81	43.0	11.62	1.70	0.99	—	—	0.31	6.32	0.028	0.041	0.13	0.23	0.099	0.009	57.31	0.1764	0.0025	〃
G-885	〃	4 号土壙	〃	〃	38.0	—	46.0	3.21	20.20	4.42	1.79	2.19	—	—	0.83	19.10	0.073	0.029	0.076	0.19	0.25	0.006	28.60	0.3013	0.0037	〃
G-886	谷津 B	不明	〃		28.9	—	34.8	2.61	23.64	7.67	3.75	4.36	—	—	0.72	14.19	0.045	0.028	0.13	0.03	0.21	0.006	39.42	0.2943	0.0041	〃
G-887	蒲沢山	表面採取	〃		32.1	—	38.2	3.36	24.66	5.98	2.00	4.16	—	—	0.88	14.51	0.047	0.034	0.099	0.06	0.24	0.007	36.80	0.2709	0.0042	〃
G-888	芦　見	〃	〃		33.0	—	40.0	2.73	25.52	6.74	2.53	4.47	—	—	0.94	9.35	0.045	0.035	0.11	0.02	0.23	0.012	39.26	0.1698	0.0039	〃
G-8811	谷津B	不明	羽山発掘滓スラグ		7.93		6.90	3.67	64.5	16.32	1.43	0.83	—	—	0.14	2.37	0.010	0.005	0.074	0.04	0.037	0.008	83.08	0.1791	0.0026	〃

注）1．大澤正己「南小泉遺跡祭祀土壙出土鉄滓の金属学的調査」『南小泉遺跡発掘調査報告書』（仙台市埋蔵文化財調査報告書第140集）仙台市教育委員会　1990
2．仙台市教育委員会　篠原信彦氏よりの依頼分析　平成２年度報告書作成予定
3．大澤正己「郡山遺跡出土鉄滓の金属学的調査」『郡山遺跡』（仙台市埋蔵文化財調査報告書第156集）仙台市教育委員会　1993
4．仙台市教育委員会　1988年度調査依頼分，未報告分

Table.4　古墳時代前・中期の鉱石系鍛錬鍛冶滓出土例

遺跡名	所在地	指定年代	羽口出土状況	鍛冶炉検出	鉱物組成	化学組成(%)				注
						Total Fe	CaO	TiO_2	Cu	
博多59次	福岡市祇園	4C初	有	有	Wüstite +Fayalite	59.5	1.09	0.13	0.040	1
松木	福岡県那珂川町	4C中頃			Wüstite +Fayalite	48.8	3.95	0.11	0.004	2
松木A	福岡県那珂川町	5C前半			〃	45.9	3.99	0.15	0.016	2
野坂一町間	福岡県宗像市	5C中頃			〃	43.7	1.85	0.30	0.010	3
小戸	兵庫県川西市	4C後半	有		〃	41.3 ～51.3	0.7 ～1.37	0.15 ～0.24	0.016 ～0.079	4
雨流	兵庫県三原郡三原市	5C中葉	有		〃	39.4 ～67.0	0.9 ～2.14	0.14 ～0.18	0.039 ～0.19	5
大県	大阪府柏原市	5C末～6C	〃	有	〃	53 ～66	0.32 ～1.53	0.083 ～0.27	0.003 ～0.007	6
大和川今池	〃 松原市	5C前半			〃	47	1.14	0.84	0.005	7
土師27-1	〃 堺市	5C後半			〃	27.8 ～42.7	1.9 ～3.8	0.18 ～0.37	0.012 ～0.020	7
陵南北	〃 堺市	〃		有	〃	46 ～55	0.59 ～2.0	0.23 ～2.1	0.019 ～0.043	8
森	〃 交野市	5C後～6C前	有	有	〃	43.06 ～56.6	1.8 ～3.34	0.14 ～0.25	0.001 ～0.016	9
長瀬高浜	鳥取県羽合町	4C末～5C初			〃	57.7	4.44	0.14	0.008	10
行人塚	埼玉県大里郡江南町	5C初～中	高坏脚転用羽口	有	〃	44.0 ～62.0	2.8 ～5.7	0.23 ～0.51	0.006 ～0.010	11
御蔵山中	〃 大宮市	5C中葉	〃	〃	〃	34.0 ～62.0	2.7 ～8.8	0.54 ～1.29	0.008 ～0.063	12
御蔵台	〃 大宮市	5C中葉			〃	49.0 ～57.0	3.70 ～6.0	0.40 ～0.59	0.010 ～0.026	12
中山	千葉県四街道市	5C前半	高坏脚転用羽口	有	〃	49.0 ～63.0	0.42 ～2.1	0.20 ～0.58	0.005 ～0.065	13
南小泉	宮城県仙台市	5C中頃			〃	56.5	1.98	0.12	0.002	14
永作	福島県郡山市	5C後半		有	〃	39.0 ～53.0	1.4 ～2.4	0.24 ～0.44	0.013 ～0.030	15

滓は、これらに比べて二酸化チタン（TiO_2）やバナジウム（V）は極めて少なく、特に、Ti／Total Fe の比が0.0012と低値である。該品は成分的にみて、鉱石系鍛錬鍛冶滓に位置づけられる。

4．まとめ

南小泉遺跡出土鉄滓は、祭祀土壙から検出されて5世紀中頃に比定される。鉱物組成は、ヴュスタイト（Wüstite：FeO）主体、化学組成は全鉄分（Total Fe）56.5%、ガラス質成分（造滓成分系：$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO+K_2O+Na_2O$）21.75%、随伴微量元素は低めで、鉄器鍛造加工時に排出された鍛錬鍛冶滓（小鍛冶滓）に分類される。二酸化チタン（TiO_2）0.12%、バナジウム（V）0.002%と低めから鉱石系鉄素材が想定される。CMA 調査で鉄滓から微量の

リン（P）、チタン（Ti）を検出するので磁鉄鉱の可能性がある。

鉄滓を生成した鍛冶加工時の鉄素材は国内産か、大陸側からの搬入品が注目される。調査鉄滓は1点のみで、断定はできないが、随伴微量元素が少なく、純度の高い鉄素材が使用されているので、大陸産と考えたい。

Table. 4には、4～5世紀における列島内での鍛冶滓の出土状況を示している。北は宮城県の南小泉遺跡から、南は福岡県までの祭祀土壙や鍛冶工房からの出土品である。これらは、鉱石系鉄素材の鍛冶作業時の鉄滓に分類される。

現在、国内の鉄生産（製錬：砂鉄もしくは鉱石を木炭を使って還元する工程）の開始時期については定説がない。弥生後期説、古墳時代5世紀説、6世紀後半説らが議論されている。列島内の5世紀代は、技術革新の時期である。

筆者は、須恵器の製作と鉄生産はほぼ同時期からの開始と想定している。製鉄原料の木炭窯と須恵器焼成登り窯は同系窯業技術と考えるからである。

だが、5世紀の鉄生産は初期段階で、国内需要を満たすものではなく、鉄素材の大半は大陸側に依存したであろう。この反映がTable. 4に提示した鍛冶滓の成分系である。鉄素材は国内産はなく、大陸産ではなかろうか。国内産鉄素材であれば、砂鉄系の場合二酸化チタン（TiO_2）やバナジウム（V）は高めとなり、鉱石系はリン（P）や硫黄（S）の有害元素が多くなるであろう。

しかし、鉄素材の産地同定はひとまず置いて、南小泉遺跡周辺には、5世紀中頃に鍛冶炉が存在し、純度の高い鉄素材を用いて鉄器鍛造加工がなされたことが実証できた。

Teble.4 の参考文献

註1　福岡市教育委員会発掘調査　報告書準備中

註2　大澤正己「松木遺跡出土鉄滓の金属学的調査」『松木遺跡』Ⅰ（那珂川町文化財調査報告書第11集）那珂川町教育委員会　1984

註3　原　俊一他『埋蔵文化財発掘調査報告書　1984年度』（宗像市文化財調査報告書　第9集）宗像市教育委員会　1985

註4　兵庫県川西市教育委員会報告書準備中

註5　大澤正己「雨流遺跡出土椀形鉄滓と鍛造剝片の金属学的調査」『雨流遺跡』兵庫県教育委員会　1990

註6　大澤正己「大県遺跡及び周辺遺跡出土鉄滓・鉄剣の金属学的調査」『大県・大県南遺跡～下水道管渠埋設工事に伴う～』大阪府柏原市教育委員会　1984

註7　大澤正己「大阪府所在土師遺跡27－1街区、大和川、今池遺跡、高師浜遺跡出土鉄滓の調査」『大和川・今池遺跡』Ⅲ　大和川・今池遺跡調査会　1981

註8　大澤正己「新日本製鉄研修センター内出土鉄滓・鉄製品の科学分析調査」『土師遺跡発掘調査報告書』その1　堺市教育委員会　1976

註9　交野市教育委員会『森遺跡』Ⅰ、Ⅱ　1989、1990　鉄滓分析は未報告

註10　鳥取県教育委員会提供試料未発表

註11　大澤正己「本田・東台Ⅰ、Ⅱ遺跡出土鉄滓の金属学的調査」『本田東台　上前原』（江南町文化財調査報告書第8集）埼玉県大里郡江南町教育委員会　1988

註12　大澤正己「御蔵山中遺跡出土鉄滓と鉄器の金属学的調査」『御蔵山中遺跡』大宮市遺跡調査会　1989

註13　大澤正己「中山遺跡鍛冶工房跡出土製鉄関連遺物の金属学的調査」『中山遺跡・水流遺跡・東原遺跡』（財）印旗郡市文化財センター発掘調査報告書　第11集　印旗郡市文化財センター　1987

註14　大澤正己「南小泉遺跡祭祀土壙出土と鉄滓の金属学的調査」『南小泉遺跡』（仙台市埋蔵文化財調査報告書第140集）仙台市教育委員会　1990

註15　福島県郡山市教育委員会調査。福島県文化センター寺島文隆氏経由入手試料未発表。

第５章　まとめ

１．縄文時代の土器が初めて出土し(第17次調査区)、今後本遺跡において包含層や遺構の存在が期待される。

２．弥生時代は、青木畑式併行から天王山式の可能性がある時期までの土器が出土した。特に、第18次調査区の深堀トレンチからは完形に近い甕が出土し、その出土層は埋没河川内とみられるが、従来「地山」と呼んできた黄褐色粘土質シルト層より下位に相当する可能性が出てきた。今後、検討すべき問題点である。

３．古墳時代は、中期～後期の住居跡32軒・竪穴遺構２基・土坑21基・溝８条・畝状遺構２期・性格不明遺構（祭壇関係？）３基を検出した。石製模造品製作工房を兼ねる住居跡、土器製作用と考えられる粘土溜めをもつ竪穴遺構、鉄滓の発見・分析による鉄器生産が明らかになったことから、第16次調査区付近は中期集落内の生産部門を担った空間と考えてよい。上屋の建築部門材の材質・小型倣製鏡・祭祀に関連するとみられる土器群・古手の黒色処理を施す土器、住社式の良好な土器群など注目すべき遺物も多い。

また、今回出土した土器と過去の調査出土土器を検討し、５～６世紀の土器群の変遷試案を示し、本遺跡が第２段階（氏家編年の引田式期）が主体となる集落跡であることを明らかにした。なお、型式学的先入観を排除するよう務めたが、土器群のグルーピングと変遷については不充分なものである点は否めず、今後さらに検討の必要を感じる。

４．奈良・平安時代の遺構・遺物は希薄であり、今回の調査でもこの傾向は変わらない。第18次調査で、僅かに住居跡・畝状遺構・溝が検出できた。注目したい点は、住居跡では須恵器の所有が土師器に対して極めて多い点、天地返しを受けない住居跡は、壁高70cm前後あったという点である。

５．中世では、12世紀後半より16世紀の遺構の存在とその変遷を明らかにできた。本遺跡では、建物跡・井戸・土坑という遺構構成を屋敷跡と認識し、出土遺物から遅くとも12世紀後半には成立したと考えた。この屋敷跡には、周囲を区画する溝（堀）の有無があることも判明している。このような屋敷跡を構成する遺構の組成が、中世・近世を通じて屋敷の基本的な単位となるものと考えられる。

また、第16次調査区では城館跡の一部が発見され、構造的な特徴が明らかになった。特に、屋敷跡Ｂから城館跡への構造的変化を知ることができたものと思う。一方、この城館跡は、「古城書上」など江戸時代の記録にある「小泉村、古城」の記載や当地の領主である国分氏などとの関連が、今後の追求すべき課題であろう。

遺物は、国産や中国の陶磁器・土器の組成を明らかにできたものと思う。県内初の楠葉型瓦

器や東濃産山茶碗の出土は注目される。土師質土器（かわらけ）については、県内ではまだ編年が確立されていないことから特徴と変遷を明らかにするよう努めたが、試案の段階であり検討すべき点も多い。この種の土器は、領主が城館に職人を抱え込んだり、都市に住まわせて生産させたり、あるいは、商人・職人が売り歩いた可能性がある。したがって、今回示した変遷試案が他の遺跡にどの程度普遍化できるかどうかは、現状では不明である。

6．近世は、江戸時代初期の遺構・遺物が比較的纏って検出されている。江戸時代初期の遺構は、若林城下町（寛永年間）の一部と考えられる。第16次調査区では、中世城館の外堀を掘り直し再利用している。また、第17次調査区では中世以来の堀を城下町期に埋め立てている。このような特徴から、近世初期に中世以来の堀の改変が進行したものと考えられる。第17次調査区では、屋敷跡の一部と考えられる建物跡や道路の側溝と予想される溝を検出したが、過去の調査を含めてみると、屋敷の造営時には盛土整地を行っていない点や瓦葺建物はほとんどなかったとみられる点が特徴であろう。

近世の建物では、城下町期とその後の陶磁器組成を明らかにすることができた。したがって、陶磁器の使用の実態や流通の問題など今後の解明すべき課題を究明する一助となろう。

写　真　図　版

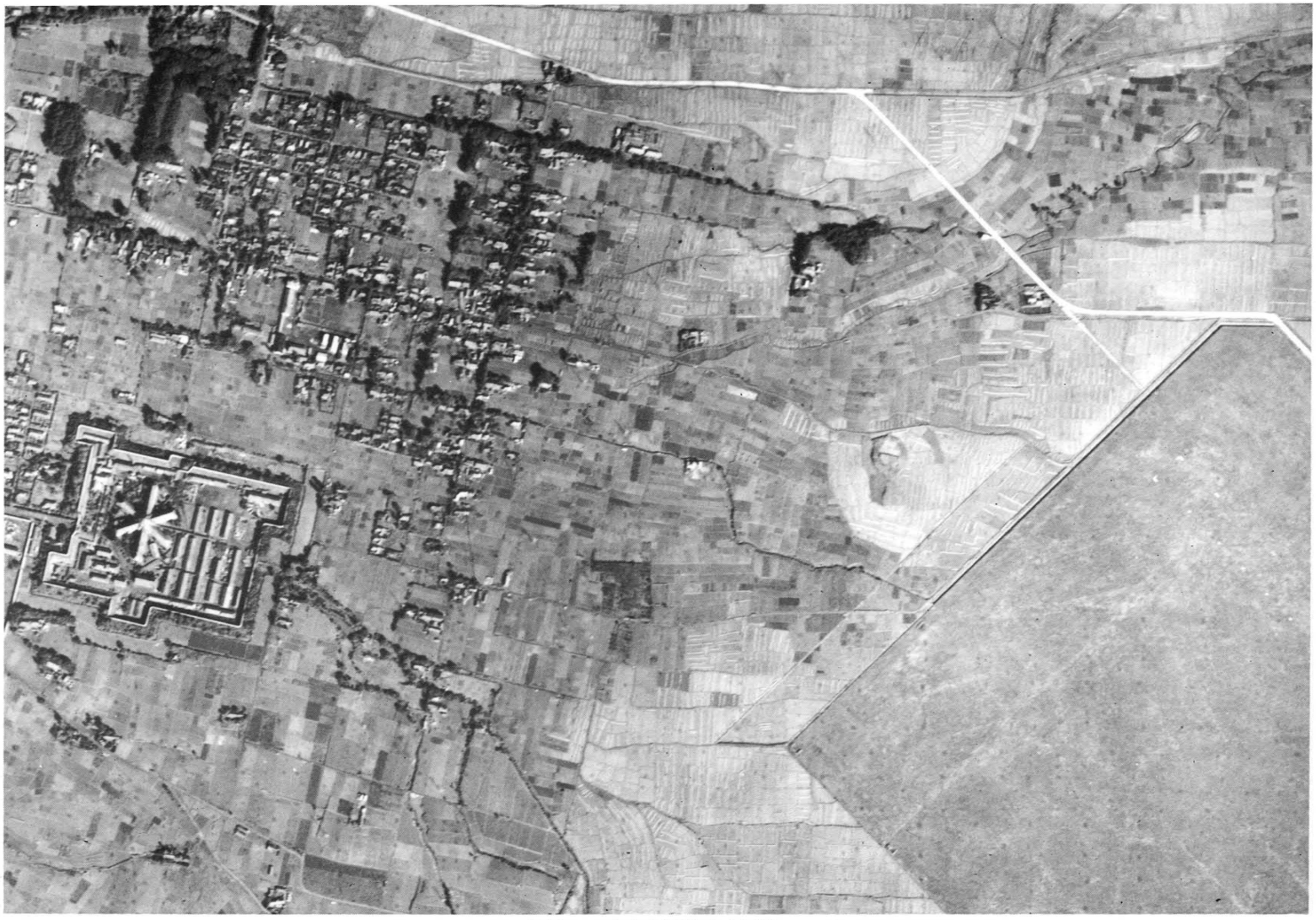
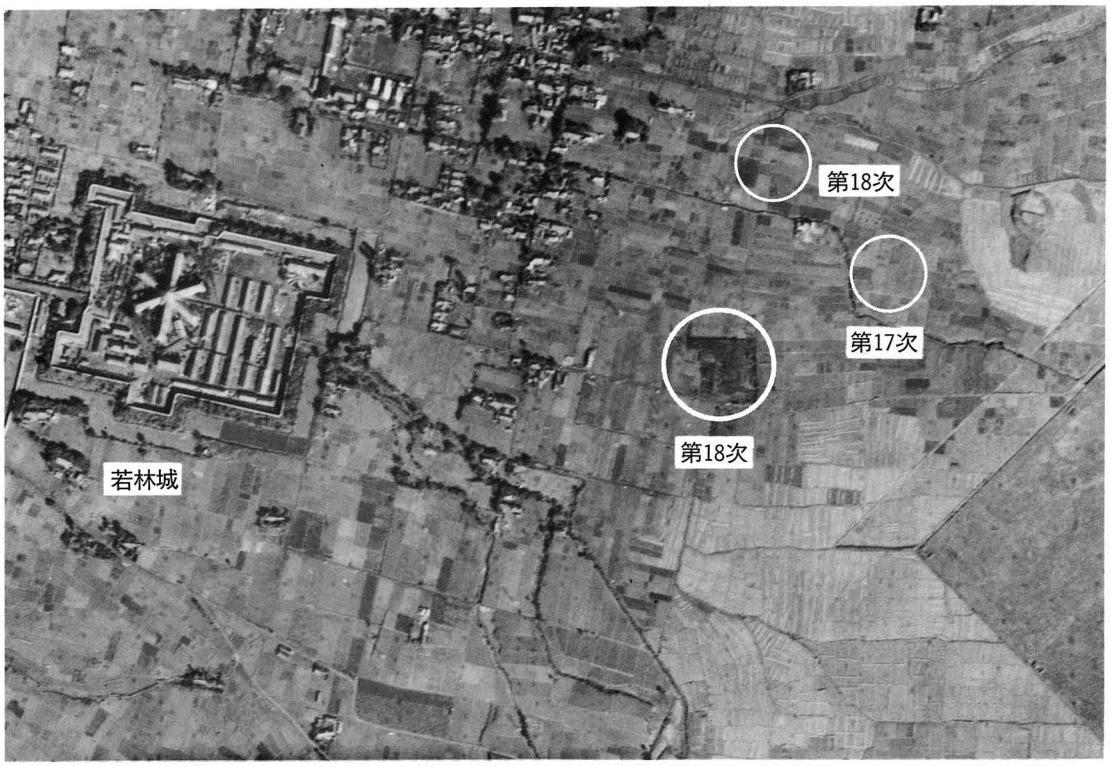
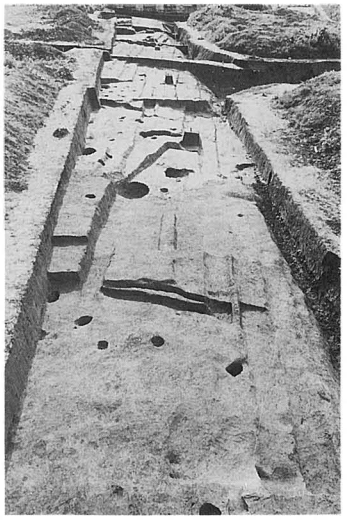


写真１　南小泉遺跡空中写真　　建設省国土地理院（1947）

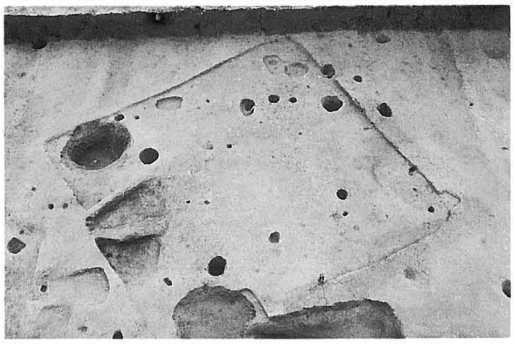


南小泉遺跡空中写真（1947）　建設省国土地理院

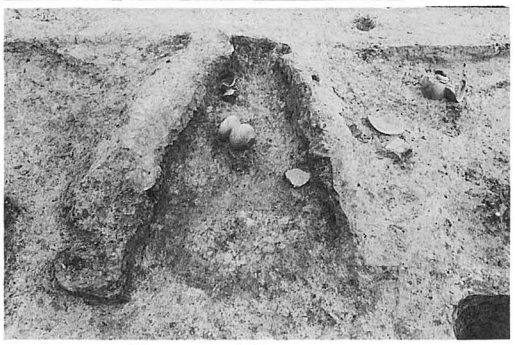
調査前近景
（右手の高まりは土墨痕跡）



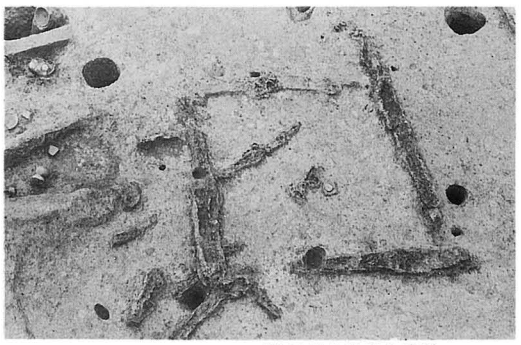
Ⅱ～Ⅳ区全景



SI01全景

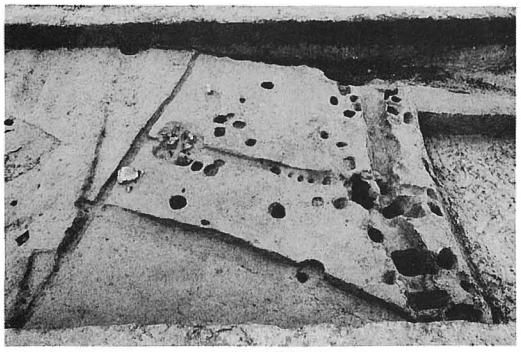


SI01カマド全景

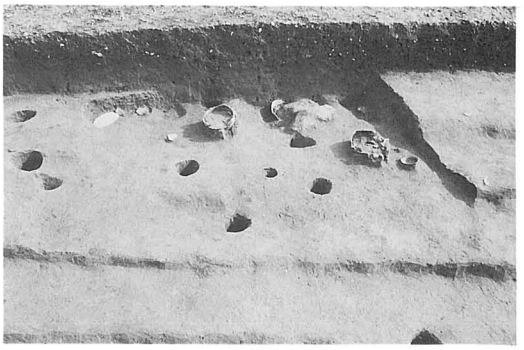


SI01炭化材出土状況

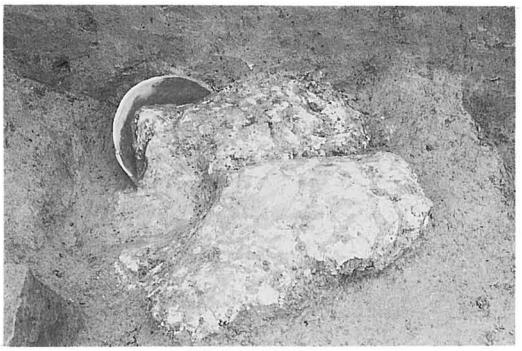
写真２　第16次調査遺跡全景・検出遺構



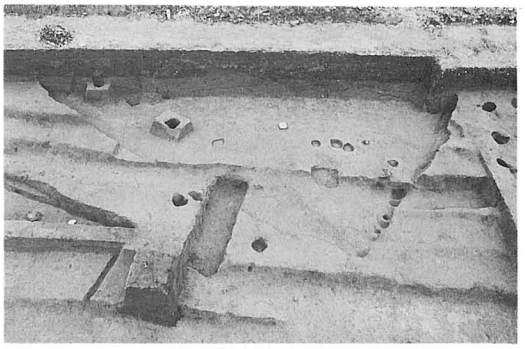
S I 02・03全景



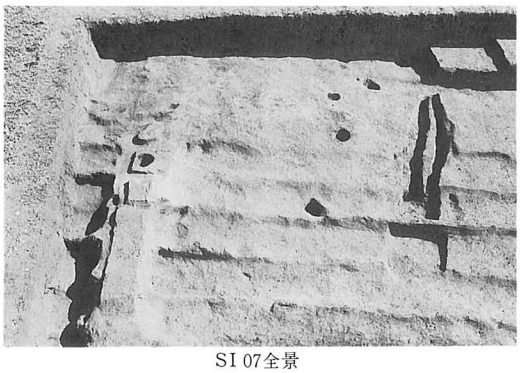
S I 05全景



SI 05粘土溜土坑



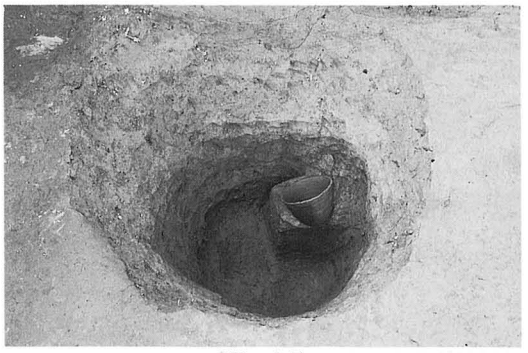
SI 06全景



SI 07全景

SI 08全景

SI 10カマド煙道部



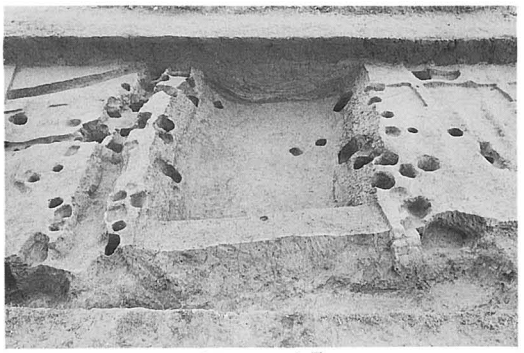
SK 03全景

写真３　第16次調査検出遺構

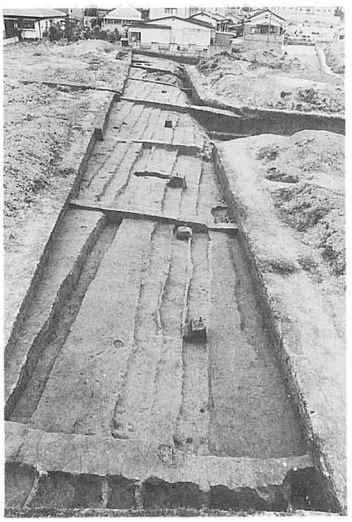
SK 06全景

SK 12全景

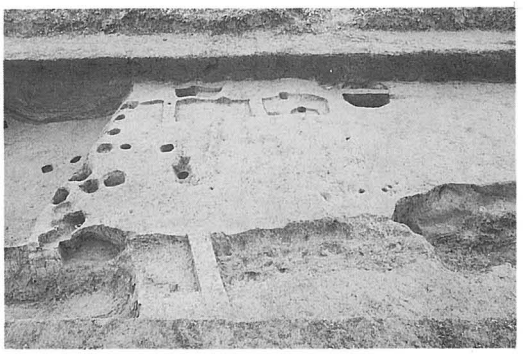
SK 14全景



SD 04・05全景

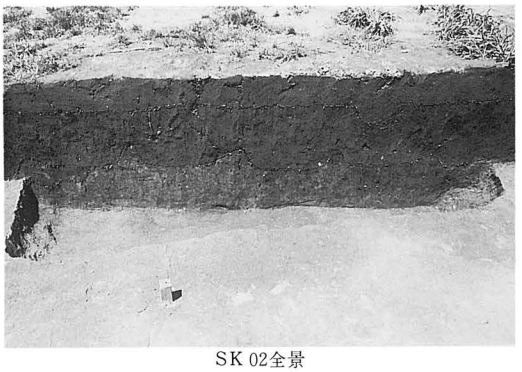


SA 01
（Ⅳ区→Ⅱ区）
溝群は天地返し



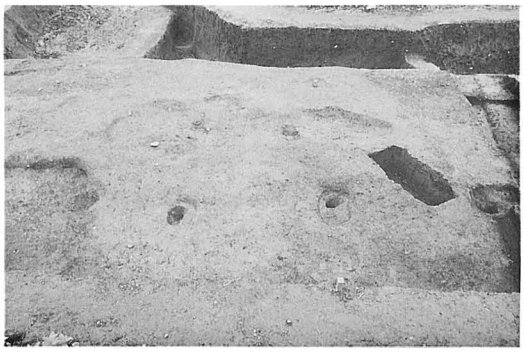
SD 02浅溝部（入口か）

SD 02全景



SK 02全景

写真４　第16次調査検出遺構



SB 01・SX 02全景

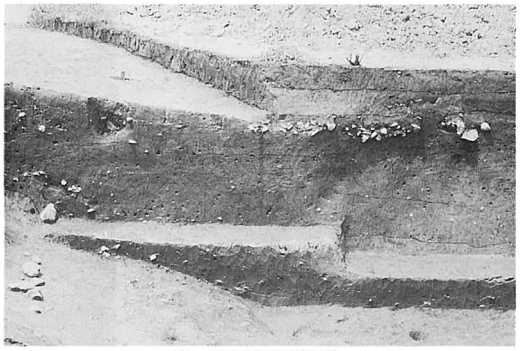
土墨断面（Ⅱ区）

SD 01Ⅴ区全景（橋脚跡）

SD 01南岸
検出状況

SD 15確認状況（土墨下）

SD 01Ⅱ区全景



SD 01Ⅴ区西壁断面

SD 01北壁ピット群（Ⅴ区）

写真５　第16次調査検出遺構

SD 08全景（トレンチ内）

Ⅵ区柱穴群

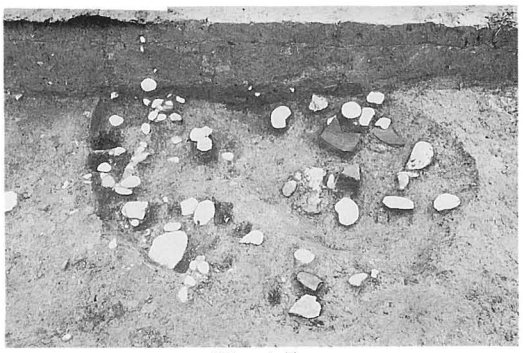
SD 13全景（Ⅵ区）

Ⅶ区トレンチ全景（SD 01）

Ⅷ区トレンチ配石遺構

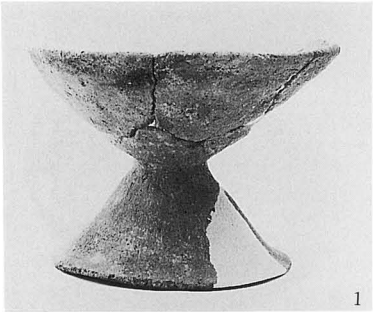
Ⅷ区トレンチ下層面

Ⅷ区トレンチ（SK 05・08）



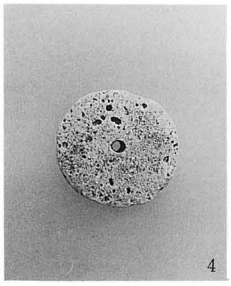
SK 05全景

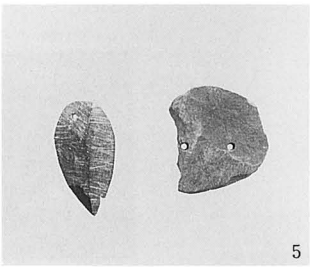
写真６　第16次調査検出遺構


1

2

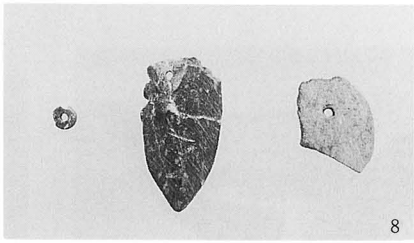
3


4


5

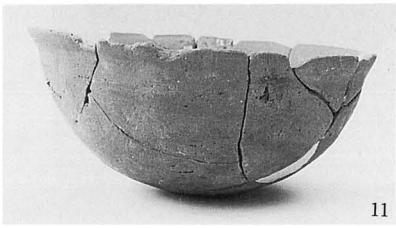
6

7


8

9

10


11

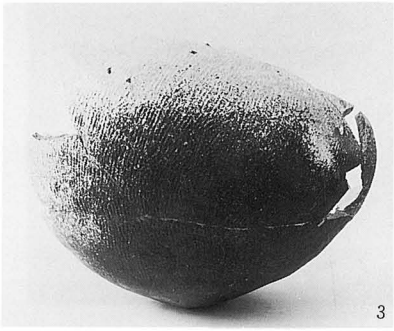
12

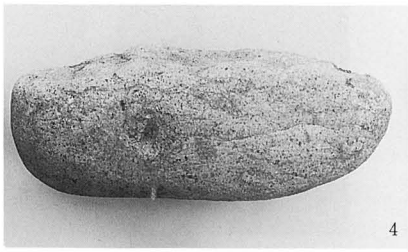
13

写真７　第16次調査出土遺物　　1～5：SI 01　9～13：SI 05

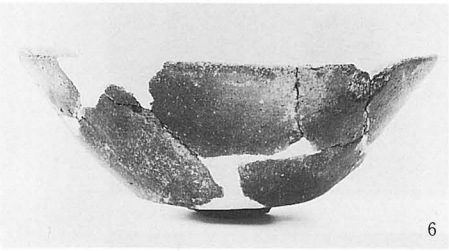
1

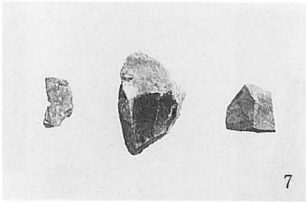
2


3


4

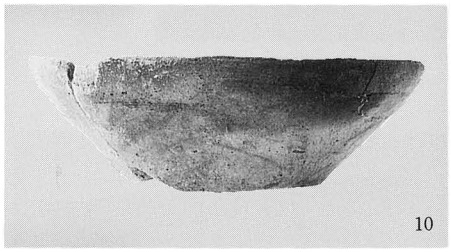
5


6

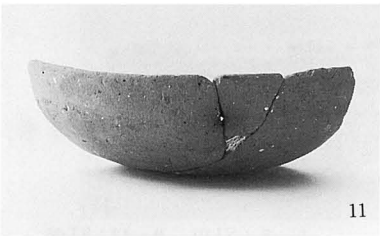

7

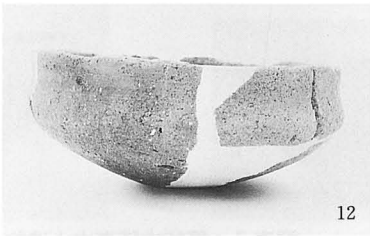
8
（刀子）

9


10

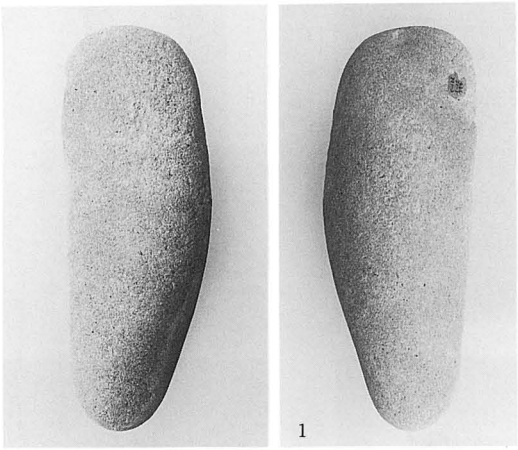
1～4：SI 05
5～8：SI 06
9～13：SI 07

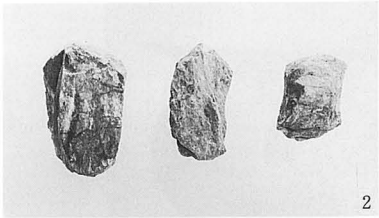

11

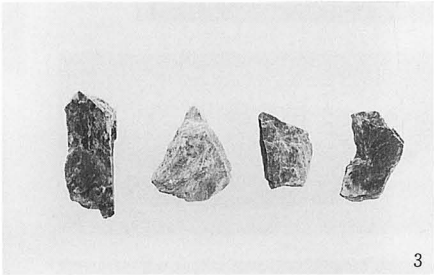

12

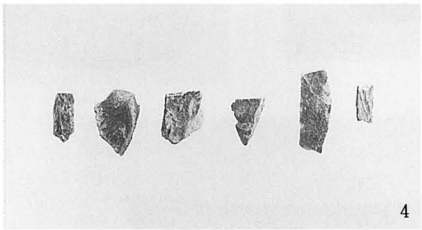
13

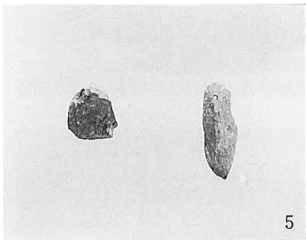
写真８　第16次調査出土遺物





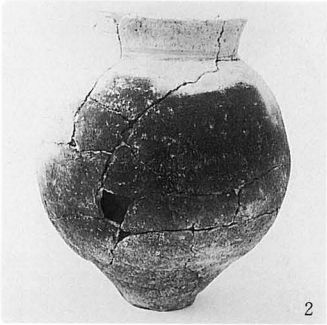


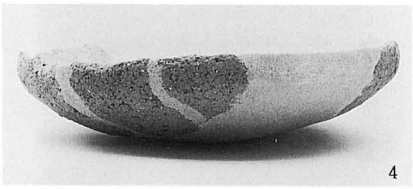


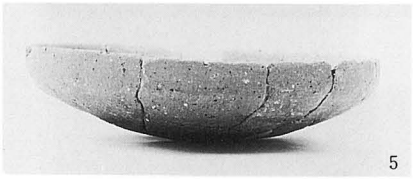


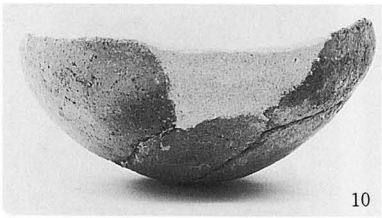
1～5：SI 08　7～9：SI 11
6　：SI 10　10　：SK 03

写真９　第16次調査出土遺物









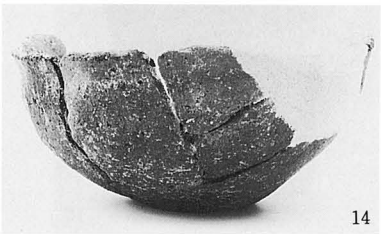
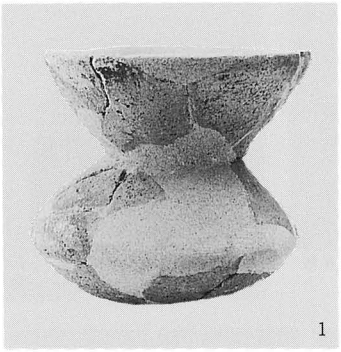
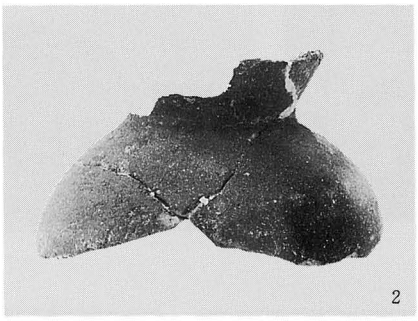


写真10　第16次出土遺物

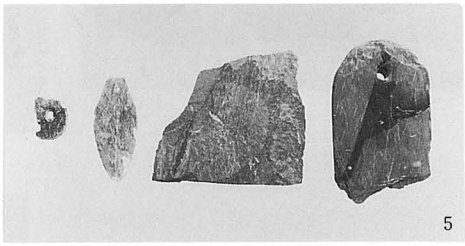
1～3：SK 06　4～16：SK 12

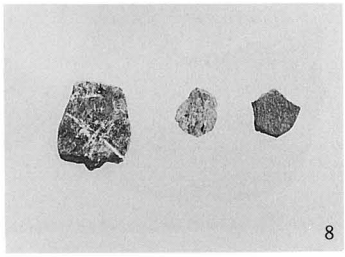

1

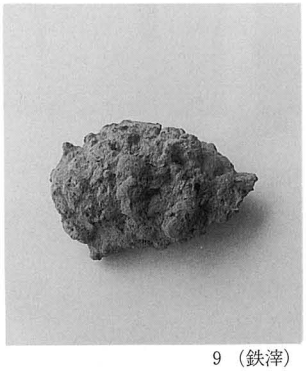

2

4

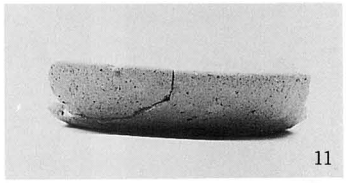
3

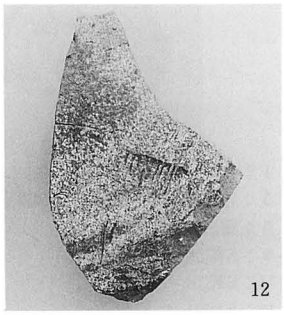

5

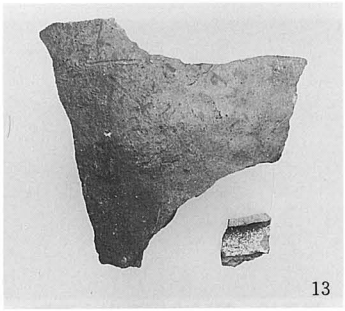

8

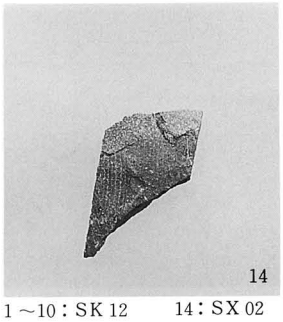

9（鉄滓）

10（鉄滓）
分析に使用


11

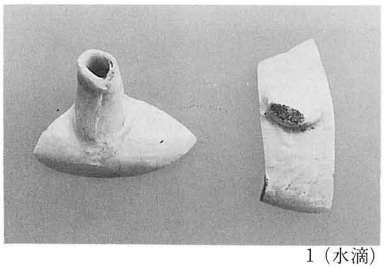

12


13

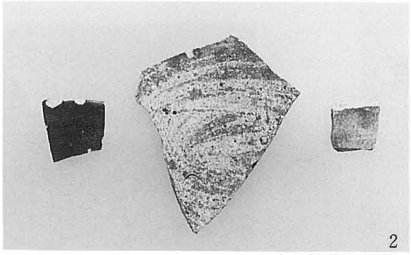

14

1～10：SK 12　14：SX 02
11～13：Ⅱ区土壙

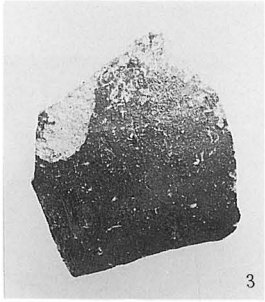
写真11　第16次調査出土遺物



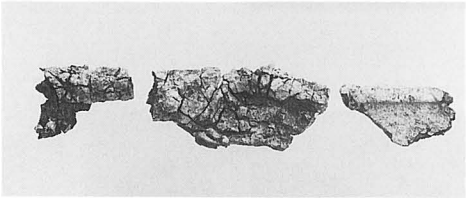
1（水滴）



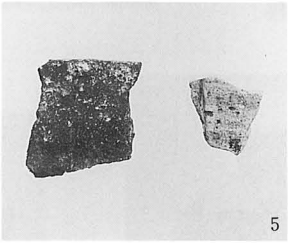
2
左端は瓦器



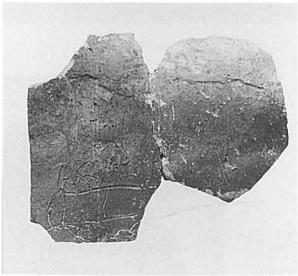
3



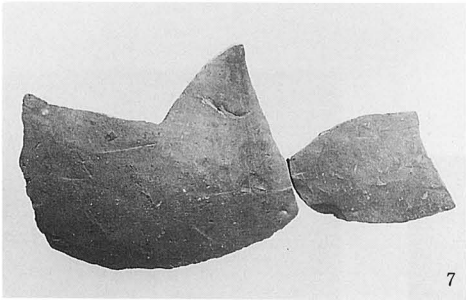
4（鉄鍋）



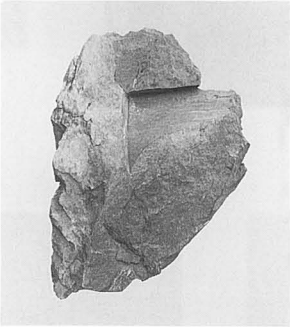
5



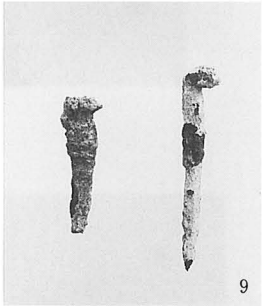
6（線刻画）



7

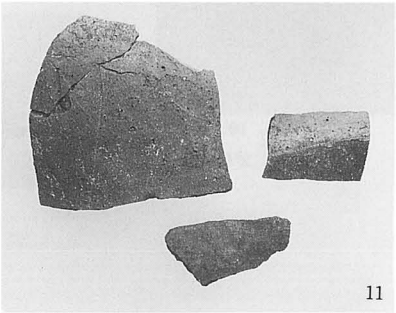


8（硯）

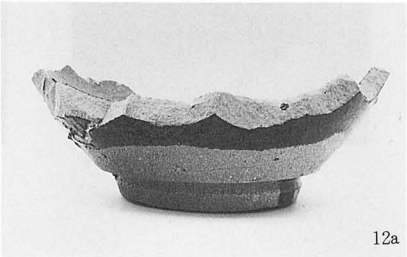


9

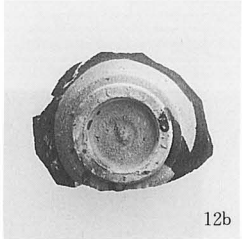
10



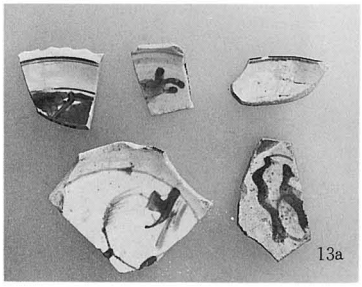
11



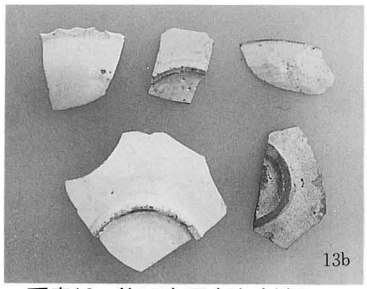
12a



12b



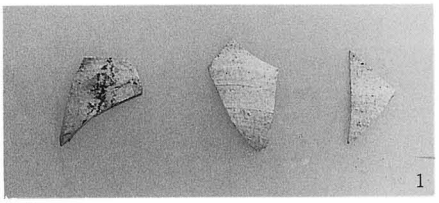
13a

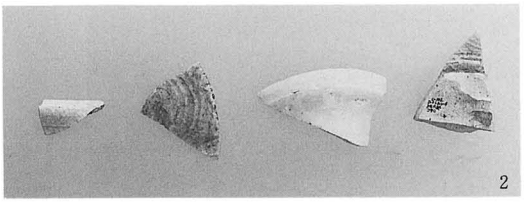


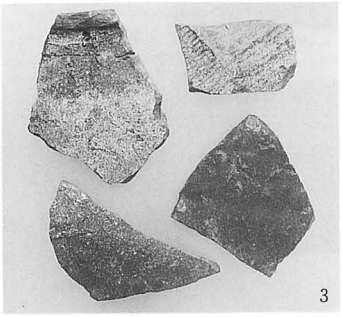
13b

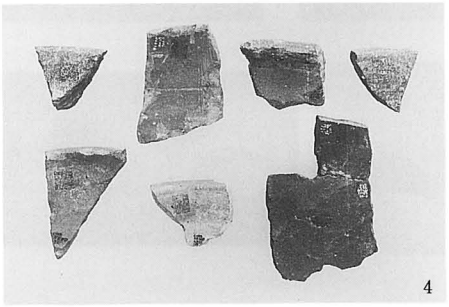
写真12　第16次調査出土遺物

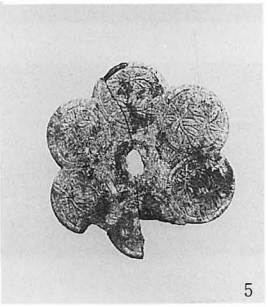
1：Ⅳ区・Ⅷ区出土
2・3：Ⅷ区配石遺構（2の左端はⅣ区出土）
4・5：Ⅷ区
6～9：SK 05
10・11：SK 10
12・13：SD 01


1（山茶碗）

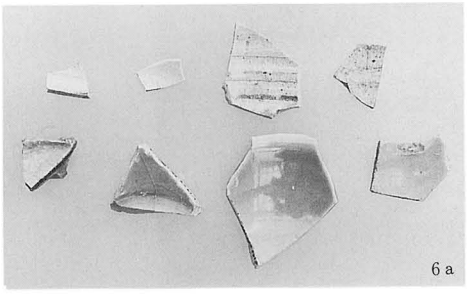

2

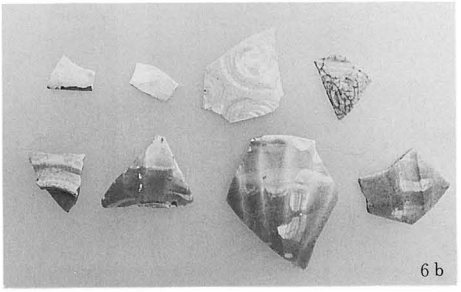

3

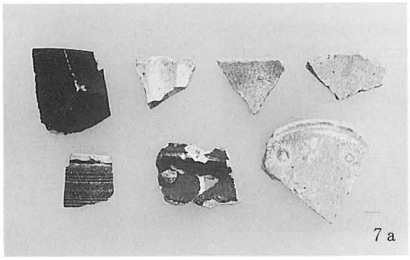

4

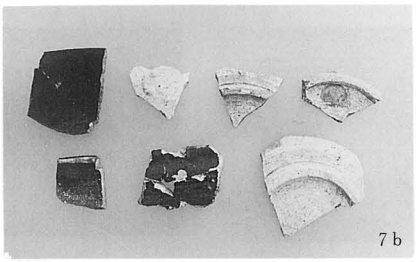

5

銅製飾金具（渡金）

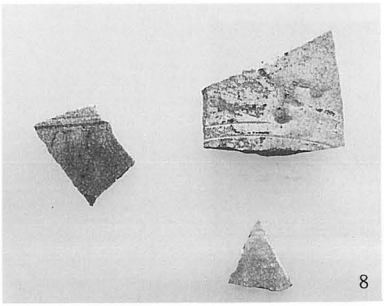

6 a

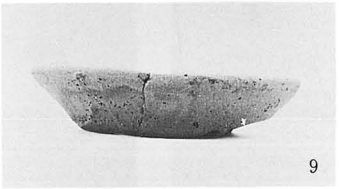

6 b

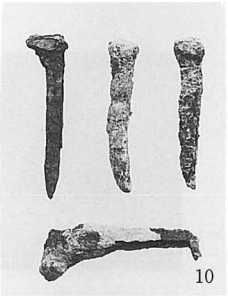

7 a

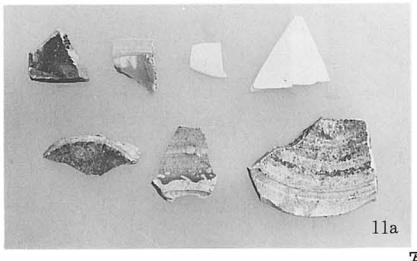

7 b

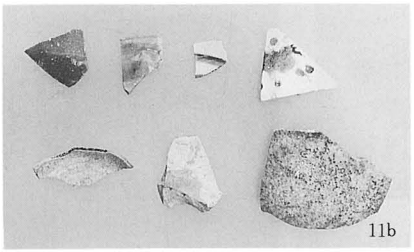
1：Ⅱ区土墨・Ⅳ区
2～5：Ⅲ・Ⅳ区天地返し
6：Ⅳ区天地返し
7・11：表採
8：Ⅵ区５層
9・10：Ⅳ区天地返し
12：Ⅴ区ⅠC層


8


9

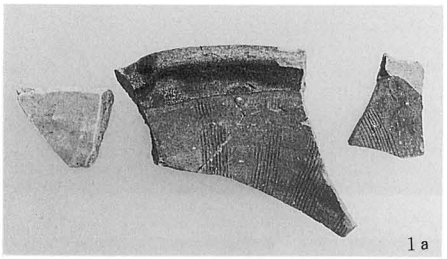

10

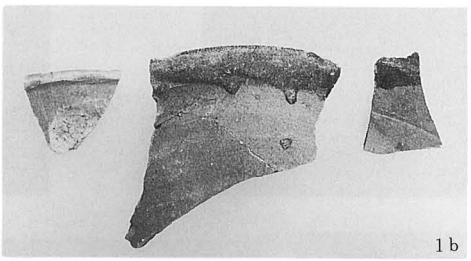

11a

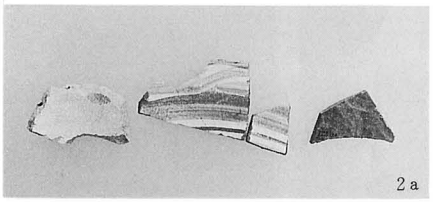

11b

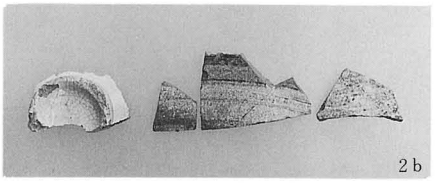
12

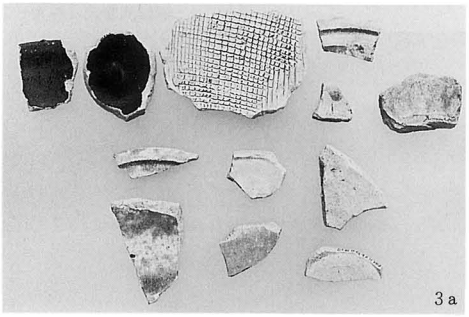
写真13　第16次調査出土遺物

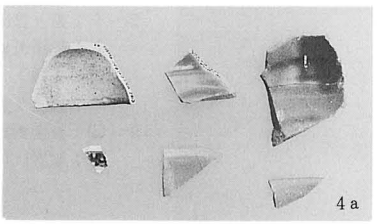


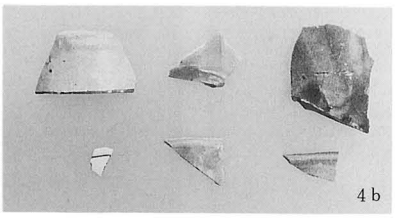


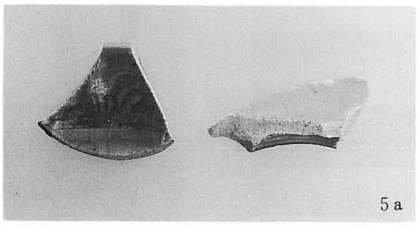


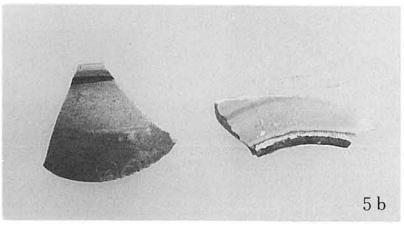


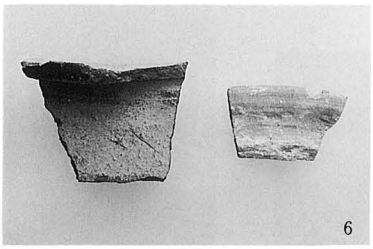


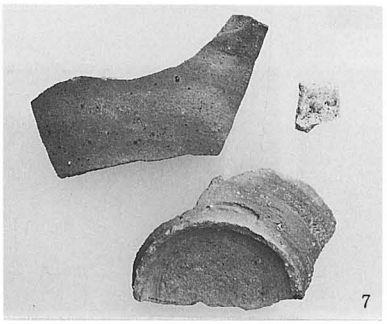






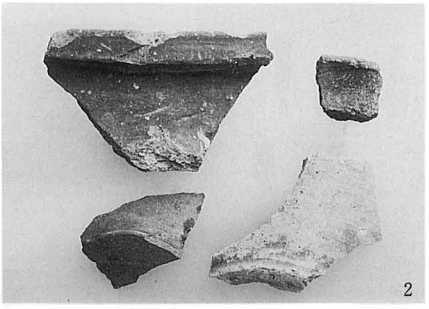


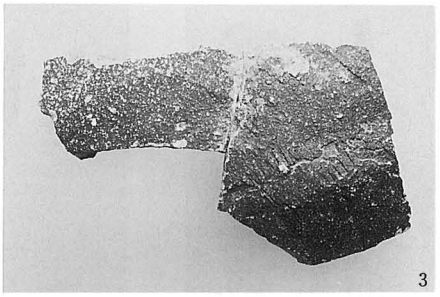


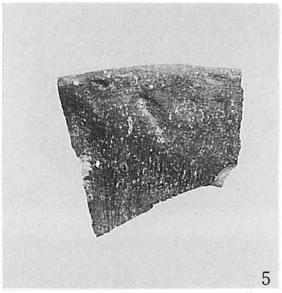


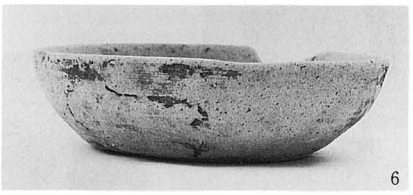
1～4 ：SD 01埋土
5 ：SD 01（左溝底・右11層）
6～8 ：SD 01埋土

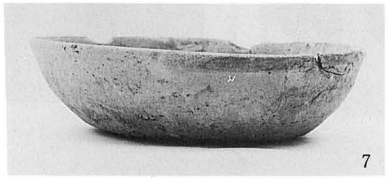
写真14　第16次出土遺物

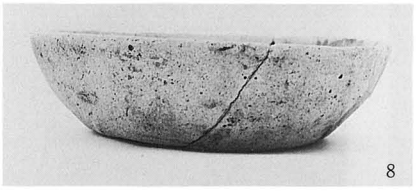


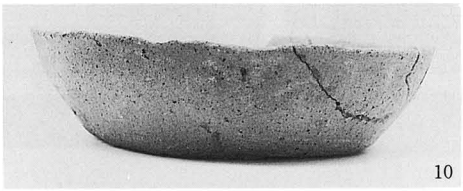


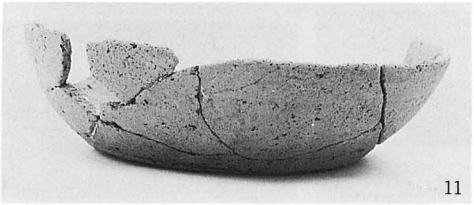


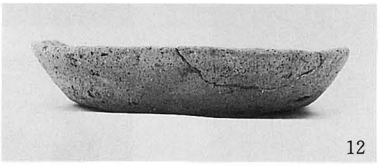


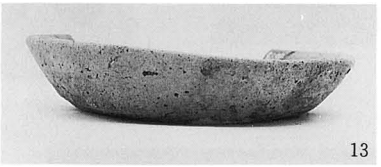


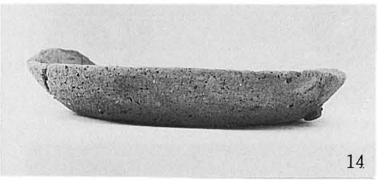


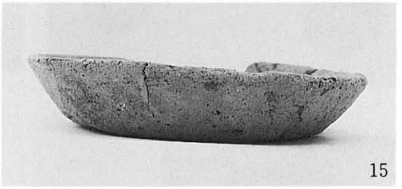












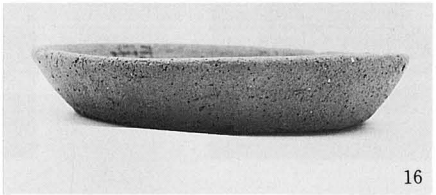
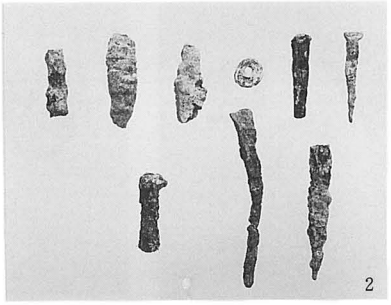


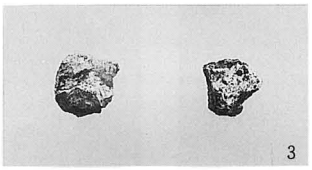
写真15　第16次調査出土遺物

1～5：SD 01埋土
6～17：SD 01 8a 層（6～11・17は大型皿、12～16小型皿）

1

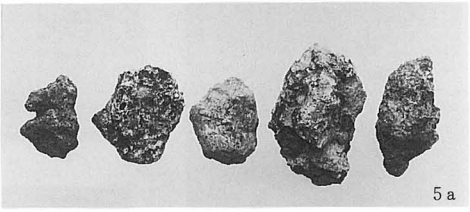
（橋脚穴出土大型釘）


2

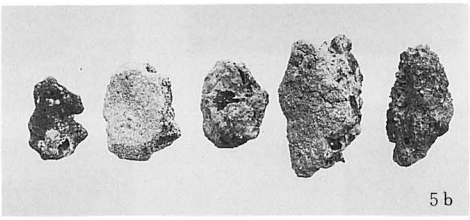

3

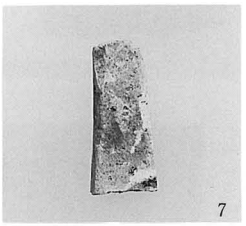
（羽口片）

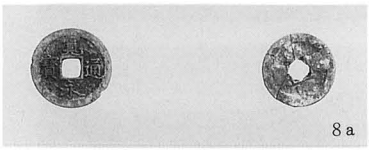
6

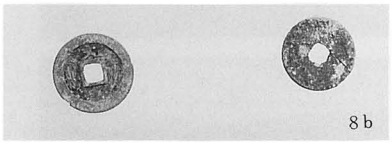

5 a

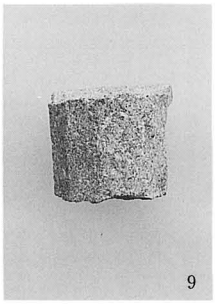
4


5 b

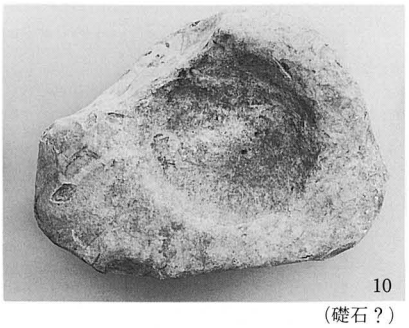

7


8 a

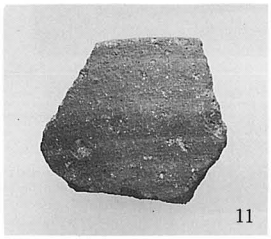

8 b

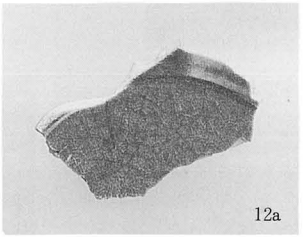

9

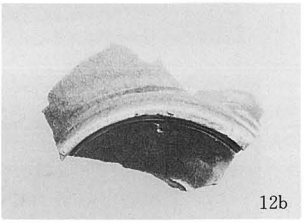
（石製品）

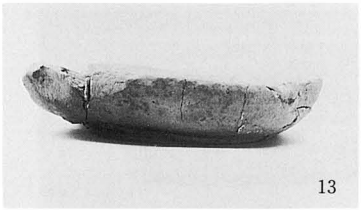

10

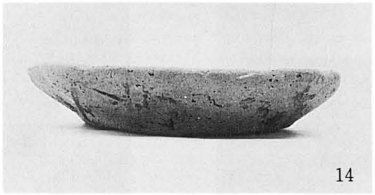
（礎石？）


11


12a


12b


13


14

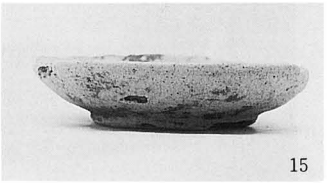
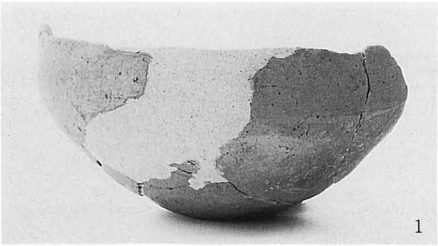
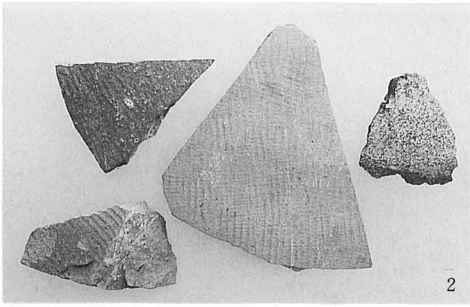
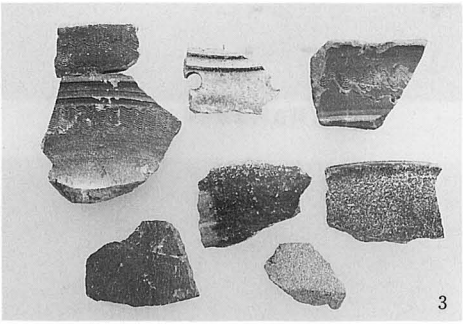

15

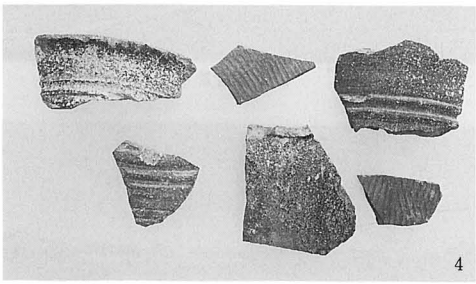
写真16　第16次調査出土遺物

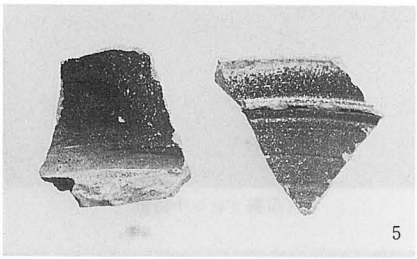
1～10：SD 01埋土　11～15：SD 02

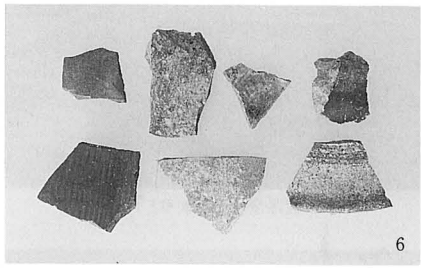


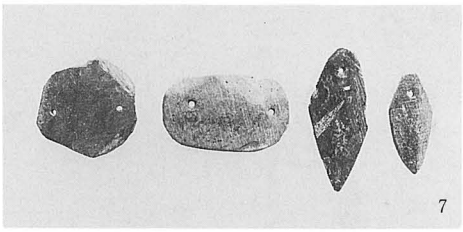


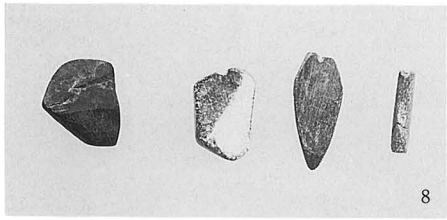


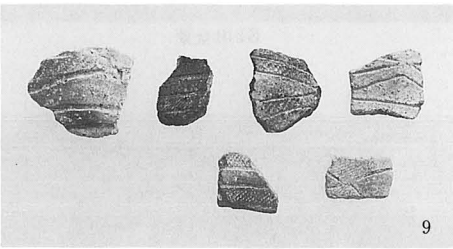


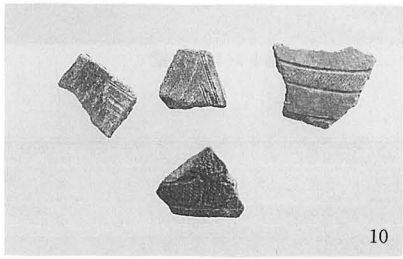


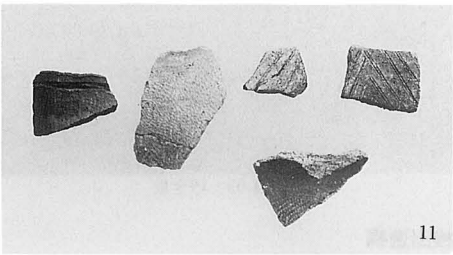












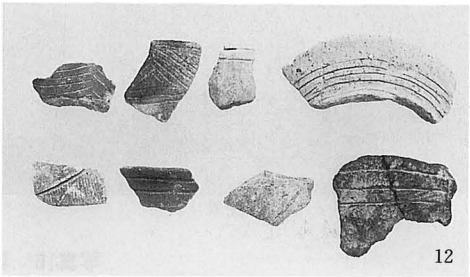
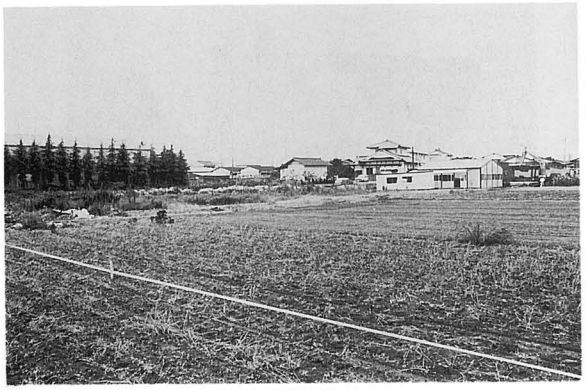
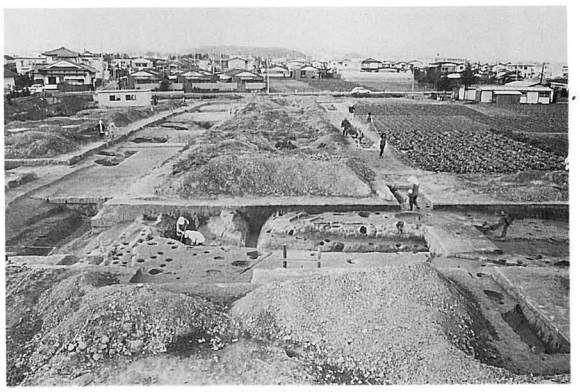


写真17　第16次調査出土遺物

1：土師器　7・8：石製模造品・石製品
2～6：須恵器　9～12：弥生土器



調査前近景



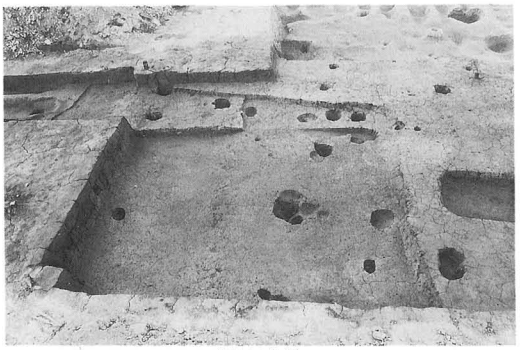
調査区全景（東より）

調査区全景（西より）

Ⅲ区深掘トレンチ西壁

Ⅶ区深掘トレンチ北壁

SI 01全景



SI 02全景

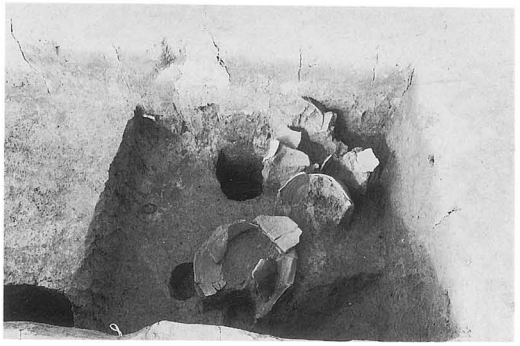
SI 03・19全景

写真18　第17次調査検出遺構

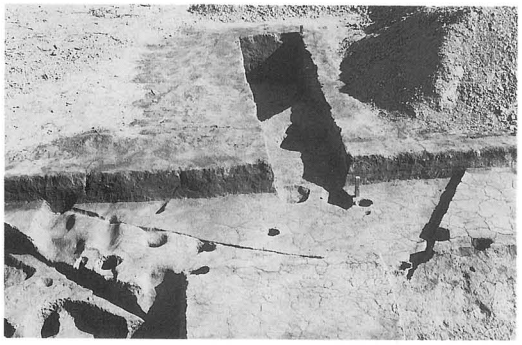
SI 03カマド検出状況

SI 04全景

SI 04カマド検出状況

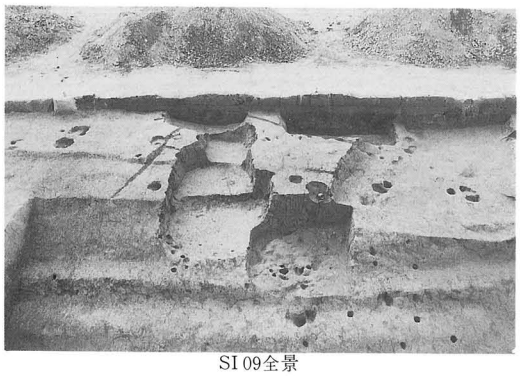


SI 06全景



SI 07全景

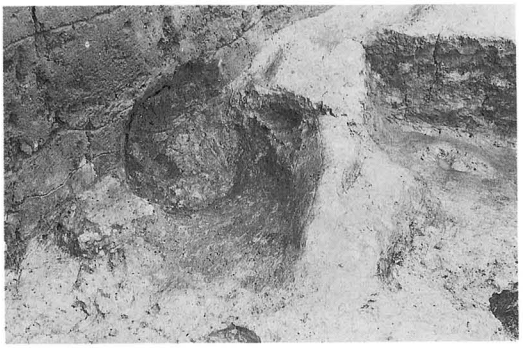
SI 07内ピット遺物出土状況



SI 09全景

SI 10全景

写真19　第17次調査区検出遺構



SI 10カマド検出状況

SI 11全景

SI 11カマド検出状況

SI 11貯蔵穴遺物出土状況

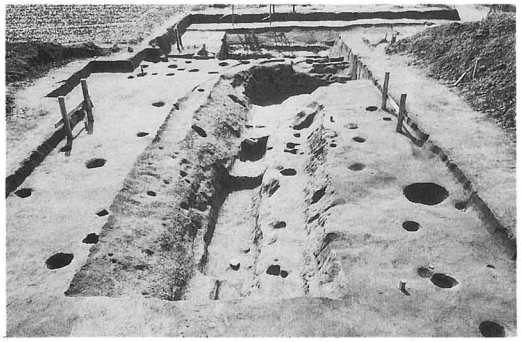
SI 12残存部（深い穴はSE 01）

SI 15全景

SI 17全景

SI 18全景

写真20　第17次調査区検出遺構

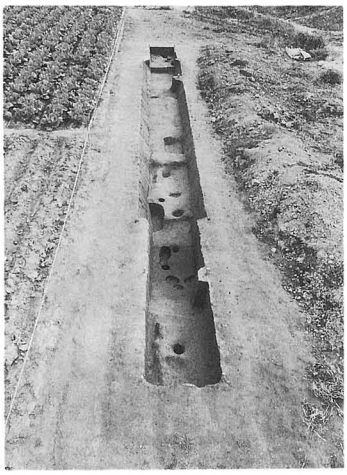


SB 01・02・06全景（中央はSD 02）

Ⅶ区建物跡全景（SB 08～12）

6トレンチ全景（SB 9・10 SD 13～15）

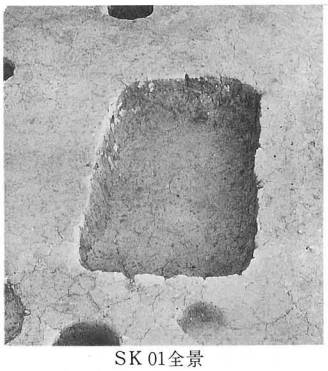
4トレンチ（SB 13）全景



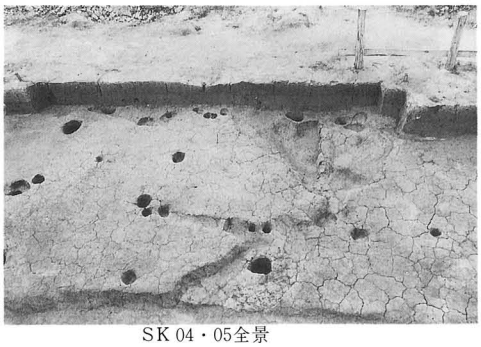
3トレンチ（SB 14）全景

SB 03～05全景

SK 03全景



SK 01全景

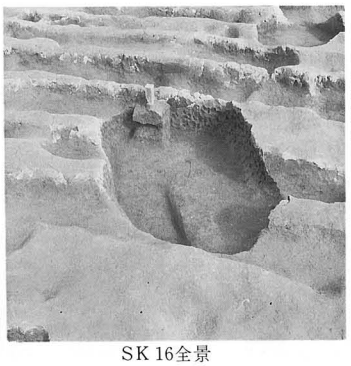


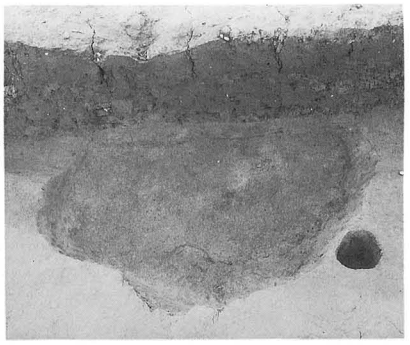
SK 04・05全景

SK 06全景

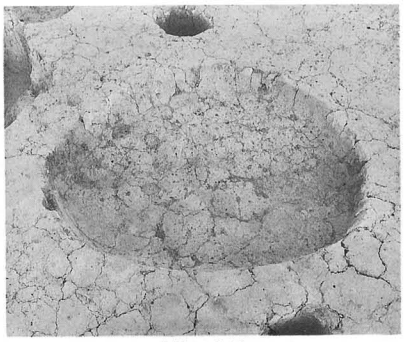
写真21　第17次調査区検出遺構

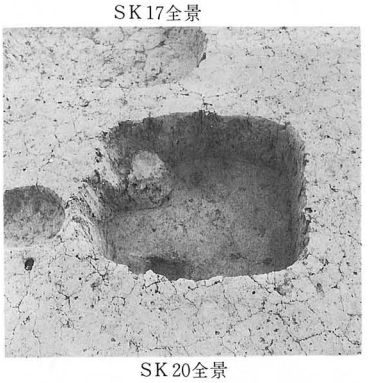
SK 15全景


SK 16全景

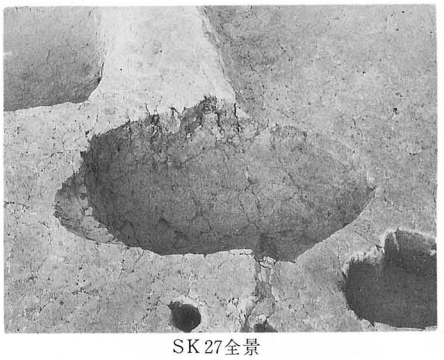

SK 17全景

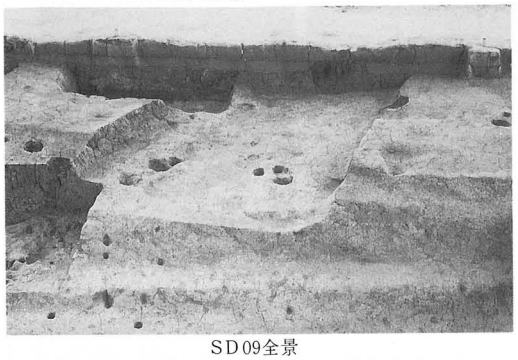
SK 18全景


SK 19全景


SK 20全景

SK 26全景

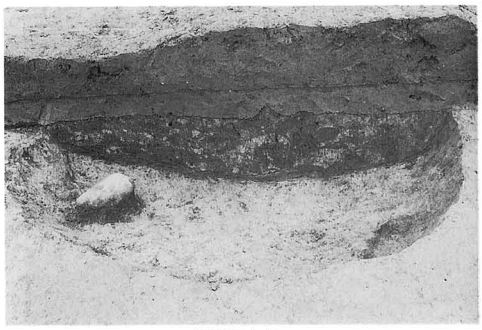

SK 27全景


SD 09全景

SD 12全景

SD 09遺物出土状況

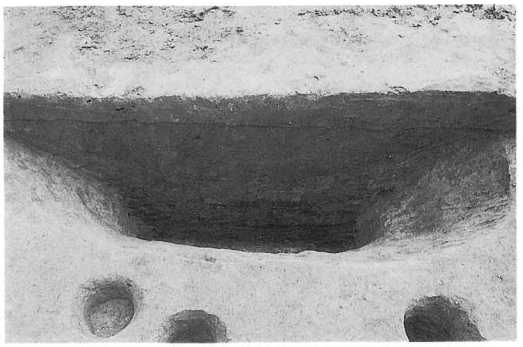
写真22　第17次調査区検出遺構

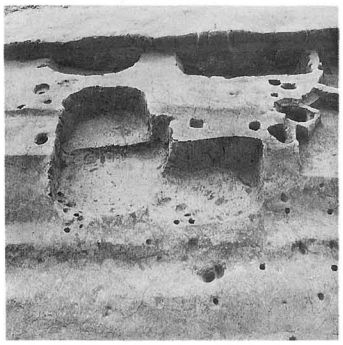

SK07全景

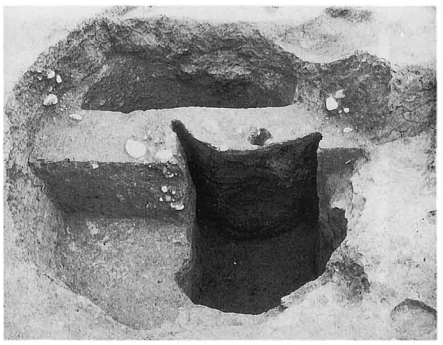
SK08全景

SK10全景

SK11全景


SK12全景


SK21～23全景

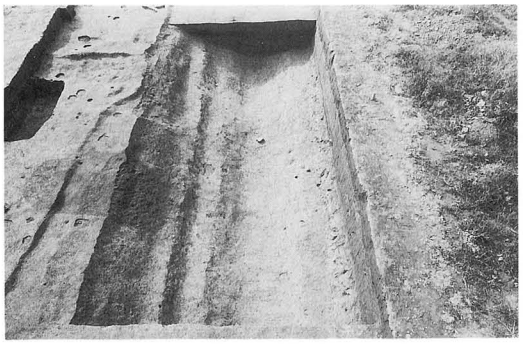

SE01全景

SE01本体内部

SD01Ⅱ区全景

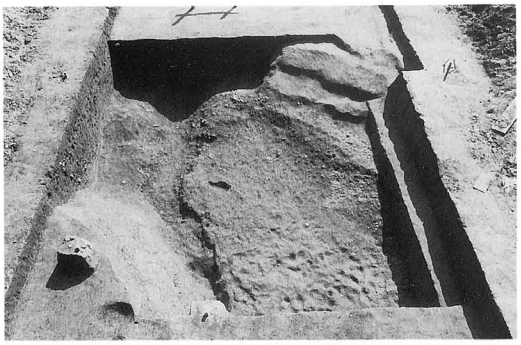
SD01Ⅱ区東壁断面

写真23　第17次調査区検出遺構

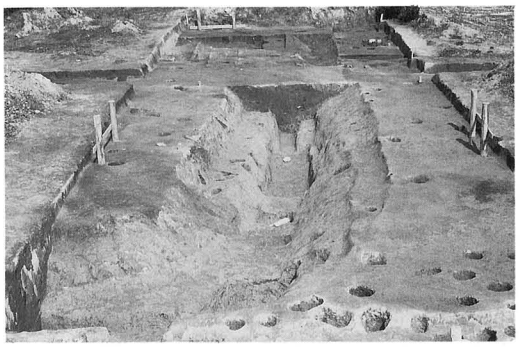


SD01Ⅳ区全景

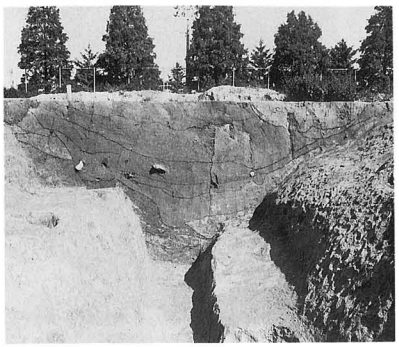
SD01Ⅳ区橋脚跡



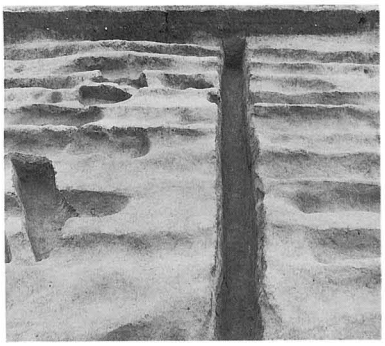
SD01Ⅴ区全景



SD02全景

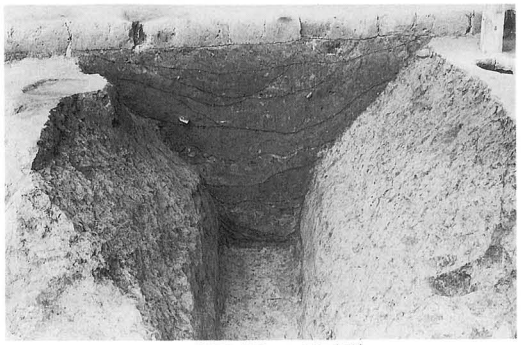


Ⅰ区SD02・07・08断面（Jライン北壁）



SD04全景

SD05全景（5トレンチ）



SD07断面（H－15区西壁）

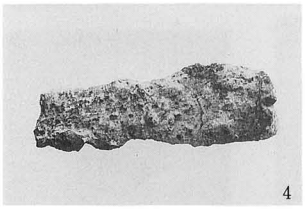
SD06・11全景（4トレンチ）

写真24　第17次調査区検出遺構

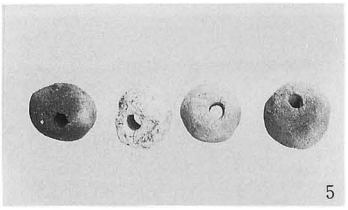
1

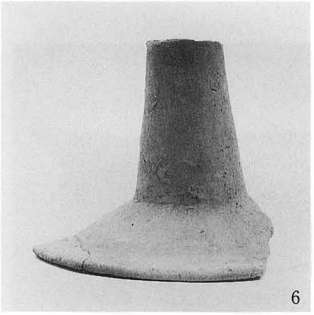
2

3


4

（鉄鎌？）

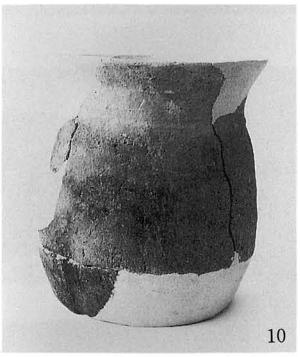

5

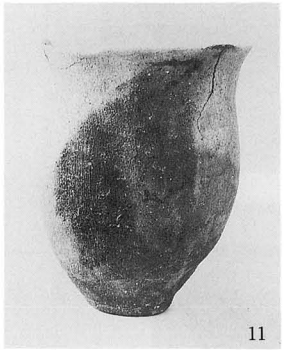

6

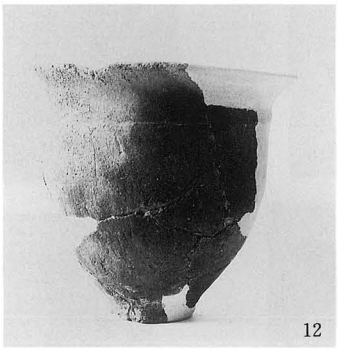
7

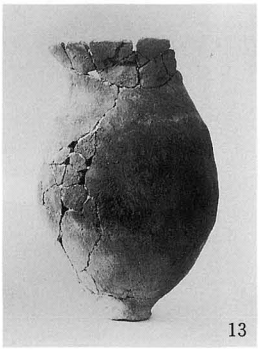
8

9

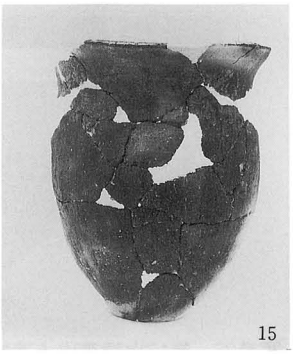

10


11


12


13

14


15

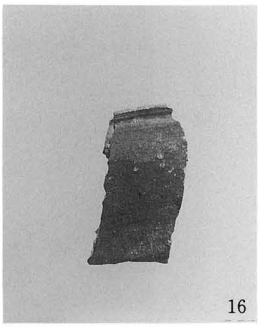
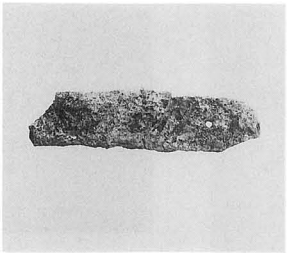
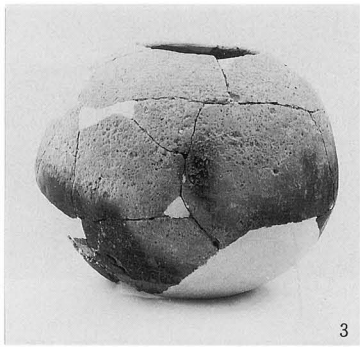

16

写真25　第17次調査出土遺物　1～5：SI01　6・7：SI02　8～16：SI03

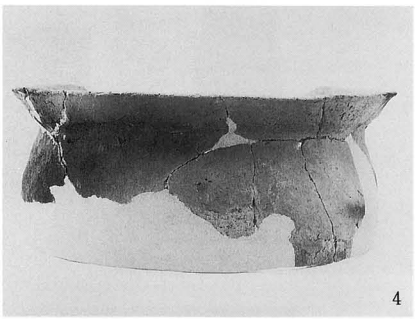


（刀子）

2

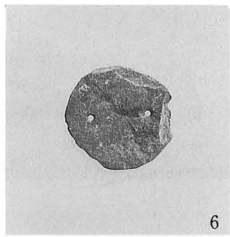


3

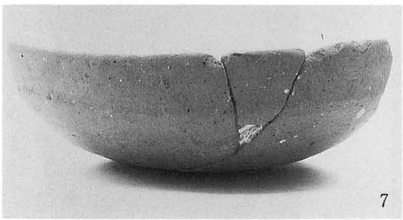


4

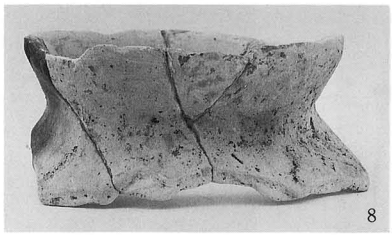
5



6

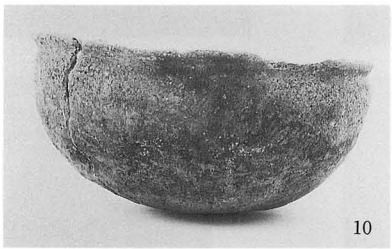


7



8

9



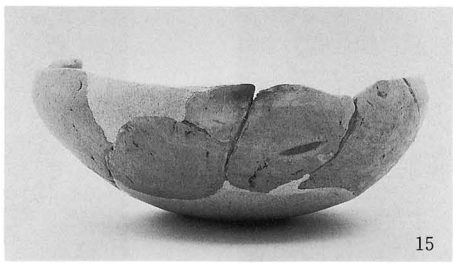
10

13

11

14

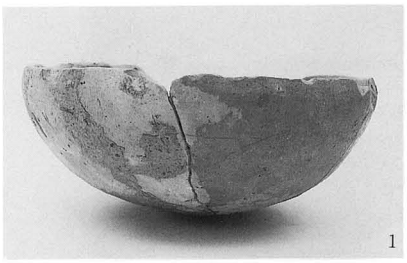
12

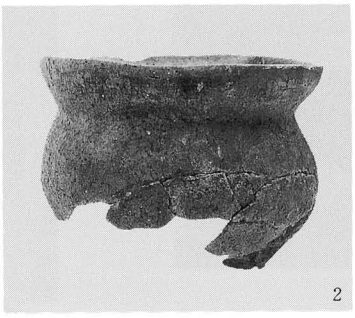


15

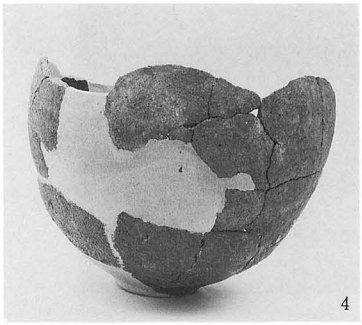
1：SI04（刀子）
2～4：SI06
5～7：SI07
8・9：SI09
10～12：SI10
13～15：SI11

写真26　第17次調査出土遺物

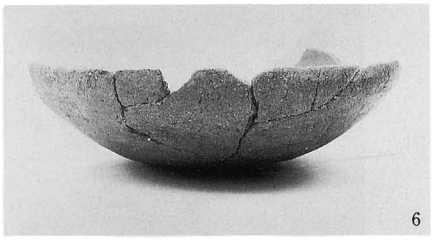

1

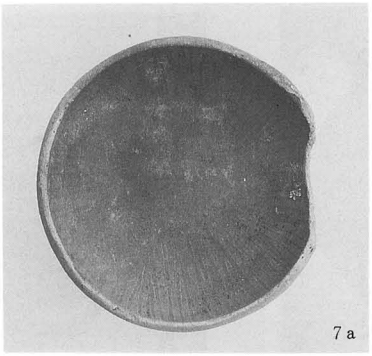

2

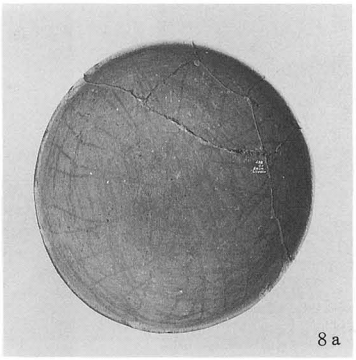
3


4

5

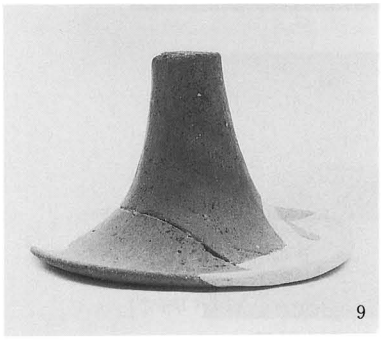

6

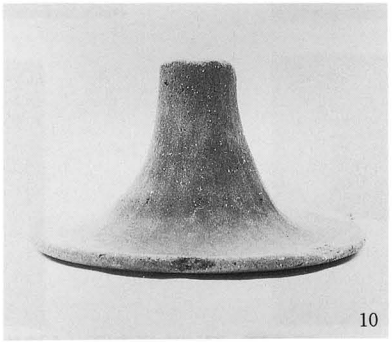

7a


8a

7b

8b


9


10

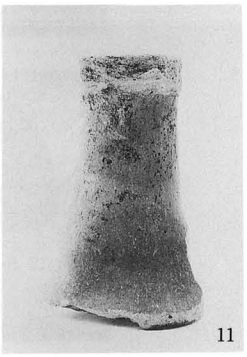
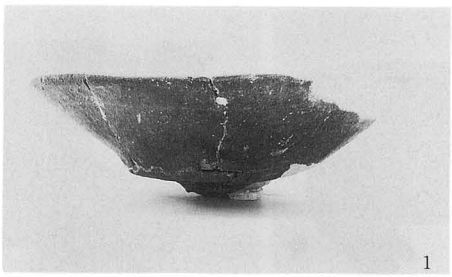
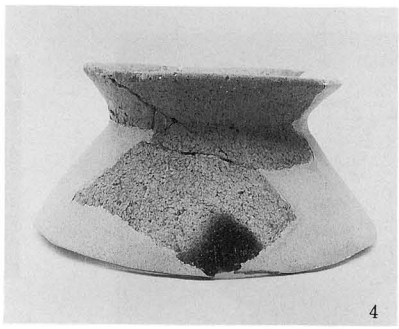

11

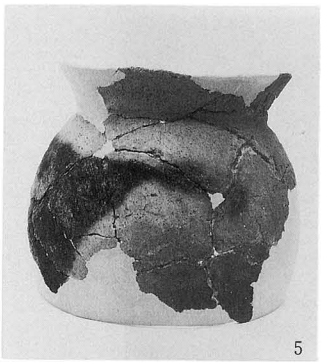
写真27　第17次調査区出土遺物　　1～5：SI 11　6～11：SI 12


1

2

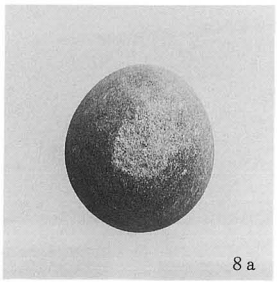
3

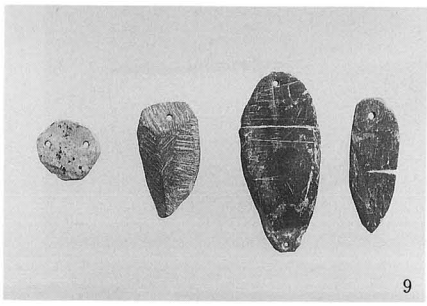

4

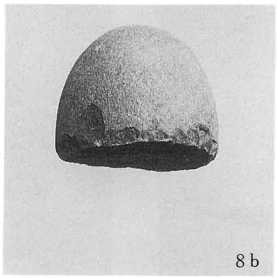

5

6

7


8a


9


8b

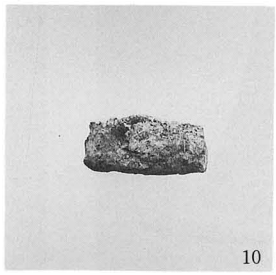
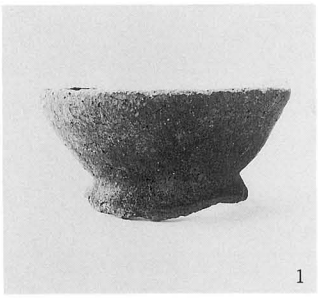
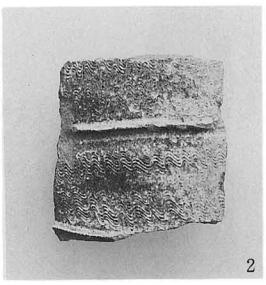
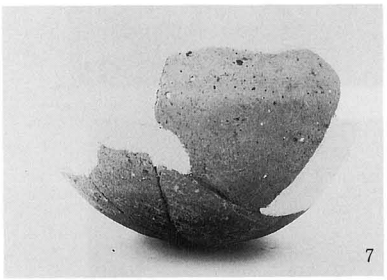
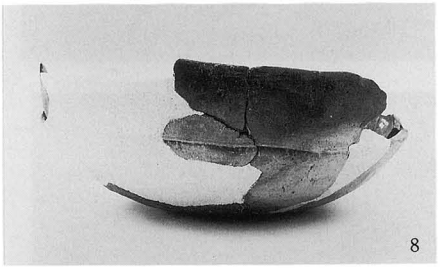

10（刀子？）

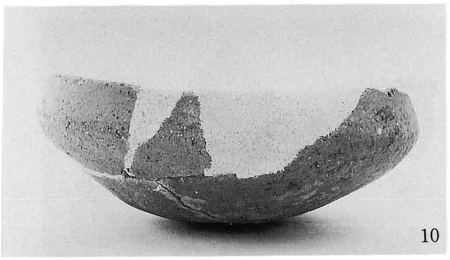
写真28　第17次調査区出土遺物　　1～10：SI12



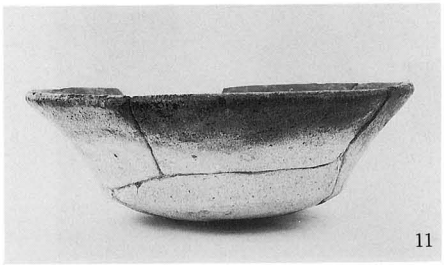


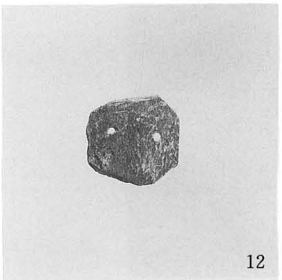






1・2：SI14
3：SI18
4～6：SD09
7～12：SD10
13：SK26





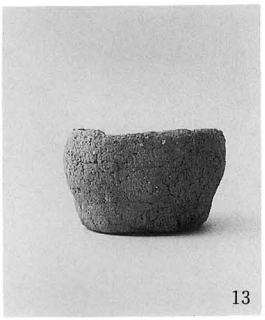
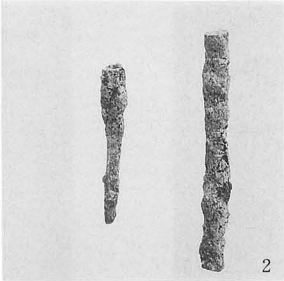
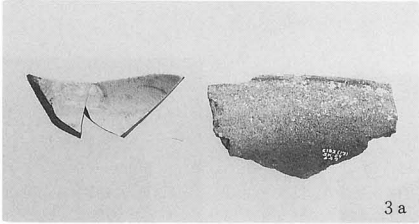
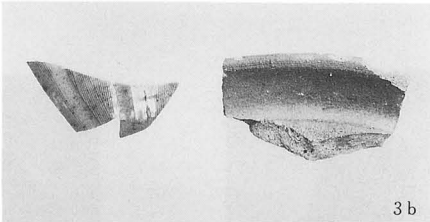


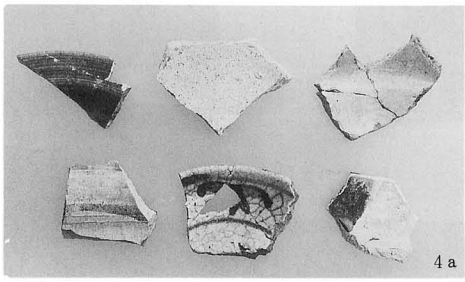
写真29　第17次調査区出土遺物

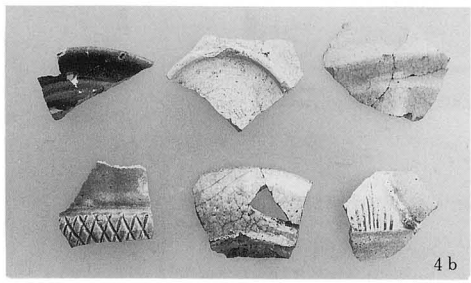


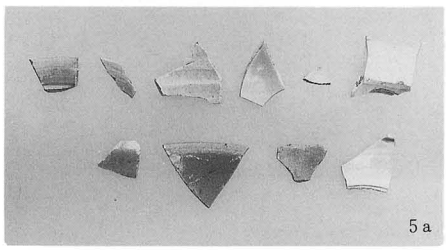
1：SK12（釘）　4・5：SD01
2：SK21（釘）　6～9：SD01・02
3：SE01

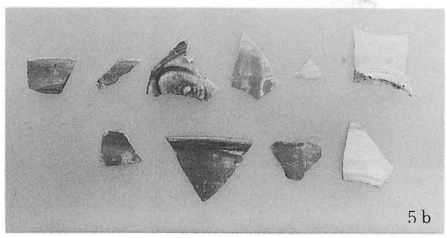


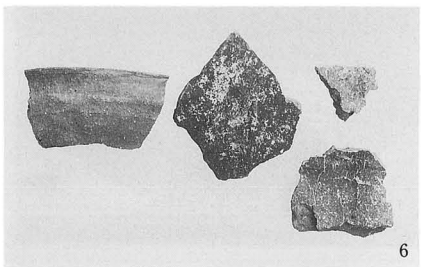


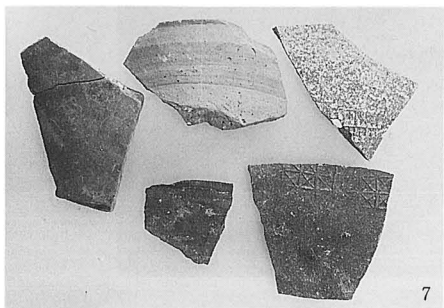


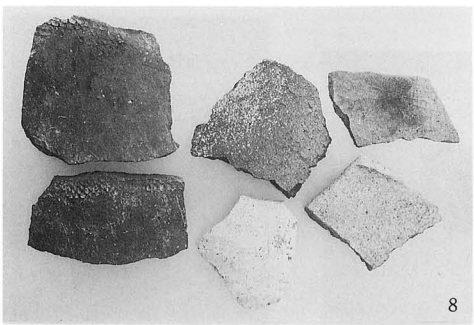












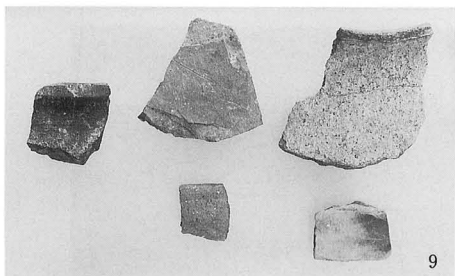
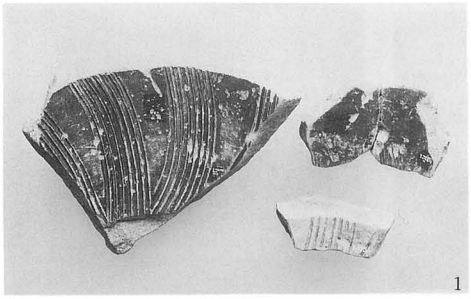
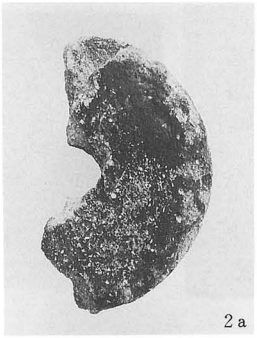
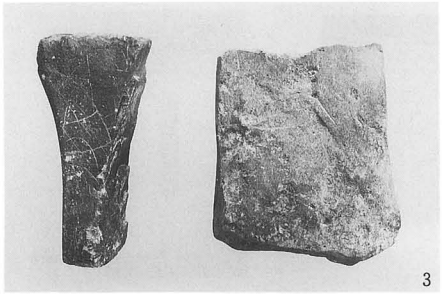
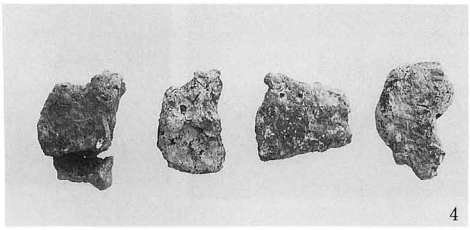


写真30　第17次調査区出土遺物

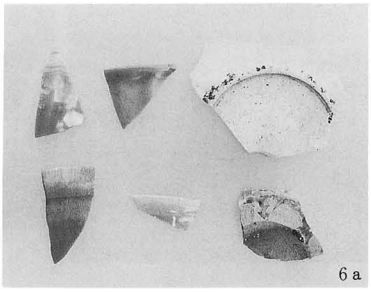


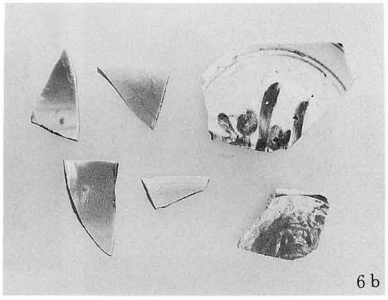


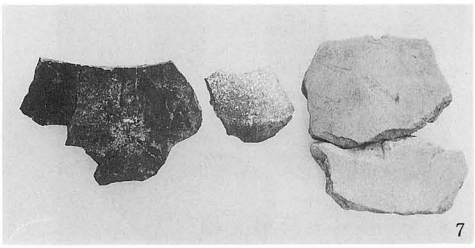


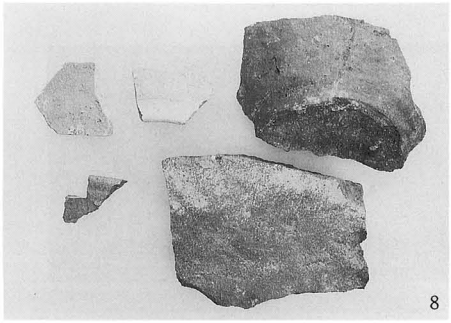


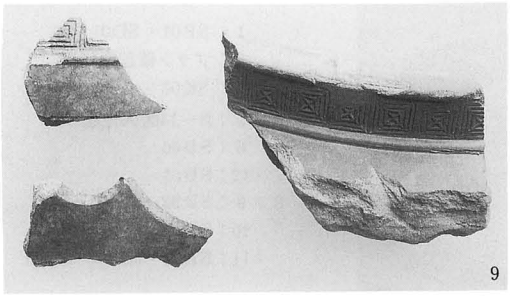
（坩堝片）

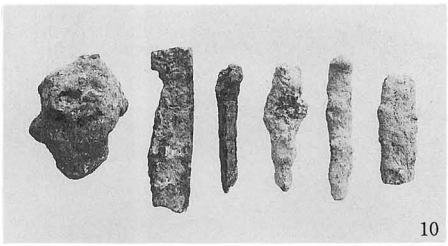






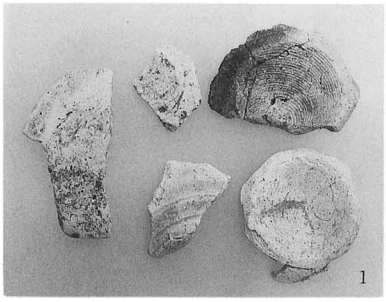


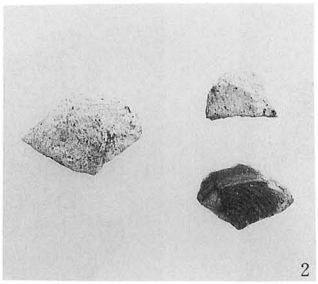


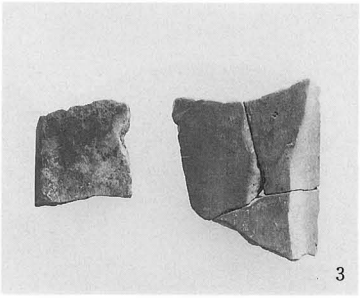


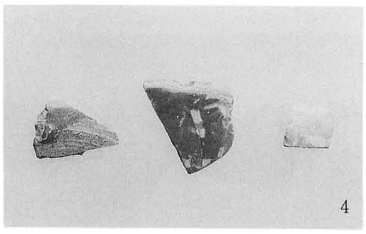
1～5：SD01　6～10：SD02
左から2番目は野踏か

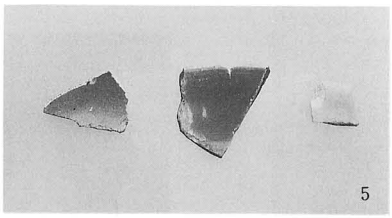
写真31　第17次調査区出土遺物


1

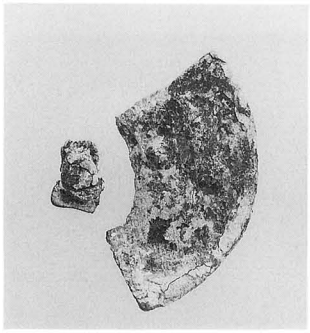

2

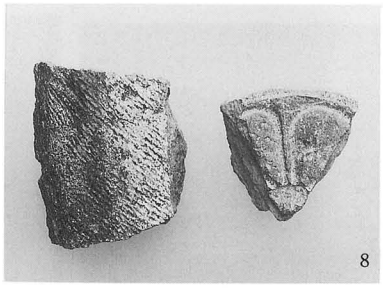

3

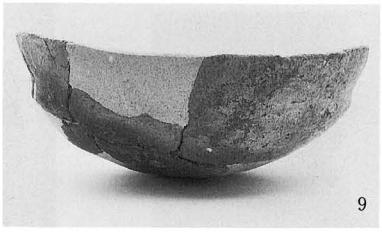

4

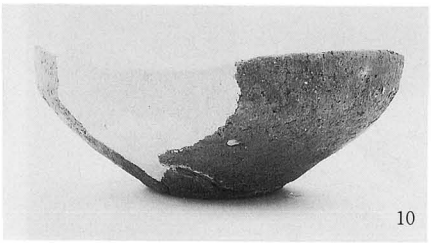

5

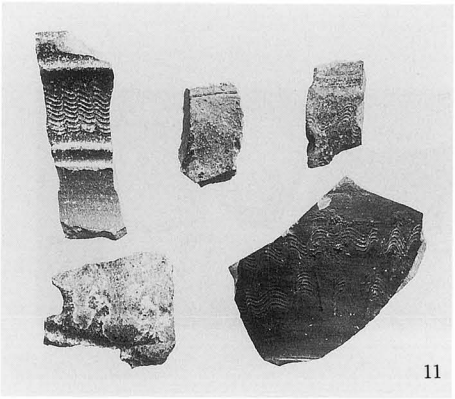
6（石製品）

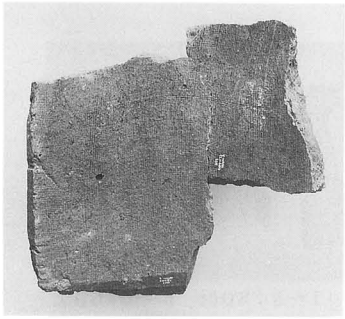

7（銅鏡）

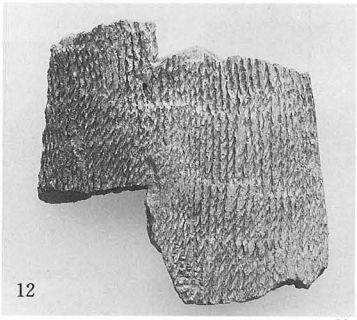

8


9


10

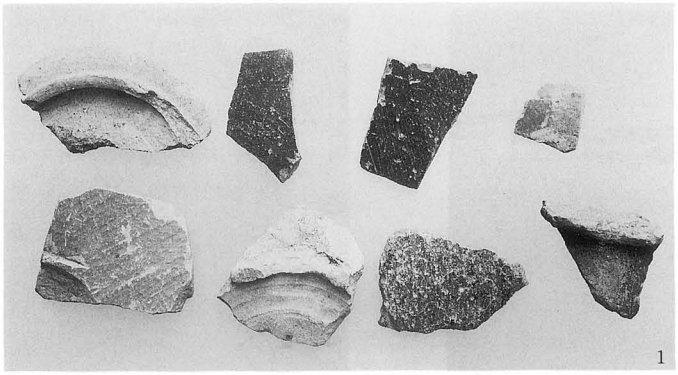

11

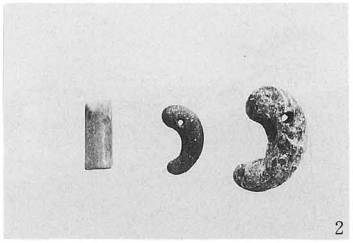


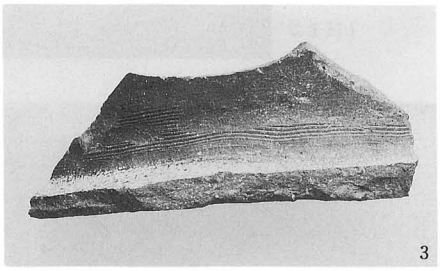

12

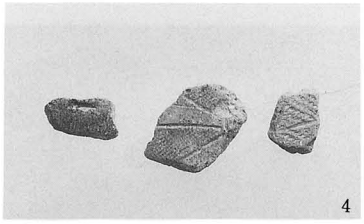
1：SE01・SD01・02
2：プラン確認面
3：SK03
4・5：B—14区天地返し
6：SD06
7・12：SD01
8・9：SD02
10：SD04
11：SE01・SD10・SK11

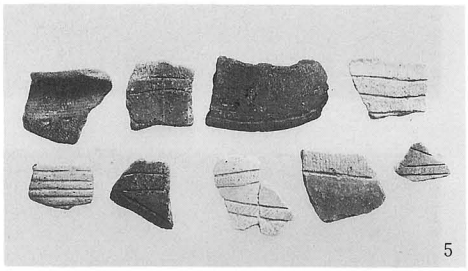
写真32　第17次調査区出土遺物

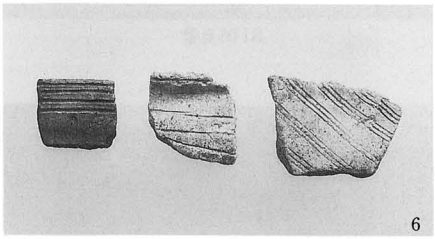


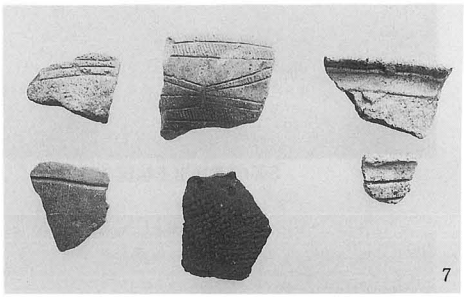


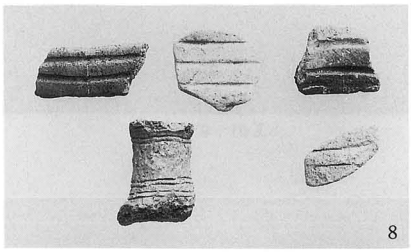


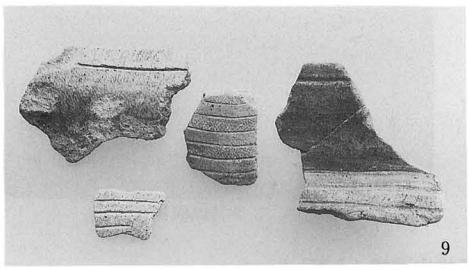


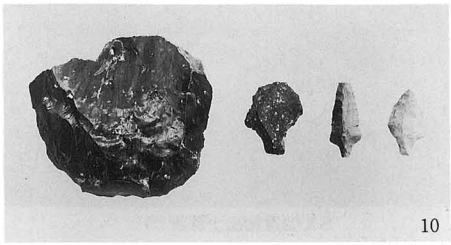










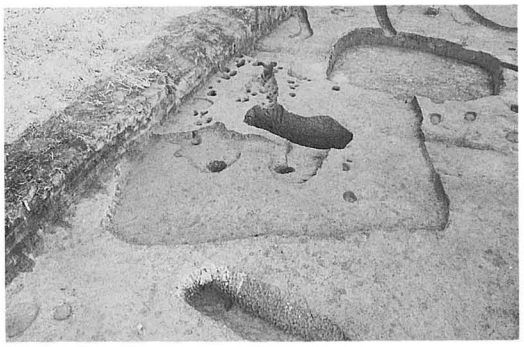


1：SD01　　4～9：弥生土器
2：SK01・Ⅰ層　　10：石器
3：SD02

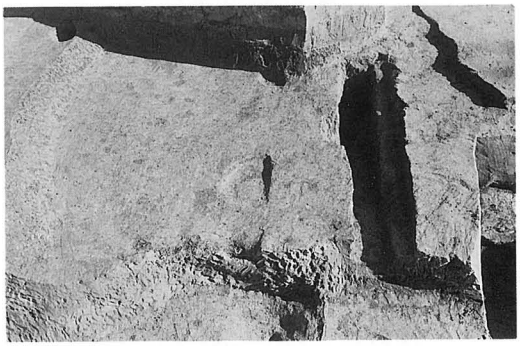
写真33　第17次調査区出土遺物

調査前近景（Ⅰ区）

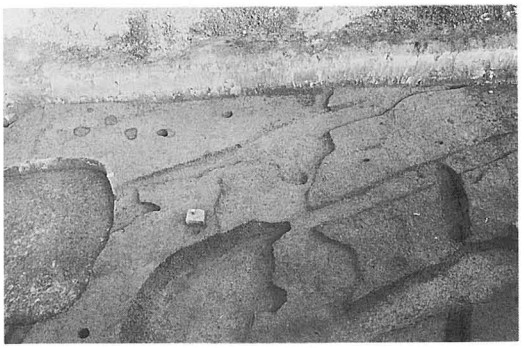
Ⅰ区全景



SI 05全景

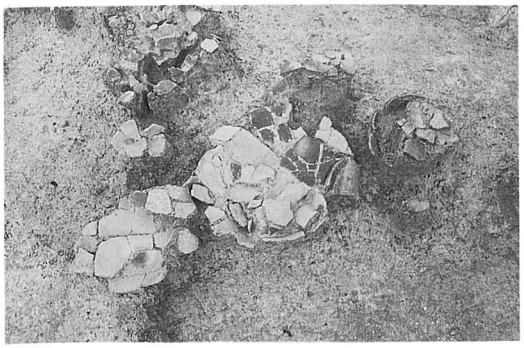


SK 13全景

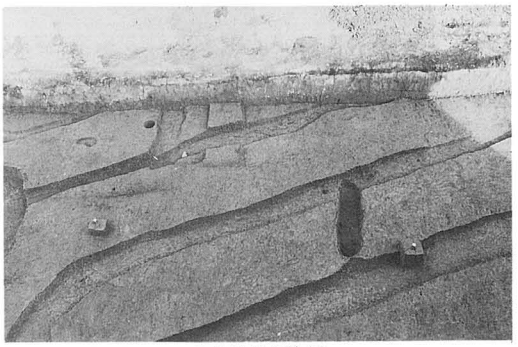


SX 01～03全景

SX 02遺物出土状況(1)

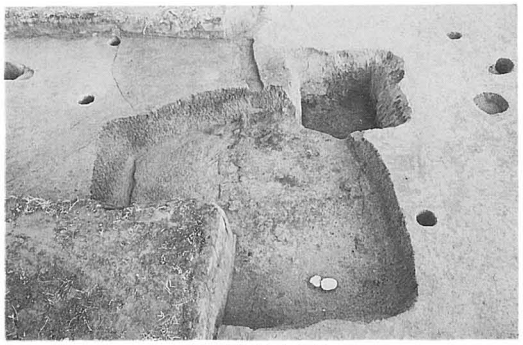


SX 02遺物出土状況(2)



5号畝溝状遺構

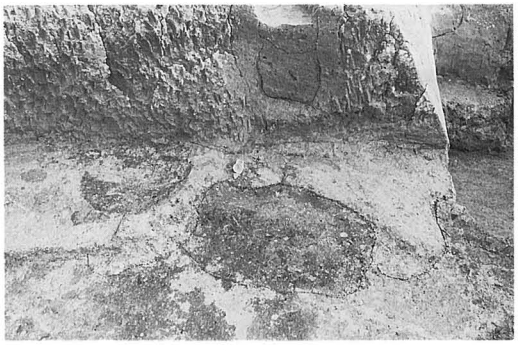
写真34　第18次調査検出遺構（Ⅰ区）



SI04(床1)全景

SI04(床4)全景

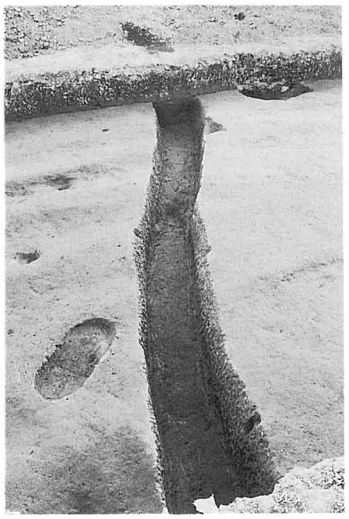
SI04(床1)カマド検出状況



SI04(床4)カマド検出状況

SI04鋤・鍬先出土状況

SB06全景



SD11全景

SD10全景

写真35　第18次調査区検出遺構(Ⅰ区)

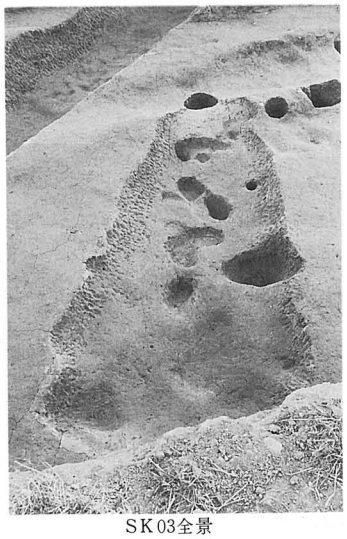
SD12・13全景（Ⅰ区西部）

SD12・13全景（Ⅰ区北部）

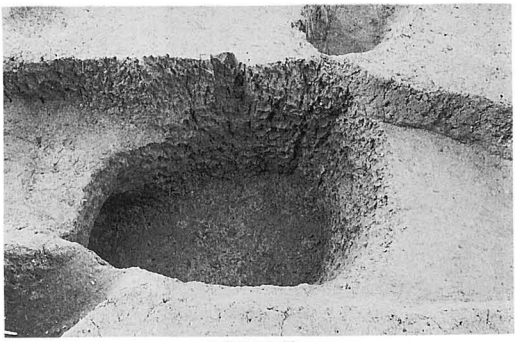
SD12部分（Ⅰ区北部）

SD14（Ⅰ区東部）

SK04全景

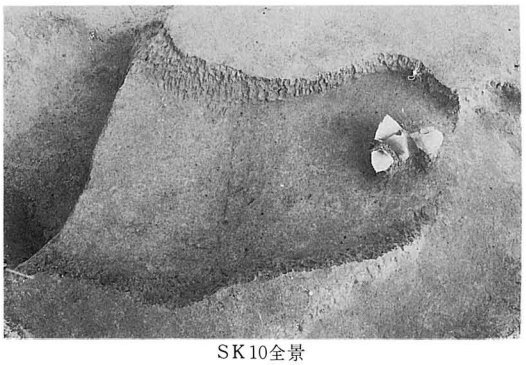


SK03全景

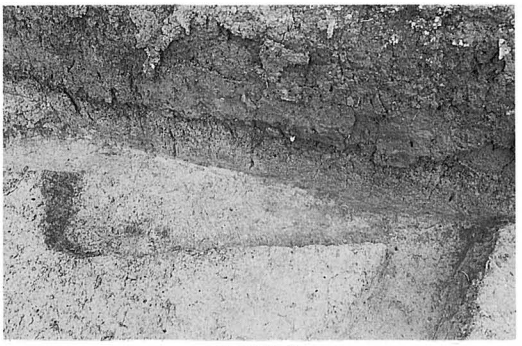


SK11全景

写真36　第18次調査区検出遺構（Ⅰ区）

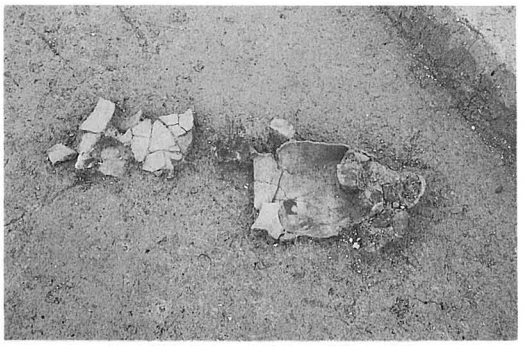


SK10全景



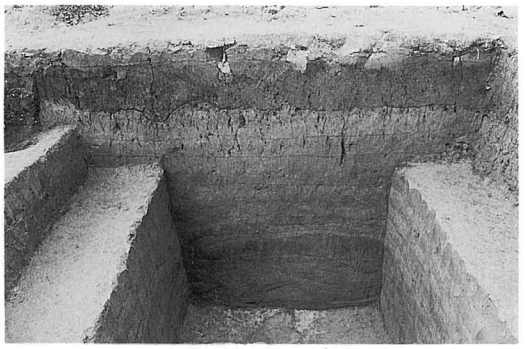
SK12全景

SK14全景



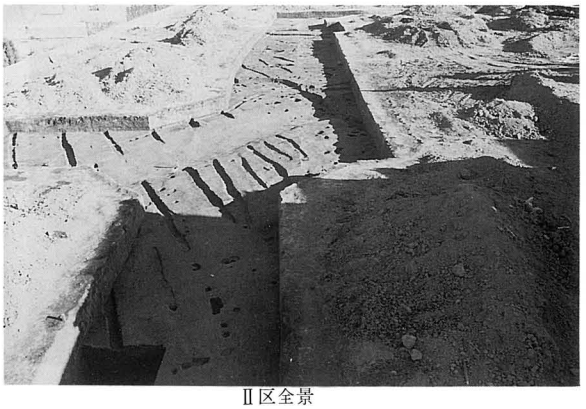
No.1深掘トレンチ弥生土器出土状況

No.2深掘トレンチ南壁



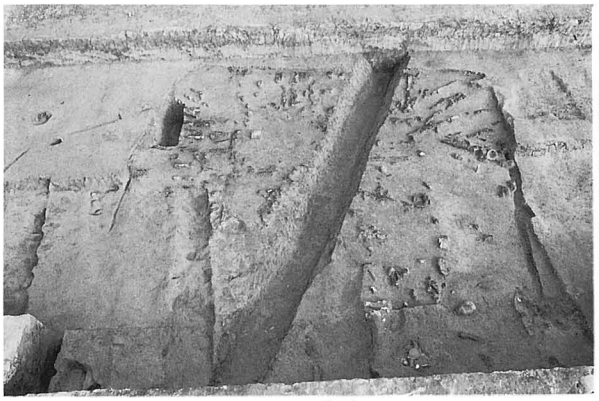
No.1深掘トレンチ南壁

調査前近景（Ⅱ区）

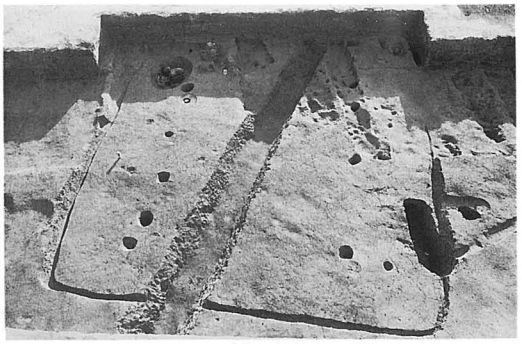


Ⅱ区全景

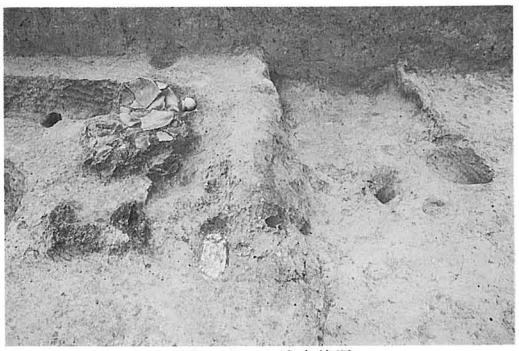
写真37　第18次調査区検出遺構（Ⅰ・Ⅱ区）



SI01炭化材出土状況

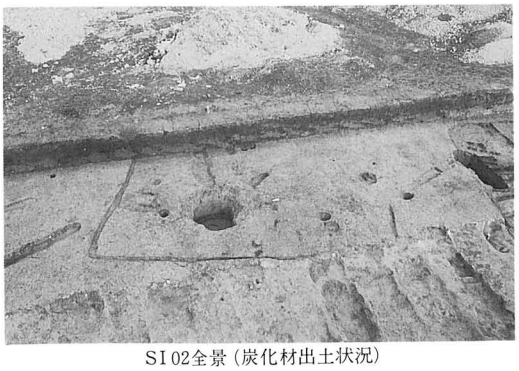


SI01全景



SI01カマド検出状況

SI01貯蔵穴遺物出土状況



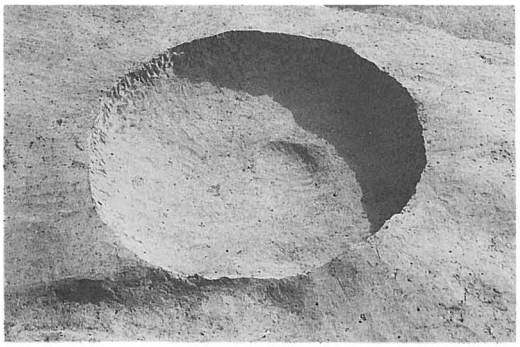
SI02全景（炭化材出土状況）

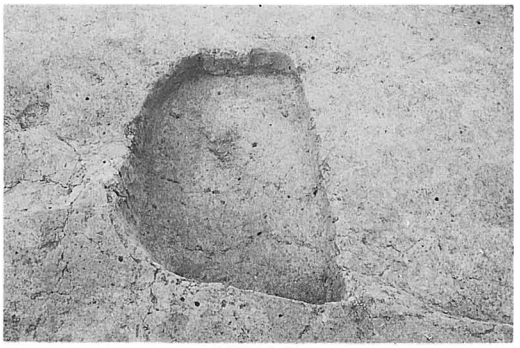
SI02カマド焚き口

SI03全景

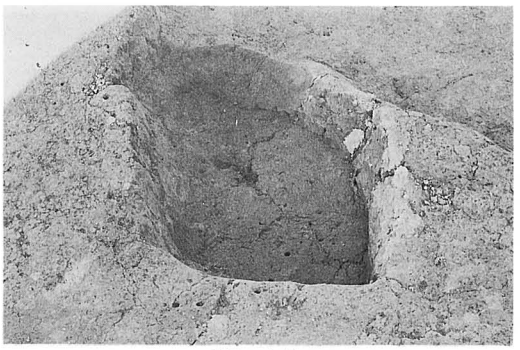
SK01全景

写真38　第18次調査区検出遺構（Ⅱ区）

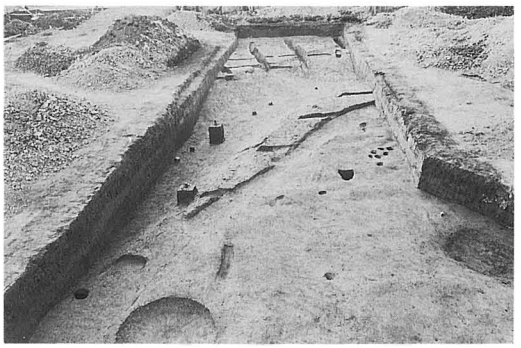

SK05全景

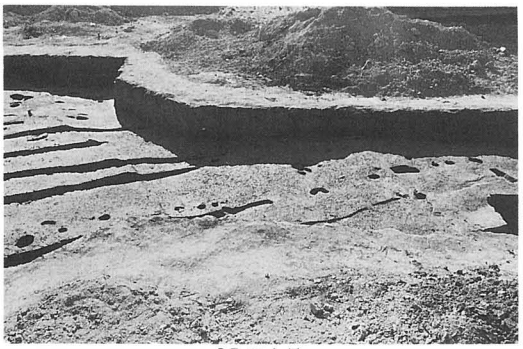

SK06全景

SK07全景


SK08全景

3号・4号畝溝状遺構全景


SD03・04全景


SD05全景

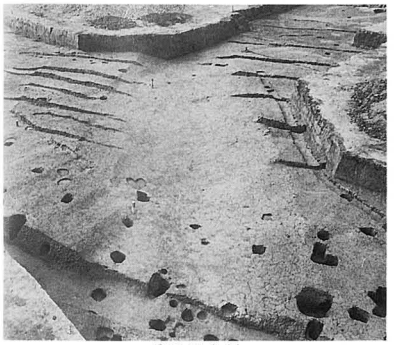
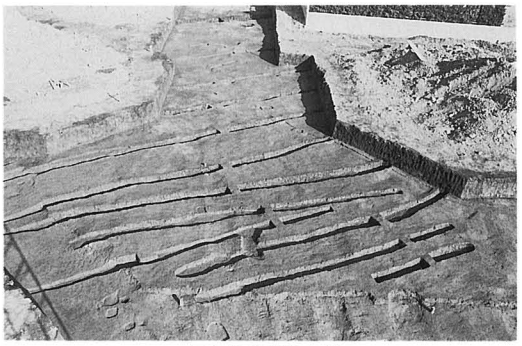

SD20全景

写真39　第18次調査区検出遺構（Ⅱ区）

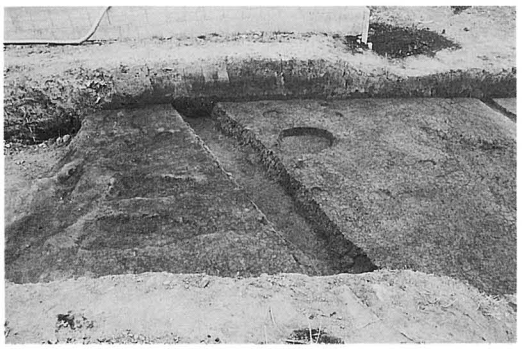


1号畝溝状遺構全景

SD07～09

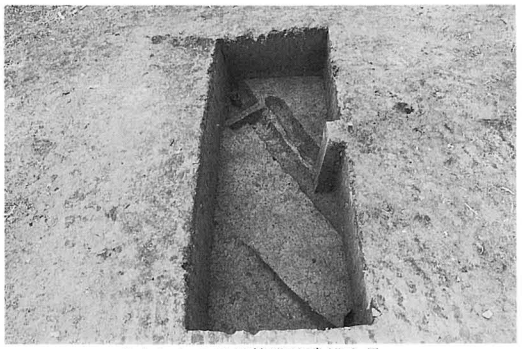
Ⅱ区西部建物跡・溝・畝溝状遺構

Ⅱ区西部建物跡（SB01～05）



SD01・SK02全景

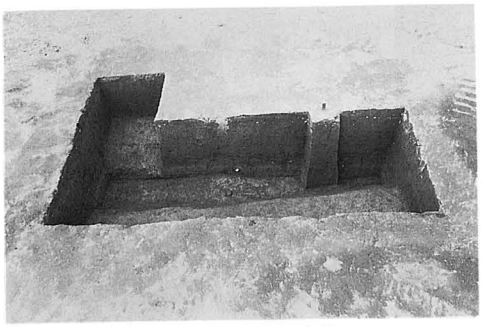
SD02全景



1トレンチ7号畝溝状遺構全景

1トレンチSK15・SD25全景

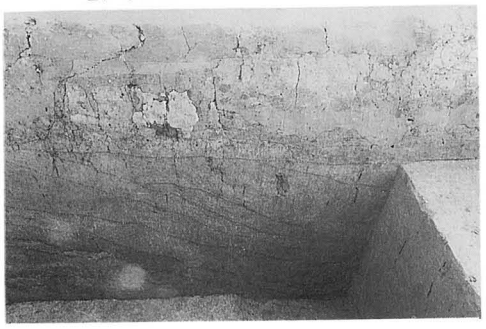
写真40　第18次調査区検出遺構（Ⅱ区）

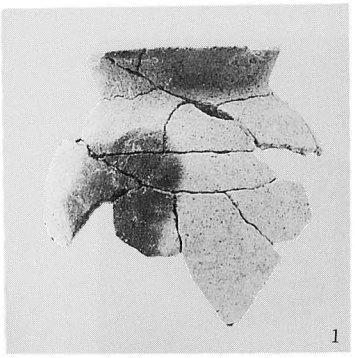


2トレンチSD14全景

Ⅱ区西部深掘No.2トレンチ北壁断面

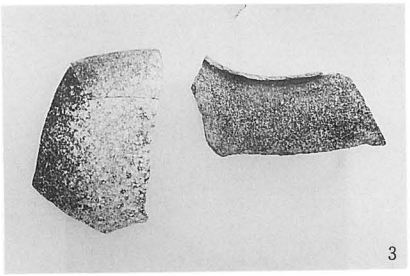
Ⅱ区東部深掘No.1トレンチ東壁断面



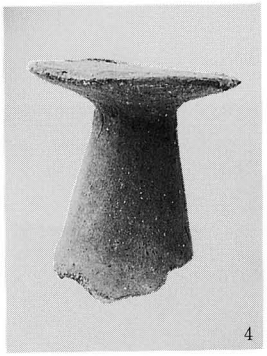


1

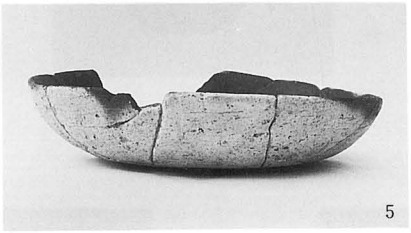
2



3

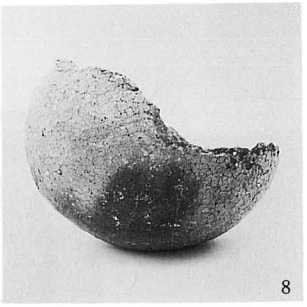


4

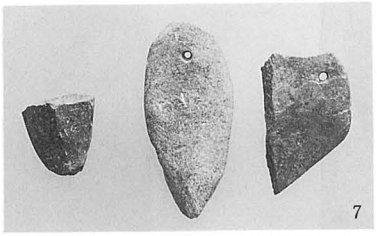


5

6



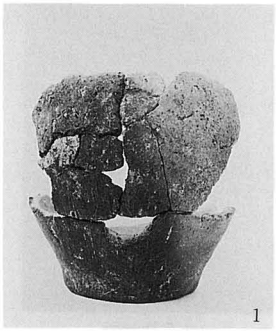
8

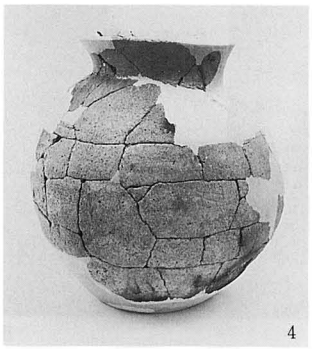


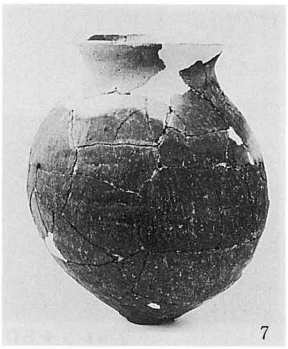
7

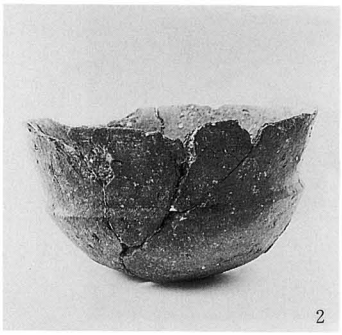
1・2：SD04
3：SD08
4：5号畝溝状遺構
5：SD25
6・7：SD20
8：Ⅱ区深掘No.2トレンチ

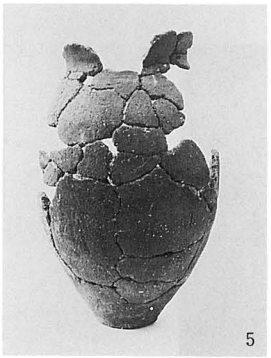
写真41　第18次調査区検出遺構（Ⅱ区）・出土遺物

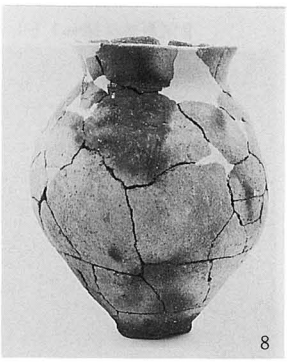


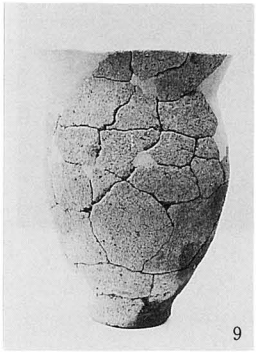


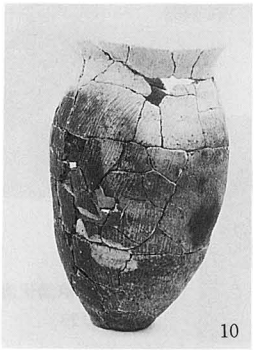






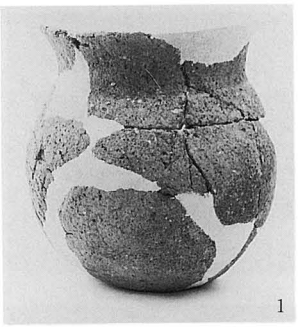


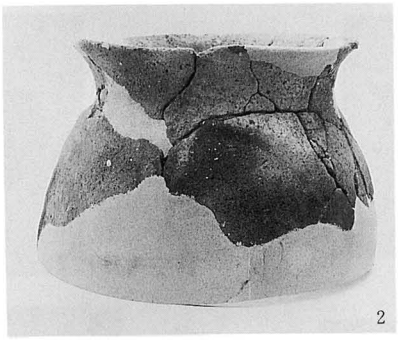


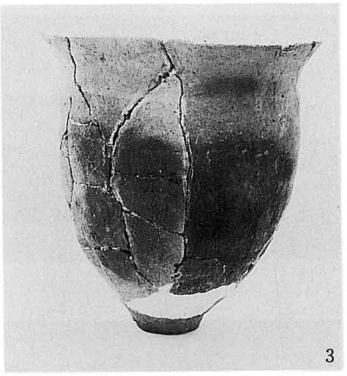


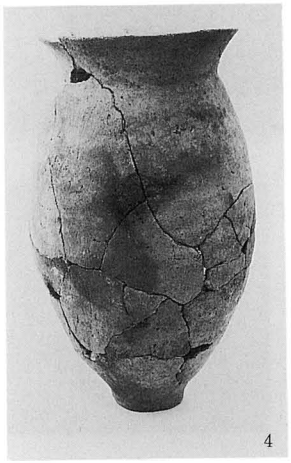
1：SI05
2～10：SX02
11：SK10

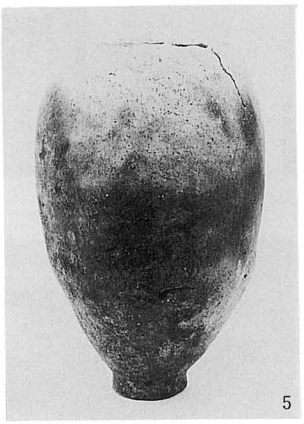
写真42　第18次調査区出土遺物

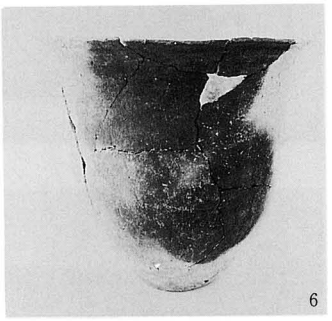

1

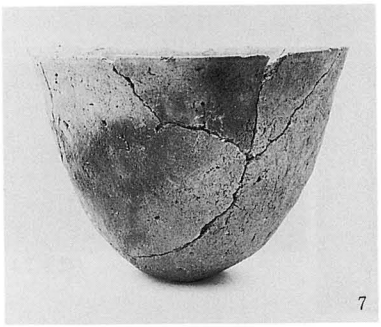

2


3


4

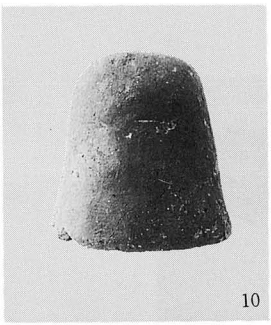

5


6

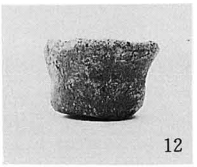

7

8

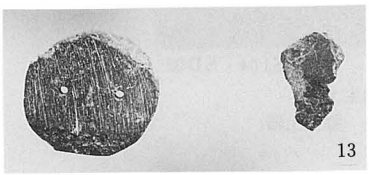
9

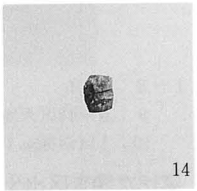

10

11


12

1～14：SI01（9～12はミニチュア土器）
15：SI01上の天地返し


13


14（切子玉）

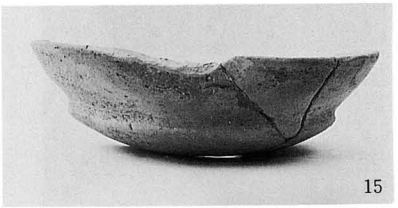
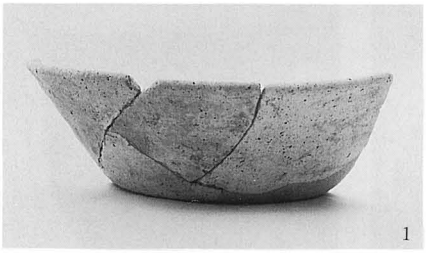
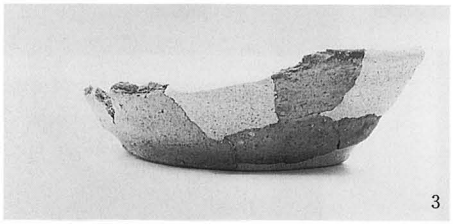
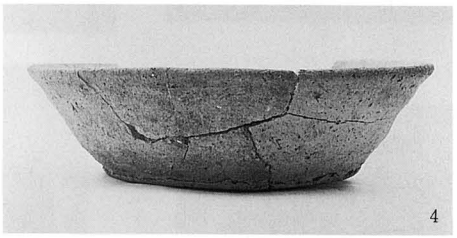
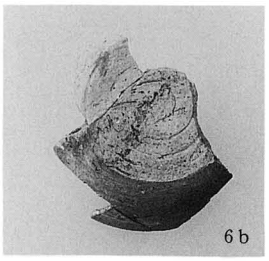

15

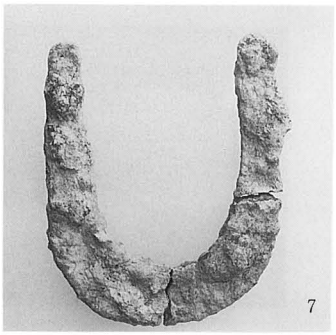
写真43　第18次調査区出土遺物

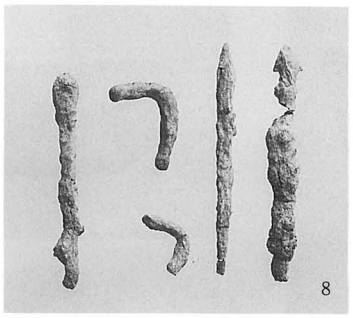


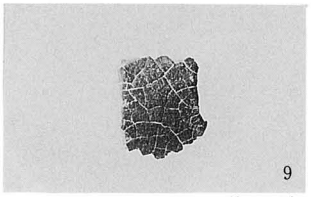




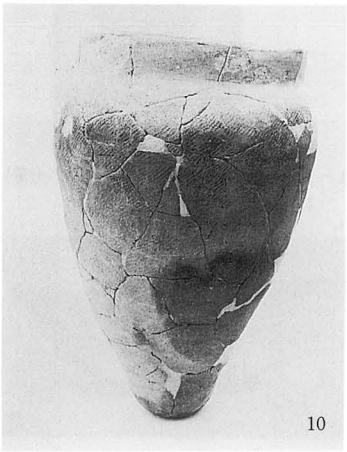


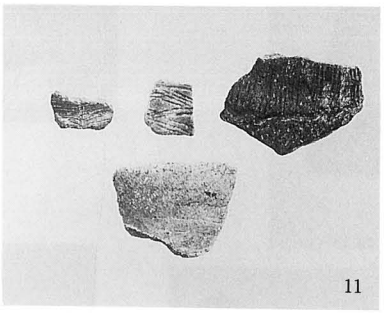






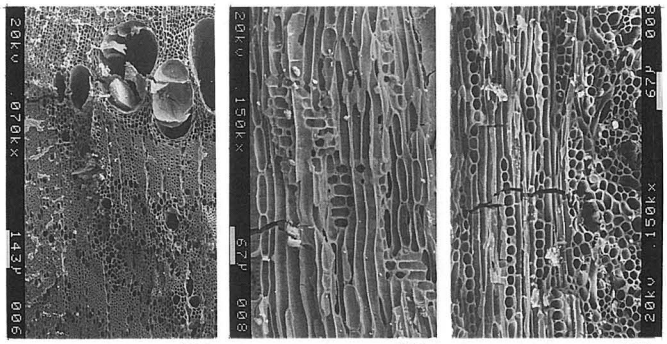
（把手？）





1～8：SI04　　11：SI04・SD02
9：0―12区天地返し（弥生土器）
10：Ⅰ区深掘No.1トレンチ（弥生土器）

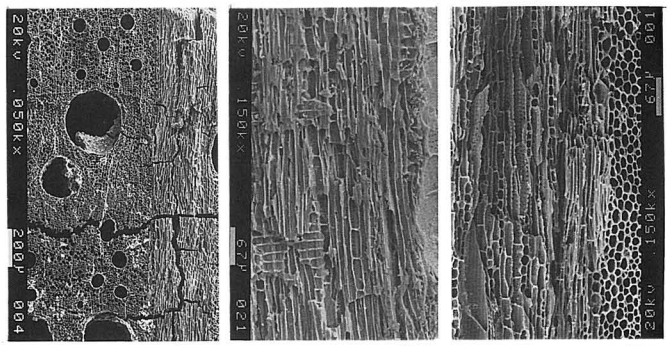
写真44　第18次調査区出土遺物



木口　柾目　板目

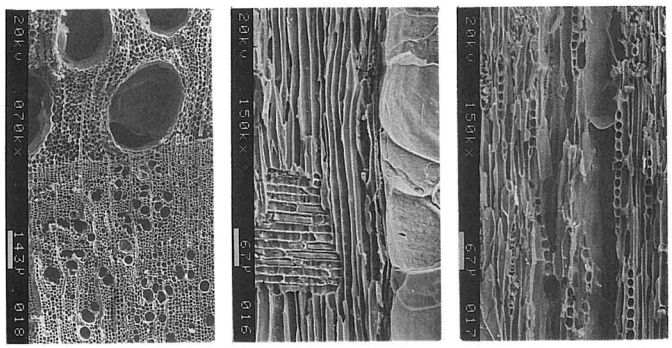
Quercus (subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*) sp.　No.5

図版 1



木口　柾目　板目

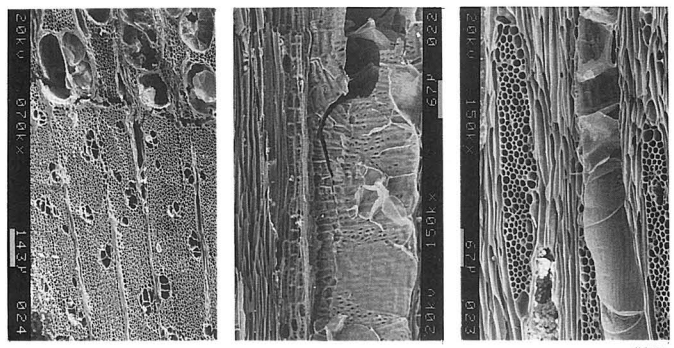
Quercus (subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*) sp.　No.14



木口　柾目　板目

Castanea crenata　No.12

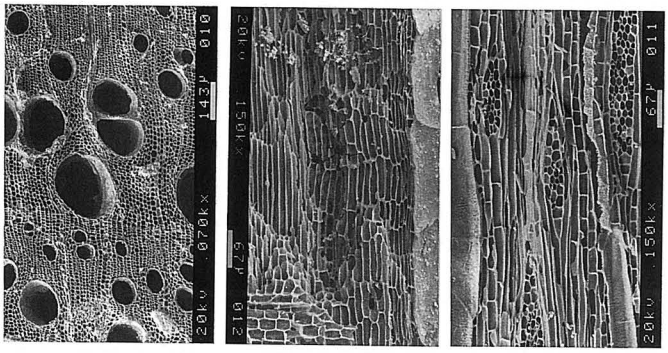
図版 2



木口　柾目　板目

Morus bombycis　No.23

写真 1　電子顕微鏡写真



図版 3

木口　　柾目　　板目

Hovenia dulcis No.6

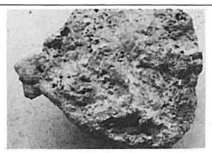
写真 2　電子顕微鏡写真

(1) ＭＳＢ11

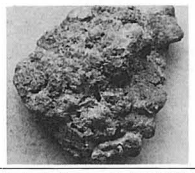
南小泉遺跡

（ＳＫ12　２層上部出土）

鍛錬鍛冶滓

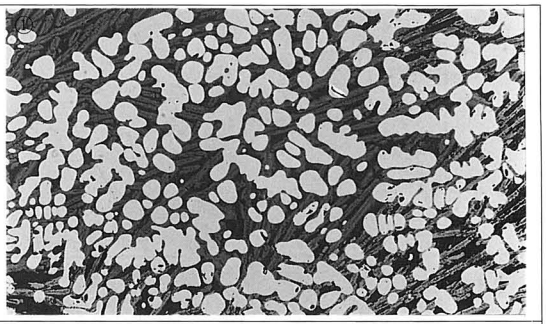


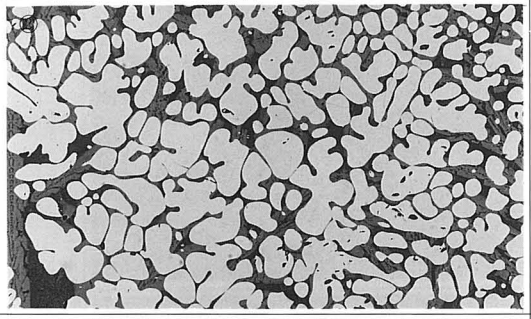
表側

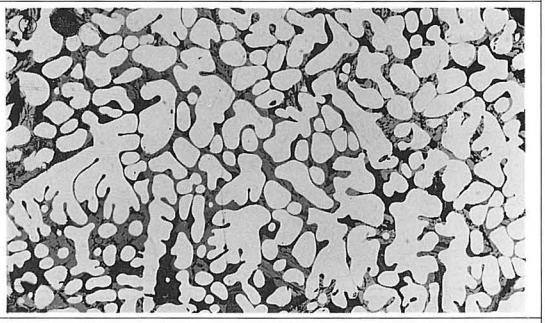


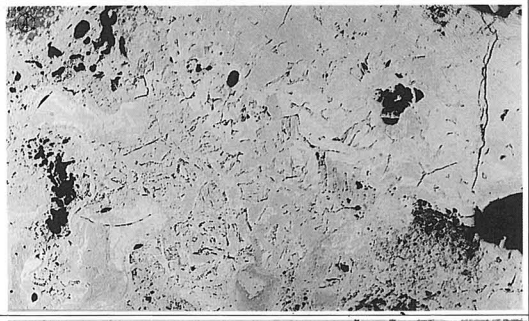
裏側

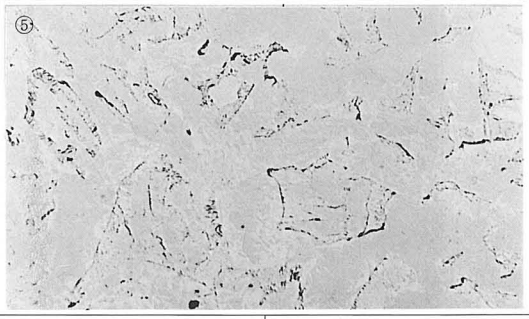
外観写真 1/2.9

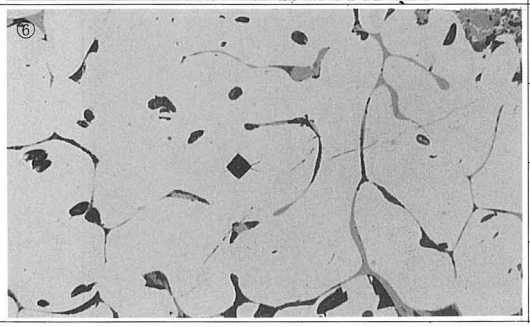












	① ×100 Wüstite
② ×100 Wüstite	③ ×100 Wüstite
④ ×100 Goethite	⑤ ×400 Geothite
⑥ ×200 硬度圧痕 442 Hv・433Hv Wüstite 荷重100g	

Photo. 1　南小泉遺跡出土椀形鍛冶滓（５Ｃ中頃）の顕微鏡組織

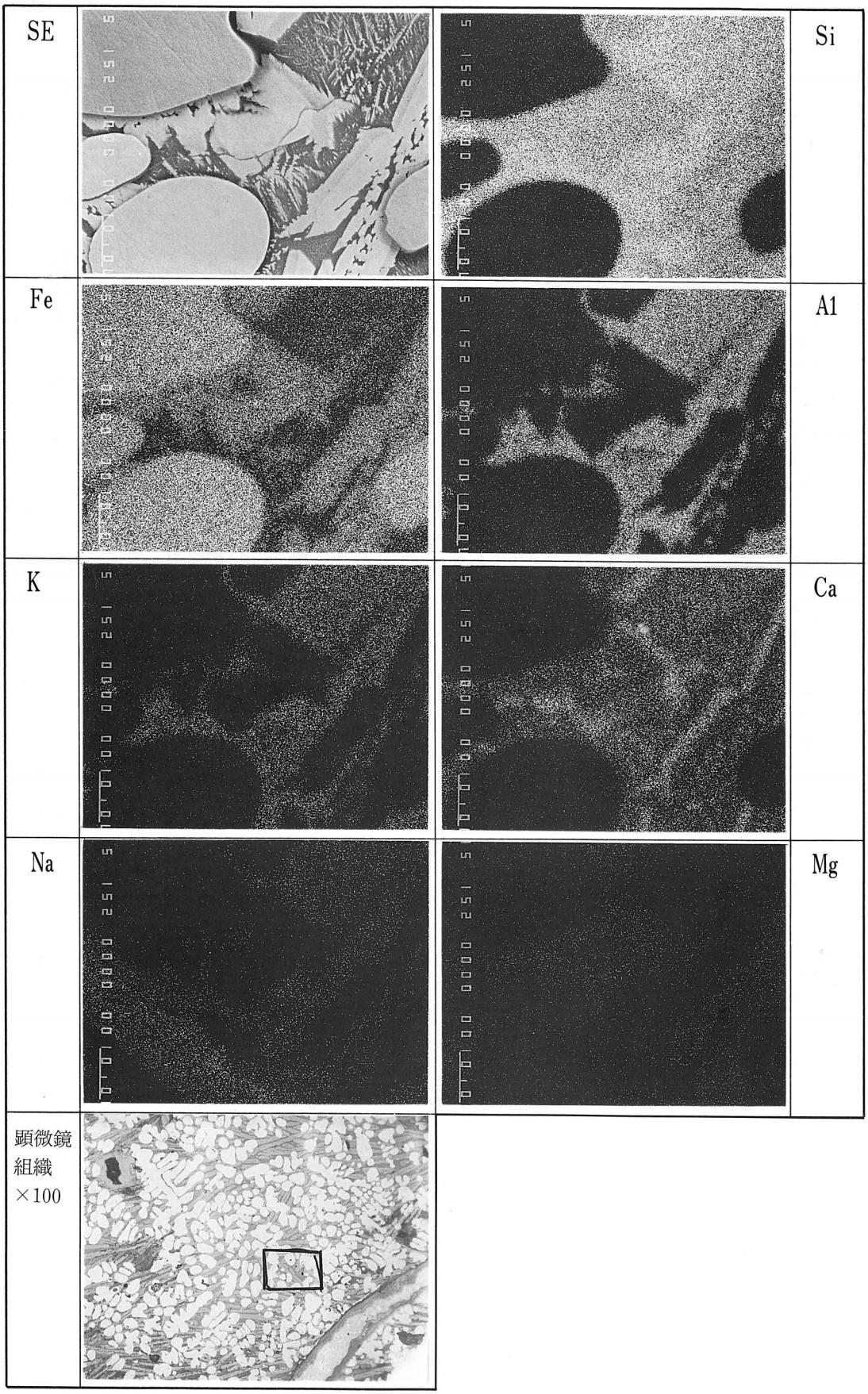


Photo. 2　南小泉遺跡出土鉄滓（ＭＳＢ－11）の特性Ｘ線像（×1500　縮小0.56）

仙台市文化財調査報告書第140集

南　小　泉　遺　跡
第16～18次発掘調査報告書

平成2年3月

発行　仙台市教育委員会
仙台市青葉区国分町3－7－1
仙台市教育委員会文化財課

印刷　㈱東北プリント
仙台市青葉区立町24—24 TEL 263—1166